昭和九年一月十五日印刷
昭和九年一月二十日發行

不許複製

國譯一切經　大集部　四

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　東京市芝區芝公園七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(二一)三〇一一番
芝(二一)四〇六〇番

兩角製本所　製本所

索　　引

（頁數は通頁を表す）

—大集部四索引終—

薩、和輪調菩薩に語りたまはく。佛言はく、我れ無央數劫より佛道を求めて此來、今以でに作佛を得。是の經を持つて若曹に囑累す。學誦し、持守して、得て忘失することなかれ。若し、颰陀和菩薩、是の三昧を學ぶ者あらば、當さに具足して安諦に學ばしむべし。其れ聞かんと欲する者には、當さに具さに聞かしむべし。他人の爲めに說く者は、當さに具さに說くべし。佛、經を說き已りたまふ。颰陀和菩薩等、舍利弗羅、摩日揵連比丘、阿難等、諸天、阿須輪、龍、鬼神人民皆な大いに歡喜して、前みて佛の爲めに禮を作して去りにき。

般舟三昧經終

明者は此を得て疾く持ち行じ　經卷を受學して反復あり、
是の三昧は値ひたてまつること得難し　億那術劫常に當さに求むべし。
周旋せらる、處に是の法を聞かば　當さに普く諸の學者に宣視すべし、
假令億千那術劫に　是の三昧を求むとも聞くこを得難し。
設令、世界は恒沙の如くあらんに　中に珍寶を滿てて用て布施するも、
若し、是の一偈の說を受くることあつて　敬つて用ひんに、功德は彼に過ぎたり。

[八八]佛印品　第十六

佛、是に於て、颰陀和に語りたまはく、若し菩薩あつて是の三昧を聞かんに、聞かば當さに歡喜すべし。當さに學ぶべし。學ぶことを得る者は、佛の威神を持して、學ぶことを得せしむ。當さに好んで是の三昧を書して[八九]素上に著すべし。當さに[九〇]佛印を得べし。印をば當さに善く供養すべし。何等をか佛印となす。識する所、行に當らず、貪る所なく、求むる所なく、所想なく、所著なく、所願なく、所向の生なく、所適なく、所生なく、所有なく、所取なく、所顧なく、所往なく、所礙なく、所有なく、所結なく、所有盡き、所欲盡きて所從の生なく、所滅なく、所壞なく、所敗なし。道の要道の本なり。是の印の中、阿羅漢、辟支佛は壞すること能はず。敗ること能はず、缺くること能はず。愚癡の者は便ち是の印を疑ふ。是の印は是れを佛印となす。佛言はく、今我れ是の三昧を說く。時に千八百億の諸天、阿須輪、鬼神、龍、人民皆な[九一]須陀洹道を得、八百の比丘皆な阿羅漢道を得、五百の比丘尼皆な阿羅漢道を得、萬の菩薩皆な是の三昧を逮得し、皆な無所從生の法樂を逮得す。中に於て[九二]立ち、萬二千の菩薩は復た還らず。佛、舍利弗羅、[九三]摩目揵連比丘、阿難、颰陀和菩薩、羅隣那竭菩薩、憍曰兜菩薩、那羅達菩薩、須深菩薩、摩訶須薩和菩薩、因坻達菩

【八八】佛印品、隋譯は囑累品第十七と名づく。
【八九】素上、白絹の上、卽ち絹布に書くこと。
【九〇】佛印、印は決定不變の義、諸法實相は諸佛の大道にして、決定不變なれば佛印と名く。
【九一】須陀洹、Srota-āpanna. 流入、預流等と譯す、聲聞四果の中初果の名なり、三界の見惑を斷じ、始めて聖道に入る位をいふ。
【九二】立ち萬二千、異本、六萬二千に作る。
【九三】摩目揵　、Mahāmaudgalyāyana. =大目犍連、佛弟子の名。

の中に珍寶を滿して、持用て布施せんに、其の福寧ろ多からざらんや。是の三昧を書し、經卷を持つ者の、其の福極めて計るべからざるには如かず。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

我れ、自ら往世の時を識念するに　其の數六萬歲を具足す
常に法師に隨つて捨離せざるに　初め是の三昧を聞くことを得ず。
佛有す、號を[八五]其至誠と曰ひたてまつ　時に比丘を知る、和輪と名づく、
彼の佛世尊[八六]泥曰の後ち　比丘常に是の三昧を持す。
我れ時に[八七]王君子種たりき　夢中に是の三昧を逮聞す、
和輪比丘是の經を有てり　王、當さに從つて此の定意を受くべしと。
夢より覺め已つて卽ち往いて求むるに　輒ち比丘の三昧を持てるを見る
卽ち鬚髮を除いて沙門となり　學ぶこと八千歲、一時に聞かんと。
其の數八萬歲を具足して　此の比丘に供養し奉事す
時に魔の因緣數、興り起つて　初めより未だ曾つて一反も聞くことを得ず。
是の故に比丘、比丘尼　及び淸信士、淸信女、
是の經法を持せよ。汝等に囑す　是の三昧を聞かば疾く受行せよ。
常に是を習持する法師を敬ひ　一劫を具足して懈ることとを得ることとなかれ
千億を難むこと勿れ、道を用つての故に　當さに是の法の三昧を聞くことを得べし。
衣服、床臥、若しは千億　比丘家家に行いて乞食して
以用て法師を供養せよ　精進是の如くなれば三昧を得。
燈火、飲食に當さに得べき所なり　金、銀、珍寶供養の具、
倘ほ當さに自ら其の肌肉を割つて　以用て供養すべし。況んや飲食をや。

【八五】其至誠、前の摩遮那摩の譯名。異本、具至誠に作る。
【八六】泥曰、前の泥洹に同じ。
【八七】王君子種、前の剎利に同じ。

設し、是の三昧を求めんと欲することあらば　當さに往時の彼の[七九]梵達を念ずべし、
教習奉行して、退轉することなかれ　比丘經を得ば、當さに是の如くすべし。

[八〇]至誠佛品　第十五

佛、言はく。乃往昔の時に復た佛有き。[八一]薩遮那摩怛薩阿竭阿羅訶三耶三佛と名けたてまつる。時に比丘あり、[八二]和輪と名づく。其の佛般泥洹の後に、是の比丘是の三昧を持す。我れ爾の時に國王刹利種と作りき。夢の中に於て是の三昧を聞き、覺め已つて、便ち行いて是の三昧を持つ比丘を求む。卽ち從つて沙門と作り、是の比丘の所に於て、一反、是の三昧を聞くことを得んと欲す。師に承事すること三萬六千歳なり。[八三]魔事、數々起つて一反、聞くことを得ず。佛、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に告げたまはく。我れ故らに若曹に語る、若曹當さに疾く是の三昧を取つて得て忘失することなかるべし。善く其の師に承事して是の三昧を持せよ。一劫、若しは百劫、若しは千劫に至つて懈倦すること得ることなかれ、趣ち當さに是の三昧を得べし。善師を守つて離れず、若しは飲食、資用、衣被、床臥、千萬の珍寶、以て師に上つれ。師に供養して愛惜する所なし。設しあることなくんば當さに行いて乞食して師に給すべし。趣ち當さに是の三昧を得べし。佛言を厭て置くことなかれ。是の供養する所は、此れ言ふに足らざるのみ。常に當さに自ら其の肌を割つて善師に供養すべし。常に身を愛惜せず、何に況んや、其の餘をや。當さに善師に承事すること奴の大夫に事ふるが如くすべし。是の三昧を求むる者も當さに是の如くすべし。是の三昧を得已つて當さに堅く持し、常に當さに師の恩を念ずべし。佛言はく、是の三昧は値ふこと得難し。正使、是の三昧を求めて百億劫に至つて其の名聲を聞くことを得んと欲すとも、聞くことを得ること能はざらん。何に況んや、得て學せん者をや。轉た復た行じて人に教へんをや。正使[八四]恆邊の沙の如き佛刹に、其

【七九】梵達、前の梵摩達に同じ。
【八〇】至誠佛品、隋譯には覺寤品第十六と名づく。
【八一】薩遮那摩、
【八二】和輪、
【八三】魔事、三昧を聞く妨げになる事をいふ。
【八四】恆邊、恆河の邊の意。

時に應じて從つて三昧を聞き
供するに好物の若しは千億の
卽ち千人とゝもに鬚髮を除き
時を同うして八千歲を具足し
一反聞くことを得て、復た二びせず
經卷を執持し、諷誦し說けば
是の功德を積累するを用つての故に
其の具足する所の八萬歲に
曾つて諸佛六萬億に値ひたてまつり
所說の法を聞いて大に歡喜し
此の功德を蒙つて王家に生じ
無數億の諸の人民を化して
學して是の法を諷誦して以後
天上世間其の稱を誦し
何に況んや、受持し誦說せん者をや
是の三昧を廣宣分流して
此の三昧經は眞の佛語なり
[七八]道法を用つて、故らに往いて聽受し
假使往いて求めて聞くことを得ずとも
能く其の德義を稱量することをなし

踊躍歡喜して卽ち受持す、
珍寶妙衣を以てす。道を用つての故なり。
來り志して是の三昧を樂求す、
常に比丘に隨つて捨離せず。
是の三昧は、譬へば海の如し、
其の所生の處、三昧を聞かん。
當さに諸佛の大神通を見たてまつるべし
見たてまつる所の諸佛を輒ち供養す。
加へて復た六千尊を供養す。
然して後に師子佛を見ることを得ん。
佛を見たてまつる。號を[七六]堅精進と曰ふ、
一切生死の惱みを度脫す。
便ち復た佛を見たてまつる。[七七]堅勇と名づけたてまつる
三昧の聲を聞いて作佛することを得。
衆の世界に於て著する所なく、
未だ曾つて佛道を疑忘せず。
設し、遠方に是の經ありと聞かば、
一心に諷誦して忘捨せざれ。
其の功德の福は盡くすべからず
何に況ん、聞き已つて卽ち受持せんをや。

【七六】堅精進、前の坻羅惟是達の譯名。
【七七】堅勇、前の坻羅首羅惟沈の譯名。
【七八】道法、佛道、佛法の意

乃ち聞き學ぶことを得ん者をや。若しは去ること百里なる者、若しは遠きこと四千里なるも、是の三昧を持つことありと聞かば、當さに行いて學ぶべし。其所に到つて但だ聞知することを得ん。何(いか)に況んや、乃ち聞くことを得て學ばん者をや。佛言はく、人を去ること遠き者すら常に當さに自ら行いて求むべし。何に況んや、人を去ること十里、二十里にして、是の三昧を持つことあるを聞かば、行いて求め學せざらんや。颰陀和よ、若し菩薩あつて是の三昧を聞いて、行いて彼こに至つて是の三昧を聞き求めんと欲せば、當さに其の師に承事して、十歳、百歳悉く具足して供養すべし。是の菩薩を占視して自ら用ふることを得ず。當さに其の師の敎に隨ひ、常に當さに師の恩を念ずべし。佛言はく、我れ故らに相ひ爲めに之れを說く。若し菩薩、是の三昧ある處、去ること四千里なるを聞いて、往いて其の所に到らんと欲して、設し、是の三昧を聞くことを得ざれば、佛の言はく、我れ若曹(なんだち)に告ぐ、其の人精進の行を用つて求むるが故に、終に復た佛道を失はず。會(かならず)自ら作佛を致す。見るや不(いな)や。颰陀和菩薩是の三昧を聞いて、求めて離れざらんと念欲せば、其の利を得ること甚だ尊し。佛爾の時に偈を頌して言はく、

我れ過去を念ふに如來あり　人中尊んで[十四]私訶末と號く
爾の時に王典主人あり　彼の佛に至つて三昧を聞き、
至意黠慧にして此の經を聽き　心、悅ぶこと無量にして法を奉持す、
卽ち珍寶を以て其の上に散じ　[十五]師子意、人中尊を供す。
心念、是の如くにして歎じて言はく　我が身は此の當來世に於て、
佛教を奉行して敢て缺かず　亦當さに是の三昧を逮得すべし。
是の福願を用つて壽終つて後　輒ち復た來り還つて王家に生る
爾の時に尊大の比丘を見る　號づけて珍寶と曰ふ。智、博達なり。

【十四】私訶末、前の私訶摩提に同じ。

【十五】師子意、私訶摩提の譯語。

佛の爲めに禮を作して却つて一面に坐す。時に私訶摩提佛、卽ち其の王の心の所念を知しめして、便ち爲めに是の三昧を說きたまふ。其の王、是の三昧を聞いて助けて歡喜し、卽時に珍寶を佛の上に散ず。其の心に卽ち念ずらく、是の功德を持つて十方の人民をして皆安隱ならしめんと。時に私訶摩提佛般泥洹の後、惟斯芩遮迦越王、其の壽終つて後ち、還つて王家に生じて太子と作る。[70]梵摩達と名く。爾の時、閻浮利に比丘あり。高明にして[71]珍寶と名く。是の時に四部の弟子、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の爲めに是の三昧を說く。梵摩達太子是の三昧を聞いて助けて歡喜し、心踊躍して樂み、喜びて是の經を聞く。珍寶の直百億なるを持つて是の比丘の上に散じ、復た好衣を持つて之れを供養し、以て意を發して佛道を求む。時に千人と俱に、是の比丘の所に於て、頭鬚を剃つて沙門となる。卽ち是の比丘の所に於て、從つて是の三昧を索め學ぶ。千の比丘と共に師に承事して八千歲休懈せずして、前後一反、是の三昧を聞くことを得。是の比丘の輩ら是の三昧を聞いて四事を以て助けて歡喜し、高明の智に入る。是の助歡喜の功德を持つて、却て後、更に六萬八千の佛に見ゆ。輙ち一一の佛の所に於て、是の三昧を聞いて自ら守學し、復た他人を敎へて學せしむ。其の人、是の助歡喜の功德を持つて、其の後ち作佛することを得、[72]坻羅惟是逮怛薩阿竭羅訶三耶三佛と名けたまる。時に是の千の比丘、從つて阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛を得、皆、[73]坻羅首羅辟沈怛薩阿竭阿羅訶三耶三佛と名け上る。不可計の人民を敎へて皆な佛道を求めしむ。佛、颰陀和に告げたまはく、何人が是の三昧を聞いて助けて歡喜せざる者あらん。何人か學ばざる者あらん。何人か他人の爲めに說かざる者あらん。何人か守らざる者あらん。佛、颰陀和に告げたまはく、若し菩薩あつて是の三昧を守らば、疾く佛を逮得せん。颰陀和よ、若し菩薩あつて、四十里の外に在つて是の三昧を持つことあるを聞かば、菩薩、之れを聞いて、便ち當さに行いて求むべし。往いて其の所に到つて、但だ是の三昧ありと聞知することを得るも、常に當さに之れを求むべし。何に況んや、

【七〇】 梵摩達、Brahmadatta. ＝甘德。西藏名 Tshaṅs-byin.
【七一】 珍寶、又寶とも云ふ。梵名不詳。西藏名。Rin-chen-mchog.
【七二】 坻羅惟是逮、梵語原音不詳。西藏名 Btson-hgrus-brtan. 堅精進又は堅固精進と譯す。
【七三】 坻羅首羅辟沈、梵語原音不詳。西藏名 Dpal-brtan. 堅勇、又は賢勇と譯す。

過去及び當來　現在の諸の世尊。
功德の行を勸助す　諸の十方の蜎飛と、
蠕動とを度脫して　悉く[六二]平等覺を逮ぜしむ。
譬へば四方　及び上下を周币するが如く、
人生の行百歲　壽を盡して行じて息ます。
道里を計ることあらんと欲すれども、其の數度量し難からん、
獨り佛の弟子は知る　不退轉の菩薩となり。
中に珍寶を滿てゝ施さんに、　是の法を聞くには如かず
四事の勸助　其の福彼の上に出づ。
跋陀且く四事の　歡喜を觀ぜよ、
布施億萬の倍なるも　勸化と等しからず。

[六三]師子意佛品　第十四

佛、爾の時に跋陀和に告げたまはく、乃去久遠の世の時、其の劫[六四]阿僧祇にして、不可計、不可數、不可量、不可極の阿僧祇なり。乃ち爾の時に佛あり。[六五]私訶摩提怛薩阿竭阿羅訶三耶三佛と名けたてまつる。其の威神、與等の者のあることなし。世間を安隱にし、經中に於て之れ尊し。天上天下、號を天中天と曰ひたてまつる、是の國土に於て空閑の處は是の閻浮利なり。國土豐熟にして人民熾盛に樂む。是の時閻浮利の內は縱橫十八萬[六六]拘利那術[六七]踰旬なり。是の時に閻浮利の內に凡そ六百四十萬の國あり。爾の時に閻浮利に大國有り、[六八]跋登加と名く。其の國の中に六十億の人有り、私訶摩提佛是の國中に在ます。遮迦越王あり、名は[六九]惟斯芩王なり。往いて私訶摩提佛の所に到り、

【六二】平等覺、高下淺深の別なき覺、即ち佛の正覺をいふ。

【六三】師子意佛品、隋譯は隨喜功德品の續き。
【六四】阿僧祇、Asaṃkhya 譯して無數或は無央數といふ。
【六五】私訶摩提、Siṃhamati. 西藏名 Seṅ-ge-ḥi blo-gros. 師子意と譯す。
【六六】拘利、Koṭi. 長さの單位。
【六七】踰旬、Yojana.＝由旬。長さの單位、
【六八】跋登加、梵語原音不詳。西藏名 Bzaṅ-po-byuṅ-ba. 賢作と譯す。
【六九】惟斯芩、梵語原音不詳。西藏名 Khyad-par-du ḥgro-ba. 勝遊ゝ譯す。

三佛を致して、其の智悉く具足す。我れ助けて歡喜すること是の如し。復た次に跋陀和、當來、諸佛、菩薩の道を求むる者、是の三昧の中に於て助けて歡喜し、是の三昧を學する者は、自ら阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛を致して其の智悉く具足す。其れ皆助けて歡喜すること是の如し。復た次に跋陀和、今現在十方無央數の佛本と菩薩の道を求めし時、是の三昧の中に於て助けて歡喜し、是の三昧を學する者は、自ら阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛を致得して其の智悉く具足す。其れ皆な助けて歡喜す。福は、其れをして十方の人民及び蜎飛蠕動の類に與へて、共に阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛を得しめん。是の三昧助歡喜の功德を持つて、其れをして疾く是の三昧を得、阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛を作し、得ること久しからざらしめん、佛、跋陀和に告げたまはく。是の菩薩の功德は、是の三昧の中の四事の助歡喜に於て、我れ是の中に於て少しばかりの譬喩を說かん。譬へば、人壽百歲の如き、地に墮して行いて百歲に至つて休息あることなし。時に其の人の行くこと疾風より過めて、四方上下を周匝せん。云何んが跋陀和よ、寧ろ能く其の[六〇]道里を計る者ありや不や。跋陀和の言はく、能く其の道里を計る者のあることなからん。天中天、獨り佛の弟子[六一]舍利弗羅、阿惟越致の菩薩乃ち能く之れを計らんのみ。佛、跋陀和に告げたまはく。我れ故らに諸菩薩に語る。若し、善男子、善女人あつて、是の四方上下の諸の國土、其の人の所行の處を取つて、中に珍寶を滿して布施し、佛に與へんに、是の三昧を聞くにはしかず。若し、菩薩あつて是の三昧を聞き、是の四事の中に於て助けて歡喜せんに、其の福、佛に布施するに出過する者の百倍、千倍、萬倍、億倍なり。若、見るや不や。跋陀和よ、是の菩薩の助けて歡喜する其の福寧ろ多しや不や。是れを用つて故に當さに之れを知るべし。是の菩薩の助けて歡喜する其の福甚だ尊大なり。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

　是の經敎の中に於て　持するに四事の勸めあり、

三佛、Anuttarāyām samyak-sambodhav abhisambuddha. 己覺無上正等覺と譯す。

【六〇】道里、異本に道理に作る。

【六一】舍利弗羅 Sāriputra 舍利弗。佛弟子の名。

ざる時あることなし。十一には、知らざる時あることなし。十二には、[五六]見慧を脫せざる時あることなし。十三には、過去無央數の世事、能く佛の無所罣礙所見の慧を止むる時あることなし。十四には、當來無央數の世事、能く佛の無所罣礙所見の慧を止むる時あることなし。十五には、今現在十方無央數の世事、能く佛の無所罣礙所見の慧を止むる時あることなし。十六には、身に行ずる所の事は、智慧是れ本なり、常に智慧と倶なり。十七には、口の言ふ所の事は智慧、是れ本なり、常に智慧と倶なり、十八には、心の所念の事は智慧、是れ本なり、常に智慧と倶なり。これを佛の十八事となす。佛、跋陀和に告げたまはく。若し、菩薩あつて復た著する所なく、法を求めて悉く護れば、是の三昧を學する者は、十の法護あり、何等をか十法護となす。佛の十種の十力なり。何等をか[五七]十種の力となす。一には、有限、無限悉く知る。二には、過去、當來、今現在、本末悉く知る。三には、棄脫の定淸淨にして悉く知る。四には、諸根精進して種種各異の所念悉く知る、五には、種種の所信悉く知る。六には、若干種の變、無央數の事悉く知る。七には悉く曉にし、悉く了し、悉く知る。八には、眼の視る所、罣礙する所悉く知る、九には、本末、無極悉く知る。十には、過去、當來今現在悉く平等にして適著する所なし。佛、跋陀和に告げたまはく若し、菩薩あつて無所從生の法悉く護れば、是の菩薩は佛の十種の力を得。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

十八不共、正覺の法　世尊の力、現に十あり、
設使是の三昧を奉行せば　疾速に此に逮ぶこと終に久しからず。

[五八]勸助品　第十三

佛、跋陀和に告げたまはく、是の菩薩特に四事あり、是の三昧の中に於て助けて共れ歡喜す。過去の佛の時、是の三昧を持つて助けて歡喜し、是の經を學する者は、自ら[五九]阿耨多羅三耶三菩阿惟

一切の口業は智慧行に隨ふ、(四)一切の意業は智慧行に隨ふ、(五)又諸の如來の知見は過去に障礙あることなし、(六)知見は未來に障礙あることなし、(七)知見は現在に障礙あることなし、(八)又諸の如來の所爲は錯誤あることなし、(九)言に漏失なし、(十)意に忘し、(十一)念に別異の想なし、(十二)常に三昧にありて已捨を知らざることなし、(十三)又諸の如來、意欲に減なし、(十四)精進に減なし、(十五)禪定に減なし、(十六)智慧に減なし、(十七)解脫に減なし、(十八)解脫知見に減なし、とあり。

【五五】般泥洹、Parinirvāṇa.＝般涅槃。圓寂と譯す。

【五六】見慧、審かに思慮し推求して事理を決擇するをいふ。

【五七】十種の力、隋譯には、如來の十種の智力とて、如來是處非處力、如來一切至處道力、如來世間種種界力、如來知衆生諸根差別心行力、如來禪定力、如來業力、如來天眼力、如來宿命力、如來漏盡力の名目を擧げて詳說す。

【五八】勸助品、隋譯は隨喜功德品第十五と名づく。

【五九】阿耨多羅三耶三菩阿惟

當さに精進を行じて懈怠せざるべく　是の如き行者は三昧を得。
比丘是れを學して常に分衛し　行いて請及び聚會に就かず
心所著なくして畜積せず　是の如き行者は三昧を得。
設使手に斯の法教を得　及び持して此の經卷を奉行せば、
已に具足して意、佛の如きことを得　然して後に是の三昧を學誦すべし。
是の至德に住して、行、誠信にして　設し三昧を學誦することあれば、
速かに逮し疾に是の八法を得せん　清淨無垢は諸佛の教なり。
其の清淨の戒は究竟することあり　三昧は瑕なくして等見を得、
以つて空をなして、生死を淨む　是の法に住して具足を得。
智慧清淨にして餘あることなし　穢の行なき者は亦た著せず、
博聞にして智を採り[五二]唐捐を捨てんや　行ずることを得ること是の如きを黠慧となす。
志、精進なれば所失なし　供養の利に於て貪らず
疾く無上成佛の道を得　是の如き德を學ぶを明智となす。

[五三]十八不共十種力品　第十二

佛言はく、是の上の八事を得る者は、便ち佛の十八事を獲、何等を[五四]十八事と爲す。一には、某の日を用つて佛を得、某の日を用つて[五五]般泥洹す。初の佛を得る日より般泥洹の日に至つて佛は難なし。二には、短なし。三には、忘ることとなし。四には定らざる時なし。五には、終に法想を生じて我所をいふことなし。六には、忍ぶこと能はざる時あることなし。七には、樂まざる時あることなし。八には、精進せざる時あることなし。九には、念ぜざる時あることなし。十には、三昧なら

名利に於て染著せざるが故に、八には、不退淸淨にして當に阿耨多羅三藐三菩提を得て初めて動搖せざるが故に、とあり。

【四九】鮑漏、煩惱をいふ。

【五〇】滅度、前の泥洹の譯。

【五一】窈冥、深く遠く暗き貌。

【五二】唐捐、むなしきをいふ。

【五三】十八不共十種力品、隋譯は不共功德品第十四と名づく。

【五四】十八事、隋譯には十八不共法と名づけ、(一)如來、初めて阿耨多羅三藐三菩提を成じ、乃し般涅槃に至るまで、其の中間に於て如來所有の三業は智慧を首となす、(二)一切の身業は智慧行に隨ふ、(三)

に告げたまはく、若し、菩薩あつて此の三昧を學誦せば[四六]十事あつて其の中に於て立す。何等をか十となす。一には、其れ他人あつて、若しは鉢、震越、衣服を[四七]饋遺るをば嫉妬せず。二には、悉く當さに人を愛敬し長老に孝順すべし。三には、當さに反復して報恩を念ずることあるべし。四には、妄語せずして非法を遠離す。五には、常に乞食を行じて請を受けず。六には、當さに精進經行すべし。七には、晝夜臥出することを得ず。八には、常に布施を行じて、天上天下惜む所なく、終に悔ひず。九には、深く慧の中に入つて所著なし。十には、先づ當さに善師に敬事して、視ること佛の如くすべし。乃ち當さに却つて是の三昧を誦すべし。是れを十事となす。當さに法の如く是の行を作す者は[四八]八事を得べし。何等をか八事となす。一には、戒に於て清淨にして究竟に至る。二には、餘道に與し從事せずして智慧の中に出入す。三には、智慧の中に於て清淨にして復た生を貪る所なし。四には、眼清淨にして復た生死を欲せず。五には、高明にして著する所なし。六には、清淨は精進に於て自ら得佛を致す。七には、若し人の供養することある者は故らに喜ぶことを用ひず。八には、正しく阿耨多羅三藐三菩提に在つて復た動ぜず。是れを八事となす。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

點慧有る者は想を起さず　貢高及び自大を棄捐し、
常に忍辱を行じて[四八]麁漏なく　爾して乃ち是の三昧を學ぶことを爲す。
智者は心、明にして空を諍はず　無想の寂常は是れ[四九]滅度なり、
法を誹謗せず、佛を諍ふことなし　是の如き行者は三昧を得。
明者は是に於て憍慢なく　常に佛恩及び法師を念じ
堅く淨信に住して志し動せず　爾の時是の三昧を學ぶことをなす。
心、嫉を懷かず、遠くして[五〇]窈冥なり　狐疑を起さずして常に信あり、

【四六】十事、隋譯には、所謂る一には、彼の諸諸の善男子、善女人、先づ我慢を摧き恭敬の心を起す。二には、恩を知つて忘れず心常に報を念ず。三には、心倚著なく亦嫉妬もなし。四には、疑惑及び諸の障礙を除斷す。五には、深信不壞にして繫念思惟す。六には精進勤求し經行して倦まず。七には、常に乞食を行じ別請を受けず。八には、少欲知足にして諸根を調伏す。九には正しく無生法忍を信ず。十には、常に念じて離れず是の三昧を所有する、即ち彼の師に於て諸佛の想を生じ、然して後に是の如き三昧を修習す、とあり。

【四七】饋遺、贈り供ふるの義。

【四八】八事、隋譯には、一には、畢竟清淨にして諸の禁戒に於て毀犯なきが故に。二には、知見清淨にして智慧和合し、餘の相應に與みせざるが故に、三には、智慧清淨にして更に復た諸の後有を受けざるが故に、四には、施與清淨にして一切諸行の果報を願はざるが故に。五には、多聞清淨にして既に法を聞き已らば畢竟して忘れざるが故に。六には、精進清淨にして一切時に於て佛菩提を求むるが故に。七には、遠離清淨にして一切

譬へば冬月高山の雪の如し　若しは國王の人中に尊きが如し、
摩尼清淨にして衆寶を超ゆ　佛の相好を觀ること當さに是の如くすべし。
鴈王の飛び前んで導くことあるが如く　虛空清淨にして穢亂なし
紫磨金色佛も是の如し　佛子此れを念じて尊を供養す。
諸の幽冥を去つて闇愚を除く　即ち悉く速かに淨三昧を逮す
一切諸想の求を捐捨し　垢穢の行なくして、定意を得。
塵勞あることなくして垢穢を釋て　瞋恚を捨て去つて愚癡なし
其の目は清淨にして自然に明かなり　佛の功德[四一]罣礙の慧を念じ、
佛世尊の清淨の戒を思ふ　心に所著なくして相求めず、
吾我及び所有を見ず　亦た諸の色に在る相を起さず。
生死を捨離して衆見なく　貢高を棄して慧、清淨に
憍慢を遠除して自大ならず　[四二]寂三昧を聞いて邪見を離る。
其れ、比丘、佛の子孫　信比丘尼[四三]清信士、
貪欲を除去する[四四]清信女あらば　精進して是の法を學得せんと念ぜよ。

[四五]無想品　第十一

佛、跋陀和菩薩に告げたまはく、若し、菩薩あつて是の三昧を學んで疾く是れを得んと欲せば、當さに先づ色の思想を斷ずべし、當さに自の貢高を棄つべし。已に思想を斷じ、已に自ら貢高ならず、已に却つて當さに是の三昧を學すべし。當さに諍ふべからず。何等をか諍となす。空を誹謗す、是の故に當さに共に諍ふべからず。當さに空を誹謗せずして却つて是の三昧を誦せよ。佛、跋陀和

【四一】罣礙、異本に無礙に作る。
【四二】信、澄淨の意。
【四三】清信士、前の優婆塞の譯。
【四四】清信女、前の優婆夷の譯。
【四五】無想品、齊譯は現前三昧中十法品第十三と名づく。

た憂へず。是の三昧を守つて亦た喜ばず、亦た憂へず。譬へば虚空の色なく、想なく、清淨にして瑕穢なきが如し。菩薩、諸法是の如きを見るに、眼罣礙する所なくして諸法を見る。是を用つての故に諸佛を見る。諸佛を見ること、明月の珠を以て、持つて琉璃の上に著くが如し。日の初めて出づる時の如く、[三四]月の十五日に衆星の中央に在る時の如し。遮迦越王の諸の群臣と相ひ隨ふ時の如く、忉利天王、釋提桓因の諸天の中央に在る時の如し。梵天王の梵天の中央に在つて最も高きに坐するが如し。炬火の高山の頂に在つて燒かるゝが如く、[三五]醫王の藥を持つて行いて人の病を愈すが如く、師子の出でて獨り歩むが如く、衆の野鴈の虚空の中の道を飛行して前に導く事あるが如く、冬月高山の上の積雪を四面皆な見るが如く、天地大界の[三六]金剛山の臭穢を却くるが如く、下水の地を持つが如く、風の水を持つが如く、諸の穢濁の悉く清淨となること虚空の如く等し、須彌山の上の忉利天の如し。諸佛の莊嚴をなすこと是の如し。佛の持戒、佛の威神、佛の功德、無央數の國土悉く極めて明かなり。是の菩薩十方の佛を見ること是の如し。經を聞いて悉く受得す。爾の時に偈を頌して言はく。

佛は垢穢なくして[三七]塵勞を離る　功德衆くして意ひに所著なし
尊大神通、妙音聲、[三八]法鼓、義を導きて諸音を喩す。
覺、天中天は諸慧を脱し　種種の香華を以て供養し
無數の德を以て[三九]舍利を奉じ　旛蓋、雜香、三昧を求む。
法の普く妙なるを聞いて學んで具足し　顚倒を遠離して滅度を喩り、
総に想は空法に著せず　當さに志して妙無礙の慧を解すべし。
清淨なること月日の出でて光(あきらか)なるが如し　譬へば梵天の本宮に立つが如し
常に清淨の心にて世尊を念じ　意(こゝろ)、所著なくして空を[四〇]相はず。

【三四】月の十五日、隋譯は秋滿月に作る。
【三五】醫王、醫者の主宰なるものをいふ。
【三六】金剛山、隋譯には鐵圍山に作る。須彌山を圍む山なり。
【三七】塵勞、隋譯には塵垢に作る。
【三八】法鼓、鼓を打て衆を進むるが如く、説法をなして衆を導くをいふ。
【三九】舍利、Śarira 佛の遺骨をいふ。
【四〇】相、異本、想に作る。

悉く受持す、爾の時に諸佛悉く我に語つて言はく、[26]却後無央數劫に、汝、當さに作佛すべし、[27]釋迦文と名づけんと。佛、跋陀和に告げたまはく、我れ故らに若に語る。今自ら作佛を致す。是の三昧はれ曹當さに學ぶべし。[28]內法の第一衆の及ぶこと能はざる所、衆想を出でゝ去ることを知らんが爲めに、其れ是の三昧の中に於て立つことある者は佛道を念得す。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

我が昔を憶念するに、[29]定光佛　時に於て是の三昧を逮得す
卽ち十方無數の佛を見　[30]尊法深妙の義を說くを聞く。
譬へば、德人あつて、行いて寶を採るに　所望、願の如くにして輒ち之れを得
菩薩の大士も亦た是の如し　經の中に寶を求め卽ち佛を得。

[31]跋陀和菩薩、佛に白さく、當さに云何にして、是の三昧を守るべきや。天中天佛、跋陀和菩薩に告げたまはく、色に當さに著すべからず、當さに所向の生を有するべからず、當さに空を行ずべし、是の三昧は當さに守るべし。何等をか三昧となす。當さに是の法に隨つて行ずべし。本と亦た所盲なく、復た次に跋陀和菩薩よ、自ら身を觀るに身なく、亦た所觀なし。亦た見なく亦た所著なし。亦た所譬なし。經の中の法の如くにして視住す。亦た所見なく、亦た所著なし。道を守ることをなす者は、法の中に於て疑ふ所なし。疑はざる者は佛を見ることをなし。佛を見る者は疑ひを斷つことをなす。諸法は從來する所なくして生ず。何を以ての故に、菩薩は法の疑想あるを便ち著となす。何等をか著となすや、人あり、壽命あり、德あり、陰あり、人あり、[32]對あり、想あり、[33]根あり、欲ある、是れを著となす。何を以ての故に、菩薩諸法を見て著する所なし、是の法も念ぜず、亦た見へず。何等をか不見となす、譬へば、愚人の餘道を學ぶが如き、自から、人あるを用つて謂ふ、身あり、と。菩薩、是の見を作さず。菩薩は何等をか見となす。譬へば、怛薩阿竭阿羅訶三耶三佛、阿惟越致、辟支佛、阿羅漢の所見の如く、喜ばず、憂へず。菩薩も是の見の如く、亦た喜ばず、亦

【二四】綺飾、綺の裝飾
【二五】跋陀和菩薩に告げたまはく云云已下は授記品第十一と名づく。
【二六】却後、是よりこのかたの意。
【二七】釋迦文 Sākya-muni.＝釋迦牟尼。
【二八】內法、佛法をいふ。
【二九】定光、前の提和竭羅の譯名。
【三〇】尊法、佛法の敬稱。
【三一】跋陀和菩薩佛に白さく、云云已下隋譯は甚深品第十二と名づく。
【三二】對、對觀、對向の意、
【三三】根、勝用增長に名づく。五根、六根、二十二根等の如し。

[一九]六度を具足して一切を攝し
[二〇]善權方便、衆生を濟ふ
若し、與施することあれば慳貪を除き
既に之れを施して後、恆に欣喜す
經法を曉知して句を分別し
微妙道德の化を講說す
其の人、是の三昧を學誦し
此の經法をして永く存することを得しむ
常に佛の經法を祕奥せず
唯だ安隱佛道の地を求む
所著を除き去つて諸蓋を棄て
自ら稱譽して彼の短を說かず
其れ[二二]寂定あつて意起らず
諛諂を棄捐して心淸淨なり。
常に至誠を行じて[二四]綺飾なく
衆の正德を殖えて邪行なし
誦習する所の經常に忘れず
是の如き行者は佛を得ること疾し

慈悲喜護四等の心、
是の如き行者は三昧を得。
其の心は歡踊して授與し
是の如き行者は三昧を得。
深要の義、佛の所教を聞き、
是の如き行者は三昧を得。
解慧具足して人の爲めに說き、
是の如き行者は三昧を得。
供養を望まずして乃ち爲めに講じ、
是の如き行者は三昧を得。
貢高及び[二一]慢大を捐去し、
終に復た吾我の想を起さず
便ち能く是の道の定慧を解し、
是を用つて速かに[二三]不起の忍を逮す。
其の願具足して缺減なく、
法を愛樂する者は道を得る事疾し。
常に禁戒淸淨の行を護る
何に況んや、是の寂三昧を奉ずるをや。

佛、[二五]跋陀和菩薩に告げたまはく、往昔無數劫、提和竭羅佛の時、我れ提和竭羅佛の所に於て、是の三昧を聞きて卽ち是の三昧を受持し、十方無央數の佛を見たてまつる。悉く從つて經を聞き、

法を世間に久住せしめて、終ひに祕藏して法を疾滅せしむることなし。四には常に妬嫉なく、諸惱を遠離し、蓋纏を棄捨し、塵垢を斷除す。自から稱譽せず、亦他を毀せず。五には諸佛の所に於て常に信心重く、諸の師長に於て常に敬畏を行じ、〻識の處に於て常に慚愧を生じ、諸の幼稚に於て常に慈憐を懷き。乃至他の小恩を受けて倘ほ厚報を思ふ。何に況んや人に重德あつて、而も敢て輒ち常住の實言を忘れ、未だ曾つて妄語せざらんや、と詳さに五事を解說せり。

【一六】好疋素、良好なる布帛。
【一七】習欲、未だ煩惱の餘氣あるをいふ。
【一八】五道、地獄界、畜生界、餓鬼界、修羅界、人界を指す。
【一九】六度、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅蜜を以て到彼岸の方法となす。
【二〇】善權方便、善巧方便といふに同じ。
【二一】慢大、他を凌ぐ心勝るの意。
【二二】寂定、涅槃究竟に達し、心性平らかなるの意。
【二三】不起の忍、無生法忍の意。

次に跋陀和、所向の生を樂はず、是れを二となす。復た餘道を樂ひ喜ばず、是れを三となす。復た愛欲の中を樂ばず、是れを四となす。自ら行を守つて極まりあることなし、是れを五となす。菩薩復た[一五]五事あつて疾く是の三昧を得。何等をか五となす。一には布施の心は悔ゆることを得ず、貪る所なく、惜む所なし。是れに從つて悕望する所あることを得ず、人に施して已後、復た恨みず。復た次に跋陀和よ、菩薩、經を持して布施し、他人の爲めに經を說く。語する所の者安諦にして疑ひあることなく、愛惜する所なし。佛の深悟を說き、身自ら行じて是の中に立つ。復た次に跋陀和よ、菩薩、嫉妬せず、所作疑ひあることなく、睡臥を却け、五所の欲を却け、自ら身の善を說かず、亦た他人の惡を說かず、若しは罵ることある者、若しは刑することある者も亦た恚ることを得ず、亦た恨むことを得ず。亦た懈ることを得ず。何を以ての故に、空行に入るが故に。復た次に、跋陀和よ、菩薩、是の三昧を自ら學し、復た他人をして是の經を書せしめ、[一六]好疋素の上に著して久しく在らしめん。復た次に、跋陀和よ、菩薩、所信多くして、長老及び知識を樂にして徹ひしも、新學の人に於て若し所施を得ば、當さに報恩を念ずべし。常に識信あつて人の小施を受け、報の大なることを念ず。何に況んや多き者に於てをや。菩薩常に經を樂重し、棄捐して反復の意なくして、常に反復あることを念ず。是の如き者は三昧を得ること疾し。佛、爾の時に偈を頌して言はく。

常に法を愛樂して深解に在り　諸の[一七]習欲に於て生を貪らず、
[一八]五道を遊步して著する所なし。　是の如き行者は、三昧を得。
好んで、喜びて布施して報を想はず　惠み所著なくして念を追せず
與ふる所、受者あるを見ず　唯、佛の深慧を解することを得んと欲す。
衆生を愍傷して布施を行じ　其の心喜び踊みて悔恨せず
常に布施及び戒忍　精進、一心智慧の事を立す。

【一五】五事、晉譯には、一には常に大施を行じ能く施主となつては慳貪を起さず。心は嫉妬なき弘廣の心、施は純直にして諂ひなし。諸の沙門及び婆羅門貧窮、孤獨、一切の乞人に於て、愛惜する所なく、勝上可重の物而も施さざるものあることなし。所謂る一切徵妙の飮食、名衣上服、第一の房舍、諸種の敷具、燈燭、花香なり。凡そ受用する所は皆な之を捨つ。常に施を行ずと雖も而も報を求めず。一切を憐愍して疑惑の心なし。既に之を施すの後は終ひに變悔なし。二には常に施主となつては法施を行ず。所謂る常に衆生の爲めに斯の如き法を說く。所謂る第一最上最勝最妙最精たり。是の如き大法を修行して施す時、能く一切無礙辯才を出し。文義の次第相續して斷ぜず。如來の所說、甚深の法中、皆な能く定住して深忍を成就す。或る時は他の誹謗、罵辱、捶擊、鞭打を被るも終ひに瞋恨、穢濁、毒心なく亦種々の苦惱を驚懼することなし。而も心畏るなく、常に歡喜を懷く。三には若し他の此の三昧を說くを聞く時、至心に其義を聽受し、書寫し、讀誦し、思惟す。廣く他人のために分別、演說し、是の妙

きたまふべしと。時に佛、比丘僧と皆な衣を著、鉢を持して倶に詣りたまふ。來會する者、皆な隨つて行く。佛、羅閱祇國の中に入つて、跋陀和菩薩の家に到りたまふ。跋陀和菩薩是の念を作す。今、佛の威神の故に我が舍極めて廣大にして、悉く琉璃と作し、表裏悉く相ひ見せしめたまへ。城外は悉く我が舍の中を見、我が舍の中は悉く城外を見んと。佛、卽ち跋陀和の心の所念を知しめして、佛、便ち威神を放つて、跋陀和の舍をして極めて廣大ならしむ。一國の中の人民擧つて悉く舍の中を見る。佛、前んで跋陀和菩薩の家に入つて坐したまふ。比丘僧、比丘尼、優婆塞、優婆夷各各[一〇]異部悉く舍の中に坐す。跋陀和菩薩、佛、比丘僧坐し已るを見て、自ら佛、比丘僧を供養す。若干百種の飯、手づから斟酌す。佛及び比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷皆な已に乃ち飯す。諸の貧窮の者悉く等しく與へ、悉く各[一一]平足す。皆な佛の威神恩を持して、之れをして足らしむ。跋陀和菩薩、佛、諸の弟子悉く飯し已るを見て、前んで[一二]澡水を行ふ。畢竟つて一小机を持し佛前に於て、坐して經を聞く。跋陀和菩薩及び[一三]四輩の弟子の爲めに經を說きたまふに、歡喜せざる者なく、樂聞せざる者なく、聞かんと欲せざる者なし。佛、經も以つて比丘僧及び諸の弟子を請す。佛、起つて比丘僧と倶に去りたまふ。跋陀和菩薩飯し已つて宗親と倶に羅閱祇國を出でゝ佛所に到り、前んで佛の爲めに禮を作し、皆な却つて一面に坐す。及び羅隣那竭菩薩、憍曰兜菩薩、那羅達菩薩、須深菩薩、摩訶須薩和菩薩、因坻達菩薩、和倫調菩薩、跋陀和菩薩人衆皆な安坐するを見已つて、前みて佛に問ひたてまつる。菩薩、幾くの事を用つて、見現在佛悉在前立三昧を得んと。佛、跋陀和菩薩に告げたまはく、菩薩は[一四]五事あつて、疾く見現在佛悉在前立三昧を得、學し持ち、諦に行じて心轉ぜざらんと。何等をか五となす。一には深經を樂んで盡きる時あることなく、極を得べからず。悉く衆の災變を脫し去り、以つて諸垢の中を脫し、以て冥を去つて明に入り、諸の朦朧悉く消盡す。佛、跋陀和に告げたまはく、是の菩薩無所從來生の法樂を逮得し、是の三昧を逮得すと。復た

【一〇】異部、宿譯は人天大衆に作る。
【一一】平足豐滿の意。
【一二】澡水、垢身を淸める爲めの澡浴の水。
【一三】四輩、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ。
【一四】五事、宿譯には、一には甚深の忍を具して、至盡を滅除す。二には、實は盡くる所なく、盡處あることなし。三には、本と亂あることなく、諸亂を滅除す。四には本と垢あることなく、諸垢を滅除す。五には本と塵あることなく、諸塵を斷離すとあり。

卷の下

一 請佛品　第十

二跋陀和菩薩、衣服を政へ、三長跪叉手して佛に白して言さく、我れ、佛及び比丘僧を請して、明日舍に於て食したまはんことを欲す。願はくは佛哀れみて請を受けたまへ。佛及び比丘僧默然として悉く請を受く。跋陀和菩薩、佛已に請を受くることを知つて、起つて四摩訶波喩提比丘尼の所に至つて比丘尼に白して言さく、願はくば我が請を受けて明日、比丘尼と倶に舍に於て小飯せん。摩訶波喩提比丘尼卽ち請を受く。跋陀和菩薩、羅隣那竭菩薩に語る、五舍第、諸の郡國より其れ新たに來る人あらば悉く請して佛所に會すべし。羅隣那竭菩薩前んで佛所に至り、佛の爲に禮を作して、長跪叉手して佛に白して言さく我が兄、佛を請したてまつり、あらゆる新來の人も悉く請して舍に於て食せしめんと欲す。願はくば哀れんで之れを受けたまへと。跋陀和菩薩、羅隣那竭菩薩、憍日兜菩薩、那羅達菩薩、須深菩薩、摩訶須薩和菩薩、因坻達菩薩、和倫調菩薩悉く宗親を倶に前みて、頭面を以て佛足に著け、及び比丘僧の爲めに禮を作す。禮を作し已竟つて佛所より去り、歸つて羅閱祇國に到り、跋陀和菩薩の家に至つて共に相ひ佐助て諸の飯具を作す。四天王、釋提桓因、梵三鉢、皆共に疾く來つて佐助く。跋陀和菩薩衆の飯具をなす。爾の時に跋陀和菩薩の宗親共に羅閱祇國を莊嚴す。若干種の六雜繒の帳を持つて一國の中に覆ひ、其の街巷市里皆な七繒幡を懸く。一國の中を擧つて悉く華を散じ、香を燒き、百種の味の飯具を作す。佛を用つての故に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷及び諸の貧窮乞匄の者の其の飯具適等なり。何を以ての故に、偏に施すこと有らず、人民及び八蜎飛蠕動の類に於て悉く平等なり。跋陀和よ、八菩薩と諸の宗親と九飯時を以て倶に佛前に往詣し、頭面を以て佛足に著け、却つて佛に白して言さく、飯食具さに以て辦じぬ、願はくば佛行

【一】請佛品、隋譯は、具五法品と名づく。
【二】長跪、禮拜法の一。
【三】跋陀和、颰陀和に同じ。
【四】摩訶波喩提、Mahāprajāpatī＝摩訶波闍波提、佛の姨母なり。
【五】舍第、異本に舍弟に作る。
【六】雜繒の帳、繒は絹、種種の絹帛の帳幕をいふ。
【七】繒播、絹布の大旛なり。
【八】蜎飛蠕動、飛ぶ蟲と爬蟲、
【九】飯時、隋譯には食時に作る。

す。婬泆なることあれば觀に入らず。所念あれば三昧に入らず。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

是れ等の功德計るべからず　戒を奉じ具足して瑕穢なく、
其の心清淨にして垢塵を離れ　此の三昧を行ずれば是の如きを得。
設し是の三昧を持つ者あれば　智慧普く大にして缺減なく、
博く衆議に達して常に忘れず　功德の行、月の明なるが如し。
設し是の三昧を持つことある者は　解了覺意識るべからず、
無量の道法を曉和し、　無數の諸天其の德を護る。
設し是の三昧を持つことある者は　常に自ら面り無數の佛を見る、
無量の佛の法を講說したまふを聞いて　輒ち能く受持して念じて普く行ず。
設し是の三昧を持つことある者は　惡罪懃苦皆滅除し、
諸佛世に於て慈哀を行じ　悉く共に是の菩薩を嗟歎したまふ。
假使、菩薩、當來の　無數の佛世尊を親見せんと欲せば、
一心に踊躍して正法に住し　當さに是の三昧を學し、諷誦すべし。
其れ是の三昧を持つことある者は　其の功德福議るべからず
人身を逮得すること最も第一なり　出家は超異にして[一〇四]分衞を行ず。
若し、末後に是の經を得ることあれば　功德の利を逮せんこと最も第一ならん
其の福祐を得ること限るべからず　是の三昧に住すれば是の如きを得。

【一〇四】分衞、Piṇḍapāta. 乞食と譯す。

すれば、本と痛痒なし。三には自ら意を觀じ、他人の意を觀ず、自ら意を觀じ、他の意を觀ずれば、本と意なし。四には自ら法を觀じ、他人の法を觀ず、自ら法を觀じ、他人の法を觀ずれば、本と法なし。佛、颰陀和に告げたまはく、是の三昧は、誰れか當さに信ずべき者ぞ、獨り、怛薩阿竭阿羅呵三耶三佛阿惟越致の阿羅漢乃ち之れを信ぜんのみ。愚癡迷惑の心ある者は、是の現在佛前立三昧を離るること遠し。何を以ての故に、是の法は當さに佛を念ずべし。當さに佛を見るべし。佛、颰陀和に告げたまはく、是の菩薩當さに佛を念ずべし、當さに佛を見るべし　當さに經を聞くべし。當さに著することあるべからず。何を以ての故に、佛は本なく、是の法は所因なし。何を以ての故に、本と空にして所有なし。各各に行じて法を念ぜよ、是の法の中所取なく、是の法は所著なし。空の如く等しくして甚だ清淨なり。是の法人の所想[一〇二]了かに所有なし、所有なし。是の法、假りに所因の者、空寂なるのみ、泥洹の如し。是の法は所有なし、本と是の法なければ從ひ來る所なく、亦た從ひ去る所の人、本となし。是の法、著せざる者は近く、著することある者は遠し。佛、颰陀和に告げたまはく、若し、是の三昧を守ることある者は、想に因つて無想の中に入り、佛を見、佛を念じ、覺を守り、經を聞く。法を念じ覺を守るとも、我を念ずることを得ざれ、法に著することを得ざれ。何を以ての故に、守覺あればなり。颰陀和よ、[一〇三]守覺あれば佛を見ず、所著、毛髮ばかりもあれば法を得ず。他人に施して悕望する所あれば不施となす。持戒して悕望する所あれば不淨となす。法を貪れば泥洹を得ず、經中に於て訣詔あれば高明となすことを得ず。衆會の中を樂びて餘道を喜べば、終に一行を得ること能はず。欲の中の於て念ずること難く、瞋恚あれば忍辱すること能はず。憎惡する所あつて他人の善を說くことを得ず。善く阿羅漢道を求むる者は、是の見現在佛悉在前立三昧の中に於て逮はず、從來する所なく、法樂を生じ、中に於て立つことを得ず。著する所あれば空を得ず。菩薩終に慳貪なることを得ざれ。懈怠なることを得ざれば道を得

法を見ず、とあり。

【一〇二】了かに所有なし、所有なし、異本には、了かにの法なし、所有なきが故に、に作る。

【一〇三】守覺、大覺圓滿を保持するの意。

りて、羼羅耶佛の所に來至して、佛の爲めに禮を作して却つて一面に坐す。須達長者子、羼羅耶佛に是の三昧を問ひたてまつる。羼羅耶佛、須達長者子が心の所念を知しめして、便ち爲めに其の三昧を說きたまふ。須達長者子、是の三昧を聞き已つて、大いに歡喜して卽ち悉く諷受し、須て沙門と作つて、是の三昧を求むること八萬歲なり。時に長者子須達、佛に從つて經を聞くこと甚だ衆多なり。悉く無央數の佛に從つて經を聞き、其の智慧甚だ高明なり。長者子須達其の後、壽終つて[九二]忉利天上に生じ、以後復た天上從り來下して世間に生ず。爾の時に、故劫の中に復た佛あり。[九三]術闍波提怛薩阿竭阿羅呵[九四]三耶三菩と名けたてまつる。時に佛、[九五]刹利の家に在つて生れたまふ。爾の時に長者子須達、其の後復た、故劫の中に於て復た佛存す。[九六]賴毘羅耶怛薩阿竭阿羅呵三耶三佛と名けたてまつる。[九七]婆羅門種なり。時に長者子須達、復た佛所に於て、是の三昧を受けて求め守ること八萬四千歲なり。佛、颰陀和に告げたまはく、長者子須達、却後八萬劫に、作佛することを得、[九八]提和竭羅と名づく。爾の時に長者子須達、人と爲つて高明勇猛に、智慧甚だ廣し。佛の言はく、是の三昧を見るや不や。颰陀和よ、[九九]饒益する乃ち爾なり。人をして成就して佛道を得せしむ。若し、菩薩あつて是の三昧を得ば、當さに學誦すべし、當さに持つべし、當さに人に敎ふべし、當さに守るべし。是の如くせば、佛を得ること久しからず。若曹知るや不や。颰陀和よ、是の三昧は、是れ菩薩の眼、諸の菩薩の母、諸の菩薩の歸仰する所、諸の菩薩の出生する所なり。若知るや不や。颰陀和よ、是の三昧は、冥を破去して天上天下に明なり。汝知るや不や。颰陀和よ、[一〇〇]是の菩薩の三昧は是れ諸佛の藏、諸佛の地、是れ珍寶淵海の泉、無量功德の鎭、明哲を益するの經なり。當さに是の知を作すべし。三昧の所出は是の如し、中より佛を出だす。經を聞かなば正しく[一〇一]四意止の中に立つ。何等をか四意止の中となす。一には自ら身を觀じ、他人の身を觀ず。自ら身を觀じ、他人の身を觀ずれば、本と身なし。二には自ら痛痒を觀じ、他人の痛痒を觀ず。自ら痛痒を觀じ、他人の痛痒を觀

【九二】忉利天、Trāyastriṃśa. 欲界六天中第二、
【九三】術闍波提、西藏譯は Glog-gi lha. 梵語原音不詳、電德と譯す。
【九四】三耶三菩、三耶三佛に同じ。
【九五】刹利、Kṣatriya. 王種、印度四姓の第二、
【九六】賴毘羅耶、西藏譯は Hod-zer-gyis rgyal-po. 梵語原音不詳。光王と譯す。
【九七】婆羅門、Brāhmaṇa. 印度四姓の第一。
【九八】提和竭羅、Dīpaṃkara. 定光又は燃燈等と譯す。
【九九】饒益、豐かに益得あること。
【一〇〇】是の菩薩の三昧は云云、隋譯には、是の三昧は卽ち是れ佛性、卽ち是れ法性、卽ち是れ僧性、卽ち是れ佛地、是れ多聞海、是に無盡藏頭陀とあり。
【一〇一】四意止、隋譯には、四念處といひ、菩薩摩訶薩常に當さに專心にして身行を觀察せば、畢竟して一切の諸身を見ず。常に當さに專心にして受行を觀察せば、而も亦た一切の諸受を見ず。常に當さに一心にして心行を觀察せば、而も亦た一切の諸心を見ず。常に當さに一心にして法行を觀察せば、而も亦た一切の諸

并びに阿須倫、摩睺勒、
諸天悉く共に其の德を頌す。
諸佛嗟歎して願の如くならしむ
其の人の道意退轉せず
姿顏美艶にして與等なく
國國相ひ伐つて民荒亂し
終に其の命を中夭せず
勇猛にして諸の魔事を降伏し
其の功德の行議すべからず
[83]妖蠱、幻化及び符書
終に能く其の身に中ることとなることとなし
一切悉く共に其の德を歌ふ
然して後に[86]當來最末の世に
常に精進を行じて喜踴を懷き
經卷を受持して講じ誦諷せよ

此の三昧を行ずれば是の如きを得。
天、人、龍、鬼、眞陀羅、
諷誦して經を說く、人の爲の故に。
法慧の義にして盡くることなく、
此の經を誦習して人を開化す。
饑饉荐りに臻つて苦窮を懷けども、
能く此の經を誦して人を化する者は、
心、畏る所なくして、毛竪たず、
此の三昧を行ずれば是の如きを得。
穢濁邪道、不正の行、
法を愛樂して本に達するを用つての故に。
具足[84]定慧の佛[85]尊子、
手に是の經を得、是の如きを得。
同心和悅して此の法を奉ず
今、我是れを以て、彼が爲めに說く。

[87]羼羅耶佛品　第九

佛、颰陀和に告げたまはく、乃往昔の時、不可計阿僧祇劫に、爾の時に佛有き。[88]羼羅耶佛怛薩阿竭[89]阿羅訶[90]三耶三佛と名けたてまつる。世間に於て極て尊く、世間を安定して、經の中に於て大いに明なり　天上天下、號を天中天と曰ふ。爾の時に長者の子あり、[91]須達と名づく。二萬人と倶な

【八三】妖蠱、妖怪毒蟲をいふ。
【八四】定慧、亂心を治するを定といひ、事理を分別するを慧と名づく。
【八五】尊子、隋譯には長子に作る。
【八六】當來、來世をいふ。
【八七】羼羅耶佛品、隋譯は曉益品第九と名づく。
【八八】羼羅耶、西藏譯は bde-bahi rgyal-po. 梵語原音不詳、無畏王と譯す。
【八九】阿羅訶、Arhat. 應供と譯す。佛の尊稱の一。
【九〇】三耶三佛、Samyak-sambuddha. 正徧智と譯す。佛の尊稱の一。
【九一】須達、Sudatta. ＝須達多、西藏譯は bzań-byin.

跋陀和に告げたまはく、若しは一劫、若しは復た一劫を過ぎて、我れ是の菩薩の三昧を持つ者を說かんに、其の功德を說けども盡き竟るべからず。何に況んや、力めて是の三昧を求め得ん者をや。

佛、爾の時に偈を頌して言はく、

若し、菩薩あつて是れを學誦せば　佛は三昧寂常の義を說く
假使其の功德を歎ぜんと欲せば　譬へば恒邊の一沙を滅ずるが如く
刀刃矛戟も中傷せず　盜人怨家も能く害することなく、
國王大臣喜悅して向ふ　此の三昧を學すれば是の如きを得。
蚖蛇毒を含んで誠に畏るべきも　彼の行者を見れば、毒疾く除く、
復た瞋恚して惡氣を吐かず　是の三昧を誦すれば是の如きを得。
(八一)怨讐嫌隙、能く當ることなく　天、龍、鬼神、眞陀羅、
其の威光を覩て皆嘿然す　此の三昧を學すれば是の如きを得。
山野の弊狼及び大蟒　師子、猛虎、麀、獼玃、
傷害の心をなくして、毒を攝藏し　悉く來つて親しく是の行者を護る。
弊惡鬼神、人の魂を將ひ　諸天人民害心を懷くも、
其の威神に感じて自然に伏す　是の三昧を學すれば是の如きを得。
其の人病まず、苦痛なく　耳目聰明にして闇塞なく、
言辭辯慧、殊傑あり　三昧を行ずる者は速かに是に逮ぶ。
其の人終に地獄に墮せず　餓鬼道及び畜生を離れ、
世世生ずる所の宿命を識る　此の三昧を學すれば是の如きを得。
鬼神、(八二)乾陀も共に擁護し　諸天人民も亦た是の如く、

【八一】怨讐嫌隙、怨讐ある間柄の不和なるをいふ。

【八二】乾陀、乾陀羅に同じ。

異りあることとなし、若し菩薩あつて是の三昧を持たば、終に目、若しは耳、鼻、口を病ます。身體病ひなく、其の心終に憂へず、終に厄せず。是の菩薩、若しは死し、若しは死に近からん。設し是の患へあらば、佛語異ありとなす。其の宿命の所作を除く。復た次に颰陀和よ、是の菩薩諸天皆な稱譽し、諸の龍皆な稱譽し、諸の閱叉鬼神皆な稱譽し、諸の[七八]阿須輪皆な稱譽し、[七九]迦留羅鬼神、[八〇]眞陀羅鬼神、摩睺勒鬼神、若しは人非人、皆な是の菩薩を稱譽し、諸佛天中天皆な是の菩薩を稱譽す。復た次に颰陀和よ、是の菩薩は、諸天の爲めに護せられ、諸龍の爲めに護せらる。四天王、釋提桓因、梵三鉢天皆是の菩薩を護る。閱叉鬼神、乾陀羅鬼神、阿須倫鬼神、迦留羅鬼神、眞陀羅鬼神、摩睺勒鬼神、若しは人非人、皆共に是の菩薩を擁護す。諸の佛、天中天皆な共に是の菩薩を擁護す。復た次に颰陀和よ、是の菩薩は諸天の爲めに敬愛せらる。諸の龍、閱叉鬼神、乾陀羅鬼神、阿須倫鬼神、迦留羅鬼神、眞陀羅鬼神、摩睺勒鬼神、若しは人非人、皆な共に是の菩薩を敬愛す。諸の佛、天中天皆な愛欲あることとなけれども、道德を以ての故に、皆な復た是の菩薩を敬愛す。復た次に颰陀和、是の菩薩諸天皆な之れを見んと欲し、諸の龍、閱叉鬼神、乾陀羅鬼神、阿須倫鬼神、迦留羅鬼神、眞陀羅鬼神、摩睺勒鬼神 若しは人非人、皆な思つて是の菩薩を見んと樂欲す。諸の佛、天中天皆な各各に是の菩薩をして、往いて其の所に到らしめんと欲す。人民を川つての故に往かしめんと欲す。復た次に颰陀和、是の菩薩、諸天皆な其の所に來至す。諸の龍、閱叉鬼神、乾陀羅鬼神、阿須倫鬼神、迦留羅鬼神、眞陀羅鬼神、摩睺勒鬼神、若しは人非人皆な是の菩薩の所に來至して、與に共に相見る。諸佛、天中天、菩薩但だ晝日に見るのみならず、夜、夢中に於て、若しは諸佛の身を見る。若しは諸佛各各に自ら其の名字を說く。復た次に颰陀和よ、是の菩薩の未だ誦せざる所の經、前に聞かざる所の經卷は、是の菩薩是の三昧を持つ威神にて、夢中に悉く自ら其の經卷を得、名は各各に見、悉く經の聲を聞く。若し晝日に得されば、若しは夜、夢中に於て悉く見得す、佛、

【七八】阿須輪、前の阿須倫と同じ。
【七九】迦留羅、前の迦樓羅と同。
【八〇】眞陀羅、前の甄陀羅と同じ。

颰陀和菩薩、羅隣那竭菩薩、憍日兜菩薩、那羅達菩薩、須深菩薩、摩訶須薩和菩薩、因坻達菩薩、和倫調菩薩、佛の所説を見たてまつる。是の八菩薩皆な大いに歡喜し、五百の[69]劫波育錦衣を持し、珍寶を持して布施し、身を持つて自歸して佛を供養す。佛、阿難に語りたまはく、是の颰陀和等、五百の菩薩、人中の師に於て、常に中を持し、正法の合會に教に隨順し、歡喜せざる者なし。[70]歡樂心、隨時心、清淨心、却欲心あり。是の時に五百の人、叉手して佛前に立つ。颰陀和菩薩、佛に白して言さく、菩薩は幾くの事を持つて是の三昧を得ん。天中天、佛の言はく、菩薩は四事あつて疾く是の三昧を得。[71]何等をか四となす。一には餘道を信せず、二には愛欲を斷ず、三には法の如くに行ず、四には生を貪る所なし。是れを四となす。菩薩、疾く是の三昧を得。佛、颰陀和に告げたまはく、若し、菩薩あつて是の三昧を學する者、若しは持し、若しは誦し、若しは守りて、今世に即ち自ら五百の功德を得。譬へば颰陀和、[72]慈心の比丘の終に毒に中らず、終に兵に中らず、火も燒くこと能はず、水に入つても死せず、帝王も其の便を得ること能はざるが如し。是の如く菩薩是の三昧を守る者も、終に毒に中らず、終に兵に中らず、終に火の爲めに燒かれず、終に水の爲めに沒せられず、終に帝王の爲めに其の便を得られず。譬へば颰陀和よ、劫盡き壞し燒かる時の如き、是の三昧を持つ菩薩は、正使(たとひ)是の火の中に墮すとも、火即ち爲めに滅せん。譬へば[73]大罌の水の小火を滅するが如し。佛、颰陀和に告げたまはく、我が語る所、是の菩薩に異りあることなし。是の三昧を持つ者は、若しは帝王、若しは賊、若しは水、若しは火、若しは龍、若しは蛇、若しは[74]閱叉鬼神、若しは猛獸、若しは大蟒、若しは蛟龍、若しは師子、若しは虎、若しは狼、若しは狗、若しは人、若しは非人　若しは[75]猲玃(かくわく)、若しは[76]薜荔(へいり)、若しは[77]鳩洹鬼神、若しは人を嬈んと欲し、若しは人を殺さんと欲し、若しは人の鉢、震越を奪はんと欲し、若しは人の禪を壞り、人の念を奪はんと欲する者、設し、是の菩薩に中らんと欲するも、終に中ること能はず。佛の言はく、吾が語る所の如く、

【六九】劫波育、Karpāsa 樹名にして、此樹の花、柳絮の如く、綿となり、布を製す。

【七〇】歡樂心、隨時心、清淨心、却欲心、隋譯には隨順之心、眞實之心、清淨之心、離欲之心とあり。

【七一】何等をか四となす云云、隋譯には、一には一切外道の語言に著せず、二には一切諸の愛欲の事を樂まず、三には常に頭陀の功德を遠離せず、四には常に三界諸有の生處を厭ふ、とあり、

【七二】慈の比丘云云、隋譯には現前に五種の功德を得とて、一には、一切衆毒は損害すること能はず、二には、一切の兵仗は破傷すること能はず、三には、一切の諸水は漂沒すること能はず、四には、一切の猛火は焚燒すること能はず、五には、惡王縣官は便を得ること能はずとなす。

【七三】大罌の水、多量の水の意。

【七四】閱叉、Yaksa.＝夜叉、八部衆の第三位に數へらる。

【七五】猲玃、大猿をいふ。

【七六】薜荔、Preta.＝餓鬼、十界の第二位又は第三位に數へらる。

【七七】鳩洹、Kumbhāṇḍa.＝鳩槃茶、甕形鬼等と譯す。人の精氣を噉ふ惡鬼なり。

行、所著なくして諸欲を捨て
精進にして佛の法教を奉行し
男女及び所有を貪らず
家に居して道を修して常に悔惚し
賊害の心をなくして柔順を行し
色を用ひずして法忍を得るを求め
若し、比丘尼是の法を學し
調戲及び貢高を遠離せば
常に精進を行じて睡臥を除き
法を愛樂する者は命を惜まず
嫉妬の意を制して所著を捨て
終に復た罣羅の網に墮せず
諸の衆生に於て平等を行じ
性に卒暴及び麁言をなくして
鉄、戲越及び衣服に於て
善師を尊敬して視ること佛の如くし
善利を逮るを以て惡道を離る
一切八難の處を遠離す

常に自ら謹慎にして恚恨を棄り
然して後に是の三昧を受學せよ。
[illegible]に[illegible]を遠離し、
然して後に是の三昧を學[illegible]せよ。
諍訟を樂まずして諸惡を捨て、
當さに善く是の三昧を諷誦せよ
常に當さに恭敬して憍慢を棄て、
是の三昧を得んこと復た難からざるべし。
吾我、諸の人物を計せざれ
然して後に是の三昧を學誦せよ。
瞋恚の心をなくして諛諂を棄て、
是の三昧を持てば是の如きを得。
放逸衆の障埃を除去して、
然して後に是の三昧を學誦せよ。
須臾も貪愛をあることを得ず、
然して後に是の三昧を學誦せよ。
一心に佛の法教を信樂して、
是の經を持つ者は是の如きを得。

擁護品第八

【六七】 諍訟、他人の德を謗ること。

【六八】 擁護品、宿譯は稱讃功德品第八と名づく。

若し、親見し、及び聲を聞くことあつて
皆た佛道を得ん、復た疑はざれ
若し、之を瞋恚と及び罵詈し
是の八人の威神の恩に於て
彼れ所受の法を議るべからず
光明限りなく、德疑ひなく
常に面り無量の佛を見ることを得
是に於て廣く普ねく布施を行じ
無數億劫其の福を說んとも
是の經法を受けて誦習せん者は
其れ、此の經卷を愛樂して
當さに知るべし、五百人中の人
假使是の經法を施し得
淸淨の戒を行じて睡臥を除かば
安隱に經戒を布ふを獲んと欲せば、
常に分衞を行して止足を知れ
衆の[六六]閙を捨離して請を受けず
從つて是の經法を聞く所の者をば
慳貪を除去して是の法を受け
大道を發起して、心疑ふことなく

其の心、欣然として踊躍する者は、
何かに況んや　奉受し供養せん者をや。
惡意を持つて向つて撾捶せん者、
當さに佛を得せしむべし況んや恭敬せしめんをや
名稱無量及び壽命、
智慧無量にして行も亦た然り。
淸淨の戒、恒沙の如し
もつて無上道を求索す。
能く厥の功德を齊限することなし、
大道を逮せんこと、復た難からず。
受けて誦諷し、持して講說することあらん者は、
其の心愛樂して終に疑はず。
當義を愛樂して加精進し、
是の三昧を逮せんこと終に難からず。
比丘受學して、閑居に在つて
是の三昧を逮すること終に難からず。
口に味を貪ることなくして愛欲を棄て、
敬ふこと世尊の如くして常に供事せよ。
婬欲を斷絕して愚癡を捨て、
然して後に是の三昧を學行せよ。

【六六】閙、さわがしき貌。

已に[五九]八難處を棄捐して
其の功德の行、能く稱ふることとなく
當さに復た[六〇]彌勒佛に値見したてまつり
悉く共に等しく慈哀を供養し
其の心、僉然として和同し
俗事に猗らずして[六一]法忍を得
彼れ常に此の經法を奉持して
衆の功德を殖へて、梵行を修す
是の[六二]賢劫に於て興る所の佛は
毎に所在の所に普く法を持す
皆、悉く諸の世雄を供養し
當さに疾く尊佛道を逮得すべし
中に前に佛道を得る者あり
不可計の劫、那術の數
是に[六三]居士颰陀和、
及び須薩和、憍曰兜、
常に當さに正法の化を奉事して
道行無量にして稱ふるべからず
假使人あつて名を受持せば
是の如く勇猛に世間を導き

一切の諸の惡道を遠離す、
所受の福祐能く量ることとなし。
咸く同じく一心にして往いて自歸し、
無上寂滅の句を逮すべし。
正意人中尊に奉事す
疾く無上大道の行を逮す。
夙に興き、夜に寐ねて諷誦し、
彌勒を覩たてまつる時の義此の若し。
世間を慈愛して、光明を放ち玉ふ
去來現在の佛に奉事す。
三世の尊を見たてまつりて衆毒なし
不可思議にして量あることとなし。
後人展轉して相供養す、
是の如き終つて竟に乃ち斷絕す。
羅鄰那竭、那羅達、
曾つて諸佛を見ること[六四]恒沙の如し。
諸佛無億の教を宣布すべし、
無數億劫の中に至る。
周旋する所の處、若しは夢中に、
皆當さに[六五]無上道を逮得すべし。

【五九】八難處、三惡道に鬱單越、長壽天、聾盲瘖瘂、世智辨聰、佛前佛後をいひ、見佛、聞法に障りあれば難處と名づく。
【六〇】彌勒、Maitreya. 慈氏と譯す。
【六一】法忍、心法にかなひて惑なきをいふ。
【六二】賢劫、現在の住劫を名づけて賢劫といふ。現在の住劫二十增減中には千佛の出世あれば、之れを稱讃して賢劫といひ、又善劫ともいふ。
【六三】居士、在家の佛道を求むるもの。
【六四】恒沙、Gaṅgā-nadī-vālukā＝恒河沙、恒河の沙を以て多數なるに譬ふ。
【六五】無上道、無上菩提、最上の如來所得の法に名づく。

塔寺及び山中に著き
各各に經卷を轉授し已つて
天上の壽盡きて世間に還る
當さに復た此の佛道を取つて行ひ
斯の經法を愛樂するを用つての故に
無數の人をして聽聞することを得せしめ
是の等[ともがら]黠慧にして、法を厭はず
一切の諸の外道を降伏し
是の經法は、能く得、及び持し
今、[五四]四輩の人、我が前に住す
摩訶須薩、和輪調、
是の八菩薩、跋陀恕
比丘及び尼、清信士、
常に經道を以つて世間を哀れみ
颰陀和等の八菩薩
常に當さに方等經を奉持すべし
一切の[五六]縛を釋いて空慧を解す
恒に慈哀を行じて衆生を度し
壽終つて後ち、法の家に生じ
世世相ひ隨つて常に和き協ひ

若しは天龍[五二]乾陀羅に付す
壽命終訖つて、天上に生ず。
各各而も[五三]異種性に生ず、
是の經を分別すること所願の如くなるべし。
求めて輒ち之れを得、持して奉行し、
欣踊量り難く、心等しきなし。
軀體及び壽命を貪るに非ず
經法を授與して其の志を弘む。
諷誦し、講說せん者を得ることなし、
五百の衆、能く堪持す。
羅隣那竭、那羅達、
因坻、須深、憍曰兜、
玄妙の法を奉して、義句を上ふ
[五五]方等を宣暢して普く流化す。
五百の衆に於て英雄となす
世の俗に於て著する所なく、
[五七]紫磨金色百福の相、
施すに安隱を以てして、諸塵を滅す。
復た[五八]三惡道に歸らず
然して後に尊佛道を逮得す。

【五二】乾陀羅、前の迦樓羅に同じ。
【五三】異種性、性種の異ること。
【五四】四輩、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆を指す。
【五五】方等、中道の理の方正にして生佛平等たるを云ひ、一切大乘經の通名。
【五六】縛、煩惱の異稱。
【五七】紫磨金、金の名、即ち紫色にして垢濁なきをいふ。
【五八】三惡道、地獄、餓鬼、畜生の三道をいふ。

誰れか今、深法藏を受得して、
無上の道德衆の歸する所なる。
今日誰れか當さに世間を愍むべき
誰れか當さに是の法教を奉受すべき、
誰れか堅く佛の智慧を立せん
世尊、願はくは爲めに之れを解說したまへ。

佛、爾の時に阿難の爲めに偈を說いて言はく、

佛、阿難に語りたまふ。汝、見るや不や(いなや)
五百人等前に在つて立つ
其の心歡然として歌頌して曰はく
我等亦た當さに是の法を逮すべしと。
顏色和悅して佛を敬視す
我等何れの時か、是の如きを得んと、
皆、悉く竦立して佛を嗟嘆す
我が輩、會す、當さに是の如きを逮すべしと。
五百人等、今現在
名字異ると雖も本行同じ、
常に樂んで是の深經を奉受す
當來の世に於ても亦復た然り。
今、我れ囑累して汝等に告ぐ
佛慧無量にして彼の本を知る
是れ等は、獨り一佛に見るのみならず
亦た、此に立して其の慧を得るのみならず、
彼の宿世の命を徹照するに
以(さき)に曾つて更に八萬の佛を見たてまつる
五百人等存して道に在り
常に經の義を解して勉めて行成す。
無數の諸の菩薩を勸助して
常に慈哀を行じて經法を護る、
一切の衆の人民を勸化して
悉く大道の行を逮得せしむ。
過去の諸の世尊を知見するに
八十億[五〇]那術の數を覩たてまつる
名德普く大にして心を脫し
是の法を擁護して[五一]三轉行はる。
現世此に於て我が教を受け
分別して是の舍利を供養す
安諦に佛の所化を受持し
皆、悉く諷誦して付する所あり。

【五〇】那術、Nayuta＝那由陀、數の名なり。
【五一】三轉、三轉法輪の略、三轉とは、示轉、勸轉、動轉をいひ苦集滅道の四諦を說くに用ひらる。

泥洹の後ち亂世の時、我が曹(ともがら)共に是の三昧を護り、是の三昧を持ち、具足して人の爲めに之れを說き、是の經卷を聞かしめて厭極あることなからん。時に摩訶須薩和菩薩、[四五]憍曰兜菩薩、那羅達菩薩、須深菩薩、因坻達菩薩、和輪調菩薩、共に佛に白して言さく、佛般泥洹し去つて、却つて後ち世亂るゝ時、是の經卷をば、我が輩自ら共に護持して、佛道をして久しく在らしめん。其の未だ聞かざることある者には、我が輩、當さに共に爲めに說いて敎授すべし。是の深經は世間に信ずる者あることと少からん。我が曹ら悉く之れを受けん。時に五百人座より起つ。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、共佛前に叉手して住いて、佛に白さく。佛般泥洹の後ち、亂世の時是の三昧を聞いて悉く自ら持護し、願持せん。我れ五百人、是の八菩薩に囑累したまふ時、佛の笑の口の中より金色の光り出でて、十方不可計の佛國に至つて悉く照明し、還つて身を遶ること三帀して頂上より入る。阿難、座より起つて更に[四六]袈裟を被り、前んで佛所に至り、佛の爲めに禮を作して却つて住して叉手し、偈を以て讃して曰はく、

其の心淸淨にして行に穢なく　神通極まりなく、大變化
已に諸礙を過ぎ衆智を超へ　光明、冥を除いて垢塵を去り、
智慧無量にして、心、普ねく解したまふ　佛天中天、[四七]鶡鴨(かつおう)の音(こゑ)、
一切の外道能く動ずることなし　何に緣つてか、笑んで妙光を出したまふ。
願はくは[四八]正眞覺爲に解說したまへ　一切衆生を慈愍する尊、
若し、佛の柔需の音の解釋を　聞くことあらば、聖化を逹して俗行せん。
世尊の所感は[四九]唐擧に非ず　衆聖の導師は妄りに笑みたまはず
今は誰れか當さに決の中に在るべき　世雄願はくは爲めに此の意を解したまへ。
今日誰れか道德に住すること堅き　誰れか當さに逮得して妙行を興すべき、

【四五】憍曰兜前出の憍曰兜に同じ。
【四六】袈裟、Kasāya 出家せる者の衣服。
【四七】鶡鴨、隋譯迦陵伽に作る。
【四八】正眞覺爲、隋譯、通達正眞に作る。
【四九】唐擧、隋譯、虛笑に作る。

當さに佛の法教に從つて
是の三昧を守る時
比丘衆を尊敬し
餘道に事ふことを得ず
是の三昧を行せば、
殺、盜、婬を除去して、
酒家に向ふことを得ることとなし
心、貪を懷くことを得ざるべし
諛諂の意を除去すべし
常に當さに恭敬して、
法語を聞いて悉く受くべし

五戒を奉して定具すべし。
當さに佛及び法、
其の善師を恭敬すべし。
天を祠祀る事勿れ
人を見ては立つて迎逆へ
至誠にして[四一]兩舌せず、
當さに是の三昧を行じて、
常に當さに施與を念じ、
人の短を說くことを得ることなく
比丘、比丘尼に事へ、
三昧を學せば是の如くすべし。

[四二]授決品第十

颰陀和菩薩、佛[四三]少有及者、天中天に問ひたてまつる。怛薩阿竭乃ち是の三昧を說きたまふ。諸の菩薩の樂ふ所にして精進の行、阿耨多羅三藐三菩提を懈怠することあることとなし。佛、般泥洹の後ち、是の三昧は當さに閻浮利の內に在るべきや不や。佛、颰陀和菩薩に告げたまはく、[四四]我れ、般泥洹の後に是の三昧は當さに現在すること四十歲なるべし、其の後ち復た現せず、却つて後ち亂世に佛經且く斷ぜんと欲する時、諸の比丘復た佛教を承用せず。然して後に亂世の時國國相伐たん。是の時に於て是の三昧は當さに復た閻浮利の內に現ずべし。佛の威神を用つての故に、是の三昧經、復た出をなす、颰陀和菩薩、羅隣那竭菩薩座より起つて衣服を正し、佛前に叉手して佛に白さく、佛、般

【四一】兩舌、言說彼此人異なるに從ひ、相違をなすに名く。十惡の一たり。

【四二】授決品、隋譯は戒行具足品の續き。

【四三】少有及、希有の意。

【四四】我れ般泥洹、の　云云、隋譯には、我が滅度の後、此三昧經は、閻浮提に於て、四十年中廣く世に行れ、而して後五百年の末一百歲の中、正法滅する時、比丘は惡を行ずる時、正法を誹謗する時、正法破壞する時、持戒損減の時、破戒熾盛の時、諸國相伐の時、斯の際に當つて頗る衆生に熾然たる善根あり。往昔已に曾つて諸佛に親近し、供養し、修行し、善種子を植ゆ、彼の諸丈夫輩の爲めに是の經を得るが故に、此の三昧與、當さに閻浮提に流行すべしとあり。

是の三昧を誦せん時　沙門と作らんと思樂して、
妻子を貪ることを得ざれ　財色を捨離して、
常に五戒を奉持すべし　[三九]一月に八關齋し、
齋の時、佛寺に於てせよ　三昧を學んで通利し、
人の惡を說くことを得ず　輕慢の行を形すことなく、
心、榮冀する所なし　當さに是の三昧を行して、
諸の經法を奉敬すべし　常に當さに道を樂ひて、
心に諂僞あることなく　慳妬の意を捨棄す。
是の三昧を學ぶことあらば　常に當さに恭敬を行じ、
自大放逸を捨て　比丘僧を奉事すべし。

颰陀和菩薩、佛に白さく、若し、優婆夷の摩訶衍三跋致を求むるあつて、是の三昧を聞き已つて學守せんと欲せば、當さに何等の法を行じて、是の三昧を學守すべきや。佛、颰陀和に告げたまはく、若し優婆夷の摩訶衍三跋致を求むるあつて、是の三昧を聞き已つて、學守せんと欲せば、當さに五戒を持つて自ら三に歸すべし、何等をか三となす。自ら佛に歸し、法に歸命し、比丘僧に歸命して、餘道に事ふことを得ず、天を拜することを得ず、[四〇]吉良日を示すことを得ず、調戲することを得ず、慢恣なることを得ず、貪心あることを得ず。優婆夷、常に當さに布施の歡を念じ、經を聞いて力めて多く學問せんと樂欲すべし。優婆夷常に當さに善師を敬事し、心常に惓まず、懈らざるべし。若し比丘、比丘尼過らば、常に座席を以て賓主にし、飲食之れを待せよ、佛、爾の時に偈を頌して言はく、

若し優婆夷有つて　是の三昧を誦せば、

【三九】一月、異本に一日に作る。

【四〇】吉良日、印度に於て宿星を以て、吉日、良辰を定むるをいふ。

貪婬の心を聽することを得ることなく　瞋恚及び愚癡を棄てゝ、
魔羅の網に墮することを得ることなかれ　三昧を求むれば當さに是の如くすべし。
設し是の三昧を學ぶことあらば　調戲を無め、貪身を捨て、
一切、衆の狐疑を捨てゝ　當さに至誠にして虛飾せざるべし。
小慈を捨てゝ常に大慈にして　善師を敬ふこと[三三]己巳することなし
當さに衆惡を去離すべし　三昧を求むれば當さに是の如くすべし。
行じて法を求めて得んと欲せば　鉢、震越を貪著せず、
人に從つて爾の三昧を聞かば　視ること佛の如く等しくして異ることなし。

颰陀和菩薩、佛に白さく、若し[三四]白衣の菩薩あつて、家に居して道を修し、是の三昧を聞き已つて學せんと欲する者、守せんと欲する者は、當さに云何んが、法の中に於て立つて是の三昧を學守すべきや。佛、颰陀和に告げたまはく、白衣の菩薩は是の三昧を聞き已つて學守せんと欲せば、當さに[三五]五戒を持つて堅く淨潔に住すべし。酒は飮むことを得ず、亦た他人に飮ましむることを得ず。女人と交通することを得ず、自らなすことを得ず、亦た他人をしてなさしむることを得ず。妻子に恩愛あることを得ず。男女を念ずることを得ず。財產を念ずることを得ず。常に念じて妻子を捨て、行きて沙門と作さんと欲し、常に[三六]八關齋を持ち、齋の時、常に當さに佛寺に於て[三七]齋すべし。常に當さに布施を念じて、我當さに自ら其の福を得べしと念ぜざるべし、當さに用つて萬民に故らに施すべし。常に當さに大いに善師を慈んすべし。持戒の比丘を見て輕易に其の惡を說くことを得ざれ。是の行を作し已つて當さに學し、當さに是の三昧を守るべし。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

[三八]居家の菩薩あつて　是の三昧を得んと欲せば、
常に當さに學びて究竟すべし　心、貪り慕ふ所なかれ。

【三三】己巳、異本巳巳に作る。

【三四】白衣の菩薩、在家の菩薩。

【三五】五戒、一に不殺生、二に不偸盜、三に不邪婬、四に不妄語、五に不飮酒をいふ。

【三六】八關齋、八齋戒の異名。卽ち殺盜等の八罪を禁閉して犯さしめざれば關と名く。

【三七】齋、定められたる日に戒法を行じ、懺悔をなす儀式をいふ。

【三八】居家、出家に對す。在家と同義なり。

其れ是の三昧を受くることあらん　爾乃ち是れを佛子となす
學んで奉行すること是の如くならば　三昧を得んこと終に久しからず。
常に勤力めて懈怠せず　睡眠を除いて心開解し、
當さに惡知識を遠離して　然して後に是の法行に從ふべし。
放逸を去つて休息せず　常に衆の聚會を捨離せよ
比丘斯の三昧を求めば、　佛の敎に隨つて當さに是の如くすべし。

颰陀和菩薩、佛に白さく、比丘尼、菩薩の道を求めて是の三昧を學せんと欲し、是の三昧を守らんと欲せば、當さに何等の法を持し、住して是の三昧を學守すべきや。佛、颰陀和に告げたまはく、比丘尼、摩訶衍[30]三跋致を求めて是の三昧を學守せば、當さに謙敬すべし。當さに嫉妬すべからず。瞋恚することを得ざれ。自らの貢高を去り、自らの貴大を去り、懈怠を却け、當さに精進すべし。睡眠を棄てゝ臥出することを得ざれ、悉く財利を却け、悉く當さに淨潔に護るべし。軀命を惜むことを得ざれ、常に當さに經を樂ふべし、當さに求めて多く學すべし。當さに婬、恚、癡を棄てゝ[31]魔羅の網[32]を出て去るべし。當さに所好の服飾珠環を棄つべし。惡口することを得ざれ、好鉢、震越を貪愛することを得ざれ。當さに人の爲めに稱譽せらるとも諛諂あることを得ざるべし。是の三昧を學する時、當さに善師を敬つて視ること佛の如くすべし。當さに是の經の中の敎を承けて是の三昧を守るべし。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

比丘尼恭敬を行じて　妬嫉せずして瞋恚を離し、
憍慢を除き自大を去る　是を行ぜば三昧を得ん。
當さに精進して睡臥を却け　所欲を捐てゝ壽を貪らざるべし
一心に是の法を慈しみ　三昧を求むれば當さに是の如くすべし。

【三〇】三跋致、Sampatti發趣と譯す。
【三一】魔羅、前出の魔と同じ。
【三二】魔羅の網、天魔の人を網する種々の邪業をいふ。

自ら節度を守り、如法に住して、所有趣かに足るのみ。經行して懈ることを得され、臥出することを得され。是の如し。䫂陀和よ、是の如く經の中に敎ゆ。其れ愛欲を棄て、比丘と作つて是の三昧を學ばゞ、當さに是の如くし、守ること是の如くすべし。䫂陀和菩薩、佛、難及、天中天に白さく、所說の法は、若し後世に懈怠の菩薩あつて、是の三昧を聞き已つて肯て精進せず、其の人自ら念ずらく、我れ當さに後、當來の佛の所に於て是の三昧を索むべきのみと。云何んが言はく、我は曹ら身〔二四〕羸極にして病瘦あり、恐らくは是の經を求め聞くこと能はじ、已に懈怠して精進せず、若し復た菩薩の精進する者あつて是の經を學ばんと欲せば、當さに之を敎ふべし。是の經の中の法に隨つて敎ゆ、是の經を用つての故に〔二五〕軀命を惜まず、人の得る所あるを者を望まず、人の稱譽する者あらば、用つて故らに喜ばず、大いに〔二六〕鉢と〔二七〕震越を貪らず、愛慕する所なく、常に所欲なし。是の經を聞いて懈怠せずして常に精進す。其の人、我れ當さに後の當來の佛の所に於て乃ち求索せんと念ぜず。自念す、我が筋骨髓肉をして皆な枯腐せしむとも、是の三昧を學して終ひに懈怠せじ。自念す、我れ終ひに懈怠して死なず、是の經を聞き已りて歡樂せずと云ふことなし。時に佛言はく、善かな、善かな、䫂陀和の說く所は異りあることなし、我れ助けて其れ歡喜す、過去當來今現在の佛我れ悉く助けて歡喜す。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

我が今の所說の法の如き　悉く受學して獨り〔二八〕處止し、
功德を行じて自ら節を守らば　是の三昧は得難からず。
常に〔二九〕行乞して請を受けず　悉く諸の欲樂を喜捨し、
是の三昧を聞く所に從つて　法師を敬ふこと世尊の如し。
是の三昧を誦行することあらば　常に精進して懈怠することなかるべし、
經法を惜むことを得ず　供を求めずして乃ち經を與ふ。

〔二四〕羸極、非常に疲れたるをいふ。
〔二五〕軀命、肉體的の生命をいふ。
〔二六〕鉢、出家の用ふる食器。
〔二七〕震越(Civara)臥具又は衣服のこと。
〔二八〕處止、異本、山に處しに作る。
〔二九〕行乞。乞食を行ずるの意。

の三昧を誦せん者、是の三昧を持たん者は、當さに淸淨に戒を持つて、戒を缺くこと大さ毛髮の如くばかりもすることを得ざるべし。何等をか菩薩の〔一九〕不缺戒となすや。一切悉く禁法を護りて、出入、行法悉く當さに護るべし。戒を犯すこと大さ毛髮の如くばかりもすること得ざれ。常に當さに怖畏して諛諂を遠離すべし。悉く當さに禁を護るべし。是の護を作す者、是れを淸淨持戒となす。何等をか菩薩の缺戒なる者となすや。是の菩薩は色を求むるをいふ。何等をか色を求むとなすや。其の人、意に念ずらく、是の功德を持つて、我が後世の生をして、若しは天と作り、若しは〔二〇〕遮迦越王と作らしめんと。佛言はく、〔二一〕是の比、此の菩薩を用つて缺戒となす。其の人久しく是の行を持ち、是の戒を持ち、是の自守の福を持つて、所生の處、愛欲中に樂まんと欲す。是れを毀戒となす。佛、颰陀和に告げたまはく、是の菩薩の比丘、是の三昧を學せんと欲せば、淸淨に戒を持ち、完具して戒を持ち、諛諂して戒を持たず、當さに智者の爲めに稱譽せられ、羅漢の爲めに稱譽せらるべし。經の中に於て當さに布施すべし、當さに精進すべし。所念强く、當さに信多くして勸樂すべし。常に〔二二〕和上に承事すべし、當さに善師に承事すべし。從つて是の三昧を聞く所あらば、是の三昧を聞くべき所の處、當さに其の人を視ること佛の如くすべし。佛、颰陀和に告げたまはく、是の菩薩にして、師を視ること、佛を視るが如くする者は三昧を得ること疾し。設し善師を恭敬せず、善師を輕易し、善師を欺調せば、正使久しく是の三昧を學し、久しく持し、久しく行ずとも、設し、師を恭敬せずんば疾く之れを亡はん。佛、颰陀和に告げたまはく、是の菩薩、若し、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の所に從つて是の三昧を聞くことを得ば、當さに視ること佛の如くすべし。三昧を聞く所の處、當さに尊敬すべし。佛、颰陀和に告げたまはく、菩薩、是の三昧を聞く所の處、當さに〔二三〕諂意を持して當るべからず。是の菩薩は諂意あることを得ず。常に當さに樂んで獨り處止して身命を惜まず、人の索むる所あるを悕望することを得ず。常に乞食を行じて請を受けず、嫉妬せず、

【一九】不缺戒。戒を具足して缺かざること。

【二〇】遮迦越王、Cakravartirāja. 轉輪聖王をいふ。

【二一】是の比、此の菩薩、異本に是の比丘菩薩とあり。

【二二】和上、Upādhyāya.＝和尚、親教師等と譯す。

【二三】諂意、へつらう心をいふ。

行を作して勤力(つとめ)て而も著せず
行者是の如し所念なく
當さに念じて是の三昧を解了し
過去の諸佛、皆な法を論ず
讃說し、宣布して義を分別し
我も亦た是の如く人の尊となり
皆な悉く此の[一六]道眼を解知す
其れ、是の三昧を講受することあれば
是を諸佛無量の德となす
廣く衆經を採つて議(はか)るべからず
速かに疾く欲する諸の垢塵を去り、
現世に無數の佛を見
速かに疾く色を去り、所著を除いて
是に於て貪及び瞋恚なく
無黠を棄て遠けて狐疑を除け
唯だ世尊所說の法に從ふ。
專ら道義を聽きて法施を興す
普く諦かに佛の講じたまへる所を受誦すべし。
當來の世尊も亦た復た然り
皆な共に是の三昧を講ずることを歎ず。
世に在つては上なく、衆生の父たらん
故に解說して[一七]寂三昧を示す。
身は常に安隱にして意荒(すさ)まず。
尊佛道を致して獲ること難からず、
一切諸佛の化に達せんと欲せば
精進に是の淨三昧を行ぜよ。
樂つて諸尊に從つて法を聽受せんと欲せば、
是の清淨寂三昧を行ぜよ。
愚癡を捨離し、憎愛を捐て、
是の如くせば、寂三昧を解することを得ん。

[一八]四輩品　第六

颰陀和菩薩、佛、難及、天中天の三昧を說きたもふ者に白さく、若し、菩薩ありて愛欲を棄て、比丘と作つて是の三昧を聞き已らば、當さに云何んが學し、云何んが持ち、云何んが行ずべきや。
佛、言はく、若し、菩薩ありて愛欲を棄て、比丘と作つて、意(こゝろ)に是の三昧を學せんと欲せん者、是

【一六】道眼、佛道修行に依りて得られる卓越せる眼。
【一七】寂三昧、寂滅即ち涅槃を對境とする三昧なり。
【一八】四輩品、隋譯には戒行具足品第七と名づく。難及＝希有。

諸人の物に於て著する所なく
諸佛は心解に從つて道を得
[九]五道は鮮潔にして色を受けず
一切の諸法は色漏[一〇]なし
婬欲を絶ち去つて則ち心を脱す
精進奉行して佛道を求め
無得の行は求めて、求めずといふことなし
所有を觀察すること虚空の如く
想なく、作なく、亦た聞なし
一切の色を見るに想念せず
常に諸佛を觀ずること等しく空の如く
其の人、清淨にして眼に垢なく
無量の經法悉く受得し
是の三昧を行じて著する所なく
[一二]世雄を見ず、[一三]賢聖なく
思想を超度して、當さに志し求むべし
諸佛を覩已つて復た見ず
地水火に於て能く礙することなく
是れを行じ、精進して十方を見
我れ是に於て經を講說するが如く

疾く速かに世に於て佛道を得。
心は清淨に、明にして垢なし
是れを解することある者は大道を成ず。
想を離るゝ者は空にして、空を想ふことなし
此れを解することある者は三昧を得。
常に諸法の本と清淨を聽くべし
是の三昧に於て得るに難からず。
道意寂念として審かに第一なり、
是れを尊佛道を解了すとなす。
眼著する所なく、往來なし
已に世間、諸の所求を度す。
[一一]奉行精進して常に寂然たり
是の三昧を思惟し、分別す。
一切の冥を除いて定意を得、
諸の[一四]外異道は此れを聞いて惑ふ。
心、清淨なるを以て佛を見ることを得、
爾して乃ち是の尊三昧を解す。
風種虚空も亦た蔽はず、
坐して遙かに所化の法を聽受す。
[一五]道法を樂ふ者は面り佛を見る

【九】五道、一に地獄道、二に餓鬼道、三に畜生道、四に人道、五に天道にして有情の世界をいふ。
【一〇】色漏、顯色又は形色に於ける漏をいふ。
【一一】奉行、奉承し、行持するに名づく。
【一二】世雄、佛の異稱。
【一三】賢聖、賢者聖人の意。
【一四】外異道、佛教以外の教を奉ずるもの。
【一五】道法、佛法といふに同じ。

是の間に在らず　亦た彼の邊に在らず、想あることなく、動搖せず、何等を動搖せずとなす。智者は計せず、是の故に動搖せず。是の如く颰陀和よ。菩薩、佛を見、以つて、菩薩の心念所著なし。何を以ての故に所有なしと說くや。經に說ける無所有の中に著せず。本を壞し、本を絕す。是れを無所著となす。是の如く颰陀和よ、是の菩薩、是の三昧を守れば、當さに是の見佛を作すべし。當さに佛に著すべからず。何を以ての故に、設し所著あれば[五]自燒となす。譬へば、大段の鐵を火の中に著きて燒き、正に赤きが如きは、智あらん者は當さに手を以て持つべからず。何を以ての故に、人の手を燒けばなり。是の如く、颰陀和よ、菩薩、佛を見れば、當さに色に著すべからず、痛痒思想、生死の識、當さに著すべからず。何を以ての故に、著する者は身を燒くことを爲す。佛を見れば、但だ當さに其の功德を念ずべし。當さに摩訶衍を索むべし。佛、颰陀和に告げたまはく、是の菩薩三昧の中に於て、當さに著不著なる所あるべからざる者は、疾く是の三昧を得。佛、爾の時に偈を頌して言はく、

新たに磨る鏡、油を盛る器の如く、　女人莊飾して自ら形を照す、
中に於て婬欲の心を起生し　放逸にして姿態甚だ迷荒す。
追つて至誠ならず、虛しく法を損ち　色の爲めに走使して、其の身を燒く、
女人の患害は是れより起る　[六]法の非常空なることを解せざるを用つてなり。
有想の菩薩も亦た是の如し　我れ當さに成佛して[七]甘露を逮し
人民憂惱の患を度脫すべしと　人想あるが故に不解となす。
人本を求索するに得べからず　亦た生死及び泥洹なし、
法、擁すべからざること、水月の如く　佛道を觀察するに[八]歸趣なし。
黠慧の菩薩は當さに是れを了すべし　世間悉く本と無なることを解知して、

【五】自燒、自ら自分の身を燒くこと。

【六】法の非常空、法とは軌持の義ありて、軌とは物解を生ぜしむべき軌範に名づけ、持とは自相を捨てざる意にて任持に名づく。非常とは無常と同義にして、世相の恒常たるものなき義。空とは空寂として更に實體となすべきものなきに名づく。而して、法の非常空といへるは、世相を深く觀察せば各々自體と認むべきものなく、皆な無常空寂の理に歸すといへる意なり。

【七】甘露、味甘くして蜜の如きもの。

【八】歸趣、歸着し趣向するの意にして終局的理想をいふ。

巻の中

無著品[一] 第五

佛、颰陀和に告げたまはく、是の菩薩三昧は、當さに云何すべきや、譬へば、佛、今、若が前に於て經を說くが如き、菩薩、當さに是の念を作すべし。諸佛悉く前に在りて立つと。當さに具足して諸佛の端正を念じて悉く逮見せんと欲すべし。一一の相は、當さに想をもつて識るべし。能く諸佛の[二]頂上を見る者あることなし。悉く具足して是の想をなせ、諸佛を見れば當さに是の念を作すべし、我が身も亦た當さに是の如きを逮得すべし。亦た當さに身相を逮得すること是の如くなるべし。亦た當さに持戒三昧を逮得すること是の如くなるべし。當さに是の念を作すべし、我れ當さに心に從つて得べし、復に更に念を作すべし、佛も亦た心を用つて得ず、亦た身を用つて得ず、亦た心を用つて佛を得ず、亦た色を用つて佛を得ずと。何を以ての故に、心といはゞ佛は心なし、色といはゞ佛は色なし、是の心色を用つて[三]阿耨多羅三藐三菩提を得ず。何を以ての故に、佛は色、以に盡したまへり、佛は痛痒思想、生死の識、了かに盡したまへり。佛の盡せりと說く所は、愚癡は見ず、知らず、智者は之れを曉了す。是の念を作す。當さに何等の念を持して佛を得べきや。當さに身を持して佛を得べきや。當さに智慧を持して佛を得べきや。復た是の念を作す。亦た身を用つて佛を得ず、亦た智慧を用つて佛を得ず。何を以ての故に。智慧は索むるに得る能はず。自ら復た索むるに我れ了かに得べからず。亦た所得なく、亦た所見なし。一切の法本より所有なし。有を念ずるは著に因る。有なきに反つて有と言ふは、亦た是の兩つの者に著す。亦た念ぜず。亦た、復た適に其の中を得ず。但だ是れを用つての故に亦た邊に在らず。亦た[四]中に在らず。亦た有ならず。亦た無ならず。何を以ての故に。諸法空にして泥洹の如し。亦た壞せず、亦た腐らず、亦た堅からず、亦た

【一】無著品、隋譯は觀察品第六と名づく。

【二】頂上、頂相ともいひ、佛の頂上に肉髻あり。其の肉髻を一切の人天は見る能はずとなす。

【三】阿耨多羅三藐三菩提、Anuttara-samyak-sambodhi. 無上正等正覺と譯す。佛の悟をいふ。

【四】中、有無の二邊に偏せざる非有非無の境界に名づく。

安諦に諷誦し講説せば
其の人、貢高にして終ひに起らず
深法を解了して疑結せず
學士爲ち吾れを見奉るを以て
信明を增益して菩薩となる
[一八四]汝等に屬累す、常に敎を勸めて
[一八五]自勸して勇猛に勤めて修行せば
其れ、是の三昧を誦受することあれば
假使、最後に大に恐懼せんも
是れを行ずる比丘、我れを見るを以て
菩薩、三昧を聞習せば
菩薩、是の三昧を得ば
總持を逮するか爲に佛、稱譽す
常恒に是の三昧を誦說して
聞かば、其れ[一八八]種性等覺を得

譬を引くに功德喩ふべからず。
亦た、惡道に趣く時あることなく、
斯の三昧を行ずれば德、是の如し。
德重精進して普く著せず、
力めて三昧を學べば佛に讚せらる。
力行し、精進して、放逸なることなし
大道を得しめて復た[一八六]反せず。
[一八七]巳に、面り、百千の佛を見るとなす
此の三昧を持すれば、畏るゝ所なし。
常に佛に隨つて遠離せずと爲す
義は當さに受持して人の爲に說べし。
爾して乃ち、名づけて、博達の慧と曰ふ
疾く佛道を成じて、智、海の如くならん。
當さに佛の法、世尊の敎に從ふべし
佛の所說の如くにして異りあることなし。

【一八四】囑累、囑とは付囑の義にして累とは煩勞荷負を義となす。
【一八五】自勸、異本、自勉又は自助に作る。
【一八六】反せず、異本、久しからずに作る。
【一八七】巳に、已にの誤か。
【一八八】種性等覺、種性とは性分不改の私子に名づけ、等覺とは平等の覺悟、即ち佛の覺悟を指す。

こと須臾の間もせん。是の菩薩の功德復た計るべからず。佛言はく、是の三昧を持する者、書し、學し、誦し、持ち、他人の爲に說く、其の福[181]乃爾なり。何に況んや、是の三昧を守つて悉く具足せん者をや、佛、爾の時に偈を頌して曰はく、

三千大千の國土の　中に滿てる珍寶を用て布施するとも、
設使、是の像經を聞かずんば　其の功德の福、爲れ薄少なり。
若し、菩薩あつて衆德を求むれば　當さに、是の三昧を講じ、奉行し
疾く悉く此の經法を諷誦すべし　其の功德の福、量りあることなし。
一佛國の塵の世界の如き　皆な、破壞し碎いて以て塵となし、
彼の諸佛の土、是の數に過ぎんに　中に滿てる珍寶を用つて布施せん。
其れ、是の世尊四句の義を受持して　人の爲めに說くことあらん、
是の三昧は諸佛の慧なり　聞くことを得る功德は比喩し叵し。
何に況や、人あつて自ら講說し　受持し、諷誦し、念ずること須臾もせん、
轉た、加增進して奉行せば　その功德の福、量りあることなし。
假使一切を皆な佛と爲すも　聖智淸淨の慧第一ならん、
皆な億劫に於て其の數に過ぐとも　一偈を講說するの功德なり。
[182]泥洹讚詠の福に至つては　無數億劫悉く歎誦するとも、
其の功德を盡し究むること能はず　是の三昧一偈の事に於て
一切の佛國有らゆる地の　四方四隅及び上下の、
中に滿てる珍寶を以て布施し、　用つて佛、天中天に供養せん。
若し、是の三昧を聞くことあらん者は　其の[183]福祐を得ること彼に過ぎたり、

【一八一】乃爾、多大の意。

【一八二】泥洹讚詠、涅槃を讚美し詠誦するをいふ。

【一八三】福祐、冥助、天祐の意。

さに是れ知るとなすべし。佛を離ること遠からず、若し戒を持すること堅き者は、常に心を正しくて經を恭敬す。我れ是れをもつての故に、是の人の爲めに說くのみ。

[一八〇]佛、颰陀和に告げたまはく、我が說く所と異りあることなし。爾の故に此の語を說くのみ。今我れ、是の三昧を說けるを見る者は、其の人却つて後世の時、是の三昧を聞いて終に疑はず、形へ笑はず、信ぜずと言はず、惡師の邊りに在るを除く。たとひ善師の邊りにありとも、其の功德薄少ならん。是の如き輩の人は、復た轉た惡師と從事す。是の輩の人は、是の三昧を聞いて、信せず、樂はず、中に入らず、何を以ての故に、其の人未だ久しく學せず。更る所の佛少なく、信ずる所の智慧少し。故に信ぜざるのみ。佛、颰陀和に告げたまはく。其れ菩薩ありて、是の三昧を聞いて、形へ笑はず、誹謗せざる者は、歡喜して中を疑はず。乍ち信じ、乍ち信せずと言はず、樂ひて書し、樂ひて學し、樂ひて誦し、樂ひて持せん。佛言はく、我れ悉く豫め知り、預め見る。已に其の人、獨り一佛の所に於て功德を作すのみにあらず、二若しは三、若しは十のみならず、百佛の所に於て、是の三昧を聞けるなり。却つて後世の時、是の三昧を聞かん者、經卷を書し、學し、誦し、持ち、最後に守ること一日一夜せんに、福計るべからず。自ら阿惟越致に所願の者の得を致す。佛、颰陀和に告げたまはく、我が譬喩を說くを聞け、譬へば、颰陀和よ、人あつて一佛刹を取つて悉く破碎して塵の如くならん。其の人、此の一塵を取つて、悉く復た破し盡して、一佛刹の塵の如くし、都て悉く一一の塵を取つて、皆復た塵を破し盡して一佛刹塵の如くならん。云何ん、颰陀和よ、是の塵、其の數寧ろ多しや不や。颰陀和の言はく、甚だ多し、甚だ多し、天中天よ。佛、颰陀和に告げたまはく、我れ汝曹の爲めに此の譬喩を引く。若し一の菩薩ありて、盡く此の一塵を取つて一佛刹に置く、其の數、所の佛刹の其の中に滿てる珍寶を悉く持つて諸佛に供養せんに、是の三昧を聞くには如かず。若し復た一の菩薩ありて、是の三昧を聞き已りて書し、學し、誦し、持ち、他人の爲めに說く

【一八〇】佛、颰陀和に告げたまはく云云以下、隋譯は受持品第五と名づく。

是れ復た此に過ぎざらん。我れに與へば、善し、肯かずんば已なん、といふが如し。是の如く颰陀和よ、其の人是の三昧を聞いて、信ぜざる者、反つて是の經を形ること是の如し。佛言はく、如し、菩薩、是の三昧を持して受信する者は、便ち行に隨て四面皆な擁護して畏る所なし。禁戒を持して完具し、高明を得し爲めに黠慧深く入り、他人の爲めに之れを說く。菩薩當さに是の三昧を持し、分布して人に語り展轉して相傳ふべく、當さに是の三昧をして久しく在らしむべし。佛言はく、癡人自ら前世の所に於て、供養せず、功德を作さず、反つて自ら貢高にして、多く誹謗嫉妬を行ず。財利を用ゆるが故に但だ名を求めんと欲し、但だ[176]譏說を欲して善師を得ず。亦た經を明めず。此の三昧を聞き已つて信ぜず、樂はず、中に入らず、反つて人を誹謗して言はく、是れ、彼れは愧を知らず、爲めに自から是の經を作るのみ。是の經は佛の所說に非ずと。佛、颰陀和に告げたまはく、今、我れ具さに汝に語らん。是の如く颰陀和よ、菩薩道を求むる者、若しは善男子、善女人、是の[177]三千國土、其の中に滿たらん珍寶を持つて、佛に施與せん。設ひ是の功德あるも、是の三昧を聞くに如かず。若し菩薩あつて是の三昧を聞いて信樂せば、其の福轉た陪多し。時に佛歎じて曰はく。

[178]是の三千國土。其の中に滿つる珍寶を佛に施したてまつり、持してもつて佛を求めたてまつる。復た異人あり、是の三昧を持する者は是れ佛の稱譽する所、聞きて信ずる者は其の福倍多し。佛の言はく。是れ迷惑にして自から貢高の人、信ぜざる者、及び惡知識と與みして從事せば、此の經を聞きて信ぜず樂まず、是れ我が經の中に於て怨家異りなしとなす。是れ戒を持せざる人、自大の中に在らば、其の餘人展轉して其の言を聞き、之れに信隨す。此れ佛法を壞すとなす。其の人相ひ告げて言はく、是の經は佛の說く所に非ずとなし、直ちに是れ誹謗をなす。佛の言はく、是の三昧を信ずる者あらば、其の人の[179]宿命は曾つて過去佛を見る。已に是れをもつての故に、我れは是れ信者となして是の三昧を說くのみ。是の輩の人、常に佛法を護り、是の經を聞き、信樂する者は、當

【一七六】譏說、かまびすしくはやし立てること。

【一七七】三千國土、三千大千世界の國土の意にて、須彌山を中心とせる世界と小世界と名づけ、此の小世界の一千合したるものを小千世界といふ。更に小千世界を千合せるを中千世界といひ、中千世界を一千合したるを一大千世界といふ。此の一大千世界を三千大千世界と名づく。

【一七八】是の三千國土云云以下次頁の二行まで、三本は偈頌となし、麗本は長行に作る。

【一七九】宿命、宿世卽ち前世の意。

颰陀和よ、是の菩薩、是の三昧を聞き已りて、書せず、學せず、誦せず、持して[一七一]中法の如くならず、一切の諸天人民皆な爲めに大に悲憂して乃ち我れ爾の所の經寶を亡ふといふ。是の深三昧を失ふをもつての故に。佛の言はく、是の三昧經は、是れ佛の囑したもふ所、佛の稱譽したもふ所なり。是の深三昧經を聞く者、書せず、學せず、誦せず、守らず、持して法の如くならざるは、反復愚癡にして自ら以て高しとなすや。是の經を受けず、意、高才ならんと欲して、反つて肯て是の三昧を學ばず。譬へば颰陀和よ、愚癡の子に、人あつて手に滿つる[一七二]栴檀香を與ふるに、肯て之を受けず、反つて之れを不淨を與ふと謂ふ、栴檀香其の貨主其の人に語つて言はく、此は栴檀香なり。卿不淨と謂ふ事なかれ。且く取つて之れを齅げば香なるや不やを知らん。試みに之を視れば淨なるや不やを知らんと、癡人目を閉ぢて視ず。肯て齅かさるが如し。佛言はく、其の是の三昧を聞く者は、是くの如く肯て之を受けず、反つて棄捨し去る。是を戒を持たさるの人、反つて是の珍寶の經を捨つとなす。是を愚癡無智となす。自ら禪を得て具足して[一七三]度となすをもつて。反つて世間を呼びて有となし、空に入らず、無を知らず。其の人、是の三昧を聞き已て樂はず、信ぜず、中に入らず、反つて[一七四]輕戲の語を作す。佛も亦た深經あらんや、亦た威神あらんや。反つて言を世間に形す。亦た、比丘の阿難の如きあらんや。佛言はく、其の人、是の三昧を持する者に從ひて去るところ兩兩三三、相與に語つて云はく、是の語は、是れ何等の說なるか、是れ何れより得る所なるか、是れ自ら合會することをなして是の語を作すのみ。是の經は佛の所說に非ず、と。佛、颰陀和に告げたまはく、譬へば、賈客の[一七五]摩尼珠を持ちて田家の癡子に示すに、其の人、賈客に問て、此れ幾錢ぞ、と評す。賈客報へて言はく、夜半なる時に、冥き處に於て、摩尼珠を持して冥き中に著くに、其の明の照し至る所、直、其の中に滿てる寶なりと。佛言はく、其の人殊に其の價を曉らず、反つて是の摩尼珠を形て言はく、其の價ひ、能く一頭の牛と等しきや、不や。寧ろ一頭の牛に貿ふべしや。想ふに

【一七一】中法、法の如くに從ふの意。

【一七二】栴檀香、Candana-gandha. 香木なり。

【一七三】度、彼岸に渡るをいひ、解脫を得るの行法を指す。

【一七四】輕戲、輕卒といふに同じ。

【一七五】摩尼、Maṇi 珠の總名。

知り、悉く見る。是の如く颰陀和よ、是の菩薩は今、現在諸佛悉在前立三昧を得んと欲して布施し、當さに具足して戒を持つべし。是の如く[163]忍辱、[164]精進、[165]一心智慧[166]度脫智慧、身に悉く具足す。時に佛歎じて曰はく。[167]淨眼の人の如く、夜半上向して星宿を視るに計るべからず。晝日思念するに悉く見る。菩薩の是の如き三昧を逮得する者も、復た計るべからざる百千の佛を見る。三昧の中より覺めて、以て悉く念見し、自ら恣にして、諸の弟子の爲めに說く。佛の言はく、我が眼清淨にして常に世間を見るが如く、菩薩は是の如き三昧を得て以て、復た計るべからざる佛を見る。佛を見て身相を視ず、但だ[168]十種力を視る。世間の人の貪あるが如くならず、諸の毒を消滅し以て清淨にして復た想はず。菩薩功德を逮すること是の如し。是の經を聞きて、是の經を遵ぶこと泥洹の如く、是の法を聞きて空空にして、恐怖あることなし。我れ當さに是の說經を作すべし衆の人民をもつての故に、皆な佛道を得せしむ。佛の言はく、我が比丘阿難の如く、黠慧にして經を聞かば卽ち受持す。菩薩は是の如き是の三昧を逮得し、以て計るべからざる經卷を聞き悉く受持す。佛の言はく。阿彌陀佛刹の諸の菩薩の如きは、常に計るべからざる佛を見る。是の如く菩薩、三昧を得、以て常に計るべからざる佛を見る。信ずる所常に哀心あり、譬へば渴者の飲を得んと欲するが如し。常に極大の慈ありて世俗の事を棄捐し、常に經を持して施を樂しむ。是れをもつての故に、清淨は三昧を得ること久しからず。

[169]譬喩品　第四

佛、颰陀和に告げたまはく、菩薩、三昧を慈求する者、是の三昧を得已つて精進に行ぜずば、譬へば颰陀和よ、人あつて舡に珍寶を載滿し、持して大海を度(わた)らんと欲せんに、未だ至らずして、舡、中道にして壞れ[170]閻浮利の人皆大いに悲念して、我れ爾の所の珍寶を亡ふといふが如し。是の如く

【一六三】忍辱、內心能く外境の侮辱惱害を忍ぶをいふ。
【一六四】精進、心惡法に染まずして善法のみ念念趣求するをいふ。
【一六五】一心智慧、法に從つて專心專念する智慧をいふ。
【一六六】度脫智慧、生死の苦を超度し解脫する智慧をいふ。
【一六七】淨眼の人の如く云々以下、宋、元、明三本、偈頌となし、麗本は長行となす。
【一六八】十種力、下の十八不共十種力品第十二に說く所なり。
【一六九】譬喩品、隋譯は正信品と名づく。
【一七〇】閻浮利、Jambudvipa＝閻浮提。須彌山の南に存し、吾人の住する世界をいふ。

除き、三月、懈むを得ることなく、坐して經を說く時安諦として學を受け、極めて當に廣遠なるべし。若し供養、饋遺の者あるも喜びを得ることなく、貪慕する所なければ、經を得ること疾し。佛は色、金光の如く身に三十二相有り。一相に[一六一]百福の功德あり、端政にして天の金をもつて成作せるが如し。過去佛、當來佛悉く豫め自歸し、今現在佛皆な人中に於て最尊なり。常に供養を念じ、當に佛を供養するに花香、擣香、飯食具足すべし。當に善意を持すべし。是れをもつての故に三昧離るゝこと遠からず。常に鼓樂、倡伎を持して佛心を樂ひ、常に當さに娛樂すべし。是の三昧を求めんとする者は當さに佛像を作るべし。種種に具足し種種に姝好す、面目は金光の如し。是の三昧を求むる者は、施す所常に當さに自樂たるべく、持戒と與みて當さに淸潔、高行たるべし。懈怠を棄捐し、疾く是の三昧を得ること久しからず。瞋恚生ぜず常に慈心を行じ、常に悲哀を行ず。等心にして憎惡する所なくんば今是の三昧を得ること久からず。慈を極め善師に於て視ること當さに佛の如くすべし。瞋恚、嫉貪あることを得ず、經の中に於て施して貪なることを得ず。是の如き敎、當さに堅く諸の經法を持すべし。悉く當さに是れに隨つて入るべし。是れを諸佛の道徑となす。是の如きの行ずれば、今三昧を得ること久しからず。

[一六二]佛、颰陀和に告げたまはく、是の如き等の菩薩は當さに慈心をもつて、常に善師を樂ふべし。視る所の師は當さに佛の如く悉く具足して承事すべし。是の三昧經を書せんと欲する時、若しは學せんと欲する時、菩薩、師を敬ふこと是の如くすべし。颰陀和よ、菩薩、善師に於て瞋恚あり、善師の短を持して、善師を短視し、佛の如くせざることある者は三昧を得ること難し。譬へば颰陀和よ、明眼の人の夜半に星宿を視るに、星を見ること甚だ衆多なるが如し。是の如く颰陀和よ、菩薩、佛の威神を持して三昧の中に於て立ち、東に向ひ、若干百の佛、若干千の佛、若干萬の佛、若干億の佛を視る。是の如く十方等悉く諸佛を見る。佛、颰陀和に告げたまはく、是の菩薩に佛眼の如く、悉く

【一六一】百福の功德、三十二相の一一の相に百の福業をもつて莊嚴する功德をいふ。

【一六二】佛颰陀和以下隋譯は見佛品第三と名く。

る者の所見、是の如し。佛、爾の時に偈を頌して曰はく、

心は心を知らず、　心あらば心を見ず、
心、想を起せば則ち癡なり、　想なきは是れ泥洹なり。
是の法は堅固なることなし、　常に立ちて念に在り。
解を以つて空を見る者は、　一切想念無し。

[一五四]四事品　第三

菩薩、四事の法ありて疾く是の三昧を逮得す。何等をか四となす。一には信ずる所、能く壞する者あることなし。二には精進、能く逮ふ者あることなし。三には入る所の智慧、能く及ぶ者あることなし。四には常に善師と從事す。是れを四となす。菩薩復た四事あつて疾く是の三昧を得。何等をか四となす。[一五五]一には世間の思想あること[一五六]指を相彈ずる頃の如きも、得ざること三月なり。二には臥出すること三月、指を相ひ彈する頃の如きを得ず。三には[一五七]經行して休息することを得ず、坐することを得ざること三月なり。其の飯食左右を除く。四には人の爲めに經を說かんに、人の衣服飯食を望むことを得ず。是れをか四となす。菩薩、復た四事有りて疾く是の三昧を得、何等を四となす。一には人を合會して佛所に至らしむ。二には人を合會して經を聽かしむ。三には嫉妬せず。四には人に敎へて佛道を學ばしむ。是れを四となす。菩薩、復た四事有りて疾く是の三昧を得。何等をか四となす。[一五八]一には佛の形像を作り、若しは畫を作る。是の三昧をもつての故に。二には是の三昧をもつての故に[一五九]好疋素を持して、人をして是の三昧を寫さしむ。三には自ら貢高の人をして佛道の中に內らしむ。四には常に佛法を護る。是れを四となす。時に佛偈を說いて而も歎じて曰はく。[一六〇]常に當さに樂んで佛法を信ずべし。經を誦し空を念じ中止することなし。精進して睡臥を

【一五四】四事品、隋譯は三昧行品第二となす。
【一五五】一には世間云云隋譯は一には乃至刹那の時に於ても衆生の想なし。二には三ヶ月の中に於て暫くも睡眠せず。三には三ヶ月經行す、但し便利を除く。四には若し飯時に於ても布施は法を以てし名利を求めず報心を望むことなしとあり。
【一五六】指を相彈する頃、非常に短時間をいふ。
【一五七】經行。一定の地を往來すること、卽ち坐禪して睡眠を催せしとき、之れを防がんが爲めにす。
【一五八】一には佛像云云、隋譯は一には佛の形像を造りて勸めて供養を行ふ。二には是經を書寫し他をして讀誦せしむ。三には慢心の衆生に敎へて發心せしむ。四には正法を護持し久住を得せしむ。とあり。
【一五九】好疋素、良好なる布帛をいふ。
【一六〇】常に當さに云云、以下、宋、元、明本を偈頌となし、麗本は長行とす。

一切の佛を見たてまつる。珍寶を持つて瑠璃の上に著くが如し。譬へば、比丘、死人の骨を觀じて前に著くが如き、青を觀ずる時あり、白を觀ずる時あり、赤を觀ずる時あり、黒を觀ずる時あり。其の骨持ち來る者あることなく、亦た是の骨あることなく、亦た從來する所なし。是れ意の作る所の想あるのみ。菩薩、是の如く佛の威神力を持つて三昧の中に於て立つ。見んと欲する所にあれば、何れの方の佛をも見んと欲せば卽ち見る。何を以ての故に。是の如く、颰陀和、是の三昧は佛力の所成なり。佛の威神を持つて三昧の中に於て立つ者、三事あり。佛の威神力を持ち、佛の三昧力を持ち、本功德力を持つ。是の三事を用ふるが故に佛を見ることを得。譬へば、颰陀和よ、年少の人端正姝好なる莊嚴して、淨器を以て[一四八]好麻油を盛り、如くは好器を持つて淨水を盛り、如くは新たに磨ける鏡、如くは瑕なき水精の自ら影を見んと欲して、是に於て自ら照すに悉く自ら影を見るが如し。云何ん、颰陀和、其の麻油、水鏡水精はその人自ら照すところにして、寧ろ影の外より中に入ることありや、不や。颰陀和の言はく、不なり。天中天よ、麻油、水精、水鏡の淨潔なるを用ふるが故に自ら其の影を見るのみ。其の影も亦中より出でず、亦外より入らずと。佛の言はく善かな、善かな、颰陀和よ、是の如し。颰陀和よ、色清淨なれば所有の者淸淨なり。佛を見んと欲すれば卽ち見る。見れば卽ち問ふ。問へば卽ち報へたもふ。經を聞いて大いに歡喜し、是の念を作す。佛、何れの所より來り、我れ、何れの所に到るとなしたもふ。自ら佛を念ずるに從來する所なく、我も亦た所至なし。自ら三處、[一四九]欲處、[一五〇]色處、[一五一]無想處を念ずるに、是の三處、意の所爲ならんのみ。我が所念卽ち見る。心、佛と作る。心、自ら見る、心は是れ佛心なり。是れ[一五二]怛薩阿竭の心なり。是れ我が身心なり。佛を見る心は自ら心を知らず。心は自ら心を見ず。心は想あるを癡となす。心、想なきは是れ[一五三]泥洹なり。是の法は樂しむべき者なし。皆な念の所爲なり。設念をして空となさしむるのみ。設ひ念ある者も亦た了に所有なし。是の如く颰陀和よ。菩薩、三昧の中にありて立て

【一三七】三十二相、佛の具ふる相好。
【一三八】梵、Brahmakayika. 梵天をいふ。
【一三九】摩訶梵 Mahābrahmā. 大梵天をいふ。
【一四〇】空三昧、五蘊の我、我所なきことを觀ずる三昧。
【一四一】摩訶迦葉、Mahākāśyapa. 佛の十大弟子の一。
【一四二】須眞天子、Susima-devaputra. 善德と譯す。
【一四三】須波日、梵語原音不詳、西藏譯闕。
【一四四】無所從生。無生忍を云ひ、作佛する迄で惡心を起さざる意なり。
【一四五】法樂、法味を以て精神を樂しましむ。
【一四六】阿惟越致 Avaivarti. 不退轉と譯す。正覺の道を退轉せざるをいふ。
【一四七】瑠璃、Vaidūrya. 七寶の一。
【一四八】好麻油、良好なる麻油を云ふ。
【一四九】欲處、欲界天をいふ。
【一五〇】色處、色界天をいふ。
【一五一】無想處、無色界天をいふ。
【一五二】怛薩阿竭、Tathāgata. 如來と譯す。佛の異名。
【一五三】泥洹、Nirvāṇa.＝涅槃、滅度等と譯す。

て我が國に生ぜんと欲せば、常に我を念ずるにと數數にして、常に當さに念を守つて休息有ることなかるべし。是の如くせば來つて我國に生ずることを得ん。佛の言はく、是の菩薩是の念佛を用ふるが故に、當さに阿彌陀佛の國に生ずることを得べし。常に當さに是の如く佛身に[一三七]三十二相あつて悉く具足し、光明徹照し端正無比にして比丘僧の中に在つて經を說くことを念ずべし。經を說いて色を壞敗せず。何等を色を壞敗せずとなすや。痛痒思想、生死識と魂神、地水火風、世間天上、上[一三八]梵、[一三九]摩訶梵に至りて色を壞敗せず。念佛を用ふるが故に[一四〇]空三昧を得。是の如く佛を念ずることをなす。佛、颰陀和に告げたまはく、菩薩、三昧の中に於て誰か當に證すべき者なるや。我が弟子[一四一]摩訶迦葉、因坻達菩薩、[一四二]須眞天子及び時に是の三昧を知る者、是の三昧を行し得ることある者、是れを證となす。何等をか證となす。是の三昧を證すれば空定となることを知る。佛、颰陀和に告げたまはく、乃往過去の時に佛あり。[一四三]須波日と名づく。時に人あり、行きて出でゝ大空澤の中に入つて飯食することを得ず、飢渴して臥出す。便ち夢中に於て香甘美の食を得て飲食し已る。其の覺めて腹中空し。自ら一切の所有皆な夢の如し。と念ずるや。佛の言はく、其の人、空を念ずるをもつての故に、便ち[一四四]無所從生の[一四五]法樂を逮得して、卽ち[一四六]阿惟越致を逮得すと、是の如く颰陀和よ。菩薩、其の所向の方に現在したもふ佛を聞いて常に所向の方を念ず。佛を見たてまつらんと欲せば卽ち佛を念ぜよ。當に有亦無と念ずべからず。我が所立、空を想ふが如くせよ。當に佛立を念ずること、珍寶を以て[一四七]瑠璃の上に倚るが如くすべし。菩薩、是の如く十方無央數の佛の淸淨を見る。譬へば、人遠く出でゝ他の郡國に到て、本鄕里の家室親屬財產を念ふに、其の人夢中に於て歸りて故鄕里に到り、家室、親屬を見て喜んで共に言語するが如し。夢中に於て見、以つて覺めて知識の爲めに之を說く、我、歸りて故鄕里に到り我が家室親屬を見る。佛の言はく、菩薩、是の如く、其の所向の方に佛の名を聞いて常に所向の方を念ず。佛を見たてまつらんと欲すれば、菩薩、

Amitābha. 無量壽又は無量光と譯す。

【一二三】佛刹、Buddha-kṣetra. 佛國といふに同じ。

【一二四】須摩提、Sumati 西方極樂の異名。

【一二五】翟く、異本に背くに作る。

【一二六】白衣、在家の人をいふ。

【一二七】覺に於て見ず、云々、瘖譯には、若しは晝時に於て見に能はざる者は、若しは夜分、或ひは睡夢の中に於て、阿彌陀佛必ず當に現ずべきなりとあり。

【一二八】天眼、一切の心をも見る眼。

【一二九】天耳、能く一切の聲を聞くことを得る耳。

【一三〇】神足、身の意の如きをいふ。

【一三一】闍舍利、前の闍梨に同じ。

【一三二】須門、Sumati. ＝須摩那妙慧等と譯す。

【一三三】阿凡和梨、Āmrap li. ＝菴羅波離、捺女等と譯す。

【一三四】優陂洹、Utpalavarṇa. 蓮華色等と譯す。

【一三五】不退轉地、所修の功德善根に於て、更に退失轉變せざる位地。

【一三六】無上正眞道、阿耨多羅三藐三菩提 Anuttra-samyak-sambodhi の古譯なり。

し喜樂[一二五]輩くことなきを見る。其れ覺め以つて人の爲めに之れを說く、後に自ら淚出でて夢中の所見を念ずるが如し。是の如く颰陀和菩薩よ。若しは沙門、[一二六]白衣の所にて西方の阿彌陀佛刹を聞き。當に彼方の佛を念ず。戒を缺くことを得ず。一心に念ずること、若しは一晝夜、若しは七日七夜、七日を過ぎて以後、阿彌陀佛を見たてまつる、[一二七]覺に於て見ず、夢中に於て之れを見る。譬へば人夢中の見る所は晝と知らず夜と知らず、亦た內と知らず、外と知らず、冥中にあるを用ひざるが故に見ず、蔽礙する所あるを用ひざるが故に見ざるが如し。是の如く颰陀和菩薩よ。心に是の念を作す時に當つて、諸佛の國界、大山須彌山と名づく。其の幽冥の處にあり、悉く開闢することを爲し、目も亦弊はず、心も亦礙らずして、是の菩薩摩訶薩[一二八]天眼を持て徹視せず、[一二九]天耳を持つて徹聽せず、[一三〇]神足を持つて其の佛刹に到らず、是の間に於て終つて、彼の間の佛刹に生じて乃ち見るにあらず、便ち是の間に於て坐に阿彌陀佛を見たてまつり、所說の經を聞いて悉く受得す。三昧の中に從つて悉く能く具足して人の爲めに之れを說く。譬へば人あり、[一三一]墮舍利國の中に婬女人、名は[一三二]須門といへるあるを聞く。若し復た人有り、婬女人[一三三]阿凡和梨を聞く、若し復た人あり、[一三四]優陂洹の婬女人と作るを聞く。是の時に各各之を思念す。其の人未だ曾て此の三女人を見ず。之を聞いて婬意卽ち爲めに動く。便ち夢中に於て各往いてその所に到る。是の時三人皆な羅閱祇國に在つて同時に念ず。各、夢中に於て是の婬女人の所に到り、與に共に棲宿す。其の覺め已て各自ら之を念ずるが若し。佛、颰陀和に告げたまはく、我れ三人を持して以て付す。若し是の事を持して人の爲めに經を說いて、此の慧を解して[一三五]不退轉地に至り、[一三六]無上正眞道を得せしめよ。然して後に佛を得ん。號を善覺と曰はん、是の如く颰陀和よ。菩薩、是の間の國土に於て阿彌陀佛を聞いて數數念ず。是の念を用ふるが故に阿彌陀佛を見たてまつる。佛を見已つて從つて問ひたてまつる。當さに何等の法を持して阿彌陀佛の國に生ずべきや。爾の時に阿彌陀佛、是の菩薩に語つて言はく、來つ

いふ。
【一〇八】我所、我の所有の意。
【一〇九】諷誦、經を諷誦するの義。
【一一〇】六味＝苦、酸、甘、鹹、淡の六味に名く。
【一一一】五習、隋譯、五解脫となす。
【一一二】十善、十惡を防止し理に順じて勝德を修行するに名づく。十惡とは殺生、偸盜、邪婬、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見の十不善に名づく。
【一一三】九惱云云、隋譯には衆生の九種の惱患を斷滅せんが爲めに心常に九想觀門を離れず。常思して八種懈怠を棄捐し一心に八大人覺を修習すとあり。
【一一四】八便、異本に八使とあり。
【一一五】八大道覺、少欲、知足、寂靜、正念、正定、精進、正慧、無戲論をいふ。
【一一六】無爲、涅槃の境界をいふ。
【一一七】十二衰、隋譯には之を闕く。
【一一八】計す思ふの意。
【一一九】三界、欲界、色界、無色界をいふ。
【一二〇】下、了の誤か。
【一二一】魔、Māra. 障礙破壞をなすもの。
【一二二】阿彌陀、Amitāyus 又は

かんと欲し、法を行ぜんと欲して歳計に隨はず、身想を受けず、十方の人を離れて受くることを欲せず、壽を貪らず、陰を了して惑に隨はざることをなす。或は所有に隨はざることをなし、[二六]無爲を求めて生死を欲せず、大いに生死を畏れ、陰を計すること賊の如く、四大を計すること蛇の如し。[二七]十二衰は空なりと[二八]計す。久しく[二九]三界にありて安隱ならず、無爲を得ることを忘ることなし。貪欲を欲せず、願つて生死を棄て、人に隨つて諍はず、生死に墮することを欲せず、常に佛前に立ちて身を受く。計するに夢の如し。信を受くるを以て復た疑はず、意に異あることなし。一切過去の事、未來の事、今現在の事等を思想することを滅し、常に諸佛の功德を念じて、自歸して佛に依る事をなし、定意自在を得て佛の身相の法に隨はず、一切一計天下と所作を諍はず、因緣に從つて生ずることを受け了つて佛地に從つて度す。可法中を得、法中[三〇]下を得、空を了する意を以て、人を計するに亦た有ならず、亦た滅せず、自ら無爲の點眼を證して以て一切を淨む。不二の覺意中邊にあらず。一切の佛、一念に入ることをなして、疑點有ることなく、能く訶することあることなし。自ら曉覺の意を得るが故に佛點他人に從はず、善知識を待し得て、計して佛の如くし、異意あることなし。一切、菩薩にありて離る時あることなし。縱ひ一切の[三一]魔も動すこと能はず。一切の人は鏡中の像の如く、一切の佛を見ること晝の如し。一切法に從つて行じ、淸淨い菩薩の行に入ることをなす。是の如く佛の言はく、是の行法を持つが故に三昧を致して便ち三昧を得、現在の諸佛悉く前に在つて立ちたもふ。何に因つてか現在諸佛悉在前立三昧を致すや。是の如く颰陀和、其れ比丘比丘尼優婆塞優婆夷あり、持戒完具し、獨り一處に止り、心に西方の[三二]阿彌陀佛、今現在したもふを念じ、所聞に隨つて當に念ずべし、是の間を去ること千億萬[三三]佛刹にして其の國を須摩[三四]提と名づく。衆の菩薩の中央に在つて經を說きたまふ。一切常に阿彌陀佛を念ず。佛、颰陀和に告げたまふ。譬へば人の臥出して、夢中に於てあらゆる金銀珍寶、父母、兄弟、妻子、親屬、知識と相ひ與に娛樂

【九〇】煩濁、煩惱の心を濁すをいふ。
【九一】匄句、乞人に同じ。
【九二】教語、佛の語を以て衆生に教ふるをいふ。
【九三】等心、怨親平等の心。
【九四】聖心、佛心に同じ。
【九五】現在佛悉在前三昧、pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi. 隋譯に思惟諸佛現前三昧といひ、般舟三昧に同じ。心を一境に留めて佛を念ずれば、現在に念ぜし佛は行者の前に自立したもふ三昧なり。
【九六】行品、隋譯は思惟品の續き。
【九七】定意、禪行を修して亂意を遠離するをいふ。
【九八】黠、世俗智ありて賢き義。
【九九】善知識、吾れを善道に導く朋友の意。
【一〇〇】惡知識、惡友の意。
【一〇一】子身、異本に子身に作る。子身は一人身、單身、孤立身といふに同じ。
【一〇二】等意、等心に同じ。
【一〇三】蓋、煩惱のこと。
【一〇四】色、物質をいふ。
【一〇五】陰、色心の法の積集して自體をなすをいふ。
【一〇六】衰、身の損減するをいふ。
【一〇七】四大、地水火風の四を

を行ずることある者は、若の問ふ所の者悉く得べし。颰陀和菩薩、佛に白して言さく、願はくは佛哀れみて之れを說きたまへ、今、佛の說きたまふ者、過度する所多く、安隱なる所多からん。願はくば佛諸の菩薩の爲めに大明を現じたまへ。佛、颰陀和菩薩に告げたまはく、一法行あり、常に當に習ひ持つべし。常に當に守つて復た餘法に隨はざるべし。諸の功德の中に最第一なり。何等を第一法行となすや。是の三昧を名づけて現在佛悉在前立三昧となす。

[九六]行品第二

佛、颰陀和菩薩に告げたまはく、若し菩薩あつて所念現在の定意にして十方の佛に向ふに、若し[九七]定意有らば一切菩薩の高行を得。何等を定意となす。念佛の因緣に從つて佛に向ふ、念意亂れず[九八]黠を得るに從つて精進を捨てず[九九]善知識と共に空を行じ睡眠を除いて聚會せず。[一〇〇]惡知識を避けて善知識に近づき、精進を亂らず、飯は足ることを知り、衣を貪らず、壽命を惜まず。[一〇一]身親屬を避け、鄕里を離れ[一〇二]等意を習ひ、悲意の心を得て行を護り、[一〇三]蓋を棄て禪を習ふ。[一〇四]色に隨はず、[一〇五]陰を受けず、[一〇六]衰に入らず、[一〇七]四大を念ぜず、意を失はず、性を貪らず、不淨を解して十方の人を捨てず、十方の人を活かす。十方の人と計して是れ我所となし、十方の人を計して[一〇八]我所に非ずとなす。一切の欲受、戒を貿へず、空行を習ひ、[一〇九]誦經を欲して中ごろ戒を犯さず、定意を失はず、法を疑はず、佛を諍はず、法を却けず、比丘僧を亂らず、妄語を離れ、道德の家を助け、癡人を避け、世間の語は喜ばず、聞くことを欲せず、道語は具さに聞き亦た喜ばんと欲す。因緣に從ひ生を畜ひて生ず。[一一〇]六味を聞くことを欲せず。習を[一一一]五習となし、十惡を離れんが爲めに、爲めに[一一二]十善を習ふ。[一一三]九惱を曉らめんが爲めに八精進を行じ、八懈怠を捨つ。[一一四]八便を習はんが爲めに、爲めに九思[一一五]八大道念を習ふ。又た禪聞に著せず、貢高ならずして自大を棄てて說法を聽き、經を聞

【八〇】摩訶衍、Mahāyāna. 大乘の義。

【八一】摩訶僧那僧涅、Mahā-saṃnāha-Saṃnuddha. 菩薩が自ら不可計阿僧祇の人を度して悉く般泥洹せしめんと念ずるをいふ。

【八二】十力地、十力とは如來の優れたる十種の力用にて、一に是處と非處とを知る智力。二に過現未來業報を知る智力。三に諸禪解脫三昧を知る智力。四に諸根の勝劣を知る智力。五に種種の解を知る智力。六に種種の界を知る智力。七に一切至處の道を知る智力。八に天眼無礙を習る智力。九に宿命無漏を知る智力。十に永斷習氣を知る智力をいひ。十力地とは上の十種の智力に通達したる所に名づく。

【八三】所計、計とは忘念を以て道理を邪に推し計るをいひ、所計とは計せらるる境に名く。

【八四】生者滅者。生とは因緣和合して假體生ずるをいひ、滅とは因緣離散して更に體なきをいふ。

【八五】經海、佛典諸經の多數なるより海といふ。

【八六】仙道、仙人、道人。

【八七】羅漢、阿羅漢に同じ。

【八八】地行、異本、施行に作る。

【八九】淸白、煩惱の垢染を離る〻佛所顯の法をいふ。

し、智慧珍寶悉く[78]經藏を逮得し、身は虚空の如くにして想あることなからん。人をして菩薩の道を求めしめ[79]佛種をして斷へざらしめん。菩薩の道を行じて未だ曾て[80]摩訶衍を離れず、[81]摩訶僧那僧涅を逮得して曠大の道を極め、疾く一切智を逮得し、諸佛に皆な稱譽せられ、佛の[82]十力地に近づき、一切の所想悉く中に入り、一切の[83]所計悉く了知し、世間の變、悉く曉知し、成敗の事、[84]生者滅者悉く曉知し、[85]經海の寶に入り、第一の藏を開き、悉く布施し、悉く諸刹の行願に於て、亦た中に在つて止らず、大變化を極め、佛の樂ひ行ずる所の如き、心に一反念ずれば佛悉く前に在つて立ちたもふ、一切適に復た願せず、適に所生の處なく、十方の不可計の佛刹を悉く見、諸佛の所説の經を聞き、一一の佛比丘僧悉く見ん。是の時[86]仙道[87]羅漢辟支佛の眼を持つて視ず。是の間に於て終り、彼の間の佛刹に生じて、爾して乃ち見るにあらず。便ち是の間に於て坐して悉く諸佛を見、悉く諸佛所説の經を聞いて悉く皆な受けん。譬へば我が今、佛の前に於て面のあたり佛菩薩を見たてまつるが如く、是の如く未だ曾て佛を離れず、未だ曾て經を聞かずんばあらず。佛、颰陀和菩薩に告げたまはく、善いかな、善いかな、所問の者、安隱なる所多く、世間の人民に於て復た計るべからず。天上天下悉く之を安んず。今若能く佛に是の如きを問ふ。若乃ち前世過去の佛の時、所聞の[88]地行、功德を作すが致す所なり。若干の佛を供養し以て致す所なり。經の中に樂ふが致す所なり。道行を作して禁戒を守るが致す所なり。自ら法を守り、[89]淸白を行じて[90]煩濁ならず、輙ち[91]乞匃を以て自ら食し、多く諸の菩薩の合會を成就して諸の菩薩を[92]教語す。是れを用つての故に大慈哀を極め、一切の人民皆な[93]等心に於てす。時に隨つて佛を見んと欲すれば卽ち佛を見る。所願廣大甚深の行を極め常に佛の智慧を念じて悉く經戒を持ち、悉く佛[94]稱聖心を具足すること金剛の如くにして、悉く世間人民の心の所念を知り、悉く諸佛の前に在り。佛、颰陀和菩薩に告げたまはく、若の功德は以て復た計るべからず。佛の言はく、今、[95]現在佛悉在前立三昧、其れ是の三昧

の人。

【六六】識空、識とは心境に對して了別するに名づけ、識空とは理體の空寂なるを了知するを云ふ。

【六七】適念、已の念慮に適ふの意。

【六八】陀憐尼門 Dhāraṇī-mu-kha. 陀憐尼は異本に陀羅尼に作り、總持等と譯す。諸佛の教法義理を持して忘れざらしむるもの又呪をもいふ。之に種種あるが故に門といふ

【六九】師子 Simha. 獅子なり。

【七〇】本無、無とは全て存在を否定するをいひ、本無とは本來より無なるの義。

【七一】方幅、一本に方福に作る。

【七二】三處、身口意の三を指す。

【七三】本際。窮極の始修をいふ。

【七四】薩芸若、Sarva-jña. 一切智と譯す。

【七五】師子座、佛世尊の坐したふ所を尊稱して名づく。

【七六】善知識、善とは我れに益をたすに名づけ、善知識とは我を善導せしめる人の義。

【七七】厭極、飽き足る終極の意。

【七八】經藏、佛所説の經典を指す。

【七九】佛種、佛陀となる素質。

ひ來する所なく、亦た從ひ去る所なく、化の如く作る。過去當來今現在念ずること夢の中の如し。所有の分身悉く遍くして諸佛の刹に至る。日の水中を照して影悉く遍ねく見るるが如し。所念悉く響の如きを得、亦た來らず亦た去らず、生死は影の分るるが如し。便ち所想の[66]識室の如くにして、法の中に於て想なし。歸仰せざる者なく、一切平等にして異りあることなし。經の中に於て悉く知る。心計るべからず、一切の諸刹心著せず、[67]適念する所なく諸佛の刹を出でて、復た罣礙する所なく、悉く諸の[68]陀憐尼門に入り、諸經の中に於て一を聞いて萬を知らん。諸佛の所說の經悉く能く受持し、諸佛に侍して悉く諸佛力を得、悉く諸佛の威神を得、勇猛にして難る所ろなきの行步、猛[69]師子の如くにして畏るゝ所なからん。諸の國土に於て言を用ひざる者なく、聞く所の者未だ曾て忘るゝ時あらず、一切諸佛の議等しくして異あることなく、悉く[70]本無の經を了知して恐れず、諸經を得んと欲すれば便ち自ら知つて說くこと諸佛の如くにして、終に厭ふことなからん。世間の人の師となつては依附せざる者なく、其の行、[71]方幅にして諂僞あることなく、諸刹照明にして朗かに[72]三處に著せず。所行罣礙する所なく衆輩の中に於て適するところなく、[73]本際法の中に於て慕ふところなく、[74]薩芸若に於て、人を教へて佛道の中に入て未だ曾て恐怖せず、畏懼する時あることなからん。悉く佛の諸經所有の卷の所在を曉知し、衆會の中、福を蒙らずといふ者なく、佛の極大慈を見て歡喜し、學ぶ所の學、諸佛の經に通利し、大衆の中に於て畏るゝ所なく、大衆の中に於て能く過ぐる者のあることなからん。名聲極めて遠く、諸の疑難を破壞して解せざるなく、經の中に於て極めて尊く、[75]師子座の上に於て坐して自在に諸佛の法教の如く、悉く佛の萬種の語を曉知し、悉く萬億の音に入らん。諸佛の經を愛重し、常に念じて左右の側に在つて、未だ曾て諸佛の慈を離れずして、佛の經の中に於て樂て行ひ、常に佛に隨つて出入し、常に[76]善知識の邊に在りて[77]厭極ある時なからん。十方の諸佛の刹に於て適止する所なく、悉く願行を逮得して十方の萬民を度脫

【五一】須彌、Sumeru. 一小千世界の中・をなす山の名。
【五二】愚癡、心性闇鈍にして事理の法に迷ふをいふ。
【五三】端政姝好、其の所行に諸惡を作さず、正しき美事なる振舞。
【五四】自大、自から足るを知らざるの意。
【五五】興等、ともにひとしきの意。
【五六】本功德力、行者の本功德力、即ち行者自から他に善根を施せし果報に名づく。
【五七】所向、佛のいます彼方に向ふの意。
【五八】罣礙、前後右左上下障せられて進退途なきをいふ。
【五九】門閫、內外の區限として設ける門中の橛。
【六〇】瞋恚、三毒の一、恨み怒るの情をいふ。
【六一】弊意、意に邪念なきをいふ。
【六二】逮及、追ひ及ぶこと。
【六三】五蓋、五法ありて能く心性を蓋覆して、善法を生ぜざらしむ。一、貪慾蓋。二、瞋恚蓋。三、睡眠蓋。四、掉悔蓋、五、疑法蓋なり。
【六四】境界、自家勢力の及ぶ境土をいふ。
【六五】辟支佛、Pratyekabuddha. 緣覺、獨覺等と譯す。無佛世に出で小乘の悟を得る

し。[五七]所向を明きらむる力、所念を明きらむる力、所視を明きらむる力、所信を明むる力、所願を明むる力あらん。所問にあつて大海の如く減し盡くる時あることなきこと、月の盛んに滿る時の如くならん。悉く遍く照して明を感ぜざる者あることなきこと、日の初めて出づる時の如くならん。炬火のある所照、[五八]罣礙する所なきが如く、不著の心は虛空の如く、所止なきこと、金剛の鑽るに、所として入らずといふことなきが如くならん。安きこと須彌山の動くべからざるが如く、[五九]門閫の正しく住して堅きが如くならん。心軟なること鵠毛の如くにして、麁爽あることなからん。身に慕ふ所なく山川を樂ふこと野獸の如くならん。常に自ら守りて人に與して從事せず。若し沙門道人の多く敎授する所は皆護視す。若し輕く嬈す者のありとも、終ひに[六〇]瞋恚の心なく、一切の諸魔動すること能はざらん。諸の經を解して諸の慧の中に入り、諸佛の法を學んで、能く爲めに師と作る者のあることなからん。威力[六一]聖意能く動搖する者のあることなからん。深入の行常に行ずるところなく、常に柔軟にして經の中に於てし、常に悲んで、諸佛に承事し、厭ふことあることなからん。所行の種種の功德悉く[六二]逮及し、所行常に至り、所信常に政しく、能く亂る者のあることなからん。所行常に淨潔にして、事に臨んで能く決して難きことあることなからん。清淨にして智慧に於て悉く明かに、所樂の行を得て[六三]五蓋を盡さん。智慧の所行稍稍として成佛の[六四]境界を追ひ、諸の國土を莊嚴し、戒の中に於て淸淨にして阿羅漢[六五]辟支佛の心、作爲する所の者皆な究竟して所作の功德常に上首にあらん。人民に敎授するも亦た然ならん。菩薩の中に於て敎授する所、厭ふことあることなく、當に作す所の者の度、極りあることなく、一切の餘道、能く及ぶ者のあることならん。未だ嘗つて佛を離れずして、佛を見ず、常に諸佛を念ずること父母の如くにして異りなく、稍稍として諸佛の威神を得、悉く諸經を得ん。明眼の視る所罣礙する所なく、諸佛悉く前に在つて立ちたもふ。譬へば、幻師の自在に化作する所の諸法の如し。豫め計せず、念ずれば便ち法を成じ、亦た從

色究竟。
【三五】難頭 Nanda＝難陀。喜と譯す。
【三六】和難 Upananda＝跋難陀。近喜と譯す。
【三七】沙竭、Sāgara＝娑伽羅海と譯す。
【三八】摩雜斯 Manasvin＝摩那斯。具威と譯す。
【三九】阿耨達 Anavatapta＝阿那婆達多。無熱と譯す。
【四〇】阿須倫、阿羞倫、Asura.＝阿修羅、八部衆の第五位、十界の第四位に數へらる。
【四一】比丘尼、Bhikṣuṇī. 出家せる女。
【四二】優婆塞、Upāsaka.在家の男。
【四三】優婆夷、Upāsikā.在家の女。
【四四】閱叉、Yakṣa＝夜叉 八部衆の第三位に數へらる。
【四五】迦樓羅、Garuḍa. 八部衆の第六位に數へらる。
【四六】甄多羅、Kiṃnara＝緊那羅、八部衆の第七位に數へらる。
【四七】摩睺勒、Mahoraga.＝摩睺羅伽、八部衆の第八位に數へらる。
【四八】叉手長跪、敬禮の一。
【四九】天中天、佛の尊稱。
【五〇】三昧、Samādhi.定等と譯す。心を一處に留めて動ぜしめざる狀態。

[三五]難頭、[三六]和難龍王、[三七]沙竭龍王、[三八]摩難斯龍王、[三九]阿耨達龍王、各各に若干の龍王億億百千萬と倶に佛所に來到して、前みて佛の爲めに禮を作し、却つて一面に住す。四面の[四〇]阿須倫王、各若干の阿羞倫民億億百千萬と倶に佛所に來到して、前みて佛の爲めに禮を作し、却つて一面に住す。時に諸の比丘、[四一]比丘尼、[四二]優婆塞、[四三]優婆夷、諸の天、諸の龍、諸の阿羞倫民、諸の[四四]閱叉鬼神、諸の[四五]迦樓羅鬼神、諸の[四六]甄多羅鬼神、諸の[四七]摩睺勒鬼神、諸の人非人、無央數都て計るべからず。颰陀和菩薩、座より起つて衣服を正し、[四八]叉手長跪して佛に白して言さく、願はくば問ふところあらんと欲す。既に問へるものは因るところあらんを欲するが故なり。[四九]天中天我が言を聽したまはば、今當に佛に問ひたてまつるべし。佛、颰陀和菩薩に告げたまはく、因る所の故あらば、便ち問へ、佛、當に汝が爲めに之れを說くべし。颰陀和菩薩、佛に問ふて曰はく、菩薩、當に何等の[五〇]三昧を作してか、得る所の智慧大海の如く、[五一]須彌山の如くにして、聞くところの者の疑はず、終に人中の將を失はず、自ら成佛を致して終に還らず、終に[五二]愚癡の處に生ぜず、豫め去來の事を知り、未だ曾て佛を離るゝ時あらず。若しは夢中に於ても亦佛を離れず、[五三]端政姝好にして衆の中に於て顏色比ひなく、少小より常に尊貴貴大姓の家に在つて生れん。若しは其の父母兄弟宗親知識の敬愛せざる者なく、高才廣博にして議作する所の者は衆と絕異たらん。自ら節度を守り、常に內に慚づる色あつて、終に[五四]自大ならずして、常に慈愛有つて智慮通達し、智の中に於て明かにして[五五]與等の者のあることなく、威神無比に、精進及び難く、諸經の中に入らん。多く諸經の中に入りて、諸經の中、解せざるものなからん。安樂にして禪に入り、定に入り、空に入り、想なく、所著なからん。是の三事の中に於て恐れず、多く人の爲めに經を說き、便ち隨つて之を護らん。生ぜんと欲する所にありては、何れの所にも自ら恣（ほしいまま）にして、[五六]本功德力に異ることなからん。所信の力多くして、至り到る所の處、その筋力强く、欲愛の力ならずといふことなく、根の力あらずといふことな

羅達多。仁授と譯す。
【二〇】 波羅斯、Vārāṇasī = 波羅奈。
【二一】 須深 Sandhi (?). 西藏譯 Mtshams-bzad.
【二二】 加羅衞 Kapilavastu = 迦惟羅衞。
【二三】 摩訶須薩和 Mahāsārthavāha 西藏譯 ded-dpon-chen-po. 大乘商主と譯す。
【二四】 阿難邠坻迦羅越、Anāthapiṇḍadagṛhapati. 給孤獨長者。西藏譯 Khyim-bdag mgon-med-zas-sbyin.
【二五】 因坻達、Indradatta (?) 西藏譯 dbaṅ-bos-byin.
【二六】 鳩睒彌、Kauśāmbī = 憍睒彌。
【二七】 和輪調、vārideva (?) 水大と譯す。西藏譯 Chu-lha
【二八】 沙祇、Sāketa (?) 西藏譯 Gnas-bcas.
【二九】 阿闍世、Ajātaśatru. 未生怨と譯す。
【三〇】 四天王、須彌山腹に住する持國天王、增上天王、廣目天王及び多聞天王。
【三一】 釋提桓因、Śakradevendra. 能大主と譯す。三十三天主。
【三二】 梵三鉢、Brahmasahāmpati. 梵天王。
【三三】 摩夷亘 Maheśvara 大自在天。
【三四】 阿迦膩吒、Akaniṣṭha

般舟三昧經（一に十方現在佛悉在前立定經と名づく。）

卷の上

後漢月氏の三藏支婁迦識譯す

[一]問事品　第一

佛、[二]羅閱祇[三]摩訶桓[四]迦憐に在しき。[五]摩訶比丘僧五百人、皆な[六]阿羅漢を得たり。獨り[七]阿難未だし。爾の時に[八]菩薩あり、[九]颰陀和と名づく。五百の菩薩と倶なりき。皆な[一〇]五戒を持てり。[一一]晡時に佛所に至り、前みて頭面を以て佛足に著け、却つて一面に坐す。幷びに五百の[一二]沙門と倶に佛所に至り、前みて佛の爲めに禮を作し、却つて一面に坐す。時に佛、[一三]威神を放ち玉ふ。諸の比丘遠方に在る所のものも來らざる者なし。即時に、十萬の比丘、倶に相ひ隨つて佛所に來會し、前みて佛の爲めに禮を作し却つて一面に坐す。佛、復た威神を放ち玉ふ。[一四]摩訶波和提比丘尼、三萬の比丘尼と倶に相ひ隨つて佛所に至り、前みて佛の爲めに禮を作し、却つて一面に坐す。佛、復た威神を放ち玉ふ、[一五]羅隣那竭菩薩は[一六]舍衛隨梨大國より出で、[一七]橋日菩薩は[一八]占波大國より出で丶、[一九]那羅達菩薩は[二〇]波羅斯大國より出で、[二一]須深菩薩は[二二]加羅衞大國より出で、[二三]摩訶須薩和菩薩と[二四]阿難邠坻迦羅越とは倶に舍衞大國より出で、[二五]因坻達菩薩は[二六]鳩睒彌大國より出で、[二七]和輪調菩薩は[二八]沙祇大國より出づ。一一の菩薩、各二萬八千人と倶に佛所に來到して前みて佛の爲めに禮を作し、皆却つて一面に坐す。羅閱祇の王[二九]阿闍世、十萬人と倶に佛所に來到して、前みて佛の爲めに禮を作し、却つて一面に坐す。[三〇]四天王、[三一]釋提桓因、[三二]梵三鉢、[三三]摩夷亘天、[三四]阿迦貳吒天、各各に若干億億の百千の天子と倶に佛所に到來し、前みて佛の爲めに禮を作し、却つて一面に住す。

【一】問事品、賢護分の思惟品第一に相當す。
【二】羅閱祇 Rājagṛha.＝王舍城。
【三】摩訶桓、原音不詳。竹林精舍＝迦蘭陀。
【四】迦隣、Kalanda. なり。
【五】摩訶比丘、Mahā-bhikṣu 大比丘、出家せる僧をいふ。
【六】阿羅漢、Arhat. 小乘の悟を極めたる位。
【七】阿難、Ānanda. 佛十大弟子の一人。
【八】菩薩、Bodhisattva. 菩提を求むる人。
【九】颰陀和、Bhadrapāla. 賢護と譯す。此の經の對告衆。
【一〇】五戒、不殺、不盜、不邪淫、不妄語、不飮酒。
【一一】晡時、日暮れ時。
【一二】沙門、Śramaṇa. 出家の總名。
【一三】威神、威勢の測り難きをいふ。
【一四】摩訶波和提、Mahāprajāpatī＝摩訶波闍波提、佛の夷母。
【一五】羅隣那竭 Ratnākara 寶生と譯す。
【一六】舍衞隨梨、Vaiśāli＝毘耶離、毘舍離。
【一七】橋日兜、隋壽星藏。西藏譯 Phussbus
【一八】占波、Campā＝瞻波。
【一九】那羅達、Nara datta＝那

るのでもなく、此に命終して彼の佛刹に生れるのでもなく、卽ち此の處に坐して阿彌陀佛を見、その所說の經を聞くのである。譬へば羅閱祇國の人が墮舍利國に某々と名づける婬女のあることを聞きて之を思念し、遂に夢中に彼の婬女の所に到つて共に棲宿するが如く、今阿彌陀佛が西方須摩提國に在まし、多くの菩薩衆の中に於て現に說法されつゝあると聞き、たゞ一心に之れを念ずれば、彼佛を見ることが出來ると說いてある。これは般舟三昧の法に依れば、定中に於て阿彌陀佛を見ることが出來るのであるが、然し實際には單に阿彌陀佛のみでなく、十方いづれの佛でも皆此法に依れば悉く見ることが出來るのである。そのことは經中に現に說かれてあり、亦般舟三昧を十方現在佛悉在前立定と譯してゐるのに見ても明かである。されば阿彌陀佛は單なる一例として擧げられたに過ぎぬといはなければならぬが、然し他の阿閦等を擧げず、獨り西方阿彌陀佛を擧げて來たのは、此の經の作者が彌陀崇拜者であつた爲か、或は此の經が彌陀信仰の行はれた地方に於て編纂された爲かであらうとおもふ。兎に角、此の經に於て阿彌陀佛が、たとひ簡單なる記事にもせよ、敍述されてゐるのは頗る注目を要すべき事で、恐らくその記事は現存彌陀關係の文獻中、最古のものであらう。

（淨土敎起源及發達の一節）

附記

此の經の梵本は中央亞細亞から發見された零片のみが世に紹介されてゐる。それは Upright Gupta 文字で記された紙本で、第二十八葉の一葉であつて漢譯の擁護品の長行の後半と偈頌の大部分に相當する(R. Hoernle: Manuscript Remains of Buddhist Literature, Vol. I. p. 88ff.)又西藏譯は Ḥphags-pada-ltar-gyi saṅs-rgyas mṅon sum-du bshugs-paḥi tiṅ-ṅe-ḥdsin ces-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo (Skt. Ārya-pratyutpanna-buddhasaṃmukhāvasthitasamādhi nāma mahāyānasūtra)と題し、ナルタン版甘殊爾諸經部 Tha 函、北京版の Du 函、デリケ版の Na 函に存し、Śākyaprabha 及び Ratnarakṣita の譯出にかゝり、七卷二十五章より成る(河口氏譯ナルタン版甘殊目錄 p. 64, 大谷大學甘殊爾勘同目錄 p. 299 ff.)本國譯註の西藏名等はナルタン版に據る。

昭和八年十二月一日

譯者　望月信亨　識

承用せず。然る後亂世の時、國々相伐つ、この時に於てこの三昧は當に復た閻浮利の內に現ずべしといふの說をかゝげ、大集經賢護分にも、我が滅度の後、この三昧經は閻浮提に於て四十年中廣く世に行はれ、而して後五百年末一百歲中、正法滅せんとする時、比丘の惡を行ずる時、誹謗正法の時、正法破壞の時、持戒損減の時、破戒熾盛の時、諸國相伐つ時、この際に當りて衆生の熾然たる善根ある者この經を得ん。故に此の三昧典は復當に閻浮提に於て流行すべしと豫言されたとして居る。これは般舟三昧經は佛滅四十五年間世に行はれ、その後は隱沒して現はれないが、五百年末一百歲中に至り、諸國相伐ち正法滅せんとする時、再び世に出現するといふ意味で、卽ち此の經の編纂年代を自ら暗示したものと見るべきである。就中、五十年末一百歲中といふのは、恐らく佛滅第五百年の意味で、卽ち四百一年より五百年に至るまでをいふのであらう。又亂世の時諸國相伐つといふのは、孔雀王朝 Mauryadynasty 衰亡の後、希臘の植民地たるバクトリヤ Bactria は次第に南方に擴がり、特にデメトリヲス Demetrios 王は、小亞細亞のユークラチデス Eucratides 王の爲に逐はれて、漸次印度內地に侵入し、尋いで又塞迦族及び大月氏族の侵入によりて諸國互に攻伐を事とし、西曆紀元前一世紀頃より印度はさながら亂麻の如き形勢に在つたことを指すのであらうかと思ふ。若し然りとすれば其の年代は佛滅第五百年中に相當し、彼の五百年末一百歲中の語にも合する樣である。而して此の時に於て此の三昧典が世に出現したとすれば、卽ち般舟三昧經は西曆紀元前一世紀頃に始めて編纂されたものと見ることが出來る。但し涅槃經第六にも之と同一の記事をかゝげてゐるけれど、これは恐らく今の般舟經の說を轉用したので、それに依りて彼の經の成立年代を推定すべきではないのである。

　蓋し此の經は般舟三昧見佛の法を說いたもので、恐らく大乘經典中、最も早く成立したものゝ一であらうと思ふ。般舟 Pratyutpanna とは、對して近く立つといふ意味で、卽ち是の三昧を得れば十方の諸佛が悉く其の前に在りて近く立つのを見ることが出來るといふのである。三卷經の行品に依ると、比丘比丘尼優婆塞優婆夷があり、戒を完全に持ち、閑居に獨居して一心に西方阿彌陀佛を念じ、若しは一晝夜、乃至若しは七日七夜すれば、阿彌陀佛を見ることが出來る。若し覺時に於て之れを見ることの出來ない者は、夢中に於て之れを見ることが出來る。但し見るといつても天眼を以て徹視するのでなく、聞くといつても天耳を以て徹聽するのでなく、又神足を以てその佛刹に至

のであるから、此本は法護譯でもないとせなければならぬ。出三藏記集第四失譯雜經錄に般舟三昧念佛章一卷といふのがあるが、或はそれに當るのかも知れぬ。

又現藏中に拔陂菩薩經並に大方等大集經賢護分といふのがあるが、これも般舟三昧經の異譯である。拔陂菩薩經は一卷で、章品を分たず、譯者の名も傳つて居らぬ。出三藏記集第三安公古異經錄にかゝぐる颰披陀菩薩經が卽ちそれであつて、苻秦以前の古典なることは明かである。大集經賢護分は五卷十七品の經で、隋闍那崛多の譯したものである。されば般舟三昧經はすべて四本現在するわけであるが、その中、大集經賢護分は翻譯の年代からいつても、內容及び章品の開廢からいつても、最も新しいものである事は疑を容れぬ。他の三本中、普通の例を以てすれば、拔陂菩薩經が最も古く、一卷經が之れに次ぎ、三卷經は更に其の後に至つて增廣されたと見るべきである。三卷經を一卷經以前の成立とする說もあるが、然し普通の例を破る程の有力なる論證もない樣である。就中、拔陂菩薩經には章品が分つてないけれど、その內容を一卷經の八品に對照して見ると、初の問事、行、四事及び譬喩の四品に合するやうである。されば般舟三昧經は最初は唯問事等の四品の內容を有し、それが次いで八品經となり、更に亦三卷十六品經となつたと見なければならぬ。而して其の三卷十六品經が、上に述べた如く西紀一七九年に支讖に依りて支那に翻傳されたとすれば、彼の四品の拔陂菩薩經は、それより少くとも一百年以前に編纂されたとすべきである。のみならず道行般若經は今の三卷經と同年に支讖に依りて譯出されたものであるが、然るに彼經第九薩陀波倫菩薩品に、薩陀波倫 Sadāprarudita 菩薩が化佛の敎を聞いて歡喜踊躍し、見十方諸佛三昧を得て、十方諸佛の讃言を蒙つたことを記し、又その連文に、佛の從來する所なく、亦到り去る所なきことを說いてゐる。此等は疑ひもなく般舟三昧經の說を指したのであるから、此經は亦卽ち道行般若經の以前に存したものといはなければならぬ。但し道行般若三十品中、初の二十五品、卽ち累敎品に至る迄は其の成立が古く、第二十六品以下、卽ち薩陀波倫品の如きは比較的後代の附加と見るべきものであるが、それにしても支讖の譯本中に既に薩陀波倫品が置かれてある以上、般舟三昧經が彼經以前に世に行はれてゐたことは明かとすべきである。

又三卷般舟三昧經卷中授決品には佛の懸記として、我れ般泥洹の後、この三昧は當に現在すること四十歲なるべく、その後復現ぜざるべし。却後亂世に佛經まさに斷ぜんとする時、諸の比丘は佛敎を

般舟三昧經解題

般舟三昧經は、般舟三昧 Pratyutpanna-samādhi の法を行ずることを以て淨土の生因たる事を明す者にして、其の內容に就いては本文を讀めば明かな事であるから、此處には其の成立傳譯に就いて述べて見やう。此の經は後漢靈帝光和二年(西紀一七九)に始めて支那に翻傳されたもので、漢譯大乘經中最古のもの丶一に數へられるのである。開元釋敎錄第一には、後漢支婁迦讖の條に二部の般舟三昧を出し、一本を三卷、一本を一卷とし、又別に竺佛朔の條に般舟三昧經二卷をかゝげ、共に靈帝光和二年の譯出として居る。然るに出三藏記集第二には、唯支讖の下に般舟三昧經一卷（宋元明三本には二卷）をかゝげ、光和二年十月八日出と註するのみで、他の二部の事は何等記述して居らぬ。就中竺佛朔に關しては、出三藏記集第七所載の般舟三昧經記に、「般舟三昧經、光和二年十月八日天竺菩薩竺佛朔於洛陽出。菩薩法護時傳言者、月支菩薩支讖授與」と記し、又同第十三にも之と同樣の記事をかゝげてゐるから、彼れが般舟三昧經の譯出に關係があつたことは明かとすべきである。さりながらこれは支讖と共譯したといふべき者で、支讖が竺佛朔の譯經の傳言者であつた外に、別に又同年同月に同一經を譯出するわけもなからう。されば開元錄の記事は誤謬であり、隨つて支讖は竺佛朔と協力して唯一本の般舟三昧經を翻傳したものと見なければならぬ。然るに現藏中に般舟三昧經と題する經が二部あり、一本は三卷十六品、一本は一卷八品で、共に支婁迦讖となつて居る。果して支讖に重譯の事實がないとすれば、其の何れかゞ彼れの譯出でない事になる。仍て、その譯語を檢して見ると、三卷經にかゝぐる泥洹、恒邊沙、釋迦文、閱叉、並に阿惟三佛、怛薩阿竭阿羅訶三耶三佛、阿須倫、眞陀羅、摩睺勒等の諸語は、支讖譯の道行般若經と同一であり、且つ出三藏記集第二に支讖の經は舊錄に大般舟三昧經と云ふと記してゐるから、かた〴〵此の三卷經は支婁迦讖の譯と推定されるのである。一卷般舟經は何人の譯か。出三藏記集第二以下諸錄に、西晉竺法護も般舟三昧經二卷を譯した事を傳へてゐるので、法護譯の光讚般若經並に正法華經等と、この一卷經の譯語とを對稱して見ると、正法華經等には、泥洹、江河沙、閱叉、摩休勒等の譯語を使用してゐるのに、一卷經には、涅槃、恒河沙、夜叉、摩睺羅等の語を用ひてゐる。且つ卷數も合はない

乘に墮ちず、九には常に大慈大悲大方便力を以て、衆生を成熟す。十には常に勝願を發す。十一には乃至菩提まで、常に如上の等法を離れず。十二には速に能く六波羅蜜を滿足す。十三には阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ず。若し受持し、書寫し、讀誦し、他の爲に解說し、如說に此の月藏法門を修行するもの有らば、功德、前の所說の如し」と。

是の語を作したまふ時、月藏菩薩摩訶薩、尊者阿若憍陳如、及び一切諸の來れる大衆・天人・阿修羅・乾闥婆等の一切衆生に於て、佛の所說を聞き、皆悉く歡喜し頂戴し奉行せり。[一三九]

大方等大集經卷第五十六（終）

月藏分法滅盡品第二十

【一三九】正倉院聖語藏天平寫經本には「皇后藤原氏光明子奉爲尊考贈正一位太政大臣府君尊妣贈從一位橘氏太夫人敬寫一切經論及律莊嚴既了、伏願憑斯勝因奉資冥助永庇菩提之樹長遊般若之津又願上奉聖朝恒延福壽下及寮采共盡忠節又光明子自發誓言弘濟沈淪勤除煩障妙窮諸法早契菩提乃至傳燈無窮流布天下聞名持卷獲福消災一切迷方會歸覺路天平十二年五月一日記 天平勝寶七歲十月十七日正八位下守少內記林連廣野正大安寺沙門琳𤳖讀沙門敬明沙門玄藏沙門環忍沙門行脩證」の百九十四字の奥書あり。

[133]三菩提因を作す。我れ今、諸の衆生を憐愍するが故に此の報果を以て分つて三分と作す。一分を留めて自ら受け、第二分は我れの滅後に於ける、禪解脫三昧、堅固相應の聲聞に與へて乏しき所無からしむ。第三分は、彼の破戒と讀誦經典と相應せる聲聞、正法・[134]像法の剃頭して袈裟を著くる者に與へて乏しき所無らしむ。彌勒よ。我れ今復三業相應の諸聲聞衆・[135]比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を以て汝の手に寄付す。乏少・孤獨にして終らしむること勿れ。及び正法・像法の毀破・禁戒にして袈裟を著くる者を以て、汝の手に寄付す。彼等諸の資具に於て乏少にして終らしむること勿れ。我れ今、復、彼の諸の旃陀羅王をして共に相惱害し身心に苦を受けしむること有らしむる勿れ。我れ今、有らゆる器非器を以て、我が爲に、出家して供養せる者は、施主を以て、汝の手に寄付す。我れ今、有らゆる器非器を以て、我が爲に、出家して供養せる者は、汝等も亦當に護持し養育すべし。彌勒よ。若し現在及び未來世に於て[136]此の法門を讀踊し受持する者は、彼等當に十種の淸淨功德を得べし。何等をか十と爲す。身淸淨なるが故に、殺生を離れ、偷盜を離れ、邪行を離る。口淸淨なるが故に、不妄語・不惡口・不兩舌・不綺語なり。心淸淨なるが故に、貪欲を離れ、瞋恚を離れ、邪見を離る。是を十と爲す。是れより以後百千萬生、常に是の如き十種の淸淨なる功德を得。若し至心有つて[137]此の法門を聽く者は、是の人、如實際に住して八種の淸淨功德を得、何等をか八と爲す。一には長壽、二には端正、三には富貴、四には名稱、五には常に諸天守護を爲し、六には所須常に乏しき所無く、七には諸の業障盡く。八には命終らんと欲する時、十方の佛及び諸の大衆有りて大光明を放つて、其の眼目を照し、其の人をして見せしめ、善處に生ずるを得て、百千萬生に於て、常に是の如き八種の功德を得ん。[138]我れ今更に復略し、是の人に說かん。當に十三種の淸淨功德を得べし。何をか十三と謂ふ。一には生死流轉終り、更に顚倒して惡見を起さず。二には五濁無佛の國土に生れず。三には常に見佛を得。四には常に正法を聞き、五には常に衆僧を供養するを得、六には善知識に値ひ、七には常に六波羅蜜と與に相應す。八には小

【一三三】三菩提因。Sambodhi 卽ち正等覺の原因。

【一三四】像法。正像末三時の一。像は似の意、正法に似たる佛法の行はるゝ一千年の期間をいふ。

【一三五】比丘・比丘・優婆塞・優婆夷は四衆なり。

【一三六】本經讀誦者の十種の淸淨功德。卽ち十善業道を得ること。

【一三七】本經聽聞者の八種の淸淨功德。

【一三八】更に十三種の淸淨功德を擧ぐ。

を雨す有り。碎毘琉璃を雨すあり。碎破梨を雨すあり。赤眞珠を雨すあり。碎碼瑙を雨すあり。碎車𤦲を雨す有り、[三二]龍蛇の愛重する所の者の碎栴檀香を雨す有り、牛頭栴檀香を雨す有り。多摩羅跋香を雨す有り。黑堅沉水香を雨す有り。種種なる衆妙の寶花を雨す有り。七寶蓋・七寶幢・七寶幡・金縷・眞珠・瓔珞・環釧を雨す有り。劫波如意寶樹を持する有り。寶衣樹を持する有り。寶花樹を持する有り、寶器樹を持する有り。寶香樹を持する有りて、世尊を供養したてまつる。復菩薩有りて娑婆土に於ける有らゆる樹林・花葉・果果・一切の草木七寶に變成して佛を供養したてまつる。復、菩薩有りて、娑婆土に於ける一切の有らゆる山石・塼瓦を變じて七寶と成して佛を供養したてまつる。復菩薩有りて娑婆土に於ける、一切の有らゆる大地界分を變じて、微妙なる諸天の寶香と爲して佛を供養したてまつる。一切衆生の地に依つて住する者、彼等七日七夜、身心快樂なること、猶し諸天の若し。復菩薩有りて娑婆土に於ける、一切の有らゆる大水界分を變じて、諸天の第一微妙甘露美味と爲す、香潔醇具り、水界の衆生、七日七夜身心快樂なること猶し諸天の若し。復、菩薩有りて、一切の風を以て變じ、微妙淸淨なる香風と爲りて佛を供養したてまつる。三惡道に於ける、有らゆる衆生、一切餘すこと無く、香風に觸るゝ故に七日七夜身心快樂なること猶し諸天の若し。爾の時、上は[三三]阿迦膩吒天に至り、下は四天王身天、及び諸の天女に至るまで、一切餘すこと無く、種種微妙なる音聲を以て、世尊を讃歎したまへり。復種種なる歌舞音樂を以て、佛を供養したてまつる。一切の夜叉、一切の羅刹、一切の鳩槃茶、一切の乾闥婆、一切の阿修羅、一切の緊那羅、餓鬼、毘舍遮、富單那、迦吒富單那、人非人等、彼等一切の力の堪ふる所に隨ひて、種種の讃歎を作し、乃至種種に世尊を供養したてまつれり。

爾の時、世尊、上首彌勒、及び賢劫中の一切の菩薩摩訶薩に告げて言はく、「諸の善男子よ、我れ昔、菩薩道を行ぜし時、曾て過去の諸佛如來に於て、是の供養を作せり、此の善根を以て、我と與に

【三二】牛頭栴檀香。梵 Gośīrṣaka-candana 栴檀は香樹の名。牛頭山より出づるを以て此の名あり。

【三三】阿迦膩吒天。梵 Akaniṣṭha 色究竟天のこと。色界第十八の最上天にして形體を有する天處の究竟所天なり。

以て種種に勤修し、布施を行ひ、一切菩薩道に於ける、最勝行を修し、一切諸の衆生を成熟せり。故に最勝の願を發し、清淨國を捨て、此の五濁の衆苦の世界に至り、阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成じたまへり。大慈悲の因緣力を以ての故に[二九]無間業を爲し、正法を誹謗し、賢聖を毀訾し、一切の不善惡業・纏縛・十方一切の清淨佛土の所棄の衆生、諸の煩惱の所縛と爲る者、是の如き諸の衆生を成熟せるが故に、此の娑婆世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切の菩薩道に於て、最勝行を修す。是人、今[三〇]五濁世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成じたまへり。此の無間業の諸の衆生等は種種に罵辱し、如來を誹謗し、輕賤し毀訾し、勤加して逼惱す。彼等は嫉妬の因緣を以ての故に、種種の方便心にて殺害せんと欲し、復種種なる兵杖・刀箭・矟鉾・鉞斧を以て大石山を崩し、毒藥・水火や復、狂象・獅子・虎豹・惡牛・惡狗を放ち、勤めて佛に加す害せんとす。

爾の時、如來は猶し彼等諸の衆生所に於て、大慈悲を以て、哀憐し覆護すること、父母の其の一子を視るに踰たり。諸の苦海に於て方便して拔濟せり。是を以て今佛なる釋迦如來は十方の佛土に於て、名稱普く聞ゆ、今復此の諸の衆生の爲の故に、一切法を以て、天龍、諸鬼神に付囑し、法眼をして久しく住し熾然たらしむ。復衆生の爲に第三分壽を捨て、亦法眼をして久しく住して熾然たらしむ。一切の聲聞の器・非器を以て、及び諸の剃頭して袈裟を著ける者、護持の爲の故に、惱害せざるが、故に三精氣を增長する故に、是を以て釋迦如來は、此に於て十方一切の佛土の一切の如來、一切の菩薩摩訶薩、一切の大智は、諸の天人所に於て、極めて名稱を得て、十方に充滿す。是の故に一切の諸の來れる菩薩摩訶薩等、各相與に力の堪ふる所に隨ひ、皆第一最上の供具を設け、如來に供養し、尊重し恭敬せり」と。

爾の時、一切諸の來れる大衆、菩薩摩訶薩等、座より起ちて、口眼微笑し、彼の諸の菩薩此の娑婆世界に於て、遍く種種資の供養具を雨らして、世尊を供養したてまつる。碎金を雨す有り。碎銀

【二九】無間業。四十六卷脚註六五を見よ。
【三〇】五濁世界。五濁惡世に同じ。四十八卷脚註三一を見よ。

此の所に在つて來れる者、大衆も亦與にせんことを欲せよ」と。

爾の時、世尊、正法をして久しく住するを得せしめん爲の故に、[一二四]大陀羅尼呪を說きたまへり。

哆地夜他一　阿婆牟寄二　婆牟寄三　質関牟寄四　佉羅牟寄五　遮羅麼兮六　阿兮七　阿兮八　達曬婆帝九　摩呵地唎滯一〇　悉犹婆羅兮一一　闍迦利一二　磨什婆皴一三　達曬牟駛一四　能伽咩什婆皴一五　什婆曬摩浡婆波一六　蘇婆呵一七。

爾の時、世尊、此の金剛堅固深密解脫味體陀羅尼の句を說きたまひし時、此の三千大千世界は遍く[一二五]六種に震動し、天は花雨を降らし、一切の樂器は鼓せずして自ら鳴り、諸の來れる大衆は大地に遍滿し、皆悉く悲泣し流淚し讃歎して、是の言を作さく、「釋迦牟尼如來應正遍知は、甚だ奇特未曾有の法を爲したまひ、大悲具足し、彼の衆生に隨つて成熟を爲したまへるが故に、未來の法を安置し、顯現したまへるが故に、第三分壽を捨てたまへり」と。是の語を說きし時、在會の衆生の煩惱身に依る者は、心に敬信を得、盡虛空量の諸衆生等の未だ無上菩提心を發さざる者は、皆悉く發心し、九十二那由他の衆生は[一二六]柔順忍を得、八那由他の衆生は[一二七]首楞嚴三昧・聖燈三昧を得、十萬の諸夜叉は[一二八]四眞諦を見、二千の菩薩は、共行測量毘尼三昧を得、六十四百千の阿修羅は殊勝行那羅延三昧を得、八那由他百千の諸天は清淨行三昧を得、三十那由他百千の鳩槃荼は勝幢上燈三昧を得、二十那由他百千の諸の龍は不斯焚力行三昧を得、二萬の比丘は諸の有漏を盡し、心に解脫を得たり」と。

爾の時、智炬童眞菩薩摩訶薩、文殊師利菩薩摩訶薩に白して言さく、「了知淸淨士よ、此の釋迦牟尼如來を觀ずるに、大名稱を以て、十方諸佛の國土に充滿せり。云何んが充滿するや。謂ゆる釋迦牟尼佛、初發心より、阿耨多羅三藐三菩提を求めて已來、一切衆生に於て、平等に安置し、福田心を

【一二四】金剛堅固深密解脫味體陀羅尼。

【一二五】六種震動。四十六卷脚註六九を見よ。

【一二六】柔順忍。前註出。

【一二七】首楞嚴三昧。前註出。

【一二八】四眞諦。四聖諦のこと。前註出。

罵辱せる有れば則ち我れを毀辱すると爲す。是の人の心正法の大明燈を滅さんと欲するが故に、器・非器の爲に壽の第三分を捨て、衆の安樂を得ん爲に、諸の天人を饒益す。我れ昔苦行を行じ、諸の衆生の爲の故に、已れ自身の樂を捨て、法をして久しく熾然せしむ。我れ昔身命を捨て、諸の病人の爲の故に、亦貧しき衆生の爲に法をして久しく熾然せしむ。我れ昔、菩提の爲に、財及び妻子、寶象馬、車乘を捨て、法をして久しく熾然せしむ。我れ昔、諸佛・緣覺及び聲聞・父母諸の師長に供へ、法をして久しく熾然せしむ。菩提を聞かん爲の故に無量の阿僧祇に備に種種の苦を受け、法をして久しく熾然せしむ。我れ戒律儀を修し、長夜常に勤行し、十方の佛、證と爲り、法をして熾然せしむ。我れ昔、常に忍辱し、諸の惡衆生を忍び、衆の爲に煩惱を除き、法をして久しく熾然たらしむ。我れ昔、勤めて精進し堅固にして常に他を伏し、諸の衆生を度脫し、法をして久しく熾然せしむ。我れ禪解脫を修し、[二一]無色三摩提、恒沙にして數ふべからず、法をして久しく熾然せしむ。我れ昔、般若の爲に、閑林に住在し、無量の論を演說し、法をして久しく熾然せしむ。我れ昔、常に憐愍して己の身血肉を捨て、及び身の支節を捨て、法眼を增長せんと爲す。我れ惡衆生を愍み、慈を以て成熟し、三乘を安置し、正法施を增長す。我れ昔、智方便して、諸の惡見を度脫し、正慧を安置し、法雨をして絕えざらしむ。我れ昔[二二]四攝を以て、諸の衆生を救度す、惡煩惱の火を滅し、[二三]四衆をして久しく住せしむ。我れ昔外道の諸の惡邪見網を除き、正路に安置す。四衆供養を得、彼れ我れの爲に命を捨て、慈愍にして衆生を度し、世間をして闇からしめず。歸趣する所有らしむ。是の如く後時に於て、法をして壞れざらしめんと欲す。是の故に法眼を囑し、諸の衆生を饒益す。我が滅度の後に於て、菩薩餘方に向ひ、一切賢聖の法を滅壞せざらしめんと欲する爲の故に、我れ今呪を說き　法をして久しく熾然せしむ。金剛密にして無缺なるは、解脫味の所依たり。有らゆる十方の佛、當に我が與に說かんと欲すべし。

【二一】無色三摩提。無色界 Arūpa-dhātu の禪定のこと。

【二二】四攝。四十六卷脚註八七を見よ。

【二三】四衆。四十六卷脚註四〇を見よ。

白し已つて、亦皆默然として住す。一切說く者無し。王・諸の比丘に白す。法を知らさる可きや。語り已つて袈裟白くして染色復現はれず。牀より皆隕落す。宛轉して地に在り。咸く皆、佛の言に稱ふ。佛の法寶隱沒し、鬚・髮・爪皆長く、諸法も亦忘失す。時に當り虛空中に大聲あり、地を震ふ。一切皆遍く動き、猶し水上の輪の如し。城壁碎け落下し、屋宇悉く圮圻し、樹林の根・枝葉・花葉・果藥盡く。唯だ[一一七]淨居天を除き、欲界の一切處の七味三精氣、損減して餘り有ること無し。解脫の諸善論、時に當つて一切盡く。生ずる所の花・果味、希少にして美ならず、諸有井・泉・池、一切盡く枯涸す。土地悉く鹹鹵、剖裂し丘澗を成す。諸山皆焦然し、天龍雨を降らさず、苗稼皆枯死し、甘蔗・劫貝藥の生ずる者皆死盡す。餘の草更に生えず、雨土皆昏闇たり。日月明かに現れず、四方皆亢旱し、數諸惡瑞現れ、[一一八]十不善業道、貪・瞋・癡いよいよ倍增し、衆生は父母に於て之れを見ること麞鹿の如し。衆生及び壽命・色力・威樂減じ、人天の樂を遠離し、皆悉く惡道に墮つ。是の如く不善業の惡王・惡比丘・我が正法を毀壞し、天人道を損減し、諸天・善神王の衆生を悲愍する者は、此の濁惡の國を棄て、皆悉く餘方に向ふ。先の佛の作さざる者、我れ今衆生の爲に、身・壽命を棄捨し、三精氣を增さん爲に衆生を悲愍す。故に壽の第三分を捨て、我が法海をして滿たしめ、諸の天人を洗浴す。過去の諸の如來、壽に依つて滅度したまへり。彼れ七日の後に於て、正法皆隱沒す。今我れ涅槃の後、[一一九]正法五百年在りて世間に住在し、衆生の煩惱盡き、精進して諸菩薩六度を滿ずるを得。行者速かに能く無漏安隱城に入る。像法世に住すること限滿[一二〇]一千年、剃頭して袈裟を著し、持戒、及び毀禁、天人の供養する所常に乏しき所無らしむ。是の如く彼れを供養すれば則ち我れを供養すと爲す。若し我が法の爲に、歸依して剃頭し、身に袈裟衣を著くる有れば、彼に說かん。是れ我が子なり、假使へ禁戒を破るも悉く不退地に住す。若し彼れを撾打する有れば則ち我が身を打つと爲す。若し彼れを

【一一七】淨居天。色界 Rūpa-dhātu 第四禪に聖者の生ずべき一無煩天、二無熱天、三善現天、四善見天、五色究竟天は、唯聖人の居にして異生の雜類無し。

【一一八】十不善業道。四十八卷脚註六〇を見よ。

【一一九】正法五百年。正像末三時に四異說ある中、正五像千說の根據。

【一二〇】限滿一千年。像法世に住する期限のこと。

渫羅多を殺したるに由るなり。復惡比丘有り、名づけて鷄多羅と曰ふ。兩手に赤棒を執り、復彼の三藏を殺せり。比丘皆悉く起つて、各各共に相殺せり。百千の諸の比丘、存活者幾も無し。是の時須臾の頃に、大地普く震動し、其の虛空中に於て、大惡音聲を出し、四方に大惡起り、火聚數百千、火幢大いに畏るべし。現住して空中に在り。彗星及び妖星、四方に流れ墮ち、千億の諸天神皆是の如き言を作せり。釋迦所集の法、今日當に隱沒すべし。色界の諸の天子、一切欲界の天、正法隱沒し已ると。大聲し悲しみ啤哭せり。見佛の諸の夜叉地に墮ちて宛轉す今より世間に於て更に佛法有ること無し。[二四]律儀・[二五]木叉戒・一切悉く空無なり。闇冥世間に遍く、救ひなく歸趣無し。諸人等久しからずして獐鹿に異ること無し。法幢當に摧折すべし。法鼓の聲も亦絕え、甘露門閉塞し、法師も亦喪亡し、法炬當に散滅すべし。法輪更に轉ぜず、正法の橋破壞し、法足復行ぜず。法水止りて流れず、法河永く枯涸し、法山崩頹せんと欲し、法海當に復竭くべし。住林の阿蘭若、有らゆる諸の天子、時に大いに怖畏し、悲啤して自ら撲し、諸の魔の眷屬、邪見なる諸の惡黨有り、歌舞して皆歡喜し、踊躍して衣服を弄ぶ。釋迦所說の法、彼の甘露に趣く者、是れ其の宜を隱沒す。我が法熾盛を得、難看王既に知る、正法隱沒し已つて、初より後夜に至り、城を出で彼に往詣し、諸の比丘の屍を見れば、地に墮ちて即ち悶絕し、良久しくして乃ち蘇るを得。而して復更に悲啼す。殺さるゝ阿羅漢・三藏失師迦・無量の比丘死す。我れも亦久しく活きず。阿羅漢を收拾し、別して三藏の屍を取り、及び諸比丘喪し、種種の[二六]闍維す、餘の殘在の比丘、召喚して一處に集り、餚饌・衆美味・種種に供養し、復千萬の寶を拾つ。一寶の直百千、此の衆寶物を以て、五百の寺を擬造せり。一一の諸の比丘、各百千の物を施し、師等此に在りて住すれば、我等當に養育すべし。我が爲に正法を說かば、我れ當に至心に聽くべしと。一切皆默然たり、說法する者有ること無し。其の王三たび勸請し、諸の比丘に

【二四】律儀。比丘の法律規則にして制惡の法なり。

【二五】木叉戒。波羅提木叉 Pratimokṣa のこと。別々解脫と譯し所謂戒律の一名なり。

【二六】闍維。荼毘 Jhāpita に同じ義は是れ焚燒すること。

及び阿闍梨に問ふ。知識諸等の侶、同學何處にか去る。我れ今此に來るを得るも、彼の或は道路に亡び、高聲し大いに悲哭し、相戀して嗥啼せり。失師三藏起つて少時靜嘿して住す。比丘大いに嗥哭し惆悵し自ら抑へず。王彼の嗥哭を見て曉諭して亦止まず。時に王自ら思惟せり。此に羅漢有るや不や。天神夜、王に告げて、波梨弗に還る。善財長者の子、名づけて湅羅多と曰ふ。是れ大阿羅漢なり、洹に香山中に在り。[一三]三明解脫具り、來りて此に安住せり。今此の大月の十五日に於て布薩し、此の布薩に由つての故に、百千の衆集・會せる中に一三藏有り。復阿羅漢有り。時に諸の天衆皆來り布薩を聽く。今是れ最後の集なり。當に無上の護りを作すべし。法幢當に摧折すべし。法炬當に散滅すべし。法山崩頽せんと欲す。法海當に枯涸すべし。八種の功德水、最後に當に亦竭くべし。比丘衆の聲亂る。三藏時に起ち、高聲にして、言へらく、靜寂に諦に戒律儀を聽け。有らゆる諸の釋子、一切皆の來集、我れ此の衆中に於て、多聞にして彼岸に到る。學戒は猶ほ不淨なり、何に況んや餘人に於けるをや、若し一比丘有りて、能く此の禁戒を持ち、威儀の缺く無き者今當に布薩を爲すべし。若し毗尼戒に於て威儀の缺犯無きは此の大衆の前に於て、有者、今當に現ずべし。戒律を學ばんとする者は、今布薩を作すべしと。羅漢湅羅多卽ち起ちて獅子吼す。依つて經中に說くが如し。我が學戒は淸淨にして決定し疑有ること無し、布薩し我れ當に聽くべし。佛の所說の如し。禁戒は我れ善く學べり。三藏に弟子有り。名づけて鴦伽多と曰ふ。懆惡にして卽ち瞋罵す。咄として彼の湅羅多、經中に未だ汝を見ず。是れ戒律を學ぶ者か。大德是の如く說くは、云何なる故に違反するやと。鴦伽瞋ること極めて盛なり。兩手に大棒を執り、阿羅漢の淨戒にして敬す可き者を打殺せり。諸の善比丘等、大いに哭き、嗥啼し、各各相瞋怒し、身の衣服を毀破す。時に大夜叉有り、目佉檀提と名づく。佛に於て深く信を生じ、佛の正法を敬重す。卽ち金剛杵を以て彼の鴦伽を殺害せり。阿羅漢無

【一三】三明解脫。これは阿羅漢所具の德にしては三明は宿命、天眼、漏盡のことにして之によりて解脫と得ればなり。

の時、長者等、大臣五百人同時に倶に、子を生めり。身亦鎧甲を著け、刀を執り、血は身を塗り、皆母胎より生る、是の日其の國に於て、天龍血の雨を降らす。五百の長者の子、難看も同處に養はる。難看年七歳にして、父王其の位を授く。邊夷の三惡王、又北天竺に至り、國を破り人を殺害し、怨讐し女色を妬み、積財は火を以て燒き、瞋怒して中國に向ふ。邊夷の王等來り、佛の塔寺を毀破し、諸の衆僧を殺害し、佛僧物を劫奪す。病瘦の諸比丘走りて逃避すること能はず、少壯强力なる者散じて諸方に走る。諸餘の比丘等の少年にして初めて出家し未だ善く戒を學ばざる者、威儀法具はらず、處處に走りて逃避す。隨つて欺狡を被り、毀辱し打罵せられ、恒に諸の苦惱を受く。彼の三邊夷の王、及與び諸の軍衆、漸く拘睒彌に詣り、十二年中闘ひ、三王及び眷屬を難看王に殺盡さる。閻浮提を統領す。而して一蓋王と作り。後に於て大いに悔恨し、我れ無量の罪を獲と。頗る明比丘有り、當に我れに懺悔を與ふべし。是れ大婆羅門なり。子は失師迦と名づく。說言の三藏[22]有り、父の名は火施と爲す、種姓常に淸淨なり。是れ大婆羅門なり。高才にして智勇博し、釋子中の大名にして、今波梨國に住す。時に王卽ち使を遣はして、彼の三藏を請ひ來る。王の爲に正法を演べ、王をして敬信を生ぜしむ。我れ十二年に於ける戰闘、大いに罪を作る。三王及び眷屬、軍衆を我れ殺盡す。我れ亦十二年、具に[23]般遮會を設け、普く閻浮提に告ぐ。釋子皆來り集る。有らゆる諸の比丘閻浮提に住在せり。願くは各悉く此に來り。我等が供養を受けたまへと。比丘等悉く集る、睒彌の般遮會、路に在りて餓死する有り。或は病みて道の傍に在り、中に水毒に遭ふ有り、或は賊虎の傷つくに値ひ、或は復山澗に墜ち、比丘の死するもの無數なり。餘殘は睒彌に到る、威儀法則ち壞れ、百千皆來り集りて大般遮會を設く。初め般遮を起すの日、大雲皆悉く起ち、普く閻浮提に遍く大雨を降り澍ぐ。時に王甚だ歡喜せり。此れ已に是れ衆僧の力なり。比丘旣に集り已つて互ひに共に相借問す、頻に我が和上を見、

【二二】三藏。Tripiṭaka [illegible]にては經(Sūtra)・律(Vinaya)・論(Abhidharma)に通曉せる沙門を總稱して三藏と呼ぶなり。

【二三】般遮會。梵 Pañca vārṣika 般闍于瑟、般遮婆瑟、般遮跋瑟迦等の音譯あり譯して五年會といひ、五年毎に設くる大齋會なり。無遮會のこと、卽ち法會中は一切の人々をして遮遣せざらしむ。

「此の諸の菩薩を觀るに、勇猛にして智炬を執り、無量阿僧祇の他方佛土より來れる。種種善根の實もて諸佛海に歸依し、慈悲方便力もて、佛の法に於て動かず。此に於て一も能く我が法を持つ者は有ること無し。賢劫の諸菩薩のみ、我が法を持つに堪へたり。我が滅度の後に於て佛法滅せんと欲する時　有らゆる出家者慚恥有ることなく、功德智を遠離し、懈怠にして精進せず、道を捨てゝ世業を學び、禁戒を持つを樂まず、愚癡にして俗と與に交り、多言にして復羞なし。佛僧物を貪取し、[一〇九]五欲の樂に染著す。是の如き比丘等、資生俗と與に同じく、疑惑多く、財を貪り、邪婬し、怒り、嫉妬す。蘭若に住する者を見て、其の諸の過惡を說き、樂んで經を讀誦せず、睡を嗜み、多く鬪ひを憘ぶ。是の如き等の沙門は禪蘭若を厭賤し、惡事に堅著し、自ら高ぶり他を輕蔑す。沙門及び俗人、慳貪にして捨施せず。佛僧物を噉食し、多く種種の病に遭ひ、慈愍有ることなし。少力にして惡しく瞋んで鬪ふ。是を以て天は雨ふらさず、潤澤は悉く枯涸し、飢饉世間に遍く、果實は滋味無く、飲食乏少し、瞋りて相侵奪す。十不善業を造り、少福にして供養すること無し。法味純厚ならず、行法心も亦薄く、迭ひに共に麁想を作し、殺害して慈愍無し。父母に孝ならず、亦尊長に供せず。多く世俗の行を修し、疑惑し復嫉妬し、邪法に貪り染り、非法厭足すること無く貪求して厭ふこと無し。故に是を以て久しく流轉す。是の如き諸の國王、及以び輔相の臣、沙門・婆羅門・毗舍・首陀羅は鬪を樂み、持戒を憎み、互ひに共に誹毀す。南方邊夷國の王をば波羅帝と名づく。百千の諸軍衆、士將共に圍遶す。西方邊夷國の王有り百祀と名づく。亦百千の軍を將ゐて前後共に圍遶す。北方邊夷の王をば善意釋迦と名づく。士將、諸營從して圍遶すること亦百千なり。東方睒彌國の王をば名づけて大軍と爲す、眷屬百千衆あり、圍遶して侍衞す。大軍王に子有り、之れを名づけて[一一〇]難看と爲す。生れる時身に鎧を著け、刀を把り、血は身を塗り、大力にして身堅固なり、母胎より生る。是

【一〇九】五欲。四十六卷脚註一二六を見よ。

【一一〇】難看太子。睒彌國王、大軍の太子難看の物語を擧ぐ。

破戒は親しく供す、捨離し各の住に隨ふ、國王彼れを惱まさず、持戒及び毀禁の刹利・浄持戒・彼此皆敬信せり、毗舍・婆羅門・諸の天神を惱まさず、正法久しく住ずるを得て白法常に增長す。汝等此の土に於て、意に隨つて安住せよ。汝等若し發心せば、此の土常に安住し、乃至我が法盡きて諸の餘の國に向ふこと莫し。檀尸・羅法を以て、多衆をして歸信せしめ、智者能く成熟す。彼は是れ希有に非ず。彼の惡世の時に於て、我が正法を熾然し、惡刹利を遮障す。此の事希有と爲す。慈心にして常に相應し、我が聲聞を打つこと莫れ。彼の二は正法を說き、能く地獄の苦を救ふ。比丘は戒を護らずとも國王は謫罰すること莫れ。汝諸の刹利王、沙門と共に闘ふこと莫れ。俗人は諸の惡を作し、速に地獄に趣き、歡語して彼の二に向ふ。諸の惡業を遮除し、麁穢の語を以てすること莫れ。亦打ちて治罰すること莫れ。是を以て國壞れず、三精氣を增長し、正法久しく住するを得て、佛法久しく熾然し、多くの說法する者有りて、能く三惡趣を閉ぢ、世間の惡を休息し、諸の天衆を增益し、涅槃の門開くことを得。無漏の者は則ち入り、菩薩は增長を得て、猶し分明なること月の如し。能く[一〇八]六度を以て、諸佛の法を充滿す。是の故に諸の智者、來れる所の諸の菩薩、當に此の土に住すべし。我が正法を熾然し、盲冥にして道を失へる者には當に正法眼を與ふべし。衆生は六度を以て菩提を成熟す。汝等は則ち供と成れ。三世の諸の如來は速に菩提果を證し、國を淨くして導師と作る」と。大衆皆默然たり、唯賢劫の衆有り、彌勒を上首と爲す。一切皆悉く起ちて合掌し佛に白して、咸く是の如き言を作せり「我れ餘方に詣らず、佛の正法を護持し、我が精進力を盡くして、大菩提を成熟し、彼の時中に隨つて機に應じて說法し、留難有らんと欲する時、我等よく遮ぎること能はず。法滅盡せんと欲する時、我れも亦遮ぎること能はず」と。

爾の時、世尊、彼の白智童眞菩薩摩訶薩に告げて偈を說いて言はく、

【一〇八】六度。施・戒・忍・進・禪・慧のこと。前註に屢出づ。

[一〇五]布薩行檀絶え、其の國の水枯涸し、非時の風雨起り、飢饉、極しく儉短にして資生の具乏少し、果苗成熟せず、地味・衆生味・法味及び精氣一切皆損減し、諸の兵杖を興動し、互に共に相劫奪す。是の如く慳貪の國には惡比丘往返し、復、佛僧物の飲食・諸の果藥を以て、俗人と與に持用し、此れに因つて供養を得。奴婢及び田宅を彼れに與へて攝受せしむ。不善の比丘等、之れを以て尊長と爲す。少智にして多聞を詐り、禪戒者に喜ばれず。禪戒者去りて後、賊の爲に共に鬪諍す。刹利聞きて瞋を生じ、惡比丘を打害し、俗に還り、法服を捨て、牢獄に繫閉す。是を以て諸天瞋り迭ひに共に相告語す。是の如き國土中、旃陀羅王治にして朋黨。惡比丘は袈裟服を毀破し、自ら己の國土を壞る。久しからずして當に敗亡すべし、墮ちて阿鼻獄に在り、苦を受くること極めて長遠なり。此の賢劫中に於て、地獄を脫する時無し、是れ旃陀羅王にして衆聖の厭賤する所なり。檀尸法を聽讀し、諂曲・虛詐現はる。是の王多く詐僞して速かに己の國土を滅し、苗稼成熟せず、亢旱及び[一〇六]水潦・鼷鼠・惡象暴れ、自他國の兵起り、曜は非常の宿に入り、大地普ねく震動し、白虹・妖星墮ち、時氣・疫病多く、、諸の聚落焚燒し、速に國・城邑を壞る。剃頭して袈裟を著け、諸佛の加護する所、一人の出家者、天人の供養する所。唯だ諸の如來を除きて、自在なる者有ることなし、彼の旃陀羅王・惡比丘を謫罰し、三世の佛を毀壞し、[一〇七]二種の淨法身、煩惱の瘡深く重く、諸佛に値ふことを得難し。諸天皆捨離す。彼の旃陀羅王、是の如く國土壞れ、三種精氣滅じ、天の宮殿毀滅し、白法・善朋少く、黑法・惡黨增し、彼の濁惡世に於て明智の人有ることなし。所住の阿蘭若、法を樂ひ、安隱住にして、彼れ我が正法を持ち、能く多衆をして信ぜしめ、鬼神敬信するが故に、諸の怖畏を遮障し、三精氣を增長し、我が正法を熾然し、彼れ禪定樂を以て、天の宮殿を充滿す。是の故に我が法を以て、諸の鬼神王に付す。惡刹利を遮障し、我が聲聞を惱ますこと莫れ。國王持戒に於て親近し、常に供養し、

【一〇五】布薩行檀。布薩の梵語は Upavasatha 巴梨は Uposatha 變形して Posatha となれり。出家在家の布薩法あり。布薩法によりて布薩行を行ずること。詳しくは辭典を見よ。

【一〇六】水潦。水たまりのところ。

【一〇七】二種の淨法身。五十五卷に出づる法身報身の二種のことか。

沙門・刹利王・激動して相瞋惱す。我れ今、當に久しからずして、[一〇四]涅槃し滅して餘り無かるべし。大智の諸聲聞も亦我れに隨つて涅槃し、餘方諸佛の國の一切の諸菩薩の大神通を具する者、復還他方に向ひ、福徳の諸の國王・大臣・長者滅び、限滿して百年の後、佛法漸く隱沒す。薄福の衆生等、我が法に於て出家し、三乘を樂はず、亦後世を畏れず、活命の故の出家し、多く詐りて羞恥無し。諸の名利を貪求し、處處に諂ひ嫉妬し、禪誦を遠離し、復諸の善法を捨て、晝は則ち言訟を樂み、夜は則ち睡眠を多くし、樂んで外の雜典を讀み、佛の所說を捨離し、復女人と與に通じ、身に衣服を嚴飾にし、名利を求めん爲の故に、但世俗の業を營む。常に他の爲に使を作し、諸の信命に通致し、俗人の家に往返し、販賣以て自活し、樂んで諸の田業を作す、又復鬪諍を喜び、諸の善比丘の梵行・多聞の者を見て嫉妬し、復瞋り罵りて彼れの坐臥するを容さず。麁獷の語・誹謗及び毀訾を作し、諸の俗人の邊に於て不善業を稱揚し、此れは詐れる比丘と言ひ是れ賊にして最惡人なり。若し供養有る者は、多く惡しき名聞を得ん、彼に於て福を獲ず、亦彼れの說を信ずること莫れと。諸寺の惡比丘、盜說して梵行する者、種種の不善事あり、是を以て刹利瞋らん。彼の諸の惡比丘雜ゆるに外の文頌を以てし、彼の刹利を稱讃し、能く刹利をして喜ばしむ。毗舍・婆羅門の利・喜も亦是の如し。是を以て供養を得。持戒して欺敖をせられ、刹利・婆羅門・持戒者を嫌恨す。持戒を嫌恨する故に、諸天をして瞋らしむるに致る。彼の國土の刹利、輔相の臣を棄捨し、寶國土に向ひ、彼に在つて安住す。持戒を輕賤する故に菩薩も亦捨離し、諸天も捨離して後、其の國大いに畏る可し。惡龍・惡夜叉・羅刹・鳩槃茶・國に入りて精氣を奪ひ、及び其の肉血を食ふ。惡王・婆羅門・毗舍・首陀等共に國の城邑を護り、及以び諸の村落・宮舍・國の園林に、惡鬼遍く充滿し、常に彼の精氣を奪ひ、諸の刹利・婆羅・毘舍・陀を觸惱し、男女等皆瞋り、復心をして變惡せしめ、互に共に相鬪諍す。彼等は鬪諍するが故に

【一〇四】涅槃滅無餘。涅槃梵 Nirvāṇa 巴 Nibbāna は滅と譯し、一切の煩惱を滅じて餘すことなきを云ふ。滅は生死の因果を滅すること。大小乘に就て分別するに三門あれども今は辭典に讓る。

「我れ問はんと欲す佛の無邊慧に法眼は幾時か世に住するや。此の如き佛月、滅度の後、煩惱・癡・諍・闇の世間、云何んが賢聖復集るを得て、當に何人か方便して護りを作すか。云何んが世に安隱道を示し、能く[一〇二]三趣の億衆生を度はんや」と。

爾の時、一切諸の來れる大衆、諸の菩薩摩訶薩に向ひ、讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、月燈菩薩摩訶薩、座より起ちて、右肩を偏袒にし、衣服を整理し、右膝を地に著け合掌して佛に向ひ、頭面に禮を作し、偈を以て問ふて曰はく、

「我れ今、佛の無邊慧に問ひたてまつる。我れ今、諸の疑網有るを以てなり。何の因緣を以て法眼滅するや。云何んが法燈久しく熾然する。誰か能く此の法鼓を破壞する。誰か能く正法の河枯涸する。云何をんが法眼久しく住するを得ん。我れ當に彼れに於て助けて護持すべし。尸羅精進の力を以てせんや。爲に羼提・禪・般若を以てせんや。何なる力を以てか法の久しく住するを爲さん。唯願くは速に何れかの方便を說きたまへ。云何んが法水久しく流るゝを得ん。多億數の助佛者有り、我等精勤に堅固に行ずるは、法海をして速に竭きざらしめんが爲なり。大地の精味及以び衆生の法精味を常に增長し、衆生の煩惱海を枯涸すれば、衆生更に惡道に趣かざらん」と。

爾の時、佛、金色の右臂を申べ、偈を說いて言はく、

「汝等共に諦かに聽け、一切の[一〇三]有爲法は、無常火の燒く所にして、少くも常なる者有ること無し。譬へば諸の戲人の種種なる戲を作すが如し。是の如き等の衆生、皆煩惱の爲に轉ずること猶し幻と芭蕉の如し。亦水中の月の如し。三界の有爲法は一切皆是の如し。諸法は我れ自ら覺り道を成ずること先佛の如し。我か今の大衆會に、天人證明を作し、正法を天神に付す。護持して衆苦盡き、三界の尊と成り、能く法をして熾盛ならしめ、八正路を顯現し、邪意、惡覺滅び

【一〇二】三趣。地獄、餓鬼、畜生の三惡趣を指す。

【一〇三】有爲法。梵Saṃskṛta 爲とは造作の義にして造作を有するを有爲といふ。即ち因緣所生の事物は悉く有爲なり。

とする者、一切勤めて護持す。知足の諸の比丘、無積聚にして、欲を離れ慈悲に住するものも、我等當に守護すべし」と。

〔一〇〕月藏分第十二　法滅盡品第二十

爾の時、月藏菩薩摩訶薩、復座より起ちて、衣服を整理し、右肩を偏袒し合掌し、十方一切の諸の來れる菩薩摩訶薩衆に向ひ、口眼微笑し、月燈菩薩摩訶薩を顧視し、偈を說いて言はく、

「此の希有なる慈悲士釋迦大仙尊導師を觀る。今此の法の甘露味を以て夜叉に付囑して護持せしめたまふ。普く一切に告げて是の言を作したまへり。我れの正法を汝は當に護るべし。一切の聲聞器・非器も、當に視ること子の如くにして、護り養育すべし。我が爲に剃頭し袈裟を著くる(ものを)、後に於て惱害有らしむること勿れ。諸の惡儉、病疫を休息し、亦非時の風熱雨を息めよ。是の如くして三種の精氣を增し、正法久しく世間に住し、衆生は諸の惡道に墮ちず、速かに能く大涅槃に趣向せん。我れ昔よりこのかた未だ見聞せざる慈悲の希有なること餘の土に無し。佛を除きて更に餘の衆生無く、能く正法をして久しく熾然たらしめ、諸佛の慈悲は慧無量にして廣く、正法を持して久しく住せしむ。導師の滅後は佛の正法熾然して久しく住する事希有なり。此の土は不善煩惱の山なり。堅固なること希有にして最も壞し難し。正梵輪を轉じ、法眼住し、悉く善に住し涅槃に到らしむ。此の土の極惡人・魔・夜叉・修羅・鳩槃茶と與に彼等は究竟じて煩惱を滅し、世尊の眞の妙法を護持せん。是の因緣を以て最勝を得、能く諸の所作の惡業を盡し、彼れは勤めて三寶を供養し、是の故に速かに能く涅槃に趣かん。煩惱を斷除したまへる牟尼尊・世間自在大導師は一切衆生を憐愍したまふが故に、告げて佛の正法を護持せしめたまふ」と。

爾の時、月燈菩薩摩訶薩、月藏菩薩の是の偈を說くを聞き已つて、復偈を說いて言はく、

〔一〇〕明本には大集經月藏分第十二の六字なし。

皆眷屬と與に合掌して、佛に向ひ是の言を作さく、「大德婆伽婆よ。已に一切如來の塔寺及び阿蘭若處有り。現在の世尊の聲聞弟子の有らゆる住處、及び未來世の[一〇〇]刹利・婆羅門・毘舍・首陀、若しは在家人、若しは出家人、世尊の聲聞弟子の爲に、塔寺處を造らん。隨つて世尊の聲聞弟子有りて、三業相應し、及與び三種の菩提相應せる有學無學の持戒・多聞善行に住するものを、我等悉く共に守護し、彼れに於ける一切の諸難怖畏を離れしめん。諸有世尊の聲聞弟子有りて立てる所の塔寺、及び阿蘭若處に、如し飮食・衣服・臥具・湯藥の一切の所須を給施する有らば、是の如き施主は我れ等も亦當に護持し養育すべし。若し復、世尊の聲聞弟子の晝夜に須ゐる所の衆具乏少にして、貧苦の者ならば、我れ彼等の爲に大施主と作つて、其の寄付を受け、護持し養育し、諸の怖畏を除かん」と。佛、時に讃へて言はく「善い哉。善い哉。諸の賢首よ。汝等一切四天下に於て、應當に是の如くなるべし。今の如く汝等我が教勅を受け、說の如く修行すれば、我れ汝等、及び諸の眷屬を以て、彌勒に付囑せん」と。

爾の時、世尊重ねて、此の義を明かにせんと欲して、偈を說いて言はく、

「天王皆悉く起つて、瞿曇仙を敬禮したてまつる。諸の塔寺の數を問ふに、佛の所依處を說けり。此の四天下に於て復、幾の塔寺有る。聲聞の所依なる者、我等共に護持せんと。兩足尊微笑したまふ。此の四天下に於て、諸佛の現に化作せるもの、無量百千數なり。四方の神力加せり。故に諸の化佛を現ず。佛、諸の聲聞所立の諸塔寺を示す。三乘道に住せしめん爲に是の故に建立し、三業相應を樂ふ。是の如く聲聞の住する、諸の聲聞寺を以て、汝等に付囑す。供養せる、彼の施主も亦當に護り養育すべし。相違して惱まさしめず、他をして便を得せしむること勿れ。乏少有りて禁戒を退捨せしむる莫れ。天王、及び眷屬は佛の教勅を稟受せよ。我等悉く彼を護り、導師の建立せる所、我等及び眷屬、勤めて諸の塔寺を護り、已に作り、當に作らん

【九二】緊那羅國。
【九三】震旦國。
【九四】羅羅國。
【九五】吳地國。
【九六】新陀跋持國。
【九七】有學。四十六卷脚註五を見よ。
【九八】無學。四十六卷脚註六を見よ。
【九九】三有海。四十六卷脚註九六を見よ。
【一〇〇】刹利・婆羅門・毘舍・首陀は印度の四姓なり。四十六卷脚註五八を見よ。

れたまひ、[69]涑利迦國には二十八の佛現はれたまひ、[70]般遮婁伽國には五十八の佛現はれたまひ、[71]波斯國には二十の佛現はれたまひ、[72]勅勤國には四十の佛現はれたまひ、[73]尸利沙國には三十二の佛現はれたまひ、[74]婆佉羅國には五十八の佛現はれたまひ、[75]罽賓國には五十五の佛現はれたまひ、[76]憂羅奢國には二十五の佛現はれたまひ、[77]佉羅婆羅國には十二の佛現はれたまひ、[78]阿踈拘迦國には二十二の佛現はれたまひ、[79]陀羅陀國には十五の佛現はれたまひ、[80]波盧那國には二十の佛現はれたまひ、[81]弗離沙國には十五の佛現はれたまひ、[82]伽沙國には二十八の佛現はれたまひ、[83]遮拘迦國には二十の佛現はれたまひ、[84]筏提國には四十五の佛現はれたまひ、[85]沙勒國には九十八の佛現はれたまひ、[86]于塡國には百八十の佛現はれたまひ、[87]龜茲國には九十九の佛現はれたまひ、[88]婆樓迦國には二十四の佛現はれたまひ、[89]奚周迦國には十八の佛現はれたまひ、[90]億尼國には八十の佛現はれたまひ、[91]鄯善國には二十九の佛現はれたまひ、[92]緊那羅國には八十の佛現はれたまひ、[93]震旦國には二百五十五の佛現はれたまひ、[94]羅羅國には二十四の佛現はれたまひ、[95]吳地國には五十の佛現はれたまひ、[96]新陀跋持國には二十五の佛現はれたまふ。佛の言はく「諸の仁者よ。是の如き等佛、此の四天下の國土・城邑・村落・山林に於て、處處に現はる。我れ今神力の加する所の故に、還是の如き等の數塔寺有り。彼彼の處に於て、我が諸の聲聞の現在・未來の三業相應なるもの及與び三種の菩提相應せる[97]有學[98]無學の具足持戒、多聞善行は、諸の衆生を[99]三有海より度ひ、及び諸の施主は、我が聲聞の爲に塔寺を造り、亦復一切の所須を供給し、及び彼れの眷屬を汝等に付囑し、惡王をして非法惱亂せしむること勿れ。又復他方の寃敵・盜賊・水火・人非人等をして、恐怖する所とならしむること勿れ。亦彼れをして、飢濁・乏少ならしむる勿れ。乏少を以ての故に、三善業に於て相應を得ず、禁戒を退捨し、善朋損減せん」と。

爾の時、復諸の梵天王、諸の釋天王、諸の龍王、諸の夜叉王、諸の阿修羅王、諸の鳩槃茶王有り

【五七】摩尼藍婆國。
【五八】波梨弗國。
【五九】婆樓那跋提國。
【六〇】提跋那國。
【六一】瞻波國。
【六二】悉那那國。
【六三】西地國。
【六四】富樓婆富羅國。
【六五】烏長國。
【六六】枳阹羅國。
【六七】金性國。
【六八】摩兜羅國。
【六九】涑利迦國。
【七〇】般遮婁伽國。
【七一】波斯國。
【七二】勅勤國。
【七三】尸利沙國。
【七四】婆佉羅國。
【七五】罽賓國。
【七六】憂羅奢國。
【七七】佉羅婆羅國。
【七八】阿踈拘迦國。
【七九】陀羅陀國。
【八〇】波盧那國。
【八一】弗離沙國。
【八二】伽沙國。
【八三】遮拘迦國。
【八四】筏提國。
【八五】沙勒國。
【八六】于塡國。
【八七】龜茲國。
【八八】婆樓迦國。
【八九】奚周迦國。
【九〇】億尼國。
【九一】鄯善國。

青鬱茂宿と名づけ、次をば虚空子と名づけ、次をば牛頭栴檀室と名づけ、次をば難勝と名づく。此れは是れ過去の諸佛の建立し住持したまへる大塔にして、常に菩薩摩訶薩等に加護せらる。是れ我等に於て常に供養する所なり。世尊の有らゆる聲聞弟子は、現在世及び未來世に於て、復幾所の塔寺住處有りて我等が輩をして護持し養育せしむるや」と。

爾の時、世尊熙怡（きい）として微笑（みせう）し、其の面門より種種の光を放ち、諸方を照曜したまふ。即ち時に此の四天下中に於て無量百千の諸佛有りて、處處に現はれたまふ。[三四]東弗婆提には八萬の佛現はれたまひ、[三五]北鬱單越には百千の佛現はれたまひ、[三六]西瞿陀尼には五萬の佛現はれたまひ、諸の海島國には百千の佛現はれたまふ。此の[三七]閻浮提には二百五十千の佛處處に現はれたまひ[三八]波羅奈國には六十の佛現はれたまひ、[三九]迦毘羅婆國には二十の佛現はれたまひ、[四〇]摩伽陀國には三十の佛現はれたまひ、[四一]鴦伽摩伽陀國には二十の佛現はれたまひ、[四二]拘薩羅國には五十の佛現はれたまひ、[四三]須羅吒國には二十の佛現はれたまひ、[四四]摩訶羅吒國には三十の佛現はれたまひ、[四五]乾陀羅國には十の佛現じたまひ、[四六]阿槃提國には二十六の佛現はれたまひ、[四七]般遮羅國には二十五の佛現はれたまひ、[四八]蘇摩國には十二の佛現はれたまひ、[四九]阿葉波國には十の佛現じたまひ、[五〇]摩偸羅國には十の佛現じたまひ、[五一]毘羅國には十八の佛現はれたまひ、[五二]婆蹉國には五十六の佛現はれたまひ、[五三]奢耶國には四十二の佛現はれたまひ、[五四]優禪尼國には二十三の佛現はれたまひ、[五五]舒盧那槃多國には二十五の佛現はれたまひ、[五六]舒盧那國には三十八の佛現はれたまひ、[五七]摩尼藍婆國には二十五の佛現はれたまひ、[五八]波梨弗國には五十五の佛現はれたまひ、[五九]婆樓那跋那國には四十八の佛現はれたまひ、[六〇]提跋那國には二十九の佛現はれたまひ、[六一]瞻波國には二十五の佛現はれたまひ、[六二]悉都那國には三十六の佛現はれたまひ、[六三]西地國には七十の佛現はれたまひ、[六四]富樓沙富羅國には五十の佛現はれたまひ、[六五]烏長國には二十六の佛現はれたまひ、[六六]枳薩羅國には二十二の佛現はれたまひ、[六七]金性國には二十九の佛現はれたまひ、[六八]摩兜羅國には四十の佛現は

【三四】東弗婆提。五十一卷脚註五〇を見よ。
【三五】北鬱單越。五十一卷脚註四九を見よ。
【三六】西瞿陀尼。五十一卷脚註五二を見よ。
【三七】閻浮提。五十一卷脚註五一を見よ。
【三八】波羅奈國。印度、西域、支那に及べる五十九國名中、三八、三九、四〇、四一、四二、四五、五四、六一、六四、七五の如きは普通なるも、他の印度や西域や支那に及べる地名につきては考證を要し、他日に讓る。
【三九】迦毘羅婆國。
【四〇】摩伽陀國。
【四一】鴦伽摩伽陀國。
【四二】拘薩羅國。
【四三】須羅吒國。
【四四】摩訶羅吒國。
【四五】乾陀羅國。
【四六】阿槃提國。
【四七】般遮羅國。
【四八】蘇摩國。
【四九】阿葉波國。
【五〇】摩偸羅國。
【五一】毘羅國。
【五二】婆蹉國。
【五三】奢耶國。
【五四】優禪尼國。
【五五】舒盧那槃多國。
【五六】舒盧那國。

爾の時、世尊重ねて此の義を明かにせんと欲して、偈を說いて言はく、
「衆生を成熟せるが故、我れ諸の天王に問ふ「云何んが昔、天仙、宿を配して諸國を攝するや」と。梵天、我れに答へて言はく「過去の天仙等諸の宿曜を安置し、如法に衆生を護れり」と。今汝に國土を付す、應當に加して養育すべし。亦鬼神等に付して護持を作さしめ、及び彼の宿曜辰、各國土を攝せしむ。護持養育するが故に、正法眼を熾然し、不畜田宅の清淨聲聞衆を護り、諸の惡衆生を遮り、及び諸の濁惡を息め、三寶種を絕たず、三精氣を增長せよ。汝宿曜等に告げて、彼をして護持を作さしめよ、我れ諸の聲聞に告げて、正法眼をして住せしめ、應當(まさ)に憍慢を捨つべし。精勤にして蘭若に住し、生死を背捨して涅槃に趣向し、樂(この)んで禪の境界に住し、億の衆生を成熟せよ」と。

[三二] 月藏分第十二　建立塔寺品第十九

爾の時、娑婆世界主大梵天王、釋提桓因、四天王等、及び諸の眷屬座より起ちて合掌し佛に向ひ、一心に敬禮し、是の言を作さく、「佛は此の四天下中に於て、有らゆる過去の諸佛、如來の建立し住持したまへる所の大塔、牟尼諸仙の所依住處を說きたまふ。現在世及び未來世に於て、常に空ならず。佛、菩薩摩訶薩等の爲に大法雨を降らして皆悉く充滿せり。初めをば[三三]衆仙所興と名づけ、次をば德積と名づけ、次をば金剛餤と名づけ、次をば香室と名づけ、次をば睒婆梨と名づけ次をば賢城と名づけ、次をば須質多羅と名づけ、次をば水光と名づけ、次をば香薫と名づけ、次をば善建立と名づけ、次をば遮波羅と名づけ、次をば金燈と名づけ、次をば樂依と名づけ、次をば牟眞隣陀と名づけ、次をば金剛地と名づけ、次をば慈宿と名づけ、次をば那羅延宿と名づけ、次をば渠摩娑羅香と名づけ、次をば慧頂と名づけ、次をば大德宿と名づけ、次をば善現と名づけ、次をば

【三二】明本には大集經月藏分第十二の六字なし。

【三三】廿五の大塔を擧ぐ。

五をば線呵と名づけ、六をば迦若と名づけ、七をば兜邏と名づけ、八をば毘梨支迦と名づけ、九をば檀尼毘と名づけ、十をば摩伽羅と名づけ、十一をば鳩槃と名づけ、十二をば彌那と名づく。我れ今此の諸の曜辰等をして、國土・城邑・聚落を擁護し、衆生を養育せしむ。汝等宣告して彼をして得知せしめよ」と。梵王等言はく「是の如し。大德婆伽婆よ、唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、娑婆世界主大梵天王、釋提桓因、護世の四王及び諸の眷屬、佛に白して言さく「大德婆伽婆よ。若し世尊の聲聞弟子有りて、奴婢・畜生・園林・田宅・俗人の資具を畜養するを得ざれ、及び交往せざれ。四方僧物を除き、精進を發起し、三業相應し、常に慚愧を懷ひ、獨り閑林に住し、諸の善法を集めば、我れ彼の時に於て、宿曜をして正しく世に行ずる惡衆生を遮らしめ、觸惱・鬪諍・兩國の兵仗・疾病・飢饉・非節の風雨・失時の寒熱悉く休息せしめ、佛の正法を護りて久しく住し、熾然し、三寶種を紹ぎて斷絶せざらしめ、三種の精氣を增長し安住し、亦世尊の聲聞弟子をして、身口意の業、淸淨にして相應し大勇猛を發し、法に循ひて住せしめむ」と。

爾の時、佛、阿若憍陳如に告げて言はく、「我が法をして久しく住するを得しめん爲の故に衆生を成熟するが故に、閻浮提中一切の諸國、一名諸國・多名諸國・同名諸國、及び不列名國は、分布して彼の龍・夜叉・乃至迦吒富單那等と與に、護持を作さしめ、及び宿曜辰も亦諸國に付して護持を作さしめむ。乃至三寶種をして斷絶せざらしむるが故に、有らゆる諸國の多名・同名は彼の諸國に於て、同名の夜叉、同名の羅刹の國有り、鬼神の名無くして、鬼神の住する有り、還彼等に付して護持を作さしむ。閻浮提に於て、餘の鬼神不列名の者有り、亦護持せしむ。憍陳如よ。一切の鬼神皆悉く發心し護持し、養育し、乃至我が聲聞弟子の三業相應して、常に聚積無く、法に循ひて住するに隨ふ一切時に於て、護持し養育せよ。憍陳如よ。汝等應當に常に聚積せず、阿蘭若に住し、三業相應し、生死を背捨し、涅槃に趣向し、衆生を成熟すべくんば、應に是の如く學ぶべし」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の刹利、天祠、是の如き二處を以て牛宿の攝護養育に付囑す」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[二六]阿樓那國、鳩私婆羅闍利國、瞻波兜薩國、龜茲國、摩藍浮沙國、舍迦國、物陀羅多國、薩提國、瞿師國、婆羅彌國、是の如き十國を以て、女宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[二七]難提跋彌國、波羅尸國、滿稲國、憂羅奢國、藍浮沙國、婆婆國、摩陀羅婆國、薩提國、佉沙國、婆羅斯國、師子國、訶波他國、訶利鳩時國、憂婆毘羅國、多羅尼國、毘舍難國、憂迦利國、此の十七國を以て、虛宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[二八]迦車鞞帝國、波利支國、龍花國、鳩荼婆國、難提跋檀那國、婆樓迦國、乾陀俱致國、婆彌利國、夜瑟吒俱利國、是の如き九國を以て、危宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[二九]俱曼陀國、奢曼陀國、頭摩迦國、酬摩迦國、揵沙婆國、鳩支國、博叉利國、德叉尸羅國、婆彌婆利國、跋陀跋帝國、憂摩差國、跋婆多牟利摩國、婆樓迦車國、婆羅跋帝國、此の十四國を以て、室・壁二宿の攝護養育に付囑す。亦二宿日の建立する國土の城邑・聚落・及び二宿日所生の衆生を護らんことを。汝等宣告し彼をして得知せしめよ」と。梵王等言はく「是の如し。大德婆伽婆よ、唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「言はゆる[三〇]曜とは七種有り。一には日、二には月、三には熒惑星、四には歲星、五には鎭星、六には辰星、七には太白星なり。言はゆる[三一]辰には十二種有り。一をば彌沙と名づけ、二をば毘利沙と名づけ、三をば彌偷那と名づけ、四をば羯迦吒迦と名づけ、

【二六】阿樓那國以下十國は女宿の付囑。

【二七】難提跋彌國以下十七國は虛宿の付囑。

【二八】迦車鞞帝國以下九國は危宿の付囑。

【二九】俱曼陀國以下十四國は室・壁・二宿の付囑。

【三〇】七曜。佛母大孔雀明王經には火水木金土、羅睺及び計都の七曜を載す。

【三一】十二辰の音譯。

國、迦毘羅婆國、奢耶國、馬面國、伽樓荼國、憍羅跋陀國、吳地國、闍婆跋帝國、鞞樓國、伽樓訶國、干埴國、伽頗羅國、狗面國、尼婆羅國、倶那婆國、此の十八國を以て、昴宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[二二]摩伽陀國、鞞提訶國、薩羅國、奚浮迦國、牟尼奢耶國、羅羅國、餘尼迦國、拘薩羅國、跋沙伽國、阿荼國、鞞訶迦國、頞那婆國、伽耶國、尼婆國、槃羅婆國、跋知尼國、陀樓國、尸利曼多國、彌伽頗羅國、摩醯首羅膩羅耶國、罽賓國、婆盧師多國、沙勒國、憶尼國、筏提國、此の二十五國を以て、畢宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[二三]尼婆國、迦尸國、奢鳩尼國、阿吒摩闍國、緊陀國、摩婆摩國、達毘迦國、八城國、殊提沙國、婆毘迦國、婆求荼國、摩訶羅吒國、乾陀羅國、迦婆摩國、般遮羅國、多荼沙國、首婆迦國、摩師跋那國、兜羅婆國、蘇摩國、婆求國、摩多摩利國、摩羅婆國、鳩留國、瞿沙國、此の二十五國を以て、觜宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[二四]阿濕婆國、奢跋那國、摩偷羅國、鴦伽吒婆國、摩頭曼多國、倶周羅國、曼遮國、婆求摩國、倶闍婆國、震旦國、首羅犀那國、阿那牟佉國、佉羅婆羅國、犀摩婆國、那凳邏婆跋陀國、曼遲羅婆國、奚周迦國、此の十七國を以て、參宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[二五]辛頭鳩羅國、瞿那悉鬚國、迦羅差國、婆羅差國、達羅膩鉢帝國、海果國、阿樓瑟拏羅婆國、那婆弗使波羅婆國、摩那兜利國、民陀羅跋帝國、是の如き十國を以て、斗宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

【二二】摩伽陀國以下二十五國は畢宿の付囑。

【二三】尼婆國以下二十五國は觜宿の付囑。

【二四】阿濕婆國以下十七國は參宿の付囑。

【二五】辛頭鳩羅以下十國は斗宿の付囑。

の十一國を以て、星宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[16]波斯國、訶利陀國、勅勤國、阿摩羅國、婆羅婆國、蘇摩尼棄國、叵耶那國、三牟遮國、尸梨沙國、婆利國、伽菟婆國、摩遮國、兜佉羅國、摩頭師利國、此の十四國を以て、張翼二宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[17]伽羅婆羅國、憂羅賖國、罽使拏國、婆耆國、檀多摩利國、婆樓遮國、陀荼國、達拏國、藪牟寄賖國、鳩論遮差國、呿羅婆羅國、阿躁俱迦國、此の十二國を以て、軫宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[18]鳩賖弗利國、緊那羅國、迦毕羅摩利國、三謨師國、陲羅尼國、時婆利國、奚闍尼國、摩兜寡遲國、般荼利國、蜜拏梨國、修羅毘國、侯摩多尼國、此の十二國を以て、奎宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[19]提帝賖婆國、蘇摩跋羅國、多羅比尼國、阿賖若國、俱薩羅斯國、悉都那國、娑羅賒遲國、緊拏多利國、濕婆尼利國、羅婆師飢國、佉吒梨毘國、佉婆利國、白馬國、此の十三國を以て、婁宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[20]阿斯那棄國、軍陀羅毘國、安尼師國、遮俱波國、兜伽帝國、逋支國、支多毘悉帝國、憂筳帝國、槃頭波羅國、毘羅梨迦國、摩陀羅毘國、迦拏波帝國、達婆娑梨國、此の十三國を以て、胃宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[21]波羅耽羅國、只叔迦國、婆樓遮國、輸盧那

---

[16] 波斯國以下十四國は張・翼二宿の付囑。
[17] 伽羅婆羅國以下十二國は軫宿の付囑。
[18] 鳩賖弗利國以下十二國は奎宿の付囑。
[19] 提帝賖婆國以下十三國は婁宿の付囑。
[20] 阿斯那棄國以下十三國は胃宿の付囑。
[21] 波羅耽羅國以下十八國は昴宿の付囑。

蘇提闍國、鳩知迦國、天干國、毗那婆國、波捜多國、奚迦國、是の如き十國を以て、心宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[一一]伽闍弗國、迦羅婆國、迦迦波他國、悉陀叉國、鬱瑟吒羅婆國、帝羅南國、阿羅毗國、那婆國、弗色迦羅婆國、摩兜利國、迦隣伽跋帝國、摩于達利國、畀姜闍國、鉢利犀羅婆國、此の十四國を以て尾・箕二宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今彼の[一二]婆蹉國、憂譚尼國、憂樓頻螺國、輸尼般多國、摩荼婆國、毗使拏提波國、遮羅羯波國、波羅斫迦羅國、羅摩伽摩國、迦尸弗國、鳩樓沙國、陀修國、盧醯多國、阿婆陀荼國、帝拏槃那國、遮達那國、毗伽闍國、此の十七國を以て、井宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[一三]波吒利弗國、摩尼藍婆國、婆樓那國、那遮羅國、羯那國、北般遮羅國、帝跋拏國、婆羅蹉國、瞻波國、蘇都那國、鳩樓差多國、西地國、富樓沙富羅國、侯彌單國、藍摩婆國、翟羅國、奚摩國、闍耶波梯國、婆求彌國、恒河門國、頭婆羅婆帝國、梅達羅跋帝國、婆樓迦車國、蘇尼棄國、翟沙跋帝國此の二十五國を以て、鬼宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく、「我れ今、彼の[一四]寄薩梨國、摩訶尼梯國、烏場國、須尼棄國、波羅婆國、憂羅婆國、區荼國、尼佉國、乾荼波羅婆國、婆寄多國、是の如き十國を以て、柳宿の攝護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[一五]阿蒭遮國、蘇跋拏國、闍吒國、金性國、摩兜羅國、毗摩尸利國、檢婆樓遮國、蘇梨國、婆求遮國、頻頭羅婆國、婆羅那國、般遮嚢伽羅國、此

【一一】伽闍弗國以下十四國は尾・箕二宿の付囑。

【一二】婆蹉國以下十七國は井宿の付囑。

【一三】波吒利弗國以下の二十五國は鬼宿の付囑。

【一四】寄薩梨國以下の十國は柳宿の付囑。

【一五】阿蒭遮國以下十二國は星宿の付囑。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「汝等諦かに聽け、我れ世間の天人仙中に於て、一切の知見最も殊勝たり。亦諸の宿曜辰をして國土を擁護し、衆生を養育せしむ。汝等宣告して、彼れをして得て知ること我が所分の如く、國土衆生各各分に隨つて、擁護し養育せしめよ」と。大梵王等、佛に白して言さく「是の如し。大德婆伽婆よ、唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく、「我れ今彼の[六]于摩國、陀樓國、悉支那國、奈摩陀國、陀羅陀國、佉沙國、羅佉國、睒摩國、侯羅婆國、今頭迦國、頌闍婆國、沒遮波國此の十二國を以て角宿の擁護養育に付囑せり。亦角宿日に建立する國土・城邑・聚落及び角宿日に所生の衆生を護らんことを。汝等宣告して、彼れをして得知せしめよ」と。梵王等言さく、「是の如し。大德婆伽婆よ。唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく、「我れ今、彼の[七]阿羅荼國、訶利那國、叔迦羅國、波盧羅國、弗利睒國、那摩帝國、倶致婆國、蘇那婆國、睒摩國、跋陀婆國、是の如き十國を以て、亢宿の擁護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく、「我れ今、彼の[八]佉搜迦國、信頭婆遲國、阿摩利國、餘尼目佉國、難陀婆國、伽沙國、跋使倶闍國、由婆迦國、婆佉羅國、沙婆羅國、伽樓荼國、鳩蘇迦國、婆遮利婆國、此の十三國を以て、氐宿の擁護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく「我れ今、彼の[九]波頭摩國、弗色迦羅國、日帝國、嵩伽摩國、耆利國、不摩婆國、南耆利國、遮波羅國、修帝達睒國、提婆那國、奚周迦國、此の十一國を以て房宿の擁護養育に付囑す」と。乃至「唯然り教を受けたてまつらん」と。

爾の時、佛、梵王等に告げて言はく、「我れ今彼の[一〇]旃羅婆國、鳩羅婆國、牟羅婆國、能伽婆國、

【六】于摩國以下十二國は角宿の付囑。

【七】阿羅荼國以下十國は亢宿の付囑。

【八】佉搜迦國以下十三國は氐宿の付囑。

【九】波頭摩國以下の十一國は房宿の付囑。

【一〇】旃羅婆國以下十國は心宿の付囑。

卷の五十六

月藏分第十二[一] 星宿攝受品第十八

爾の時、佛、娑婆世界主大梵天王・釋提桓因・四天王に告げて言はく、「過去の天仙云何んが、諸の宿曜辰を布置し、國土を攝護し、衆生を養育せるや」と。娑婆世界主大梵天王、釋提桓因、四天王等、佛に白して言さく、「過去の天仙、諸の宿曜辰を分布し安置し、國土を攝護し、衆生を養育するに、四方の中に於て各所主有り」と。

「東方の七宿[二]。一は角宿、衆鳥を主り、二は亢宿、出家して聖道を求むる者を主り、三は氐宿、水生の衆生を主り、四は房宿、行車して利を求むるを主り、五は心宿、女人を主り、六は尾宿、洲渚の衆生を主り、七は箕宿、陶師を主る。

「南方の七宿[三]。一は井宿、金師を主り、二は鬼宿、一切の國王大臣を主り、三は柳宿、雪山の龍を主り、四は星宿、巨富者を主り、五は張宿、盜賊を主り、六は翼宿、商人を主り、七は軫宿、須羅吒國を主る。

「西方の七宿[四]。一は奎宿、行船の人を主り、二は婁宿、商人を主り、三は胃宿、婆樓迦國を主り、四は昴宿、水牛を主り、五は畢宿、一切衆生を主り、六は觜宿、鞞提訶國を主り、七は參宿、刹利を主る。

「北方の七宿[五]。一は斗宿、澆部沙國を主り、二は牛宿、刹利及び安多鉢竭那國を主り、三は女宿、鴦伽摩伽陀國を主り、四は虛宿、般遮羅國を主り、五は危宿、著花冠者を主り、六は室宿、乾陀羅國、輸盧那國、及び諸の龍蛇腹行の類を主り、七は壁宿、乾闥婆、善音樂者を主る、大徳婆伽婆よ。過去の天仙是の如く四方に諸宿を布置して、國土を攝護し、衆生を養育せり」と。

【一】宋・元・明の三本は月藏分第十二の六字なし。
【二】東方の七宿。
【三】南方の七宿。
【四】西方の七宿。
【五】北方の七宿。

摩偷・支提國・婆蹉及び𨍏耶・羅吒・憂禪尼・羅佗・輸盧那・摩尼躏譁國・乾陀・波吒羅・般提・婆樓帝・跋尼・悉都那・瞻波・鉢浮尼・富樓沙富羅・烏場・寄薩梨・金性・摩都羅・波斯・勅勤土・般遮嚢伽羅・尸利耶摩國・叵耶・藪利迦・罽賓・跋利國佉羅・憂羅賖・伽賖・遮居國・達羅・那離沙・鞞提・沙勒國・婆樓分・周迦・干塡及び部善・龜茲・緊那羅・震旦等の國土、護持し安置せしめよ。此の一切の國に於て諸龍の無分の者一百八十萬、夜叉等の無分は八頻婆羅に及ぶ、修羅の分を得ざるは六萬那由他、天女等の無分は六十二百千なり、我れ今悉く汝に謝す、各本宮殿に住し、我が正法を護持せよ。當に汝に神呪を與ふべし。惡衆生を遮障し、諸の惱害一切の鬪諍・訟・亢旱・及び水潦・病儉、諸の賊寇を休息し、三精氣を增長し、諸の惡を休息せしめ、我が正法を護持し、三寶種を熾然し、聲聞なる諸比丘の三業常に相應せる、剃頭して戒を持たざるもの、一切皆護持せよ。諸の聲聞の爲の故に具さに諸の田宅を捨て、飲食及び湯藥、一切の所須有るもの、是の如き諸の施主、汝等護りて養育せよ」と。

大方等大集經卷第五十五

時に世尊重ねて此の義を明かにせんと欲して、偈を說いて言はく、

「兩足大法王、衆を觀て是の言を作さく。帝釋、汝我れに問ひ、各與へられたる其の分に隨ふ。天・龍・鳩槃茶・夜叉・修羅刹は閻浮の諸の國土の城邑・衆くの聚落・曠野・諸の樹林・山巖・井泉池・法眼久しく住するを得。諸の惡を休息せしめ、豐饒にして悉く樂しむ可し。閻浮提に於ける四天中の鬼神の爲に付囑す。勤めて護持せよ。汝等眷屬を捨てよ。我れ復更らに分布せん。瞋恚し嫉妬すること莫れ、與に當に隨喜せんと欲せよ」と。法喜禪味食、是の如き諸の天衆一切皆悉く起ち、咸是の如き言を作す。「我等正法の爲に、閻浮提を護持し、聲聞の持戒を具して積聚を爲さざる者、剃頭して戒を持たざるもの、法眼をして增さしめんと欲するもの、我等皆至心に勤加して護り養育せん」と。導師彼れに告げて言はく、「正法は我が滅後具滿すること五百年なり。堅固にして解脫に住す。五百年は禪誦にして、五百年は塔寺を造り、後の五百年に至り鬪諍に堅住す。後時に剃頭有り、破戒にして羞恥無し。是の如き輩を供養するも亦無量の福を得るなり、譬へば金の無價の如し。金を除けば銀寶に至り、鍮石・僞の銅・鐵・白鑞・及び鉛・錫あり。世間若し無寶なれば錫鑞最上と爲る。佛寶も亦是の如し。最尊獨り第一なり。次寶は辟支佛・羅漢・餘の證果・得定・淨持戒・破戒・名字の僧なり。深く信じて解脫を求め、若し能く彼れを供養すれば久しからずして忍地に住し、必ず速かに菩提を證せん。六欲の諸の天子・寶國の諸の鬼神・住林の乾闥婆・海中の十大龍・十大鳩槃茶・夜叉の十神通、各本宮殿に住し、我が正法を護持せよ。餓鬼は曠野に住し、毘舍遮は空室に、富單は野田に依り迦吒は塚間に住し、是の如く各隨喜して、分に依りて皆護持し、分に依りて正しく護らず。復勤めて他を惱ます、我れ是の如き等を以て、更らに轉じて餘天に付す。諸の龍・夜叉衆・乾闥・緊那羅・天女・修羅等、羅刹・鳩槃茶は普く諸の國土に遍く安置し護り養育せよ。迦毘・波羅奈・摩伽・拘薩羅・般遮・鴦伽國・蘇摩・阿濕婆・

爾の時、娑婆世界主大梵天王・坐より起ちて佛に向ひ合掌し、頭面に禮を作し、是の言を作さく。「大德婆伽婆よ。我れ今復大陀羅尼を以て、諸の惡龍及び惡鬼神を降し、國土を護持し、一切諸の惡衆生を遮障せん」と。是の語を作し已つて、即ち呪を說いて曰はく、

哆地夜他一　曇無囉牟嘍囉牟嘍二　那伽牟嘍三　那伽牟嘍四　阿藪囉牟嘍五　藥叉牟嘍六　鳩槃茶牟嘍七　浮單那牟嘍八　迦吒富單那牟嘍九　阿耶婆牟嘍一〇　侯呵侯呵牟嘍一一　呵呵呵呵一二　牟廚帝藥叉牟嘍囉婆呵囉婆呵一三　囉婆呵一四

薩婆烏闍囉婆呵一五　蘇婆呵一六

爾の時、有らゆる諸の天・龍王・鳩槃茶・餓鬼・毗舍遮・富單那・迦吒富單那の飲血・食肉の者皆悉く驚怖し、憂愁し、恐懼して佛に向ひ合掌し頭面に足を禮し、是の言を作さく、「唯願くは世尊よ。大悲もて我等を覆護したまへ。云何か復存活を得るや」と。佛の言はく、「汝等且く憂愁すること莫かれ、大地の有らゆる華果・五穀・藥草の衆味淸淨にして、未だ食はずして地に墮落する者(あり)。是の如き華果の衆味精氣は汝等之れを食ひて活命を得るに足る。若し復人有りて、食を作すに、淸淨にして遺落して地に在れば、汝等亦當に食ふべし。其れ精氣にして自ら充濟す。復我が聲聞弟子有りて禪定を修する者は、己の善根を以て呪願せよ。汝等も亦色力精氣豐盛にして眷屬朋黨勢力を具足するを得ん、若し施主有りて我が弟子に寺舍・園林・田地・舍宅を施し、稱名呪願せば、汝當に彼れに於て與に隨喜を欲し、護持し養育すべし。是の事を以ての故に、汝等の宮殿當に增長を得べし。若し施主有りて、我が弟子に飲食・衣服・臥具・湯藥を施し、之れを受取せる時、稱名呪願し、汝も亦彼の呪願を以て隨喜すれば、汝隨喜の故に汝等便ち壽命增長・顏容增長・安樂增長・朋黨增長・勢力增長を得ん。汝等、晝夜應當に精勤して、是の如き施主及以び受者を護持し養育すべし」と。爾の

女・淨目天女・饒財天女・寶藏天女・摩尼爪天女・黑繩天女・隨時天女・頂天女・天水天女・眼月天女・蓮華天女・憂曇婆羅天女・賒尸天女・明炬目天女・善意天女・難勝天女・勝目天女、是の如き等の六十二百千の諸大天女は閻浮提の種種の塔寺・城邑・聚落・園林・泉池・河邊・山谷・大海邊に依つて住し、分を得ざる者なり。汝等所住處に隨ひ各各彼に於て我が正法を護持し養育せよ。汝等彼の有らゆる怖畏・鬪諍・怨讐・飢饉・疫病・他方の怨敵・非時の風雨・氷寒毒熱に於て悉く休息せしめ、不善なる諸の惡衆生の瞋恚・蟲獗を遮障し、苦辛・澁觸・無味等の物悉く休息せしめ、我が法眼をして久しく世間に住せしめ、三寶種を紹ぎて斷絕せしめず。三種の精氣を增長熾然し、諸の天人を利益し安樂にせよ。故に勤加し護持す。是の因緣を以て、汝等今世及び後世常に衆生を利益し安樂にするを得るなり」と。時に彼の六十二百千の天女、佛に白して言さく、「大德婆伽婆よ。我等佛法を護持養育し、鬪諍を休息し、一切の三種精氣を增長し、乃至世尊の聲聞弟子の三業相應し積聚する所無き者は、我等勤加し護持し養育す」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。善女人の輩、汝等應當に是の如く護持すべし」と。諸の來れる大衆皆も亦、隨喜し讚へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、復一切の諸天・乾闥婆・乃至諸大天女に告げて言はく、「我れ今汝に息諸諍訟大陀羅尼心を與へん　汝等此の陀羅尼心を以ての故に、各已の國、若は曜宿、度を失ふに於ける諸の衆生を攝し、敬信を得せしめ、一切の鬪諍悉く休息を得せしめん」と。

是の語を作し已つて、即ち呪を說いて曰はく、

哆地夜他一　摩陀那二　摩陀那三　瞿摩陀那阿婆摩多四　阿兮摩多五　摩陀那佉六　阿差摩抵波羅七　賒摩帝八　阿唎婆三摩摩帝尼佉摩帝九　波賒摩帝一〇　蘇遮羅拏摩帝阿毘摩帝一一　阿囉毘摩帝一二　悉陀頞他摩帝一三　叉婆摩帝一四　蘇婆呵一五

夜叉・賒羅毘夜叉・迦吒育利夜叉・婆羅目企夜叉・婆羅稚夜叉・婆摩羅夜叉・其梨迦吒夜叉・由梯迦夜叉・其梨呵夜叉・滿面夜叉・迦賒毘提夜叉・護國夜叉・樓迦夜叉・箭爪夜叉・波那流支夜叉・狼爪夜叉・師子怖夜叉・呵樓尼夜叉・修羅闍毘夜叉・阿荼闍梨夜叉・得叉梨師夜叉・灰手夜叉・蘇摩那虎夜叉・羅摩那時夜叉・惡叉尼棄羅夜叉・質多羅夜叉・佛護夜叉、是の如き等の八頻婆羅の諸夜叉大將・閻浮提の種種の寺舍・園林・泉池・山巖・林藪・樹下に依り安住して分を得ざる者なり。應當に容忍して恨むこと莫るべし。所住處の乃至山林、樹下に隨つて、各本處に住し、我が正法を護持し養育し、一切衆生行を利益し安樂にせよ。是の因緣を以て、汝等今世及以び後世自利し利他す。何を以ての故に、彼の諸の天・龍・乾闥婆・緊那羅・夜叉・阿修羅・鳩槃茶・天女・羅刹文等、其の國土の昔の所住處に隨ひ、彼の諸の天龍、乃至天女彼彼の諸の國土を護らんが爲の故に、一切衆生を安置し養育せん(ために)。是の故に汝等諸の阿修羅の分を得ざる者應當に容忍して恨むこと莫るべし。謂ゆる羅睺羅阿修羅王・毘摩質多羅阿修羅王・波羅陀阿修羅王・睒婆利阿修羅王・牟眞隣陀阿修羅王・須質多羅阿修羅王・跋稚毘盧遮那阿修羅王・悉利羅耆阿修羅王・影羅跋支阿修羅王・瞿摩闍毘阿修羅王・毘荼叉阿修羅王・那耶遮利阿修羅王・伽闍彌羅阿修羅王・初羅檳荼阿修羅王・阿斯末阿修羅王・迦摩跌知阿修羅王・婆稚乾荼阿修羅王・畢他摩尼阿修羅王・波羅那佉阿修羅王・薩婆鴦伽叉阿修羅王・訖賖婆睺阿修羅王、是の如き等の六萬那由他の阿修羅王・閻浮提に住し分を得ざる者なり。應當に容忍して恨むこと莫るべし。各本宮に住して我が正法を護持し養育し、當に一切衆生の利益を作すべし。是の因緣を以て、汝等今世及以び後世自利し利他す。何を以この故に、彼の諸の天・龍・乾闥婆・緊那羅・夜叉・阿修羅・鳩槃茶・天女・羅刹女等、其の國土の昔の所住處に隨ひ、彼の諸の天龍・乃至天女、彼彼の諸の國土を護らんが爲の故に、一切衆生を安置し養育せん(ために)、是の故に汝等諸の大天女應當に容忍して恨むこと莫るべし。謂はゆる歇大天女・造光天女・地解天女・增護天女・解脫天女・增水天女・少熱天

諸の天人を利益し、安樂ならしむるが故に、勤加し護持せよ。是の因緣を以て、汝等今世及以び後世常に安樂を得るなり」と。毘首羯磨天子、及與び眷屬・迦毘羅大夜叉・法護夜叉・堅目夜叉・大目夜叉・勇健夜叉・摩尼跋陀夜叉・賢滿夜叉・持威德夜叉・阿荼薄拘夜叉・槃支迦夜叉、及與び眷屬・婆修吉龍王・須摩那果龍王・弗沙毘摩龍王、及び眷屬・呵梨帝鬼子母天・伊羅婆雖天女・雙瞳目天女・及與び眷屬、各是の言を作す。「大德婆伽婆よ。我等共に震旦國土を護りて、一切の鬪諍を休息し、乃至三種精氣を增長し、我等勤加して護持し養育し、乃至世尊の聲聞弟子の三業相應の不積聚者も倍復安置し護持し養育せん」と。爾の時、世尊讚へて言はく、「善い哉。善い哉。善男子よ。汝應に是の如く我が法を護持すべし」と。諸の來れる大衆も亦復隨喜して、讚へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

諸の仁者よ。我れ閻浮提一切の國土を以て、諸天・乾闥婆・緊那羅・夜叉・龍王・阿修羅・鳩槃荼、諸の天女等に付囑し、各一切衆生を安置し護持し養育せしむ。是の故に汝等諸の大龍王の分を得ざる者も應當に容忍し、恨むこと莫るべし。謂ゆる娑伽羅龍王・阿那婆夵多龍王・伊羅跋龍王・婆樓那龍王・善住龍王・德叉迦龍王・恆河龍王・辛頭龍王・博叉龍王・私陀龍王・提首尼龍王・摩醯讀遮利龍王・金脇龍王・跋致蘇多龍王・弗婆鉢賖龍王・衆色雲龍王・拘那跋帝龍王・阿斯多龍王・遮彌羅龍王・香山龍王・那羅延面龍王・婆婆牟支龍王・那陀叉龍王なり。是の如き等一百八十萬の諸大龍王は閻浮提に住して分を得ざる者なり、應當に容忍し恨むこと莫るべし。汝等各本宮に住し、我が正法を護持し養育し、當に一切衆生を利益するの行を作すべし。是の因緣を以て、汝等今世及以び後世自利し利他す。何を以ての故に、彼の諸の天龍乾闥婆・緊那羅・夜叉・阿修羅・鳩槃茶・天女・羅刹女等其の國土の昔の所住處に隨ひて、彼の諸の天龍乃至天女は、彼彼の諸國土を護らん爲の故に、一切衆生を安置し養育す 是の故に汝等大夜叉王の分を得ざる者、應當に容忍して恨むこと莫るべし。謂ゆる箭毛

哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[六四]奚周迦國を以て、王活乾闥婆五百の眷屬・奚卑㵝龍の百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に奚周迦國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[六五]億尼國を以て、勇健執鑾大夜叉將の千の眷屬・象耳龍王の三千の眷屬・吉迦知羅刹女・箏池羅刹女、各二千五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に億尼國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、鄯善國を以て、阿羅知天子の百の眷屬・阿沙迦夜叉の五千の眷屬・無著羅刹女の十千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に鄯善國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[六六]緊那羅國を以て、赤目大夜叉の十千の眷屬・不動鳩槃茶の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に緊那羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[六七]震旦國を以て、毘首羯磨天子の五千の眷屬・迦毘羅夜叉大將の五千の眷屬・法護夜叉大將の五千の眷屬・堅目夜叉大將の五千の眷屬・大目夜叉大將の五千の眷屬・勇健軍夜叉大將の五千の眷屬・摩尼跋陀夜叉大將の五千の眷屬・賢滿夜叉大將の五千の眷屬・持威德夜叉大將の五千の眷屬・阿荼薄拘叉大將の五千の眷屬・般支迦夜叉大將の五千の眷屬・婆修吉龍王の五千の眷屬・須摩那杲龍王の五千の眷屬・弗沙毘摩龍王の五千の眷屬・呵梨帝鬼子母天の五千の眷屬・伊羅婆雌大天女の五千の眷屬・雙童目大天女の五千の眷屬に付囑したまひ、「汝等賢首よく皆共に、震旦國土を護持し、彼に於ける有らゆる一切の觸惱・鬪諍・怨讐・忿競・言訟・兩陣交戰・飢饉・疫病・非時風雨・氷寒毒熱悉く休息せしめ、不善の諸惡衆生の瞋恚・麁獷を遮障し、苦辛・澀觸・無味等の物悉く休息せしめ、我が法眼をして、久しく住せしむるが故に、三寶種紹ぎて斷絶せざるが故に、三種精氣增長を得るが故に、

の百の眷屬・星月羅刹女の五百の眷屬・天鎧餓鬼將の二百の眷屬・歡惡夜叉の三百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に遮居迦國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[59]逽提國を以て、具足龍王・善道龍王、各百の眷屬・堅目鳩槃茶の百の眷屬・八毘那耶迦天女の一百の眷屬・道神天女・尸利天女、各二百五十の眷屬・珂貝天女・安住天女、各五十の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に逽提國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[60]沙勒國を以て、髮色天子の百の眷屬・護國乾闥婆の百の眷屬・佛護夜叉・助雹夜叉、各五百の眷屬・孔雀項龍王の百の眷屬・山月龍女の五百の眷屬・訖利波眕鳩槃茶の五百の眷屬・持德天女・龍護天女、各二百五十の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に沙勒國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[61]于塡國土を以て、難勝天子・千の眷屬・散脂夜叉大將の十千の眷屬・羖羊脚大夜叉の八千の眷屬・金華鬘夜叉の五百の眷屬・熱舍龍王の千の眷屬・阿那緊首天女の十千の眷屬、他難闍梨天女の五千の眷屬に付囑したまひ、「毘沙門王神力の加はる所、汝と共に于塡國土を護持せよ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[62]龜茲國土を以て、牟鎧天子の千の眷屬・黃頭大夜叉の千の眷屬・厭財羅刹女の千の眷屬・睺護大夜叉の千の眷屬・踈齒鳩槃茶の千の眷屬・尸利遮吒羅刹・鹿齒羅刹の各五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に龜茲國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[63]婆樓迦國を以て、窶荼夜叉の千の眷屬・阿婆迦利鳩槃茶の百の眷屬・垂乳羅刹の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に婆樓迦國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い

千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に憂羅貽國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言く、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、佉羅婆羅國を以て、時蘭那乾闥婆の百の眷屬・華寶夜叉の千の眷屬・善樂目龍の千の眷屬・怖人鳩槃茶の五百の眷屬・順欲天人の百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に佉羅婆羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五四]阿踈居迦國を以て　牟尼佉利夜叉の二千の眷屬・好旃羅刹の千の眷屬・婆稚龍の五百の眷屬・止雲鳩槃茶の百の眷屬・阿梨帝羅刹女の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に阿踈居迦國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五五]達羅陀國を以て、禪婆達利乾闥婆の百の眷屬・道路夜叉・黃頭夜叉・勇健夜叉、各千の眷屬・跋陀龍王の二千の眷屬・孔雀毛龍王の百の眷屬・生解天女・毛羅闍利天女・各二百五十の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に達羅陀國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて　「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五六]弗梨沙國を以て、奪意夜叉・戒賢夜叉、各五百の眷屬・雲腹龍王の三百の眷屬・離惡鳩槃茶の八十の眷屬・搔跋脩羅天女の百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に弗梨沙國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五七]伽貽國を以て、持華乾闥婆・摩睺羅伽乾眷屬各千の眷屬・金枳(今支反)持夜叉・毘持夜叉、又各二百五十の眷屬・光掌龍王・臨奪龍王、各五百の眷屬・阿樓尼天女・華目天女、各二百五十の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に伽貽國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五八]遮居迦國を以て、劍婆羅龍王の五百の眷屬・極惡鳩槃茶の百の眷屬・那朱波毘舍遮

國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五〇]叵耶那國を以て、海怖天子の千の眷屬・那荼浮乾闥婆の百の眷屬・馬目緊那羅の百の眷屬・莚齒夜叉の二千の眷屬・大齒夜叉の千の眷屬・婆波羅耳龍の五百の眷屬・動手阿修羅の百の眷屬・觧脱鳩槃茶の百の眷屬・質摩只薩梨羅刹如の五百の眷屬・黑闇羅刹・護門羅刹各二千五百の眷屬・月光羅刹の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に叵耶那國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言く、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、尸利耶摩國を以て、黑髮天子の百の眷屬・金臂乾闥婆の八十の眷屬・風響緊那羅の百の眷屬・阿樓那夜叉の千の眷屬・八髮夜叉の千の眷屬・上誦龍王の百の眷屬・快作阿修羅の百の眷屬・香箭鳩槃茶の五百の眷屬・黑澤天女の五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に尸利耶摩國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五一]跋離迦國を以て、赤銅色天子の八百の眷屬・媚眼乾闥婆の百の眷屬・鍼黑緊那羅の百の眷屬・牟耳夜叉の五千の眷屬・黲羅羯那龍の百の眷屬・息牛阿修羅の百の眷屬・阿毘棃薩利鳩槃茶の五百の眷屬・長苗天女・妙勝天女各五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に跋離迦國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五二]罽賓那國を以て、怖黑天子の五十の眷屬・五音乾闥婆の千の眷屬・水怍緊那羅の五百の眷屬・廣執夜叉の三萬の眷屬・長生夜叉・流雲觧脱夜叉各二千五百の眷屬・睺離荼龍十千の眷屬・黲金阿修羅の千の眷屬・陀樓跋鳩槃茶の五百の眷屬・正辯天女の千の眷屬・園林羅刹女の十千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に罽賓那國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[五三]憂羅睺國を以て、那羅摩乾闥婆の百の眷屬・五怖夜叉の二千の眷屬・尸利沙夜叉の

十の眷屬・緊鉾夜叉の五百の眷屬・氷伽羅阿修羅の五百の眷屬・賢月鳩槃茶の百の眷屬・雲浮樓天女の五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に摩都羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[46]藪離迦國を以て、財目天子の千の眷屬・善頂乾闥婆の百の眷屬・睒摩鳩斯緊那羅の五百の眷屬・堅固夜叉の五百の眷屬・耶婆那夜叉の千の眷屬・無畏緊那羅の百の眷屬・跋羅頭婆闍夜叉の五百の眷屬・調婆何利阿修羅の八百の眷屬・瞿伽叉鳩槃茶の三百の眷屬・調婆何利羅刹の五百の眷屬・釋迦羅刹の五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に藪離伽國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[47]般遮羅伽羅國を以て、婆婆叉天子の千の眷屬・月光乾闥婆の百の眷屬・閻目夜叉の千の眷屬・大雲阿修羅の五百の眷屬・訶奴闍鳩槃茶の百の眷屬・摩尼枳薩梨天女の五百の眷屬・多摩羅婆利天女の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に般遮羅伽羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[48]波斯國を以て、檀尧師天子の五千の眷屬・拘毘羅乾闥婆の三千の眷屬・梨碑摩師緊那羅の千の眷屬・住勇夜叉の五百の眷屬・那摩羅王夜叉の五百の眷屬・菴羅提伽乾闥婆の千の眷屬・伊沙那時緊那羅の千の眷屬・竭婆拘支鳩槃茶の四千の眷屬・那羅斯羅刹の五千の眷屬・呵梨達羅刹の二千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に波斯國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊[49]勅勤國土を以て、佉樓那天子の千の眷屬・妙好乾闥婆の五百の眷屬・帝利迦緊那羅の五百の眷屬　三鉢夜叉の二萬の眷屬・怖畏夜叉の十千の眷屬・休流歇龍の千の眷屬・金耳阿修羅の千の眷屬・善林樹鳩槃茶の千の眷屬・金枳（今支反）薩羅羅刹の五千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に敕勤

女、各二千五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に西地國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[四一]富樓沙富羅國を以て、阿羅脯斯天子の千の眷屬・難提乾闥婆の百の眷屬・淨衆緊那羅の百の眷屬・摩尼華夜叉の千の眷屬・迦荼龍王・阿婆羅羅龍王、各二千五百の眷屬・天怖伽樓羅の百の眷屬・訖多孫地阿修羅の五百の眷屬・燒竹鳩槃荼の五百の眷屬・多盧斯天女・三目天女、各五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に富樓沙富羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[四二]烏場國土を以て、習音天子の五百の眷屬・華光乾闥婆の三百の眷屬・善怖緊那羅の百の眷屬・迦羅婆提夜叉の五百の眷屬・郎浮羅龍の三百の眷屬・遮曼池阿修羅の百の眷屬・曼陀果鳩槃荼の百の眷屬・呵梨帝天女・染賢天女、各五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に烏場國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[四三]寄薩離國を以て、黑色天子の千の眷屬・金色乾闥婆の百の眷屬・跋那牟至緊那羅の八十の眷屬・散髮夜叉の五百の眷屬・力天龍王の百の眷屬・那佉遮利阿修羅の百の眷屬・無垢聲鳩槃荼の八十の眷屬・勝鍼天女・屬天女、各五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に寄薩離國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[四四]金性國を以て　禪那離沙婆天子の五百の眷屬・摩那婆乾闥婆の百の眷屬・善稱緊那羅の百の眷屬・禪那離沙婆夜叉の五百の眷屬・寶冠阿修羅の百の眷屬・香音鳩槃荼の八十の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に金性國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[四五]摩都羅國を以て、歌讃天子の百の眷屬・五髻乾闥婆の五百の眷屬・威德緊那羅の八

屬・軍那羅叉鳩般茶の百の眷屬・憂波羅天女・流泉天女、各二千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に阿槃提國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と

爾の時、世尊、[三六]婆樓拏跋帝國を以て、鷄婆利天子の千の眷屬・衆綵乾闥婆の五百の眷屬・博叉流支緊那羅の二百の眷屬・迦茶龍王の憂波迦茶王龍の各二千の眷屬・毘摩阿修羅の百の眷屬・月焱鳩槃茶の三百の眷屬・自護天女・摩尼頻頭天女、各千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に婆樓拏跋帝國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[三七]帝跋尼國を以て、師子齒天子の五千の眷屬・薩陀曼多乾闥婆の五百の眷屬・牟尼薩羅緊那羅の百の眷屬・摩尼賢夜叉・滿賢夜叉の各二千五百の眷屬・鐵耳阿修羅の五百の眷屬・阿槃多鳩槃茶の百の眷屬・薩市尼天女・般支天、各千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に帝跋尼國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[三八]瞻波國を以て、香雲天子、并びに諸の天仙の一千の眷屬・德鬘乾闥婆の二百の眷屬・求籌遮緊那羅の百の眷屬・堅毛夜叉の五千の眷屬・迦那迦阿修羅の百の眷屬・善現鳩槃茶・近現鳩槃茶、各五萬の眷屬・什目天女の五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に瞻波國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[三九]悉都那國を以て赤雲天子の千の眷屬・霑浮樓乾闥婆の五百の眷屬・摩尼遮婆緊那羅の百の眷屬・難勝夜叉の千の眷屬・泥茶鳩支阿修羅の五百の眷屬・裨宪迦鳩槃茶の百の眷屬・靜默天女・善目天女、各一千五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に悉都那國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊[四〇]西地國を以て、山眼天子の二百の眷屬・法喜乾闥婆の百の眷屬・藪支羅婆緊那羅の百の眷屬・大身夜叉の千の眷屬・執刀阿修羅の百の眷屬・止流鳩槃茶の三百の眷屬・金光天女・果光天

軍那羅大夜叉、各千の眷屬・鉢頭摩迦鳩槃茶大將の五百の眷屬・婆樓尼大天女の五千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に摩訶羅吒國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[三一]輸盧那國を以て、千金天子の千の眷屬・善脇乾闥婆の千の眷屬・白色緊那羅の五百の眷屬・世𤢺夜叉の千の眷屬・大富鳩槃茶の五百の眷屬・極惡天女・摩尼天女、各五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に輸盧那國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[三二]摩尼譫鞞國を以て、華音天子の五百の眷屬・那羅延乾闥婆の二百の眷屬・摩醯首羅華緊那羅の三百の眷屬・園眼夜叉の五百の眷屬・波羅奈子阿修羅の百の眷屬・赤目鳩槃茶の百の眷屬・雪王天女の百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に摩尼譫(市瞻反)鞞國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[三三]波吒羅弗國を以て、婆羅流支天子の千の眷屬・人華乾闥婆の五百の眷屬・摩尼瞿沙緊那羅の三百の眷屬・聲佉流支夜叉の五百の眷屬・婆羅地阿修羅の五百の眷屬・尸利瞿沙龍の八百の眷屬・浮流尼鳩槃茶の百の眷屬・毘樓池天女の五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に、波吒羅弗國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。(欠鴦伽國下)

爾の時、世尊、[三四]乾陀羅國を以て、火布天子の三千の眷屬・喜歌乾闥婆の千の眷屬・大勝緊那羅の五百の眷屬・師子堤夜叉の五百の眷屬・伊羅鉢龍王の千の眷屬・賢力龍王の千の眷屬・精氣主阿修羅の五百の眷屬・猨猴聲鳩槃茶の百の眷屬・摩尼天女頻頭天女、各千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に乾陀羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[三五]阿槃提國を以て、師子愛天子の五千の眷屬・摩羅曼多乾闥婆の二千の眷屬・勝目緊那羅の百の眷屬・蘇摩夜叉・地行夜叉の各千の眷屬・冰加羅阿修羅の三千の眷屬・婆私陀茶龍の千の眷

佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[二六]婆蹉國を以て、月光天子の十千の眷屬・蓮花香乾闥婆の千の眷屬・摩陀那果緊那羅の五千の眷屬・大果夜叉の五千の眷屬・阿樓那龍の千の眷屬・惡樹阿修羅の百の眷屬・葉眼鳩槃茶の五百の眷屬・阿那迦花天女の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に婆蹉國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[二七]睒毘國を以て、摩醯羅天仙の五千の眷屬・不酒乾闥婆の千の眷屬・離垢緊那羅の千の眷屬・因陀羅夜叉・蘇摩夜叉、各二千五百の眷屬・善現龍の千の眷屬・牟眞隣陀阿修羅王の五百の眷屬・優波檀提鳩槃茶・訖利迦睒鳩槃茶、各二千五百の眷屬・鬼子母天女・善護天女、各萬の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に睒毘國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[二八]優禪尼國を以て、月雲天子の五百の眷屬・門牟乾闥婆の千の眷屬・摩尼耳乾闥婆の五百の眷屬・五惡夜叉の千の眷屬・山臂龍王の五百の眷屬・木手阿修羅の三百の眷屬・善現鳩槃茶の五百の眷屬・毛齒天女の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に優禪尼國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[二九]修羅吒國を以て、法華天子の百千の眷屬・具欲乾闥婆將の萬の眷屬・山怖緊那羅仙の一百の眷屬・難陀龍王の十千の眷屬・驢眼阿修羅の五百の眷屬・善燈大夜叉の千の眷屬・大肚鳩槃茶將の千の眷屬・安隱天女の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に修羅吒國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[三〇]摩訶羅吒(世加反)國を以て、孔雀髮天子の五百の眷屬・樂欲乾闥婆・虎就乾闥婆、各五百の眷屬・乳味緊那羅の百の眷屬・主水龍王の千の眷屬・樂寶阿修羅の五百の眷屬・共羝脚大夜叉・

[四三] 寄薩離。
[四四] 金性。
[四五] 摩婦羅。
[四六] 藪離迦。
[四七] 般遮羅作羅。
[四九] 勃勤。
[五〇] 叵耶那。
[五二] 跋離迦。
[五三] 憂羅睺。
[五四] 阿跋居迦。
[五五] 達羅陀。
[五六] 弗梨沙。
[五七] 伽睺。
[五八] 遮居迦。
[五九] 簞提。
[六三] 婆樓迦。
[六四] 奚周迦。
[六五] 億尼。
[六六] 緊那羅。Kiṃnara

以上の三十三ヶ國中、二二は Soma、二三は Aśva、二四は Caitya、二五は Vatsa、四四は金地、五九は Śiśi、六六は Kiṃnara 等一見明瞭なるも、其の他は他資料と比較考證して註さるべきもの他日の研究に讓る。(國名註順序不同)

伽國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊[二二]般遮羅國を以て、羅拏時天子の五百の眷屬・樂歌乾闥婆の七百の眷屬・摩葉緊那羅の千の眷屬・般支迦夜叉將の五千の眷屬・安闍罹波阿修羅の千の眷屬・樂法鳩槃茶の五百の眷屬・左黑天女王・鑒天女、各二千五百の眷屬に付囑したまひ「汝等共に般遮羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[二三]蘇摩國を以て、寶髻天子の五千の眷屬・摩頭曼多乾闥婆の千の眷屬・勝縷緊那羅の千の眷屬・優波般遮迦夜叉將の二千の眷屬・黑龍王の千の眷屬・知欲阿修羅の千の眷屬・鳩羅婆鳩槃茶の六百の眷屬・斯多天女・博叉天女、各五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に蘇摩國土を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて曰はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[二三]阿濕婆國を以て、盧醯奴天子の千二百の眷屬・流水乾闥婆の千の眷屬・摩尼拓羅夜叉軍將の五千の眷屬・阿周羅阿修羅の六百の眷屬・日光龍王の無量の眷屬・摩尼拓利鳩槃茶の五百の眷屬・不可取天女・馬勝天女、各二千五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に阿濕婆國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[二四]摩偸羅國を以て、善擇天子の十千の眷屬・靜明乾闥婆の千の眷屬・遊梯迦緊那羅の二百の眷屬・勝欲夜叉・乘人大夜叉・各千五百の眷屬・無垢龍王の千の眷屬・伽楞拓利阿修羅の千の眷屬・雜色鳩槃茶の千の眷屬・奪意天女の二千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に摩偸羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊、[二五]支提耶國を以て、善賢天子の五百の眷屬・阿吒迦乾闥婆の五百の眷屬・無垢緊那羅の千の眷屬・除結夜叉・無結夜叉・各五百の眷屬・妙賢龍の千の眷屬・普竹阿修羅の五百の眷屬・牛王鳩槃茶の三百の眷屬・勝優波羅天女の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に支提耶國を護れ」と。乃至

梵 Udyāna 巴 Uyyāna 北印度境、乾陀羅の隣國なり。

【四八】波斯。Persia

【五二】罽賓那。Kaśmira 迦濕彌羅。迦葉彌羅、罽賓は舊譯なり。北印度古國の名。詳しくは望月佛教辭典第一卷八四九八五一參照せよ。

【六〇】沙勒。疏勒に同じ。今の Kāshgar なり。

【六一】于塡。梵 Kustana 屈丹薩那は音譯。又于闐于遁・谿丹・屈丹などに同じ。今の和闐 Khotan の地なり。

【六二】龜茲。梵 Kucha 又丘慈・屈支・倶支曩などに同じ。

【六七】震旦。Cina 振丹、眞丹、神丹、脂那、至那、斯那、支那。印度人より漢國を指す稱呼なり。

【二二】蘇摩。梵 Soma

【二三】阿濕婆。梵 Aśva.

【二五】支提耶。梵 Caitya.

【二六】婆蹉。梵 Vatsa

【二七】賒耶。

【二九】修羅吒。

【三〇】摩訶羅吒。

【三一】輪盧那。

【三二】摩尼譏韓。

【三五】訶槃提。

【三六】婆樓拏跋帝。

【三七】帝跋尼。

【三九】悉都那。

【四〇】西地。

を遮障し、養育し饒益する者、乃至一切不善の諸の惡衆生を遮障せん」と。爾の時、世尊は讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。諸の來れる大衆も亦復讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊[17]迦毘羅婆國を以て、火護緊那羅仙の千の眷屬・拘翅羅聲乾闥婆の萬の眷屬・婆闍跋帝夜叉大將の千の眷屬・奢摩那遮阿修羅の二萬の眷屬・跋那牟支龍王の一萬の眷屬・摩訶鉢奢鳩槃茶大將の五百の眷屬・旃遲梅茶梨二大天女・各一萬の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に迦毘羅婆國を護り、乃至諸の惡衆生を遮障せよ」と。彼等一切皆是の言を作す。「我等及び諸の眷屬は、迦毘羅婆國の周遍土境を護持し養育し、乃至諸の惡衆生を遮障せん」と。佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊[18]摩伽陀國を以て、善住炎光天子の千の眷屬・優波羅乾闥婆の千の眷屬・樂聲阿修羅の千の眷屬・善臂龍王・善直龍王各萬の眷屬・孔雀味阿修羅の五百の眷屬・拘那羅大夜叉の三千の眷屬・軍毘羅夜叉の百千の眷屬・十象鳩槃茶大將の百千の眷屬・憐惡天女・奪意天女・各十千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に摩伽陀國を護り、乃至諸の惡衆生を遮障せよ」と。佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊[19]拘薩羅國を以て、迷提羯那天子の千の眷屬・樂勝乾闥婆大將の十千の眷屬・烏麻緊那羅の千の眷屬・具德龍王の千の眷屬・弗沙鉢帝阿修羅の五百の眷屬・婆樓那夜叉大將・婆樓那王夜叉大將・各五萬の眷屬・那茶迦鳩槃茶の五百の眷屬・摩尼毘梨天女の千の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に拘薩羅國を護れ」と。乃至佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊[20]鴦伽國を以て、月音天子の萬の眷屬・樂欲乾闥婆大將・雲浮樓乾闥婆大將・各十千の眷屬・阿摩羅緊那羅の五百の眷屬・師子藏阿修羅の五百の眷屬・栴檀大夜叉力幢大夜叉・各五千の眷屬・奴羅車鳩槃茶の二千五百の眷屬・摩訶迦梨天女の二千五百の眷屬に付囑したまひ、「汝等共に鴦

迦維羅閲、都城の名悉達多太子の生處なり。四十八問註二を見よ。

【一八】摩伽陀。梵Magadha.摩竭・摩訶陀・摩竭提など音譯し、持甘露、善勝、無惱、無害などと譯す。中印度の國名。王舍城のある所なり。

【一九】拘薩羅。梵Kośala 憍薩羅。舍衞國の本名なり。

【二〇】鴦伽。梵Aṅga 鴦掘多羅に同じ。摩竭陀國の北に在る國名。

【二一】般遮羅。梵Pañcāla 般沙羅ともいひ、執五と譯す。此の國に仁慈の國王般遮羅の出でたる記事經論に散說せり。

【二四】摩偷羅。梵Mathurā 摩度、摩突羅、秣菟羅などと音譯す。孔雀・密善などと譯す。Jumna 河の西岸にある今のMuttra 地方なり。

【二八】優禪尼。梵 Ujjayanī 巴 Ujjenī 鄔闍衍那、優善那或は鬱支に作る。摩揭陀國の西南に當れる古國の名。

【三三】波吒羅弗。Pāṭaliputra

【三四】乾陀羅。Gandhāra 北印度境。

【三八】瞻波。Campā木名を以て國名にせり。中印度恒河に濱せり。

【四一】富樓沙富羅。Puruṣapura 北印度に在り。

【四二】烏場。烏仗那のこと。

ざるが故に、三種精氣增長を得るが故に、一切の鬪諍・言訟・怨讐・疫病・飢饉・短乏を休息し、非時の亢旱、曜宿の失度を斷除する爲の故なり。乃至世尊の聲聞弟子の三業相應して不積聚の者、當に勤めて養育すべし」と。爾の時、世尊讃へて言はく、「善い哉。善い哉。善男子よ。汝等是の如く一切三界の衆生を利益し安樂になせ」と。故に及び一切大衆も亦復讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊は一切[一五]畢利多の曠野に依りて住する者、一切毘舍遮の空舍に依りて住する者、一切富單那の野田に依りて住する者、一切迦吒富單那の塚間及び廁邊に住する者に告げて言はく、「汝等各住處に於て、我が正法を護持し養育せよ」と。時に畢利多等各是の言を作さく、「唯然り、敎を受けたてまつらん」と。佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊は復是の言を作さく、「諸の仁者よ。有らゆる諸天・乾闥婆・緊那羅・夜叉・羅刹・龍王・阿修羅・鳩槃茶は昔世尊の所分得分の如く、國土・城邑・聚落・舍宅の所得處に隨いて爲に護持し安置し養育を作す。我れ當に隨喜すべし。一切大衆も亦復隨喜せん。若し復、諸の天・龍・夜叉・乃迦吒富單那等有りて、昔の世尊の所分得分の如く、國土・城邑を正しく護持し養育せざれば、我れ當に轉じて諸餘の天龍に付して、其れをして安置し護持し養育せしめ、各國土に隨ひて善く護持を作さしむべし」と。

「我れ今[一六]波羅那國を以て、善髮乾闥婆・千の眷屬・阿尼羅夜叉仙・五百の眷屬・須質多羅阿修羅・無量の眷屬・德叉迦龍王・百の眷屬・大黑天女・五百の眷屬に付囑す。汝等波羅奈國を護持し養育し、我が法をして久しく住するを得せしめんが爲の故に、三寶種紹ぎて斷絕せざるが故に、一切惡衆生を遮障するが故に」と。時に善髮乾闥婆・阿尼羅夜叉仙・須多羅阿修羅・德叉迦龍王・大黑天女等各眷屬と與に咸く是の言を作す。「大德婆伽婆よ。我等波羅奈國の周遍土境を護持し養育し安置し、不饒益

【一五】畢利多。梵 Preta 薜荔多、閉黎多、閉麗多、閉戻多、輯禮多、卑帝黎、彌荔多、等多くの音譯を出す。餓鬼の總名なり。

【一六】波羅那。梵 Vārāṇasī 又波羅捺、波羅奈斯、婆羅痆寫と音譯す。江繞と譯す。江河の流域にあればなり。鹿野園此の中にあり。今の Benares なり。

【一七】迦毘羅婆。迦毘羅婆蘇都 Kapilavastu の略。迦維。

に、我が佛法久しく住するを得ん爲めの故に、應當に佛の正法義を思惟すべし」と。時に乾闥婆等咸く言はく、「是の如し。大徳婆伽婆よ、唯然り、教を受けたてまつらん」と。佛及び大衆咸く皆、讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊は娑伽羅龍王・難陀龍王・婆難陀龍王・善現龍王・婆樓那龍王・婆修吉龍王・得叉迦龍王・阿難陀龍王・阿樓那龍王・歲星龍王に告げて言はく、「汝等各大海の中に在りて本宮殿に住し、我が正法を護持し養育せよ」と。時に龍王等、各是の言を作さく。「唯然り、教を受けたてまつらん」と。佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊阿那婆達多龍王・善住龍王・淸脇龍王・摩利尼龍王・優婆羅龍王・乾闥婆龍王・雲池龍王・主宦龍王・摩奚曼多龍王・美音龍王に告げて言はく、「汝等各本宮に住して我が正法を護持し養育せよ」と。時に龍王等各是の言を作さく。「唯然り、教を受けたてまつらん」と。佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊鳩槃茶檀提大將・優婆檀大將・迦羅迦大將・摩訶鉢賒大將・摩呼陀遮利大將・掘求尼大將・婆朱賒尼大將・鴦崛盧大將・鞞羅差大將・一眉大將に告げて言はく、「汝等各本宮に住して、我が正法を護持し養育せよ」と。時に鳩槃茶大將等各是の言を作さく、「唯然り、教を受けたてまつらん」と。佛及び大衆咸く皆、讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊因陀夜叉大將・蘇摩大將・婆樓那大將・波闍鉢帝大將・跋羅頭婆闍大將・伊闍那大將・栴檀那大將・月眼大將・婆多竭梨大將・奚摩跋多大將等に告げて言はく、「汝等各本宮に住して、我が正法を護持し養育せよ」と。時に夜叉大將各是の言を作さく。「唯然り、教を受けたてまつらん。大徳婆伽婆よ、我等世尊の正法を護持し養育し安置し、及び住法比丘に所須を供給し、乃至剃髮不持戒者も亦復一切所須を供給し、佛法をして久しく住するを得せしめん爲の故に、三寶種紹ぎて斷絕せ

ればなり。何に況んや我れ今現に世に在るをや。譬へば眞金の如し。無價寶と爲す。若し眞金無ければ銀無價と爲る。若し銀無ければ鍮石[七]無價なり。若し鍮石なければ、僞寶無價なり。若し僞寶なければ、赤白の銅・鐵・白鑞・鉛・錫を無價寶と爲すなり。是の如く一切諸の世間中、佛寶は無上なり。若し佛寶なくんば緣覺無上なり、若し緣覺無くんば、羅漢無上、若し羅漢なくんば、諸餘の聖衆を以て無上と爲し、若し聖衆なくんば、得定の凡夫を以て無上と爲し、若し得定無くんば、淨持戒者を以て無上と爲し、若し淨戒者なくんば、汚戒比丘[八]を以て無上と爲し、若し汚戒なくんば、鬚髮を剃除し、身に袈裟を著くる名字比丘を無上寶と爲す。餘の九十五種の異道に比べて最尊第一なり。應に世の供を受け、物の爲に福田と爲す。何を以ての故に、能く衆生に怖畏すべきを示すが故なり。若し護持し養育し安置する有れば、是の人久しからずして、忍地に住するを得ん」と。

爾の時、世尊、六欲諸天に告げて言はく、「汝等應に過去佛時の所分得分の如くなるべし。當に勤めて護持すべし。復此の四天下に於ける時時の中、勤加して、佛の正法義を思惟せよ。我が法をして久しく住するを得せしめん爲の故に、三寶種を紹ぎて斷絕せざらしめん(ため)の故に」と。時に彼の諸天各是の言を作す。「唯然り。教を受けたてまつらん」と。

爾の時、世尊讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。一切大衆も亦復讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊は四天王に告げて言はく、「汝等及び諸の眷屬應に過去佛時の所分得分の如く、還我が正法を護持し安置し養育を作すべし」と。時に四天王各是の言を作す、「唯然り、教を受けたてまつらん」と。佛及び大衆咸く皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊は乾闥婆等に告げて言はく、「諸の仁者よ。汝等及び諸の天仙・優曇林[九]・菴羅林[一〇]・閻浮林[一一]・呵梨勒林[一二]・阿摩羅林[一三]・蒲萄林[一四]、是の如き等の林に於て中に住し、復、四天王宮の諸天子等と共

【七】鍮石。梵 [illegible]

【八】汚戒比丘。戒を守らざるのみならず戒を汚す所の比丘。破戒の比丘に同じ。

【九】優曇林。優曇波羅 Udumbara の園林をいへり。靈瑞花なり。

【一〇】菴羅林。菴婆羅 Āmra 樹の園林をいへり。

【一一】閻浮林。閻浮 Jambu 樹の園林をいへり。

【一二】呵梨勒林。呵利勒 Harītakī 樹の園林をいへり。

【一三】阿摩羅林。阿末羅 Āmalaka 樹の園林のこと。

【一四】蒲萄林。蒲萄樹の園林のこと。

し一佛の教を敬受したてまつる。佛世尊は、此の閻浮提に分布し安置したまへるが如く、我等は發心して、佛の教勅を受け、佛の正法眼を護持し養育し熾然を得せしめん」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。妙丈夫よ。汝等應當に是の如く誠心にして、隨喜せんと欲するを說くべし」と。

爾の時、世尊、彼の[三]法食・[四]喜食・[五]禪食の諸天に告げて言はく、「此の四天下の大海水中八萬洲渚の一切國土は、汝等、法食・喜食・禪食の諸天よ。應當に我が法を護持し養育すべし。住法の比丘の法の如く法に順ひ、發心修行して、三業相應し、鬚髮を剃除し、身に袈裟を著くるものを、汝等應當に護持し養育すべし」と。時に彼の法食・喜食・禪食の諸天各是の言を作さく。「我れ大海水中八萬洲渚の一切國土の諸佛の正法を護持すべし。若しは佛の弟子の乃至婦女・畜生・田宅・資產を畜へざるものを、我等皆當に護持し養育すべし」と。爾の時、世尊は彼の天を讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。一切大衆も亦復讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊は月藏菩薩摩訶薩に告げて言はく、「了知淸淨士よ。若し我が住世の諸の聲聞衆が、戒を具足し、捨を具足し、聞を具足し、定を具足し、慧を具足し、解脫を具足し、解脫知見を具足せば、我が正法熾然にして世に在り、乃至一切の諸天人等も亦能く平等の正法を顯現す。我が滅後に於て五百年中は、諸の比丘等猶ほ我が法に於て、[六]解脫堅固なり、次の五百年は、我が正法の禪定三昧堅固に住するを得るなり。次の五百年は、讀誦・多聞堅固に住するを得るなり。次の五百年は、我が法中に於て、多くの塔寺を造りて、堅固に住するを得るなり。次の五百年は、我が法中に於て、鬪諍・言訟し白法隱沒し損減して堅固なり。了知淸淨士よ。是より以後、我が法中に於て、復鬚髮を剃除し、身袈裟を著くと雖も、禁戒を毀破し、行ひ如法ならざるをば、假りに比丘と名づく。是の如き破戒の名字比丘、若し檀越有りて、捨施し供養し護持し養育すれば我れ是の人に說かん。猶し無量阿僧祇の大福德聚を得るが如しと。何を以ての故に、猶ほ能く多くの衆生を饒益するが故な

【三—五】法食以下三名は人界の飲食に異る天部の食。

【六】五堅固。於二我滅後五百年中一諸比丘等猶於二我法一解脫堅固。次五百年我之正法禪定三昧得レ住二堅固一。以下次五百年中於二我法中一鬪諍言頌白法隱沒損減堅固。此の一節は五五百年として有名なるもの。五五百年とは佛滅後の五期の五百年なり。一期ごとに各〻一づの堅固を說き以て法の興廢を示せるもの。即ち解脫・禪定・多聞・塔寺・鬪諍の各堅固に五百年を一期として行はるるといふ思想なり。

卷の第五十五

月藏分第十二〔一〕　分布閻浮提品第十七

爾の時、世尊、既に一切諸の來れる大衆の、三寶所に於て、皆、深信・尊重・敬仰を生じて未曾有を得、更に諸餘の天を信事ぜざるを知り已りて、〔二〕他化自在天王・化樂天王・兜率陀天王・須夜摩天王・帝釋天王・四大天王及び諸の眷屬・婆伽羅龍王・阿那婆達多龍王・羅睺羅阿修羅王・毘摩質多羅阿修羅王・睒婆利阿修羅王・跋持毘盧遮那阿修羅王・大樹緊那羅王・樂欲乾闥婆軍將・檀提鳩槃荼軍將・因陀羅夜叉軍將・寒葉餓鬼王・垂脣毘舍遮王・阿那竭囉富單那王・蒿路喚聲迦吒富單那王等に告げて、是の如き言を作したまへり。「諸の仁者よ。汝等一切は是の如く我れに勸め、此の閻浮提に分布し安置せり。一切國土の城邑・宮殿・王都・聚落・山巖・寺舍・園池・曠野・諸樹・林間、付囑し護持して、惡有らしむる勿れ。又大地の精氣・衆生の精氣・正法精氣を增長し熾然せしめ、佛の正法眼久しく世に住し、三寶種を紹ぎて斷絕せざらしめ、惡趣を損減し、善道を增益し、此の閻浮提をして一切安隱豐樂にし樂む可らしめよ、是の因緣を以て、我れ今此の四天下を分布し、汝一切の諸大天王、一切の龍王、乃至一切の迦吒富單那王に囑す。汝等各應に發心して眷屬を捨離し、分布して安置し護持し養育すべし。幷びに汝諸天一切の眷屬、乃至迦吒富單那王の一切眷屬も亦、此の閻浮提中の一切國土、乃至樹林分布して安置し護持し養育せしむ。是の故に汝等諸大天王及び諸の眷屬、乃至迦吒富單那王、及び諸の眷屬は閻浮提に於て、皆應に誠心隨喜し讃歎すべし。瞋ること勿れ、恨むこと勿れ。亦怒を生ずること莫れ」と。

爾の時、有らゆる一切の菩薩摩訶薩、色界の諸天、欲界の天人、一切の龍衆、一切の乾闥婆乃至一切の迦吒富單那等、諸の來れる大衆皆悉く合掌して、各是の言を作さく、「我等一切、誠心隨喜

〔一〕宋・元・明の三本は月藏分第十二の六字なし。

〔二〕他化自在天王以下の諸天婆伽羅龍王以下の諸龍王等は前卷既に脚註を施せり。

道に住するを得るなり。薄福の諸の衆生、有爲聲を聞くを得ば、無量衆精勤して、菩提行に入るを得。[六八]檀・戒・忍・精進・禪定及び智慧にして、佛土の福莊嚴は、精進なる故に淨らかならしむ」と。「汝等當に作佛すべし。彼の諸の法岸に到り、魔及び軍衆を降して正法の雨を降らし、無量の衆生界に能く正法眼を與へ、汝等一切の衆、速に安隱城に入り、無量衆の聲を聞き、大菩提に趣くを得、及び二乘道を得て人天の樂を得る有り。果羅漢三摩提に至るを得る有り。是の如く惡衆生も柔軟の意を得て、諸の惡業を怖畏し、慈善心に安住せん」と。

【六八】六度を擧ぐ。

丈夫最勝を得、富貴にして諸の欲具はる。汝等の二朋衆・諸龍・阿修羅各自ら忍辱を修せよ。忍の故に諸の惡無し」と。大衆皆喜悅し、一切咸な讃歎せり。「汝今是の語を聞き、皆悉く忍を得、天・龍・阿修羅・夜叉及び諸の鬼、一切皆忍を得、慈心にして共に相視。人畜牛等、忍を得て皆和順し、禽獸及び小蟲、慈悲にして相憐愍せり」と。大衆皆合掌し、導師を瞻仰して言さく、「我等迭ひに相蔭ひ、皆慈心に住するを得たり。又我が諸の大衆、佛尊導師に於て、所作せる諸の罪業、若しは身口意に犯せる、法衆僧所の一人の邊に於て過ち有りし(もの)、人中の堅固士よ。唯願くは、容恕を見したまへ。我れ世尊の法に於て、一切の所作せる惡、今悉く至り到りて懺いたてまつる。願くは佛慈みて納受したまへ」と。時に兩足尊[六六]、彼の大衆に告げて言はく、「汝の懺ゆるや惡業盡き、終に苦報有ること無し。剃髮して戒を受けず、袈裟片を被服し、導師の想を作す。彼の人中上に於て、惡王法眼を障へ、貪癡にして比丘を打ち、導師の血を出すが如き、當に阿鼻獄に墮すべし」と。大衆是の言を作す。「我等比丘を護り、若し諸の惡王有りて、諸の聲聞衆生を惱せば、我等諸事に於て、皆彼の國を捨て、其の土に沙門有れば餘處に向はしむ。彼の諸國を毀壞し、飢饉・兵・疫・起り、沙門の詣る所の國、我等も亦彼に詣り、悉く勝樂を得せしめ、衣・飮食を具足し、彼に於て法眼を熾にし、人中上を供養す。四天下餘す無く、悉く變じて七寶と成り、復諸の香花・珍寶及び衣服・歌舞・妓樂を雨して導師を供養す。衆生の見聞する所、皆充足して樂を得、聖加して、諸の音をして盡く變じて佛聲と作さしむ。諸の有爲苦[六七]・無常・空・無我・三世一切の法悉く空にして無所有・集散二俱空を說く。眼識の二も亦然り。乃至心法界、陰身等も法空なり。是の如く諸法を知れば。則ち能く衆生を救ふ。若し三界空を知れば、能く衆生の縛を解く。諸有十二支、一切皆な性空なり。若し昔此の法に於て、是の如く修習すれば、彼等は諸の聲を聞き悉く忍を得、智方に無所畏にして、菩提

【六六】兩足尊。佛の尊號なり。佛は兩足を有する衆生中に於て最尊第一なればなり。又兩足とは戒定・福慧等の功德をいふ。

【六七】有爲苦。以下は佛教の法印なり。

聲・最後身聲・降魔聲・無上智聲・轉法輪聲・隨應度者現神變聲・捨諸命行聲・諸衆生に於て無上大涅槃を示現する聲有り、是の如き諸の聲、各各差別して耳根に入る。是の諸の衆生は乃至畜生・餓鬼趣等、是の如き無量百千の法門、耳根に入る。彼の諸の衆生、第一希有歡喜踊躍を得、三寶中に於て極めて信敬を得、彼の諸の衆生、煩惱障・業障・衆生障・法障・三分中に於て、二分已に盡く、彼の諸の衆生、是の聲を聞き已つて、無量阿僧祇の衆生、昔惡心有る者は、彼等悉く柔軟心・憐愍心・善業心を得。後世の怖畏すべき事を觀ずるを得。具足して天人の善根を種ゆるを得、彼の諸の聲を以て、無量阿僧祇の衆生、三寶所に歸依し、禁戒淨を受持する者有らしめ、彼等は[六三]須陀洹果を得る有り乃至[六四]阿羅漢果を得る有り。復無量阿僧祇の衆生有り、緣覺乘に於て諸の善根を種ゑ、復無量阿僧祇の衆生有り、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、卽ち不退轉地に住するを得、復無量阿僧祇の衆生有り、無生法忍を得」と。

爾の時世尊、重ねて此の義を明にせんと欲して偈を說いて言はく、

『火味阿修羅、羅睺羅を指示し、「是れ我が最勝の師なり、福慧莊嚴具はれり」と。佛彼等に告げたまはく、「常に妬み、瞋怒を息むべし、是の法眼護持を付囑す。故に常に受くべし」と。彼の諸の修羅喜び、尊導師に敬答したてまつれり。「我れ常に法眼を護り、乃至法久しく住せしむべし。我等は、最勝の不隱法神呪を說き、彼の一切の龍をして皆憍慢力を失はしめん」と。爾の時、諸龍の輩、各各皆瞋怒し、憍慢力を以て、諸の修羅と共に鬪はんと欲す。佛諸の龍王、及以び修羅主に告げたまはく、「汝等長夜に於て、各各常に獷戾せり。若し瞋怒を除かざれば諸の樂に於て器に非ず、常に苦の爲に偪せられ、下劣なる臭穢身にして、身分支具はらず、恒に資生乏しからん、此の諸の苦は皆瞋を以て本と爲す」と說きたまふを聞く。「惡罰諸の[六五]枷鏁・牢獄・飢渴等・地獄鬼・畜生は瞋に由り此の苦を受く。一切應に忍辱すべし、能く忍べば則ち無し。

【六三】須陀洹果。梵 Srota-āpanna-phala. 見道の終り卽ち第十六心の位を須陀洹の向位に對して須陀洹果と稱す。

【六四】阿羅漢果。梵 Arhan-phala. 小乘の悟を極めたる位の名。悟の位を果といふ。是れ修行の因に對する結果なればなり。

【六五】枷鏁。枷はくびかせ鏁はかけがね、じやうなどをいふ。卽ちかせのことなり。

[五六]何者をか名づけて、法法相空と爲す。法とは五陰に名づく。五陰空は、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ法法相空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。何者をか名づけて[五七]無法無法相空と爲す。無法は無爲法と名づく。是の無爲法空は、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ無法無法相空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[五八]何者をか名づけて、自法自法相空と爲す。諸法は自法空にして、是の空は智の作に非ず。見の作に非ず。非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ自法自法相空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[五九]何者をか名づけて、他法他法相空と爲す。若しは佛の出世、若しは不出世の法住・法相・法位・法界如、實際性相常住し、變異過有ること無し。此れ諸法空にして、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ他法他法相空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。知り已つて能く衆生をして、衆生想を離れ、一切の行想・受想・色想・識想を離れ、眼想乃至意想を離れ、色想乃至法想を離れしめ、然る後一切衆生を三乘無爲界に安置せん。若し行者有りて、此の諸法如實に於て、現前に知得せば、善修と名づく。彼の諸の衆生は昔此の法に於て已に修習する者は、是の如き第一甚深の法聲、耳根に入る。或は衆生有り、善根を種ゑずして、是の如き法聲も亦耳に入り、或は見佛し專心瞻仰する有り。彼の人一切無盡善根、皆來つて現前し、乃至[六〇]不退轉地、[六一]十力無畏を逮得し、大法器を成す。或は衆生有り、無常の聲有りて耳根に入り、或は[六二]苦聲・空聲・無我聲・三律儀聲・四念處聲・四正勤聲・四如意足聲・五根聲・五力聲・七覺分聲・八道分聲・實論聲因緣法聲・梵住聲・四攝聲・無礙辯聲・禪聲・解脫聲・無色定聲・六波羅蜜聲・巧方便聲・三昧陀羅尼忍聲・聲聞乘聲・緣覺乘聲・大乘聲・不退轉地聲・業障盡聲・煩惱障盡聲・衆生障盡聲・法障盡聲・有爲國土功德莊嚴聲・無爲心清淨聲・大慈聲・大悲聲・三不護聲・四無畏聲・十力聲・十八不共法聲・一生補處聲・十地

【五六】法法相空の意味。

【五七】無法無法相空の意味。

【五八】自法自法相空の意味。

【五九】他法他法相空の意味。

【六〇】不退轉地。所修の功德善根に於て愈〻增進し更に過失なく轉變せざる位地卽ち阿毘拔致 Avaivartika の位地なり。

【六一】十力無畏。佛菩薩の十力は何物も畏るべきもの無ければ無畏といふ。十力に就ては五十一卷脚註二七を見よ。

【六二】苦聲以下の諸聲は四十六卷脚註に出づ。

に、諸法性爾は是れ無始空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[四八]何者をか名づけて散空と爲す。取捨する所無きは非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ散空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[四九]何者をか名づけて性空と爲す。一切有爲無爲の法性は、聲聞の作に非ず。緣覺の作に非ず。如來の作に非ず。此の法性空は、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ性空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[五〇]何者をか名づけて自相空と爲す。惱亂は是れ色相、能受は是れ受相、取相は是れ想相、造作は是れ行相・了知は是れ識相なり。是の如き等の有爲無爲の一切法の自相は自相空にして、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ自相空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[五一]何者をか名づけて一切法空と爲す。一切法とは、謂はゆる色受想行識、眼乃至意、色乃至法眼色、因緣生識、乃至意法因緣生識にして、此れ有爲無爲の諸法なり。是れ一切法と名づく。彼の諸法空は非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ一切法空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。

[五二]何者をか名づけて、不可得空と爲す。一切法は不可得にして、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ不可得空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。

[五三]何者をか名づけて、無法空と爲す。一切無物は不可得にして、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ無法空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[五四]何者をか名づけて、有法空と爲す。和合中に於ける無物は、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ有法空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[五五]何者をか名づけて、無法有法空と爲す。無物無物空、有物有物空は、非積聚不可壞不可取なり。何を以つての故に、諸法性爾は是れ無法有法空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。

【四八】散空の意味。
【四九】性空の意味。
【五〇】自相空の意味。
【五一】一切法空の意味。
【五二】不可得空の意味。
【五三】無法空の意味。
【五四】有法空の意味。
【五五】無法有法空の意味。

なり。是の如く行者應に如實に知るべし。外法とは、謂はゆる、色聲香味觸法なり。行者如實に、色色空、乃至法法空は、非積聚不可壞不可取と知れ。何を以ての故に。諸法性爾は是れ外空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[三七]何者をか名づけて內外空と爲す。內外法とは謂はゆる內六入、外六入なり。行者如實に內外入空は、非積聚不可壞不可取と知れ。何を以ての故に、諸法性爾は是れを內外空と名づくればなり、是の如く行者應に如實に知るべし。[三八]何者をか名づけて、空空と爲す。空とは一切諸法空なり。彼の空を以ての故に、空は非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ空空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。

[三九]何者をか名づけて大空と爲す。東方の東方空乃至四維空は非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ大空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[四〇]何者をか名づけて第一義空と爲す。第一義空とは、謂はゆる涅槃なり、是の如く涅槃は涅槃なるを以ての故に、空にして非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に諸法性爾は是れを第一義空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[四一]何者をか名づけて、有爲空と爲す。有爲法とは、[四二]欲界・[四三]色界・

[四四]無色界を名づく。欲界・色界 無色界の空に、非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ有爲空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。[四五]何者をか名づけて、無爲空と爲す。無生・無滅・不住・不異・是れ無爲と名づく。無爲は無爲なるを以て、空にして非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故に、諸法性爾は是れ無爲空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。

[四六]何者をか名づけて、畢竟空と爲す。畢竟とは、諸法の至竟、不可得非積聚不可壞不可取に名づく。何を以ての故に、諸法性爾は是れ畢竟空と名づくればなり。是の如く行者應に如實に知るべし。

[四七]何者をか名づけて、無始空と爲す。來去は不可得にして非積聚不可壞不可取なり。何を以ての故

【三七】內外空の意味。
【三八】空空の意味。
【三九】大空の意味。
【四〇】第一義空の意味。
【四一】有爲空の意味。
【四二—四四】欲界、色界、無色界にて三界のこと。註前出。
【四五】無爲空の意味。
【四六】畢竟空の意味。
【四七】無始空の意味。

三寶中に於て深く敬信を得たり。

爾の時、世尊は此の想を以て一切衆生を加被し、此の語を説きたまふ。故に汝等は一切の音聲、語言の行是れ賢聖の加被[三四]する所なり。是の如き一切の人非人等、有らゆる語言・及び寶中より出づる所の音聲、枝葉・花果・琴瑟・箜篌・笛笙・歌舞・鐘鼓・及び樹木の出す所の音聲は、一切皆是れ聖力の加する所なり。彼等一切は皆、希有未曾有の聲を出し、加する所を得たり。謂はゆる色色空、受受空、想想空、行行空、識識空是の如し。眼入眼入空、耳鼻舌身入耳鼻舌身入空、意入意入空是の如し。色入色入空、聲香味觸入聲香味觸入空、法入法入空是の如し。眼界眼界空、乃至意識界意識界空是の如し。身離欲淨を知り、一切法離欲淨を知り、一切法界離欲相を知り、一切法如如を知る。是の如く知れば、是の人則ち空に於て、不動と爲り、是の人一切衆生の想を拔濟するに堪能なり。一切行に於て衆生想の色想・受想・行識想・眼入想・乃至意識界想に斷絶を得せしむ。是の人、是の如く、一切衆生を三乘無爲[三五]に安置するに堪能なり。行者云何が能く彼等の諸法を開示し簡擇するや。謂はゆる

内空[一]　外空[二]　内外空[三]　空空[四]　大空[五]　第一義空[六]　有爲空[七]　無爲空[八]　畢竟空[九]　無始空[一〇]　散空[一一]　性空[一二]　自相空[一三]　一切法空[一四]　不可得空[一五]　無法空[一六]　有法空[一七]　無法有法空[一八]

を修し、復、有法有法相空・無法無法相空・自法自法相空・他法他法相空なり。若し能く是の如き此の諸の法空を修習し簡擇すれば、彼の人乃至一切衆生を三乘無爲中に、安置するに堪能なり。彼等行者は、何れの法門を以て、内空乃至無法有法空を知るを得るや。謂はゆる、還空の解脱門を以て、能く内外等の法を簡擇し修するなり。[三六]何者をか名づけて内外法と爲す。内法とは謂はゆる眼耳鼻舌身意なり、行者如實に眼眼空は、非積聚不可壞不可取と知る。何を以ての故に、此の諸法性爾乃至意意空は非積聚不可壞不可取と知ればなり。何を以ての故に、諸法性爾は、是れ内空と名づくれば

【三四】加。加被ともいひ。神佛の力を衆生に加へ與ふること。

【三五】内空以下無法有法空に至る十八空といふ。智度論二十・同三十一・同四十六に出づ。智度論のそれと比するに本經十三、自相空に智度論にありては自性空とあり、十四、一切法空は智度論にては諸法空となれり。

【三六】内空外空の意味。

れを鞭打する者は、我等は復、是の如き國王を護持し養育せずして彼れの國を捨離す。捨離するを以ての故に、其の國土をして種種の諂詐・鬪諍・疫病・飢饉・刀兵有らしめ、倶に非時の風雨・亢旱・毒熱起り、苗稼を傷害す。又若し我等は彼の國を捨離せば、當に勤めて方便し、其の國土の有らゆる世尊の聲聞弟子をして悉く他國に向はしむべし。其の國土をして空にして、福田無からしむ。若しは世尊の聲聞弟子有り、乃至袈裟片を著くるをば、若し宰官有りて、彼等を鞭打するに、其の刹利王、遮護せざれば、我等當に亦其の國土を出づべし。復是の言を作す。我等は今一切相與に、堪能とする所に隨ひて、種種の供養を勤作せん」と。

爾の時、世尊諸の天、及與び諸の龍、乃至一切の迦吒富單那等、倶時に、發心の因緣力の故に、卽時に此の四天下中に於ける、有らゆる諸山皆悉く七寶の山に變成せり。世尊を供養したてまつらんと欲する爲の故なり。有らゆる樹林・枝葉・花果一切も亦皆七寶に變成す。其の花果より、復種種なる勝妙の供具及び五音の樂を作して供養を爲したてまつる。四天下中の有らゆる地に依る衆の藥、草苗の一切も亦皆七寶に變成し、供養を爲したてまつる。此の四天下の有らゆる地界一切變じて青琉璃地と成り供養を爲したてまつる。彼の諸の天龍乃至迦吒富單那・四天下中の上盡欲界、一切有らゆる各の力能に隨ひて供養を爲したてまつる。種種寶・種種花・種種衣服・種種瓔珞・種種天妙の花蓋幢幡を雨して供養を爲したてまつれるもの有り。種種天妙の幢幡・寶蓋・金縷・眞珠瓔珞・摩尼寶器を持ちて供養を爲さんとする有り。種種の琴瑟・箜篌・簫笛・齊鼓・籢鼓・雷鼓を以て、音樂を爲し世尊を供養したてまつれる(もの)有り。種種の歌樂・音聲を以て供養を爲したてまつれる(もの)有り。種種の音樂器を雨して、供養を爲したてまつれる(もの)有り。復、種種の莊嚴國土を以て供養を爲す。諸の四天王の所依住者、人非人等、乃至一切大小諸の蟲・皆悉く見聞し、彼等一切の苦受休息し、皆樂受を生じ、種種身の觸覺知有るに隨ひて樂を得、充足し、及び希奇未曾有の心を得、

佛の言はく、「大梵よ。若し我が爲に、剃髮し袈裟片を著け、禁戒を受け、受けて犯ぜざる者を惱亂し、罵辱し、打縛する有らば、罪を得ること彼よりも多し。何を以ての故に、是の如く、我が爲に、出家剃髮し、袈裟片を著け、戒を受けずと雖も、或は受けて毀犯するも、是の人猶ほ能く諸の天人の爲に、涅槃道を示す。是の人便ち已に三寶の中に於て、心に敬信を得、一切の[三二]九十五道に勝れ、其の人必ず、速に能く涅槃に入ること一切の在家俗人に勝れたればなり。唯在家にして忍辱を得る者をのみ除く。是の故に、天人應當に供養すべし。何に況んや。具に能く禁戒を受持し、三業相應する(もの)をや。諸の仁者よ。其れ一切の刹利・國王・及以び群臣・諸の斷事者有り。如其の我が法中に於て、出家する者有り、[三三]大罪業、大煞(殺)生、大偸盜、大非梵行、大妄語及び餘の不善を作すを見是の如き等の類は、但當に如法に國土・城邑・村落を擯出すべし。寺に在るを聽さず。亦復僧の事業に同ずるを得ず。利養の物悉く共同せず。鞭打するを得ず。若し鞭打せば、理の應ぜざる所なり。又亦應に口業罵辱すべからず。一切其の身に罪を加ふべかず。若し故らに法に違ひて、讁罰せば、是の人便ち解脫に於て退落し、下類を受く。一切人天の善道を遠離し、必定して阿鼻地獄に歸趣せん。何に況んや。佛の爲に出家し、戒を具持する者を鞭打するをや」と。

爾の時、復一切の諸の天、一切の諸の龍、乃至一切の迦吒富單那、諸の來れる大衆有り。三寶中に於て、增上信・尊重・敬仰及び希有心を得て、復是の言を作す。「我等一切は今より以往、世尊の正法及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・乃至毀犯佛禁戒者を護持し養育せん。我等も亦、當に乃至佛の爲に鬚髮剃除し、袈裟片を著け、禁戒を受けず、受けて毀犯積聚する所無きを攝受し、護持すべし。我れも亦、彼に於て、導師の想を作し、護持し養育し、所須を供給し、皆具足せしめん。若し諸の國王は是の如き佛の爲に出家し、禁戒を受持し、乃至佛の爲に鬚髮を剃除し、袈裟片を著け、禁戒を受けず、受けて毀犯し、積聚する所無き有るを見て、其の事緣の如く、其の身罪を治め、之

【三二】九十五道。外道の總數を九十五種或は九十六種といへり。

【三三】十不善業道の中、大殺生・大偸盜・大非梵行・大妄語等を擧ぐ。

然にして慈愍有ること無く、後世の怖畏す可き事を觀ぜず。彼等我が諸の有らゆる聲聞弟子を惱亂し、打縛し、罵辱し、或は復、駈使し、其の供給をして其の飲食・衣鉢・湯藥・所須の物・寺舍・園田を奪はしめ、牢獄に繫閉し、擯徙し、謫罰し、乃至剃髮し袈裟片を著くる者も亦復是の如し。及以び群臣・諸の斷事者は、愚癡・無智・諸の羞慚を離れ、慈愍有ること無く、後世の怖畏すべき事を觀ぜず、彼等我が諸の聲聞を惱亂し、乃至獄に繫ぎて擯徙し謫罰し、乃至我が爲に鬚髮を剃除し袈裟片を著する者も亦復是の如し。我れ今此の諸の出家者を以て、悉く汝に付す。彼等をして飢渴孤獨にし、命終るに到らしむること勿れ」と。

爾の時、上座[三二]阿若憍陳如は座より起ちて是の如き言を作す。「大德婆伽婆よ。彼等刹利・若は婆羅門・毘舍・首陀、是の如き等の人、世尊の聲聞弟子を惱亂すれば幾許の罪を得るや。且つ持戒に違くや。若し復、佛の爲に鬚髮を剃除し、袈裟片を著け、禁戒を受け、受けて毀犯す。此れを惱亂する者、幾許の罪を得るや」と。佛の言はく「止みね。止みね。憍陳如よ。此の事を問ふこと莫れ」と。

爾の時、娑婆世界主大梵天王は卽ち座より起ち、佛に白して言さく「大德婆伽婆よ。唯願くは之れを說きたまへ。大德修伽陀よ。唯願くは之れを說きたまへ。若し佛の爲に、鬚髮を剃除し、袈裟を被服し、禁戒を受け、受け已つて毀犯せざるもの有り。其の刹利王と與に惱亂し・罵辱し・打縛を作す者は、幾許の罪を得るや」と。佛の言はく「大梵よ。我れ今汝の爲に、且く略、之れを說かん。若し人有りて萬億佛所に於て、其の身より血を出せば、意に於て云何。是の人罪を得ること、寧んぞ多と爲すや、不や」と。大梵王言さく、「若し人、但一佛身より血を出せるのみにて、無間の罪を得、尙ほ多く無量不可算數なるは、阿鼻大地獄中に墮つ。何に況んや、具に萬億諸佛の身より血を出す者をや。終に能く廣く彼の人の罪業果報を說くこと有る無し。唯如來を除かんのみ」と。

【三二】阿若憍陳如。梵 Ājñātakauṇḍinya 五比丘の第一。阿若居隣・阿若拘隣・阿若多憍陳那とも音譯し、阿若は名にして憍陳如は姓なり。已知火器と譯す。

を如來應正遍知に謝すべし。我等昔よりこのかた、世尊の所に於て、若しは身口意に作す所の罪過と、及び法僧に於て、若しは身口意に作す所の罪過と、乃至世尊の一聲聞弟子の所に、若しは身口意に作す所の罪過と、乃至若は佛の爲に剃髮し袈裟片を着け、違反行を作す非法器の者に有りて、若しは身口意に作す所の罪過あり。是れ等の諸の罪は悉く佛の前に於て誠心懺悔したてまつり、戒威儀を修せん。願くは佛よ。容恕して、我等が懺を受けたまへ。當に我れをして戒威儀に住するを得せしむべし。又復、我等今より以往、乃至剃髮し袈裟片を著け、違反行を作す者、及び佛の聲聞弟子の所、悉く當に發心し導師の想を作し、護持し養育し、一切の所須を具足して供給し乏少ならしめざるべし」と。佛の言はく「善い哉。善い哉。諸の妙丈夫よ。忍辱を成就し、乃至汝等我が佛所に於て、若しは身口意に作す所の罪過と、若しは法僧に於て、作す所の罪過と乃至我が一聲聞弟子に於て、若は身口意に作す所の罪過と、乃至我が爲に鬚髮を剃除し袈裟片を著ける者の、若しは身口意に作す所の罪過は各自ら深く、是の如き罪業を觀じ、誠心懺悔し、皆除滅するを得て、惡報を受けざるなり。是の如く汝等、皆當に我が法を護持し養育すべし。乃至我が爲に出家剃髮し、禁戒を持たず、袈裟片を著ける者、汝等皆應に護持し養育すべし。若し能く此れを護持し養育する者は、深く讃歎すべし。若し我が有らゆる聲聞弟子の持戒具足し、多聞・捨慧・[三〇]解脫知見悉く具足せる者、汝等皆應に護持し養育すべし。彼等は自ら、過去の善根福德の因緣を以て、善く供養を得るなり。若し衆生有りて、未來世に於て、智慧福德無く、我が爲に剃髮し袈裟片を著け、禁戒を受けず、或は受けて毀犯し、諸の善法に於て相應するを得ざるものも、若し復此れを護持し養育する者は、無量の福を得、我れ彼等と與に、善き導師と作り、憐愍し利益せん。何を以ての故に、當來の世、惡衆生有り、三寶中に於て少しく善業を作す。若しは布施を行じ、若しは復持戒し諸の禪定を修す。其の是の如き少許の善根を以て、諸の國王と作り、愚癡・無智にして、慚愧無く、憍慢熾

【三〇】解脫知見。五分法身の第五。己が實に解脫せしを知るを解脫知見法身といふ。即ち後得智なり。一戒、二定、三慧、四解脫、五解脫知見。五種の功德法を以て佛身を成ずる故に五分法身といふ。

に己の眷屬及び他の眷屬に於て、怨惡の心を息めて、之れを教授すべし」と。月藏菩薩摩訶薩は是の慈心陀羅尼を說ける時、如來歎じて言はく「善い哉。善い哉」と。一切の有らゆる諸の來れる大衆、諸の天、乾闥婆・阿修羅・人非人等も亦皆歎じて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、諸の天は各慈心・忍心・無怨心・無言訟心に住するを得、迭相ひに過ちを謝せり。天は諸の龍に向ひ、龍は諸の天に向ひ、慈心・忍心・無怨心・無鬪諍心・無言訟心にして迭相ひに過ちを謝し、諸の天は阿修羅に向ひ、阿修羅は諸の天に向ひ、乃至過ちを謝し、諸の龍は阿修羅に向ひ、阿修羅は諸の龍に向ひ、乃至過ちを謝し、諸の天は夜叉に向ひ、夜叉は諸の天に向ひ、乃至過ちを謝すること、悉く上說の如し。是の如し。是の如し。天は羅刹・乾闥婆・緊那羅・伽樓羅・摩睺羅伽・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那に向ひ、慈心・忍心・無怨心・無鬪諍心・無言訟心に住し、乃至迦吒富單那は彼の諸の天に向ひ、慈心に住し、乃至過ちを謝することも亦上說の如し。龍は夜叉乃至迦吒富單那に向ひ、慈心に住し、乃至過ちを謝し、夜叉乃至迦吒富單那は諸の龍に向ひ、乃至過ちを謝することも亦皆是の如し。乃至迦吒富單那は、迦吒富單那に向ひ、慈心に住し、乃至過ちを謝することも亦復是の如し。彼等は皆大慈心陀羅尼力の因緣を以ての故に、一切の天・龍・阿修羅・夜叉・羅刹・乾闥婆・緊那羅・迦樓羅・摩睺羅伽・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那等迭相ひに慈心・忍心・無怨心・無言訟心・無鬪諍心・離瞋怒心・離嫉妬心に住す。是の大慈心陀羅尼力の因緣の故に、一切の人類は迭相ひに慈心・忍心・憐愍心・無怨心・無言訟心・無鬪諍心に住し、一切の畜生、若しは禽、若しは獸い乃至極下微小の諸蟲迭相ひに慈心・忍心・憐愍心・無怨心・無鬪諍心・無違反心に住す。

爾の時、諸の天、乃至一切の迦吒富單那・人非人等・來れる所の大衆は合掌して佛に向ひ、恭敬禮拜し、同時に一音にして是の如き言を作したてまつれり。「我等皆已に佛の威神を承けたてまつりて迭相ひに過を謝し迭相ひに慈心・忍心・憐愍心・無怨心・無諍訟心に住す。我等一切は今當に亦復過ち

慈は最勝處に於て、端坐して衆生を化す。慈は勝妙身を得。相端正にして容備はる。慈は能く妙音を具へ、衆人悉く樂み聞く。慈は善き眷屬を得、梵行にして嫉妬無く、法を樂み、慚愧を具へ、明人常に隨喜す。慈は能く官位を得、勝れたる座處に坐し、能く衆生の惡を息め、菩提道に安置す。慈は能く[二六]十地及び忍陀羅尼を得。慈は能く悲を成就し、諸の著を捨離す。慈は能く[二七]神足を得、明導師に値遇す。慈は能く淨土を得、淸淨にして煩惱を離る。慈は能く衆魔を降し、大菩提の岸に到る。慈は天人中に於て、能く正法輪を轉ず。慈は能く衆生を化し、三乘處に置く。慈は能く善說法し、諸の[二八]外道を降伏す。慈は八聖道を以て、天人等を度脫し、不死處に安置す。汝等皆能く入るべし。我れ今汝等に慈心陀羅尼を與へん。我れ億佛の處に於て、專心聽聞するを得たればなり。汝已の眷屬を以て、慈忍處に安置し、相に慈心を起すに於て、長夜に安樂を得ん」と。

爾の時、月藏菩薩摩訶薩は、此の偈を說き已つて、卽ち[二九]呪を說いて曰はく、

多地夜他一　迷帝梨二　摩訶迷帝三　梨迷哆囉兔跋帝四　迷哆囉囉毘五　迷哆囉憩六　迷哆囉侯系七　迷哆囉𢑴八　迷帝梨九　迷帝梨一〇　迷嘍婆鞞訖梨帝一一　沙呵囉毘一二　閇邏風伽徙一三　藪囉耶呵泥一四　婆邏浮常者一五　初羅叉鞞一六　那耶那嘍系一七　俱嚧他車掣一八　阿摸伽囉泥一九　囉闍頞寄二〇　吉𢑴奢藪囉二一　三摩囉泥二二　浮闍伽二三　鞞嘍系二四　奴膩多鞞梨系二五　阿囉尼企二六　剎哆囉豆嘍咩二七　阿求𢑴者二八　唎哆囉毘二九　訶囉悉那鞞三〇　阿俱卑易三一　鴦鳩毘摸叉毘鉢囉易三二　俱嚧他叉易(以世反)三三　蘇婆呵三四

諸の仁者よ。此の大慈心陀羅尼は我れ曾て往昔、億佛の所に於て、彼より聞き得たり。汝等應當

【二六】十地。菩薩修道の階位。

【二七】神足。梵 Ṛddhipāda 神足通又ば神境智證通略して神境通といふ。遊涉往來の自在なる通力なれば神足通といふ。五通の一。

【二八】外道。梵 Tīrthaka 佛敎外に道を立つるもの。邪道のこと。

【二九】大慈心陀羅尼。

今略して是の如く、瞋慦を忍ばざる果報を說きたり。諸の仁者よ。瞋恚を以ての故に、生死の中に於て無量の惡・不善法を增長す。是の因緣を以て、是の人轉じて、復、地獄・畜生・餓鬼に墮するなり。諸の仁者よ。是の故に、我れ今是の如く汝に告ぐ。一切の諸の龍・阿修羅等、汝已に長夜に各各迭ひに相違反して住す。汝等一切今悉く、我れ及び諸の來れる大衆の前に於て、各各迭ひに相應に至到の忍辱の心を生ずべし。當に久しく積れる心心瞋怒を息むべし。若し忍する能はざれば、必ず汝をして悕ばざる所の果を得せしむ。是の故に、汝等各相容忍し、若し能く瞋・鬪諍・譏調・言訟もて嫉妬せず、自ら守りて住せば、汝等是の如く必定して、當に勝妙の事を得、諸の過惡無かるべし」と。

爾の時、諸の來れる一切の大衆咸く皆歎じて言はく、「善い哉。善い哉。汝能く是の如く佛の敎誡を受け、各各是の如く迭ひに相忍辱すれば、便ち此の四天下中常に勝報を得、諸の惡事無きことを得ん」と。

爾の時、月藏菩薩摩訶薩は復、娑伽羅龍王・羅睺羅阿修羅王・[22]阿那婆脅多龍王・毘摩質多羅阿修羅王・[23]婆樓那龍王・牟眞隣陀阿修羅王・善住龍王・踆持毘盧遮那阿修羅王に告げ、偈を以て敎へて言はく。

「汝等[24]授記を得たり。最勝は餘乘に非ず。何が故に導師に於て、羞慚恥無きや。杭を執持して溺るゝは、多衆の駛流に隨へばなり。是の如く最勝を棄つるは、一切の厭賤する所なり。凡龍阿修羅は瞋の故に厭賤せらる。汝等妙丈夫よ。悉く應に恚怒を捨つべし。[25]慈は能く善道に趣き、諸の欲樂を共受す。慈は能く諸難を離れ、及び善き知友と作る。慈は能く大智を得、及び大明師に依る。慈は能く諸の惡を離れ、亦人をして樂觀せしむ。慈は大富を具ふるを得、常に能く一切に施す。慈は能く戒定を樂ひ、復最勝慧を得、慈は能く工巧を得、善く一切事を學ぶ。

【一八】 跛蹇。跛はびっこ。蹇はゐざり。
【一九】 栴陀羅。梵 Caṇḍāla 旃荼羅ともかき、居者・厳熾・暴惡・殺者・下姓と譯す。四姓の下に位する最下級の賤民にして屠殺・守獄等の賤業を營む種族なり。
【二〇】 邊地。梵 Pratyantajanapada 佛所を遠り、三寶を見聞する能はざる邊境なれば邊地といへり。
【二一】 福田。梵 Viprakarṣaḥ 如來及び菩薩比丘等の應に供養すべき者に供養すれば恰も農夫の田畝に種を蒔き收獲を得るが如く能く諸の福報を受くるを以て福田といふ。
【二二】 阿那婆沓多龍王。梵 Anavatapta 八大龍王の一。此の龍王は阿那婆達多池にすむことによりてこの名を得たり。無熱と譯す。
【二三】 婆樓那龍王。梵 Varuṇa 水と譯す。探玄記第二に婆樓那龍王は一切魚形の龍王たりといへり。
【二四】 授記。梵 Vyākaraṇa 又受莂ともいふ。佛より當來必ず佛になるべき記別を受くるをいふ。
【二五】 慈 Maitri の意義。慈は無瞋を體とし衆生に樂を與へんとする意。四無量の一。

巻の第五十四

[一]月藏分第十二　忍辱品　第十六之二

爾の時、世尊、諸の龍衆阿修羅に告げて言はく「汝等闘ふこと莫れ。應に忍辱を修すべし。仁者よ。若し能く瞋怒を離れ、[二]忍辱を成就すれば、速に十處を得。何等をか十と爲す、一には[三]王と作るを得、四天下に王たる自在輪王なり。二には[四]毘樓博叉天王。三には[五]毘樓勒叉天王。四には[六]提頭頼吒天王。五には[七]毘沙門天王。六には[八]釋天王。七には[九]須夜摩天王。八には[一〇]兜率陀天王。九には[一一]化樂天王。十には[一二]他化自在天王なり。諸の仁者よ。若し忍を具足せば、是の人速かに是の如き十處の忍辱近果を得。復次に諸の仁者よ。若し能く深忍して轉増し具足せば當に知るべし、是の人復、五處を得るなり。何等をか五と爲す。一には[一三]梵衆なり。二には[一四]大梵天王なり。三には[一五]聲聞道果なり。四には[一六]縁覺なり。五には[一七]如來應正遍知なり。諸の仁者よ。若し能く深忍して轉増し具足せば是の人速かに是の如き五處を得。又若し具足して忍を修行する者は、自然に近く一切世間勝妙五欲を得。資生の所須皆悉く具足す。是の人若し復至到にして忍の功德を修行する者は、聖安樂を得、若し非聖凡下の人有りて、獷戾自ら高ぶり、性、常に瞋怒にして多くの人の所に於て、大いに瞋恚を現はせば當に知るべし。是の人、身壞して命終には地獄に墮す。若し復儻ひ地獄を出づるを得るとも、下劣なる畜生道中に生れ、下劣なる龍身・阿修羅身と作る。若し人に生るゝを得れば、極下卑賤にて諸根殘缺し、或は諸根長く、或は復無根にして、或は復二根なり。或は復大根にして、形容醜陋・[一八]跛躄・背傴・身體臭穢にして[一九]旃陀羅の妓に生れ、邪媚を作さん。是の如き等の餘の下賤の家、若しは[二〇]邊地に生れ、少衣乏食の下賤の家に生る。及び[二一]福田の悕びなく、種々不善の處と作る。是の因縁を以て、是の人展轉して復地獄、畜生・餓鬼に趣く。諸の仁者よ。我れ

【一】宋・元・明の三本は月藏分第十二の六字なし。
【二】忍辱成就の十處。
【三】王。四天下卽四大洲を領有する威德自在金輪聖王のこと。金輪寶を有する聖帝。
【四】毘樓博叉天王。四十六巻脚註五一を見よ。
【五】毘樓勒叉天王。四十六巻脚註四九を見よ。
【六】提頭頼吒天王。四十六巻四八を見よ。
【七】毘沙門天王。四十六巻脚註四七を見よ。
【八】釋天王。四十六巻脚註一八を見よ。
【九】須夜摩天王。四十六巻脚註九〇を見よ。
【一〇】兜率陀天王。四十六巻脚註一六を見よ。
【一一】化樂天王。四十九巻脚註一六を見よ。
【一二】他化自在天王。四十七巻脚註一七を見よ。
【一三】梵衆。色界初禪天に三級あり下級の天衆を梵衆天といふ。
【一四】大梵天王。四十六巻脚註四二を見よ。
【一五】聲聞道果。四十八巻脚註六四を見よ。
【一六】縁覺。五十一巻脚註三〇を見よ。
【一七】如來應正遍知。佛のこと。應は應供のこと。

口利・齒口・竹口・瓶口・是の如き等の形して、諸の阿修羅を害せんと欲することをなせども、得ること能はざりき。

に人身を得已つて、佛に歸したてまつり、出家し解脫行を修習すれば、當に大導師となるべし」と。

爾の時、娑伽羅龍王は是の如く說き已るに、一切の諸龍皆忍辱を得、面色熙怡として、各本處に坐せり。

爾の時、[四六]跋持毘盧遮那阿修羅王、復、無量百千の阿修羅等と倶に座より起ちて、合掌し佛に向ひ一心に敬禮し、是の如き言を作す。「大德婆伽婆よ。我等も亦世尊の正法を護持し養育し、三寶種をして斷絕せさらしめん。故に勸めて他の一切の惡事及び諸の惡人を降伏し、皆悉く休息し、三精氣をして增長を得せしむ。故に復、世尊の一切の聲聞弟子を救護し、攝受し養育するが故に、大陀羅尼を說いて、休息衆病と名く」と。是の語を作し已つて卽ち呪を說いて曰はく、

多地夜他一　摸楞伽摩二　摩朋伽摩三　阿毘朋伽摩四　闍邏朋伽摩五　悉多婆毘嘪〔呵〕〔反〕朋六　伽摩七　跋尸夜毘嘪伽摩八　餘尼毘嘪伽摩九　阿舍尼毘嘪伽摩一〇　婆呵毘嘪伽摩一一　差〔叉梨〕〔反〕囉毘囉婆梨珊底囉毘恒伽摩一二　婆伽囉闍邏丘肘闍邏丘肘毘鞞舍丘肘薩婆盧伽一三　因地利耶丘肘一四　悉蜜唎底一五　毘朋楞舍丘肘一六　蘇婆呵一七

「大德婆伽婆よ。此の休息衆病大陀羅尼は能く、有らゆる一切の病苦を除き、諸の毒害、一切の惡雹を息め、亦能く一切の惡龍を降伏し、世尊の聲聞弟子の與に、所須を奉給すること、猶し奴僕の如くならん」と。

爾の時、諸の來たれる一切の龍衆・諸の大龍王皆悉く瞋忿し、虛空の中に於て、卽ち大雲を起し、阿修羅の上に在つて、大鼓を擊さんと欲し、大石雨を降らさんと欲し、鐵羂・索稍・鉾刀・枝刀・面鐵・

【四六】跋持毘盧遮那阿修羅王。四十七卷脚註四五を見よ。

夜二〇 娑斫闍毘夜二一 阿膩夜二二 軍多闍婆二三 遮羅鬪牟邏二四 阿佉闍二五
呵膩夜鬪婆羅鬪二六 毗彌奢二七 阿膩夜鬪二八 阿衫浮二九 呵膩夜三〇 蘇婆呵
三一

「大德婆伽婆よ。此の伏諸龍大陀羅尼は、悉く能く一切の疾病を休息し、亦能く一切の惡鬼を捲縮し打縛して、害を爲さしめず。能く非時の惡風・暴雨・諸の惡毒氣を止め、亦能く眼視殺人衆惡龍等を降伏して、諸の欲著を斷じ、諸龍身に於て能く熱惱を作し、及び能く其の所住處を熱惱し、其の心を熱惱し、其の業を熱惱し、有らゆる資生の具を熱惱す。大德婆伽婆よ。若し比丘乃至淸信の善女人等有りて、禪と相應し、乃至露地に是の如き降伏諸龍大陀羅尼を受持し讀誦し流布せば、若しは龍有り、若しは龍の婦、若しは龍の父、若しは龍の母、若しは龍の兒女、若しは龍の左右男夫、婦女若しは龍の給使、來り惱害せんと欲するも、其の便りを伺ふ者、乃至彼の少分も得ること能はず。其の反りて熱惱を得るの病をして、頭破れて七分たらしむること阿梨樹の枝の如し」と。爾の時、四天下の有らゆる諸龍の來りて會に在る者、皆悉く瞋怒し、彼の來れる所の阿修羅城の諸の阿修羅を怖れ、驚怖せしめて能く自ら安んずること能はざらしめん」と。

爾の時、復[四五]娑伽羅龍王有り、座より起ちて、諸の大龍に向ひ、合掌し作禮し、偈を說いて言はく、

「若し大聖を見たてまつること有れば、是の人則ち瞋を除く。瞋を離れて卽ち聖と爲る、應當に恚惱を止むべし。忍辱は世の第一にして、忍は世間の樂を得、忍辱は諸の怨みを離れ、忍は安隱の城に趣く。無量の阿修羅は恒に我等と與に怨めり。但當に自ら容忍すべし。佛は常に是の如く說きたまふ。「瞋に由りて惡道に趣き、瞋還瞋を增長す。瞋を以て朋友を捨て、瞋は解脫を得ず」と。我等畜生道は、惡滅瞋恚の故なり。若し能く瞋慢を除けば、人中に生ずるを得、既

【四五】 娑伽羅龍王。梵 Sāga-ra-nāga-rāja

闍易五　阿婆囉題六　耶闍夷泥七　婆呵薩囉叉八　佉㗚阿那佉㗚九　毘耶寐夫囉佉梨一〇　牟那迦囉婆佉㗚一一　阿蜜多一二　受沙佉㗚一三　阿婆咩一四　婆斯郝㗖系一五　常伽囉奢咩一六　頗邏囉婆勿達㗚設闍㗖一七　奢摩那佡博憩僧伽奢咩憂波扇多呵唎一八　蘇婆呵一九

「大德婆伽婆よ。此の師子遊步大陀羅尼は、能く諸怨を伏し、乃至一切の苗稼を成熟す。若し比丘・乃至淸信の善女人等有りて、禪と與に相應し、乃至露地に、是の如き師子遊步大陀羅尼を受持し讀誦し流布すれば、若し阿修羅、乃至給使有り、來り惱害せんと欲し、其の便を伺ふ者、終に彼の少分も得ること能はず。是等も亦復、還つて阿修羅城に入ること能はず。其の頭をして破れて七分と作らしめんこと、阿梨樹の技の如し」と。爾の時、諸の來れる一切の大衆も亦皆歎じて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、[四四]牟眞隣陀阿修羅王は無量百千の阿修羅と俱に座より起ちて、合掌し佛に向ひ一心に敬せんが爲の故に、禮して是の如き言を作す。「大德婆伽婆よ。我等も亦世尊の所說、正法眼を護持し養育せんが爲の故に、乃至三種精氣を增長するが故に、復世尊の有らゆる聲聞弟子を護持し攝受し養育するが爲めの故に、大陀羅尼を說き、伏諸龍と名く」と。是の語を作し已つて、卽ち[四五]呪を說いて曰はく、

多地夜他一　毘唎沙叉二　毘唎沙叉三　毘唎沙叉四　綠須「淩反」五　呵毘唎矢至迦毘唎沙佉那六　摸囉曷多呵呵紂訶紂伽紂渠蝎紂渠蝎㗚七　渠蝎㗚八　三牟達囉渠蝎㗚九　薩婆闍㗚一〇　渠蝎㗚一一　悉那婆渠蝎㗚一二　薩婆浮闍伽一三　渠蝎㗚一四　呵訶渠蝎㗚一五　悉多婆闍多一六　渠蝎㗚一七　婆竪柘那一八　渠蝎㗚一九　阿婆多阿賦

【四四】牟眞隣陀阿修羅王。四十七卷脚註八三を見よ。

【四五】伏諸龍陀羅尼。

系一五　底㘑囉且那羽舍囉系一六　朱勤那一七　底唎嗚闍牟尼囉系一八　質囉迦羅一九　底唎牟尼囉系　旃達囉㝹那二〇　頭婆囉系邏二一　蘇婆呵二二

「大德婆伽婆よ。此の電光𡀔縮大陀羅尼は、悉く能く一切衆生を饒益し、乃至諸の所欲をして意に稱はしむ。若しは[三九]比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有り。若しは餘の淸信の善男子・善女人等、能く禪法と與に相應して住し、若しは復營事し、若しは蘭若に行じ、若しは樹下に在り、若しは露地に在り、是の如き人等、若し能く受持し讀誦して、此の電光𡀔縮大陀羅尼を念ぜば、若しは阿修羅・阿修羅の婦・阿修羅の父・阿修羅の母、及與び兒女有り。若しは阿修羅の左右眷屬男夫婦女・及び阿修羅の給使の人來りて惱害せんと欲するも、其の便りを伺ふ者皆悉く彼の少分も得ること能はず。是の阿修羅、復還つて己の城邑に入ること能はず。其の頭をして破らしめ以て七分と爲すこと、[四〇]阿梨樹の枝の如し」と。爾の時、諸の來れる一切大衆咸く皆歎じて言はく、

「善い哉。善い哉」と。

爾の時、[四一]毘摩質多羅阿修羅王、復、百千の阿修羅等と倶に座より起ちて、合掌し佛に向ひ一心に敬禮し、是の如き言を作す。「大德婆伽婆よ。我等も亦、世尊の所說、正法眼を護持し養育せんが爲の故に、乃至三種の精氣を增長するが故に、復世尊の有らゆる聲聞弟子を護持し攝受し養育せんが爲の故に、又一切の[四二]怨家を降伏し、諸の惡人をして皆歸仰を生ぜしめ、一切の有らゆる疾病を休息し、諸の剛强を伏し、諸の惡人を攝し善友を作らしめ、好き眷屬を具へ、諸の種子をして生じて壞れざるを得て、一切の果實・苗稼をして成熟せしめんが爲の故に、大陀羅尼を說き、師子遊步と名く」と。是の語を作し已つて、即ち[四三]呪を說いて曰はく、

多地夜他涑婆（棲反）　㘑夜一　跋囉企（佉帝反）二　跋囉企三　阿牟尼四　阿牟佉牟尼闍耶毘

【三九】比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷はこれを四衆といふ。

【四〇】阿梨樹。梵 Andūka-manjari 木名。法華經陀羅尼品にも頭破れて七分と作り阿梨樹の枝の如しといへり。

【四一】毘摩質多羅阿修羅王。四十七卷脚註四三を見よ。

【四二】怨家。四十六卷脚註一一六を見よ。

【四三】師子遊步陀羅尼。

をして、復我等と共に住し、共に食せざらしめん。亦復、同處に戲笑するを得ず。是の如く擯罰し、若し乃至剃髮・被服・不持戒者を惱亂すること有るも、亦復是の如し。若し復、世尊聲聞弟子、乃至積聚する所無く、慈悲心有りて三業相應せる、是の如き時來らば、我等能く護り、世尊の法眼をして熾然不滅ならしめむ」と。

爾の時、世尊、讃歎して言はく、「善い哉。善い哉。諸の妙丈夫よ。汝若し是の如くんば、則ち一切の所作事中に於て、諸の過失無し、汝等是を以て、我が付囑を受け、護持し養育し熾然し、法の故に便ち三世諸佛に供養を爲せ。若し汝、勤加して護持し養育し、我が法を熾然し、三寶種を紹ぎて斷絶せざらしめ、若は我が爲に已に出家する者有り、及び未來の諸の出家者と與に、汝等も亦應に護持し養育すべし。此れは是れ、汝等の阿耨多羅三藐三菩提の因なり」と。

爾の時、羅睺羅阿修羅王、無量百千の阿修羅等と倶に、座より起ちて、合掌し佛に向ひ一心に敬禮し、是の如き言を作す。「大德婆伽婆よ、我等も亦勤護し養育し、佛法を熾然せんが爲に三寶種をして斷絶せざらしむるが故に、他を降伏す。故に一切の諸惡を休息し遮障す。故に三精氣の增長を得せしむ。故に復、世尊の有らゆる聲聞弟子、及び正法を護持し攝受し養育するが爲の故に、復、諸の衆生を利益する爲の故に、諸の罪過を遮り、諸の惡人を摧き、諸の怨みを降伏し、併せて一切の邪鬼、[三八]魍魎を除き、諸の鬪諍を息め、一切の諸の禾苗稼を成就し、諸の惡人をして善友と作るを得せしめ、悉く一切の散亂せる者を攝するが故に、又所欲をして、意に稱ふことを得せしむるが故に、大陀羅尼を說き、名づけて電光嘌縮と曰ふ」と。是の語を作し已つて、即ち呪を說いて曰はく。

多地夜他一　囉婆系二　囉婆系三　囉婆系四　曼讐囉系五　阿婆讐囉系六　跋囉摩囉系七　珊都囉系八　闍婆勤那囉系九　阿婆蜜唎也囉系一〇　伽那底囉囉系一一　伽婆叉收達囉囉系收達囉一二　首收達囉一三　首收達囉囉系一四　牟尼婆遮那囉

【三八】魍魎。水神、又は山の精、木石の怪。よく人聲をまねて人を迷はすといふ。

是の如き言を作す、「大德婆伽婆よ。我等も亦各己の佛土に於て、彼の如來より各是の如き世尊を稱揚したまへるを聞くこと、月藏菩薩の所說の如きなり。彼に於て各那由他の諸菩薩等有り、悉く皆是の如き大誓願を發し、諸の衆生を成熟せんと欲する爲の故に。佛事を作すも亦、月藏菩薩摩訶薩の所說の如きなり」と。

爾の時、復、彼に於て、諸の來れる一切の天龍・乃至迦吒富單那・人非人等有り、皆悉く合掌して是の如き言を作す、「我等過ちを大悲釋迦牟尼如來應正遍知に謝したてまつる。我等、佛に於て、若は身口意の所作せる罪過若は法僧及び世尊の一聲聞弟子に於て所作せる罪過をば、今佛の前に於て誠心懺悔したてまつる。願くは更に造ること莫く、禁戒を堅く持たん。我等、無知なること猶し小兒の如し。(これ)不善の所行なり。唯だ願くは、世尊の大悲深く愍み、我が懺悔を受け、我等の寄を受けたまへ。世尊の法眼を護持し、養育し、諸の方便を以て、熾然を得、三寶を護持して久しく住し、不滅ならしめ、亦能く三種の精氣を增長し、諸惡を遮障せよ。佛の一切の聲聞弟子・乃至は若し復、不持禁戒剃除鬚髮著袈裟片者に於て、師長の想を作し、護持し養育し、諸の所須を與へ、乏少無からしめん。若し復、諸の刹利、國王有りて、諸の非法を作し、世尊の聲聞弟子を惱亂し、若は毀罵・刀杖・打斫を以てし、及び衣鉢・種種の資具、若は他の給施を奪ひ、留難を作す者は、我等彼をして自然に卒に他方に怨敵を起らしめ、及び自國土も亦兵・病疫・飢饉・非時の風雨・鬪諍・言訟・誹謗・譏調をして起らしめ、又其の王をして久しからずして、復當に己の國を亡失せしむべし。是の如く、若し復、諸の婆羅門・毘舍・首陀・男夫・婦女・童男・童女・若は餘の天龍・乃至迦吒富單那等、佛の有らゆる聲聞弟子に於て、其の惱亂を作し、若は精氣を奪ひ、氣其の身を噓き、乃至惡心の眼を以て之を視ば、我等悉く共に、彼の天龍乃至迦吒富單那等をして、有らゆる諸根缺減し、醜陋にして、處所に依らざらしめ、我れ誓力を以て、悉く是の如くならしむ。我等の遊止、及び常居處は彼

する有り。或は佛の住處に於て、諸の臰穢・不淨の物を以て汚し盈滿せしむる有り。或は見る者啼泣して喜ばざる有り。或は見る者、眼を合して面を掩ふ有り。或は見る者、背走し遠逝する有り。或は見るを欲せずして、戸を閉ぢ[三六]牕を塞ぐ有り、彼の釋迦牟尼如來、此の一切惡衆生中に於て、能く是の如き無量の衆惡苦事を忍受し、亦復、彼の諸の惡衆生に於て瞋らず、惱まず、然して復晝夜に捨てず。常に彼の諸の衆生に於て、大悲心を起し、一切時處隨逐して之れを化すること、少特牛の初めて犢子を生み、未だ長大せざるに、忽然として之れを失ひ、其の母・爾の時、求め覓めて走るが如し。是の如く釋迦牟尼如來も亦復是の如し。諸の衆生に於て、其の心の平等なるは大悲を以ての故なり。隨逐して走り、三惡道に於て之れを拔濟し、善道及び涅槃の樂に置かる。是の如く大悲相應し具足せり。今此の釋迦牟尼如來[三七]娑婆世界にて佛事を作せり」と。爾の時、彼に於ける一切大衆此の事を聞き已つて、皆希奇未曾有心を生じ、歡喜踊躍し、彼の佛の前に於て、是の如き言を作さく、「大德婆伽婆よ、我等も亦爾り。當に精勤大勇猛力を以て、無量阿僧祇劫を經て、菩提行を修し、檀波羅蜜を行じ、乃至般若波羅蜜を行じ、是の如く善巧方便して諸の衆生を成熟すべし。故に諸行を修すること、猶し釋迦牟尼如來の菩薩と作りたまふ時、久しく菩提の行願を修し、五濁不淨世界の惡衆生中に於て、阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成じ、乃至一切衆生を諸善道、及び涅槃樂に安置したまふが如くすべし。我れも亦是の如く願ひ、五濁不淨佛土に於て、阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成じ、是の如き五無間業・乃至彼の諸の不善根と與に相應の衆生を成熟せん。善道及び涅槃樂に安置せん。彼の諸の衆生、卽時に日月光佛の所に於て上の所願の如く授記を得る者なり」と。

　爾の時、會中に復、無量恒河沙等の菩薩摩訶薩有り。是れ十方に於て、釋迦牟尼佛に見えんとするが故に供養を爲すが故に、大集を見んための故に、此に來れる者なり。彼の諸の菩薩咸な同一音に一、

【三六】牕。窓なり。

【三七】娑婆世界。四十六卷脚註四三を見よ。

是の緣を以ての故に。有らゆる衆生は、現在世及び未來世に於て應當に深く佛法の衆僧を信ずべし。彼の諸の衆生、人天中に於て當に勝妙の果報を受くるを得べし。久しからずして無畏城に入るを得ん。是の如く、乃至一人の我が爲に出家し、及び我れに依つて鬚髮を剃除し、袈裟片を著くる有りて、戒を受けざる者を供養するに。是の人を供養するも亦、乃至無畏城に入るを得ん。是の緣を以ての故に、我れ是の如く說く。若し復人有りて、我が爲に出家して禁戒を持たず、鬚髮を剃除し袈裟片を著くるに、非法を以て此れを惱害すること有る者は、乃至三世諸佛の[二九]法身・[三〇]報身を破壞し、乃至三惡道を盈滿する故なり。是の故に我れ上に是の如く汝に告げん。若し已を愛し、樂を求め苦を離るゝ有らば、常に精勤して護持し、養育し、法眼を熾然し、三寶を紹隆し斷絕せざらしむべし。是の因緣を以て此れより當に無量福報を得べし」と。

爾の時、月藏菩薩摩訶薩、復、八千億那由他百千の菩薩摩訶薩と與に倶に座より起ちて、合掌し佛に向ひ、一心に敬禮し、是の如き言を作す。「是の如し。是の如し。大德婆伽婆よ。我が住處に於て月勝世界大師如來・日月光佛が時々、娑婆世界の釋迦牟尼佛、昔、菩薩たりし時、大勇猛力、極苦精勤して、諸行を修するを稱揚したまへり。是の如き菩薩、大慈悲・大願力を以ての故に、今は彼の[三一]五濁惡世・無間罪業・誹謗正法・毀呰賢聖・不善相應の諸の衆生中に於て、阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成じたまへり。是の佛、彼の[三二]斷を計し常を計し瞋惡・[三三]麁操にして慈愍有ること無く、邪道に歸依し、種種の師を求め、後世の怖畏すべき事を觀ぜざる諸の衆生中に於て、之れが爲に說法したまふ。然るに、諸の衆生、方便を勤作して、釋迦牟尼如來を害せんと欲し、或は毒藥を以て食に和して奉り、或は刀杖・惡象・師子・惡牛・惡狗を以て方便して害せんと欲し、或は謗る有りて、梵行無しと言ひ、或は[三四]非男と言ひ、或は是れ賊と言ひ、或は殺生と言ふ。是の如き等の種々誹謗を作し、或は復、塵土を以て[三五]汚坌する有り。或は大衆中に於て麁穬(獷)し、罵詈し、種種の毀呰

【二九】法身。梵 Dharmakāya. 佛の眞身なり。唯識論などに依ると、總相の法身と別相の法身とあり。三身を以てすれば自性身と自受用報身の二身を合せ見たるなり。故に法身とは理智顯現して有爲無爲一切功德法の體性たり所依たるなり。

【三〇】報身。梵 Sambhogakāya. 因行の功德に酬ゐられて顯現したる佛の實智なり。自受用報身と他受用報身とあり。

【三一】五濁惡世。四十八卷脚註三一を見よ。

【三二】斷常二計。計は執着の義。斷常の義に就ては四十六卷脚註六六を見よ。

【三三】高麗藏本は懆に作れり。今宋本に從ひて操となせり。

【三四】非男。男根の缺如せるもの。

【三五】汙坌。けがれ、ちりあくたのこと。

讀誦し、戒行を護持し、善く[二五]三昧陀羅尼忍を修せり。又我れも亦曾て、無量無邊の菩薩摩訶薩に供養し恭敬し、無量の緣覺に供養し恭敬し、無量の佛の聲聞衆に供養し、無量の到果聲聞に供養し、無量の外道仙人に供養し、無量の父母師長に供養し、無量の病苦の者に供養せり。亦無量苦に逼まられたる衆生に於て救護無き者は、爲に救護を作し、歸依無き者は、爲に歸依を作し、趣向無き者は、爲に趣向を作し、其れをして安住及び供養せしめたり。我れ已に無量長遠劫に數々、諸の苦行を修して、持戒威儀・梵行具足せり。諸の仁者よ。我れ已に是の如く、彼の三大阿僧祇劫に於て、一の苦の衆生を悲愍するが故に、大堅固勇猛の心を發し、久しく無上菩提の行を修せり。

我れ今、此の盲冥世間にて、大導師無く、像法の時、極惡增長し、白法盡くる時、[二六]五無間業・正法を誹謗し、賢聖を毀呰し、不善根と相應し、衆生瞋惡・獷戾にして、諸の羞恥を離れ、慈愍有ること無く、後世の怖畏すべき事を觀ぜざるに於て、是の如き等の諸の衆生中に於て發心すらく、願くは阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんことを。復一切の淨佛國土、所棄の衆生中に於て、大法雨を降らさん。復、願くは、彼の諸の衆生等の爲に、金剛の如き堅固煩惱を除き、彼等衆生は其の所欲に隨ひ、三乘菩提に於て退轉せざらしめん。復、願くは、三惡の衆生を救度し、善道及び涅槃樂に安置し、彼の衆生と與に正法眼を作し、加護して久しく世に住し、長夜をして熾然を得せしめん、彼の諸の衆生、我が法中に於て、出家剃髮し、袈裟を被服し、禁戒を持たずして、若し彼等の人を供養する有らば、是の如き衆生も亦大果を得ん。何に況んや、我が爲に出家持戒し、法に住し、相應して供養し侍べる者をや。即ち無量阿僧祇の大福德聚を得るなり。何に況んや、復能く種種の我が聲聞聖弟子衆を供養して、當に無量不可說阿僧祇の大福德聚を得ざるべけんや。是の故に、我れ今、是の如き等の諸の衆生中に於て、阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ぜり。一切世間の天人中の最たり。大悲を以ての故に、一切諸聲聞衆を建立して、[二七]上福田と爲す。謂はゆる[二八]八大丈夫に向ふを得、

【二五】三昧陀羅尼忍。三昧も陀羅尼も忍も即註前出。

【二六】五無間業。四十六卷即註六五を見よ。

【二七】上福田。田は生長を以て義となす。應に供養すべき者に於て之を供養すれば能く諸の福報を受く。恰かも農夫の田畝に播種して秋收の利あるが如し。故に福田と名く。福田のすぐれたるものを上福田といふ。

【二八】八大丈夫。聲聞乘の四向四果なり。

護持し給ふなり。如來今、復、諸の天龍・夜叉・羅刹・乾闥婆・緊那羅・迦樓羅・摩睺羅伽・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那・人非人等を以て、諸佛及び諸菩薩に寄付せり。彼の諸の衆生、現在・未來に、若は布施し、若は持戒し若は定慧を修し、此の佛法に於て精勤相應して、諸佛及び諸菩薩摩訶薩等に寄付す。爲に六波羅蜜を滿じて、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむるが故に、若し衆生有りて苦を厭ひ、樂を求め、現在及び未來世に於て方便し、精勤し、護持し、養育し法眼を熾然し、三寶種を紹がば、能く之を得ざること無し」と。佛の言はく「是の如し。是の如し。汝の言ふ所の如し。若し己を愛し、苦を厭ひ、樂を求むる有れば、應當に諸佛の正法を護持すべし。此れより當に無量の福報を得べし。若し衆生有りて、我が爲に出家し、鬚髮を剃除し[二二]袈裟を被服して、設し持戒せざれば、彼等悉く已に涅槃印の印する所と爲る。若し復、出家して持戒せざる者は、非法を以て惱亂・罵辱・毀訾を作し、手には刀杖を以て打縛・斫截し、若しは衣鉢を奪ひ、及び種種の資生の具を奪ふ者有れば、是の人則ち三世諸佛の眞實報身を壞し、則ち一切天人の眼目を挑むなり。是の人、諸佛の有らゆる正法の三寶種を隱沒せんと欲せんが爲の故に、諸の天人をして利益を得ずして地獄に墮せしむるが故に、三惡道に（於て）、增長盈滿を爲すが故に。何を以ての故に、我れ昔一切衆生に於て、菩薩行を修せんが爲に、此の法眼を爲し、諸の衆生に於て大悲を起し、已の身血を捨つること猶し大海のごとし。諸の乞者の與に頭を捨つること、猶し[二三]毘富羅山の如し。眼耳も亦爾く、鼻を捨つることも猶し百千[二四]突盧那の如し。舌を捨つること、猶し一突盧那の如し。手を捨つること、脚を捨つること、各皆亦毘富羅山の如し。皮を捨つること一閻浮提を覆ふべし。亦無量の象馬・車牛・奴婢・妻子及以び王位を捨て、諸の乞者と與に、亦復無量の國土・城邑・宮殿・村落・舍宅・寺廟・園林・衣服・臥具・山澤・林藪を捨て、諸の乞者と與に諸佛の所に於て、禁戒を受持して缺犯すること無し。一一の佛所に無量の供養、一一の佛所に無量那由他百千の法門を稟受し、受持

【二一】加。加持のこと。四十七卷脚註七二を見よ。

【二二】袈裟。梵 Kaṣāya 袈裟野・迦羅沙曳とも音譯し赤色・不正色・染色と譯し、離塵服無垢衣、福田衣などといふ。僧衆の身に纏ふ法衣なり。五條・七條・九條等ありて今日各宗の着用する袈裟に於ても自ら長短製法の差別あり。

【二三】毘富羅山。梵 Vipula 毘富羅・裨浮羅・毘布羅とも書き、廣と譯す。中印度摩揭陀國王舍城の東に在る山の名。現今ビハール市の南ラジギール Rajgir 附近のビプラ山がそれなりといふ。

【二四】突盧那。涅槃經後分の頭羅那、後の Doṇa のことか。

六波羅蜜を滿ずるを得、久しからずして當に無上法王と爲り、無畏涅槃大城に入るを得べし。是の如く若し復諸の衆生有りて、若は現在世、及び未來世に、我が法中に於て、出家修道し、[一六]三業相應し、若は復、人を放ちて出家修道せしめ、若は復能く勤加し護持し養育する有りて、我が諸の聲聞・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に供給し、三寶種をして斷絶せざるを得せしめ、若は能く檀波羅蜜・乃至般若波羅蜜を修する有り、若は塔廟・形像を營造し・及以、故きを修するあり。種種に捨施して四方衆僧を供養し供給し寺舍を建立し、及び故きを修する(有り)。又復彼の四方僧寺に於て、種種の衣服・臥具・器物の所須を捨施し、及び田宅・財寶・園林・僮僕・給使乃至畜生を施し、若は復他の捨施諸物の還りて追奪者を見て、力を以て遮護し、若は復我が聲聞弟子の衣服・飮食・臥具・湯藥一切所須を施し、我れの有らゆる聲聞弟子の、或は因緣有りて苦惱に遭遇せるを、若は自力を以て、若は他力方便を假りて脫せしむ。我れ是の如き諸の衆生等を以て、悉く皆十方現在一切諸佛に付囑し、及び賢劫の有らゆる菩薩摩訶薩等に付し、其の衆生を攝し、若をして彼の賢劫諸佛の出世に相値ふを得せしめん。是の諸の衆生、彼の佛所に於て、大施主と作り、守護正法・持戒・第一禪三昧を得、忍力を具足す。此の如く[一七]賢劫最後の如來、世に出現したる時に、彼の佛、當に彼等に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし。便ち速に六波羅蜜を滿ずるを得、久しからずして當に無上法王と爲り、無畏涅槃大城に入るを得べし」と。

爾の時、復、無量億百千の衆生有り、悲淚を目に滿たし、如來を瞻仰して、是の如き言を作さく、「我れ今、諸大悲世尊の有らゆる解脫を觀ずるに、三界一切諸道生死の牢獄を出で、[一八]渴愛を捨て、[一九]世の八法、及び我我所憍慢煩惱を離れ、一切[二〇]十二有支を離れ、一切法を知ること、猶し虛空の如し。不顚倒に住し常に衆生に於て大悲心を起したり。然して諸の如來、衆生の爲めの故に、此の法眼、及び三寶種をして此の娑婆に於て久しく住して不滅ならしむるが故に、加して[二一]

【一六】三業相應。身・口・意の三業、相應すること。

【一七】賢劫最後の出現佛は盧遮如來なり。

【一八】渴愛。梵 Tṛṣṇā 四十六條脚註二七を見よ。

【一九】世の八法。地・水・火・風の四大と、色・香・味・觸の四微をいへるならんか。

【二〇】十二有支。梵 Dvādaśāṅga pratītyasamutpāda. 十二因緣のこと。無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死。

爾の時、世尊は四百億の阿修羅王に告ぐるに、偈を説いて言はく、

「汝は先に諸德を具へて、各巳に淨信に住せり。是の如く昔、諸佛法を囑して汝等に與へたり。我れ今、此の法を以て悉く亦汝に付囑す。當に諸の方便を以て、我が法眼を護持すべし。汝等是の福を作し、大智海を增滿し、各自の境界に於て我が正法を守護し、法に住し、常に忍を樂ひ、定根を護持する者なり。汝等若し是の如くんば、咸く三世の佛に供へ、常に善趣に詣り、命・智・果を具足し世の流轉時に於て、諸の惡道を離るゝを得るなり。諸の勝報を求むる者は、當に我が法眼[一二]を熾ならしむべし。各巳の國土に於て、惡衆生を遮障せよ」と。

爾の時、諸の阿修羅は悉く起ちて合掌し咸な是の言を作さく、

「我等阿修羅は、各各巳の國に於て、一切の惡を休息し、世尊の法を熾然し、法施を習行せる者に惡に於て護持を作して、三精氣を增長し惡を離れ善道に住(せしめ)ん」と。

爾の時、諸の來れる一切の大衆、諸天及び人、乾闥婆等咸く皆諸の阿修羅を歎じて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊亦復、彼の四百億の阿修羅王、及び諸の眷屬を歎じて、是の如き言を作さく、

「善い哉。善い哉。妙丈夫の輩、汝能く是の如くなれ、是を供養三世諸佛と名づく。當に懃に我が法、佛の法眼を護持し養育し熾然を得、三寶種をして久しく斷絶せざらしむべし。是の故に。我れ今將に汝等、及び諸の眷屬を十方一切の諸佛、現在世に住して未だ涅槃せざる者に付囑し、及び賢劫の一切の菩薩摩訶薩に付せんとす。汝等常に彼の諸の阿修羅と與に生生相値ふ。汝當に此の賢劫の中に於て正覺を成ずるを得べし。世に出づる時、當に汝等と與に上施主と作るべし。正法を護持し、持戒[一三]第一にして禪三昧[一四]を得、忍力を具足す。此の如き賢劫最後の如來の名を、盧遮應正[一五]遍知と曰ひ、世に出現す。爾の時、盧遮當に彼等に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし。便ち速に

【一二】 法眼。四十六卷脚註三二を見よ。

【一三】 持戒。六波羅蜜の一。戒律を持ちて犯ぜざること。此の戒相に就て比丘に二百五十、比丘尼に三百四十八戒あり。

【一四】 禪三昧。禪那 Dhyāna と三昧 Samādhi と、禪那は思惟と譯し、三昧は定と譯す。

【一五】 盧遮應正遍知。賢劫出現千佛の最後佛のこと。五十一卷脚註四七を見よ。

護持す。四維佛の正法　地神・大地神・黑色・大黑色・羅睺毘摩質・須質波羅陀・波稚睒婆利・及び牟眞隣陀共に下方世尊の眞妙の法を護る」と。

月藏分第十二[八]　忍辱品　第十六之一

爾の時、一阿修羅有り、名づけて火味[九]と曰ふ。彼の會中に在りて、座より起ち手を擧げ、羅睺羅阿修羅王を指し、四百億の阿修羅王に向ひ、是の如き言を作さく、「此の羅睺羅阿修羅王は、是れ我等が輩、尊重して師長とす。能く福慧を以て諸の衆生を益して自在なること、勇猛なる諸の阿修羅中最勝第一なり。羅睺羅王及與び我等は皆瞿曇に欺欻せらる、佛法をして熾然を得せしめん爲めの故に、餘衆に付屬して與ふることを見ざる故に、我等をして大恥辱を受けしめたり」と。次に復、一阿修羅王有り。鎮星毘摩[一〇]と名づけしが、是の如き言を作さく、「我等は昔より各各已に四天下中に於て釋提桓因と共に相齊等なり。今、野干[一一]の師子の後を逐ふが如し。我等寧ろ此の凡下を捨て、本國の城邑宮殿に還る可し。又我れ寧ろ死なん。何ぞ能く是の如き欺辱を受くるを忍びんや。此れ是の大怨は我等が輩をして大憂苦を生ぜしむ」と。時に羅睺羅阿修羅王、是の如き言を作さく、「衆生寧んぞ最勝人の邊りにて、其の罵辱を受く可く、凡下に於て讃歎を得されし。何を以ての故に、多好人をして輕賤せられしめん故なればなり。此の天人師は、三界中に於て最勝自在にして、彼岸に住し善く時宜を知り、其の所應に隨ふ、故に是の如きなり」と。

爾の時、月藏菩薩摩訶薩、合掌して佛に向ひ一心に敬禮し、是の言を作さく、「導師當に觀ずべし。此の羅睺羅阿修羅王は是の如き、堅慧勝慧を具有し、堅信に安住し、善を樂ひ、忍を樂み、持戒清淨にして深く三寶を信じ、久しからずして速に無上導師と成らん。唯願はくは、世尊よ法を熾然ならしむるが故に應當に此の羅睺羅の分を與へたまふべし」と。

【八】宋・元・明の三本は月藏分第十二の六字なし。
【九】火味阿修羅。所々に出づ。雪山に住す。
【一〇】鎮星毘摩阿修羅倚害心を捨てず。
【一一】野干。梵 Sṛgāla 狐に類す。梵英辭典などによると Jackal の類となせり。

ん、乃至當に不可害輪を得べし」と。

爾の時、世尊是の語を作し已つて卽ち呪を說いて曰はく、

哆經夜他一　耆唎耆唎二　耆盧那跛帝三　吟泥四　呵膩泥五　阿泥那跛帝六　犂籌犂籌七　蘇婆呵八

汝は此の呪を以てすれば、南方當に大力雄猛不可害輪を得べし。已の眷屬、及び他の眷屬に於て尙ほ敢て近かず、何ぞ能く觸嬈せんや」と。

爾の時、世尊、復、[七]毘樓博叉天王に告げて言はく「我れ當に汝に西方大力雄猛不可害輪大明呪句を與ふべし。汝此の大力雄猛不可害輪大明呪を持するを以ての故に、已の眷屬、及び他の眷屬に於ける諸の龍・夜叉・羅刹・阿修羅・乾闥婆・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那等、尙ほ敢て近かず。何ぞ能く觸嬈せんや」と。

爾の時、世尊是の語を作し已つて卽ち呪を說いて曰はく、

哆經夜他一　阿毘婆嘍泥二　婆嘍拏跛帝三　勿囉竭囉跛帝四　婆嘍泥五　婆嘍拏耶世六　憂受婆羅七　鉢囉受婆㮚八　膩受婆隸九　摩呵受婆隸一〇　受婆羅一一　摩身達囉舍一二　婆闍鞞一三　薩婆哆囉毘唎帝一四　訖唎多耶世失蚩丑芥反一五　蘇婆呵一六

「汝は此の呪を以てすれば西方當に大力雄猛不可害輪を得べし。已の眷屬、及び他の眷屬に於て尙ほ敢て近かず、何ぞ能く觸嬈せんや」と。

爾の時、世尊、復四大天王に告ぐるに偈を說いて言はく、

「諸山は稱譽有り、自在者は化作す。極雨(雨)・雞羅娑・香仙・佉羅擔・風火及び雪山は、日月の所居處なり。北方を常に護持す。世尊眞妙の法は、般支・般遮羅・訖尼・伽羅度なり。彼等常に

【七】西方毘樓博叉天王に與ふ。四十六卷脚註五一を見よ。

與へん。汝は此の大力雄猛不可害輪大明呪を持するを以ての故に、己の眷屬、及び他の眷屬に於ける天龍・夜叉・羅刹・阿修羅・乾闥婆・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那も尙ほ敢て近づかず。何ぞ能く觸嬈せんや。汝一切の惡鬼神所に於て、當に大力雄猛不可害輪を得べし」と。

爾の時、世尊是の語を作し已つて卽ち呪を說いて曰はく、

哆經夜他一　勿檀泥二　鉢羅勿檀泥三　勿達那跋帝四　渠唎乾陀利五　朱唎六　旃荼唎七　頞唎毘闍耶末提八　駈駈勿檀泥九　跋羅一〇　吠羅一一　勿檀泥一二　蘇婆呵一三

汝は此の呪を以てすれば、北方當に大力雄猛不可害輪を得べし。己の眷屬及び他の眷屬に於て尙ほ敢て近かず、何ぞ能く觸嬈せんや」と。

爾の時、世尊、復、[五]提頭賴吒天王に告げて言はく、「我れ今汝に東方大力雄猛大明呪句を與へん。乃至當に不可害輪を得べし」と。

爾の時、世尊、是の語を作し已つて、卽ち呪を說いて曰はく、

哆經夜他一　丘嘍闍帝二　勿嘍闍帝三　鉢羅帝虱蠆北芥切四　摩訶薩槃五　崎囉跋帝六　鬱那婆帝七　伽樓婆帝八　求嘍鞞九　勿嘍鞞一〇　求嘍勿嘍鞞一一　求嘍求嘍一二　勿嘍乾提一三　勿嘍闍帝一四　阿羅婆婆帝一五　摩羅婆婆帝一六　夥泥迷泥一七　多豆婆南一八　多豆婆南一九　蘇婆呵二〇

汝は此の呪を以てすれば東方當に大力雄猛不可害輪を得べし。己の眷屬、及び他の眷屬に於て尙ほ敢て近かず、何ぞ能く觸嬈せんや」と。

爾の時、世尊、復、[六]毘樓勒叉天王に告げて言はく、「我れ今、汝に南方大力雄猛大明呪句を與へ

【五】東方提頭賴吒天王に與ふ。四十六卷脚註四八を見よ。

【六】南方毘樓勒叉天王に與ふ。四十六卷脚註四九を見よ。

巻の第五十三

[一]月藏分第十二　呪輪護持品第十五

爾の時、世尊、復、[二]四天王に告げて言はく、「我れ今汝に[三]大力雄猛不可害輪大明呪句を與へん。是の如き呪句は過去の億百千萬諸佛の演說したまふ所なり。汝若し此の大力雄猛不可害輪大明呪句を持すれば、一切の諸魔、及び魔の眷屬尙ほ敢て近づかず、何ぞ能く觸嬈せんや」と。

爾の時、世尊是の語を作し已つて卽ち呪を說いて曰はく。

哆絰夜他一　阿婆夜陀提二　毘嗄陀毘羯羅咩三　阿那毘㘑四　阿那羅移五　阿毘懃泥六　阿拘毘移七　阿呪帝八　輪婆提市九　提闍婆底一〇　摩訶提帝一一　憂筱舍咩一二　迷哆囉伽帝一三　阿婆嘍吟一四　迷達涕一五　頞他悉地一六　舒婆讀遮一七　婆蒱婆婆帝一八　婆摩竭囉舒祇一九　阿嵬哆㘑二〇　達摩毘訶㘑二一　哆他多婆摩底二二　佛陀地鼡他泥二三　尸羅毘首地二四　阿嵬羯囉咩二五　阿僧訶唎移二六　復多倶致二七　阿毘市毐帝二八　蘇婆訶二九

「諸の仁者よ、此れは是れ、汝等四大天王の大力雄猛不可害輪、大明呪句にして、是の如き呪句は過去億百千萬の諸佛の演說したまふ所なり。汝若し此の大力雄猛不可害輪大明呪句を持すれば、一切の諸魔、及び魔の眷屬尙ほ敢て近づかず、何ぞ能く觸嬈せんや」と。

爾の時、有らゆる一切の諸魔及び魔の眷屬皆悉く驚怖して勢力有ること無し。各各羞慚して、佛に向ひて合掌せり。

爾の時、世尊、復、[四]毘沙門天王に告げて言はく、「我れ今汝に北方大力雄猛不可害輪大明呪句を

【一】明本は月藏分第十二の六字なし。
【二】四天王。四王に同じ。四十七卷脚註六八を見よ。
【三】大力雄猛不可害輪大明呪句。
【四】四天王の一々に就て佛は大力雄猛不可害輪大明呪句を與ふ。此の處は北方の守護神、毘沙門天王に與ふるなり。毘沙門の說明は四十六卷脚註四七を見よ。

る諸の聲聞を供養する有らば當に五事を以て增して彼等を饒益すべし。膩澤にして香美味の花果、衆くの藥草は彼をして受用せしめん爲めに、我れ悉く豐饒ならしめん。三種味精氣は彼の增長を得(しむるが)故たり。我等勸めて護持し佛法久しく熾然たらしめん。我れ彼國王をして剎埃無慚の者は、彼等の王をして應に遮せしめん」と。大衆咸く共讃へたり」と。

の財物に於ても亦復守護し藏惜し積聚し、或は復呪術、或は書畫を以て他をして自活せしむ。若し是の如き者は、我等護持し養育すること能はず。我れ今終に三世佛の所に於ての故に妄語して染汚罪を犯さず」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。妙丈夫よ。我れ無量阿僧祇劫に於て、所修の法眼善く、正法の毘尼正戒を說く。是の如く勤加して護持し養育し久しく住せしむる者は、則ち三世諸佛に供養を爲すなり。汝等是の如くなれば則ち壽善增長・財增長・力增長・樂增長・朋黨增長・眷屬增長・宮殿增長・信增長・戒增長・聞增長・精進增長・捨增長・念增長・慧增長を得、是れ增長の因緣力を以ての故に便ち能く速に六波羅蜜を滿じ、等正覺を成じ、猶し我が今無上自然法王と成るを得るが如し。我れ今復、佛の正法を以て閻浮提の諸大國王に付屬し、我が滅後に於て護持し養育し、若し比丘有りて諸の慚愧を離れて我が法を汚染し、私かに田業を立て、奴婢乃至畜生を畜養して、種種の家業、生活を作せば、是の如きの比丘は閻浮提界の諸大國王、應當に遮障し呵責し擯黜すべし。諸の過ちを離れしめて、護持し養育し正法を行ぜしめよ」と。

爾の時、一切諸の來れる大衆・天人・乾闥婆・阿修羅・人非人等咸く皆讃へて言へらく、「善い哉。善い哉。妙丈夫よ。汝佛法久しく住するを得ん爲めの故に勤加して護持せよ」と。

爾の時、世尊重ねて此の義を明かにせんと欲して偈を說いて言はく。

「佛、毘沙門及び千の夜叉衆に告げたまはく、「汝等皆應に共に北方住法の諸比丘、慚愧の聲聞等を護持すべし。汝我が寄付を受け勤加して護り養育せよ。過去の尊導師は汝に敕して佛の正法を安置し護持せしめたまへり。惡衆生を遮障し三精氣を增長し、諸の鬪諍訟を息め相應の諸聲聞も亦當に勤めて之を護るべし」と。毘沙門王の言さく、「是の如き佛の正法の寄付を我れ頂受す。勤加して護り養育し正法眼を熾然し、三精氣を增長し惡衆生を遮障し、諸の鬪訟を勸めて斷じ、無積聚の聲聞少欲知足の者は、能く諸の惡業を離る、我れも亦勤めて護持せん。若し能く修行せ

婦女・童男・童女乃至畜生共に相觸惱して惡因緣を作し、彼の衆生をして迭ひに相殺害し種種に劫奪し、無量の惡行因緣集會せしめば、我れ當に諸の惡衆生を遮障し慈心・悲心・信心・戒心・捨心・聞心・慧心に住せしめ不善を離れしめて、善處に安置し、諸の鬪諍・疫病・飢饉・非時の風雨及び惡しき霜雹を遮るべし。亦復一切の惡象・師子・虎狼・惡牛・惡馬・熊羆・鷹鷂[20]・蚊虻・繩（蠅）蚤を遮障し、亦一切の花葉・果藥・五穀をして滋茂し、芳香・美味・好色・膩澤皆悉く樂むべからしめ、常に豐足せしめん。土地味精氣・衆生味精氣・法醍醐味精氣、是の如き精氣增長して世間の有らゆる枯澡・麁澁・惡色・無味・臭穢にして、花葉、果藥の愛樂すべからざる不中の用物は、我れ彼等をして皆悉く隱沒せしめん、是の如く地味精氣・衆生味精氣・法醍醐味精氣を增長して久しく住し、地味精氣・衆生味精氣・法醍醐味精氣增長して久しく住するを以ての故に是の如き佛法增長して久しく住し、是の佛法增長して久しく住するを以ての故に、一切衆生の生死煩惱の長夜は休息して、無畏大涅槃城に入るを得るなり。是の因緣を以て、我れ軍將・大臣・眷屬と共に閻浮提北方第四分を護持す、佛の法眼をして久しく住し熾然たらしめ、乃至亦世尊の弟子をして積聚する所無く、閑林に住して犀牛の角の如く獨にして侶なく、三業相應して頭然を救ふが如く、相調弄・欺教・鬪諍せず。諸の衆生に於て慈心・悲心・愍心・信心・戒心・捨心・精進心・念心・定心・慧心を生ぜしめん。大德婆伽婆よ。我等是の如く佛の法眼をして久しく世間に住し、三寶種に於て熾然し久しく住せしめん。亦世間一切の衆生の不可樂事・苦觸等の物をして悉く休息せしめ惡衆生を遮り、善法を建立して三惡趣を息め、三善道を增さん。若し復世尊の聲聞弟子にして正念を棄捨し、思惟を棄捨し、正觀を棄捨し、讀誦及び他の爲めに說くを棄捨し、正法の所修行事を棄捨して、家業の種種なる生具・善賈・種植・園林・果樹を營綜し、奴婢・象馬・駝驢・牛羊・雞犬・豬豚・麞鹿・鷹鷂・孔雀を畜養して、王家の有らゆる事業、城邑の事、聚落の事、家業の事を勤修し、俗と與に交通して驅使走役し、信命を通致して錢賤、飲食・衣服・稻粟・繒帛を貯積し、他

【二〇】鷹鷂。たかと、はいたかとのこと。

過去の諸佛已に曾て我に敎へて此の閻浮提北方第四分を護持し安置し養育を作さしむ。我れ今是の如く深く佛の敎を受け、閻浮提北方諸佛の法を護持したてまつらん」と。

爾の時、拘毘羅毘沙門王兒及び大臣・刹多羅等諸の夜叉・十六天神・一切の眷屬・男夫・婦女童男・童女を將ゐ、皆座より起ちて合掌し佛に向ひ佛足を頂禮して白して言さく、「大德婆伽婆よ。我れ及び眷屬、今佛所に於て深信を生ずるを得たり。尊重し、敬仰すること未曾有なるを得たり。法寶、僧寶にも亦深信を生じ、尊重し、敬仰すること未曾有なるを得たり。大德婆伽婆よ。我れ等今より誠心、慇懃にして惡心の諸の衆生を攝伏せん。故に勤加して此の閻浮提北方第四分を護持す。我れ今も亦上首毘沙門王と與に、同心して此の閻浮提北方諸佛の法を護持したてまつらん」と。

爾の時、拘毘羅毘沙門王、復、佛に白して言さく、「世尊よ。若し佛の弟子・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の佛の正法に於て三業相應する者、專心法を聽き如說に修行し持戒を學ぶ者、若しは餘の衆生の三寶所に於て、敬信を得る者、佛に供へ僧に施し勤めて福業を修する者は、我れ眷屬と與に、皆共に同心して佛の寄付を受け、爲めに安置し護持し養育を作さん。若し佛弟子の阿蘭若に依つて、法に住し法に順ひ勤加して修行すること犀牛の角の如く、獨にして侶なく閑林に住せば、我れ常に倍(ますく)復(また)護持し養育すべし。若し衆生有りて彼の閑林に於て、世尊の有らゆる修行の聲聞を勤修供養して乏しき所の者無からしめん。我れ當に方便して護持し養育し、五事の饒益をなすべし。何をか謂つて[一〇七]五と爲す、一には壽命增長・二には財增長・三には無病增長・四には樂增長・五には稱譽增長なり。我れ是の如きを以て護持し養育し具足せしむ。故に三寶熾然し佛種久しく住す。若し衆生有りて己の境界に於て聚積を貪求し厭足有ること無く、後世の怖畏すべき事を觀ぜず、嗔惡・躁急にして慈愍有ること無く、刹利に觸惱し、種種の兵仗もて共に相戰鬪し屠割し[一〇八]斫刺(しやくし)・捕獵・殺害し、牢獄繫閉・謫(たく)罰(はつ)[一〇九]擯黜(ひんちゆつ)・殺生・偸盜し、乃至邪見にして刹利の與に惡因緣を作し、及び婆羅門・毘舍・首陀の男夫・

【一〇七】五事の饒益を擧ぐ。

【一〇八】斫刺。きり殺すこと。

【一〇】擯黜。しりぞけしりぞけること。

け、次をば阿吒迦と名け、次をば阿吒薄拘と名け、次をば那羅提と名け、次をば那羅邏擅と名け、次をば禪那梨沙婆と名け、次をば質多羅迦と名け、次をば質多斯那と名け、次をば施婆利と名け、次をば涅伽多と名け、次をば長牟と名け、次をば摩那吒と名け、次をば摩那婆と名け、次をば柔何度と名け、次をば毘盧遮那と名け、次をば伏龍と名け、次をば毘摩と名け、次をば護門と名け、次をば多摩那と名け、次をば能迷惑と名け、次をば取意と名け、次をば子男婆と名け、次をば迦吒僧叉と名け、次をば鉢乾沓婆と名け、次をば明月と名け、次をば阿婆婆婆と名け、次をば三牟達羅と名け、次をば牛仙と名く。斯れ等の[101]五十夜叉軍將は皆是れ汝の大力軍衆なり。汝の教敕を受く。汝も亦應に敬信を生ずるを得せしめ、共に閻浮提北方第四分を護らしむべし」と。

「復十六諸天神王有り。初めをば伊茶と名け、次をば郫茶と名け、次をば那茶と名け、次をば天蓮花と名け、次をば鉢陀摩跋帝と名け、次をば髟(一兮反)乾絺多と名け、次をば摩訶軍闍と名け、次をば阿奚多と名け、次をば奚多奢耶と名け、次をば毘樓稚と名け、次をば憂波羅と名け、次をば月と名け、次をば如月と名け、次をば大月と名け、次をば婆樓那と名け、次をば三波帝と名く。斯れ等十六の諸天神王も亦大力有る多くの軍衆有り。汝も亦應に敬信を生ずるを得せしめ、共に閻浮提北方第四分を護らしむべし。北方に塔有り。[102]尸佉利と名く。過去の諸佛・諸仙・賢聖彼に依つて住處し四聖諦を見たり。北方に山有り、名けて[103]申渠と曰ふ。日月天子の所居住處にして、及び大神力名稱鬼神の所依住處たり。汝彼等の大精進力を以て共に閻浮提北方第四分を護れ。北方に復[104]三曜・[105]七宿・[106]三天童女有り。汝も亦應に世に正行し、共に閻浮提北方第四分を護らしむべし。北方の有らゆる天龍・夜叉・羅刹・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那は汝の北方無所屬に住する者なり。我れ當に後に於て、分布し安置し其の國土に隨つて、亦汝等をして護持し養育せしむべし」と。

爾の時、拘毘羅毘沙門天王、佛に白して言さく、「世尊よ。是の如し。是の如し。大德婆伽婆よ。

【一〇一】五十夜叉軍將とあるも實數は五十一なるが如し。

【一〇二】尸佉利。北方の塔名。

【一〇三】申渠。北方の山名。

【一〇四】三曜。北方の三曜。鎭星・歲星・熒惑星・五十一卷に出づ。

【一〇五】七宿。北方天仙の七宿。虛・危・室・壁・奎・婁・胃・五十一卷に出づ。

【一〇六】三天童女。北方の三天童女鳩槃・彌那・迷沙・五十一卷に出づ。

らん。幷に及び汝の子、大臣・眷屬・夜叉・毘舍遮をして皆護持せしむ。汝に[100]九十一子有り。種種の行を樂めり。彼の或ものは象に乘りて十方に遊行し、或ものは復、馬に乘り、或ものは復、駝に乘り、或ものは特牛に乘り、或ものは羖羊に乘り、或ものは白羊に乘り、或ものは復、龍に乘り、或ものは復鳥に乘り、或ものは男夫に乘り、或ものは婦女に乘り、或ものは童男に乘り、或ものは童女に乘り、十方に遊行す。汝も亦應に敬信を生ずるを得せしめ、共に閻浮提北方第四分を護らしむべし」と。

「復、夜叉大臣、大力軍將有り。初めをば無病と名け、次をば吉祥と名け、次をば安隱と名け、次をば成利と名け、次をば他不勝と名け、次をば滿願と名け、次をば豐饒と名け、次をば歡喜と名け、次をば水盡(盡丹)と名け、次をば南浮沙度と名け、次をば電光と名け、次をば火光と名け、次をば水眼と名け、次をば郁伽と名け、次をば好耳と名け、次をば攝受と名く。斯れ等の夜叉は是れ汝の大臣大力軍將なり。應に彼等をして敬信を生ずるを得せしめ、閻浮提北方第四分を護らしむべし」と。

「復四大刹多羅有り、一をば長目と名け、二をば長面と名け、三をば坐瓮と名け、四をば花杖と名く。斯れ等の刹多羅は皆是れ汝の大力軍將なり。汝も亦應に敬信を生ずるを得せしめ、共に閻浮提北方第四分を護らしむべし」と。

「復、夜叉大力軍將有り。常に兵衆を將ゆ。初めをば因陀羅と名け、次をば蘇摩と名け、次をば婆樓那と名け、次をば婆闍波帝と名け、次をば波羅婆闍と名け、次をば伊奢那と名け、次をば勝欲と名け、次をば栴檀と名け、次をば尼乾吒と名け、次をば尼乾吒迦と名け、次をば婆稚と名け、次をば摩尼遮羅と名け、次をば波尼邏と名け、次をば憂般遮迦と名け、次をば娑陀祇利と名け、次をば迦摩奚摩跋多と名け、次をば薩他と名け、次をば波羅末檀那と名け、次をば乾竹迦と名け、次をば多卑と名け、次をば富樓那と名け、次をば佉陀利と名け、次をば瞿波利と名け、次をば祇呵知と名

【一〇〇】拘鞞羅毘沙門の九十一子。

なり。我當に後より分布し安置して其の國土に隨ひ、亦汝等をして護持養育せしむべし」と。

爾の時、栴檀花毘樓博叉天王是の如き言を作さく、「大德婆伽婆よ。過去の諸佛已に曾て是の如く我をして安置し、此の閻浮提西方第四分を護持し養育せしめたり。今世尊の我れをして安置せしめたる如き等と異りあることなし。我れ今佛の前に深く敎勅を受け、西方を護持し諸佛の正法乃至善道皆盈滿ならしめん」と。

爾の時、毘樓博叉は復、佛前に於て偈を說いて言はく、

「毘樓博叉王、諸の龍臣と共に言はく、過去の佛天仙我れに勅して西方を護らしめ、幷びに諸龍・軍衆には惡衆生を遮障し、鬪亂と諸の病疫とは汝應に休息せしむべし、三精氣を增長し、及び我が法眼、住法の諸比丘は少欲にして積聚なし。護持して壽命及び色力、樂膽を增さん。是の如き天人師、今悉く我れに向ひて說くに、深く佛の所勅を信じ、我れ今頂戴して受け、三寶種を護持し正法眼を熾然し、住法の諸聲聞を我等當に護持すべく、諸龍軍衆と共に諸の不善法を除き、惡衆生を遮障し、彼をして悉く休息せしめ、花・果・藥・豐饒、膏澤にして衆味具はり、諸の刹利王をして佛の正法を敬信せしめ、毘舍及び首陀・龍神・夜叉衆は我れ彼をして信を得せしめ、深く佛の所說を敬せしめ、閑林に在り少欲にして積聚なきもを護持し、正行の諸宿曜・星辰・歲の四時・三惡趣を竭さしめ、善道皆盈滿せしめん」と。

[九八]月藏分第十二　毘沙門天王品　第十四

爾の時、佛、[九九]拘睥羅毘沙門天王に告げて言はく、「妙丈夫よ。此の四天下の閻浮提界北方第四分を汝應に護持すべし。何を以ての故に、此れ閻浮提は諸佛の興れる處なればなり。是の故に汝應に最上に護持すべし。過去の諸佛已に曾て汝をして護持養育せしめたり。未來の諸佛も亦復是の如くな

【九八】明本には月藏分第十二の六字なし。

【九九】拘睥羅毘沙門。梵 Kumbhira-Vaiśrāvaṇa.

ば和修吉と名け、次をば善建立と名け、次をば天歯と名け、次をば得叉迦と名け、次をば婆樓那と名け、次をば婆娑婆と名け、次をば阿樓那と名け、次をば侯樓茶と名け、次をば氷伽羅と名け、次をば生伽羅と名け、次をば功徳と名け、次をば妙徳と名け、次をば功徳滿と名け、次をは虚妄行と名け、次をば波賒と名け、次をば摩訶波賒と名け、次をば聚那と名け、次をば宅施と名け、次をば海施と名け、次をば閻浮施と名け、次をば睒波羅と名け、次をば善臂と名け、次をば蘇摩那と名け、次をば日光と名け、次をば月光と名け、次をば月眼と名け、次をば栴檀と名け、次をば妙賢と名け、次をば妙耳と名け、次をば質多羅と名け、次をば施色と名け、次をば頞支と名け、次をば牟眞隣陀と名け、次をば藍浮羅と名け、次をば迦那迦と名け、次をば象耳と名け、次をば般籌迦と名け、次をば聲佉と名け、次をば伊羅鉢と名け、次をば阿波羅邏と名け、次をば那羅達と名け、次をば憂波那羅と名け、次をば尸利迦と名け、次をば菴羅提他と名け、次をば婆稚子と名け、次をば提到羅吒と名け、次をば瞻波と名け、次をば瞿曇摩と名け、次をば般遮利と名け、次をば項力と名け、次をば黚(九嚴反)婆利と名け、次をば毘摩と名け、次をば山臂と名け、次をば恒伽と名け、次をば辛頭と名け、次をば博叉と名け、次をば私陀斯と名く。是の如き等の六十一の龍皆是れ汝の大力軍將たり。乃至西方十六天神も亦兵衆を有し大勢力有り。初めをば薩沙婆帝と名け、次をば西賒婆帝と名け、次をば耶輸陀羅と名け、次をば那賒跋帝と名け、次をば鬱伽摩と名け、次をば第一善と名け、次をば善覺と名け、次をば善起と名け、次をば闡陀と名け、次をば毘闡陀と名け、次をば離垢と名け、次をば毘樓茶と名け、次をば牛仙と名け、次をば瞻婆迦と名け、次をば優樓闍と名け、次をば迦迦吒誓と名く。乃至西方に塔有り、名けて[九三]柯雨と曰ふ。乃至山有り名けて[九四]香風と曰ふ。乃至山有りて衆色重閣と名く。乃至西方に復[九五]三曜・[九六]七宿・[九七]三天童女有り、皆正行して閻浮提西方第四分を護らしむ。西方の有らゆる諸天・龍・鬼・乃至迦吒富單那等、汝は西方無所屬に住する者

【九三】柯雨。西方の塔名。
【九四】香風。西方の山名。
【九五】三曜。西方の三曜。熒惑星・歳星・塡星・五十一卷に出づ。
【九六】七宿。西方天仙の七宿。房・心・尾・箕・斗・牛・女五十一卷に出づ。
【九七】三天童女。西方の三天童女。毘隆支迦・檀兗婆・摩伽羅・五十一卷に出づ。

佛の言はく、「善い哉。善い哉」と、妙丈夫、乃至一切の諸の來れる大衆・天人・乾闥婆は咸共に讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊重ねて此の義を明にせんと欲して、偈を說いて言はく

「佛、毘樓勒大臣、鳩槃茶に告げたまはく、過去の佛、汝をして南方を護持せしむ。昔昔、諸の天仙も亦汝をして安置し、正法朋を熾然し惡衆生を遮障せしむ。導師今汝に告げて我が法をして熾然ならしむ。當に我が如來正法眼の寄付を受くべし。法に住する諸の比丘、乃至積聚無きものを、應當に護り養育すべし。三寶種を熾然し、三種の精氣を增し、飮食・衆味・藥膏澤豐にして樂む可し。乏少なる所なからしめん。亦彼の施主を護り。財・命・樂・富・慧の五事常に饒益し、悉く增長を得せしめん。正行の諸の宿曜・星辰・歲の四時・三惡趣を竭さしめ、善道を皆盈滿せしめん」と。

[九〇]月藏分第十二　毘樓博叉王品　第十三

爾の時、佛、[九一]栴檀花毘樓博叉天王に告げて言はく、「妙丈夫よ。此の四天下閻浮提界の西方第四分を汝應に護持すべし。何を以ての故に、此れ閻浮提は諸佛の興れる處なればなり。是の故に汝應に最上に護持すべし、過去の諸佛皆て汝をして護持養育せしめたるを以て、未來の諸佛も亦復是の如くならん。幷に及び汝の子大臣眷屬も亦護持せしむ。汝に九十一子[九二]有り。種種の行を樂むこと上の所說の如し。復、諸龍、大臣は兵衆を有し大勢力有り。一をば師子と名け。二をば師子髮と名け、三をば自在と名け、四をば黃頭と名け、五をば黃鼬と名け、六をば赤目と名け、七をば瞿眈摩と名け、八をば山水と名く。乃至復四刹多羅有り。一をば鴦雀と名け、二をば鶣雅と名け、三をば儚(亡曾反)伽叉と名け、四をば闍叉附と名く。乃至復、諸龍軍將有り大勢力有り。常に兵衆を將ゆ。初めをば難陀と名け、次をば憂婆難陀と名け、次をば善現と名け、次をば阿那婆達多と名け、次を

【九〇】明本には月藏分第十二の六字なし。
【九一】栴檀花毘樓博叉天王。
【九二】栴檀花毘樓博叉天王の九十一子。

月尊と名け、次をば衆雜と名け、次をば夜暮と名け、次をば欺狡と名け、次をば不欺狡と名け、次をば惡枳と名け、次をば婆蘇枳と名け、次をば他不勝と名く。斯れ等十六の諸天神王は多くの兵衆を有し、大いに勢力有り。汝も亦應に敬信を生ずるを得せしめ、共に閻浮提南方第四分を護らしむべし」と。

「南方に塔有り、[八三]善安住と名く。過去の諸佛・諸仙賢聖曾て彼に於て住し[八四]四聖諦を見たり。南方に復方に山有り。名けて[八五]善現と曰ふ。過去の諸賢聖衆も亦彼に於て住して四聖諦を見たり。南方に復[八六]三曜・[八七]七宿・[八八]三天童女有り。汝も亦應に世に正行せしめ、共に閻浮提南方第四分を護らしむべし」と。

「南方に復・天龍・夜叉・羅刹・乾闥婆・鳩槃茶・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那の住する有り。汝は南方無所屬の者なり。我れ當に後に分布し安置すべし。其の國土に隨つて亦汝等をして護持し養育せしむ」と。

爾の時、火花毘樓勒叉天王、佛に白して言さく、「世尊よ。是の如し。是の如し。大德婆伽婆よ。過去の諸佛已に曾て我れに囑し教へて安置せしめたまふ。亦過去の諸天、神仙我れをして閻浮提南方第四分を安置し護持せしめんとせり。今世尊の如きも亦安置せしむ。我れ當に頂受し護持し養育すべし。我れ及び眷屬・大臣・軍將も亦復佛法を護持し養育し、乃至[八八]三惡趣に於て皆悉く休息し、三善道に於て增長し盈滿せん」と。

爾の時、火花毘樓勒叉天王の眷屬・刹多羅等、大臣輔佐・鳩槃大將・男夫・婦女・童男・童女彼等皆悉く坐より起ちて佛に向ひ、合掌し佛足を頂禮して佛に白して言さく、「世尊よ。我等今導師世尊に於て深信を生ずるを得、尊重し敬仰し、未曾有なるを得たり。法寶、僧寶にも亦深信を生じ尊重し、敬仰し、未曾有なるを得たり。大德婆伽婆よ。我等今より精勤して閻浮提南方第四分を養育し護持し、乃至佛の正法をして久住熾然ならしめ、惡道を休息して善道を盈滿ならしめん」と。

【八三】善安住。南方の塔名。
【八四】四聖諦。四十七卷脚註八〇を見よ。
【八五】善現。南方の山名。
【八六】三曜。南方の三曜。日・辰星・太白星・五十一卷に出づ。
【八七】七宿。南方の天仙七宿、星・張・翼・軫・角・亢・氐・五十一卷に出づ。
【八八】三天童女。繰呵・迦若・卑羅・五十一卷に出づ。
【八九】三惡趣。地獄・餓鬼・畜生を指す。

「復鳩槃茶大臣有り。多くの兵衆有りて大いに勢力有り。初めをば跋那拘と名け、次をば阿吒薄拘と名け、次をば婆吒迦と名け、次をば藪支盧摩と名け、次をば阿斯目佉と名け、次をば跌荼尸帝と名け、次をば摩兜羅と名け、次をば跌荼泥彌と名け、次をば帝利捷吒迦と名け、次をば栴檀那と名け、次をば伽羅竭陀と名け、次をば藪目佉と名け、次をば陀提目佉と名く。乃至復四刹多羅有り。一をば金剛輪と名け、二をば金剛燄と名け、三をば箭毛と名け、四をば風王と名く。彼等は皆大力の兵衆有り。乃至復鳩槃茶大力軍將有りて兄弟九人なり。一をば栴提と名け、二をば憂波栴提と名け、三をば葛迦賒と名け、四をば鉢濕と名け、五をば摩訶鉢濕婆と名け、六をば大肚と名け、七をば象手と名け、八をば十手と名け、九をば火手と名く。復鳩槃茶には兄弟三人有り。一をば地行と名け、二をば山行と名け、三をば左行と名く。復鳩槃茶の兄弟三人有り。一をば黑色と名け、二をば朱目と名け、三をば雲色と名く。復鳩槃茶の兄弟四人有り。一をば無垢と名け、二をば無瘡疣と名け、三をば雲天と名け、四をば大力と名く。復鳩槃茶に二十六人有り。初めをば長耳と名け、次をば長乳と名け、次をば獨象と名け、次をば編髮と名け、次をば十杵と名け、次をば十目と名け、次をば孤樹と名け、次をば樂欲と名け、次をば大欲と名け、次をば木師と名け、次をば愛師と名け、次をば三鳩槃茶子と名け、次をば一切蒿と名け、次をば雜色と名け、次をば綵眼と名け、次をば滿杖と名け、次をば瓶眼と名け、次をば無病と名け、次をば藹叉と名け、次をば黃髮と名け、次をば多荼叉と名け、次をば叉叉と名け、次をば縷綖と名け、次をば瞰蠅と名け、次をば馬水と名け、次をば瞰髓と名く。斯れ等の鳩槃茶大力軍將は大勢力を有し、多くの兵衆を有す。汝も亦應に敬信を生ずることを得せしめ、共に閻浮提南方第四分を護らしむべし」と。

「復十六諸天神王有り。初めをば雜止と名け、次をば雜髮と名け、次をば芬陀利と名け、次をば妙光と名け、次をば火光と名け、次をば獨闇と名け、次をば多闇と名け、次をば斑駮と名け、次をば

「世間の[七九]二神通は、日月を遣はして來らしむ。疾行堅天子、今大衆、欲するものと與なり。是の如き佛の正法、我等當に守護すべし。三寶種を熾然し、星辰正行を得、三精氣を增長し惡衆生を遮障し、法朋の增長を得、善道皆盈滿せり。百億の提頭賴・勒叉・毘樓博・百億の毘沙門咸く共に佛に白して言さく、「我れ已の天下に於て各皆勤めて護持せり。乃至諸の比丘の少欲にして積聚を離るるものは、我等諸惡を遮り、法朋の增長を得、鬪諍・病・飢饉・諸の惡を休息せしめん」と。導師、佛告げて言はく、「樂睺提頭賴よ。過去の諸の如來已に汝をして安置し、閻浮提東方第四分を護持せしむ、汝の軍及び眷屬も亦法眼をして增さしめよ」と。

提頭、佛に白して言さく、「唯然り大雄猛にして我が軍の大力衆、法眼をして熾然たらしめ、諸の不善法を除き惡衆生を遮障し、常に諸の聲聞の積聚する所なき者を護りたてまつらん」と。乾闥婆悉く起つて亦復佛に白して言さく、「聲聞の積聚する無きは飲食乏しきことなからしめ、我等法を護持し法の境界に住する者は、彼の施主を養育し我等も亦護持せん。惡衆生を遮障し法朋を熾然たらしめ、三種の精氣を增し、善道皆充滿せん」と。

[八〇]月藏分第十二　毘樓勒叉天王品　第十二

爾の時、佛、[八一]火花毘樓勒叉天王に告げて言はく、「妙丈夫よ。此の四天下の閻浮提界南方第四分を汝應に護持すべし。何を以ての故に、此れ閻浮提は諸佛の興れる處なればなり。是の故に汝應に最上に護持すべし。過去の諸佛は已に曾て汝をして護持し養育せしむ。未來の諸佛も亦復是の如くならん。幷に及び汝の子一切の眷屬・大臣・軍將・夜叉・羅刹皆護持せしめよ。汝に[八二]九十一子有り。種種の行を樂めり、或ものは復象に乘り、十方に遊行し、乃至或ものは童男童女に乘り、十方に遊行す。汝も亦應に敬信を生ずるを得せしめ、共に閻浮提南方第四分を護らしむべし」と。

【七九】二神通。神通とは靈妙にして自在なること。天眼と天耳の二通のこと。
【八〇】明本には月藏分第十二の六字なし。
【八一】火花毘樓勒叉天王。
【八二】火花毘樓勒叉天王の九十一子。

寶を敬信し供養し奉施し法を聽受せる者は、佛の正法に於て發心し修行し禁戒を受持し相應に住する者、幷びに勤めて諸の衆僧を供養する者は、我等常に當に護持し養育すべし。若し復、餘の諸の衆生等有りて、阿蘭若に住し、及び佛の弟子法に住し、法に順ひ發心堅固にして犀牛の角の如く、獨りにして侶なく閑林に住するは、我等當に一切の所須を以て供養し奉施し護持し養育すべし。若し復、餘の一切衆生有りて彼の閑林に相應して住する者を見て、能く所須を以て勤めて供養する者は我等も亦當に護持し養育すべし。其の所須をして悉く意に稱ふことを得せしめん、亦長壽にして諸の衰病なく、財富み自在に、安隱、快樂にして善名、流布せしめん。大德婆伽婆よ。我等當に是の如き等の事を作し佛の正法を護持し養育すべし。亦一切をして鬪諍・疫病・飢饉・儉短・非時・風雨をして悉く休息せしめん。復一切の花果・藥草・五穀等の物をして滋茂し成熟し肥膩し軟澤にして善香・美味・妙色を增盛せしめ、又地味・衆生味・法醍醐味をして、滋茂し增長せしめん。是の如く精味增長を得る故に、三惡道を息め、善道盈滿し佛法久しく住し世間に熾然せん」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。妙丈夫よ。汝等精勤して是の如き事を作し、護持し養育し我が法眼をして久しく住し熾然し善く法律を說き、能く信解を生ぜしむれば、則ち具足して三世一切諸佛を供養すると爲す。汝等は[七八]壽命增長・法增長・眷屬增長・名稱增長・色力增長・善朋增長・舍宅增長・信增長・戒增長・聞增長・精進增長・念增長・慧增長を得るなり。是の如き等の事、增長を得るが故に、便ち能く速に六波羅蜜を滿じ、無上自然の法王と成るを得ること、我が今の如きなり」と。

爾の時、一切の諸の來れる大衆、天人・乾闥婆等、咸く皆讃へて言へらく、「善い哉。善い哉。妙丈夫よ。汝應に是の如く精勤して諸佛の正法を護持し久しく住するを得、熾然して世に在らしめ斷絕せざらしむべし」と。

爾の時、世尊重ねて此の義を明かにせんと欲して偈を說いて言はく。

【七八】 十三增長を擧ぐ。

「東方に[七三]遮波羅と名くる處有り、過去の諸佛曾て彼に依つて住せり。亦是れ羅漢・諸の賢聖衆の證果を得たる處、諸の天人等發心修行せる所依住處たり。汝等應に大精進力を以て閻浮提東方第四分を護持すべし」と。

「東方に山有り、阿跋多と名く。次をば梨師三婆婆と名く。亦是れ過去の諸佛賢聖の本の修行處にして、諸の天人等此處に依つて聖諦を見るを得たり。是の故に、汝等當に大精進力を以て、閻浮提東方第四分を護持すべし」と。

「東方に復[七四]三曜・[七五]七宿・[七六]三天童女有り。應に彼等をして其の晝夜に於て世間に正行し、汝彼等と共に閻浮提東方第四分を護持せしむべし」と。

「東方に復、天・龍・夜叉・羅刹・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那等の住する有り。汝は東方無所屬の者なり。我れ當に後に於て彼等を分布し諸國に安置し、汝をして護持せしむべし」と。

爾の時、樂勝提頭賴吒天王、佛に白して言さく、「世尊よ、是の如し。是の如し。大德婆伽婆よ。過去の諸佛は付囑し安置し護持し養育せるも、亦我等をして東方[七七]弗婆提界を護持せしむ。今の世尊も我をして安置せしむるが如し。一に等しくして異ることなし。我れ當に深心頂戴して佛の正法を敬受し、閻浮提東方第四分を護持すべし、幷びに我が諸宮の眷屬大小も亦護持せしめ、三惡趣に於て皆休息ならしめ、三善道に於て皆悉く熾然せん」と。

爾の時、樂勝提頭賴吒天王、復、刹多羅・輔佐の大臣男夫・夫婦・童男・童女有り、一切皆共に座より起ち、合掌して佛に向ひ頭面に足を禮して、佛に白して言さく、「世尊よ。我等、今、導師世尊に於て深信・尊重・敬仰を生ずるを得て未曾有を得たり。法寶僧寶とにも亦深信・尊重・敬仰を生じて未曾有を得たり、大德婆伽婆よ。我等今より精勤して閻浮提界東方第四分を護持したてまつらん。世尊の有らゆる聲聞弟子、若は比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・若は餘の衆生の三善業に於ける相應の住者、三

【七三】遮波羅。巴 Cīrin 東方の所位。吠舍釐城の聖蹟の一。塔として名あり。

【七四】三曜。東方の三曜。太白星・歲星・月の三。五十一卷に出づ。

【七五】七宿。東方の七宿。昴・畢・觜・參・井・鬼・柳の七。五十一卷に出づ。

【七六】三天童女。東方の三天童女。毘利沙・彌偷那・羯迦吒迦の三。五十一卷出づ。

【七七】弗婆提界。五十一卷脚註五〇を見よ。

碎利迦と名け、次をば槃梯と名け、次をば藍菩尸吒と名け、次をば迦羅荼と名け、次をば拘枳羅聲と名け、次をは耶舍失利と名け、次をば耶舍槃多と名け、次をば耶輸達羅と名け、次をば摩羅槃姤と名け、次をば摩羅緩都と名け、次をば摩頭曼多と名く。復、乾闥婆は兄弟三人有り。一をば尸利曼都と名け、二をば頭抵曼多と名け、三をば富師波曼多と名く。復、乾闥婆は三十三人有り。初めをば薩陀曼都と名け、次をば耶闍曼多と名け、次をば檀那曼多と名け、次をば難提迦と名け、次をば憂波羅と名け、次をば波頭摩と名け、次をば栴檀と名け、次をば栴檀那と名け、次をば度盧摩羅娑と名け、次をば般遮羅と名け、次をば拘枳羅蘇婆羅と名け、次をば霑浮羅と名け、次をば般遮尸佉と名け、次をば搔跋尼と名け、次をば蘇羅斯と名け、次をば摩羅毘と名け、次をば跋達那と名け、次をば迦摩尸利吒と名け、次をば尼乾吒と名け、次をば尼乾吒迦と名け、次をば婆提浮羅と名け、次をば耶輸陀羅と名け、次をば毘首婆蜜多羅と名け、次をば尸騫陀と名け、次をば天鼓と名け、次をば摩兜羅と名け、次をば質多羅斯那と名け、次をば那荼王と名け、次をば禪那梨娑婆と名け、次をば尸婆迦と名け、次をば牟眞隣陀と名け、次をば毘首婆哆盧と名け、次をば除珍達羅と名く。是の如く乾闥婆は多くの軍衆有りて大いに勢力有り、汝も亦應に敬信を生ずるを得せしむべく、當に彼等と共に閻浮提東方第四分を護持すべし」と。

「復十六天神有りて大勢力有り。神通を具足せり。初めをば最勝と名け、次をば上勝と名け、次をば成就義と名け、次をば他不勝と名け、次をば上喜と名け、次をば喜軍と名け、次をば樂喜と名け、次をば增長喜と名け、次をば饒財と名け、次をば多饒財と名け、次をば具毛と名け、次をば十毛と名け、次をば饒毛と名け、次をば憂波羅と名け、次をば鉢摩迦と名け、次をば賒摩と名く。是の如く十六諸天・神王天に威力有り、汝も亦應に敬信を生ずるを得せしむべく、當に彼等と共に閻浮提東方第四分を護持すべし」と。

皆讃へて言はく、「善い哉。善い哉」と。
爾の時、佛、[68]樂勝提頭賴吒天王に告げて言はく、「妙丈夫よ。此の四天下の閻浮提中、東方の第四分は汝應に護持すべし、何を以ての故に、此の閻浮提は諸佛の興れる處なればなり。是の故に汝應に最上に護持すべし。過去の諸佛已に曾て汝をして護持養育せしめたり。未來の諸佛も亦復是の如くならん。幷及び汝の子乾闥婆衆、諸の夜叉等一切の眷屬應に敬信し護持し養育せしむべし。汝に[69]九十一子有り、種種の行を樂む。彼の或るものは象に乘りて十方に遊行し、或ものは復馬に乘り、或ものは復、[70]駝に乘り、或ものは特牛に乘り、或ものは[71]羖羊に乘り、或ものは白羊に乘り、或ものは復、龍に乘り、或ものは復、鳥に乘り、或ものは男夫に乘り、或ものは婦女に乘り、或ものは童男に乘り、或ものは童女に乘りて十方に遊行す、汝も亦應に敬信を生ずるを得せしむべく、當に彼等と共に閻浮提東方第四分を護持すべし」と。

復乾闥婆大臣、大力軍將有り。初めは般支迦と名け、次をば般遮羅と名け、次をば郎伽羅と名け、次をば扇陀と名け、次をば奚摩跋多と名け、次をば質多斯那と名け、次をば那荼王と名け、次をば禪那離娑婆と名け、次をば尸婆迦と名け、次をば牟旨隣陀と名け、次をば毘濕婆蜜多羅と名け、次をば除珍達羅と名く。斯れ等は皆是れ汝の大臣大力軍將なり。汝も亦應に敬信を生ずるを得せしむべく、當に彼等と共に閻浮提東方第四分を護持すべし」と。

「復四大[72]刹多羅・大力軍將有り、多くの兵衆有り、一をば好長耳と名け、二をば好長鼻と名け、三をば善充滿と名け、四をば佉陀梨鉢帝と名く。斯れ等の刹多羅は皆是れ汝の大力軍將なり。汝も亦應に敬信を生ずるを得せしむべく、當に彼等と共に閻浮提東方第四分を護持すべし」と。

「復、乾闥婆大力軍將有り、兄弟三人常に兵衆を將ゐて大勢力有り、彼等皆悉く汝の敎令を受く。一をば樂欲と名け、二をば著欲と名け、三をば悕歌と名く。復乾闥婆の兄弟十一人有り。初めをば

【六八】樂勝提頭賴吒天王。
【六九】樂勝提頭賴吒天王の九十一子。
【七〇】駝。酪駝のこと。
【七一】羖羊。色の黑き牝羊。
【七二】刹多羅。梵 Kṣatra

しく住するを得せしめんが爲の故に、三寶種を紹ぎ斷絕せざるがための故に、三種精氣を損減せざるが故に、惡衆生をして敬信を得せしむるが故に、三惡道をして休息を得せしむるが故に、三善道をして增長を得せしむるが故なり。汝等速に彼の大集所に往き隨喜せんと欲することを說け。我れ及び眷屬は佛の正法に於て護持し養育せん」と。時に彼の疾行堅固天子・佛所に往詣し到り已りて頭面に足を禮して、佛に白して言さく、「世尊よ。彼の日天子・月天子遂に佛足を禮し是の如き言を作せり。我等既に是れ乘車し疾行して、彼の大集所に往詣するを得ざりき、我れ及び眷屬佛の正法に隨喜したてまつらんと欲するを說かん。我れ當に護持し安置し養育すべし、三寶種をして熾然たるを得せしめ、亦[六一]五星[六二]二十八宿をして皆正行を得せしめ、三種の精氣悉く增長せしめ、一切不善の衆生を遮障して、善法朋をして皆充盛を得せしめ、人天の善道具足して盈滿せん」と。佛の言はく、「日天子・月天子よ、汝、我が法に於て護持し養育せば汝をして長壽にして諸の衰患なからしめん」と。爾の時、復、百億の[六三]提頭賴吒天王・百億の[六四]毘樓勒叉天王・百億の[六五]毘樓博叉天王・百億の[六六]毘沙門天王有り、彼等は同時に、及び眷屬と與に座より起ちて衣服を整理し、合掌敬禮して是の如き言を作さく、「大德婆伽婆よ。我等各各己の天下に於て、勤作して佛法を護持し、養育し、三寶種を熾然して久しく住せしめ、三種の精氣を皆悉く增長せしめ、乃至世尊の聲聞弟子・三種の善業相應の作者、我等彼に於て勤加して護持し攝受し養育し心をして不濁ならしめ、諸の散亂を離れ、涅槃の門に趣き、幾の時中に隨ひ我等常に當に一切惡心の衆生を遮障し、善法朋をして久しく住し增長せしめ、一切の鬪諍・疫病・飢饉・非時の風雨・氷寒・毒熱・苦辛・澀觸・無味・枯燥・臭穢・衆惡・不可樂事を悉く休息せしむべし。何を以ての故に、世尊の弟子は[六七]積聚を作さず。常に慈心を修し善と與に相應し諸の散亂を離れて安住したまへるが故なり」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。善男子よ。汝當に是の如く我が修習する所の諸佛の法眼を勤加し、護持し、攝受し、養育すべし」と。諸の來たれる大衆も亦

【六一】五星。木・火・土・金・水のこと。
【六二】二十八宿。Nakṣatra 五十一卷脚註五三—八〇を見よ。
【六三】提頭賴吒天王。東方持國天のこと。四十六卷脚註四八を見よ。
【六四】毘樓勒叉天王。南方增上天のこと。四十六卷脚註四九を見よ。
【六五】毘樓博叉天王。西方廣目天のこと。四十六卷脚註五一を見よ。
【六六】毘沙門天王。北方多聞天のこと。四十九卷脚註二〇を見よ。
【六七】積聚。印度上世よりの世界觀の一にして轉變說に相對す。而して之を主張する徒は正理・勝論と彌曼蹉派にして佛敎の主張する所に非ず。

下に於て其の所王處に隨ひて惡衆生を遮障し心をして擾濁せしめず、善處に安住し正法を修行する者は當に[53]不忘念を與ふべし。若し諸の聲聞有りて涅槃を勤求する者は、一切の所須有らば悉く皆これを供給するも亦彼の施主と與に[54]五功德を增益し、壽命安樂に報ゐられ、精進及び智慧は能く速に六度を滿じ、大菩提を證せん」と。是の如き百千億の諸天大梵王咸共に佛に白して言さく、「我各已の上に於て諸の聲聞を護持し、惡衆生を遮障して佛の正法を安住し、三寶種を熾然し、三種味精氣皆悉く增長せしめん」と。百億の諸の魔衆皆共に慚愧を生じ悉く座より起ちて合掌して佛に白して言さく、「我等皆發心し佛の正法を護持し、三寶種を熾然し、三精氣を增長し、諸の衆生を安置し善道に住せしめん。諸の衆生の爲めの故に一切の惡を休息し、世尊の行法の諸の聲聞、佛の眞妙の法を持し三業常に相應するを護持し、諸の所須の物を以て養育し、乏しきことなからしめん。若し諸の聲聞有りて積聚する所なき者は、鬪諍訟を遠離し、名利を羞慚し堅固に勤めて精進すること猶し頭然を救ふが如ければ、能く無量の衆をして正法に安住せしめん。一切の諸の惡處を皆愛樂すべからしめんや。地に依つて生ずる所の種・果・藥・諸の苗稼は悉く皆滋茂し、膏澤し香味具はらしめん。若し諸の聲聞有りて積聚を貪求する者は[55]瞋妬にして諍訟多し、利を求めて羞恥なく、若し是の如きの輩有らば我等當に捨離すべし。我れ三世の佛に於て、終に[56]妄語を犯さず」と。導師は復告げ語りたまはく、「汝等諸の魔衆よ。國の諸の人王を護りて惡衆生を遮障せよ」と。

[57]月藏分第十二　提頭賴吒天王護持品　第十一

爾の時、此の世界四天下の中に於て、[58]日天子・[59]月天子有りて、彼の[60]疾行堅固天子に告げて言はく、「世尊は今佉羅帝山牟尼諸仙の所依住處に在して大集會を作したまへり。佛及び弟子の佛法をして久

【五二】三精氣。前文の地精氣、衆生精氣、法精氣のこと。
【五三】不忘念。記憶して忘れざること。
【五四】五功德。前節の五利か。
【五五】瞋妬。瞋は瞋恚。妬は嫉妬なり。
【五六】妄語。十惡の一。他人を欺く意を以て、不實の語を作すもの。
【五七】明本には月藏分第十二の六字なし。
【五八】日天子。梵 Sūrya 蘇利耶、修利などの音譯あり。寶光天子・寶意天子などの異名あり觀世音菩薩の變化身といはれ、太陽の中に住し、太陽はその宮殿なりと稱せらる。
【五九】月天子。梵 Candra. 印度神話時代より種神の名を與へられて遂に佛教に入る。月宮の天子勢至菩薩の化現として取扱はる。
【六〇】疾行堅固天子。

者は我等皆共に護持養育し所須を供給して乏しき所なからしめん。若し復、世尊の聲聞弟子の積集する所無ければ護持し養育することも亦上說の如し。

若し復世尊の聲聞弟子の積聚に住し、乃至三業、法と相應せざる者も亦當に棄捨して復養育し自修して住せざるべし、我れ今終に三世佛の所に於ての故に妄語して染汚罪を犯さざるなり」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。妙丈夫よ。汝應に是の如く我が佛法をして熾然し久しく住せしめ諸の衆生に安隱快樂を與ふべし」と。

爾の時、一切諸の來れる大衆・天人・乾闥婆等も亦復彼の五天王を讚へて言はく、「善い哉。善い哉。妙丈夫よ。我れ等、昔より來た未だ是の如き護持養育を聞かず、諸佛の正法久しく世間に住し天人熾盛に惡道減少せん」と。

爾の時、世尊重ねて此の義を明にせんと欲して偈を說いて言はく。

『此の娑婆界に於て、初めて賢劫に入る時、[四五]拘樓孫如來已に[四六]四天・[四七]帝釋・[四八]梵天王に囑し護持し、養育せしめ、三寶種を熾然して三精氣を增長せしめたり。[四九]拘那含牟尼も亦四天下・梵釋諸天王に囑し護持し養育せしめたり。[五〇]迦葉も亦是の如く已に四天下・梵釋・護世王に囑し、行法の者を護持せり、過去の諸仙衆、及以諸の天仙・星辰諸の宿曜も亦囑して分布せしめたり。我れ[五一]五濁の世に出で諸の魔怨を降伏して大集會を作し、佛の正法を顯現し諸天咸勸請して四天下に分布す。我れ時に梵天に問ふ。「誰か付囑を受くるや」と。梵天自稱せず、及以天・帝釋遍ねく諸天を觀じ已りて後、佛に懺謝す。一切の諸天衆、咸共に佛に白して言さく、「我等の所王處、皆正法を護持し、三寶種を熾然し、[五二]三精氣を增長し、諸の病疫、飢饉及び鬪諍を息めしめん。過去の諸の如來我れに敎へて安置せしむ」と。今尊導師の如きも亦勅して護持せしむ。世尊復告げて語りたまはく、「百億の諸梵天・百億の天帝釋・百億の四天王、汝等各皆悉く己の四天

よ。

【三七】閻浮提。梵 Jambudvipa. 須彌山の南方に當れる洲にして吾人の住處なり。五十一卷脚註五一を見よ。

【三八】他化自在天。四十七卷脚註一四を看よ。

【三九】化樂天。化天ともいはれ、四十六卷脚註一五を見よ。

【四〇】兜率陀天。四十六卷脚註一六を見よ。

【四一】須夜摩天。四十六卷脚註一七を見よ。

【四二】釋提桓因。四十六卷脚註一八を見よ。

【四三】法律毘尼。比丘の生活を規定する條令。梵 Dharma-Vinaya.

【四四】五天王。他化自在天・化樂天・兜率陀天・須夜摩天・釋提桓因を指す。

【四五】拘樓孫如來。五十一卷脚註一〇〇鳩留孫を見よ。

【四六】四天。四天王のこと。四十七卷脚註六八を見よ。

【四七】帝釋。釋提桓因に同じ。四十六卷脚註一八を見よ。

【四八】梵天王。四十六卷脚註四二を見よ。

【四九】拘那含牟尼。四十七卷脚註九二を見よ。

【五〇】迦葉。迦葉佛のこと。四十九卷脚註一九を見よ。

【五一】五濁。四十八卷脚註三一を見よ。

雨・冰寒・毒熱・蚊虻・蛇蠍・諸の雜蟲獸は我れ皆遮護して敬信を得せしめん。刹利・婆羅門・毘舍・首陀乃至畜生も亦佛の正法を敬信せしめん。一切の[二〇]天・[二一]龍・[二二]夜叉・[二三]羅刹・[二四]阿修羅・[二五]乾闥婆・[二六]緊那羅・[二七]摩睺羅伽・[二八]迦樓羅・[二九]鳩槃茶・[三〇]餓鬼・[三一]毘舍遮・[三二]富單那・[三三]迦吒富單那等も亦佛の正法を敬信せしめん。復た一切の天・龍・夜叉・羅刹・阿修羅・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽・迦樓羅・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那等をして精氣具足し色力豐盛にして香美味を好み充足して乏しきことなからしめん。あらゆる地に依る一切の草木・根莖・枝葉華果繁茂し[三四]五穀・苗稼・光澤を增長し、及び諸の衣服も亦悉く豐饒にして、土地肥えて良く皆悉く樂しむべし、寺舍・園林・河泉・池井・宮殿・屋宅・山藪・林野をして悉く具足せしめん。諸の衆生をして彼の住處に於て心に悅樂を得て身疲惓せざらしめん。若し復世尊の聲聞弟子の積聚する所有りて煩惱は散亂し、懈怠し、懶惰にして法に應ぜざる者は我れ當に棄捨すべし。復護持し安置し、養育し自修して住せず、我れ今終に三世佛の所に於ての故に妄語して[三五]染汚罪を犯さず」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。諸の[三六]欲自在士よ。汝應に是の如く我が法を熾然すべし。乃至能く一切衆生安隱快樂の爲なり。諸の仁者よ我れ法眼を以て復[三七]閻浮提一切の人王に寄す。若し我が弟子我が法中に於て貪愛・積聚・煩惱・鬪諍すること俗と與に相染し親友と交通し名利を貪求して身口意に於て正法に應ぜず、諸の天人をして敬信を得ざらしめ、樂んで諸の惡を作し不善道に住せば、閻浮提の諸の國等をして當に法の如く治めしめ、佛法をして久しく住するを得せしめん爲の故に。諸の天人等をして敬信を得せしむるが故に」と。

爾の時、世尊復、百億の[三八]他化自在天、百億の[三九]化樂天、百億の[四〇]兜率陀天、百億の[四一]須夜摩天、百億の[四二]釋提桓因に告げて言はく、「諸の仁者よ。我が所說の如く[四三]法律毘尼を汝等に付囑せん。汝當に護持し上の所說の如く安置し養育すべし」と。是の語を作し巳るに、彼の[四四]五天王即ち佛に白して言さく、「世尊よ。若し世尊の聲聞弟子有りて法に住し、法に順ひ三業相應して修業せる

【二〇】天。四十六卷脚註三一を見よ。
【二一】龍。四十六卷脚註三二を見よ。
【二二】夜叉。四十六卷脚註三三を見よ。
【二三】羅刹。四十六卷脚註五四を見よ。
【二四】阿修羅。四十六卷脚註五三を見よ。
【二五】乾闥婆。四十六卷脚註三四を見よ。
【二六】緊那羅。四十六卷脚註五五を見よ。
【二七】摩睺羅伽。四十六卷脚註五七を見よ。
【二八】迦樓羅。四十六卷脚註五六を見よ。
【二九】鳩槃茶。四十六卷脚註五〇を見よ。
【三〇】餓鬼。四十六卷脚註六七を見よ。
【三一】毘舍遮。四十六卷脚註六八を見よ。
【三二】富單那。四十八卷脚註五七を見よ。
【三三】迦吒富單那。四十八卷脚註五八を見よ。
【三四】五穀。米・麥・粟・黍・豆。
【三五】染汚罪。煩惱に名く。煩惱は眞性を染汚するよりかく稱し、梵は Kliṣṭa-aparādha.
【三六】欲自在士。魔醯首羅のこと。四十六卷脚註四五を見

し已らば即ち阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを得て次第に[一四]無上法王を成ずるを得るなり。大德婆伽婆よ。譬へば、[一五]商主の如し。昔より未だ大海の寶洲を見ずと雖も、資糧を辦具して、道路錯はず、諸の商人と共に勤めて功力を用ひ、次第に大海の彼岸に度るを得て、彼の種種なる[一六]摩尼寶洲に到るなり。大德婆伽婆よ。是の如く波旬若し能く誠心にして發露し、一切の惡業を懺悔すれば、諸の善根を以つて至誠にして無上菩提に[一七]廻向し、六勇猛を發せば、則ち能く速かに六波羅蜜を滿じ、能く[一八]三有の生死の大海を度り、無邊の功德皆悉く圓滿し、一切の智慧寶洲に到るを得るなり。是れ二乘の能く到る所に非ず」と。

爾の時、佛、月藏菩薩摩訶薩に告げて言はく「了知淸淨士よ。是の如し。是の如し。汝の所說の如し。此の魔波旬、今我が前に於て、發露し、昔より造作せる所の一切の惡業を懺悔し已つて、淸淨を得、無上菩提の心を發せり。是の故に我れ今是の波旬の與に、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けん。未來世に於て、當に無上法王を成ずるを得べし」と。

爾の時、復百億の諸の魔有り、俱に共に、同時に、座より起ちて合掌し、佛に向ひ佛足を頂禮して、佛に白して言さく「世尊よ。我等も亦大勇猛を發し佛の正法を護持し養育し、三寶種を熾然し久しく世間に住せしめ、地の精氣、衆の精氣、法の精氣をして、皆悉く增上せしむべし。若し世尊の聲聞弟子有りて、法に住し、法に順ひ、三業相應して修行する者は、我等皆悉く護持し養育し、一切の所須をして、乏しき所無からしむべし。復世尊の聲聞弟子有りて、積聚する所なく、諸の煩惱、濁亂、鬪諍を離れて相言訟せず、名利を求めず、諸の惡法に於て、羞慚、恥愧し、[一九]四衆と與に、親友交通せず、聚落を棄捨し、獨り閑林に住して、堅固勇猛にして頭然を救ふが如く、諸の善法に於て相應する住者は、我等當に共に護持し養育すべく、一切の所須をして乏しき所なからしむべし。有らゆる一切の諸の惡衆生は、我れ悉く遮障し、一切處に於て、有らゆる鬪諍・飢饉・疾疫・他の怨敵・非時の風

【一四】無上法王。佛を讚歎する別稱。
【一五】商主。梵 Śreṣṭhi
【一六】摩尼寶洲。摩尼寶の出づるたからじまのこと。
【一七】廻向。梵 Pariṇāma 諸善根を以て菩提にふりむける。三種廻向の中、ここは菩提廻向のこと。
【一八】三有。三界のこと。四十六卷脚註九六を見よ。
【一九】四衆。四十六卷脚註四〇を見よ。

「了知清淨士よ。是の如き魔波旬は今實に我が所に於て種種の留難を作せり。能く盡く過ちを說くこと無く、今大衆の中に於て誠心にして我れに懺謝せよ。是れ[五]諂曲の意に非ず。深く三寶を敬信し尊重すること未だ曾て有らざるなり。是の故に我れ今是の如き魔波旬の與に當に無上正智菩提の記を授くべし」と。

爾の時、月藏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく「世尊よ。凡夫の心輕く猶豫にして定かならず。三乘の中に於て未だ究竟に住せず、善に於て、惡に於て決定すること能はず。願も亦不定なり。不定を以ての故に善知識に遇ひ淨信を生ずることを得るなり。信の因緣を以て、身口意業の所作、諸善能く勝願を發す。彼の善心は勝願の因緣なるを以て悕求する所に隨ひ、彼の最勝妙善の報果を得。大德婆伽婆よ。譬へば牸牛の種種の草を食ふが如し——若は生なるを若は枯れたるを——亦種種淸濁等の水を飲むも搆捋の時に及びて[六]純淨の乳を出すなり。彼の淨乳より[七]香味酪を出し、香味酪より生熟酥を出し、[八]生熟酥より[九]上醍醐を出し勝果成熟す。大德婆伽婆よ。是の如く凡夫の善心相續して能く淨信を生じ、信の因緣を以て次に勝願を發す。是の如く次第して[一〇]大妙果を得るなり。是の如くして世尊、大乘を發す者も亦復是の如し。乃至未だ[一一]柔順忍を得、來らずんば心常に猶豫し動轉不定なり。順忍を得已つて大乘の中に於て六波羅蜜を修して心疲惓せず。次第に增進して乃至自然に[一二]法王と作るを得るなり。大德婆伽婆よ。譬へば糞穢の如し、野田に散置し諸の種子を下し水を以つて漑灌して人功助成して因緣具足せば、諸の種子に於て花葉・果實具足し成熟す。大德婆伽婆よ。是の如く凡夫猶豫心を以つて、大乘の中に於て六波羅蜜を行じ次第に修學して柔順忍を得るなり。是の如く[一三]波旬は復久しからずして能く六波羅蜜を滿じ、阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ず。是の如く昔種種の諸の惡煩惱、熾然にして種種の心行、身口意業有りて、諸の不善を作し、應に苦報を受くべしと雖も、今佛所に於て、深く敬信を得て至誠にして懺悔し、無上菩提の心を發せり。既に發心

【五】諂曲。他を欺く爲に媚態を爲し、曲げて人情に順ふをいふ。
【六】純淨の乳。乳は五味の第一。中より取り出したるまの乳。
【七】香味酪。酪。梵 Dadhi 牛乳を精製せしもの、五味の第二。
【八】生熟酥。生酥 Navanītam と熟酥 Sarpiḥ 五味の第三と第四。
【九】上醍醐。梵 Sarpirmaṇḍaḥ 五味の第五。最も美味なる味をいふ。
【一〇】大妙果。無上菩提の妙果佛果に同じ。すぐれたる結果のこと。
【一一】柔順忍。脚註四十八卷五一を見よ。
【一二】法王。梵 Dharma-rāja 佛を讃歎する名稱。王には最勝と自在との義あり。佛は法門の主にして衆生教化に對して自由自在なればなり。
【一三】波旬。梵 Pāpīyas. 波卑夜・波卑掾・播裨とも音譯す。殺者・惡者は譯なり。欲界第六天王の主たる魔王の名。常に惡心を懷き、惡法を成就し、僧を擾し人の壽命を斷つを志すといふ。

卷の第五十二

[一]月藏分第十二　諸魔得敬信品　第十

爾の時、會中に一魔王有り、名づけて[二]歲星と曰へり。卽ち起ちて合掌し、諸の魔衆に向ひ偈を說いて言はく。

「今此の瞿曇仙は、大欲にして我を欺誑せり。四天下は、一切諸の鬼神、諸の四天王と與に分布し皆悉く護持せしむ。唯我等を除きて、與に分かつことを見ず」と。

爾の時、會中に復、魔王有り、[三]那羅延月と名づく。手指を擧げて魔王波旬を示し、偈を說いて曰はく。

「此の波旬に由るが故に與に我れに分たず。是の如き一惡人、我等の衆を毀滅せん」と。

爾の時、會中に復魔王有り、[四]盧陀佛師吒と名づく、偈を說いて言はく。

「我等今當に共に魔波旬を遠棄すべし。是の如き弊波旬は鄙賤にして極惡の法なり。我等昔よりこのかた、未だ曾て此れを見聞せず。我れ今咸く勸請せんに、大師瞿曇仙の眞正の法寶聚は熾然にして久しく住せしめん、我等當に護持し養育し增長せしむべし」と。

爾の時、魔王波旬は諸の魔の一朋黨と作り、共に平論を見聞し已つて羞慚恥愧し座より起ち合掌し佛に向ひ、偈を說いて言はく。

「一切の佛世尊、諸の世間中に於て永く妄語を離れたまふこと最尊にし獨り第一なり、我れ今懺謝し已りて、一切の尊導師に深く敬信を生ずるを得たり。一向に定んで歸依したてまつる。世尊今何が故に猶ほ厭賤を生ぜらるゝや」と。

爾の時、世尊彼の月藏菩薩摩訶薩に告げて偈を說いて言はく。

【一】宋・元・明の三本は月藏分第十二の六字なし。
【二】歲星魔王。梵 Bṛhaspati-māra-rāja.
【三】那羅延月魔王。梵 Nārāyaṇa-candra-māra-rāja.
【四】盧陀佛師吒魔王。Rudrabuddhiṣṭa ?

三精氣を增長し、諸惡趣を休息し、諸の善道に向はしむ。拘那含牟尼、復大梵王・他化・化樂天乃至四天王に囑せり。次後に迦葉佛、復、梵天王・化樂等四天・帝釋・護世王に囑せり。過去の諸の天仙、諸の世間の僞の故に、諸の宿、曜を安置し、護持し養育せしむ。濁惡の世に至り、〔一〇八〕白法盡滅する時、我獨り無上を覺り、安置して人民を護れり。今大衆の前に於て數々我れを惱亂す。應當に說法を捨て、我を置いて護持せしむべし。十方の諸の菩薩、一切悉く來集し、天王も亦此に來る。娑婆佛國土の我が大梵王に問ふ。誰か昔、護持する者ぞと。帝釋・大梵天・餘の天王を指示す。時に釋、梵王過ちを導師に謝して言はく、「我等の王たる處一切の惡を遮障し、三寶種を熾然し、三精氣を增長し、諸の惡朋を遮障して善朋黨を護持せん」と。

〔一〇八〕白法。清淨潔白なる法をいふ。ここには一切の善法を總稱していへり。

乃至般若波羅蜜を修行する者、有ゆる行法・作法の衆生、及び行法營事を爲さんとする者、彼の諸の衆生を、汝等應當に護持し養育すべし。若し衆生有りて受持し讀誦し他の爲に演說し種々の經論を[一〇六]解說せば、汝等當に、彼の諸の衆生と與に方便を念持し堅固力を得て、所聞に入り、智信にして、諸法相を忘れず、生死を離れて、[一〇七]八聖道三昧を修し、根相應たらしむべし。若し衆生有りて汝の境界に於て、法・奢摩他・毘婆舍那の次第方便に住し、諸の三昧と與に相應して勤求し、三種の菩提を修習する者は、汝等應當に遮護し攝受し勸めて捨施を作し、乏少ならしむる勿かるべし。若し衆生有りて、其の飲食・衣服・臥具を施し、病患の因緣に湯藥を施す者は、汝等應當に、彼の施主をして五利增長ならしむべし。何等をか五と爲す、一には壽增長、二には才增長、三には樂增長、四には善行增長、五には慧增長なり。汝等長夜に利益安樂を得。是の因緣を以て、汝等能く六波羅蜜を滿す。久しからずして、一切種智を成ずるを得ん」と。

時に娑婆世界主大梵天王を首と爲し、百億の諸梵天王と共に咸な是の言を作さく、「是の如し。是の如し。大德婆伽婆よ。我等各各己の境界に於て、弊惡・麁獷にして他を惱害して慈愍の心無し、後世の畏れを觀ぜず、乃至、我れ當に遮障して、彼の施主と與に、五事を增長すべし」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。汝等應に是の如くなるべし」と。

爾の時、復一切菩薩摩訶薩、一切諸大聲聞、一切の天龍、乃至一切の人非人等有りて、讚じて言はく、「善い哉。善い哉。大雄猛士よ。汝等是の如き法に久しく住することを得て、諸の衆生をして、惡道を離るゝを得せしめ、速かに、善道に趣かしめよ」と。

爾の時世尊は重ねて此の義を明かにせんと欲して、偈を說いて言はく、

「我れ月藏に告げて言はん、此の賢劫の初に入り、鳩留佛は梵等四天下に付囑せり。諸惡を遮障するが故に、正法眼を熾然ならしめ、諸の惡事を捨離し、行法の者を護持して三寶種を斷たず。

【一〇四】提謂波利。宋・元・明・三本は謂に作れり。今之に從ふ。二商人の名。提謂とは名、帝梨富娑 Trapusa にして瓜、轉謂等と稱す。波利とは名、跋梨迦 Bhallika にして優婆離、金挺等と稱す。北天竺の人とも或は憂陀迦羅 Utkala の人ともいはる。釋尊は之に對して初めて人天教を說き髮爪を與へて造塔せしむと。五分律第十五卷に出づ。此の二商人の記事諸所に散說せらる。

【一〇五】巳。今已に改む。

【一〇六】高麗藏本は脫に作れり説は宋・元・明の三本にあり。今之に從へり。

【一〇七】八聖道。四十六條脚註八五を見よ。

爾の時、娑婆世界主大梵天王、及び憍尸迦帝釋、佛足を頂禮して是の言を作さく。「大德婆伽婆よ。大德修伽陀よ。我今過を謝したてまつる。我れ小兒の如く愚癡にして無智なりき。如來のみ前に於て自ら名を稱せず。大德婆伽婆よ。唯願くは、容恕したまへ。大德修伽陀よ。唯願くは容恕したまへ。諸の來る大衆も亦、願くは容恕せよ。我が境界に於て、言說敎令し自在處を得て、護持し養育し、乃至諸の衆生をして善道に趣かしむるがための故に、我等曾て、鳩留孫佛に於て已に敎勅を受け、乃至三寶種をして、已に熾然作らしめたり。拘那含牟尼佛・迦葉佛の所にて我れ敎勅を受くることも是の如し。三寶種に於て已に熾然を勸め、地精氣・衆生精氣・正法味醍醐精氣、久しく住して增長せる故に、亦我れの如く、今世尊の所に於て、敎勅を頂受し、已の境界に於て、言說敎令自在處を得て、一切の鬪諍・飢饉を休息し、乃至三寶種をして斷絕せざらしむるが故に、三種の精氣久しく住して增長するが故に、惡行の衆生を遮障して、行法の衆生を護養するが故に、衆生の三惡道を休息して、三善道に趣向せしむるが故に、佛法をして久しく住するを得せしめんための故に、勤めて護持を作したてまつらん」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。妙丈夫よ。汝應に是の如くなるべし」と。

爾の時、佛、百億の大梵天王に告げて言はく、「有らゆる、行法・住法・順法は惡を厭捨する者なり。今悉く汝等の手中に付囑せん。汝等賢首よ。百億の四天下各各の境界に於て言說・敎令自在處を得て、有らゆる衆生の弊惡、麁獷にして、他を惱害して慈愍有ることなく、後世の畏れを觀ぜず、刹利心、及び婆羅門、毘舍・首陀心を觸惱し、乃至畜生心を觸惱する是の如きは殺生の因緣を作り、乃至邪見の因緣を作し、其の所に隨ひて非時の風雨を作し、乃至地精氣・衆生精氣・正法精氣をして損減の因緣を作さしむる者なり。汝應に遮止して善法に住せしむべし。若し衆生有りて、善を得んと欲する者、法を得んと欲する者、生死の彼岸を度らんと欲する者、有らゆる檀波羅蜜を修行する者、

【九六】甘滿闍。Kambojā 國のことか。
【九七】陂濼。一種の藥草。やまそてつの如し。
【九八】天祠。大自在天等の天部を祠る處。
【九九】卵生、胎生、濕生、化生は四生なり。前脚註を見よ。
【一〇〇】鳩留孫。梵 Krakucchanda 又倶留孫、拘留秦、迦羅鳩飡陀、迦羅鳩村馱等の多くの音譯を有し、所應斷已斷滅累、成就美妙などと譯す。過去七佛の第四に當り、現在の賢劫一千佛の最初なり。當處に人壽四萬歲とあるが。普通賢劫の中に第九の減劫人壽六萬歲の時に出世すといはる。
【一〇一】拘那含牟尼。梵 Kanakamuni 又拘那牟尼、或は迦諾迦牟尼といふ。金寂と譯す。過去七佛中の第五に當り、此處に人壽三萬歲に生るとあるが、普通人壽四萬歲の出世といはる。
【一〇二】迦葉。梵 Kāśyapa. 過去七佛の第六に當り、釋尊より直前の佛にして人壽二萬歲の時出世して正覺を成ぜりといはる。
【一〇三】劫濁。煩惱濁、衆生濁、大惡煩惱濁は五濁のことなり。四十八卷脚註三一を見よ。

二十八宿等に付したまへり。護持の故に、養育の故なり。

了知清淨士よ、是の如く次第して、今の劫[一〇三]濁・煩惱濁・衆生濁・大惡煩惱濁の鬪諍惡世の時に至り、人壽百歳にして、一切白法盡き、一切の諸惡は世間を闇翳にす。譬へば、海水一味大鹹の如し。大煩惱の味、世に遍滿し、惡黨集會し、手に髑髏を執り、血は其の掌に塗り、共に相殺害す。是の如き惡衆生中に、我今出世して、菩提樹下に初めて、正覺を成じ、[一〇四]提謂波利の諸商人の食を受けたり。彼等の爲の故に此の閻浮提を以て天龍・乾闥婆・鳩槃茶・夜叉等に分布して護持し養育せんがための故に、是の大集を以て、十方の有らゆる佛土、一切餘すこと無く、菩薩摩訶薩等、悉く此に來集せり。乃至は此の娑婆佛土に於ける其の處の、百億の日月・百億の四天下・百億の四大海・百億の鐵圍山・大鐵圍山・百億の須彌山・百億の四阿修羅城。百億の四大天王・百億の三十三天・乃至百億の非想非非想處、是の如きは略數の娑婆佛土なり。我れ是の處に於て、佛事を作し、乃至娑婆佛土に於て、有らゆる、諸の梵天王・及び諸の眷屬、魔・天王・他化自在天王・化樂天王・兜率陀天王・須夜摩天王・帝釋天王・四大天王・阿修羅王・龍王・夜叉王・羅刹王・乾闥婆王・緊那羅王・迦樓羅王・摩睺羅伽王・鳩槃茶王・餓鬼王・毘舍遮王・富單那王・迦吒富單那王等悉く眷屬を將ゐ、此に於て大集せり。聞法の爲の故に。乃至此の娑婆佛土に於て、有らゆる諸の菩薩摩訶薩等、及び諸の聲聞一切餘すこと無く、悉く此に來集せり。聞法の爲の故に、我今、此の集れる所の大衆の爲めに、甚深なる佛法を顯示し、復、世間を護らん爲の故に此の閻浮提に集れる所の鬼神を以て、分布し安置し、護持し養育せしめん。

爾の時、世尊、復娑婆世界主大梵天王に問うて言はく、「過去の諸の佛、此の四大天下を以て、曾て誰に付囑して、護持養育をなさしめしや」と。時に娑婆世界主大梵天王言さく、「過去の諸佛、此の四天を以て、曾て我れ及び、憍尸迦に付囑して護持を作さしめたまへり。而して我れ先有りて[一〇五]已の名、及び帝釋の名を彰さず、但、諸餘の天王及び宿、曜、辰の護持養育と稱せるのみ」と。

なり。

【八〇】女。梵 Śroṇā (T. B.) Śravaṇā (S. S., Mvp.) 主神は毘紐神 Viṣṇu 被主物に鴦伽摩伽陀羅國なり。

【八一】鴦伽摩伽陀。梵 Aṅga-Magadha 頻毘沙羅王 Bimbisāra の時代に東隣鴦伽國を併合す。

【八二】傍伽摩伽陀。梵 Bhoga-magadha

【八三】阿槃多。梵 Avanti 阿般地・阿槃提・西印度ビンドヤ山にありし古王國。

【八四】支提。Caitya.

【八五】迦尸。梵 Kāśi 迦尸は本、竹の名。此の國此の竹を出せば國名となれり。十六大國の一。

【八六】都薩羅。梵 Turasāra 城名より出づ。今國名の一なり。

【八七】婆蹉。Vatsa

【八八】摩羅。梵 Malaya-deśa 摩羅提のこと。又摩離ともいふ。慧苑音義下卷に摩羅提國は具に摩羅耶提數といひ、此に鬘地をいふ。と。

【八九】鳩羅婆。或は矩拉婆 Kuravaのことか。

【九〇】毘時。未詳。

【九一】般遮羅。梵 Pañcāla

【九二】跡那。未詳。

【九三】阿溼婆。梵 Aśva

【九四】蘇摩。梵 Soma

【九五】蘇羅吒。梵 Surāṣṭra 西

還りて彼に於て、護りを作せるに、天神等、差別せり。願くは佛分布せしめよ。衆生を憐愍するが故に、正法の燈を熾然したまへ」と。

爾の時、佛、月藏菩薩摩訶薩に告げて言はく、「了知清淨士よ。此の賢劫の初め人壽四萬歲の時、一〇〇鳩留孫佛、世に出興したまへり。彼の佛は無量阿僧祇億那由他百千の衆生の爲めに、生死の輪を廻して、正法輪を轉じて、惡道を追廻して、善道及び、解脫果に安置せしめたまへり。彼の佛、此の四大天下を以て、娑婆世界主大梵天王・他化自在天王・化樂天王・兜率陀天王、須夜摩天王等に付囑したまへり。護持の故に、養育の故に、衆生を憐愍せるが故に、三寶種をして、斷絕せざらしむるが故に、熾然の故に、地精氣・衆生精氣・正法精氣の久しく住して增長するがための故に、諸の衆生をして、三惡道を休息せしむるが故に、三善道に趣向せしむるが故に、四天下を以て、大梵、及び諸の天王に付囑したまへり。

是の如く、漸次に劫盡き、諸の天人盡き、一切善業の白法盡滅し、大惡、諸煩惱の溺れを增長せり。人壽三萬歲の時、一〇一拘那含牟尼佛、世に出興したまへり。彼の佛、此の四大天下を以て、娑婆世界主大梵天王・他化自在天王・乃至四大天王・及び諸の眷屬に付囑したまへり。護持養育の故に、乃至一切衆生をして、三惡道を休息し、三善道に趣向せしむるが故に、此の四天下を以て、大梵及び諸の天王に付囑したまへり。

是の如く次第に、劫盡き諸の天人盡き、白法も亦盡き、大惡なる諸の煩惱の溺れを增長せり。人壽二萬歲の時、一〇二迦葉如來、世に出興したまへり。彼の佛、此の四大天下を以て、娑婆世界主大梵天王、他化自在天王・化樂天王・兜率陀天王・須夜摩天王・憍尸迦帝釋・四天王等、及び諸の眷屬に付囑したまへり。護持養育の故に、乃至一切衆生をして、三惡道を休息し、三善道に趣向せしむるが故に、彼の迦葉佛は此の四天下を以て、大梵四天王等に付囑し、及び諸の天仙衆、七曜・十二天童女・

國なり。

【七一】角。梵Citrā(T.B.,Mvp.) 主神は毘首羯磨神 Tvaṣṭā 被主物は衆鳥なり。

【七二】亢。梵 Niṣṭyā (T. B.) Svāti (S. S.) Svāsti (Mvp.) 主神は風神 Vāyu 被主物は出家求道なり。

【七三】氐。梵 Viśākhe(T.B.) Viśākhā (S. S., Mvp.) 主神は因陀羅阿祇尼Indra-agni 被主物水と衆生なり。

【七四】房。梵 Anūrādhāḥ (T. B.) Anurādhā (S. S., Mvp.) 主神は密多羅神 Mitra被主物は行車求利なり。

【七五】心。梵Rohiṇī, Jyeṣṭhaghnī (T. B.) Jyeṣṭhā (S. S., Mvp.) 主神は因陀羅 (帝釋) Indra 被主物は女人なり。

【七六】尾。梵 Mūlabarhaṇī (T. B.) Mūlaḥ (S. S.) Mūlam (Mvp.) 主神は獼律神 Nirṛti 被主物は洲渚衆なり。

【七七】箕。梵 Pūrvā Āṣāḍhāḥ (T. B.) Pūrva-Āṣāḍhā (S. S., Mvp.) 主神は水神 Āpa 被主物は陶師なり。

【七八】斗。梵 Uttarā Āṣāḍhāḥ (T. B.) Uttarā-Āṣāḍhā (S. S., Mvp.) 主神は毘說神 Viśve Deva 被主物は婆部沙國なり。

【七九】牛。梵 Abhijit (T. B., Mvp.) 主神は梵天 Brahmā 被主物は刹利、安多鉢踰那國

「大德婆伽婆よ。此の四天下に、南閻浮提を最も殊勝と爲す。何を以ての故に、閻浮提の人は勇健・聰慧にして梵行相應し、佛婆伽婆は中に於て出世したまへばなり。是の故に四大天王、此に於て倍增して、この閻浮提を護持し養育せり。十六大國有り。謂ゆる、[八一]鴦伽摩伽陀國・[八二]傍伽摩伽陀國・[八三]阿槃多國・[八四]支提國の此の四大國は毘沙門天王が、夜叉衆と與に圍遶し護持し養育せり。[八五]迦尸國・[八六]都薩羅國・[八七]婆蹉國・[八八]摩羅國の此の四大國は、提頭賴吒天王が乾闥婆衆と與に、圍遶し、護持し養育せり。[八九]鳩羅婆國・[九〇]毘唅國・[九一]般遮羅國・[九二]踈那國の此の四大國は、毘樓勒叉天王が、鳩槃茶衆と與に、圍遶し護持し養育せり。[九三]阿溼婆國・[九四]蘇摩國・[九五]蘇羅吒國・[九六]甘滿闍國の此の四大國は、毘樓博叉天王、諸の龍衆と與に、圍遶し護持し養育せり。

「大德婆伽婆よ。過去の天仙は此の四天下を、護持し養育せり、故に、皆も亦是の如く分布し安置して、後に於て其の國土、城邑・村落・塔寺・園林樹下・塚間・山谷・曠野・河泉・[九七]陂濼・乃至海中の寶洲[九八]天祠に隨ひて、彼の[九九]卵生・胎生・濕生・化生・の諸の龍・夜叉・羅刹・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那等に於て、彼の中に生じ還りて、彼處に住し、繫屬する所無く、他の教を受けず。是の故に、願くは佛、此の閻浮提に於ける、一切國土に、彼の諸の鬼神を分布し安置せん。護持の爲の故に、一切諸の衆生を護らんための故に、我等、此の說に於て、隨喜せんと欲す」と。

佛の言はく、「是の如し。大梵よ。汝の所說の如し」と。

爾の時、世尊重ねて、此の義を明かにせんと欲して、偈を說いて、言はく、

「世間に示現せんがための故に、導師は梵王に問ふ。「此の四天下に於て誰か護持し養育するや」と。是の如く、天師梵は、諸天王の首と爲り、兜率・他化天・化樂・須夜摩は、能く護持し養育せり。此の如く、四天下、四王・及び眷屬も亦復能く護持せり、二十八宿等、及以十二辰・十二天童女は四天下を護持せり、其の所生の處に隨ひて、龍・鬼・羅刹等の他の教を受けざる者、

Mvp.) 主神は生主 Prajāpati 被主物は一切衆生なり。

【六二】觜。梵 Invakāḥ(T.B.) Mṛgaśiras (S. S., Mvp.)主神は月神 Soma 被主物は提訶國なり。

【六三】參。梵 Bāhū(T.B.)Ārdrā (S. S., Mvp.) 主神は魯達羅(荒神) Rudra 被主物は刹利なり。

【六四】井。梵Punarvasū(T.B.) Punarvasuḥ (S. S., Mvp.) 主神は日神 Aditi 被主物は金師なり。

【六五】鬼。梵 Tiṣyaḥ (T. B.) Puṣyaḥ (S. S., Mvp.)主神は新禱主 Bṛhaspati 被主物は國王大臣なり。

【六六】柳。梵 Āśleṣā(T. B.) Āśleṣā (Mvp.) 主神は蛇神 Sarpā 被主物は雪山龍なり。

【六七】星。梵 Maghā (T. B., Mvp.)主神は薄伽神 Bhaga 被主物は巨富者なり。

【六八】張。梵Pūrve Phalgunī (T. B.) Pūrva-phalgunī(S.S., Mvp.) 主神は婆藪神 Vasu 被主物は盜賊なり。

【六九】翼。梵Uttare phalgunī (T. B.) Uttara-phalgunī (S.S., Mvp.) 主神は阿利耶摩神 Aryamā 被主物は貴人なり。

【七〇】軫。梵 Hastaḥ(T. B.) Hastā (Mvp.) 主神は婆毘他利神 Savitā 被主物は須羅吒

惑の土境なり。迷沙は是れ辰なり。大德婆伽婆よ。是の如き天仙七宿・三曜・三天童女は北鬱單越を護持し養育せり。

「大德婆伽婆よ。天仙七宿・三曜・三天童女は、東弗婆提を護持し養育す。彼の天仙七宿とは、[六〇]昴・[六一]畢・[六二]觜・[六三]參・[六四]井・[六五]鬼・[六六]柳なり。三曜とは、太白星・歲星・月となり。三天童女とは、毘利沙・彌偷那・羯迦吒迦なり、大德婆伽婆よ。彼の天仙七宿の中、昴・畢二宿は是れ太白の土境なり。毘利沙は、是れ辰なり。觜・參・井の三宿は是れ歲星の土境なり。彌偷那は、是れ辰なり。鬼・柳二宿は是れ、月の土境なり。羯迦吒迦は、是れ辰なり。大德婆伽婆よ。是の如きの天仙七宿・三曜・三天童女は東弗婆提を護持し養育せり。

「大德婆伽婆よ、天仙七宿・三曜・三天童女・南閻浮提を護持し養育す。彼の天仙七宿とは、[六七]星・[六八]張・[六九]翼・[七〇]軫・[七一]角・[七二]亢・[七三]氐なり。三曜とは、日・辰星・太白星なり、三天童女は、線呵・迦若・兜羅なり。

大德婆伽婆よ。彼の天仙七宿の中、星・張・翼は是れ日の土境なり。線訶は是れ辰なり。軫角の二宿は、是れ辰星の土境なり、迦若は是れ辰なり。亢・氐二宿は是れ太白の土境なり。兜羅は、是れ辰なり。大德婆伽婆よ。是の如き天仙七宿・三曜・三天童女は南閻浮提を護持し養育せり。

「大德婆伽婆よ。彼の天仙七宿・三曜・三天童女は、西瞿陀尼を護持し養育す。彼の天仙七宿は、[七四]房・[七五]心・[七六]尾・[七七]箕・[七八]斗・[七九]牛・[八〇]女なり。三曜は、熒惑星・歲星・鎭星なり、三天童女は、毘離支迦・檀兔婆・摩伽羅なり、大德婆伽婆よ。彼の天仙七宿の中、房・心の二宿は、是れ熒惑の土境なり。毘利支迦は是れ辰なり。尾・箕・斗の三宿は、是れ歲星の土境なり。檀兔婆は、是れ辰なり。牛・女二宿は是れ、鎭星の土境なり。摩伽羅は、是れ辰なり。大德婆伽婆よ。是の如き、天仙七宿、三曜、三天童女は西瞿陀尼を護持し養育せり。

tabhiṣā (Mahāvyutpatti 1(5) 主神は婆娑神 Vasava 被主物は那遮羅國なり。

【五四】危。梵Śatabhiṣak(T.B.) Dhaniṣṭhā (Mvp.) 主神は婆魯拏(水天) Varuṇa 被主物は著華冠なり。

【五五】室。梵Pūrve Proṣṭhapadāḥ (T. B.) Pūrva-Bhādrapadā (S. S.) Pūrvabhādrapadā (Mvp.) 主神は阿醯多陀難神 Ahi Budhnya 被主物は乾陀羅國輸盧那國及龍蛇なり。

【五六】宋・元・明の三本に壁に作れり。今從へり。壁。梵Uttare Proṣṭhapadāḥ (T. B.) Uttara-Bhādrapadā (S. S.) Uttarabhādrapadā (Mvp.)主神は尼陀羅神 Nidra 被主物は乾闥婆善樂なり。

【五七】奎。梵 Revatī (T. B.) Revatī (Mvp.) 主神は甫涉神 Pūṣā 被主物は行商人なり。

【五八】婁。梵Aśvayujau(T.B.) Aśvinī (S. S., Mvp.) 主神は乾闥婆 Gandharva 被主物は商人なり。

【五九】胃。梵Apabharaṇī (T.B.) Bharaṇī (S. S., Mvp.) 主神は焰摩 Yama 被主物は婆樓迦羅國なり。

【六〇】昴。梵 Kṛttikāḥ(T.B. Mvp.) 主神は火神 Agni 被主物は水牛なり。

【六一】畢。梵 Rohiṇī (T. B.,

に、稱名誦請せよ。是こを以て、汝等は精氣の大力威德、及び大功能を增上す、親知の眷屬、彼彼是の如く我が法を護持する故に、亦復善く阿蘭若住法比丘の若しは大乘小乘を護るも是の如し。是の如し。精氣增上し、乃至眷屬も是の如し。是の如し。汝等勝れて三世諸佛を供養することを作せ。此の善根を以て、能く惡趣を捨て、世間の樂、及び涅槃の樂を得ん」と。

四八月藏分第十二　諸天王護持品　第九

爾の時、世尊は世間に示したまふ故に、娑婆世界主大梵天王に問ふ言はく、「此の四天下は是れ誰か能く護持し養育を作す」と。時に、娑婆世界主大梵天王は是の如き言を作さく、「大德婆伽婆よ。兜率陀天王は無量百千の兜率陀天子と共に、四九北欝單越を護持し養育す。他化自在天王は無量百千の他化自在天子と共に、五〇東弗婆提を護持し養育す。化樂天王は無量百千の化樂天子と共に、五一南閻浮提を護持し養育す。須夜摩天王は無量百千の須夜摩天子と共に、五二西瞿陀尼を護持し養育す」と。

「大德婆伽婆よ。毘沙門天王は無量百千の諸の夜叉衆と共に、北欝單越を護持し養育す。提頭賴吒天王は無量百千の乾闥婆衆と共に、東弗婆提を護持し養育す。毘樓勒叉天王は無量百千の鳩槃茶衆と共に、南閻浮提を護持し養育す。毘樓博叉天王は無量百千の龍衆と共に、西瞿陀尼を護持し養育す。

「大德婆伽婆よ。天仙七宿・三曜・三天童女は北欝單越を護持し養育す。彼の天仙七宿とは、五三虛・五四危・五五室・五六壁・五七奎・五八婁・五九胃なり。三曜とは鎭星・歲星・熒惑星なり。三天童女とは鳩槃・彌那・迷沙なり。「大德婆伽婆よ。彼の天仙七宿の中、虛・危・室の三宿は是れ鎭星の土境なり。鳩槃は、是れ辰なり。壁奎の二宿は是れ歲星の土境なり。彌那は、是れ辰なり。婁・胃の二宿は是れ熒

【四八】明本には月藏分第十二の六字なし。

【四九】北欝單越。北俱盧州のこと。梵 Uttarakuru 多くの音譯あり。欝多羅鳩婁・欝多羅拘樓・郁多羅鳩留・欝怛羅究瑠・欝怛羅越・欝單越・欝單曰・殟怛羅句嚧・殟怛羅矩嚕等。一切經音義の中に之等を見出すを得。大海の中心に立てる須彌山の四方に在る四大洲の中北方大洲の名。

【五〇】東弗婆提。東毘提訶又東弗于逮ともいふ梵 Pūrva-videha 須彌山の東方の鹹海に在り。本洲に二中州ありて提訶と毘提訶なり。毘提訶 Videha は勝身と譯す。東勝身洲といふ。

【五一】南閻浮提。梵 Jambu-dvīpa. 南閻浮とも略す。單に閻浮提と呼ばる。琰浮提・閻浮提鞞波は舊譯にして贍部洲は新譯なり。此洲の中心に閻浮樹の林あるを以て洲名とす。

【五二】西瞿陀尼。梵 Avara-godānīya. 西瞿耶尼、西瞿伽尼などの音譯あり。西大州の名瞿陀尼を牛貨と譯す。其の地の風俗は牛を以て貨幣とする故に名く。須彌山の西方にあり。

【五三】虛。梵 Śraviṣṭhāḥ(Taittirīya Brāhmaṇa) Dhaniṣṭhā (Sūrya Siddhānta) Śi-

て瞋恚の心を起せり。是の業障を以て、彼に於て、命終つて、地獄に生れ久しく燒煮せられ、失念して餘す(ところ)なかりき。彼に於て、命終して、此にて、他の血肉を食む惡羅刹中に生れたり。正しく我等は昔出家の時共に惡業を作すに由りて、今此の惡羅刹身を受く。飮食の爲めの故に、無量億那由他百千の衆生の命を斷てり。是れを以て、我等は今佛所に於て、諸の惡業を悔いて、更に復作さず。是の如く、三たびに至り到りて堅固に律儀を修行せり。惟願くは、世尊よ、我等に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまへ」と。

佛の言はく、「諸の仁者よ。我れ更に、一法として、菩提心を遠離し、阿蘭若比丘所に於て、惡心を起すが如き者有るを見ざるなり。諸の仁者よ。未來世に於て、此の賢劫最後の如來の名を、盧遮[47]と曰ふ。

彼の佛は、當に、汝等に勝菩提の記を授くべし。」と。

彼の萬の羅刹王、淚を垂れて、言はく、「寧ろ地獄に處るとも、人身と作り、阿蘭若比丘所に於て、一念の頃も、惡心を起さざらんや。彼は能く一切の善を斷つを以ての故に。何に況んや數數惡心を起さんをや」と。

爾の時、復諸の惡鬼神有り、三寶を敬信し、柔軟心に住して、後世の畏れを觀じ、一切同音にして、是の言を作さく「大德婆伽婆よ。我等今より、諸の惡を休息し、過去一切の惡業を懺悔したてまつる。我等今當に、花を食ひ、香を食ひ、果を食ひ、水を食ひ、風を食ひ、法を食ひ、喜を食ふべし。更に他を惱まず、佛法を護持し、佛の付囑を受けて、久しく住せん爲めの故、及び世尊の聲聞弟子にして、阿蘭若に住する者より、增上護持を受けん」と。佛の言はく「善い哉。善い哉。善丈夫よ。汝等は應當に、是の如く善く我が付囑を受くべきなり。我れ今復、汝等を以て、賢劫一切の菩薩、一切の聲聞に付囑せん。彼れ汝等を憐愍す、其に於て、晝夜作善助道し、汝の善分の與

【四七】盧遮。梵 Rucika. 樓至、盧至、樓由の音譯あり。賢劫千佛中の最後の佛なり。愛樂佛、啼哭佛などと譯す。

んば、如如に住するを得ん。智者は、禪智を修し、出世して實際に住し、諸法に染まず、一切の分別を離れて、諸法を分別せず、衆生有るを見ず、諸法は唯一相にして、佛の境界を見るを得。無量の菩薩衆は、此の法性に安住し汝等を惱まさず。聖般若に住するを以て、如來は汝等に於て、容恕にして、惱みを爲したまはず。汝等は、羞恥無く、慚愧を遠離して、惡しき諸の衆生と作り、弊性多く、剛强なり。佛を見たてまつりて、大いに勇猛にして、皆柔軟心を得よ。汝等各應當に、自ら己の惡心を遮るべし。汝等當に、次第に速かに、大涅槃を證すべし。汝等若し柔軟ならば、諸の惡業を離るゝを得ん。此の法を護らんが爲の故に汝等に付囑す。我が所說の聲聞は、具智の大名稱なり。彼れ汝等をして護惑して、福と智慧とを得せしむ。當に飮食の利を得べし。諸天に供養せられ、勝れたる住處を得、及び壽命を增すを得ん。若し導師の語を聞いて如說に能く修行すれば、人天・世間の中、常に勝れたる樂報を受けんと」。

爾の時、世尊は彼の諸の惡鬼神衆中に於て、說法し訖りたまふ。時に彼の諸の惡鬼神衆の中に於て、彼の惡鬼神は、昔佛法に於て、決定の信を作せり。彼れ後時に於て、惡知識に近づき、心に他の過ちを見たり。是の因緣を以て、惡鬼神に生ぜり。彼の九十二那由他百千の、諸惡鬼神は、須陀洹果に住するを得たり。億那由他頻婆羅百千の諸惡鬼神にして、昔大乘を行ぜし者は、隨順忍を得たり。無量阿僧祇の諸惡鬼神は、柔軟心を得たり。得巳りて、復阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。

爾の時、彼の鬼神衆の中に於て、羅刹王有り。牛王目と名づく。萬の羅刹王と與に、合掌して、佛に向ひ、一心に敬禮して、是の言を作さく、「大德婆伽婆よ。我等は瞋使たりしが故に、久しく世間に於て、不愛果を受けたり。我等は今は佛神力を承け、自ら此の賢劫中の宿命の事を憶念するを得たり。我等は鳩留孫如來の法中に於て、曾て出家するを得て、八萬の大乘法聚を誦持せり。復八萬の聲聞法聚を誦して、阿耨多羅三藐三菩提の願を發せり。我等は彼の時、阿蘭若住法比丘所に於

り。智者に當に速かに知るべし。初の衆生平等は、諸の惡業を捨離し、諸の善業を造作して、久しく勝樂を受く。修行法平等は一切法等にして、佛・聲聞・緣覺・凡夫等、如如なり。此の淸淨平等は彼の人中に於て、境界を取ることを遠離することを得たり。亦復、我れ布施平等の喜を壞せず、他の衆生を害せず、活命の具を奪はず、諸の花果を壞せず。一衆生も我が父母に非ざる者有ることとなし。一切の諸の衆生は、曾て我とともに親を知れり。我れ更に觸惱せず、乃至一衆生の非時の一切惡風雨を休息せん。樂しむ可き事を豐盛にして、諸の親知を養育し、衆生の精氣を增し、常に不損減を得たり。氣は他身を噓かず、瞋惡の眼にて視ず、他の精氣を奪はず、一切の樂を充滿す。我が心一切を利し、有失の者を瞋らず、諸の煩惱を斷つことを爲し、諸佛の法を求む。十種の善業道は、智者常に守護し、世に於て常に歡喜し、後に涅槃を見るを得るなり。陰に依らずして持戒し、亦界入に依らずして、諸有の支戒を滅し、諸有の渴愛を滅し、種種の想を捨離し、能く瞋怒を息む。是の如く字言合して、智者は分別を離れ、虛空の如く空の故に、一切分別を離る。是の如く忍を修する者は、智者は分別を離るゝこと、譬へば、空中の月、衆星の共に圍繞するが如し。

是の如く忍を修するは、安隱にして衆中に顯はれ、[四六]月光摩尼を照し、海水は盈滿を得るなり。忍は惡心の鬼を照し、淸淨の信を得せしむ。一切の諸惡を離れて、菩提の行を修し、彼の衆生次第に能く、諸佛の海に滿つ。我れ昔仙人と作り、林中に忍辱を修す。節節支に解かさるゝも、瞋怒の心を起さず、鬼と作り、仙人と爲つて、自ら身を投じて、火に入るも、我れ忍を修するを以ての故に、火變じて蓮池と爲る。我れ彼の忍力を以て、多くの衆生を成熟す。今諸の阿羅漢は是の如き忍有ることとなし。智者常に精進せば、修行は、福慧と爲る。智海の增滿を得れば、諸佛海を成ずるを得、修福及び、般若は諸の煩惱を離るゝことを得。三界を分別せず

【四六】月光摩尼。梵 Candra-prabhāmaṇi 寶珠の名。摩尼の光の月の如くなるをいふ。

「何が故に汝等を縱捨する。是れ諸の菩薩の大慈大悲方便力を以ての故に汝等を縱捨す。此の四天下に於て、所有菩薩摩訶薩は是の如く甚深なる出世間法器清淨平等三昧に安住せり。其の名を、衆自在菩薩、慈自在菩薩、文殊音菩薩、電自在菩薩、日自在菩薩、月自在菩薩、地自在菩薩、想自在菩薩、觀世自在菩薩、水自在菩薩と曰ふ」是の如き等の萬八千の菩薩摩訶薩は此の四天下に居せり。彼の諸の菩薩摩訶薩は此の十種の第一甚深なる出世間一切法器清淨平等に住す。何等をか、十と爲す。謂ゆる衆生平等・法平等・清淨平等・布施平等・戒平等・忍平等・精進平等・禪平等・般若平等・一切法清淨平等なり。此の十種にして、第一甚深なる出世間一切法器清淨平等三昧に住する菩薩摩訶薩は、一一皆能く汝等の諸の惡鬼神を制す。上の所說の如く、何が故に、汝等を縱捨する。是の諸の菩薩は大慈・大悲・方便力を修するを以ての故に、汝等を縱捨す。何に況んや、如來應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊なるをや。諸の仁者よ。假使、一切衆生は是の如き十種の出世間甚深なる一切法器清淨平等に住するとも、前の所說の如く、菩薩摩訶薩一如來、一念の智を以てすら彼等に勝れたり。何に況んや 如來は一切の時に於て、大悲心を以て、汝等を覆護し、瞋恚を生ぜず、亦棄捨せず、如來は一切時に於て、汝等を憐愍し、利益し安樂を得せしめんと欲せんに、汝等は是の如き慚愧あることなくして、後世の畏れを觀ぜず、一切衆生に於て、不愍心・不柔軟心・惡心・怨心・不慈心・不悲心を作す。汝等應に是の非法を作すべからず」と。

重ねて此の義を明かにせんと欲して偈を說いて言はく、

大雄は是の如き餘無き鬼神の集ひを見たまひて、卽時に、右臂を擧げ、是の如き言を、宣說したまへり。佛の出世は甚だ難し、法、僧も亦復難し。衆生の淨信も難し。諸の難を離るゝことも亦難し。衆生を哀愍するも難く、知足は第一の難なり。正法を聞くことを得るは難く、能く第一の難を修し、難の平等を知ることを得たり。世に於て常に樂を受くるは、此れ十平等處た

難なり」と。

佛の言はく「諸の仁者よ、此の轉難は此れ第一轉難なり、其の未決定の菩薩は、無所屬法に於て是の如き法の無色は見るべからず。文字に非ず、言說に非ず、自ら未だ知らず、未だ證せず、未だ善修せず、未だ自在ならず、未だ彼岸に到らずして、能く他の衆生に於て、諸の煩惱を除きて、之を成熟す。此れを轉難と爲す。彼の諸の衆生、是の如き甚深なる、無言說法の未作證なるに於て、聞き已て、謗らず、此れを第一轉難と爲す。彼の諸の衆生、能く一切の諸の煩惱樹を碎けり。柔軟心・作業心は一切衆生に於て、慈心・愍心・不害心・悲心・共心・同心に住す。彼の諸の衆生は柔軟心を以ての故に、有海を枯渴し、煩惱の海を渡り、速かに無畏城に入る。是の如き無言說・未作證に於て、聞き已て謗らさる、彼れも亦轉難(の中の)第一の轉難なり。何が故に、汝等惡心の鬼神は自ら心を制せず、諸の衆生に於て、柔軟心を作さず、後世の畏れを觀ぜざればなり。諸の仁者よ。若し出世間一切法器清淨平等の三昧に住するあらば、菩薩・摩訶薩は能く一切衆生をして、六根を守護し、各の自境に住せしめん。豈に況んや汝等惡心鬼神を、遮障すること能はざらんをや」と。

「是れ善丈夫は皆、是の法を得て、大慈・大悲心に住して他を惱まさず。何を以ての故に、大慈大悲方便力を修するを以ての故に、他を惱まさざればなり。是の諸の菩薩は是の如きの甚深の法に入り已て、能く衆生を虛空界中に擲ち、多億那由他劫にして、各の相見ざらしむ。豈に況んや、汝等諸惡鬼神を制する能はざらんをや。亦復能く一切衆生[四五]世界の中間大黑闇處に擲ち、乃至能く一切衆生をして、唯、風を食ひ、水を食ひ、土を食ひ、石を食はしむ。是の諸の菩薩、是の如き甚深の出世間法器清淨平等三昧に住するを以ての故に、能く一切衆生をして、多億劫に於て食はざらしむ。豈に況んや、汝等他の衆生の精氣血肉を食む諸の惡鬼神を制する能はざらんをや」と。

【四五】世界中間大黑闇處。佛教の世界觀にては之を黃泉の國なるを意味せり。

り、取著する所なし。一切の聲聞・辟支佛の上に、超過せり。是の人是の如き禪に於て、禪定に住するも是れ未だ決定ならず。菩薩は能く一切の諸の煩惱見、及び上煩惱の纏を斷じ、若し復、菩薩能く是の如き禪に住する者は、則ち能く一切諸法に入る。此の法に入る時、能く衆生善惡諸欲を知りて之を成熟す。是の人衆生を見ず、我・人・壽命・衆數・生者・養育・作者・使作者・起者・使起者・受者・使受者を見ず。是の人、若し復如如の法界に入るの時、諸の衆生の顚倒煩惱あり。顚倒を以ての故に、種種の苦みを受くるを見る。是の人、是の如く、微細に如如の實際法界に入る。[四四]是の菩薩は衆生に於て衆生を見ずして、之れを成熟せり。衆生は非實の故に、衆生は無衆生の故に、衆生は無我の故に、衆生は離の故に衆生は、無自性の故に、衆生は不可說の故に、衆生は空の故に、衆生は無相の故に、衆生は無願の故に、衆生は無作の故に、衆生は如性の故に、衆生は無生の故に、衆生は不滅の故に、衆生は清淨の故に、而も衆生を成熟せり。是の如きも亦、我なし見ず、乃至受者を見ず。亦事を壞せず。是れ諸法の自性相は不可說なり。不可說の法界は一切の語言、文字にて說くこと能はず顯示すべからず。所有無し。是れ菩薩大悲を以ての故に、不可說法に於て、諸法を說く。此れ有漏、此れ無漏此れ世間、此れ出世間、此れ有罪、此れ無罪、此れ有爲、此れ無爲、此れ有煩惱、此れ無煩惱、此れ應修行、此れ應捨離、此れ凡夫法、此れ學法、此れ無學法、此れ緣覺法、此れ菩薩法、此れ佛法なりと。諸の仁者よ。是れ未だ決定せず。菩薩是の如く、出世間一切法器般若に安住し、一切法界清淨平等に入り。分別說法す。菩薩は所說の法に於て、其の相を見ざるなり。諸の仁者よ。譬へば、幻者の如し。虛空界に遍く種種の色、種種の花を化作して、未だ曾て事を作さずして能く現作す。佛の世に出でずして、彼の花中に於て、能く是の如き妙義・句味を出せり。法門に入りて、法音聲を演ぶ。是の如きの事を作すは、是れ難しとするや不（いな）や。時に一功の天人・及び鬼神衆は是の如き言を作さく、「大德婆伽婆よ。此の事難しと爲す。大德修伽陀よ。此れ第一の

皆空の眞理を照す慧眼なり。

【四三】如々の實際法界。如如 Tathatā. 實際 Tathābhūtam 法界 Dharmadhātu 何れも眞如の別稱。實相といふも第一義空といふも如如も實際も是れ悉く佛境界にして初めて得られうる所にして凡夫の淺見淺慮を許さゞる所なり。

【四四】此の處の意。佛敎の差別卽平等觀の上に立脚せるを見る。卽ち佛の境界に入らば衆生を單に罪惡生死の凡夫と見ず。高められて菩薩求者の如く見ゆる意あり。卽ち佛敎の實相論の主張する立場を見ることを得。熟讀すべきなり。

苦・若しは樂・不苦不樂を取らず。是の如く、地界・水火風界を取らず。虛空界を取らず、乃至非想非非想界を取らず。現在及び未來世を取らず。善不善を取らず。有漏・無漏を取らず、聲聞乘を取らず、緣覺乘を取らず、無上大乘を取らず、三界を取らず、三乘を取らず、有を取らず無を取らず無所有を取らず、言說有ること無くして、無緣慈三昧を得、諸の聲聞辟支佛地に非ず。

是の人此の三昧を以ての故に、能く見て[三九]首楞嚴三昧門に入りて、次第に當に首楞嚴三昧を得べし。諸の仁者よ。是れを出世間智器清淨平等・非決定淸淨平等・是れ方便力求智平等と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て、何者をか、[四〇]安住出世間一切法器般若一切法界淸淨平等なる。諸の仁者よ。一切[四一]法界は肉眼の見に非ず、天眼の見に非ず、是れ聖法慧眼相應の[四二]聖慧眼を以て、諸の法界を觀ずるなり。不增不減にして、諸法盛なる有り衰ふる有るを見ず、近・遠・方所を見ず、至去する所無し、生有り、滅有るを見ず。是の人、是の如く諸法の淸淨平等を見る時、更に衆生實に得可き事有るを見ず若し衆生、不可得に入らば、是の人則ち一切法不可得に入るを得、何を以ての故に衆生を離れずして一切法あり、一切法を離れずして衆生有り、其の衆生の體性は是れ一切法の體性、其の一切法の體性は是れ衆生の體性なり。其の一切法の體性は是れ我が體性、其の我が體性は是れ一切法の體性なり。其の一切法の體性は是れ佛法の體性、其の佛法の體性は是れ無我界の體性、其の無我界の體性は是れ實際の體性、其の實際の體性は是れ如如の體性なればなり。是の如く一切法を知る。諸の仁者よ。是れを安住出世間一切法器般若一切法界出世間智器淸淨平等と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て、何者をか、出世間一切法器淸淨平等なる。若し菩薩摩訶薩・是の如き般若に安住し、禪定に入る時、法は禪定に住するを得べきこと有るを見ずして、一切法の境界を捨離せず。無住無滅にして、覺知する所なく、禪定に住す。是の人は身禪を以て禪定に住せず、心禪を以て禪定に住せざれば、是の人は是の如く禪に住する時、[四三]如如の實際法界に入り能く諸法に入

【三五】 如來禪淸淨平等にして聲聞・緣覺・一切衆生と共なる禪の說明。

【三六】 心心數法行。心と心所なり。心とは身識等の心王なり。心數とは新譯家にては心所のことなり。心王が有する所の貪瞋等の數多の別作用なり。心、梵 Citta. 心數、梵 Caitasika

【三七】 第九智器淸淨平等の解釋。世間智と出世間智とに分たる。

【三八】 苦行法。梵 Tapasvi 佛教は單なる苦行を以て外道の所行となし、世俗の業事として排斥する所なり。

【三九】 首楞嚴三昧門。梵 Śūraṃgama-samādhi-dvāra. 首楞伽摩ともいふ。健相・健行・一切事竟とも譯す。佛陀所得の三昧のことなり。健相とは佛の幢幡の堅固なること、卽ち佛德の能く魔によりて壞せられざるに譬ふるなり。門のこと。此の三昧に關しては諸經に散說せらる。

【四〇】 第十、一切法淸淨平等の解釋。

【四一】 法界。梵 Dharmadhātu 所謂出世間法の世界なり。是れ凡俗の世界に非るを指せり。

【四二】 聖慧眼。梵 Āryapraj ā-cakṣur 五法眼の一。佛菩薩の聖者の眼を意味す。諸法

諸の仁者よ。若し衆生を見るに、其の我所に於て、惡を作し、過ちを作し、罪を作し、無利益を作す。若しは色を壞し、若しは聲・香・味・觸を壞し、若しは身を壞し、若しは命を壞す。此の衆生に於て、常に能く、忍を修し、應に是の如く學ぶべきなり。是の諸の衆生無始より流轉し、貪・恚・癡に習れ、善知識に離れ、未だ曾て修學せず。我れ、善知識に近づき、我れ能く修學し、我れ一切の樂を求む。苦し一切衆生に於て瞋嫌を起さざれば、是の人一切の樂を得。是の故に彼の一切衆生に於て見巳て取らず。卒暴を起さず、變濁を生ぜず、瞋相を現はさず。是れを世間忍智器平等と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか世間精進智器平等なる。諸の仁者よ。若し衆生に於て、勤施して斷ぜず。及び戒忍精進禪智を修して斷ぜず、諸の仁者よ。是れを世間精進智器平等と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て、何者をか、世間禪智器平等なる。諸の仁者よ。若し世間の初禪乃至第四禪に入り、無邊虛空處、乃至非想非非想處に入る。諸の仁者よ。是れを世間禪智器平等と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て、何者をか、世間聞慧智器平等なる。諸の仁者よ。若し是の如き空法と與に、相應する大乘言教に堪能とする所有りて、讀誦し、受持し、言辭淸淨にして、人の爲めに演說して、不諂・不幻にして、一切の煩惱、惡業の障盡き、法を知り義を知る。是の人彼の言教に於て法を知り、義を知り、晝夜精勤にして、無上智を求む。諸の仁者よ。是れを世間聞慧智器平等と名づく。

諸の仁者よ。彼れに於て、何者をか、出世間智器平等なる。諸の仁者よ。若し善男子、色受想行識を取らず、眼色を取らず、眼識を取らず、眼觸を取らず、眼觸因緣生。若しは苦・若しは樂・不苦不樂を取らず。是の如く乃至意法を取らず、意識を取らず、意觸を取らず、意觸因緣生。若しは

【二七】十力。梵 Daśa-balāni 如來の十力なり。一、是處非處。二、知業。三、三昧。四、知根。五、知欲。六、知性。七、至道。八、宿命。九、天眼。十、無漏。

【二八】十八不共法。四十六卷脚註六三を看よ。

【二九】一切智智。梵 Sarvajña-jñāna. 三智の中の一切智に聲聞、緣覺の知に混ずるを以て彼の一切智と分別せんが爲に佛智を一切智智と名く。大日經疏第一に梵に薩婆若那卽ち是れ一切智なり。今一切智智と謂ふは卽ち是れ智中の智なりといへり。一切智智は唯佛自證の智を指していふなり。

【三〇】緣覺・如來に共にして聲聞に共ならざる禪の說明。

【三一】空・無願・無相は三解脫門のこと。

【三二】三行滅。三行に、身口意の三行なり。身行は出入の息身に屬するが故に、口行は先づ覺觀して後語言有り。意行は苦樂を受くるを以て相を取て心發す。故に之等の三行の滅を求むるを意味せるなり。

【三三】信解堅淨等。梵 [illegible] 三屋牛の角を意味す。

【三四】如來、第一義諦淸淨にして聲聞緣覺に共ならざる禪の說明。

しは人、畜生・餓鬼・地獄の衆生は是の念を作さく、如來の心心數[三六]法行は、何處に在りて住し、何れの住に在るも彼の一切衆生、乃至蟲蟻に、佛力の加はるが故に、亦如實に、佛の心心數法の初禪に住するを知り、乃至第四禪に住するを知る。此れも亦是れ、如來禪平等にして、一切衆生と共なり。此の禪平等は、一切聲聞・辟支佛地に非らず。是れを禪清淨平等と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか、[三七]智器清淨平等なる。智に二種有り。一には世間智、二には出世間智なり。諸の仁者よ。何者をか世間智なる。其れ世俗の書典、口に言說する所の結集・解釋・言語の道、音聲・演說・文字・顯示・諸の論說を聞き、若しは書字の句義、若しは算、若しは數、若しは印 若しは種種の[三八]苦行法、若しは工巧の事を學べば、是の如き所說、種々の作業其の求むる所に隨ひて皆成就するを得、諸餘の三世俗念作業にして若しは觸、若しは受、若しは想、若しは思、若しは念、是の如きは一切涅槃の器に非ず。是れを世間智器平等と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て、何者をか、世間智器平等なる。諸の仁者よ。世間智器平等は、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・聞慧の智器平等なり。何者をか世間布施智器平等なる、諸の仁者よ。若し人有りて、乃至盜形・殺生・偷盜・邪婬・妄語・飲酒の諸の放逸處を休息し、一切衆生に於て、慈心・憐愍心・救濟心に安住すれば、是れ涅槃の器なり。諸の仁者よ。是れを世間布施智器平等と名づくるなり。

諸の仁者よ。彼に於て、何者をか、世間戒智器平等なる。諸の仁者よ。若し一切衆生に於て哀愍心を具し、後世の畏れを觀ぜば、常に慈心・柔軟心・利益心・無怨讐心・無嫉妬心・無麁獷心・無兩舌心・無憍逸心・安住慈心に住す。諸の仁者よ。是れを世間戒智器平等と名づくるなり。

諸の仁者よ。彼に於て、何者をか、世間忍智器平等なる。諸の仁者よ。若し衆生の種種惡口、純麁獷の言を聞き、聞き已りて、取らず、卒暴を起さず、變濁を生ぜず、瞋相を現はさず。諸の衆生に於ても亦復能く忍び言辭音聲の所出に順はず。諸の仁者よ。是れを世間忍智器平等と名づく。

【一六】五根。眼根 Cakṣurindriya. 耳根 Śrotrendriya. 鼻根 Ghrāṇendriya. 舌根 Jihvendriya. 身 Kāyendriya. 五根によりて五識を生ず。

【一七】五力。四十六卷脚註一二七を看よ。

【一八】七覺分。七菩提分、七覺支といひ、七科の道品中の第六。覺は覺察覺了の義。聖道の生ぜざるは定慧の調はざるによる、されば定慧等分にして偏せしめざること。一に擇法、二に精進、三に喜、四に輕安、五に念。六に定、七に行捨、詳しくは辭典によるべし。

【一九】八聖道分。四十六卷脚註八三を看よ。

【二〇】三解脫門。四十六卷脚註七五を看よ。

【二一】四無礙辯。四十六卷脚註八八を看よ。

【二二】奢摩他毘婆舍那。四十六卷脚註八六を看よ。

【二三】四攝事。四十六卷脚註八七を看よ。

【二四】四梵住。四十六卷脚註八四・一〇九を看よ

【二五】三不護。四十七卷脚註七六を見よ。

【二六】四無所畏。四無畏に同じ。化他の心何物にも畏れざるをいふ。佛、菩薩の二種あり。

て因緣法を求む。是の如くして四無色定・一切處に思惟して、因緣法を求む。是の如く三行滅・無餘・第一義・滅定は三解脫門を以て、不可說三昧を得。其の處、無生・無滅・非證・非修・非有・非無・非此岸・非彼岸・非闇・非明・非可測・非分別・非不分別なる、是れを佉伽毘沙拏劫[二三]（佉伽齊云二角牛二毘沙拏云角）辟支佛・世間獨福田と名づけ、是れを禪清淨平等第一義緣覺如來共不共聲聞と名づく。其の處、一切生死有海に、行苦、苦苦、壞苦を斷じ、不可說義を斷じ、能く自ら覺知す。是れを第一義禪清淨平等と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て、何者をか[二四]如來第一義禪清淨平等にして聲聞緣覺に共ぜざる。若し如來の初禪に入りて　陰に依らずして入定し、界に依らずして、入定し、入に依らずして入定し、地界・水火風界に依らずして入定し、虛空處界・識處界・無所有處界・非想非非想處界に依らずして入定し、滅界に依らずして入定し、現在及び未來世に依らずして入定し、生に依らず、滅に依らずして入定し、有に依らず無に依らずして入定し、無所依にして所依に依らず、如來の初禪に入るが如くんば、是の如く第二・第三・第四禪・虛空處界・識處界・無所有處界・非想非非想處界も是の如し。

如來滅界定に入るは、陰に依らずして入定し、乃至所依に依らずして如來滅界定に入る。是れを如來第一義禪清淨平等不共聲聞緣覺と名づく。

諸の仁者よ、彼に於て、何者をか是れ[二五]如來禪清淨平等にして聲聞緣覺一切衆生と共なる。如來は世間の初禪に入り乃至世間の第四禪に入る。緣覺聲聞も亦能く世間の初禪乃至第四禪に入る。一切衆生の劫盡きんと欲する時も亦皆て能く世間の初禪、乃至第四禪に入り、後ち惡心の因緣に於て修禪を退失し、瞋恚・麁獷にして後世の畏れを觀ぜず。諸の衆生に於て慈愍有ること無く、其の血肉を食ひ、三惡道に趣けり。

復次に如來の世間の初禪に入り、乃至世間の第四禪に入るが如く、彼の一切衆生、若しは天・若

すれば此の定を得るなり。

【二〇】　非想非非想處。梵 Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatanam 非有想非無想處ともいふ。無色界の第四地名なり。前の識處は是れ有想、無所有處は是れ無想なり。是に於て前の有想を捨離すれば非想前の無想を捨離すれば非非想と名く。又麁想なければ非想といひ、細想なきに非れば非非想といふ。かくの如くに至りては衆生は癡の如く、暗の如く、醉の如く、眠の如く、愛樂すべき何物もなし。泯然寂靜、清淨無爲湛然なるを非想非非想處といへり。

【二一】　滅受想定。又滅盡定とも名く。梵 Nirodha-samāpatti 二無心定の一。六識の心心所を盡滅して起らしめざるをいふされば不還果以上の聖者假に涅槃に入る想をなして此の定に入る。極めて長きも七日以上にわたらず非想天に屬す。

【二二】　八解脫禪士。又八背捨ともいひ、三界の煩惱に違背し之を捨離してその繫縛を解脫する八種の禪定をいふ。

【二三】　四念處。四十六卷脚註六二を看よ。

【二四】　四正勤。四十七卷脚註七七を看よ。

【二五】　四如意足。四十七卷脚註七八を看よ。

[一二]八解脫禪士、滅盡定を得て彼岸に到る。阿羅漢は此の處に依りて[一三]四念處・[一四]四正勤・[一五]四如意足・[一六]五根・[一七]五力・[一八]七覺分・[一九]八聖道分・[二〇]三解脫門・[二一]四無礙辯を得。此の處に依りて[二二]奢摩他毘婆舍那を得るなり。此の菩薩行の淸淨平等に非されば[二三]四攝事・[二四]四梵住・[二五]三不護・[二六]四無所畏・[二七]十力・[二八]十八不共法・[二九]一切智智を得ず。是れを禪波羅蜜平等、聲聞緣覺如來共と名づく。

諸の仁者よ。若し復、人有りて、先に緣覺乘を修し、退いて聲聞乘に入りて、聲聞行を行ずれば是の人初禪に入り、乃至滅盡定に入る。此の定に依りて、三解脫門・四無礙辯を得て、四攝事・四梵住・三不護を得ず。乃至一切智智を得ず。是れを、禪平等聲聞緣覺如來共と名づく。

諸の仁者よ。若し復人有りて、先に大乘を修し、退いて聲聞乘に入れば、是の人初禪に入り、乃至滅盡定に入り、三解脫門・四攝事・四梵住を得て、三不護を得ず。乃至一切智智を得ず。是れを禪平等聲聞緣覺如來共と名づく。

諸の仁者よ。彼に於て何なる禪をか、緣覺・如來に共じて聲聞に共ぜざる。若し衆生有りて、久しく聲聞乘を修して後、緣覺乘に入らば、是の人昔より來た未だ初禪を得ず、得已りて思惟して因緣法を求む。乃至第四禪を得已り、思惟して因緣法を求め、[三一]空無願無相三昧に入る。彼の三昧を以て、思惟捨離して、無色定を證し、彼の三解脫門を以て、滅盡定に入る。一切處に於て思惟して緣覺法を求む。是の人因緣第一義・[三二]三行滅・無餘・非想、受滅を求む。是れを禪平等緣覺如來共、不共聲聞と名づく。若し復人有りて、未だ聲聞乘を學ばずして、善く緣覺乘を學べば是の人初禪に入る。思惟して因緣法を求めば是の人初禪に依て彼の餘禪及び無色定を超へ、三行滅・無餘第一義滅定に入る。是れを禪平等緣覺如來共・不共聲聞と名づく。

諸の仁者よ。若し復人有りて、未だ聲聞緣覺乘を學ばず、先に大乘を學び、退いて緣覺乘に入らば、是の人初禪に入る。彼の禪中に於て思惟して因緣法を求む。是の如くして乃至第四禪中思惟し

を離れて此の禪を得。三禪の地は少淨天 Parittaśubhāḥ. 無量淨天 Apramāṇaśubhāḥ. 徧淨天 Śubhakṛtsnāḥ の三なり。三禪の五支とは行捨、念、慧、樂、一心の五なり。

【六】第四禪。三禪の樂受を離るゝなり。四禪の地は無雲天 Anabhrakāḥ. 福生天 Puṇyaprasavāḥ 廣果天 Bṛhatphalāḥ の三なり。四禪の四支は、不苦不樂、捨、念、一心の四なり。

【七】無邊虛空處。梵 Ākāśānantyāyatanam 無邊處空ともいひ、無色界の第一地名なり。形色の身を厭ひて無邊の空を思ひ、空無邊の解をなして生ずる處なるを以てかくいへり。無色界は處所の依地なけれども果報の差別に由て姑く處の名を付すといふ。

【八】無邊識處。識無邊處ともいふ。梵 Vijñānānantyāyatanam 無色界の第二地名なり。こゝでは第一の虛空無邊を厭ひ、內的心識を緣じて心識は實に無邊なる解をなす。心識無邊と相應する故に此の定あり。

【九】無所有處。梵 Ākiñcanyāyatanam 無色界の第三地名なり。こゝでは更にその識を厭ひて心識すら所有なしと觀ずるなり。心無所有と相應

卷の第五十一

月藏分第十四　諸惡鬼神得敬信品　第八

諸の仁者よ。彼に於て何者をか、是れ[一]禪清淨平等なる。禪有りて聲聞・緣覺・如來に共ぜるあり。禪有りて緣覺・如來に共じて、聲聞に共ぜざるあり。如來禪有りて聲聞緣覺に共ぜざるあり。如來禪有りて、聲聞・緣覺・一切衆生に共ぜるあり。

諸の仁者よ。彼に於て何なる禪をか[二]聲聞・緣覺・如來に共なる。若し衆生有りて、樂を求め苦を離れ、後世の畏れを觀ぜば、是の人布施清淨平等を修行す。時に若し正趣・正發心の者有らば、應に共の所に到り卑下心を起し隨順し供養し、彼の人の邊に從ひて正法を聞くことを得べし。聞き已りて義を知り、如法に修行し心樂しくして欲を離れ、流注相續す。是の人諸の欲惡不善の法を離るゝを得、有覺有觀を離れて喜樂を生じて、[三]初禪に入る。

無覺・無觀、定んで喜樂を生じて[四]第二禪に入り、離喜行捨の念、增上して正知なるをもて[五]第三禪に入り、苦を捨て樂を捨て、先に憂喜を滅し、不苦・不樂・捨念清淨にして[六]第四禪に入る。

一切の想を度りて、有對想を滅し、別異想を念ぜずして[七]無邊虛空處に入り、無邊虛空處を度りて、[八]無邊識處に入り、無邊識處を度りて、[九]無所有處に入り、無所有處を度りて、[一〇]非想非非想處に入り、非想非非想處を度りて、[一一]滅受想定に入る。

諸の仁者よ、初禪に住する者は音聲刺を滅し、第二禪に住する者は覺觀刺を滅し、第三禪に住する者は喜刺を滅し、第四禪に住する者は出入息刺を滅し、無邊虛空處に住する者は色刺を滅し、無邊識處に住する者は虛空刺を滅し、無所有處に住する者は識刺を滅し、非想非非想處に住する者は無所有刺を滅し、滅受想に住する者は受想刺を滅す。是れを身行得倚・口行得倚・意行得倚と名づく。

【一】第八禪清淨平等の解釋三種の分別を擧げて說明せり。

【二】聲聞・緣覺。如來に共なる禪の說明。共は共ずるといふ意。共通することの意味を有す。

【三】初禪。初禪定のこと。四禪定の一。初禪に前行と名くべきものあり、粗住・細住・欲界定・未到定にして之等を經て正禪に入り八觸十功德を具す。此の地に梵衆 Brahma-kāyikāḥ. 梵衆天 Brahmapār.ṣadyāḥ. 梵輔天 Brahmapurohitāḥ. 大梵 Mahābrahmāṇaḥ の四有り。八觸とは動・痒・輕・重・冷・煖・澁・滑にして空・明・定・智・善心・柔軟・喜・樂・解脫・境界相應は是れ十功德なり。

四禪全體に就て分別すれば十八支に依つて區別す。初禪は五支なり。覺・觀・喜・樂・一心支の五なり。

【四】第二禪。初禪の覺觀を離れて此の禪を得、初禪に於て色界四大轉換し了れば二禪已上は八觸十功德なし。二禪の地に少光天 Parīttābhāḥ. 無量光天 Apramāṇābhāḥ 光音天 Ābhāsvarāḥ の三あり。二禪の四支とは內淨、喜、樂、一心の四なり。

【五】第三禪。第二禪の喜受

集めんが爲に、乃至能く無量の方便智無量の勝願、習無量の功德智慧を集め、無量の種々の衆生[六七]有生取の與め因と作る。是れを精進淸淨平等と名く。精進を以て兜率天宮に居り、其の時節を觀じ、一生處に補し、乃至精進を以て彼の宮殿を捨てて了了として母胎に入ることを知り、乃至精進を以て、藍毘尼林に於て母の右脅より安隱にして出づ。乃至精進を以て七步を行じ、大地の諸山大海を震動し、乃至精進を以て難陀、優婆難陀龍王の灌水洗浴を受け、乃至精進を以て童子遊戲して一切の工巧を示現し、乃至精進を以て宮中に處在すれども五欲に染せず、乃至精進を以て夜半に城を踰え閑林に往詣し、乃至精進を以て[六八]優陀羅迦羅茶迦羅摩仙人の所に詣りて供養を修し、乃至精進を以て六年苦行せり、乃至精進を以て阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ず。乃至精進を以て法輪を轉ず。無量人天を證と爲す。是れを精進淸淨平等と名く。我れ精進を以て今佉羅帝山牟尼諸仙の所依住處に於て、此の大集を作す。十方のあらゆる菩薩摩訶薩は佛土微塵數衆の如き有るも、悉く此に集らしむ。佛土微塵等の數の如き有る諸の天・龍・夜叉・羅刹・乾闥婆・阿修羅・摩睺羅伽・伽樓羅・緊那羅・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那等も悉く來り大集せり。聞法の爲の故に、是れを精進淸淨平等と名く。

諸の仁者よ。四大海水を以て分ちて渧數と爲し、彼の渧數の如くならんも、具に精進淸淨平等を修し、能く菩薩摩訶薩等をして[六九]毘梨耶波羅蜜を滿足せしめよ。是れを精進淸淨平等と名く。

【六七】有・生・取・十二因緣の有・生・取のこと。

【六八】優陀羅伽羅茶迦羅摩仙人。梵 Udraka Rā-maputra. 鬱頭藍弗、優陀羅々摩子、温達洛迦などゝ音譯さる。慧琳音義二十六に鬱頭藍弗此に獺戲子坐といふ。非想定を得たり。五神通をも獲たり。然るに王宮に飛入して遂に定を失ひ、徒步して山に歸れりといふ傳說を出せり。

【六九】毘梨耶波羅蜜。四十六卷脚註一一三を見よ。

動せしむ。爾の時無量の釋梵・四王・天・龍・夜叉乃至迦吒富單那等及び諸の仙人・人非人等は種々の供具を以て我れを供養して是の願を作して言はく、「汝、阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、當に我等と與に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし」と。我れ昔、兎身にて以て能く善く第一義忍清淨平等を修めたり。是の忍は聲聞緣覺と共ならず。我れ往昔に於て兎身と作りし時、梵釋・天王・護世・四王・天・龍・夜叉・乃至人非人等は悉く種々の香花塗香・末香・種々の寶珠・寶幢・幡蓋・衆妙の音樂を以て尊重し讃歎して未曾有（の念）を生じて供養を作す。諸の仁者よ。今の阿羅漢に無き所なり。諸の仁者よ。是の如く菩薩は善く第一義忍清淨平等を修したり。諸の仁者よ。是の第一義忍清淨平等とは是れ何の句義なる。第一義とは謂く生死の彼岸に到る故に第一義と名く。忍とは三界の陰を見て究竟空とし及び一切の界入を見て究竟空となす。故に名けて忍と爲す。淸淨とは謂く聖慧を以て淨三界の諸の煩惱道・業道・苦道を除淨するが故に淸淨と名く。平等とは謂はく聖慧を以て如實に一切の三界行・一切の法性如々實際を知り、如實に非如實際非々如實際を知り、一切の煩惱道を斷ずるが故に平等と名く。諸の仁者よ。是れを菩薩の第一義忍清淨平等と名く。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか[五五]精進清淨平等なる。精進を以て能く布施淸淨平等の與の因と作る。是れを精進淸淨平等と名く。乃至精進を以て能く般若淸淨平等の與に因と作る。是れを精進淸淨平等と名く。精進を以て能く一切の見を捨し、精進を以て能く四念處淸淨平等の與に因と作り、精進を以て能く一切の聲聞緣覺を超過し、精進を以て能く四正勤、四如意足の與に因と作り、精進を以て能く一切の煩惱を捨し、精進を以て能く[五六]四攝事・四無礙辯・[五七]四梵住・[五八]四無色定・[五九]五根・[六〇]五力・[六一]七覺分・[六二]八聖道分・[六三]九次第定・[六四]如來十力・[六五]十二善有支・[六六]十八不共法と因と作り、精進を以て能く大慈大悲般若淸淨平等の與め因と作る。是れを精進淸淨平等と名く。精進を以て能く成熟衆生淸淨平等の與の因と作る。是れを精進淸淨平等と名く。精進を以て無量の佛法種々の善根を

【五五】第七精進清淨平等の解釋。精進又は勤といふ、小乘七十五法大善地法の中の一。六大乘百法の善の心所の一。六波羅蜜の第四。勇猛に善法を修し、惡法を斷ずる心なり。唯識論第六に勤は謂く精進なり。善惡品の修と斷との事中に於て勇悍なるを性とす。懈怠を對治して善を滿ずるを業となすといへり。
【五六】四攝事。四十六卷脚註八七を見よ。
【五七】四梵住。四十六卷脚註一〇九を見よ。
【五八】四無色定。四十六卷脚註一二四を見よ。
【五九】五根。五十一卷脚註一六を見よ。
【六〇】五力。四十六卷脚註一二七を見よ。
【六一】七覺分。五十一卷脚註一八を見よ。
【六二】八聖道分。四十六卷脚註八五を見よ。
【六三】九次第定。四十七卷脚註八一を見よ。
【六四】如來十力。五十一卷脚註二七を見よ。
【六五】十二善有支。十二因緣のこと。五十三卷脚註一九を見よ。
【六六】十八不共法。四十六卷脚註六三を見よ。

至迦吒富單那等に圍繞せらる。暐顯照曜すること譬へば淸淨なる虛空の十五日夜極圓滿月の海島上の月愛摩尼を照し彼の珠中より大水を流出し、能く大海を滿すが如し。是の如く菩薩摩訶薩は第一義忍淸淨平等に住す。あらゆる天龍・夜叉・羅刹・鳩槃荼・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那の麁穬瞋惡にして諸の衆生を慈愍すること有る無く、後世の畏れを觀ぜず。是の菩薩は第一義忍淸淨平等を以て勝光明を放ち、一切の天龍・夜叉・羅刹・乃至迦吒富單那等を照曜す。是を以て彼の天龍・夜叉乃至迦吒富單那等をして、悉く淸淨なる善心を得、諸の衆生に於て慈悲心利益心を起さしむ。衆生の苦惱心を休息し、一切の樂に住せしめ、心に後世の畏れを觀じて、一切の惡を離れ、一切の善法に於て大精勤心を起さしむ。是を以て彼等は極めて淸淨心を得、乃至一切の善法に於て大勇猛心を發し彼等は次第に漸やく一切の不善を離れて悉く一切の善根に充足するを得、能く大涅槃海に滿つ。諸の仁者よ。汝等は當に此の菩薩を觀ずべし。未だ究竟に至らずと雖も、第一義忍淸淨平等に住するを以ての故に、已に聲聞緣覺を超過することを得、第一義忍を以て衆生を成熟す。我の如きは昔し忍辱の仙人と作りて常に林中に在り、諸の甘果を食し、時に國王有り名けて迦利[五四]と曰ふ。我身を支解して八段と爲せり。我れ彼の時に於て能く善く第一義忍を修するを以ての故に所割の處より白乳を流出せり。是の忍辱の苦行の因緣を以て無量の億那由他百千の天・龍・夜叉・羅刹・乾闥婆・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽・迦樓羅・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那等を成熟す。彼の時無量億の那由他百千の人非人等は悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。我れ昔し人となり非難處に生れて此の苦行を作せしも難と爲すに足らず。諸の仁者よ。汝等諦に聽け。我の如き往昔生れて難處に在り、兎身を受け、林中に止住し、仙人をして食を得せしめんが爲の故に、卽ち自ら身を踊らして大火聚に投じ、以て能く善く第一義忍淸淨平等を修するが故に、彼の火聚を變じて蓮池と成らしむ。淨水盈滿す。我れ爾の時に於て花臺上に臥し、是の苦行の因緣を以て、此の三千大千世界をして六種に震

【五四】迦利物語。梵 Kali. 歌利・哥利・羯利・迦藍浮とも音譯す。鬪諍と譯す。舊譯には惡生無道王といふ。その所以は釋尊が前生に忍辱なる仙人となりて修道したまへる時、彼の迦利王が釋尊の肢體を割截したる惡逆無道なる行爲をなしたればなり。涅槃經三十一卷に歌利王が忍辱仙人を迫害したる有名なる本生譚あり。

樂說無礙なり。是の人數々法無礙乃至樂說無礙を修む。是の人則ち能く身皮・肉筋・骨・眼・耳・鼻・舌手・足・頭等の所愛の命を捨つるは是れ菩薩摩訶薩の分別無分別忍清淨平等を修するなり。是れを菩薩の捨忍清淨平等と名く。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか[五三]息怒忍清淨平等なる。諸の仁者よ。若し菩薩摩訶薩は能く一切の言語・音聲・文字に於て分別の想を捨て、及び一切の色身の形相、擧動、威儀、去來、意業戲笑の分別の想を捨て、亦一切の愛取の所攝を捨てゝ果報を求めず、苦樂を離れ、分別想無く、乃至己の身命分別に於て分別の想無く、第一義忍清淨平等に住するを得。譬へば虛空の如し。明に於て闇に於て不瞋不喜不分別なり。是の如く菩薩摩訶薩は第一義忍清淨平等に住す。一切の有爲行戲笑・言語・文字・形色・苦受・樂受に分別分別を離れ、不瞋不喜なり。菩薩は彼の衆生に於て分別の想を離れて、第一義忍清淨平等に住することを得、譬へば虛空の如し。不動にして正しく遍動せず、不震にして正しく遍震せず。是の如く菩薩摩訶薩は一切業の有爲の諸行に於て身心不動にして正しく遍動せず、亦復不震にして正しく遍動せず。譬へば虛空の如し。清淨にして垢を離る。是の如く菩薩摩訶薩は第一義忍清淨平等に住す。彼の一切の有爲の身心に於て善く清淨なることを得。譬へば虛空の如し。一切衆生を長養す。是の如く菩薩摩訶薩に第一義忍清淨平等に住して、一切衆生を養育す。譬へば虛空の如し。劫火のために能く燒壞されず。劫水劫風に壞されず。是の如く菩薩摩訶薩は若し第一義忍清淨平等に住すれば、乃至未だ無上菩提に到らざるも、貪瞋癡等の爲に其の心を毀壞せられず。譬へば清淨なる虛空の十五日夜の極圓滿月が普く冷光を放ち、熱惱なる衆生の身心をして涼樂せしむるが如し。是の如く菩薩摩訶薩は第一義忍清淨平等に住す。身口の威儀を以て衆生の諸の煩惱熱を休息す。譬へば清淨なる虛空の十五日夜極圓滿月の衆星に圍繞せられて四天下に臨みて光明照輝するが如し。是の如く菩薩摩訶薩は第一義忍清淨平等に住す。所住處に隨ひ一常に天龍乃

【五三】息怒忍清淨平等說明。

以て足ることを知り、能く種々の資身の具を捨す。所謂飮食衣服・臥具・屋宅・象・馬・車乘の其の所須に隨ひて皆悉く給與す。是の人忍を以て布施して諸の苦を滅せんと欲す。是の人數々忍を修めて足ることを知り、住時に捨施を行じ、正趣正行人に於て應に其の所に住すべし。親近供養して其の教に隨順す。供養を以ての故に。是の如く是の如し。種々の生死の過患、涅槃の利益を聞けり。是の人或は聲聞乘に於て發心し、或は緣覺乘に於て發心し、或は大乘に於て發心す。己の樂の爲の故に復增忍して知足して衆生を護養す。是れを捨忍淸淨平等と名く。乃至外の資財及び自己の樂を捨てゝ諸の苦を忍受し、他をして樂を得せしむ。是れを捨忍淸淨平等と名く。若し乞人を見て種々の形色、種々の威儀、種々の音聲、種々の瞋怒、種々の罵辱、種々の欺凌、種々の麁獷不意の言、來說するところを求索すれば、是の人、是の如く是の如く、心未だ調柔せず、瞋恚未だ淨からず、未だ淨忍に住せず、彼れ是の念を作さく「誰れか能く我に勝ると。何を以ての故に。彼れ血肉を食ひ、諸の惡夜叉・羅刹・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那等は未だ生死の苦惱、涅槃の功德を聞かず、後世の畏れを觀ぜず、衆苦の惱む所にして未だ一切の諸の苦を解脫するを得ず。何を以ての故に。彼等は善知識に離れ、正法を聞かず。故に生死に在りて苦の爲に溺らさる。我れ已に數々生死の苦惱、涅槃の功德を聞くことを得、後世の畏を觀じ、勤めて諸の苦を息め、善知識に近づき、正法を聞くことを得。我れ今生死の沈溺を度せんと欲するに、何故に瞋を起さん。是の故に我れ應に是の思惟を作すべし。罵辱音聲及び諸の違事皆悉く風の如く我れ當に棄捨すべし。瞋を起すべからず。是の如く諸の衆生に於て、種々の想を捨てんと欲し、一切の文字・語言・分別皆悉く風の如し。諸の衆生に於て種々の想を離るゝは修忍淸淨平等なり。是の人數々諸の衆生に於て種々の想、一切の文字分別の想を捨つるは修忍淸淨平等なり。是の如し。是の如し。是の人の心は則ち忍淸淨平等に住して喜を得、淨を得るなり。是の如し。是の如し。是の人[五二]四無礙を修し、法無礙・義無礙・辭無礙・

【五二】四無礙。四十六條脚註八八を見よ。

の如く聖淸淨平等戒を學ぶ。愛熱の風は四念處を修するが故に起るを得せしめず。是の義を以ての故に之を名けて戒と爲す。譬へは大鐵圍山間の臭穢の風の如し。山障を以ての故に四天下に至ることを得せしめず。是の如く聖淸淨平等戒を護る。四無所畏を以ての故に、愛取臭穢を起ることを得せしめず。是の義を以ての故に是れを名けて戒と爲す。譬へば大鐵圍山間の黑闇の如し。山障を以ての故に四天下に至ることを得ず。是の如く聖淸淨平等戒を護る。無明有爲有漏の相は、七覺分を修するが故に起ることを得せしめず。是の義を以ての故に之を名けて戒と爲す。[四九]離欲の義は是れ戒の義、解脫の義は是れ戒の義、休息の義は是れ戒の義、無盡の義は是れ戒の義、滅の義は是れ戒の義なり。此の諸の句義を名けて戒の義と爲す。諸の仁者よ。是れを有爲無爲戒淸淨平等と名く。若し世間の沙門・婆羅門有りて、此の有爲無爲の淸淨平等戒に住する者は、彼の人を名けて世間の福田と爲す。若し彼に於て敬信し尊重し、護持養育して、衣服・牀褥・臥具・飮食・湯藥の一切の所須を給施するもの有らば、是の人此の善根を以て乃至流轉の時に於て、恆に勝報を受け、速に能く無畏の大城に入る。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか[五〇]忍淸淨平等なる。忍に二種有り。一には捨忍、二には息怨の忍なり。諸の仁者よ。彼に於て何物をか[五一]捨忍なる。若し衆生有りて一切の樂を求め、一切の苦を息むる是れを捨忍淸淨平等と名く。若し復人有りて樂を求め苦を離れんに、彼の人、三界の一切の苦道・煩惱・蒸熱を觀じて、唯だ聖人のみを除く。是の人己の利の爲の故に大怖畏を生ず。是の如きの怖畏は三界の一切の熾然は諸の煩惱大火に燒かるゝを觀じ、一々の衆生は諸の苦害・驅馳・流轉を爲して自ら脫すること能はず。如し彼れ苦に逼られて未だ解脫を得ずんば、我れも亦是の如く苦に逼られん。何なる方便を以てすれば能く自の苦を脫する。即ち是の念を作さく、「餘事を以てせされ。我れ捨忍を以て諸の苦を解脫して諸の樂を具へしめん」と。是の念を作し已りて即便ち起發して忍を

【四九】戒の意義

【五〇】第六忍平等の解釋。忍の梵は Kṣānti 違逆の境に處せどもよく忍耐して瞋心を起さゞること。二忍、三忍、五忍、六忍、十忍などゝいふ樣に多くの類別ありて諸經に敎說せらる。

【五一】捨忍淸淨平等の說明

報を具し、顔容端正にして、衆人愛敬するを事とし、無礙諸根不缺ならん。

彼にて、布施清淨平等を行ずる時、戒に於て邪見を休息し、平等の行を修すれば、大清淨平等の果報を具し、正見國土、正見家正、常に諸佛菩薩聲聞に値ひたてまつり、佛を見たてまつり、法を聞きて衆僧を供養し、菩提行を修して、常に清淨平等を捨離せざらん。

諸の仁者よ。此れは是れ戒清淨平等なり。是の戒清淨平等を以て自ら莊嚴する者は是の人久しからずして佛功德を成ず。相好・音聲の清淨を具足して諸の魔怨を降し、清淨平等を得れば、是の人久しからずして一切の佛法を得、禪念・慧行・清淨大智・大慈大悲乃至能く一切佛法の清淨平等を滿ぜん。是れを世間戒行清淨平等處と名く。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか[四五] 出世間戒行清淨平等處なる。若し戒に於て[四六] 三摩跋提信解行者ならば色陰に依らざる持戒なり受想行識陰に依らざる持戒なり。眼に依らず、色に依らず、眼識に依らず、眼觸に依らず、眼觸の因縁生受愛取有生に依らざる持戒なり。乃至意に依らず、法に依らず、意識に依らず、意觸に依らず、意觸の因縁生受愛取有生に依らざる持戒なり。地界に依らざる持戒なり。水火風界に依らざる持戒なり。無邊虛空入に依らざる持戒なり。乃至非想非々想入に依らざる持戒なり。欲界色界に依らざる持戒なり。現世後世に依らざる持戒なり。聲聞乘、辟支佛乘の一切の種智に依らざる持戒なり。聞に依らず、禪に依らず、智に依らざる持戒なり。聽力に依らず、三昧力に依らず、陀羅尼力に依らず、忍力に依らず、有漏力に依らず、無漏力に依らず、有爲界力に依らず、無爲界力に依らず、善不善力に依らず、明闇力に依らざる持戒なり。諸の仁者よ。是れを出世間戒清淨平等處と名け、是を修戒梵路聖道と名け、能く無上無畏の大城に入る。衆聖の所依の戒清淨平等は以て第一義清淨戒を護るが故に、能く淨智に入る。[四七] 戒とは是れ何の義ぞや。譬へば[四八] 大鐵圍金剛山間の熱惱の風の如し。山障を以ての故に四天下に至ることを得せしめず。是

【四五】 出世間戒行清淨平等の解釋。
【四六】 三摩跋提。梵Samāpatti 禪定の一種。三摩鉢底、三摩拔提、三摩鉢提の音譯あり。
【四七】 戒の說明
【四八】 鐵圍金剛。大鐵圍金剛山・金剛圍山・金剛輪山に同じ。四十六卷脚註九一を見よ。

見の善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人速に六波羅蜜を滿じ、善淨の佛土に於て正覺を成ぜん。菩提を得し已らば、彼の佛土の功德智慧一切の善根に於て衆生を莊嚴し、其の國に來生して天神を信ぜず、惡道の畏を離れ、彼に於て命終して還りて善道に生ず。

諸の仁者よ。彼に於て布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て殺生を休息し、平等の行を修して、大淸淨平等の果報を具し、長壽を得て諸の怖畏を離れん。彼れ、布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て偸盜を休息し、平等の行を修すれば、大淸淨平等の果報を具して他と共に有せず、一切の善を修して留難有ること無けん。

彼にて、布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て邪婬を休息し平等の行を修すれば、大淸淨平等の果報を具し、善根を修習して留難あることなく、邪婬の念無く、自他の婦を觀ぜん。彼れ布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て妄語を休息し、平等の行を修すれば、大淸淨平等の果報を具し、毀謗を被らず、發心堅固にして如說に修行し、天人の中に於て獨り證明と作り、口より香氣を出すこと優鉢羅花の如けん。彼れ、布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て兩舌を休息し、平等の行を修すれば大淸淨平等の果報を具して不壞の眷屬・丈夫眷屬・敬信眷屬を得ん。

彼にて、布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て惡口休息し、平等の行を修すれば、微妙なる音を得て惡聲を聞かざらん。

彼れ、布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て綺語を休息し、平等の行を修すれば、大淸淨平等の果報を具し發言中を得、一切の疑を斷じて衆生樂見せん。

彼にて、布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て貪欲を休息し、平等の行を修すれば、大淸淨平等の果報を具し、果報を受け已りて還りて復た能く捨し、解脫の果を受けて大勢力を具せん。

彼にて、布施淸淨平等を行ずる時、戒に於て瞋恚を休息し、平等の行を修すれば、大淸淨平等の果

に來生して强記して忘れず樂ふて離欲に住す。

〔四二〕貪欲を休息するに十種の功德を獲。何等をか十と爲す、一には身根不缺なり。二には口業淸淨なり。三には意散亂せざるなり。四には勝果報を得るなり。五には大富貴を得るなり。六には衆人樂觀す。七には所得の果報、眷屬は破壞すべからず。八には常に明人と相會す。九には法聲を離れず。十には身壞して命終には善道に生ずることを得。諸の仁者よ。是れを休息貪欲得十種功德と名く。若し能く此の休息貪欲善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人久しからずして無上智を得ん。彼の人菩提を得し時、彼の國土に於て魔怨及び諸の外道を離る。

〔四三〕瞋恚を休息するに十種の功德を得。何等をか十と爲す。一には一切の瞋を離る。二には樂ふて積財せず。三には衆の聖賞樂す。四には常に賢聖と相會す。五には利益の事を得。六には顏容端正なり。七には衆生の樂を見て則ち歡喜を生ず。八には三昧を得。九には身口意の光澤調柔なるを得。十には身壞して命終には善道に生ずることを得。諸の仁者よ。是れを休息瞋恚得十種功德と名く。若し能く此の休息瞋恚善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人久しからずして無上智を得ん。彼の人菩提を得し時、彼の國土に於てあらゆる衆生悉く三昧を得て其の國に來生し、心極めて淸淨なり。

〔四四〕邪見を休息するに十種の功德を獲。何等をか十とする。一には心性柔善、朋侶賢良なり。二には業報有るを信じ、乃至命を奪ふて諸の惡を起さず。三には三寶を敬信して設ひ活命を爲すとも天神を信ぜず。四には正見を得て恠異の事をせず、亦良日吉時を簡擇せず。五には常に人天に生じて諸惡道を離る。六には常に福德を樂み、明人讃譽す。七には俗なる禮儀を棄てゝ常に聖道を求む。八には斷常見を離れて因緣法に入る。九には常に正趣正發心人と共に相會遇す。十には身壞して命終には善道に生ずることを得。諸の仁者よ。是れを休息邪見得十種功德と名く。若し能く此の休息邪

【四二】不貪欲の十種の功德。不貪欲の梵は Abhidhyāyāḥ prativiratiḥ 離貪と譯す。

【四三】不瞋恚の十種の功德。不瞋恚の梵は Vyāpādāt prativiratiḥ 離瞋と譯す。

【四四】不邪見の十種の功德。不邪見の梵は Mithyā dṛṣṭeḥ prativiratiḥ 離邪見と譯す。以上の三を意善行 Manosucaritaṃ と稱す。邪見とは因果の道理を撥無するもの。

根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば是の人久しからずして無上智を得ん。彼の人菩提に到りし時、彼の國土に於て生臭あること無く、衆妙寶香にして常に其の國に滿てり。

[三七]兩舌を休息するに十種の功德を獲。何等をか十と爲す。一には身不可壞平等なり。二には眷屬不可壞平等なり。三には善友不壞平等なり。四には信不壞平等なり。五には法不壞平等なり。六には威儀不壞平等なり。七には[三八]奢摩他不壞平等なり。八には[三九]三昧不壞平等なり。九には忍不壞平等なり。十には身壞して命終には善道に生ずることを得。諸の仁者よ。是を休息兩舌得十種功德と名く。若し能く此の休息兩舌善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人久しからずして無上智を得ん。彼の人菩提に到りし時、彼の國土のあらゆる眷屬に於て一切の魔怨及び他の朋黨の壞する能はざる所なり。

[四〇]惡口を休息するに十種の功德を獲。何等をか十と爲す。一には柔軟語を得。二には捷利語。三には合理語。四には美潤語。五には言必ず中を得。六には直語。七には無畏語。八には不敢輕陵語。九には法語滿辯。十には身壞して命終には善道に生ずることを得。諸の仁者よ。是れを休息惡口得十種功德と名く。若し能く此の休息惡口善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人久しからずして無上智を得ん。彼の人菩提に到りし時、彼の國土に於て法聲充遍して諸の惡語を離る。

[四一]綺語を休息するに十種の功德を獲。何等をか十と爲す、一には天人愛敬す。二には明人隨喜す。三には常に實事を樂しむ。四には明人に嫌はれず。共住して離れず。五には言を聞いて能く領す。六には常に尊重愛敬を得。七には常に阿蘭若處に愛樂するを得。八には賢聖の默然を愛樂す。九には惡人を遠離して賢聖に親近す。十には身壞して命終には善道に生ずることを得。諸の仁者よ。是れを休息綺語得十種功德と名く。若し能く此の休息綺語善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人久しからずして無上智を得ん。彼の人菩提を得し時、彼の國土に於て端正の衆生其の國

【三七】不兩舌の十種の功德。又不誑言といふ。不兩舌の梵は Paiśunyāt prativiratiḥ 離離間語と譯す。

【三八】奢摩他。四十六卷脚註八六を見よ。

【三九】三昧五十卷脚註三八を見よ。

【四〇】不惡口の十種の功德不粗言、不惡罵ともいひ、不惡口の梵は Pāruṣyāt prativiratiḥ 離麁惡語と譯す。

【四一】不綺語の十種の功德。不綺語の梵は Saṃbhinnapralāpāt prativiratiḥ 離雜穢語と譯す。以上の四を語善行 Vāksucaritam と譯す。

人菩提に到りし時、彼の國土に於て諸の害仗を離れ、長壽の衆生、其の國に來生す。[三四]偸盜を休息するに十種の功德を獲。何等をか十とする。一には大果報を見して事決斷を爲す。二にはあらゆる財物は他と共に有せず。三には五家と共ならず。四には衆人愛敬して厭足あること無し。五には諸方を遊行して留難あること無し。六には行來るも無畏なり。七には以て布施を樂しむ。八には財寶を求めずして自然に速に得。九には財を得て散せず。十には身壞して命終して善道に生ずるを得。諸の仁者よ。是れを休息偸盜得十種功德と名く。若し能く此の休息の偸盜善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人久しからずして無上智を得ん。彼の人菩提に到りし時、彼の國土に於て、種々の花果・樹林・衣服瓔珞・莊嚴の具を具足して、珍奇の寶物充滿せざるはなし。

[三五]邪婬を休息するに十種の功德を獲。何等をか十と爲す。一には諸根律儀を得て事決斷を爲す。二には離欲清淨に住することを得。三には他を惱さず。四には衆人意樂す。五には衆人樂觀す。六には能く精進を發す。七には生死の過を見る。八には常に布施を樂しむ。九には常に法を求むることを樂しむ。十には身壞して命終して善道に生ずるを得。諸の仁者よ。是を休息邪婬得十種功德と名く。若し能く是の休息邪婬の善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人久しからずして無上智を得ん。彼の人菩提に到りし時、彼の國土に於て生臭あること無く、亦女根無く婬欲を行ぜず。皆悉く化生す。

[三六]妄語を休息するに十種の功德を獲。何等をか十と爲す。一には衆人保任して所言皆信ぜらる。二には一切處乃至諸天の發言に於て中を得たり。三には口より香氣を出し優鉢羅花の如し。四には人天の中に於て獨り證明と作る。五には衆人愛敬して諸の疑惑を離る。六には常に實語を出す。七には心意清淨なり。八には常に諂語無く言必らず機に應ふ。九には常に歡喜多し。十には身壞して命終には善道に生ずるを得。諸の仁者よ。是を休息妄語得十種功德と名く。若し能く此の休息妄語善

【三四】不偸盜の十種の功德不偸盜の梵は Adattādānādviratih 離不與取と譯す。

【三五】不邪婬の十種の功德不邪婬の梵は Kāmamithyācārādviratih 離欲邪行と譯す。以上の三を身善行 Kāyasucaritam と稱す。

【三六】不妄語の十種の功德不妄語の梵は Mṛṣāvādāt prativiratih 離虛誑語と譯す。

此の法門を說きし時、三百萬の那由他阿修羅は不忘菩提心三昧を得たり。

爾の時世尊は復呪を說いて曰はく、

多地夜他一　阿奴那二　阿那莽那三　阿婆那奴那四　阿婆奚梨夜五　阿婆那奴那六

蘇婆呵七

此の法門を說きし時、八萬四千頻婆羅の鳩槃茶は熹樂三昧を得たり。

爾の時、世尊は復呪を說いて曰はく、

多地夜他一　陀伽陀闍二　阿婆陀伽陀闍三　阿婆伽陀闍闍四　犍陀犍陀闍五　蘇婆呵六

此の法門を說きし時、七十萬の那由他・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那は電王三昧を得たり。諸の數量を過ぎて天龍夜叉乃至迦吒富單那等の、昔、未だ曾て無上菩提心を發さゞりし者は皆悉く發心せり。諸の仁者よ。是れを第一義布施清淨平等と名く。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか戒清淨平等[三〇]なる。若しは一切世間若しは出世間(にたいて)、善道及び涅槃樂には戒を根本と爲す。能く聲聞・辟子佛地に安住し、能く阿耨多羅三藐三菩提の智に安住す。此の戒清淨平等はいはゆる[三一]十善業道にして、殺生・偸盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪・瞋・邪見を休息す。諸の仁者よ。[三二]殺生を休息するに十種の功德を獲、何等をか十と爲す。一には諸の衆生に於て無所畏を得。二には諸の衆生に於て大慈心を得。三には[三三]惡習氣を斷ず。四には諸の病惱少く事決斷を爲す。五には壽命の長きを得。六には非人のために護持せらる。七には寤寐安隱にして諸の惡夢なし。八には諸の怨讎なし。九には惡道を畏れず。十には身壞して命終するに善道に生ずることを得。諸の仁者よ。是れを殺生を休息するに十種の功德を得ると名く。若し能く此の休息殺生の善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、是の人久しからずして無上智を證す。彼の

【二九】意樂三昧。意識分別して悅豫するかたちを意といひ、眼識等の五識が此分別に悅豫するを樂といふなり。智度論五卷に善心一處に住して不動なる是れを三昧と名くといへり。

【三〇】第五戒清淨平等の解釋。戒の梵は Śīla 身心の過を防禁すること。大乘義章第一に尸羅といふは此れ清涼と名く。亦名けて戒と爲す。三業の炎行人を焚燒するに非ず。事燒の如きに等し。戒は能く防息す。故に清涼と名く。清涼の名は正しく彼を翻ずるなりといへり。

【三一】十善業道。梵 Daśa ku-śalāni-karma-mārgāḥ, Daśa-kuśala-karma-pathāḥ. 業の通顯なるもの、十不善業道に相當す。道とは遊履せらるゝ所の義、因となりて造作する思は業なれば、其の業の遊履する處を業道を名くるなり。

【三二】十善業道を說き不殺生以下十種の功德說相あるを述ぶ。
不殺生の十種の功德不殺生の梵は Prāṇātipātād viratiḥ 離斷生命と譯す。

【三三】習氣。四十六卷脚註一一を見よ。

苦惱を息め、能く一切の佛法を求む。能く諸の惡道を休息するの心を發して、一切の法に於て善く安住を得ん。諸の仁者よ。是れを世間清淨平等と名く。

諸の仁者よ。我れ今當に[二七]第一義清淨平等を說くべし。是の說を作し已りて卽ち呪を說いて曰はく、

多地夜他一　夜咩夜咩二　鉢羅佉夜咩三　優鉢羅呿夜咩四　耶夜咩五　佉夜夜咩六　蘇婆呵七

此の法門を說きし時、八百六十萬の緊那羅・乾闥婆等は塵を遠け苦を離れて[二八]法眼淨を得たり。

爾の時、世尊は復呪を說いて曰はく、

多地夜他一　瞿竭嚟二　夜婆瞿竭嚟三　憂婆夜婆四　瞿竭嚟五　蘇婆呵六

爾の時世尊は復呪を說いて曰はく

多地夜他一　陀羅娩陀羅陀娩二　憂跛陀羅三　陀羅陀娩四　蘇婆呵五

此の法門を說きし時、九百四十萬の夜叉は塵を遠ざけ苦を離れて法眼淨を得たり。

爾の時、世尊復呪を說いて曰はく、

多地夜他一　阿闍泥二　叉叉闍泥三　伽叉叉阿闍泥四　毛囉阿闍泥五　叉差六　蘇婆呵七

此の法門を說きし時、七千萬の龍は遠塵離垢して法に於て三昧を得たり。

爾の時、世尊は復呪を說いて曰はく、

多地夜他一　呵呵呵呵呵呵二　系杆婆三　呵呵呵四　視若視若視若五　呵呵呵六　蘇婆呵七

【二七】第一義清淨平等の解釋。

【二八】法眼淨。分明に眞諦を見るといふ。大小乘に通ず。小乘は初果に四眞諦の理を見るをいひ、大乘は初地に無生法忍を得るをいふ。姑らく吉藏の解釋に據る。普通に五眼として一肉眼、二天眼、三慧眼、四法眼、五佛眼を數ふる中の第四に當る。此の中、慧眼は空諦一切智に、法眼は假諦道種智に、佛眼は中諦一切種智に配當す。

し、彼れに於て節々其の精氣を奪ひ、精氣を奪ふが故に、其の身心をして苦に惱む所と爲らしめば應に是の如く學すべし。我れ一切衆生と與に親あり、乃至是れ應はざる所なり。我れ若し親に於て惡心もて之を視・氣其の身を噉き、其の心を散亂し、身支節に於て其の精氣を奪ふが故に我が親の身心をして苦を得せしめん。是の因緣を以て乃至流轉の時に於て、非人・惡心にて我れを視ること有ること無し。亦氣にて我が身を噉き我が心を散亂せずして精氣を奪はざる是れを離別命と名く。

彼に於て何者をか[二五]壞命たる。若し諸の衆生が自ら食はんが爲の故に、支節を割截して盡く精氣を奪ひ、山木・高處・深水・大河推して墮落せしめ、若し毒藥を與へて[二六]屍鬼を起たしめ、若し厭蠱及び餘の物害を作し、若し飮食を斷じ、或は其の首を斬り、以て命根を斷ず。是の因緣を以て汝等は若し自ら己を愛して長壽を得んと欲し、樂を求め苦を離れ、名稱富貴及び解脫を求めなば應に是の如く學すべし。我れは一切衆生と親あり、一切衆生は我れと親あり、若し我れ自ら食はんが爲の故に、其の精氣を奪ひ、支節を割截して乃至首を斬らば是れ應はざる所なり。是の因緣を以て乃至流轉の時に於て能く首を斬り我が命を壞す者無し。是を壞命と名く。此れは是れ淸淨平等なり。

諸の仁者よ。若し復一切衆生を憐愍するが故に、之が爲に功德智慧を積集し、一切の虛誑幻見を斷除して堅固勇猛なるを得て一切の善を求むるに如說に修行するを命因緣と爲す。他の衆生に於て惡念を起さず、諸の衆生に於て害心を起さず。持する所の禁戒は衆生と共にし、衆生の樂を見ては深く歡喜を生ず。己の樂緣に於て自ら能く足ることを知る。一切の愛事能く捨せざるは無し。一切の法に於て悋惜の心無く　常に三界を怖れ、諸の忍事に於て力能く堪受す。無常相を信じ、能く說の如く行じ、己の失有るに於て、能く自ら觀察し、他の失有るを見れば、則ち悲愍を生じ、諸の善法に於て厭足あること無し。常に發露懺悔すれば無邊の廻向を得て能く深法を求む。諸の衆生に於て福田の心を作し、厭離智を求む。三界獄の流轉煩惱に於て、能く怖畏を得。勸めて衆生の一切の

【二五】壞命の意味。

【二六】起屍鬼。梵 Vetāla 毘陀羅又は迷怛羅に作る。西國に呪法あり、屍を起たしめて人を殺さしむるなりといふ。十誦律第二、毘奈耶第一にも出づ。

其の心を觸惱すれば、足ることを知らざらしむ。是の因緣を以て、共に相戰鬪し諍論し譏毀し訴訟し諂誑し妄語し、互に相支解し及び命根を斷ず。是の故に我れ今諸の衆生に於て觸惱及び斷命根を休息せん。我れは此の布施清淨平等の因緣を以ての故に、流轉の時に於て、能く觸惱して我と共に鬪戰し諍論し、譏毀し訴訟し諂誑し妄語し支解斷命すること無し。是れを觸惱と名く。

彼に於て何者をか害命[22]なる。彼れは應に是の如く學すべし。一切衆生は我と與に親あり、我れは一切衆生と親あり。我れ若し衆生の命を害すれば、是れ應はざる所なり。我れ若し非時・風雨・亢旱・災雹・雨塵・闇曀・枯渴・諸水損減・花果・藥草衆味を作さば是の因緣を以てして、衆生は飢渴し、四大增動して種々の病を生ぜん。其の病に因るが故に命終を取る。是の故に我れ一切衆生に於て害命を休息せん。休息するを以ての故に、地味精氣にして復隱沒せず。是の因緣を以て諸の衆生をして飢渴を離れ、四大動かずして諸の病を生ぜざらしむ。彼れに因りて命終を取らざるなり。我れ此の布施清淨平等を以て、乃至流轉の時に於て我れ更に飢渴病苦を受けず、是れを害命と名く。

彼れに於て何者をか[23]活命の具なる。彼の所資の身命とは應に是の如く學すべし。一切衆生は我れと與に親あり、我れは一切衆生と與に親あり。我れ若し彼れに於て活命の具を奪はゞ是れ應はざる所なり。若し衆生の花果・藥草・五穀・精氣・活命具を奪ふ者は、彼の衆生をして惡なる花果・藥草・五穀・衆味精氣を食はしめば、其の身心をして損瘦・無力・失念・瞋惡・輕躁・麁穬・惡色多病ならしめん。是の故に我れ當に過去の諸の天仙の敎に隨順すべし。一々の花果・衆味・精氣に於て六十四分の中、其の一分の精氣を取りて以て身命を活し、餘の六十三分を留めて衆生を活し、安樂を受けしむ。我れ今是の知足の因緣を以て、乃至流轉の時に於て我れ更に無味なる精氣殘害の食を食はず、大威力を具し、强記・軟心・好色・無病なる是れを活命の具と名く。

彼れに於て何者をか[24]離別命なる。若し惡心を以て諸の衆生を視・氣其の身を噓き、其の心を散亂

【二二】害命の意味。

【二三】活命具の意味。

【二四】離別命の意味。

り。布施を以ての故に、衆生流轉時に於て恒に勝報を受け、速に能く無畏大城に入ることを得。何等をか四となす。一には一切衆生に於て憐愍心を起し、二には平等の心、三には大慈の心、四には大悲の心、此れを四種の布施清淨平等となす。衆生流轉の時に於て恒に勝報を受け、速に能く無畏大城に入ることを得ん。

諸の仁者よ。彼れに於て何者をか、一切衆生に於て[一六]憐愍心を起して清淨平等なる。若し衆生ありて樂を求め苦を離れ恩愛離れず怨憎會せず、長壽・利養・名稱・富・貴の五欲を得んと欲すれば應に是の如く學すべし。我の如く愛欲は自己の身命を意重して厭足あること無く、一切の方便を以て無上護持して價量有ること無し、是の如く一切衆生に於て一々の衆生乃至蟲蟻も、愛欲は自己の身命を意重して厭足有ること無く、一切の方便を以て無上護持して價量あること無し。我れ何故に他の衆生に於て他の壽者に於て、惱を作し害を作し活命具を奪ひ、其の命根を離し其の命根を壞するや。若し我れ他の衆生に於て他の壽者に於て、惱を生じ命を離し、一々の命を離るゝを以ての故に、我れ億百千世に當りて世々の中に於て還りて離命[一七]せられて諸の苦惱を受けん。我は今日より諸の衆生に於て父母の想及び男女の想を起し、乃至蟲蟻にも亦父母及び男女の想を作し、更に他の命を惱害せず。亦他の活命の具を奪はず、[一八]命を離壞せず。亦他をして其の精氣を奪ひ、及び命根を斷ずるを教へず。是の如く我れ億那由他百千劫の流轉生死に當りて世々の中に於て、身命を受くる時、能く惱害して活命具を奪ひ、及び命を離壞する者無し。何を以ての故に一切衆生は我が父母・兄弟・男女等に非る者無ければなり。是の如く我れ一切衆生に於て其の父母・兄弟・男女等に非る者あること無し。是の因緣を以て我は曾て一切衆生と與に[一九]親あり、一切衆生は曾て我と與に親あり。我れ若し親に於て惱を生ずれば、是れ[二〇]應はざる所なり。所謂惱む者は、我れ若し刹利を[二一]纏惱すれば、彼の刹利をして己の境界・國土・人民に於て、諸の所欲に於て知足を生ぜざらしむ。及び婆羅門乃至畜生をして

【一六】憐愍心清淨平等の說明　憐愍心　梵 Karuṇā citta 憐み同情の心。

【一七】高麗藏本彼は聖語藏本に在りては被なり。今從へり。

【一八】壞命。梵 Ājīvavipanna; 生命を破壞すること。

【一九】親。生々世々に六親眷屬たりし關係あるをいふ。

【二〇】應はざる所。不適當のこと。

【二一】纏惱。煩惱の意味。

ち是れ我の體性なり。我の體性の如きは卽ち是れ一切の法の體性なり。一切法の體性の如きは卽ち是れ佛法の體性なり。是の如く諸法の平等を觀ずる時衆生は陰に卽して不可得なり、陰を離れても不可得なり。和合も不可得なり。和合を離るゝも亦不可得なり。法に非れば非法に非ず。是の人是の如く無相に住することを得、是れを法平等と名く。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか[一三]淸淨平等なる。謂はく人身を得て十德を具滿するなり。何等をか十と爲す。一には下賤の家を離るゝなり。二には不鈍なり。三に不瘂なり。四には諸根不缺なり。五には男子身を得るなり。六には顏容端正なり。七には好眷屬を得るなり。八には不貧なり。九には他の爲に欺かれず。發言するに中有るなり。十には多人瞻仰するなり。何を以ての故に。言はく人身を得るを淸淨平等と名く。如し人身を得るが故に三律儀を得て、三惡道を離る。能く三乘を求め、三種の菩提隨所にして得ん。云何んが淸淨平等なる。若し人能く菩提を得、一切法に於て心に所依無く、一切の內外の境界に於て心に所依無く。是の人一切法に依らずして如々に於て無所取なり。一切法を見て內心を取らず、外心を取らず、二つの境界に於て極めて寂定を得ん。是の人は是の如く正しく淸淨法を見る時、內外に衆生の命者・壽者・生者・人者・衆數養育作者・使作者・起者・使起者・受者・使受者・知者見者の有るを見ざるなり。是の人、是の如く諸の衆生に於て無我の淸淨なる平等を見ることを得て、衆生無く命無く我無し。離欲淸淨にして邊見を起さず。是の如く衆生の淸淨平等に入ることを得。是の如く一切法の[一四]空無行智印・無相・無願に入ることを得。是の如く衆生の淸淨平等に入ることを得。是の人彼の法を以て衆生を成熟して我を壞せず、亦事を壞せず及び財を壞せず。若し一切衆生の體性平等なることを知らば、則ち一切法の體性を知る。若し一切法の體性を(知らば)則ち是れ佛法の體性(を知る)。是れを一切法平等佛法と名け、是れを淸淨平等と名く。

諸の仁者よ。彼れに於て何者をか[一五]布施淸淨平等なる。諸の仁者よ、四種の布施を以て淸淨平等な

【一二】第二法平等の解釋。法といふ意義の說明あり。

【一三】第三淸淨平等の解釋。こゝに人身を得るに十德を滿ずる說明あり。

【一四】三願。三解脫門のこと。

【一五】第四布施淸淨平等の解釋。こゝに四種の布施淸淨平等を說明せり。布施梵Dānam檀那は音譯なり。福利を人に施與し殊に財物を與ふるを意味す。

るが如し。三寶に値遇して布施を爲すことの難きこと　功德天[六]の賢瓶を求むるが如し。戒を受持することの難きこと、牛頭栴檀洲[七]に到るを得べきことの難きが如し。衆生の所に於て悲愍を起すことの難きこと勇健怨賊に値ふて　金剛杵[八]を執りて度を得べきことの　難きが如し。身命を護りて足るを知ることの難きこと善作　阿濕婆迷陀耶若[九]の如し。

（原註）　阿濕婆とは齊に云はく馬也。迷陀とは寶柱なり。耶若とは祀なり。此の祀を爲す者は唯閻浮提王の能くする所なり。

諸の賢首よ。[一〇]十種の平等あり。若し衆生有りて此の平等を具すれば、流轉時に於て恆に勝報を受け速に能く無畏大城に入ることを得。何等をか十と爲す。一には衆生平等なり。二には法平等なり。三には清淨平等なり。四には布施平等なり。五には戒平等なり。六には忍平等なり。七には精進平等なり。八には禪平等なり。九には智平等なり。十には一切法清淨平等なり。

諸の仁者よ。彼に於て何者をか　[一一]衆生平等とする。衆生とは三界のあらゆる一切の衆生を謂ふ。若し衆生ありて自ら己身を愛し、活命を得て樂を求め苦を離れんと欲せば、應に是の如く學すべし。若し丈夫の壽（長壽）者ありて、若しは善不善を作業し、自ら作し他に敎へなば現に受報を見ん。是の故に諸の仁者よ。若し樂を求め苦を離れんには彼れ應に是の如くすべし。若し身口意にて諸の善業を作して惡業を作さず。若しは此の身、若しは後身にて自ら益し他を益し、自ら善く他を善くして惡業を作さざる者、諸の仁者よ、是を衆生平等と名く。

諸の仁者よ。彼れに於て何者をか　[一二]法平等なる。法とは若し衆生ありて樂を求め苦を離れ、生を欣び死を畏れ、恩愛離れず、怨憎會せず。此の如きの人、心海に溺らさる。何を以ての故に、若し衆生ありて我に計著する者は生死に流轉して清淨なる解脫道を見ざるが故なり。是の故に法に於て平等に思惟觀察して、衆生を離れずして法有り、法を離れずして衆生あり。衆生の體性の如きは卽

【六】　功德天。吉祥天の事にして本來婆羅門敎の奉ずる神なりしものを佛敎に取入れしもの。梵 Mahāśrī-devī 父は德叉迦 Takṣaka 母は鬼子母 Hāritī 毘沙門天の妹に當るといふ。大功德を衆生に與ふる神なりとして我國にても廣く信仰せらる。

【七】　牛頭栴檀洲。梵 Gośīr-ṣaka-candana-dvīpa 栴檀は香樹の名。牛頭山より出すを以てかくいへり。

【八】　金剛杵。印度の兵器の名。獨股、三股、乃至九股等の種類がある。

【九】　阿濕婆迷陀耶若。梵 Aś-va-medha-yajña 馬寶祀と譯す。國王の主宰する大祭にして古代より最も神聖視せらる。馬を犧牲にする處より此の名あり。

經に原註あり、音義の漢譯を附せり。「齊に云はく」はこの經は高齊時代の譯出なるを以てなり。

【一〇】　十種平等。六度を主とせる此の十平等を修行すれば、生死流轉の際も勝報を受け、佛の如く無所畏の大城に速入するを得ると說けり。

【一一】　第一衆生平等の解釋。自他平等に善を作して惡業を作さゞること。

爾の時、四大天王・釋提桓因・娑婆世界主大梵天王 正覺梵天合掌して佛に向ひ、一心に敬禮して是の言を作さく、「大德婆伽婆よ。此の四天下のあらゆる天龍・乾闥婆・緊那羅・夜叉・羅刹・鳩槃茶・毘舍遮・摩睺羅伽・伽樓羅の諸の餓鬼等若しは卵生・胎生・濕生・化生 若しは 地行・水行・空行の一切餘す無く、今悉く來集して世尊の所に在り。我等は諸の大智人の語を受けて如來を勸請せん。惟だ願くは世尊よ、我等諸の衆生を哀愍するが爲の故に、惡衆生をして敬信を得せしむるが故に、正法眼に久しく住するを得るが爲の故に、三寶種を紹ぎて斷絕せざるが故に、地の精氣、衆生の精氣、正法の精氣をして久住せしめ增長せしむるが故に、又善道及び涅槃道・八眞聖道 をして 常に滅壞せず及び增長せしむるが故に。世尊よ。此の閻浮提のあらゆる城邑・聚落・舍宅乃至寶洲 の一切餘す無く、天・龍・夜叉・乃至迦吒富單那等、其の宜しき所に隨ひて分布し付囑して護持せしむるが故に、今此の大集一切の天王一切の龍王乃至毘舍遮王は各眷屬を將ゐて皆悉く來集し、彼の一切を是等に付囑するを以て、其の敎授をして憶念攝受し、同じく其の法を行ぜしむ。彼の諸天乃至迦吒富單那等をして各己の分に於て護持養育せしむ。自らも縱捨すること勿く、亦他を惱すこと莫し。他を惱す者を見て其をして遮護せしむ。縱捨することを得ず。彼の各をして己が分に於て大勇力を發し、正護養育せしむ。若し彼の大勇力を發さば、應に歡喜を生ずべし。彼は則ち喜樂し名稱流布して大福報を獲ん」と。

爾の時、世尊は其の勸請を受け、彼等の衆を慈悲哀愍するが故に遍く一切の諸の來れる大衆を觀じ、卽ち右臂（うひ）を擧げて是の言を作したまはく、「汝等賢首、一切の大衆よ、各々諦かに聽け。我れ當に解說すべし。佛の世に出づることの難きこと優曇花の如し。[三]八難を離るゝことの難きこと順時香樹の如し。正法を聞くことの難きこと[四]閻浮檀金（えんぶだんごん）を雨すが如し。戒定の僧に遇ふて供養を爲すことの難きこと大海の寶洲に詣づるが如し。三寶の所に於て淨信を得ることの難きこと [五]如意珠を求む

【三】八難。見佛聞法に障難ある八處なり。又八無暇ともいふ。一、地獄、二、餓鬼、三、畜生、四、鬱單越、五、長壽天、六、聾盲瘖瘂、七、世智辯聰、八、佛前佛後、是れなり。

【四】閻浮檀金。梵 Jambu-nada-suvarṇa 又炎浮檀金、閻浮那提金、閻浮那陀金、剡浮那他金など、黃金の名。閻浮樹の下に河有り、閻浮檀といひ、其の河中より金を出すに依つて此の名有り。

【五】如意珠。梵 Cintāmaṇi 寶珠より種々の物を出すこと意の如くなれば如意珠といへり。龍王或は摩竭魚 Makara の腦中より取るといふ。智度論十、五九等に如意珠の說明あり。

卷の第五十

月藏分第十四　諸惡鬼神得敬信品　第八之一

爾の時、護世の四大天王は無量の阿修羅・天龍・夜叉乃至迦吒富單那等の種々の色、種々の形、種々の欲、種々の行、種々の性を見たり。彼等は諸の衆生に於て、悲、慈愍無く、瞋恚麁獷にして後世の畏を觀ぜず、他の分に入らず護持する所無し。數々刹利乃至畜生を惱まし、其の精氣を奪ひ、其の血肉を食ふ。是の諸の鬼神俱に來集し已りし時四天王歡喜踊躍して各自に其の所領の大將に問へり。

毘沙門天王は[一]散脂夜叉大將に問うて言はく、「此の四天下のあらゆる夜叉、若しは卵生、胎生、濕生、化生。或は城邑・聚落・舍宅・塔寺・園林・山谷・河井・泉池・[二]塚間樹下・曠野田中・閑林・空舍・大海寶洲に依る(もの)、若しくは地行・水行・空行の一切餘す(ところ)無く、今悉く世尊の所に來集するや不や」と。散脂大將言はく、「大王よ。此の四天下のあらゆる夜叉乃至大海寶洲、若しは地行・水行・空行の一切餘す(ところ)無く今悉く來集して世尊の所に在り。」と。

提頭賴吒天王は樂欲乾闥婆大將に問ふて言はく、「此の四天下のあらゆる乾闥婆」と、餘は上の說の如し。毘樓勒叉天王は檀帝鳩槃茶大將に問ふて言はく、「此の四天下のあらゆる鳩槃茶」と餘は上の說の如し。

毘樓博叉天王は善現龍王に問ふて言く、「此の四天下のあらゆる諸の龍・摩睺羅伽・伽樓羅・諸の餓鬼等、若しは卵生・胎生・濕生・化生の、若しは城邑・聚落・舍宅乃至大海寶洲に依り、若しは地行・水行・空行の一切餘す無く、今悉く世尊の所に來集するや不や」と。善現龍王言はく、「大王よ。此の四天下のあらゆる諸の龍乃至餓鬼一切餘すなく、今悉く來集して世尊の前にあり」と。

【一】散脂夜叉大將。梵 Saṃjñeya-yakṣa 散脂は修摩のこと。松橋易土集一七五頁には金光明文句第三に云はく此に翻して密と爲し、密に四義あり、謂く名密、行密、智密、陣密なり。蓋し北方天王(毘沙門天王のこと)の大將なりといへり。

【二】塚間。梵 Śmaśāna 十二頭陀功德の一。塚墓の處に生するなりといふ。

一切は分れて分を作して、　閻浮提を護持す。
衆生を惱すこと勿れ、　勇を發するは人中の上なり。
我れ他を惱亂せず、　去來の事を遠離す。
法無二を了知して　諸の衆生想を離る。
正辯大梵王は　諸の天王に告げて言はく
導師は他を惱さず、　佛法に此の事無し。
悉く共に發願して言はく、　鬼をして害をなさざらしめんと。
分布して各依止し、　彼の四天王等は
諸王に是の言を作さく、　我れ今汝の語に依らん。
勅を彼等に誓ひて　悉く作分を得せしむ。
若しも彼れ敎に依らずんば、　速に輪の爲に燒かれん。
時に四天王は輪をして　四方に向はしむ。
乃至一時の頃、　盡く皆佛所に到り、
世尊の足を頂禮して、　合掌して彼に於て住せり。

一切の天龍王　護世等來集す。
諸鬼は惡にして慈しみ無く、　恒に他の肉血を食ふ。
龍鬼富單那、　彼等は此に來らず。
教令を受くる所無く、　他の分に依屬せず。
一切は佛語を受け、　彼をして皆來集せしむ。
願くは彼等に分ちて、　各所囑あらしめよ。
更に惱害して　他の精氣等を奪はしめず。
三種の精氣住し、　人をして法と行を修せしむ。
白法は增長することを得、　黑法は消滅することを得ん。
是を以て惡消息み、　天人增益を得たり。
解脫の門は開くことを得、　三寶種は熾然ならん。
福は諸の衆生に流れ、　速に能く解脫を得ん。
時に我れ嘿然として、　彼等に隨はず。
梵王と諸の帝釋と　四大護世王とは、
俱に一切衆の來りて　會に在る所の者に白さく、
天人師を勸請して、　諸の鬼を攝して此に來る、
彼の城邑諸村落に、　分張し付囑せしむ。
晝夜に常に護持して、　各自らの分に住せしむ。
菩薩等の大衆は、　座從り起ちて合掌す。
大導師を勸請せんとて、　諸の鬼を攝して此に來る。

天王我に答へて言はく　是の如し昔の諸佛は
道樹下に坐し、　夜叉等に分與し、
後の過の及ぶ時に因て、　轉じて諸の雜惡を生ず。
鳩槃・龍・夜叉・　羅刹・鬼・單那は
穢惡にして慈愍なし。　常に他の血肉を食ふ、
彼は諸の國を惱ます。　及び四姓人を惱ます。
非時に風雨と作り、　及び寒熱等の
饑饉病鬪諍を以て、　大地味を滅壞す。
一切を慈しむこと無く、　多の衆生を惱害す。
能く遮護する者無し。　我等に伏せず。
是を以て地の精氣、　衆生の精氣沒す。
正法妙の精氣も　得難き者日に損ず。
時に因緣を過つが故に、　天人等は損減せり。
諸の惡世を增長し、　法朋の得べきこと難し。
法は久しく世に住らず。　正法燈を滅壞せり。
三寶種を斷絕して、　世間は當に盲冥なるべし。
今佛は大勇猛なり。　白法盡くる時に於て、
閻浮提に出現し、　大悲は衆生の藥たり、
言に中りて六通を具し、　諸の法岸を究了せり。
衆生を利益するが故に、　此の大集會を作す。

爾の時、[三]毘樓勒叉天王は亦熾然せる焰赫の鐵輪を以て南方に向ひて遙に之を擲ちて卽ち呪を說いて曰はく、

多地夜他一　闍邏鼻唎師二　闍囉鼻唎師三　悉多婆四　闍囉鼻唎師五　達羅尸六　闍邏闍囉七　鼻唎師八　蘇婆呵九

爾の時、提頭賴吒天王は亦熾然せる焰赫の鐵輪を以て東方に向ひて遙に之を擲ちて卽ち呪を說いて曰はく、

多地夜他一　阿那易戈利反二　阿那阿那耶三　阿那浮毘四　阿迦耆浮毘五　摩系下帝反六　都易七　蘇婆呵八

爾の時、四方の諸天乃至迦吒富單那及び諸の大小・樹林・藥草・神等、遙に鐵輪の熾然せる焰赫を見て、悉く大いに驚愕し愁憂して樂まず、命の存せざるを恐る。十方を觀じ已りて各ょ念言を作さく、「誰か當に能く我等を救ふて歸となり趣となり我等に命を施す(もの)あるべきか」と。卽便ち大悲世尊は如實に諸の衆生を利益する者にして、(今)佉羅帝山牟尼諸仙の所依住處に、大衆悉く集りて圍遶せられて坐したまひしを觀見したり。唯だ彼は當に能く我等の命を救ふべしと。卽ち佛所に往くに疾きこと電光の如く、佛前に到りて住せり。是の如く十分のあらゆる諸の天乃至迦吒富單那等は皆佛所に往いて到り已りて住せり。

爾の時、世尊は重ねて此の義を明にせんと欲して偈を說いて言はく、

時に我が兩足尊は、　釋梵四王に問はく
彼の過去の諸の導師を　見んために聞かんために、
四天下に分布して　天等をして護らしめんために、
我れ今道樹下の分布に　如かざるべけんや。

【三】毘樓勒叉。梵 Virūḍhaka 南方增長天のこと。四十六卷脚註四八項を見よ。

【三】提頭賴吒。梵 Dhṛtarāṣṭra 東方持國天のこと。四十六卷脚註四七項を見よ。

同聲に發願し怖求して應に當に說言すべし。あらゆる非人一切の天龍・鬼神の所攝にして常に精氣を食し、他を惱害し、肉を食ひ血を飲む者は彼等一切の願、護世四王の力勢折伏せられん。あらゆる化生[一六]・濕生[一七]・胎生[一八]・卵生[一九]是の如く其のあらゆる諸の龍・夜叉・羅刹・阿修羅・伽樓羅・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽・鳩槃茶・餓鬼・毗舍遮・富單那・迦吒富單那の一切の等類は四生の所依に隨ひ、彼等は悉く四大天王の力の爲に攝伏するところなり。願くは四大王よ、彼の一切の來らざる所の者を攝して悉く此に至らしめんことを」と。

爾の時、一切の天王乃至迦吒富單那王は此の願を作して言はく、「三十三天を除ける已下のあらゆる四天王天及び諸の龍衆乃至迦吒富單那は四生の所依にて一切餘無し。悉く願くは四大天王に依り彼等四王力の攝伏する所なり。若し諸の天乃至迦吒富單那等有り四天王に於て如し違反ありて一一の王の力教勅を受けずんば、卽ち當に彼の熾然せる鐵輪の爲に其の耳鼻を截るべし。若し耳鼻を截るも猶し故のごとく違する者は復た鐵輪をして彼の手足を截らしむ。若し手足を截るも猶し故のごとく違する者は復其の首を斬る。若し乃至四天王の教勅に違する者有らば之の者は必ず是の如くならしめん」と。

爾の時、毘沙門天王[二〇]は卽ち熾然せる焰赫の鐵輪を以て北方に向ひ、遙に之を擲ちて卽ち呪を說いて曰はく、

多地夜他一　窮窮尼邏窮其風反二　叉婆窮三　迦佉伽伽四　尼迦佉闍羅廁五　蘇婆呵六

爾の時、毘樓博叉天王[二一]は亦熾然せる焰赫の鐵輪を以て西方に向ひ、遙に之を擲ちて、復呪を說いて曰はく、

多地夜他一　尸梨器二　尸羅器三　伽伽那四　尸梨器五　叉尸邏器底六　闍梨七　蘇婆呵八

【一六】化生。梵 Upapādukaḥ 四生の一。諸天、諸地獄、劫初の人の如く、依托する所なくして忽然として生るる類(無而忽有)の如きをいふ。

【一七】濕生。梵 Saṃsvedajāḥ 四生の一。水氣のある所より生物の生ずることをいふ。

【一八】胎生。梵 Jarāyujāḥ 四生の一。是れ人類等の如く胎內に在りて形體を完具して生ずるものをいふ。

【一九】卵生。梵 Aṇḍajāḥ 四生の一。よく鳥類に見るが如く卵殼によりて生ずるものをいふ。

【二〇】毘沙門。梵 Vaiśravaṇa 北方多聞天のこと。脚註四十六卷四六項を見よ。

【二一】毘樓博叉 梵 Virūpākṣa 西方廣目天のこと。四十六卷脚註五〇項を見よ。

福報を獲ん」と。

爾の時、一切の菩薩摩訶薩、一切の聲聞、一切の天・龍・夜叉・羅刹・阿修羅・伽樓羅・緊那羅・乾闥婆・摩睺羅伽・鳩槃茶・餓鬼・毗舍遮・富單那・迦吒富單那乃至一切の諸の來れる大衆歡喜し踊躍して座より起ち合掌して佛に向ひ、一時に同聲に是の如き言を作さく、「我等如來應供正遍知を勸請す。我等を愍むが故に、衆生を利するが故に。大悲心を得。一切の諸の天乃至迦吒富單那は悉く此に集らしむ。彼等は此の閻浮提の中、城邑・村落に於て乃至泉池に依止して住する者に分張し付囑す。彼の天龍乃至迦吒富單那をして分取安置せしむ。若し彼の諸の天乃至迦吒富單那等、各己が分を捨て猶ほ惱害を作し、他を惱すことを遮らずば、應當に治罰して之を拆伏すべし。願くは佛、勇を發して大佛事を作し、一切をして盡く皆分張安置せしめんことを」と。

爾の時、世尊偈を說いて答へて曰はく、

此の佛法中に於て　他を惱す義あること無し。
苦彼岸を度し、　諸處に心平等にして
諸法二有ること無く、　導師は憎愛を捨つ。
一道は虛空の如し。　此は是れ佛の境界にして
若し有僞心あらば、　去來の事を思惟し
彼れ法非法を以て、　能く鬼神を攝して來らん」と。

爾の時、一大梵天有り。名づけて正辯[一五]と曰ふ。第十地聖無上聖に住し、諸菩薩の功德莊嚴を以て會に在りて坐せり。此の正辯天は諸の天王一切龍王、一切の阿修羅王乃至一切の迦吒富單那王に白して是の如き言を作さく、「汝等よ。是の如く、今如來より是の義を聞くことを得たり。佛世尊の如きは、若しは行じ、若しは住し、若しは坐し、若しは臥して衆生を惱さず。汝等よ。今悉く一時に

【一五】正辯大梵天は第十地に住する梵天なりといふ。

皆之を攝せられんことを、若し諸の惡鬼神有りて繋屬する所無く、他の敎を受けず、瞋惡麁獷にして、慈愍有ること無く、後世の怖畏すべき事を觀ぜず、他の命を殘害し、血を飮み肉を食ひ來らざる所の者は唯願くば世尊よ、當に復慈愍もて神通力を以て彼の鬼神及び其の眷屬に命じて皆此に來至せしめたまへ。分布を得て他の分中に入らしめ、數々衆生を惱亂せしめず、此の方便を以て四天下をして大地の餘味をして速に滅せざらしめ、精氣安住して復損減せず。地の精氣損減せざるを以ての故に衆生の精氣損減せず。衆生の精氣損減せざるが故に正法甘露の精氣住して損減せず。正法甘露の精氣損減せざるが故に衆生の心法作善平等增長す。是の因緣を以て三寶種をして斷絕せざるを得しめたまへ。是の如し、是の如し。法眼久しく住して三惡道を閉ぢ、善趣及び涅槃門を開く。是の如く是の如く、白法增長して黑法損減す。是の如く是の如く、天人增長す。無量の天人悉く涅槃の快樂を充足することを得しめたまへ」と。四天王等是の語を說きし時、世尊は觀察し默然として言ひたまはず。

爾の時、娑婆世界主大梵天王・憍尸迦及び諸の釋天・四大天王、皆共に合掌して諸の大衆に告げて、我等は咸く一切の菩薩摩訶薩、一切の聲聞、一切の天龍・夜叉・羅刹・乾闥婆・阿修羅・緊那羅・伽樓羅・摩睺羅伽・餓鬼・毘舍遮・富單那等に白さく、「一切の大衆よ。願くは悉く如來法尊を勸請せんことを。當に世尊をして諸の天衆をして悉く此に集り、一切の龍衆乃至一切の迦吒富單那等亦悉く來集せしむべし。彼等は閻浮提に於てあらゆる國土・城邑・村落・寺舍・園林・山谷・曠野・河井・泉池の是の如き等の處遊止住者に分張し付囑す。彼の一切の諸の善天龍乃至一切の迦吒富單那をして分取し安置せしむ、各自は分に當りて平等に守護して縱捨せしめず。惱を生ぜしめず。各々彼に敎へて同じく共の法を行ぜしめ。常に善く念を作して惡心を折伏して復た各々をして自の分を護持せしめて、而かも縱捨せず。他を惱さず。彼若し各々分に當りて平等に護持を作さば名稱流布して大勇猛を得、大

生乃至邪見を作し、乃至禽獸亦復是の如し。是の如きの衆生は善道及び涅槃道を遠離して惡道に趣向し、彼の命終し已りて惡道の中に生ず。若し彼の衆生は夜叉乃至迦吒富單那の中に生るれば瞋惡無慈にして後世の怖畏すべき事を視ずして、廣く殺生乃至邪見を作す。彼等衆生は閻浮提に於て未だ付囑護持分中に入ることを得ず。是の如く拘那含牟尼佛・迦葉佛は菩提樹下に於て初めて正覺を成じ、此の閻浮提を以て天龍・夜叉・鳩槃茶等に分張付囑せり。如今、世尊は道樹下に於て初めて正覺を成じ、此の閻浮提を以て天龍・夜叉・鳩槃茶等に分張し付囑すること等うして異り有ること無し。是の如く白法は漸く滅じて黑法は增長す。是れより已來無量の那由他百千の惡龍・夜叉乃至迦吒富單那は生長して番[*]息し、常に瞋り濁惡にして慚愧を懷かず。諸の衆生に於て慈心有ること無く、後世の怖畏すべき事を觀ぜず、他の命を殘害し、其の血肉を食し、彼等は分布分中に入らず、定住處も無し。此の惡龍等は人乃至畜生を守護せず、常に人の精氣を奪はんと欲し、他の命根を斷じ、國土・城邑・村落・寺舍等の處を滅壞し、能く諸王をして瞋惱ならしむ。乃至能く畜生等をして惱ましむ。又復能く非時・風雨・嚴寒・毒熱をして一切の華實・苗稼を壞滅せしむ。是の如き惡龍乃至迦吒富單那等は我が教を受けざれば、我れ彼等に於て自在なることを得ず。是の故に今の五濁に於ては極惡にして白法は損滅せり。如來出世して、一切衆生は慈導師に於て敬信尊重と愛樂とを生ずることを得。佛の發言する所は機に稱ふて利益し、功德智慧の聚を具足して大悲を成ずることを得。六波羅蜜に相應して究竟して所願を滿ずることを得。六神通を獲、法に於て自在なれば一切衆生は能く衆生と一切の善道及び涅槃の樂を覆護し攝受す。今は此に於て（此の如き）本より未だ曾て有らず。昔より來た未だ是の如き大集を聞かざるなり。一切の天王及與眷屬は皆來りて集會す。一切の龍王は乃至日王・夜叉王・羅刹王・阿修羅王・乾闥婆王・緊那羅王・迦樓羅王・摩睺羅伽王・鳩槃茶王・餓鬼王・毘舍遮王は悉く眷屬と與に皆此の所に來集す。未だ來らざる所の者は今願くば世尊よ。神通力を以て盡く

＊　元明宮本は蕃に作る。

法朋をして增益を得、　　　魔衆をして損滅ならしめ、
四天下豐樂に　　　諸處人は充滿せん」と。

爾の時、世尊は四天王、釋提桓因、娑婆世界の主大梵等に問ふて言はく、「諸の天王輩よ。若しは見、若しは聞かん。此の賢劫の初め、[一二]拘留孫佛及び[一三]拘那含牟尼佛・[一四]迦葉佛等世に出現せし時、云何んが、此の閻浮提中のあらゆる天龍・夜叉・鳩槃茶等を以て分張し付囑すること、我れ今菩提樹下に初めて正覺を成じ、此の一切の閻浮提中に於て天龍・夜叉・鳩槃茶等に分張し付囑し安置するが如しとなすや不や」と。是の如く問ひ已りたまふに、四大天王・釋提桓因・娑婆世界の主・大梵王等は佛に白して言さく、「大德婆伽婆よ。我等は此の賢劫の初め拘留孫佛は菩提樹下に初めて正覺を成じ、此の閻浮提を以て天龍・夜叉・鳩槃茶等に分張し付囑することを見聞するに、今の世尊が菩提樹下に初めて正覺を成じたまひ、此の閻浮提を以て天龍・夜叉・鳩槃茶等に分張し付囑するが如く、等しうして異りあること無し。彼の拘留孫佛世に出現せし時、衆生の壽命は四萬歲なり。彼の時、大地の精氣、衆生の精氣、法の精氣等は力增上なるを得たり、味增上・威增上・德增上・慈增上・勝增上・智增上、是の如き等の事皆增上なるを得たり。爾の時、地に依る果味叢華藥等、衆生の食する者は皆軟心・慈心・悲心・喜心・捨心・施心・忍心・戒心・精進心・禪定心・智慧心・離殺生心・乃至離邪見心を得。少欲知足にして煩惱の垢少く、多福長壽に、離欲閑居にして正法を愛樂し、流轉を厭患し、三寶種を熾にし、是の因緣を以て惡道を離るゝことを得て善道に趣向せり。爾の時の諸天乃至迦吒富單那、一切の禽獸は悉く是の如き等の事を具足するを得たり。次に後の衆生は名壽損減せり。名壽損減するが故に福德損減せり。福德損減せるが故に地味精氣損減せり。地味精氣損減せるが故に衆生の精氣損減せり。衆生の精氣損減せるが故に衆生の心法作善慚愧損減せり。衆生の心法作善慚愧損減せるが故に正法甘露精氣損減せり。彼の諸の衆生の名壽損減し乃至正法甘露精氣損減せるが故に、廣く殺

【一二】拘留孫佛。梵 Krakucchanda-buddha. 俱留孫佛、鳩樓孫佛、拘留秦。迦羅鳩飡陀。迦羅鳩馱。羯洛迦孫馱。羯羅迦寸地。羯句忖那など多くの音譯を有す。所應斷已斷、滅累、成就美妙などの義譯あり。長阿含大本經、七佛經などに七佛の本生譚出づるも、本佛は過去七佛の第四に當り現在賢劫一千佛の最首なり。即ち賢劫中第九の滅劫人壽六萬歲の出世とす。

【一三】拘那含牟尼佛。梵 Kanakamuni-buddha. 又拘那牟尼、迦諾迦牟尼、迦那伽牟尼などは音譯にして金寂金仙人と譯す。賢劫中の第二佛、過去七佛中の第五佛にして人壽三萬歲の時清淨城に出生す。

【一四】迦葉佛。梵 Kāśyapa-buddha. 迦攝、迦葉波、にして飲光と譯し現世界に於て人壽二萬歲の時出世しに正覺を成じ釋尊より直ぐ前の佛なり。過去七佛の第六に當る。

彼等は衆生を害し、　世間を毀壞し
諸の苗稼を殘害し、　及び正法の燈を滅す。
我等四天王は　此の惡を遮する能はず。
願くは佛當に　國土城邑等に分布して
龍・夜叉・　羅刹・鳩槃茶に付囑して
彼の各をして、　非時惡風雨を遮護せしめ
諸の怖畏惱を息め、　病饑饉なからしめ
華果藥苗稼・　衆の美味を充足して
衆生に所用の諸の供具を　乏少せしめず、
一切の善法は増し、　可樂事を得せしめ、
佛法は久しく住するを得、　衆生は善道に趣き、
三寶種を絶えさらしめ、　願くは佛よ、常に哀愍したまへ。
大地に衆の美を具して　諸い苦辛味を離れ、
華果皆具足して、　種々の味す滿し、
泉池陂河等は　淨水常に充滿し、
諸い苗稼等に於て　精氣を奪ふこと能はず。
彼の所進の飲食は　心軟にして麁穬無く、
慈念に常に相向ひ、　流轉淨にして垢無く、
家の衆の事業を捨て、　阿蘭若に住し、
菩提行を勤修して、　多の衆生をして信ぜしめ、

此の閻浮提の一切の國土・城邑・村落・山谷・寺舍・園林の處に於て、唯願くは世尊よ。天龍・夜叉・羅刹・阿修羅・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮等に分張し付囑して、各護持せしめたまへ。若しは彼の天龍乃至毘舍遮は閻浮提に於て一切の鬪諍・觸惱・非時・風雨・疫病・饑饉・寒熱等の事を作し、各々分に隨ひて之を遮護せしめたまへ。若し閻浮提に於てあらゆる鬪諍・觸惱・疫病・饑饉・非時・風雨・寒熱等の事は皆悉く休息して閻浮提のあらゆる華果・藥草・劫具・財帛・五穀・甘蔗・蒲萄及び酪漿等をして皆成熟を得せしめ、あらゆる苗稼を衰壞ならしめず。閻浮提に於て諸處の人中及び獐鹿鳥獸は其の所欲に隨ひて皆乏少無く、乏しき無きを以ての故に彼の衆生をして諸の善行を修し正法行を修して勸修して住せしめ、彼の諸善をして增長不退ならしめたまへ。是の因緣を以て此の閻浮提は安隱豐盛にして人多く盈滿して甚だ愛樂すべし。世尊よ。正法は則ち久しく住するを得、一切の人天の所願滿足して衆生は悉く善道及び涅槃道に趣向するを得、三惡趣を離れて三寶種をして斷絶せざるを得しめたまへ」と。

爾の時四天王は重ねて此の義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

此の閻浮提に於て　あらゆる諸の國土、
惡天・龍・夜叉・　羅刹・鳩槃茶・
餓鬼・毘舍遮・　迦吒富單那は
瞋惡にして愍養なし。　衆生を慈しむこと無く
彼等に慚愧無し。　諸の刹利、
沙門・婆羅門・　毘舍及び首陀を觸惱し、
師子・象・虎・豹・　非時・惡風雨・
疫病及び饑饉もて、　能く衆生をして苦ならしむ。

は一切悉く無生法忍を得たり。十頻婆羅百千人は柔順忍を得たり、億那由他百千の天人は須陀洹果を得たり、數量を過ぐる諸の衆生等は世正見を得たり、十頻婆羅の百千の天人阿修羅・夜叉・羅刹にて昔、未だ曾て阿耨多羅三藐三菩提心を發さゞる者は、悉く發心と及び不退轉とを得たり。百萬の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の記を授かるを得たり。

[二]月藏分第十四　一切鬼神集會品　第七

爾の時、護世の四大天王は座より起ちて、合掌し佛に向ひ、頭面に禮拜して是の如き言を作さく、「婆伽婆よ。此の閻浮提の種々の國土・城邑・村落・園林・寺舍・山澤等の處・あらゆる諸の惡天龍・夜叉・羅刹・阿修羅・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那の彼に依りて住する者は、瞋惡穢戾にして無慚無愧なり。諸の衆生に於て慈愍有ること無く、常に他の命を害し及び惱亂を作せり。彼の諸天龍乃至迦吒富單那等は閻浮提に於て非時に數々亢旱・惡風・雹雨・闇曀・灰塵・嚴寒・毒熱を起せり。是の災害を以て諸の苗稼五穀・花果・蒲萄・甘蔗・劫具等の物を壞れり。故に、衆生をして多く種々の饑饉・疫病・愛別離苦・衆惱逼切ならしめ、各々迭ひに相怖懼して闘戰し、心に常に恐れ畏る。諸王の刹利は己の眷屬五欲の衆具に於て憙樂を生ぜず、己の國土に於て一切の沙門・婆羅門・毘舍・首陀の男夫婦女・童男・童女を觸惱し、亦復象・馬・牛・羊・師子・虎・豹・豺狼・狗犬を觸惱して一切の禽獸皆觸惱ならしむ。諸の衆生に於て種々の因緣をもて之を逼惱す。晝夜に殺害し燒煮割截せり。五穀財帛所欲の供具、身心の樂事及び諸の善行皆悉く損減せり。是の因緣を以て人天等の善趣をして減少せしむ。又閻浮提の善事をして滅せしむるが故に愛樂すべからず。我等は一切遮護すること能はず。

今は此れ世尊大集の處、一切の大士菩薩摩訶薩諸の聲聞衆皆悉く雲集し、一切の天王及與眷屬と一切の龍王阿修羅王と乃至一切の毘舍遮王とは悉く眷屬と與に皆來りて集會せり。世尊よ。彼等は

【二】明本には月藏分第十四の六字なし。

或は復尸羅・忍・　精進・禪定及び智慧と說くこと有り。
是の如く種々の方便說は　無等の大菩提を示現せり。
天人修羅應に當に知るべし。　世尊は自在魔を降伏せり。
此の經に佛は說忍を最となすと說く、　能く一切安穩の樂を得ん。
忍は能く諸の煩惱を休息して　能く勝妙なる解脫城を示せり。
專心に合掌して咸佛に向ひ、　已作の諸の惡業を懺悔して、
當に最勝なる菩提願を發すべし。　我等は必らず當に導師と作るべし。
自然に如來は記を授け已りて、　魔王は速かに等正覺を成ぜん。
及び餘の百千の衆生等にも　亦無上菩提の記を與ふ。
已に忍辱波羅蜜を滿じて　速かに無等大導師と爲らん。
諸の善法と依止と作り、　諸の聲聞を護るが故に呪を說けり。
若しは魔は魔に依り、諸の神鬼　夜叉・修羅・富單那は
如し佛子を惱すことある者は　當に惡病を以て其の身に著くべし。
一切の大衆は皆踊悅し、　歡喜して咸く是の如き言を作さく
此の業を以ての故に法熾盛なれば　則ち久しく世間に住することを得。
魔王は淨忍心に安住し、　三寶の水泉は枯竭し難し。
常に世間の一切の濁、　饑饉暴風及び亢旱を息むべし。
是の故に人天は諸の樂を得、　本、修習せし所の忍辱行は
檀・尸羅・忍方便を樂ひ、　進・禪・智の大彼岸に到らん」と。

爾の時、世尊は是の如き忍功德を顯說したまへる時、九百八十萬の諸の天人等曾て忍を修せし者

婆二四　涅文支二五　薩兜婆偕棄耶跋柘二六　涅文支二七　鉢囉摩頌他二八　涅文支二九　鉢囉伽拏三〇　鉢囉頌他三一　涅文支三二　多婆跋囉多三三　涅目多鉢囉摩頌他三四　涅文支邏三五　蘇婆呵三六

爾の時、一切の諸の來れる大衆は、中に於てあらゆる惡行惡心の（もの）、諸の衆生に於て慈悲なき者は、皆悉く驚怖せり。魔王波旬は復是の言を作さく、「若し我が此の教令に違する有る者は、當に如上の業病等の惱を得べし」と。復た次に「世尊よ。我れ今佛子聲聞を擁護し、諸の惡行を伏し、現在及び未來世に諸の衰惱を作さしめず。能く世尊の法眼をして久しく住せしめ、三寶種をして世に斷ぜざらしめん」と。爾の時、世尊は復魔を讃じて言はく、「善い哉。善い哉。是の如し波旬よ。汝は長夜に於て大功德を具し、復た諸の惡一切の衰惱なし」と。

爾の時、一切の諸の來れる大衆・諸天、及び人乾闥婆等皆悉く、讃言すらく、「善い哉。善い哉。魔王波旬は能く三寶に於て深く淨信を得たり。是の如く佛法長夜に熾然し、天人は當に無畏城に入ることを得、惡道を閉塞して、常に善趣解脫の門を開き、四天下に於てあらゆる鬪諍・疫病・饑饉・非時・風雨、皆休息を得べし」と。又「四天下をして常に安隱豐樂を得、多衆盈滿を樂しむべし」と。

爾の時、魔王は世尊の足を禮して、右遶三匝して退きて一面に坐せり。爾の時、大衆は重ねて此の義を明さんと欲して偈を以て頌して曰はく、

魔心は決定して歡喜を得、　如來及び眷屬に懺謝す。
眞心踊悅して是の語を作さく　慈悲人の前に諸の惡を捨つ。
猶し虛空の無邊際の如く、　佛智の境界も亦是の如し。
無邊の諸法を覺了し已りて　世に於て說法は最第一たり。
或は櫝を說くことあり勝れて無等なり。　櫝を以てすれば能く妙菩提を得。

印を衰受したまはんことを」と。爾の時、世尊は魔波旬を慈悲にて憐愍したまふが故に、即便ち之を受けたまへり。

爾の時、魔王は心に大喜を生じ、是の如きの言を作さく、「若し佛のあらゆる聲聞弟子・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、若しは復た餘人、閑林に宴坐し、第一義と相應して住する者は、現在・未來、若しは魔・魔の子・魔の婦・魔の女・魔の諸の左右の男夫婦女及び魔に依りて住するあらゆる衆生、若しは天・天の子・天の婦・天女・天の諸の左右の男夫婦女、若しは龍・龍の子・龍の婦・龍の女・龍の諸の左右の男夫婦女・乃至迦吒富單那の若しは子・若しは婦・若しは女・若しは諸の左右の男夫婦女に嬈亂衰害せられ、其の精氣を取り、氣を其の身に嘘き、其の心を散亂し、若しは衣服・飲食・湯藥を奪ひ、若しは他をして奪はしめ、若しは其の味を奪ひ、若しは鼻を以て嗅ぎ、若しは臭氣を放ちて其の住處に滿じ、若しは復彼の閑林に住せる、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・及び餘の衆生の第一義を修むる者を見て、若しは勤作して衣服・飲食及以湯藥を供給供養せずば、我れ當に彼の若しは魔・魔の子乃至迦吒富單那の左右の男女をして頭の病・眼の病・耳の病・腹の病、是の如き等の病の(ために)逼惱[一〇]せらるゝを得、神通を退失して復た飛空遠逝するを得る能はさらしめ、一切の方所皆、悉く闇冥ならしむべし」と。魔王波旬は是の語を作し已りて即ち呪を說いて曰はく。

菴摩差一（叉戒反） 喝囉摩差二 菴摩々囉差三 莫叉鞞闍婆帝四 菴叉蘇兜帝五 阿婆羯筏六 阿婆坻喋七 時那毘八（上支反） 那摩伽娑婆犀九 頞囉棄摩 那底喋一〇 浮闍跋囉一一 坻泥阿佉嘍差摩佉跛彌一二 陀羅阿鞞斯囉佉鞞婆一三 牟達羅佉鞞一四 畢喋剎毘一五 涅寐帝鬱特迦一六 涅寐帝一七 坻闍涅寐帝婆那婆涅寐帝一八 阿迦奢妹囉一九 涅寐帝分示二〇 那囉夜拏二一 佉婆涅文支二二 摩醯首婆囉涅文支二三 阿婆遮

【一〇】宋・元・明の三本皆迷を悉に作れり。今從へり。

爾の時、復、一切の梵王・諸の帝釋王・諸餘の天王・諸の龍王・諸の夜叉王・諸の阿修羅王・諸の伽樓羅王・諸の緊那羅王・諸の乾闥婆王・諸の摩睺羅伽王・諸の羅刹王・諸の鳩槃茶王・諸の餓鬼王・諸の毘舍遮王等あり。座より起ちて魔波旬に向ひ、合掌して禮し、是の如き言を作さく、「大王よ、牟尼世尊を敬んで信ぜよ。敬んで信ぜよ。此の世尊は、諸の過を解脫せるを以て、一切の功德の彼岸に到る、慈悲もて諸の衆生等を憐愍したまひ、一切に樂を施し、諸法を覺了して、諸の流轉を捨て、彼岸に住せしめしたまふ」と。又言はく、「大王よ。若し衆生有りて乃至一念に深く如來を信じ、敬仰尊重して未曾有ありと歎じ、敬信するを以ての故に輪王と作るを得たり。四天下を統べ、七寶を具足す。乃至帝釋・天王・欲自在主・魔王波旬・娑婆世界主・大梵天王と作るを得ん。何に況んや。常に能く具に三寶を信ぜんをや。是の故に大王よ。應に魔見と諸の惡濁心とを捨てゝ淨信を具足し、生死流轉に於て富貴自在に諸の果報を受け、後に正覺を成じ、能く衆生に一切の安樂を施し、世間無上の福田たるを得よ」と。爾の時、魔王は復た諸の臣と佛足を頂禮して專心に牟尼世尊を敬信して慇懃に懺謝せり。

爾の時、世尊は偈を以て告げて曰はく、

惡心姧慧を汝は當に起すべし。　我は常に容忍して天人の證たり。
至心に菩提の道を修行すれば、　汝は當に佛無邊慧と作るべし」と。

爾の時、魔王は極めて淨信を生じ、即ち無價の摩尼寶鬘・無價の咽瓔珞・臂瓔珞・脚瓔珞及以指印を持し、世尊に奉獻し合掌して禮し、是の如き言を作さく、「我れ、昔、佛に於て多く留難を作せり。正法眼目を破壞して三寶種を斷じ、法炬を壞滅せんと欲せしが爲なり。何を以ての故に。善法を遠離し、迷惑心の故に。今三寶に於て深く敬信を得、本昔作す所の一切の業障は今已に懺悔し、已に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、授記を蒙るを得たり。唯だ願くは世尊よ。我等の摩尼寶鬘瓔珞指

忍は已に諸の怨を降し、　亦能く衆の惡を滅す。
忍は能く一切の、　非時暴風雨を息む。
忍は能く大集を作して、　此の諸の來る所の衆(あらしむ)、
我は汝波旬の、　我に於て諸の獷戾あるを恕るす。
但だ自ら已心を謝す、　是れ我が第一の恕なり。
今大衆の前に於て、　證知して汝を勸誡す。
我が所習の　一切の佛の正法を壞する莫れ」と。

爾の時、一切の諸の來れる大衆・天人・阿修羅・乾闥婆等同聲に歎言すらく、「善い哉、善い哉。婆伽婆よ。如來は常に一切衆生に於て慈悲憐愍したまひ、諸の善法を以て饒益安樂ならしめたまふ。魔王波旬は常に世尊に於て憎惡心・怨心・害心を起し、諸の衆生のために惡知識と爲り、諸の善法に於て常に留難を作して不善に住せしむ」と。時に梵天有り、名づけて[九]威德と曰ふ。不動大梵天王に白して偈を說いて曰はく、

空の無邊亦無等なるが如く、　一切衆生の依住する所たり。
佛智は是の如く不思議なり。　一切の法に於て彼岸に到らしむ。
世尊は檀行處を歎ずることあり、　一切衆生を憐愍するが故なり。
檀を以て功德の士と爲すことを得、　速かに能く諸の波羅蜜を滿ず。
或は廣く戒・忍・進・　及以(および)禪那般若等を說くことあり。
世尊は此の一々の中に於て、　具足して能く六度を顯はす。
如來は唯だ禪定の法を以て、　能く菩提の道に趣向すと說く。
是の故に常に樂んで禪に住し、　速かに能く大菩提を證すべし」と。

【九】威德梵天のこと。

忍は天帝釋を得、　輪王をして神通を具せしむ。
忍は人中主を得、　忍力は降伏し難し。
忍は龍夜叉を得、　修羅中にも自在なり。
忍は能く諸の怨を息め、　[七]衆生を害せず。
忍は能く偸盜を離れ、　忍は能く婬欲を捨つ。
忍は能く妄語・兩舌・綺・　惡言を止む。
忍は能く貪瞋を除く。　及び邪見意を離る。
忍力は[八]施戒・　精進及び禪那、
般若波羅蜜を成ず。　能く此の六度を滿ず。
忍は能く諸の惑を除き、　忍は羅漢の樂を得、
亦た辟支佛を得、　及び無生忍に住す。
忍は能く十地を具す。　速に菩提道を得。
忍は諸の衆生に於て、　無上勝たるを得、
忍は能く衆魔を降し、　及び諸の外道を伏す。
忍は能く世間に於て　最無上輪を轉ず。
忍は多の衆生をして、　三惡道を枯竭せしむ。
忍は煩惱障を斷じ、　及び能く法眼を淨む。
忍は衆生に記を授け、　三乘の所求に隨ふ。
忍は能く剛惡なる、　夜叉・羅刹等を伏す。
忍は種々人に、　授記最勝道を與へ、

【七】この一節身三（不殺生・不偸盜・不邪婬）口四（不妄語・不兩舌・不惡口不綺語）意三（不貪欲・不瞋恚・不邪見）の十善を擧ぐ。

【八】六度。施・戒・忍・進・禪定・慧を擧ぐ。

爾の時、魔王は此の偈を說き已りて、卽ち佛所に向ひ、到り已りて禮拜して偈を說いて言はく、

我れ世尊に於て留難を作せり。　願くは上忍を以て容恕せられんことを。
孤獨を救ふ者は我が懺を受く。　大智は慈仁にして瞋を懷かず」と。

爾の時、一切の諸の來れる大衆は咸同一音にして、佛に白して言さく、「婆伽婆よ。唯願くは魔王波旬を容恕したまへ。魔は今深信に誠心懺悔して當に佛法を持し法眼をして熾然ならしむべし。世尊の法をして久しく世に住せしめ、復た人天をして長夜に當に利益安樂を得べからしめん」と。爾の時、世尊偈を以て答へて曰はく、

[六]忍は世間の最たり。　忍は是れ安樂の道なり。
忍は孤獨を離るゝと爲し、　賢聖の欣樂する所なり。
忍は能く衆生に顯はれ、　忍は能く親友と作る、
忍は美しき名譽を增し、　忍は世所に愛せらる、
忍は富自在を得、　忍は能く端正を具し、
忍は能く威力を得、　忍は世間を照す。
忍は諸の欲樂を得、　忍は能く工巧を成ず。
忍力は怨を降伏し、　及以憂惱を除く。
忍は好き容色を得　忍は能く眷屬を具す。
忍は諸の勝報を招ぎ、　忍は能く善道を超ゆ。
忍は人の樂觀を得、　忍は能く妙好を得。
忍は能く諸の苦を息め、　忍は壽命の長きを得。
忍は大梵王を得、　忍は欲自在を得。

【五】婆伽婆。梵 Bhagavat or Bhagavan 佛十號の一。婆伽伴、婆伽梵、婆誐鑁、薄伽梵、薄河梵等多くの音譯をもて出せり。世尊の意なり。佛地論第一卷に六義あり。自在義、熾盛義、端嚴義、名稱義、吉祥義、尊貴義是れなり。

【六】忍。梵 Kṣānti 羼提の譯なり。忍耐なり。堪忍なり。安忍なり。違逆の境によく忍耐して瞋意を起さざるなり。本經にては忍の意義をあらゆる修行、條件、德目より詳說せり。

智者は一向に王位を棄つ、　煩惱・嫉妬慢あるを以てなり。
故に勝善道を失壞して　諸惡不善趣に墜墮せしむ。
我れ富貴の狂因緣を以て　善導師に於て留難多し。
衆生の諸の善業を遮障す、　初めより佛の瞋心を起すを見ず。
世尊は一向に常に忍辱し、　慈悲もて諸の衆生を憐愍したまふ。
一切に等心にして已に慢を除き、　衆生の煩惱の海を枯竭したまふ。
惟だ佛のみ煩惱の薪を燒盡して　能く人天に解脫の道を示したまひ、
億衆生をして有海[三]を度せしめたまふ。　我れ盲無智にして闇冥に入れり。
我れ今諸の大衆に啓請す、　願くは慈愍を以て我等を助けたまへ。
過を如來に謝して堅信に住し、　更に重ねて惱亂の心を起さず。
我れ今一向に佛法を護り、　正法眼を熾然光顯ならしめて、
自らあらゆる貪妬慢を捨つ。　懺悔して諸の罪業を除すこと無からん。
我れ今大菩提心を發し、　及び一切の衆生等に勸めん。
自ら精進を修して六度を滿ぜよ。　彼の衆生を八道[四]に置いて
我れ一々の衆生の爲の故に、　無量の諸の法門を顯說して
隨所に能く法城に入らしめん。　是の如く勸めて一切衆に勸めん。
未だ曾て此の如き會有るを見ず。　悉く能く三寶を淨信せよ。
我は惡心に由りて厭賤せらる。　故に今之と及び衆過を捨てん。
今より永く淨信心に住し、　願くは後に更に厭賤せられざらんことを。
心は聖德と常に相應して、　復た諸の惡業を造作せざらんことを」と。

【三】有海。三有の有に同じく迷界を云ふ。

【四】八道。八聖道のこと。四十六卷脚註八五を見よ。

卷の第四十九

〔一〕月藏分第十四　令魔得信樂品第六

爾の時、一りの帝釋天王有り。名づけて〔二〕火光と曰ふ。大衆と與に集りて會坐に在り。憍尸迦帝釋に白して言さく、「憍尸迦よ。此の魔波旬は、當に閑林に住して第一義と相應せしめんと欲する菩薩摩訶薩等の三昧を得ん爲の故に、勤めて惱亂を作して彼の三昧を退せしめんと欲せんが爲の故なり」と。時に憍尸迦は、彼の火光天帝釋に答へて言はく、「是の魔波旬は、四天下の一切處の中に於て、諸の衆生をして善朋黨より退失せしめ留難せしめんが(ための)故に、勤めて惱亂を作す。又檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を退失せしめ留難せしめんが(ための)故に勤めて惱亂を作す。復、天人種を退失せしめんが(ための)故に、三種の菩提(を退失せしめんがための)故に、三惡道を增長するが(ための)故に、勤めて惱亂を作す。魔の諸の眷屬も亦復是の如く、一切衆生の大苦海を增長せんが爲の故に、勤めて惱亂を作す」と。憍尸迦は是の語を說き已りたるに、時に一切の諸の來れる大衆は皆慈心を以て魔王を瞻視せり。諸の菩薩摩訶薩等有りて、慈しみ愍みて魔王波旬を勸練せり。是の時、火光帝釋は復た一萬の帝釋天衆と悉く共に合掌して、魔波旬に向ひ、是の如き言を作さく、「大王よ、慶喜せよ。慶喜せよ。三寶の中に於て、應に信敬を生ずべし」と。是の時、娑婆世界の主大梵天王は六十億百千の梵衆及び四天王と慈心もて魔王波旬を眼視して亦是の言を作さく、『慶喜せよ。慶喜せよ。汝魔波旬よ。若し三寶に於て信敬を得ずば、未來長夜に大損失有りて利益する所なく、諸の惡道に墮せん」と。是の魔波旬は彼の一切の諸の來れる大衆のために、各々皆慈心をもて眼視せられ、諸の菩薩摩訶薩等、釋天梵天護世四王の勸練時に及びて、座より起ちて合掌して佛に向ひ、頭面に足を禮して偈を說いて言はく、

【一】宋・元・明の三本は月藏分第十四の六字なし。
【二】火光帝釋天王。梵 Jyotiprabha Sakradevānā-Indra.

及び佛道を成ぜんと欲せば、　常に阿蘭若を樂ふ（べし）。
若し常に蘭若を樂ひ、　諸聖の德行を修すれば
速に諸の緣の礙を捨て丶、　佛菩提を成ずるを得ん。

爾の時、世尊は是の第一義を說きたまひし時、彼の衆中に於て五百七十の菩薩摩訶薩、曾て過去に於て、此の法を修する者は、一切皆無生法忍を得たり。復た六十百千の頻婆羅菩薩摩訶薩あり。曾て此の法を修せし彼等は皆悉く十地の行に於て自然智を得たり。復た六十百千那由他の頻婆羅の衆生有り。曾て過去に於て四梵住及び四無礙を修せり。彼等は皆月藏三昧を得　自然に成熟して八地の智を得たり。復た八萬四千の比丘あり。諸漏を盡くすを得。心に解脫を得たり。恆河沙數の如き諸の衆生等にして未だ無上菩提心を發さざる者は、皆阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。(八二)

【八二】正倉院聖語藏寫本には光明皇后願文。「天平勝寶七歲十月十七日正八位下守少內記林進廣野正大安寺沙門林體誦」の三十二字の奧書を有す。五十五卷も同樣なり。

[七四]順忍を信じて第一義を成じ、　無生忍を悟るも亦復然り。
亦此を以て無礙智を成じ、　亦能く速に六度を滿ず。
亦此の法を以て衆生を成じ、　亦此の法を以て速に成佛せん。
聲聞は不善の處、　顚倒も亦應に離るべし。
地界は不分離、　堅重にして碎壞の性なり。
水界は、不分離、　[七五]稀潤にして枯渇の體なり。
火界は燒煮熱、　熱想にして盡滅の性なり。
諸陰は是れ愛性にして、　因緣にて休息を得ん。
[七六]空に　七種有り、　法物をして開現せしむ。
[七七]無相は渴愛を除き、　諸の結を休息す。
[七八]諸集の因緣を捨つるに、　皆無願の力を以てす。
因緣の起を修習するは、　唯是れ緣覺乘なるのみ。
大乘の諸の衆生は、　諸の梵住を修行す。
[七九]安般を念じ三昧、　身心に開示す。
心、能く無事に住して、　[八〇]三種の取を休息す。
言說し得べからず、　是を第一義と名く。
彼の二乘の地は、　此の實際に安住するに非ず。
若し此の三昧を以てせば、　無數の衆を成熟す。
名稱は中に於て滿じ、　是の人速に成佛す。
是の故に若し、　檀等の波羅蜜を滿ぜんと欲し、

【七四】順忍。仁王五忍の第三位。一は伏忍。二は信忍。三は順忍。四地より六地の間に於て、菩提の道に順じて無生の果に趣向する位に名くるなり。四は無生忍。五は寂滅忍なり。
【七五】希は稀軟の稀ならん。三本共に稀に作れり。今之に從へり。
【七六】七種の空。智度論三十六卷に七空あり廣說十八空。略說七空。一は性空。二は自相空。三は諸法空。四は不可得空。五は無法空。六は有法空。七は無法有法空なり。因緣所生の法究竟して實體なきをいふ。
【七七】空、無相、無願の三解脫門なり。
【七八】集。梵 Samudaya. 四諦の中第二集諦の集なり。苦の原因となるもの。
【七九】安般念 Anāpāna-smṛti に同じ。數息觀のこと。
【八〇】三種取。一、欲取、色聲香味等五塵の境に於て貪欲取著すること。二、見取五陰の法に於て我見邊見等を妄計取著すること。三、戒取外道の如き非理の戒禁を取著修行すること。皆佛道修行の妨げとなるもの。

は第一義諦を以て[七一]八地の智を得たり。

爾の時、世尊は重ねて此の義を明さんと欲して偈を說いて言さく。

月藏は尊天人師に問ひたてまつる、　願くば我が爲に上の月の語を說かんことを。
云何んが菩薩、蘭若に住する。　云何んが第一義を修習する。
云何んが彼に於て月の如くなるを得る。　義と相應する無礙智ありて、
能く無數の億衆生を成じ、　亦能く速に六度を滿じ、
煩惱及び諸行を斷除して、　佛は第一義を修習すと說く。
三界の苦、煩惱の火　老病憂悲死の熾然なるを見て、
諸の衆生に於て憐愍を生じ、　速に[七二]愛取攝の因緣を捨つ。
聖種を憙樂して蘭若に住し、　第一義に於て常に相應す。
諸禪を修するものは六根を捨つ。　亦愛取の[七三]陰と界と入とを捨つ。
三界の境界愛を盡除し、　三世及び斷常を遠離す。
禪に於て損減して盡く念ぜざれば、　是の人黑白の塵を離るゝを得ん。
亦明闇なる諸の分別を離れ、　亦常に第一義を修習す。
陰界を捨離して菩提に住し、　諸の世間に於て月の如くなるを得ん。
國土の衆生は驚怖を息め、　猶し滿月の世間を照すが如し。
是の如き衆生は安樂を得、　月性の冷淡なる光明の如し。
諸の國土に於て惡聲息み、　是の如きの功德も亦月の如し。
若し人第一義を修習すれば、　微妙の音聲は世間に滿つ。
儉病鬪諍は悉く休息し、　諸の衆生をして菩提に向はしむ。

【七一】八地。大乘の菩薩十地の第八不動地を意味するが如し。

【七二】愛取は十二因緣の有の元となる愛取を指す。

【七三】陰　五陰
界　十八界
入　十二入

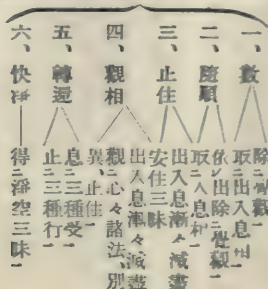
五には彼の國土に於て亦た非時風雨寒熱無し。六に彼の國土に於ては一切衆生、瞋恚急躁麁獷と顚倒の見取と癡の僞に覆はれると、天龍・夜叉・羅刹・阿修羅・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那・師子・白象・虎豹・豺狼・毒蛇・蝮蠍とあること無し。七に彼の國土に於て亦た蚊虻・蠅・蝨・蚤・鼷鼠・野狐・訓狐・兎・梟・及以鷹・鵄并に餘の傷害食苗稼蟲なし。八には彼の國土に於て花果・美味皆悉く甘脆にして苦辛・澁・無味等の物なし。亦饑饉なく果藥豐饒なり。九には彼の國土に於て大地平正にして曠野に高下險難あること無し。地に鹽鹵なく、亦坑澗なし。花果樹林は常に青翠を得、扶踈蕃茂せり。是の故に衆生は衣食の所須に乏しからず。常に饒益安樂を得。十には彼の國土に於て、人に怨讎闘諍毀呰なし。亦言訟なし。皆慈心・利益心・同心・喜心・施心・戒心・忍心・精進心・禪定心・智慧心・求法心・不違反心・勤求三乘心・求解脱心・知足心を生ず。唯だ過去の諸の不善業・怨讐心等を除く。十一には彼の國土に於て當に諸佛の住世を得べし。若し諸佛なくんば緣覺住あり。若し緣覺なくんば聲聞住あり。若し聲聞無くんば[七〇]五通仙住あり。彼の國土に於て常に是の如く應に供を受くべき人有り。十二には彼の國土に於て、惡名稱不可樂聲なし。所謂、謫罰聲・闘訟聲・獄繫縛聲・殺害聲・著鎧甲聲・捕獵聲・偸盜聲・罵詈聲・期尅聲・儉聲・饑饉聲・少衣服聲・欺陵聲・病聲・邪婬聲・妄語聲・兩舌聲・麁獷語聲・綺語聲・貪聲・瞋聲・歸依惡天神聲なり。彼の國土に於て常に是の如き諸惡邪聲なし。常に是の如きの好聲滿足有り。所謂三寶聲・三律儀聲・四梵住聲・四攝聲・六波羅蜜聲・無生法忍聲・登祚聲・不受後有聲・降魔聲・轉法輪聲・降法雨聲なり。彼の國土に於て、此の諸聲を以て常に充滿することを得。第一義禪を修する菩薩摩訶薩は所住の處に隨ひて、彼の國土に於ける諸の衆生等をしては皆無上菩提に趣向することを得せしむ。三界の中に於て聲、世に震ふ。若し菩薩摩訶薩有りて速に六波羅蜜を滿ぜんと欲し、及び無量無數の萬億の衆生を成熟して速に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめんと欲すれば、當に閑林に詣りて四聖種に於て相應して住すべし。是の如く菩薩摩訶薩

【七〇】五通仙。五神通を得たる仙人のこと。天竺の外道にして有漏の禪定を修して五通を得るもの多し。五通とは大眼、天耳、他心、宿命、如意の五者をいふ。

波那の念とする。阿那は入息と言ひ、波那は出息と言ふ。念は謂く心法なり。

善男子よ。彼の入息出息は當に修すべし。己身の猗を修すれば心も亦猗を得るなり。[六八]當に云何が修すべき。一には數なり。二には隨順なり。三には止住なり。四には觀相なり。五には轉還なり。六には快淨なり。數には二種の作あり。一には彼に依りて覺觀を除く。二には出入の息相を取る。隨順にも亦二種　作あり。一には出に依りて覺觀を除く。二には入息の相を取る。止住にも亦二種の作あり。一には出入の息は漸々に滅盡するを示現す。二には安住の三昧なり。觀相に亦二種の作あり。一には出入の息漸々に滅盡するを示現す。二には心々の諸法・種々の別異・處々の止住を觀察す轉還にも亦二種の作あり。一には三種の受を息む。二には三種の行を止む。此を以て淨空三昧を得。何をか空三昧と爲す。諸法の無命を見、諸法の無生を觀じ、彼に於て七種の空に住するを得。何をか七と爲す。所謂陰空・界空・入空・諦空・因緣空・法空・性空なり。是れを空三昧と名く。是の空三昧に住すれば則ち增長因緣の息なり。增長因緣息すれば則ち事の休息なり。事の休息の故に則ち道の休息なり。善男子よ。此れは是れ菩薩摩訶薩の第四禪不可得無言說にして第一義諦三昧を得ん。聲聞辟支佛の境界に非ず。菩薩摩訶薩は禪定處を得。畢竟じて聲聞辟支佛地に墮せず能く六波羅蜜を滿ず。七日の夜に於て無量億那由他百千の衆生・天龍夜叉乃至迦吒富單那等を成熟す。何に況んや。能く多の日夜なるをや。其のあらゆる國土の城邑に隨ひて、是の如き等の第一義禪に住するなり。菩薩摩訶薩は彼の國土に於て十二種の功德利益あり。何等をか十二なる。一には彼の世界に於て國土は瞋惱せず。婆羅門は瞋惱せず。沙門は瞋惱せず。毘舍は瞋惱せず。首陀は瞋惱せず。男夫婦女童男童女及び畜生の類、禽獸等は瞋惱せず。二には彼の國土に於て他方の怨敵來りて國を侵さず。兵仗起らず。三には彼の國土に於て賊寇なく、鬪諍なく　矯誑なし。四には彼の國土に於て惡人入らず。諸の疫病なし。唯[六九]四大相違の病者を除く。終りに橫死せず、自らの報の盡くるを除く。

【六八】阿那波那念の修行法を述ぶ。

- 一、數 ― 除二覺觀一 / 取二出入息相一
- 二、隨順 ― 依レ出除二覺觀一 / 取二入息相一
- 三、止住 ― 出入息漸々滅盡 / 安住三昧
- 四、觀相 ― 出入息漸々滅盡 / 觀二心々諸法、別異、止住一
- 五、轉還 ― 息二三種受一 / 止二三種行一
- 六、快淨 ― 得二淨空三昧一

【六九】四大相違。病は地水火風の四大不調より起るをいふ。

ん」と。佛の言はく、「善男子よ。諸の聲聞乘三昧とは不善三昧と名く。三界を身とし、顚倒を攀緣とし、不淨を想とし、厭離を相とし、不憙樂を性とす。

地界三昧とは不分離を身とし、取を攀緣とし、重を想とし、堅を相とし、破壞を性とす。

水界三昧とは不分離を身とし、滿を攀緣とし、潤を想とし、稀軟を相とし、枯竭を性とす。

火界三昧とは不分離を身とし、成熟を攀緣とし、熱の想とし、燒を相とし、盡滅を性とす。風界三昧とは不分離を身とし、吹擧を攀緣とし、無礙を想とし、急疾を相とし、輕擧を性とす。

分別陰三昧とは渴愛を身とし、緣起を攀緣とし、棄捨を想とし、苦を相とし、無我を性とす。

空三昧とは通利法を身とし、諸法を攀緣とし、無物を想とし、開視を相とし、畢竟空を性とす。

無相三昧とは捨三結を身とし、涅槃を攀緣とし、空を想とし、休息を相とし、究盡作を性とす。

是の如く無願心々法三昧とは五識を身とし、因緣を攀緣とし、常修行を想とし、速疾を相とす。無所依を性とす。此等は是れ、聲聞乘の三昧なり。

是の緣起を修する三昧を緣覺乘三昧と名く。大乘に安住せり。善男子よ。慈三昧とは憶念を身とし、衆生を攀緣とし、無礙を想とし、無瞋を相とし、不濁を性とす。

悲三昧とは憶念を身とし、衆生を攀緣とし、不害を想とし、救拔を相とし、愍惻を性とす。

喜三昧とは憶念を身とし、衆生を攀緣とし、樂著を想とし、愛樂を相とし、常慶喜を性とす。

捨三昧とは憶念を身とし、衆生を攀緣とし、無瞋喜を想とし、常捨を相とし、無功用を性とす。

念佛三昧とは法性を身とし、形像を攀緣とし、色處を想とし、愛敬を相とし、歡喜を性とす。

〔六七〕念阿那波那三昧とは身を以て身となし、念を攀緣とし、不住を想とし、冷熱を相とし、生滅を性とす。

善男子よ。是の如く第一義諦・四禪滅空三昧・三摩跋提は阿那波那の念に依る。何をか謂ふて阿那

【六七】念阿那波那三昧。梵 Anāpānas-mādhi 安般、安那般那、阿那阿波那などの音譯あり。譯數息觀出る息・入る息を數へて精神を鎭靜にする觀法の名なり。

の義なり。佛の功德に住するの義なり。[六四]聲聞・[六五]辟子・佛地を超過するの義なり。能く三業を淨むるの義なり。諸の三昧を以て心を莊嚴するの義なり。三惡趣を淨くし、諸の衆生をして邪道を捨てしむるの義なり。忍を信解するの義なり。衆生の無生忍を成熟するの義なり。憎愛を捨離するの義なり。諸法に於て決斷するの義なり。一切法を分別するの義なり。一切智を勤求するの義なり。十二因緣を覺了するの義なり。分別上首の義なり。三不護の義なり。四無畏の義なり。十力の義なり。大慈大悲もて衆生を成熟するの義なり。方便もて如來の十力第一義諦を勤求するの義なり。十地の義なり。登祥地の義なり。降魔の義なり。一切種智を得るの義なり。轉法輪の義なり。法雨を降らすの義なり。一切衆生を度するの義なり。八聖道を建立するの義なり。第一義諦に是の如き無量の大義あり。善男子よ。第一義諦もて諸の結垢を遏ひ、一切の惡を滅し、能く衆生煩惱の淤泥を度し、愛河を枯竭し、一切流轉の曠野を超過し、諸の見網を破し、無明を照除し、諸怨が降伏し、憂慼を斷除し、諸根適悅して正道に入らしむ。諸法を覺悟して善根を增長し、諸の凡愚を捨て賢聖の位に入り、菩提道に到る。善男子よ。是の如き第一義諦の一切の功德は皆悉く圓滿し、無上の最勝なる智慧を成熟して能く衆生をして一切の生死の彼岸に到らしむ」と。

爾の時、[六六]月藏菩薩摩訶薩は佛に白して言さく、「世尊よ、所謂三昧。三昧とは是れ何の身なる。是れ何の攀緣なる。是れ何の想なる。是れ何の相なる。是れ何の性なる。第一義諦は是れ何の身なる。是れ何の攀緣なる。是れ何の想なる。是れ何の相なる。是れ何の性なる」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。善男子よ。汝三昧に於て久しく已に修習して善根圓滿なり。汝は今諸の衆生の爲の故に如來に是の如き等の義を問へり。善男子よ。汝、今諦に聽け善く之を思念せよ。吾れ當に汝の爲に分別解說すべし」と。月藏菩薩摩訶薩は佛に白して言さく、「世尊よ。唯然り敎を受けたてまつら

【六四】聲聞。梵 Śrāvaka 舍羅婆迦なり。佛弟子中佛の聲敎を聞いて四諦の理をさとり見思の二惑を斷じて涅槃の聖者の位に入るをいふ。

【六五】辟子佛地。梵 Pratyeka-buddha 鉢羅翳迦佛陀に音譯す。緣覺或は獨覺と譯す。初發心時には佛に値ひ世間法を思惟して得道するなり。然し後無佛の世に出でゝ性寂靜を好み、師友なくして獨悟、獨覺するが故に獨覺佛の名あり。又飛華落葉を觀、十二因緣を觀じて覺るが故に又緣覺佛の名あり。

【六六】月藏菩薩は釋尊に三昧並に第一義諦に就ての五義を質問す。

五義
- 身＝表面的のすがた。
- 攀緣＝よりかゝり。
- 想＝考へ出す。
- 相＝すがた。
- 性＝本體。

波羅蜜を以て種々善根花に開敷するを得、日輪の焰光の如く、禪波羅蜜を以て能く一切無明の黑闇を除く、十五日の月の一切圓滿なるが如く、般若波羅蜜を以てすれば功德莊嚴に所願圓滿なり。如意寶の如く、能く貧窮を除き、方便力を以て種々善根して窮盡すべからず。智財減ずること無く法願充滿すること猶し大雲能く大雨を降すが如し。是の如く菩薩摩訶薩は閑林に住して第一義を修め、乃ち能く諸の法寶の雨を降り注ぐ、菩薩摩訶薩の如く、第一義を修め、善く能く菩薩行に安住して一切の魔事を終に動かすこと能はず、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得、亦た圓滿なる種々の功德寶花莊嚴を得、一切諸法の智明に到ることを得、幢上摩尼寶の如く、能く一切義を成じ、毘沙門王の[六一]賢瓶の如く、能く一切の智炬に到り、月愛摩尼寶珠を得て手中に在りて一切の所知皆圓滿なるを得るが如し。猶し大海の如く、亦冬時の如く、慚愧の衣を著け、勇健人の如く、巧に種々の堅牢器仗を用ひ、善化の伏藏の如く、一切の衆生を養育す。[六二]阿那婆達多池の如く、緊那羅等は均しく平かに楽を受くること猶し蓮花の如し。諸の煩惱泥は染汚すること能はず、寶花聚の如く、百千の法門は種々に圍繞せらるゝこと、猶し寶鬘の如し。一切の聲聞辟子佛等の瞻仰する所、猶し泉池の如し。淨水盈滿して衆生の諸の煩惱垢を洗除し、斯陀大河の如く、衆生の一切煩惱の諸の惡見垢を盪除し、大河の中の船の如く、能く衆生の諸の煩惱河を度し、枳薩利師子の如く一切の衆邪異道を降伏し、帝釋金剛杵の如く、一切煩惱の阿修羅を降伏すること猶し傘蓋の如し。衆生の諸の煩惱の雨を遮障すること、大梵王の如く諸の衆生をして流轉生死曠野を度して涅槃の道を示さしむ。是を菩薩摩訶薩閑林に住し、第一義を修する時、是の如き無量の功德を成熟すると名く。

是の如く善男子よ。[六三]第一義諦とは是れ何の句義なる。第一義諦とは是れ五根の句義なり。第一義諦とは是れ三昧根の義なり。大慈大悲の義なり。深く一切智を信ずる義なり。四攝法を以て一切衆生を攝受する義なり。正法を護持するの義なり。一切佛法を勤求するの義なり。諸の難を遠離する

【六一】賢瓶。所謂かめのこと。賢は善の義なれば善瓶、德瓶、吉祥瓶などゝ名け、若し人毘沙門神より賢瓶を授かるとすれば欲する所の物、意の如く出づといふ。

【六二】阿那婆達多池。梵 Anavatapta 又、阿那波達多阿那跋達多に作る。池名なり。阿耨達、阿那陀答多などゝ音譯す。無熱と譯す。此の池は贍部洲の中央、香山南、大雪山の北に在り。周り八百里、金銀瑠璃、頗胝にて其の岸を飾れり公六即ち諸經に散說せらるゝ有名なる池。

【六三】第一義諦。梵 Paramārtha-satya 眞諦勝義諦、聖諦などゝいひて世諦、俗諦に對する言葉。蓋し佛教々理の眞髓を指し、卽ち涅槃、眞如、中道、實相、法界、眞空など悉く之に相當する義なり。本經はこの當處に在りては甚に多くの第一義諦を種々の方面より說明せり。

繞せられ微妙にして愛すべし。是の如く第一義諦を修する菩薩摩訶薩は彼の信心なる諸の天龍等乃至迦吒富單那の爲に善行圍繞せられ微妙にして愛すべし。譬へば十五日の月の如く、一切無明の黑闇を照除し、是の如く第一義諦を修する菩薩摩訶薩は天龍乃至迦吒富單那等の十不善暗を照除し、譬へば月の體性の如く、涼冷にして能く熱惱せる諸の衆生等の身心をして樂を得せしむ。是の如く第一義を修する菩薩摩訶薩は彼の天龍乃至迦吒富單那等をして瞋怒して惱す所の者たらしめ、慈心に住する身をして安樂を得せしむ。譬へば月の如く失道者をして道を見せしむ。是の如く第一義諦を修する菩薩摩訶薩は諸の失道せる天龍・夜叉・乃至迦吒富單那等をして、天人所に於て皆慈愍を生じ、乃至能く三乘道を見せしむ。譬へば十五日の月の如く、一切圓滿に月愛摩尼寶珠を照し、是の如く寶珠は月光に照さるゝを以ての故に能く多水を出して小河及び諸の大河を滿ず、又大海を滿ず。是の如く第一義諦を修する菩薩摩訶薩は是の如き等の威儀の力を以ての故に、乃至迦吒富單那は深敬信を得、刹利を怖れず、乃至童男・童女を怖れず、城邑を怖れず、乃至樹林花果を怖れず、此の因緣を以て人非人等乃至迦吒富單那・獐鹿・鳥獸は各所須に於て具足充滿せり。彼の所須充滿を得るの以ての故に相惱害せざれば、身心安樂なり。十善業道に於て能く修行するに堪へたり。乃至天人の中に於て果報を受くるを得、快樂を具足し、此の因緣を以て三乘の中に於て不退轉を得。是の如き諸の天人等は多く饒益を得。菩薩摩訶薩の如く閑林に住し、第一義を修し能く諸の天人等をして安隱樂を得せしむ。是等を以ての故に速に能く六波羅蜜を滿足す。是の故に菩薩摩訶薩は當に閑林に住して第一義を修し、一切の善根三昧陀羅尼忍辱に於て堅固に成熟を得住すべし。

須彌山王の如く、善く安住なるを得、是の如く第一義諦を修する菩薩摩訶薩は一切の善根檀波羅蜜に於て善く安住なるを得、師子獸王の如く、尸羅波羅蜜を以て諸の煩惱を降し、那羅延の如く、羼提波羅蜜を以て、諸の三界一切の惡見を伏し、波利質多羅樹の花始めて開敷するが如く、毘梨耶

如菩薩摩訶薩、閑林に住して第一義を修する時、彼の諸の天・龍乃至迦吒富單那は彼の菩薩摩訶薩の邊に向ひて業障・衆生障・法障・煩惱障を懺悔し乃至是の諸の衆生は成熟を得る故に能く六波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て十四日の月の如し。

如菩薩摩訶薩、閑林に住し、第一義を修する時、彼の諸の天・龍・夜叉・羅刹・鳩槃荼・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那は𤢖惡瞋恚にして諸の衆生に於て慈愍有ること無く、深く敬信せず、後世の畏れを觀ぜず、乃至彼の第一義諦を修する菩薩摩訶薩の所に於て、深く敬信を得、尊重敬仰にして希有心を生じ、一切皆悉く惡業を棄捨し、及び舍宅を捨て晝夜に彼の第一義諦を修する菩薩摩訶薩の所に詣り、修行すること上の如く、殺生を休息し、諸の衆生に於て、悲心・利益心・憐愍心を生じて而も住し、偸盜・邪婬・妄語を休息すれば、此れは是れ第一義を修する菩薩摩訶薩は能く檀那波羅蜜を滿ず。如彼の惡口を休息する、此れは是れ菩薩摩訶薩能く尸羅波羅蜜を滿ず。如彼の兩舌を休息するは、此れは是れ菩薩摩訶薩能く羼提波羅蜜を滿ず。如彼の綺語を休息するは、此れは是れ菩薩摩訶薩は能く毘梨耶波羅蜜を滿ず。如彼の貪瞋を休息するは、此れは是れ菩薩摩訶薩能く禪波羅蜜を滿ず。如彼の邪見を休息するは、正見を得、數々是の如き願を作して當に我等をして無上智を得せしむべし。此れは是れ菩薩摩訶薩能く般若波羅蜜を滿ず。如彼の天龍乃至迦吒富單那の、彼の第一義を修する菩薩摩訶薩の所に於て、深く敬信を得、亦復た勤めて刹利沙門・婆羅門・毘舍・首陀を怖畏せず。亦た男夫・婦女・童男・童女を怖畏せず。亦た象・馬・師子・虎・豹・犲狼・獐鹿・鳥獸を怖畏せず。亦た國土・城邑・聚落・舍宅を怖畏せず。亦た地・水・火・風を怖畏せず。亦た藥草林・樹花果等の物を怖畏せず、此れは是れ菩薩摩訶薩第一義を修する時、衆生を成熟し、乃至能く六波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て十五日の月の如く一切圓滿なり。是の如く菩薩摩訶薩は閑林に住して第一義諦を修し、速に能く六波羅蜜を滿足す。譬へば十五日の月の如く、衆星に圍

一切の方便を以てしても、少分すら彼こに於て第一義諦を修むる菩薩摩訶薩を惱亂すること能はず。彼等は便ち第一義諦を修する菩薩摩訶薩の所に於て、心に敬信を得、尊重し敬仰して心に希有を生じ、菩薩に於て敬信を生ずるを以ての故に、身心苦盡して樂を得て充滿す、彼等は復數々菩薩の所に詣りて接足禮敬して其の本處に還り、遊行止住して復た衆生に於て更に相敬重して常に慈心・不怖畏心・不胆佞心・不惱害心・無怨讐心・不鬪諍心・作平等心・休息殺生心、乃至諸の邪見を休息する心を生ず。彼等は數々菩薩に向ひ、極めて敬重を作し、頭面に禮足し發願して一切の罪業を懺悔して是の言を作さく、「我等は今より乃至久遠に生死流轉し、幾時の中に隨ひて亦常に仁者を恭敬し供養し、以て左右の親友・知識・兄弟眷屬と爲り、及び[五九]檀越と作り、乃至菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ずることを得ん。是の時、仁者は三乘の中に於て我が與に授記せり。仁者の力を以ての故に、我等は當に生死流轉に於て解脫することを得て、無畏城に入るべし。此れは是れ菩薩摩訶薩は第一義を修する時、衆生を成熟して、能く六波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て十二日の月の如し。

如し菩薩摩訶薩、閑林に住して第一義を修する時、あゆらる空行せる天・龍・夜叉・羅刹・阿修羅・鳩槃荼・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那の諸の衆生に於て獷惡瞋恚慈愍有ること無く、後世の畏れを觀ぜず、是の如き等の諸の惡形色非威儀の事を作す。乃至彼の閑林に住して第一義諦を修むる菩薩摩訶薩の一毛だに惱すこと能はず。何に況んや、能く諸餘の惱亂を作さんをや。彼等天龍は便ち菩薩摩訶薩の所に於て心に敬信を得、乃至[六〇]十不善道を休息す。彼等は數々菩薩の所に向ひて發願して一切の罪業を懺悔し、乃至仁者は三乘の中に於て我が與に授記せり。我等は當に生死流轉に於て解脫を得て無畏城に入るべし。此れは是れ菩薩摩訶薩は第一義を修する時、衆生を成熟して能く六波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て十三日の月の如し。

【五九】檀越。梵 Dānapati 施主をいふ。南海寄歸傳第一に梵に陀那鉢底と云ひ、譯して施主となす。陀那は是れは、是れ施、鉢底は是れ主なり。中略。意道く檀捨を行ずるに由り自ら貧窮を越渡すべしと、いへり。

【六〇】十不善業道。梵 Daśākuśalāni-karma-pathāḥ 一、身罪三業。二、語罪三業。三、意罪三業。所謂殺生・偸盜・邪婬・(一類)妄語・麤惡語・兩舌・綺語(二類)貪欲・瞋恚・愚癡(三類)の惡業を指すなり。

如[もし]菩薩摩訶薩、一切の三界休息と相應す。不分別、極不分別なり。此れは是れ菩薩摩訶薩は衆生を成熟して能く毘梨耶波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩、諸の衆生に於て九日の月の如し。

如[もし]菩薩摩訶薩、衆生を悲愍する爲の故に第一義を修す。此れは是れ菩薩摩訶薩は衆生を成熟して能く禪波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩諸の衆生に於て十日の月の如し。

如[もし]菩薩摩訶薩、衆生の爲の故に、諸の三界陰界諸入の三受等の事に於て不分別極不分別なり。如實際に住して第一義を修す。此れは是れ菩薩摩訶薩は衆生を成熟して能く般若波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て十一日の月の如し。

是の如く善男子よ。此れは是れ菩薩摩訶薩は閑林に住して、第一義を修むる時、月の如くなるを得、四無礙を以て衆生を成熟して能く六波羅蜜を滿ずるなり。

復た次に善男子よ。云何んが菩薩摩訶薩は第一義を修する時、衆生を成熟して復た月の如くなるを得ん。善男子よ、如[もし]菩薩摩訶薩、閑林に住し、若しは行、若しは住、若しは坐、若しは臥して一切三界の陰界入等を捨離分別して不分別に住して第一義を修むる時、諸の地行・天・龍・夜叉・羅刹・阿修羅・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那[五七]・迦吒富單那[五八]の饑渴寒熱更に相怖畏し、身心に逼迫し、常に瞋惡を懷き、諸の衆生に於て慈愍無く、後世の畏れを觀ぜず。彼の諸の天・龍乃至迦吒富單那は、菩薩の所に往いて見已りて大いに笑ひて、菩薩の精氣を奪はんと欲す。又惡氣を以て之を噓[ふ]かんと欲し及び打害して其の心を散亂せんと欲す。彼の諸の鬼神は此の惡を起すと雖も、去ること一由旬にして彼の菩薩の所に往到すること能はず。何ぞ能く氣を以て之を噓き其の精氣を奪ひ、及以び打害して其の心を散亂せんや。彼の諸の鬼神の心は極めて怪を生ず。又第一最惡の形色を示し、菩薩をして之を畏るゝの心を裂かしめんと欲す。然れども此の菩薩は、若しは行、若しは住、乃至其の一毛だに動かす能はず。何に況んや能く諸の餘の惱亂を作すをや。彼の諸の天・龍・乃至迦吒富單那は

【五七】富單那。梵 Pūtana 布怛那、富多那、布單那、富陀那などの音譯あり。臭餓鬼と譯し、餓鬼中の最勝なるもの、慧琳音義第十二に依れば布單那此に臭穢といふ。身形臭穢なりと雖も是れ餓鬼中福の最勝なるものなりといへり。

【五八】迦吒富單那。梵 Kaṭabhū-tana, Kaṭapūtana 玄應音義第二十一に、羯吒布怛那舊には竭吒富單那此には極臭鬼と云ひ、或は奇臭鬼といふ。又慧琳音義第十八には羯吒布但那鬼唐には叫譟作災怪鬼といへり。此等の二者は餓鬼の同類。

ず」と。是の觀を作す時、菩薩は、彼の諸の衆生の所に於て大悲の心を起したらんに此れは是れ菩薩摩訶薩月の如くなるを得るなり。衆生の無明の黒暗を照し除くこと、初日の月の如し。

如し菩薩摩訶薩、衆生の諸の苦惱を除かんが爲の故に、諸の愛取所攝の因縁を捨てたり。此れは是れ菩薩摩訶薩月の如くなるを得、衆生の無明の黒闇を照し除き、[五二]義無礙と相應して衆生を成熟し、六波羅蜜を滿ずる爲の故に二日の月の如し。

如し菩薩摩訶薩、閑林に出向して獨りにして侶無く、犀牛の角の如し。四聖種に於て喜悅して住す此れは是れ菩薩摩訶薩月の如くなるを得、衆生の無明の黒闇を照し除きて[五三]法無礙と相應し、衆生を成熟して六波羅蜜を滿ずる爲の故に三日の月の如し。

如し菩薩摩訶薩、第一義諦を修す。此れは是れ菩薩摩訶薩月の如くなるを得、衆生の無明の黒闇を照し除き、[五四]詞無礙と相應し、衆生を成熟し、六波羅蜜を滿ぜんが爲の故に四日の月の如し。

如し菩薩摩訶薩、一界の境界及び一切の樂に於て、皆悉く棄捨して第一義諦を修す。此れは是れ菩薩摩訶薩は月の如くなるを得、衆生の一切の渇愛を照し除きて[五五]樂說無礙と相應し、衆生を成熟し、六波羅蜜を滿ぜんが爲の故に五日の月の如し。

如し菩薩摩訶薩、現在人中の樂を棄捨し、亦[五六]五欲の樂を悕望せずして第一義を修す。此れは是れ菩薩摩訶薩月の如くなるを得、衆生の一切の瞋闇を照し除きて衆生を成熟し、能く檀波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て六日の月の如し。

如し菩薩摩訶薩、諸の境界に於て奢摩他定を得。此れは是れ菩薩摩訶薩月の如くなるを得。衆生を成熟して能く尸羅波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て七日の月の如し。

如し菩薩摩訶薩、三界の境界休息と相應す。瞋を分別せず、慈を分別せず。此れは是れ菩薩摩訶薩衆生を成熟して能く羼提波羅蜜を滿ず。是の故に菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て八日の月の如し。

【五二】義無礙。梵 Arthapratisaṃvit 四無礙の一。諸法の義理を知り、極めて通達して何等の滯りなきをいふ。

【五三】法無礙。梵 Dharmapratisaṃvit 敎法に於て滯ること無きをいふ。四無礙の一。

【五四】詞無礙。梵 Niruktipratisaṃvit 釋尊の敎法の辭詞に於て通達自在なるをいふ。四無礙の一。辭無礙ともいふ。

【五五】樂說無礙。梵 Pratibhānasaṃvit. 又辨說無礙ともいふ。前の三無礙の智を以て衆生の爲に說くこと樂說自在なればかくいふ。又正理に契ふ無滯の言說をなすをいふことあり。四無礙の一。

【五六】五欲。色 Rūpa 聲 Śabda 香 gandha 味 Rasa 觸 Sparśa の五境。是れ人の欲心を起すものなれ欲といひ、又是れ眞理を汚すものなれば塵ともいふ。

る我を念ぜず。乃至不苦不樂も亦是の如し。耳鼻舌身も亦是の如し。意を念ぜず。我が意を念ぜず。意なる我を念ぜず。乃至意觸の因縁にて受を生ず。若しは苦、若しは樂、不苦不樂なり。樂を念ぜず、我か樂を念ぜず、樂なる我を念ぜず。乃至不苦不樂を念ぜざることも亦是の如し。四大を念ぜず我が四大を念ぜず、四大なる我を念ぜず。乃至三受を念ぜず、六想を念ぜず、三行を念ぜず、六識を念ぜず、色聲香味觸を念ぜざるも亦是の如し。[四六]虛空處を念ぜず、[四七]識處を念ぜず、[四九]無所有處を念ぜず。[四九]非想非々想處を念ぜず。見を念ぜず、聞を念ぜず、覺を念ぜず、知を念ぜず、代謝を念ぜず、覺觀を念ぜず、心を念ぜず、此の世間を念ぜず、彼の世間を念ぜず、過去を念ぜず未來を念ぜず、現在を念ぜず、斷を念ぜず、常を念ぜず、三昧を念ぜず、禪を念ぜず、捨を念ぜず、盡を念ぜず、用を念ぜず、生を念ぜず、滅を念ぜず。我を念ぜず、數を念ぜず、黑を念ぜず白を念ぜず。勝を念ぜず劣を念ぜず。行を念ぜず住を念ぜず、坐を念ぜず臥を念ぜず。闇を念ぜず明を念ぜず。作を念ぜず三界を念ぜず。刹那を念ぜざるも亦是の如し。

呵呵呵呵呵一　嗟囉咩二　達囉膩移三　沓婆差四　沓婆揭勒叉移五　陀婆木叉移六　蘇婆賀七

善男子よ。是れを菩薩摩訶薩は閑林に住して第一義諦を修すると名く」と。佛は是の如き阿蘭若の第一義諦を說きたまふ時、八十億の百千[五〇]頻婆羅(びんばら)の諸天及び人有り。第一義諦に於て曾て修習せし者は皆無生法忍を得たり。復た恒河沙等の天人有りて[五一]柔順忍(にうじゅん)を得たり。復た虛空量に過ぐる諸の衆生等有りて不忘菩提心三昧を得たり。復た八萬四千の比丘ありて無漏心解脫を得たり。

爾の時、世尊は復た是の言を作したまはく、「善男子よ。若し菩薩摩訶薩ありて上の所說の如く諸の愛取所攝の因縁を棄て、乃至我が所說の如く第一義諦を修する時、云何んが菩薩摩訶薩月の如くなるを得。四無礙を以て衆生を成熟して能く六波羅蜜を滿ぜんや。善男子よ。如(もし)菩薩摩訶薩、諸の衆生を觀ずるに、皆三毒の猛火のために熾然にして、生老病死憂悲苦惱皆亦熾然にして解脫を得

【四六】虛空處。梵 Ākāśānantyāyatanam. 虛空處のこと。無色界地名の第一。無色界は總じて形色なければ空處といふ。

【四七】識處。梵 Vijñānānantyāyatanam. 識無邊處定のこと。無色界地名の第二。心識無邊の定を修して生ずる天處なり。

【四八】無所有處。梵 Ākiñcanyāyatanam 無色界地名の第三。心識無所有の定を修して生ずる天處なり。

【四九】非想非々想處。梵 Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatanam 又非有想非無想處といひ、無色界地名の第四。此の天處に生ずる人は定心深妙にして想念最も味劣なり。麁想なければ非想といひ、細想なきに非れば非々想といふ。

【五〇】頻婆羅。梵 Bimbara 數目の名、十兆に當るといふ、別項前卷脚註三三項を見よ。

【五二】柔順忍。心柔く智隨順にして、實相の理に相反せざるをいふ。

を成熟し、能く六波羅蜜を滿ぜんや」と。佛の言はく、「善い哉。善い哉。善男子よ、快く是の義を問へり。汝は過去無量の佛所に於て諸の善根を[三九]植ゑ、諸の功德圓滿の行を修め、已に曾て此の甚深の義を問へり。汝は今直ちに、彼の未だ曾て修習せざるが爲に、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲す。諸の善男子善女人の爲の故に是の如き義を問はんと欲す。善男子よ。諦に聽き、諦に聽け。善く之を思念せよ。吾れ當に汝の爲に分別し解說すべし。善男子よ。若し淸信なる善男子善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提を求むる者は當に是の觀を作すべし。三界のあらゆる一切の衆生は、皆[四〇]貪欲・[四一]瞋恚・[四二]愚癡の爲に、三毒の猛火に焚燒されて熾然たり。生・老・病・死・憂悲・苦惱、皆亦熾然にして解脫を得ず」と。是の觀を作す時、菩薩は彼の諸の衆生の所に於て、大悲心を起して復た是の念を作さく、「一切の衆生は苦を厭ひ樂を求めざる莫し、彼等は是の如く、苦の爲に轉ぜらる。[四三]五節輪の如し」と。復た是の念を作さく、「何なる因緣の故に、此の諸の衆生は衆苦增長、休息有ること無きや」と。是の念を作す時、諸の衆生は皆、[四四]愛取の因緣の所攝たるが故に、是の苦を受け增長して息まざるを知る。是の故に我は當に愛取所攝の因緣を棄捨し、出でては閑林に向ひ、獨り侶無く第一義諦に於て思惟して住すべし。是の如く先づ自らの苦を除く。然る後乃ち、能く衆生の苦を除く、是の如き菩薩は眞實心を以て衆生をして離苦得樂せしめんと欲す。當に知るべし。此の心は大悲より起り、菩薩摩訶薩は一切の愛取の因緣を棄捨して、出でて閑林に向ひ獨りにして侶無し。[四五]犀牛角の如し。四聖種に於て喜悅して住す。地を念ぜず、我が地を念ぜず、地なる我を念ぜず、水火風大も亦是の如し。色を念ぜず、我が色を念ぜず、色なる我を念ぜず。受想行識も亦是の如し。眼を念ぜず、我が眼を念ぜず、眼なる我を念ぜず。是の如く眼識を念ぜず、我の眼識を念ぜず、眼識なる我を念ぜず。是の如く眼觸を念ぜず。我が眼觸を念ぜず、眼觸なる我を念ぜず。是の如く、眼觸の因緣にて受を生ず。若しは苦、若しは樂、不苦不樂なり。樂を念ぜず、我が樂を念ぜず、樂な

【三九】 殖は三本共に植に作れり。今之に從ふ。

【四〇】 貪欲。梵・巴 Kāmarāga. 巴 Kāmacchanda 貪り欲すること。世間の色欲財產を貪り欲すること。

【四一】 瞋恚。梵 Pratigha, Krodha 巴 Paṭigha いかること。身心を熱惱せしめて諸惡業を作さしむ。

【四二】 愚癡。梵 Moha 慕何と音譯し心性闇昧にして事理に通達せざること。此等は三毒と稱して諸煩惱中根本的に解脫の妨げとなるもの。

【四三】 五節輪。一種の輪を有てる器。

【四四】 愛取。梵 愛 Tṛṣṇā, すべて物を貪り、染着する意。十二因緣の一なり。取。梵 Upādānam 所對の境界を取りて着するを云ふ。十二因緣の一なり。

【四五】 犀牛。Gaṇḍaḥ 一種の獸にして。水牛に似て脚に三つの蹄あり、毛色黑くして三つの角の一つは頂に在り、一は額上に在り、一は鼻頭に在りといふ。よく獨處無伴侶なる場合の譬に引かる。

又風の空に依りて、　諸の塵壒[三七]を吹盪するが如し。
是の如く眞諦を修して、　能く諸の煩惱を滅す。
又日光に依りて、　明に諸の色像を見るが如し。
若し第一義に住せば、　能く諸佛の法を觀る。
是の故に若し、　世に於て速かに成佛を求めんと欲すれば、
宜しく諸の見著を捨てゝ、　第一義に安住し、
閑林の中に往詣して、　端坐して禪定を修せよ。
勇決にして獨り侶無く、　無上菩提を求め、
精勤にして自ら調伏し、　己心を防護し、
諸の邪見を棄捨し、　斷常を遠離して、
忿心なる龍夜叉、　幷に及び諸の鬼神の、
無量百千億なるも、　之を化するに眞諦を以てせよ。

月藏分第十四[三八]　第一義諦品　第五

爾の時、月藏菩薩摩訶薩は卽ち坐より起ちて、偏袒右肩にして、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひて是の言を作さく、「世尊よ。我れ今所問有らんと欲す。唯だ願くは如來よ、時に隨ひて聽許して我が爲に解釋したまへ」と。爾の時、佛、月藏菩薩摩訶薩に告げて言はく、「善男子よ。如來應正遍知は汝の所問を恣にして、當に意に隨つて答へ汝の心をして喜ばしむべし。」と。爾の時、月藏菩薩摩訶薩は佛語を聞き已りて卽ち佛に白して言さく、「唯然り、敎を受けたてまつらん。大德婆伽婆よ。云何んが菩薩摩訶薩、阿蘭若に住し、第一義諦を修して月の如くなるを得、四無礙を以て衆生

【三七】塵壒。ちりあくた、くもること。

【三八】宋・元・明の三本の中明本は月藏分第十四の六字なく、宋・元の二本は分第十四の四字無し。

但し富貴欲の爲に、　名を求めて尊重せず、
毘舍浮法中にて、　而かも六度を行ぜり。
白法盡く滅し已りて、　惡法增長せし時、
魔波旬となることを得て、　欲界中に自在なり。
又三寶の所に於て、　肯て信敬を生ぜず。
波旬と提婆達とは、　常に衆生を惱さんと欲したり。
是の如く修羅王は、　增上にして憍逸の士なり。
疑惑して欲垢、　及び諸の嫉妬の行有り。
今は畜生の類に在りて、　而かも修羅王となり、
諸の最勝法に於て、　無智にして能く了ぜざるなり。
彌勒と毘摩詰と、　道鬘修羅仙とは、
毘舍に於て信を得、　無上道を修行し。
彼(等)は六度と合して、　常に諸の衆生を化せり。
是の故に今は殊勝にして、　無礙智を成熟せり。
故に我れ今汝に示さん。　宜しく諸の疑惑を捨て、
勤めて第一義を修すべし、　菩提を證するに難からず。
海の常に種々の　衆寶物を充滿するが如し。
是の如く眞諦を修して、　能く智をして滿足せしむ。
又大地に依りて　諸の苗稼を生長せしむるが如し。
是の如く眞諦合にして、　能く勝菩提を生ず。

勸めて三寶を信じ、　及び菩提心を發さしむ。
彼は皆肯て行はず。　愚癡・邪見の故に、
旣に多年を歷已りて、　鈍根にして是の言を作せり。
兄は能く千年中、　常に坐臥を離る、
復た七日夜を經て、　飯一揣を限食せり、と。
是の如く千年滿じて、　我れ當に菩提に住すべし。
我れ時に一心に喜びて、　誓ひて二威儀に住し、
旣に千年を滿じ已りて、　方に彼を成熟するを得たり。
又多くの衆生を化し、　出家して俗を離れ已りて、
復第一義と、　相應すること五萬年なりき。
是の如き第一義は、　我れ時に本より安住せり。
轉じて無量の衆を化し、　無上道に堅住せしめた。
羅睺と毘摩質と、　婆稚と波羅陀と、
波旬と　[三六]毘摩詰と、　彌勒及び提婆と、
是の如き八人等は、　先には是れ我が兄弟なりき。
彼の苦行を修して、　菩提を成熟せんが爲に、
我れ無上道の爲に、　諸の苦難の事を行ぜり。
波旬と提婆達とは、　常に我れを危害せんと欲し、
魔は過去時に於て、　所作の諸の善業、
初に信敬有ること無く、　常に衆生を惱さんと欲したり。

實をいふ。
【三四】 五大河。恒河 Gaṅgā. 搖犬那 Yamunā. 阿夷羅婆提 Aciravati 舍牢浮 Sarabhu. 摩企 Mahi の五大河なり。尙印度佛敎固有名詞辭典(赤沼辭典) p. 478 を參照せよ。
【三五】 一生處。一生補處に同じ。梵 Ekajātipratibuddha. 一生にして必ず佛陀たるべき菩薩をいふ。こゝにては彌勒菩薩のこと。

【三六】 毘摩詰。梵 Vimalakīrti 維摩詰、毘摩羅詰、維摩居士のこと。無垢稱と譯す。

す。世諦を以てせざるなり。又、須彌山王の大地に依りて久しく住して動かざるが如し。水に依るを以てにあらざるなり。是の如く第一義諦に依るを以て一切善根は而かも堅固を得、世諦を以てせざるなり。又一切の草木大地に依りて生長を得。草葉を以てせざるが如し。是の如く。四念處乃至十八不共法大慈大悲等は第一義諦に依りて生長することを得るは、世諦を以てせざるなり。又、猛風の虚空に依りて能く烟雲塵霧を吹盪すれども地に依らざるが如し。是の如く菩提を求めんが爲に、諸の善男子善女人等は第一義諦に依りて能く諸の惡見雲・煩惱・烟霧・十惡道の塵を吹く。世諦を以てせざるなり。又、日の大光明に依るが故に、高下及び諸の色像種々の作業を見ることを得。彼の油燈小光に依るを以てせず、是の如く第一義諦に依るを以て、菩提の心に迷惑あることなく、諸の善業を作す。世諦を以てせず。是の故に應に一切の愛取攝受のことを捨すべし。閑林の中に住して放逸を作さず第一義を修するは、世諦を以てせざるなり。汝等よ。是の如くんば便ち能く速に六波羅蜜を滿じ、阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ぜん」と。

爾の時、世尊は重ねて此の義を明にせんと欲して、偈を說いて言はく、

[三五]一生處の彌勒は、　導師に問ひたてまつる。
云何んが畜生の類と、　人と親を爲すと言ふや。
世尊は久遠を見て、　彌勒に告げて言はく、
修羅等は往昔、　皆是れ我が兄弟なりき。
第三十一劫の、　毘舍浮佛の時、
我れ婆羅門となり、　聰慧にして耶若を字とし、
六度常に相應して　菩提に不退轉なり。
時に我に八弟の、　邪見なる婆羅門ありき。

濁。Dṛṣṭi-k. 佛滅後千五百年を經て末法の世になれば邪見や邪法が競ひ起り不正不義なる思想が充滿して所謂見＝思想の混濁することによつて起る不安を稱す。(三) 煩惱濁。Kleśa-k. 或は惑濁とも稱し、人間の心がすべて煩惱の爲に覆はれて汚れ、濁りて正しき行爲をなすこと能はざる時代なるをいふ。(四) 衆生濁。Sattva-k. 有情濁に同じ人間が益々惡心を生じて惡行爲をつくり人倫道德を破壞して少しも正法などを顧ぬ時代の不安を稱す。(五) 命濁 Āyuṣ-k 或は壽濁ともいふかゝる時代になると益々人間の壽命が短縮して人心いやが上に頽廢し往くをいふ。五濁の相が現出して惡事のみ繁多なるを五濁惡世といふ。阿彌陀經の末段に釋迦牟尼佛能く甚難希有の事をなして能く娑婆國土の五濁惡世、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の中に於て阿耨多羅三藐三菩提を得云云とあり。

【三三】 菩提鬘阿修羅仙。梵 Bodhimālya-asuraṛṣi ?

【三三】 世諦。梵 Saṃvṛtisatya 巴 Sammutisacca 世諦は眞諦或は勝義諦に對す。世俗諦・俗諦ともいふ。義淨は覆俗諦といへり。即ち世俗の道理。世間にて人々の普通知れる事

脱の爲にせず、信敬の爲にせず、離欲寂靜の爲にせず、唯だ自身の五欲の樂の爲にするが故に、施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修行す。是の如き等の諸の結の爲に縛せられて愚癡を雜へ、欲界中に於て果報成熟して、魔波旬は是の如き苦惱を爲す。此の魔波旬は本と他を障礙するを以ての故に、他を嬈亂するが故に、他を降伏するが故に、他を欺陵するが故に、稱譽を求むるが故に、名聞を求むるが故に、五欲戲笑の樂に依るが故に、富貴を求むるが故に、毘舍浮如來法の中に於て、施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修行す。是の因緣を以て、今現在に於て白法盡く滅す。[三一]五濁惡世に於て魔王と作ることを得たり。三寶の所に於て信敬を生ぜず、尊仰心無し。是の如き波旬は常に衆生に於て諸の惡と不利益を作するが故に、苦惱せしむるが故に、墮落せしむるが故に。提婆達多も亦復是の如し。此の羅睺羅阿修羅王・毘摩質多羅阿修羅王・波羅陀阿修羅王・婆稚毘盧遮那阿修羅王・牟眞隣陀阿修羅王及び餘の阿修羅等は、亦毘舍浮如來法中に於て憍逸し自擧す、修習を勤めず。復た疑惑を懷き、諸の煩惱・貪欲・瞋恚・愚癡・邪見・無明・胆佞・斷常の心を雜へて施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修行す。是の因緣を以て今下類の苦惱・畜生・阿修羅道に生る。諸の結の縛する所の疑惑愚癡を爲す。是の故に彼等は尙世俗の正見すら發すこと能はず。何に況んや能く無上善根を發すをや。唯だ彌勒菩薩摩訶薩毘摩羅詰及び[三二]菩提鬘阿修羅仙等のみ有りて毘舍浮如來法中に於て他を障礙することを爲さゞりしが故に、乃至富貴を求めざりし故に、但だ離欲を樂ひ、衆生を化せしが故に六波羅蜜を修したり。是の因緣を以て、此の大丈夫なる彌勒菩薩・毘摩羅詰及び菩提鬘・阿修羅仙等は無礙智を得、諸の菩薩功德莊嚴を以て巧に一切衆生の智藥を成じたり。

是の故に我れ今汝等に告げん。若し無上智を求めんと欲する者有らば、是の人は應當に深信清淨にして、第一義諦を以て菩提を求むべし。[三三]世諦を以てする莫れ。譬へば[三四]五大河の水は能く大海を滿たし小河を以てせざるが如し。是の如く第一義に依るを以ての故に、速に能く一切智海に充滿

【二二】 弗沙金剛。梵 Pusyavajra？ 羅睺羅阿修羅王の本生。

【二三】 弗沙那毘。梵 pusyanavi？毘摩質多羅阿修羅王の本生。

【二四】 弗沙闍利。梵 Pusyacārya？波羅陀阿修羅王の本生なり。

【二五】 弗沙跋摩。梵 Pusyavarman？婆稚毘盧遮那阿修羅王の本生。

【二六】 弗沙車帝。梵 Pusyaśāta？ 魔王波旬の本生なり。

【二七】 弗沙樹。梵 Pusyavṛkṣa？ 彌勒の本生なり。この當既に一生補處 Ekajātipratibuddha を得たりといはる。

【二八】 弗沙毘離。梵 Pusyaviri？毘摩羅詰 Vimalakārti即ち維摩居士の本生なり。

【二九】 弗沙離提。梵 Pusyanandi？ 提婆達多 Devadatta の本生なり。

【三〇】 大正藏經に摧を推に作れり。

【三一】 五濁惡世。梵・五濁 Pañcakaṣāya五滓・五渾ともいふ。人惡世に於ける五種類の穢れ、(一)劫濁 Kalpa-k. 人間の壽命が次第次第に減じて三十・二十・十才となるに隨ひ、それ〲饑饉・疾病・火難・戰爭等が起り時代の濁ることによつて蒙る災厄を稱す。(二)見

是れなり。我れ爾の時に於て彼の八弟を成熟せしめんと欲するが爲の故に、千年の中に於て坐せず臥せず、但だ行き但だ立ち、七日夜を經て限食一揣せり。我れ彼の諸弟を成熟せんが爲の故に、乃至閑林中に於て、第一義諦に住すること五萬年を經、無量の百千萬億那由他阿僧祇の天・龍・夜叉・阿修羅・伽樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・畜生・餓鬼・毘舍遮・人・非人等を成熟して、阿耨多羅三藐三菩提に向ひて退轉せざらしむ。爾の時の[二二]弗沙金剛とは今の羅睺羅阿修羅王是なり。[二三]弗涉那毘とは今の毘摩質多羅阿修羅王是なり。[二四]弗沙闍利とは今の波羅陀阿修羅王是れなり。[二五]弗沙跋摩とは今の婆稚毘盧遮那阿修羅王是れなり。[二六]弗沙車帝とは今の魔王波旬是れなり。[二七]弗沙樹とは今の汝彌勒是れなり、是の因緣を以て無礙智の一生補處を得て大乘に安住せり。[二八]弗沙毘離とは今の毘摩羅詰是れなり。[二九]弗沙難提とは今の提婆達多是れなり。當に是の如く觀ずべし、我れ昔阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲の故に、魔波旬を成熟せんと欲せんが爲の故に、是の如き等の無量の苦惱毛竪驚怖難行の事を作せり。是の故に今此の魔王波旬は福德智慧二種の莊嚴を以ての故に、是の如き等の神通威力あり。大功能あり。欲界の中に於て最勝自在なり。此の魔波旬及び餘の眷屬は今我が所に於て勤害の心を起し、正法幢に於て[三〇]摧折の心を起し、僧寶の所に於て破壞の心を起し、八聖道に於て斷除の心を起し、正法燈に於て毀滅の心を起し、諸の衆生一切の善法に於て隱沒の心を起し、留難の心を致して、恐怖の心、不憐愍の心、違反の心を作して、諸の衆生をして善道を退捨して惡趣の心に墮せしむ。諸の龍衆に於て驚怖の心を起し、阿修羅の宮に於て破壞の心を起し、此の說法大衆の會所に於て障礙を欲するが故に、此に來至せり。復た大衆の集を壞せんと欲する心を起し、此の惡意を興して顧視して坐せり。若し衆生ありて他を障礙せんが爲の故に、他を嬈亂せんが（爲の）故に、他を降伏せんが（爲の）故に、他を欺陵せんが（爲の）故に、稱譽を求めんが（爲の）故に、名聞を求めんが（爲の）故に、五欲の戲笑の樂に依るが故に、富貴を求むるが故に。施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修行すれども解

り。

【一六】揣。シ・セン・タン・ダンの音あり、ハカルこと。一揣食。又節量食ともいひ、一まるめの食を鉢中に受けて便ち止め、多く受けざるなり。十二頭陀の第六に當る。

【一七】大士。菩薩の別稱。梵 Mahāsattva 菩薩は自利・利他の大事を爲すものなれば大士といふ。

【一八】多陀阿伽度。梵 Tathāgata の音譯なり。如來をの原語なり。

【一九】頭陀功德。梵 Dhūtaguṇa 巴 Dhuta. 杜茶・杜多などゝも音譯し、抖擻、抖揀、浣洗などゝ譯す。衣服、飲食・住處の三種の貪著を拂ひ去ることを意味す。十二頭陀とは一、納衣。二、三衣。三、乞食。四、不作餘食。五、一坐食。六、一揣食。七、阿蘭若處。八、塚間坐。九、樹下坐。十、露地坐。十一、隨坐。十二、常坐不臥をいふ。

【二〇】賢劫。梵 Bhadrakalpa 過去の住劫を莊嚴劫、未來の住劫を星宿劫と名くるに對して現在の住劫を賢劫といふ。此の現在の住劫に拘樓孫佛・拘那含牟尼佛・迦葉佛・釋尊等の千佛出現すといはる。

【二一】弗沙耶若。梵 Puṣyayajña? 釋尊の本生の名なり。

三寶に歸依し、五戒を受持して諸の放逸を離れ、無上菩提の心を發すべし。」と。彌勒よ。時に弗沙耶若は是の語を聞き已りて一心に喜悅して、卽ち八弟の爲に誓言を立てたり、「汝等よ。若し能く三寶に歸依し乃至能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、退轉せざる者は我れ今必ず當に千年の中、坐せず臥せず七日七夜限食の一揣すべし。我れ誓を立て已りて千年の中に於て若しは晝、若しは夜、乃至一刹那の頃も坐臥を念じ、乃至七日夜に於て一揣を過食して、永く當に我をして三世の佛に違ひ、六波羅蜜に違ひ、十善業道に違うて阿耨多羅三藐三菩提を成ぜざらしむべけんや。」と。

爾の時、空中に百千億の那由他無量の諸天あり、讃じて言はく、「[一七]大士よ。善い哉、善い哉。堅固勇猛にして大力決定せり。汝來世の盲冥の衆中に於て當に成佛するを得べし。[一八]多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀の聲は世に震はん」と。時に毘舍浮佛は弗沙耶若の[一九]頭陀功德を以ての故に讃じて言はく、「善い哉。善い哉。大婆羅門よ。汝は今、此の苦行の威儀を以て、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を行ずるが故に、未來世の第三十一大[二〇]賢劫中に人壽百歲に於て、彼に於て成佛し、釋迦如來應正遍知と號したてまつり、聲世に震ふ。汝は爾の時に當りて、此の八弟の與めに阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし。彌勒よ。彼の弗沙耶若婆羅門は千年を足滿し、坐せず臥せず七日夜を經て限食一揣し千年を滿たし已りて、彼の八弟をして三歸に安住し、五戒を受持し及び無上菩提の心を發さしむ。善男子よ。是の弗沙耶若は其の八弟及び餘の無量の百千萬億那由他等、諸の婆羅門・長者・居士・男子・女人・童男・童女を化し、皆成熟し已りて卽ち毘舍浮如來法中に於て出家學道せり。爾の時あらゆる經論及び諸の外典を解說し、誦持して忘れず、人の爲に解說す。然る後閑林中に至りて第一義諦禪波羅蜜と相應して住し五萬年を經たり。彼の時中に於て無量の百千萬億・那由他阿僧祇の天・龍・夜叉・阿修羅・伽樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・畜生・餓鬼・毘舍遮・人・非人等を成熟して、阿耨多羅三藐三菩提に向ひて退轉せざらしむ。彌勒よ。彼の[二一]弗沙耶若婆羅門とは豈異人ならんや。異觀を作すこと莫かれ、我が身

よれば宿命・天眼・漏盡の三を名けて三明とし、行とは身口意業に名く。

【八】善逝。梵 Sugataḥ 如來十號の一、佛のこと。須伽陀と音譯し好去・妙往と譯す。善く因果を超越して歸らぬ故に善逝といふ。

【九】世間解。梵 Lokavit 如來十號の一、佛のこと。如來は世間にて知らざるものなきをいふ。路迦憊とは音譯なり

【一〇】無上士。梵 Anuttaraḥ 如來十號の一、佛のこと。阿耨多羅は音譯。佛は衆生中の無上の大士なればかくいふ。

【一一】調御丈夫。梵 Puruṣa-damyasārathiḥ 佛十號の一、富樓沙曇藐婆羅提は音譯。可化丈夫調御師はその譯なり。佛は衆生を導いて調御し正道を失はしめざること。

【一二】天人師。梵 Śāstā 或は Devamanuṣyaśāstṛ 提婆摩㝹舍多と音譯す。佛は天人の師範なればかくいへり。

【一三】佛。梵 Buddhaḥ 覺者の義。

【一四】世尊。梵 Lokajyeṣṭhaḥ 或は Lokanātha. 路伽那他・路迦惹吒とも音譯す。佛十號の一。佛のことなり。名に見る時もあり。

【一五】放逸。梵 Pramādaḥ 唯百法中の識二十隨煩惱の一。すべて規則を守らざることな

卷の第四十八

月藏分第十四[一]　本事品　第四

爾の時、彌勒菩薩摩訶薩は卽ち坐より起ち、偏袒右肩にして衣服を整理し、合掌して佛に向ひて是の言を作さく、「世尊よ。旣に是れは釋迦貴種刹利の大姓にして、迦毘羅城[二]淨飯[三]の王子なり。此の四阿修羅は畜生の種類にて極めて卑下と成す。世尊よ。何故に我と親しと言はんや」と。

爾の時、佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく、「過去世の第三十一劫に於て佛有り。出興して毘[四]舍浮如來・應[五](供)・正遍知[六]・明行足[七]・善逝[八]・世間解[九]・無上士[一〇]・調御丈夫[一一]・天人師[一二]・佛[一三]・世尊[一四]と號したてまつる。彼の佛は常に四衆の爲に說法したまへり。爾の時、一大の婆羅門有り、弗沙耶若と名く。已に過去無量の佛の所に於て諸の善根を種ゑ、阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せず、深信具足して三寶に歸依し、五戒を受持して諸の放逸を離れたり。時に弗沙耶若に弟八人有り。一には弗沙金剛と名け、二には弗沙那毘と名け、三には弗沙闍利と名け、四には弗沙跋摩と名け、五には弗沙車帝と名け、六には弗沙樹と名け、七には弗沙毘離と名け、八には弗沙那提と名けたり。時に弗沙耶若婆羅門は諸の弟に勸めて言はく、「汝等賢首よ。今、佛法僧寶に歸依し、五戒を受持して諸の[一五]放逸を離れ、阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。」と。時に彼の諸の弟は皆悉く肯て三寶に歸依せず、乃至肯て菩提の心を發さざりき。

時に弗沙耶若は數〻諸の弟に勸めて多年を經たり。復た諸の弟に問ふ。「汝等よ、何故に皆悉く三寶に歸依せざる。乃至肯て菩提心を發さゞる。竟に何なる意ありて、何をか願求する所ぞ」と。

時に彼の八弟は卽ち是の言を作さく、「兄は能く千年に二威儀を修めたり。唯行・唯住・不坐・不臥なりき。七日夜を經て團食一[一六]揣なり。此の難行を修すること千年を足滿せり。然る後、我れ當に

【一】宋・元・明の三本に月藏分第十四の六字なし。
【二】迦毘羅城。梵 Kapila-vastu 巴 Kapila-vatthu 迦毘羅婆蘇都・迦毘羅衞・劫比羅伐窣堵・迦毘羅閱・迦維國など〻書き釋尊誕生の居城なり。今の尼波羅(Nepal)タライ Tarai 地方なりきといふ。
【三】淨飯。梵 Suddhodana 輸頭檀・首圖駄那・屑頭など〻音譯し白淨王ともいへり。釋尊の實父、迦毘羅城の城主なりき。
【四】毘舍浮如來。梵 Viśvabhū-tathāgata. 過去七佛(毘婆尸・尸棄・毘舍浮・拘留孫・倶那含牟尼・迦葉・釋迦牟尼)の第三。毘濕婆部・鞞恕婆附・毘舍符・毘舍婆・隨葉とも書き一切勝・遍一切など〻譯す。過去三十一劫・人壽六萬歲の時無喩城に生れたり。長阿含大本經にその出生、父母名より得度の人員までを詳にせり。
【五】應。應供のこと。梵 Arahat. 阿羅漢の譯名。佛陀十號の一。萬人の供養に應ずる故に應供といふ。
【六】正遍知。正等覺或は正遍覺ともいふ。梵 Samyak-saṃbuddhaḥ 如來十號の一。
【七】明行足。梵 Vidyācaraṇa-saṃpannaḥ 如來十號の一、佛のこと。智度論第二に

願くは我が修羅の、
三界のあらゆる供は、
唯だ佛のみ煩惱なくして、
佛は大菩提を以て、
願くは第一義を說きたまへ、
我れ拘留孫に於て、
[九二]拘那含牟尼にも、
我れ自の願力を以て、
修羅を化せんが爲の故に、
法を聞きて德藏を獲、
魔の惡徒黨を降し、
此の濁惡の世に於て、
佛の境界の事を現ずるは、

所獻の衆の寶物を受けたまはんことを。
棄捨して染することを求めず。
世の供養を受くるに堪へたまふ。
三有の衆生を嚴りたまふ。
菩提を得んが爲の故に。
曾し第一義を聞けり。
迦葉佛にも亦た然り。
應に阿修羅を現ずべし。
菩提道を修行して、
復た能く轉じて他に示さん。
正法の朋を熾然ならしめん。
功德人の有ること難し。
是れ佛の妙神力なり。

【九二】拘那含牟尼。五十一卷脚註一〇〇を看よ。

福山は最上の頂にして、　福智慧の水を放つ。
福德の海は甚深にして、　福德なる衆生の依たり。
妙福は衆寶の礦にして、　福味は巨海の如し。
福器は甘露を盛り、　福願は皆盛滿せり。
福商は恒に將に　無漏の寶國土に向はんとす。
我等の衆福は盡きたり。　是の故に佛に歸依したてまつる。
福德賢寶瓶を、　願くは我等に惠施したまはんことを。

爾の時復、阿、修羅仙あり。一切菩提鬘と名づく、具に大福・大威德・大智慧・大苦行りを有し、菩提心を以て莊嚴を作し、五神通を得て、諸の塵垢を離る。安住して一切衆生を成就し、常に一切の阿修羅等を化し、彼の供を受くるに堪へたり。是の諸の阿修羅無上導師は九萬五千の具足五通阿修羅仙と前後圍遶して佛所に來詣し、佛足を頂禮し、眞金の瓶を以て八功德水を盛り、佛前に置き丼に寶杖を獻じ、復た九萬五千の眷屬と各々、異種の寶蓋を執持し以て世尊に奉れり。右遶三匝し合掌して佛に向ひ偈を說いて讃じて曰はく

忍辱は大地の如く、　忍水は常に盈滿せり。
淨忍に安住すれば、　寧心にして失ふ所無し。
煩惱渇愛盡きて、　信財に安處せん。
佛は慈悲心に住して、　衆(のため)に菩提道を置きたまふ。
說法は猶し水の如く、　若し是の如きの法を聞かば、
菩提心を愛樂して、　能く第一義を成じ、
大悲の願にて　此の諸の下劣行を調伏じせん。

遭溺の病に苦しみ、　苦は逼りて其の念を失ふもの。
此の如きの苦害者を、　導師は爲に親しく救ひたまふ。
惡心の衆生等と、　龍鬼と諸の羅刹とは、
佛を見て正念を得、　大悲心に安住せり。
唯だ佛のみ三界に於て、　能く救護を作したまふ者たり。
我等は已に孤獨にして、　悉く衆苦の爲に溺れたり。
我等は皆一心に、　一切の樂法に住せんことを。
願くは最上義を說きて、　我をして菩提を得、
以て佛眼を得せしめたまはへ。　最上の諸佛の智よ。
速に諸の魔怨を伏して、　願くは正法の雨を降したまはんことを。

爾の時、跋持毘盧遮那阿修羅王は、諸の眷屬を將ゐて、佛足を頂禮し、右遶三匝して、佛の右左に於て、閻浮檀金を積み、復た、種々の寶・種々の華・種々の末香・寶蓋幢幡・及以(およひ)金縷眞珠・瓔珞・歌舞・作樂を以て合掌供養して偈を說いて讚じて曰はく

福田、福德水、　福種、福德[九一]芽、
福樹、福德枝、　福條、福德葉、
福華、福味果、　最上の福味漿、
福色、福蔭影は　福德子の成就(するところ)なり。
佛の福善は堅固にして、　福勇は能く他を伏し、
福色は勇健の士　福德は不動の山、
福華もて土を覆蓋し、　福藥の所依身なり。

【九一】元・明の二本は牙を芽に作れり。今之に從ふ。

我れ今甚だ歡喜して、　佛所に來詣せり。
願くは清淨なる法を說き、　菩提の道に到らしめんことを。
諸の賢聖に顯示して、　寂定なること虛空の如し。
諸の惡を遠離し、　及び我々所を離る。
速かに實際を知りて、　能く諸の煩惱を除き、
速かに一切の縛を斷じて、　最上道を知るを得ん。

爾の時、波羅陀阿修羅王及與眷屬は佛足を頂禮して右遶に三匝し、衆の雜色、種々寶樹、狀波吒羅の如き七寶の樹を持して、佛の後に置き、種々の寶葉・華果・金縷の眞珠・瓔珞・天生の寶鬘・天の瓔珞・衣服・指印環釧・寶蓋・幢幡・手瓔珞・脚瓔珞・臂瓔珞・寶莊嚴具を佛の頭上に於て空中より垂下し、乃至種々の歌舞もて作生し、佛を供養して、一心に合掌して偈を說いて讃じて曰はく。

衆生は常に彼の爲に、　煩惱の火(もて)燒かる。
樂を求めて恒に得ず、　施樂者に遇はず。
一切の惡道に住せり。　惟だ佛のみ衆生の藥なり。
解脫道に安住して、　能く一切の苦を救ひたまふ。
惟だ佛のみ〔九〇〕商人の主なり。　三有中更に無し。
愍みて智慧の水を進め、　衆德滿すること海の如し。
盲の道を失ひし者の爲に、　正路に安住せしめたまふ。
諸の衆生を導引して、　勝れたる涅槃道に住せしめたまふ。
凡夫は饑餓えて厭ふこと無しとも、　唯佛のみ能く充飽したまふ。
常に煩惱に溺るゝものの爲に、　唯だ佛のみ能く救拔したまふ。

〔九〇〕高麗本は賞に作る、三本は商に作る。今之に從へり。

佛は仍衆生に於て、　慈悲にて常に轉じたまへり。

佛を禮す。(佛は)動かざる山(のごとく)、　慈心正に安住したまへり。

爾の時、毘摩質多羅阿修羅王及與眷屬は頭面に接足して世尊を禮拜し、右遶に三匝して佛前に住立し、卽ち千斤の閻浮檀金[八九]を以て、佛前に置き、復た日愛寶摩尼珠を以て、佛の上に置在く。是の如き種々の寶、種々の香華乃至種々の歌舞妓樂をもて供養を作し、合掌恭敬して偈を說きて讚じて曰はく、

釋、梵、大自在　輪王、那羅延、
護世及び波旬も　悉く是の(佛の)如き力なし。
天龍、夜叉等　人及び阿修羅も、
亦た世尊に如く無し。　(佛は)慈悲大勢力なり。
惟だ佛は衆生の最にして、　地の如く瞋喜せず、
能く一切の惡、　幷に惡業を作す者を忍びたまふ。
等しく諸の衆生を視ること、　母の其の子を愛するが如し。
心は一切に平かなり。　是の故に佛足を禮す。
願くば此の一法を護りて、　魔をして更に來らしむる勿れ。
彼をして佛に勝つことを得て、　此の惡惱害
一切の惡瞋怒　及以最極惡を作さしめざれ。
實語の願もて呪を說き、　諸の魔軍を降伏せしめん。
人身の無病なるが如きは、　諸の醫師を求めず。
是の如き阿修羅も、　無事には佛を想はず。

【八九】閻浮檀金。梵 Jambu-nada suvarṇa 閻浮捺陀、閻浮那檀、贍部捺陀とも音譯し Jambu は樹 Nada は河又は海の義を有する故に閻浮樹間を流るゝ河より出づる黃金のこと。

上光明艶色摩尼寶珠を持して、佛前に置く、復た種々の寶華・末香・幢幡・寶蓋・及以金縷眞珠の瓔珞を用て、復、種々の歌舞を以て樂を作して、用て供養し、合掌して佛に向ひ偈を說いて讃じて曰はく、

心調士中の最は　能く一切に樂を施したまふ。
法燈は常に法施にして、　法智慧を增長す。
世尊は法炬を然したまふ。　天人皆悉く知る。
怖望の法を了達し、　涅槃道に安住たまふ。
唯だ佛のみ諸衆を蔭い、　蓋の如く一切を覆ひたまふ。
諸の蔭魔、[八八]　死魔、煩惱魔を摧伏して
魔及び軍衆并及に　惡心意を降したまへり。
世尊に稽首したてまつる、　勇健にして諸有を愍みたまへ。
是の魔は極惡心にして、　常に諸の惡事を行ず。
此れは是れ彼の戯笑にして、　衆生の苦を得んと欲し、
此の諸の修羅宮は、　苦雲にて悉く彌覆はる。
佛は卽ち悲心を起したまひて。　我が諸の修羅に觸れたまへり。
佛は衆生の爲の故に、　諸の苦行を修し訖れり。
多劫に檀戒行忍及び　智慧を修したまひ、
世尊は更に、　諸の餘の惡行事を作したまはず。
佛は是の如き事を以て、　我をして樂を得せしむるに足る。
惟だ佛は精進の士にして、　三界に等雙無し。
諸の煩惱の縛を離れ、　三有を解脱したまへり。

【八八】陰は五陰のこと。卽ち五陰魔なり。

爾の時、牟眞隣陀阿修羅王乃び眷屬と與に亦大いに駕を嚴り、羅睺羅阿修羅王に到りて上に在りて引たり。

爾の時、須質多羅阿修羅王及び眷屬と與に、是の如く莊嚴して亦た羅睺羅阿修羅王に到りて下に在りて引たり。

爾の時、中に於ける羅睺羅阿修羅王及び眷屬と與に是の如き色相大莊嚴を以てし、五音の妓樂一時に俱に歌舞を作し、戯笑し、音聲和合して佛所に詣り、復た兩手を以て種々の寶華・天鬘・塗香を持し、佛の方所に向ひ、遙に散じ奉獻して、佉羅帝山上に到り、變じて大雲を作して、空中に住せり。其の佉羅帝山、牟尼諸仙の依住處に種々の寶・種々の華・種々の天鬘・種々の塗香を雨せり。

爾の時、會中に諸の衆生ありて是の如き念を作さく、「何なる事有らんと欲するか、是れ何等の力にてか先づ此の瑞を作すか」と。

爾の時、世尊は慧命〔八七〕耶舍に告げて言はく、「汝等比丘は當に自ら正念に心を繫けて住し、散亂を得ること勿かるべし」と。世尊は復た慧命耶舍に告げたまはく、「汝等比丘は當に自ら精勤を以て念を繫けて住し、散亂を得ること勿かるべし。若し能く精勤に念を繫けて散ぜざれば則ち能く煩惱の道を休息し、及び苦道を除き、能く第一義諦に住し、能く六波羅蜜を滿じ、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん。此れは是れ諸の阿修羅及與一切の眷屬妓女にして今來らんと欲し、幷に五音の妓樂和合を作して莊嚴を作し、我を禮拜し供養するは法を聽かんが爲なり。是の故に汝等は、散亂を得ること勿く念を繫けて住せよ」と。

爾の時、一切の阿修羅及與眷屬は尋ね卽ち來りて佉羅帝山に到り、到り已りて卽ち時に右に其の山を遶りて三匝し訖已りて諸の眷屬を將ゐて、世尊の所に詣れり。

爾の時、羅睺羅阿修羅王は世尊に向ひて頭面に禮を作し、右遶三匝して前に於て住立し、梵天髻

【八七】耶舍、梵 Yaśas 毘舍離城の長者の子。出家の後家に歸りて先の婦と婬したり。佛爲に婬戒を制し、制戒の始となれりといふ。

頻婆羅阿修羅婦女と與に、一切悉く朱色の衣服を着け瓔珞をもて莊嚴し、乃至佛所に往詣せん」と。

爾の時、毘摩質羅阿多修羅王は復た是の言を作さく、「我れ今亦、婦妾宮人男女眷屬九十九惡叉[85]尼百千の阿修羅女と與に、一切は悉く頗梨色衣を着け瓔珞をもて莊嚴し、乃至佛所に往詣せん」と。

爾の時、羅睺羅阿修羅王は復た是の言を作さく、「我れ今亦、夫人・婇女・男女眷屬及び土田主附庸王幷に及び長者臣將左右の城邑聚落のあらゆる人衆の恒河沙の如き等の阿修羅女と與に、一切は悉く碼碯の色衣を著け、瓔珞をもて莊嚴し、復た碼碯の色衣及與幢幡・寶蓋・金縷の眞珠・瓔珞・摩尼・寶珠・香華・塗香及び乘る所の車は皆悉く同じく是れ碼碯の色を持ち、幷に鼓角・琴瑟・箜篌・簫・笛・妓樂の是の如き等の事皆碼碯の色を以て相與に樂を作し、歌舞戲笑して最勝に莊嚴して、虛空に在り、佛に見え禮拜供養せんと欲せんが爲に、及び、法を聽き衆僧を供奉せんが爲の故に、佛所に往詣すること前の所說の如く、皆悉く嚴かに彼の諸の色相を備ふ。第一微妙希有にして未だ有らず、昔よりこのかた未だ、是の如き等の大莊嚴事を聞かず。彼の阿修羅の所居の處より出でゝ、空中に住在するを」と。

爾の時、毘摩質多羅阿修羅王及び眷屬と與に五音もて樂を作し、歌戲舞笑して、羅睺羅阿修羅王に詣り、前に於て[86]引たり。

爾の時、波羅陀阿修羅王及び眷屬と與に皆大いに嚴持して、羅睺羅阿修羅王の右の廂に到りて引たり。

爾の時、跋持毘盧遮那阿修羅王幷に眷屬と與に亦復是の如く、大莊嚴を具して、羅睺羅阿修羅王の左の廂に到りて引たり。

爾の時、睒婆羅阿修羅王。及び眷屬と與に亦悉く嚴持して、羅睺羅阿修羅王に詣りて後に於て引たり。

【八五】叉を宋本は矢とし元本は夫とせり。

【八六】誘引、引率などの引に同じ。

しく流轉生死と愛別離とを驚怖して涅槃を怖望せしむ。彼の諸の一切の阿修羅等俱に聲を發して言はく、「南無釋迦牟尼如來、南無釋迦牟尼如來。我等は今より往いて釋迦牟尼如來に見えん。禮拜供養の故に。法を聽かんが(ための)故に。及び衆僧に供奉せんが(ための)故に。大集を看んが爲の故に。無上菩薩乘を求めんが爲の故に。魔幢を退落せんが爲の故に。法幢を建立せんが爲の故に。三寶種を斷絶せざる爲の故に。第一義聖諦法門を聽かんが爲の故に。煩惱道苦道を休息せんが爲の故に。魔縛を斷截せんが爲の故に。愛河を枯竭せんが爲の故に。法海を滿ぜんが爲の故に。智海に入らんが爲の故に。衆生海を成熟せんが爲の故に。諸佛海に供養せんが爲の故に。是の故に我等及び諸の眷屬は佛所に往詣す。惡魔をして我等の中に於て、更に自在を得させずして、我等は今より復た重ねて是の如き苦に遭はざらんことを」と。

爾の時、[八三]牟眞隣陀阿修羅王は、復是の言を作さく、「我れ今亦た、婦妾・官人・男女・大小の諸の阿修羅の婦女眷屬八萬四千と與に、一切皆悉く青衣の服を著けて青色に莊嚴せん。青傘・青蓋・青幢・青幡・青車・青華・青色の摩尼琴瑟・箜篌・青寶・青鼓なり。我れ今諸の五音にて作樂し、歌舞調戲の第一莊嚴をとり、及び眷屬を將ゐて往いて佛に見え、恭敬禮拜して妙法を聽受し、衆僧に供奉せん(ための)故に佛所に往詣せん」と。

爾の時、[八四]須質多羅阿修羅王は復た是の言を作さく、「我れ今亦た、婦妾・宮人・男女・眷屬・九十九百千の阿修羅婦女と與に一切皆黃衣を著けて莊嚴せん。乃至衆僧に供奉せんための故に佛所に往詣せん」と。

爾の時、睒婆羅阿修羅王は復た是の言を作さく、「我れ今亦婦妾・宮人・男女・眷屬百千億の阿修羅女と與に一切皆悉く紺色の衣を著け、瓔珞をもて莊嚴し、乃至衆僧に供奉して佛所に往詣せん」と。

爾の時、跋持毘盧遮那阿修羅王は復た是の言を作さく、「我れ今亦た婦妾・宮人・男女眷屬九十九の

て壞せざるをいふ。

【八〇】 四聖諦聲。梵 Catvāryāryasatyāni-śabda. 苦 Duhkha 集 Samudayah 滅 Nirodhah 道 Mārgah

【八一】 九次第定聲。四禪・四無色び滅盡定の九種の禪定を次第に一禪より一定に入る行法なり。次第とは人が若し禪に入る時智慧深利し一禪より一禪に次第入定して心々相續し異念を生ぜざるをいふ。大藏法數四十七下卷千七十三頁を見よ。

【八二】 登祚。普通天子の位に登ることなり。一切經音義第十七(大正五四・No. 2128 p. 415 b)に徂故反祚位なり。祿也、亦福也、祚也といへり、此處は佛陀の位に登ることをいふ。

【八三】 牟眞隣陀阿修羅王、梵 Mahāmucilinda-asura-rāja

【八四】 須質多羅阿修羅王、梵 Sucitra-asura-rāja.

悉く種々の天華に化作せしめて其の處に雨らしめたまふ。魔王波旬及與眷屬は復た兩手を以て佉羅帝山を捉へて、速に疾く三千大千世界を震動せしめんと欲す。佛は復た此の三千地界を以て加して金剛と作し、尙乃至一塵すら動かすこと能はず、況んや能く多なるをや。魔王は復た瞋怒の力を以て、阿修羅所住の方に向ひ、口を放ち、氣を嘘き、黑氣雲を成じて、其の城邑宮殿をして陰闇ならしめ、諸の阿修羅をして重ねて復た迷惑して去來すること能はざらしむ。爾の時世尊は即ち復た其の吹く所の氣雲を變じて、種々の天妙華雲を作さしむ。爾の時、彼の四阿修羅の城邑・宮殿に於て、復た種々の天華の雨を雨らし、其の華雨の中に百千微妙の法を演出せしめたまふ。いはゆる佛聲・法聲・僧聲・檀那波羅蜜聲乃至般若波羅蜜聲・二善行聲・[七四]三歸依聲・[七五]三律儀聲・[七六]三不護聲・三依止聲・三種菩提聲・三乘聲・三修聲・三種善根聲・越度三界聲・三受聲・三解脫聲・三示現聲・四念處聲・[七七]四正勤聲・[七八]四如意足聲・[七九]四不壞信聲・四禪聲・四梵住聲・四攝聲・四無礙智聲・四無色定三摩跋提聲・[八〇]四聖諦聲・五根聲・五力聲・五支三昧聲・五解脫入聲・顯示六根聲・六和敬聲・六念聲・六通聲・七聖財聲・七識住聲・七覺分聲・八聖道聲・[八一]九次第定聲・十聖處聲・佛十力聲・大慈聲・大悲聲・因緣生起聲・心不可壞聲・捨一切惡見聲・不忘羅菩提心聲・不退轉聲・忍聲・三昧聲・陀羅尼聲・[八二]授記登祚聲・無生忍聲・苦行聲・十地聲・十八不共佛法聲・菩薩聲・轉法輪聲・不可壞佛聲・捨聲・厭聲・解脫定聲・滅聲・成就衆生聲・攝受正法聲・辯才聲・無常聲・苦聲・無我聲・空聲・無所作聲・寂靜聲・無生聲・如聲・實際聲・入法界聲・無衆生・無命・無養育・無受者・如如・不生・不滅・不常・不斷・不去・不來・不住・不行聲・大神通變化聲・加護三寶種聲・乃至大般涅槃地獄・畜生・餓鬼・人天・苦五陰重擔聲・數々流轉生死與受別離聲・一切有爲流轉之獄如幻芭蕉水月響聲・信念精進忍及智慧十善業道護持聲・出彼流轉獄聲於彼華雨出是無量百千種聲なり。彼の諸の音聲は能く無量阿僧祇等の阿修羅をして三寶の中に於て深く敬信を得、尊重歸依して希有心を生じ、渴仰して釋迦牟尼に見えんと欲し、及び法を聽いて衆僧に供奉せんと欲し、極めて甚だ

【七四】三歸依聲。三歸戒に同じ。
一、歸依佛 Buddham saranam gacchāmi
二、歸依法 Dhammam saranam gacchāmi
三、歸依僧 Sangham saranam gacchāmi

【七五】三律儀聲前卷脚註七三項を見よ。

【七六】三不護聲。如來の三業は純淨にして過を離れ防護を要せざるをいふ。法華經藥草喩品に知道者・開道者・說道者を意・身・口の三業に配當せり。

【七七】四正勤聲。梵 Catvāri-prahāṇāni-śabda 三十七科道品の第二未生の惡をして生ぜざらしむ。已生の惡を滅せしむ。未生の善を生ぜしむ。已生の善を生ぜしむ。四正斷・四意斷・四正勝などゝいふ。四念處に次で修する行法なり。

【七八】四如意足聲。四神足聲に同じ。梵 Catvāra-ṛddhipāda-śabda 三十七科道品中四正勤に次で、修する所の行法なり。欲・念・進・慧の四如意足をいふなり。四種の禪定のこと。今此の四種の定は定慧均等にして所願皆得るが故にかくいへり。

【七九】四不壞信聲。四不壞淨聲に同じ。三寶及び戒を信じ

今此の瞿曇は幻を作して一切衆生を誑惑せり。四天下地及び虛空に遍く、一切盈滿して、皆悉く瞿曇を見んと欲せし故に來れり。今此の下賤畜生の類や諸の阿修羅も亦復た攝を蒙れり。我れ今當に魔の境界なる神通勢力を作すべく、遊戯して加はる所に、更に幻惑を作して彼の沙門瞿曇を惱亂せしめ、及以諸の來れる會衆を降伏せしめん」と。時に、魔波旬は其の眷屬を觀じて、偈を說いて言はく、

諸の魔よ各作念せよ、　我れは常に怨を降伏し、
及び此の會衆を惱して、　幷せて阿修羅を禁ぜん。

と。

爾の時、世尊は偈を說いて言はく、

汝等は我れの力を見よ。　昔は菩提樹に於て
天神は證明をなせり。　我れは眞の正法を修めたり。
汝のあらゆる力に隨ひ、　悉に汝は當に之を現ずべし。
若し能く我を惱さば、　我れ當に歸依を作すべし。

と。

爾の時、魔王波旬は復た第一の極重瞋恨を增し、一切魔力の境界神通遊戯を以て[七二]加せらる。四方最熱の風を念じて、其の一切の諸の來れる大衆をして熱風に觸れ惱まされて、而して降伏を作さしむ。時に世尊は卽ち[七三]摧伏魔力三昧に入らせたまふ。其の三昧の力は、卽ち四方に於て、復た第一の妙香なる涼風を起し其の身分に觸るれば皆快樂を受く。魔王波旬は是の事を知り已りて、復た佛前に於て、大火聚を化す。世尊は卽ち彼の處に於て淸涼なる大池を化作したれば、水涌きて上出す。魔王は見已りて、復た空中に於て大石を降雨せり。佛は卽ちその雨せし所の石を變じて、

【七二】加。加被などの加に同じ。

【七三】摧伏魔力三昧。釋尊は魔力を摧伏する三昧に入りて魔王波旬の化作物を粉碎せられたることを敍せり。

是れ他方の諸佛の使たりや。

是れ大德の諸の菩薩たりや。

と。

爾の時、佛は求斷疑菩薩摩訶薩に告げて言はく、「善男子よ。此は是れ魔王波旬なり。四阿修羅の城邑の宮殿に於て、陰闇・灰塵・烟霧・蚊虻・毒蠅及以種々なる毒蛇・蜂蝎に化作し、彼の一切の樹林・草木・華果・泉池に於て皆悉く枯涸し、一切の阿修羅は苦困して死せんと欲す。彼等は我に向ひ、一心に歸依し合掌して禮を作し、種々の華乃至末香を以て、彼の阿修羅所住の城邑に於て、我に向ひ遙に擲ちて供養を作せり。羅睺羅阿修羅王の擲ちし所の寶蓋は、今の我が頂上の者是れなり。毘摩質多羅阿修羅王の擲ちし所の寶蓋は我が右肩の者是れなり。波羅陀阿修羅王の擲ちし所の寶蓋は我が左肩に在るもの是れなり。踆抴毘盧遮那阿修羅王の擲ちし所の寶蓋は今の我が前に在るもの是れなり」と。

爾の時、魔王波旬は座より起ちて、佛に向ひ合掌恭敬し禮拜して是の言を作さく、「此の諸の阿修羅は佛の恩福を蒙り、我も今亦、諸の阿修羅をして還た具足し饒益して安樂を得せしめむ」と。佛、波旬に告げたまはく、「汝は今、是の如き言を作すを須ゐざれ、我れは已に其をして充足し安樂ならしめたり。我れは諸の阿修羅の城邑宮殿の轉勝れたる微妙の樂具を悉有して、還復すること故の如し。何を以ての故に、彼等四大阿修羅王は是れ我が親舊なればなり。是の如く其の餘のあらゆる一切の阿修羅等は、我に於て信を得、敬ひ仰ぎ尊重して心に希有を生じたり。今當に久しからずして此に來至すべし、聽法の爲の故に」と。魔王波旬は復た惡心を生じて是の念を作さく、「我れは是れ一切欲界の中に最勝自在なり。諸の衆生に於て能く苦樂を作す。沙門は是れ人なり。何ぞ能く狡猾にして幻惑異端妖邪多語なる。敢て我と共に競ふて我れと校量比並することを欲するや。釋・梵[六七]・四王[六八]・摩醯首羅[六九]・那羅延天[七〇]・轉輪聖王[七一]と一切衆生は能く我れと校量比並して相違を作す者無し。

【六七】　釋梵。帝釋天(三十三天)と梵天(色界初禪天に梵衆・梵輔・大梵の三天の中の大梵天)のこと。梵天は前卷脚註四一項を見よ。帝釋天に就いては本卷脚註の一九項を見よ。

【六八】　四王。四天王のこと。前卷脚註の中四六・四七・四八・五〇項を見よ。

【六九】　摩醯首羅。梵 Maheśvara 大自在天・自在天・威靈帝などゝ譯す。色界の頂上に住せる天神の名なり。智度論の第二に依れば此の神は八臂三眼にて白牛に騎るとあり、印度人間に可なりに信仰されし神格。これを執するものを摩醯首羅論師といふ。

【七〇】　那羅延天。梵 Nārāyaṇa 那羅延那、那羅野拏とも音譯し、堅固・鉤鎖力士・人生本等と譯す。天上の力士なり。或は梵天王の異名と稱し、議論の生ずる所なり。

【七一】　轉輪聖王。梵 Cakravarti-rāja 單に轉輪王に同じ。研迦羅伐辣底遏羅闍はその音譯なり。須彌の四洲即ち全世界を統御する大王なり。此の王は身に三十二相を具備し即位の時、天より輪寶を得、それを轉じて四方を威伏するより轉輪王といふなり。

加ふる所の一切の諸の難は皆悉く周遍して遺餘有ること無し。但に熱惱を受け、願樂して我が陰覆救護して歸と爲り、趣と爲らんことを求む。我れ當に諸の阿修羅を救護すべし。今は正に是の時なり、時に世尊は大悲の威勢を以て一切の樂を現じ、卽ち[六三]悲風光明三昧に入りたまひ、三昧力の故に、諸阿修羅の宮殿、あらゆる魔の神力の加はる所の苦事をして、一念の頃に皆悉く休息ならしめて、還復故の如くならしめたまふ。亦[六四]三十三天の宮殿の如し。中に於て卽ち第一の妙樂可樂の事を現じたまふ。彼の諸の阿修羅は見已りて、心に踊躍して歡喜を生ず。口と眼と皆悅び、熙怡微笑して皆是の言を作さく、「南無佛陀、南無佛陀」と。是の語を作し已りて卽ち諸天の勝妙なる寶鬘を以て、佛の方所に向ひ、遙に擲ちて奉獻せり。其の羅睺羅阿修羅王の擲ちし所の寶鬘は卽ち佛の所に到り、佛の頂上なる空中に於て住せり。毘摩質多羅阿修羅王の擲ちし所の寶鬘は亦佛の所に到りて、虚空の中に於て右肩の上に住せり。波羅陀阿修羅王の擲ちし所の寶鬘は亦佛の所に到りて、虚空の中に於て、左肩の上に住せり。跋持毘盧遮那阿修羅王の擲ちし所の寶鬘は亦佛の所に到り、佛前に住して、光を放ちて照せり。其の餘のあらゆる諸の阿修羅は、復た種々の衆寶・香華・幢幡・寶蓋及以金樓・寶珠・天鬘・眞珠・瓔珞、種々の衣服・塗香・末香を持して、彼等の一切は悉く世尊に向ひて、遙に擲ちて奉獻せられ、而して以て供養せらる。是の時、此の佉羅帝山牟尼諸仙の所依住處に於て、種々の華乃至末香を雨らすこと暴雨を降すが如し。

爾の時、會中に菩薩摩訶薩有り。[六五]求斷疑と名く。座より起ちて[六六]偏袒右肩にして、合掌して佛を禮して偈を以て問うて曰はく、

大仙世尊の無量智は、　先に於て已に是の如き雨を雨らしたまひ、
諸の神通變化の瑞を現はしたまへり　月藏菩薩は此に來り到れり。
今復た種々の寶を雨らしたまへば、　誰か當に復た此に來り到るべき。

【六三】悲風光明三昧。梵 Karuṇa-pavāyu-prabhā-samādhi (?)
【六四】三十三天。梵 Trāyastriṁśa のこと。忉利天。欲界の第二天にして須彌山の頂上帝釋天中に在す。
【六五】求斷疑菩薩。會中の一菩薩なり。先には月藏菩薩の來到によりて多くの供養ありしが今は阿修羅王達の歡喜の餘りの供養を知らざればその疑を決斷せんが爲に出づ。
【六六】偏袒右肩。袈裟を掛くるに偏に右肩を袒ぐなり。是れ比丘が尊者に恭敬を表する相なり。偏袒一肩に同じ、梵 Ekāṁsaṁ uttarāsaṅgaṁ kṛtvā

我等は魔の爲に嬈ばれて、　無力にして諸の苦を受く。
願くは魔の加はる所を除き、　我等の宮を洗浴せしめん。
此等の[六二]僧祇衆は、　諸の苦のために惱さる。
願くは此の諸の苦を救はんため、　當に往いて世尊を見たてまつるべし、

と。

爾の時、跋持毘盧遮那阿修羅王は兩手に、梵天艶光・摩尼寶蓋を捧持して、頭面に禮を作して偈を以て讃じて曰はく、

今、牟尼尊、法に於て自在者を　禮したてまつる。
釋梵王を超過して、　魔及び軍衆を降したまへり。
日月光及び、　四天王とを超過して、
慈悲は日月よりも明かに、　普く諸の衆生を照し、
[六三]五日並び出づる時、　海水悉く枯竭するも、
供佛の功徳の若きは、　能く枯竭する者無し。
三界を超度して、　而も無畏城に入る。
大悲衆生を覆うて、　諸苦悉く除滅せらる。
心を諸の衆生に等しくして、　母の一子を視るが如し。
我等憂翳の障は、慈風にて　願くは吹散したまへ。
更に餘に歸依すべきもの無く、　我等の苦を救ふべし。
佛の如く功徳滿ずれば、　修羅宮を捨つる莫し。

爾の時、世尊は佛耳を以て聞きたまひ、佛眼を以て見たまへば、諸の阿修羅城邑、宮殿の魔力の

【六二】僧祇。梵 Saṅghika 衆又は數と譯せらる。

【六三】五つの太陽同時に出づること。

佛の身心少分だに、　動かすこと能はず。
彼のあらゆる樂の若きは　境界身心の事なり。
佛は常に等しく慈悲(をもて)　此に於て更に異ること無し。
唯た佛のみ天人に於て、　能く一切の樂を施したまふ。
我等は魔の爲に惱まされ、　心孤にして所依無し。
餘の衆生は、　能く魔業を滅すこと有ること無し。
唯だ佛は速に除遣したまひ、　盡く壞して餘り有ること無し。
諸の天龍は證知せよ、　夜叉も阿修羅も。
佛の如きは衆生の最たり。　能く一切の苦を救ふ。
魔は速に我が修羅の諸の宮殿を　滅せんと欲せり。
願くは速に戒光を放ちて、　我に滿足の樂を施せ。

と。

爾の時、波羅陀阿修羅王は兩手に梵天・光幢・摩尼・寶珠・和合の天蓋を捧持して、頭面に禮を作して、偈を說いて讃じて曰はく、

流轉の獄に縛せられて、　諸の一切の樂を離る。
極惡は大巨海たり、　沈溺して所依無し。
唯だ佛のみ精勤に行じて、　六〇三阿僧祇(さんあそうぎ)に於て、
自度して彼岸に到り　悉く煩惱の海を竭したまへり。
諸の衆生の爲の故に、　六年苦行を行じたまひ、
而して無上智を得て、　彼の煩惱を滅除し、

【六〇】釋尊成佛までの年時なり。阿僧祇 Asaṅkhyeya にして無數長時なりとす。大乘家にては菩薩の階位を分つに異說あり、此中五十位に分つものに依れば、之を長時の三期に分類す。即ち十位より十廻向までの四十位を第一阿僧祇劫とし、第一地より第七地までを第二に第八地より第十地までを第三となし、第十地を即ち成佛の位なりと越ゆればせり。

佛は八聖[五九]の船を以て　苦の衆生を度脫したまへり。
涅槃の味を充飽して、　阿修羅を慈念したまへ。
佛は諸の衆生に於て、　惡種性を耻ぢず、
一切は赤子の如し。　是の故に佛に歸依したてまつる。

と。

爾の時、毘摩質多羅阿修羅王は兩手を以て、一切の諸天の登祚して著くる所の摩尼寶鬘を捧持して、頭面に禮を作して偈を以て讃じて曰はく、

(佛は)天・龍衆、　修羅・鳩槃茶を勝過せり。
盡く諸の煩惱・　心意所作の惡を除けり。
衆苦の道を降伏して、　彼岸に到れり。
有想及び　無想の衆生を遠離して、
衆生を悲念するが故に、　涅槃に入りたまはず。
諸の衆生の爲の故に、　能く一切の苦を忍ぶ。
諸の衆生を視て、　母の一子を念ずるが如し。
願くは此等を愍みて、　苦處に悲水を灑ぎたまへ。
苦の惱觸と　煩惱の水に溺るゝ所とを休息して、
堅勇を起發する者には、　願くは衆生の苦を救へたまへ。
今、苦々至り、　魔力の壞るゝ所たるを念ず。
苦觸の阿修羅に、　願くは大悲水を灑ぎたまへ。
衆生若し佛に於て、　瞋惡の心を起すも、

【五九】聲聞乘の四向四果をいふ場合と或は八聖道とを意味する場合とあり。蓋しこの所は後者ならん。

釋梵・自在・修羅仙も　欲自在・魔・那羅延も
悉く彼を禮して歸處を作せり。　是の人は能く衆に解脱を示せり。
諸の一切の三界の中に於て　あらゆる諸の天衆に超勝したまへり。
調伏寂靜にして諸根を降し、　樂寂の七聖財を莊嚴せり。
涅槃の到彼岸に安住して　悉く能く煩惱の海を枯竭したまへり。
是の故に我等一切の衆は　悉く能く諸の苦を滅する者に歸せん。
皆種々の妙香華を持して　各、合掌して請ひ求めん」と。

爾の時、羅睺羅・毘摩質多羅・波羅陀・跋持毘盧遮那の四阿修羅王及び男夫・婦女・童男・童女のあらゆる一切の阿修羅衆は皆悉く雲集して、燒香供養を以て佛を禮して、求請する者あり。種々の雜色の妙華を持するあり。種々の摩尼寶珠を持するあり。種々の[五七]幢幡・寶蓋・金樓・眞珠・瓔珞・衣服を持して以用て佛に奉りて求請する者あり。種々の箏瑟・箜篌・簫笛を持して鼓吹し五音にて樂を作して供養禮拜して佛を求請する者有り。羅睺羅阿修羅王は己の神通境界の力を以て、大身遊戲し、兩手に帝釋の[五八]毘楞伽摩尼寶蓋を執持して、頭面に禮拜して遙に世尊に奉りて偈を説いて讃じて曰はく。

佛は衆生の爲めに　久しく諸の苦行を修するを樂み、
一切衆を憐愍したまへり。　願くは亦我等をも愍みたまへ。
忍辱は大地の如し。　諸の衆生を悲愍したまへり。
諸の濁惡を休息して、　我等を愍み覆ひたまふ。
佛は諸畏を度し訖りて、　無上智を得たまへり。
心を衆生に等しくし、　願くは阿修羅を愍みたまへ。

【五七】幢幡。共にはたと稱せらるゝも幢は梵語馱縛若 Dhvaja にして幡は梵語波吒迦 Patāka なり。佛菩薩供養の具なり。
【五八】毘楞伽摩尼寶、具に釋迦毘楞伽 Śakrābhilagnamaṇiratna といふ。寶玉の名にして觀無量壽經に釋迦毘楞伽寶、以爲二其臺一と有り。

唯だ王のみは諸の衆生の爲の故に、　常に勤精進にして諸法を修し、
大福德神通力、　及以智慧莊嚴の身を具せり。
此れは是れ何なる力、誰の所作にして、　我等阿修羅を滅せんと欲するか。
誰れか能く我等を救護せんや。　當に彼(佛)を禮敬して歸依すべし」と。
爾の時、羅睺羅阿修羅王は偈を說いて答へて言はく、
「此れは[五四]釋梵・天王の力に非ず。　亦た[五五]自在・[五六]那羅延にも非ず、
又た夜叉及び龍神にも非ず。　惟だ魔王欲自在を除かんためのみ。
我諸の龍を惱せるも亦是の如し。　大仙瞿曇のみは斷除を爲さん。
我等は彼れ瞿曇仙を禮せん。　能く我等に安樂を施すが故に。
爾の時、跋持毘盧遮那阿修羅王は偈を以て問ふて言はく、
「是れは天・人・龍・夜叉の爲に　能く一切に安樂を施す者なり。
彼は何なる神通精進力かある　僞に當に方便して幻惑を造るか。
何れの法中に於て自在を得、　何誰が能く彼の敎勅を受くる。
甚力にて解脫を得ると爲し、　而も何なる力を得て其をして然らしむるや」と。
爾の時、羅睺羅阿修羅王は偈を以て答へて言はく、
「昔は端正なる大沙門の、　菩提樹の陰影に端坐せるを見たり。
魔將軍衆とても彼に詣れば、　慈悲の力を以て速に降伏せり。
彼に於て勝れたる菩提を成ずるを得て、　一切の諸天衆に超過して、
大慈悲を具して涅槃に入りたまふ。　故に能く衆の苦海を枯竭せしめらる。
此の諸仙中最勝幢たり。　十力を具足して衆生の藥たり。

【五四】釋、梵。帝釋天Śakra-deva-indra 梵王天Mahābrahmaṇaのこと。本卷脚註六七を看よ。
【五五】自在。大自在。Mahé-śvara 摩醯首羅のこと。本卷脚註六九を看よ。
【五六】那羅延。梵。Nārāyaṇa 本卷脚註七〇を見よ。

一切は今當に悉く退落すべし。
男夫・婦女は先づ兇健にして、
悉く諸の天と共に齊等なりき。
命盡き衆生の白法も盡き、
及び聰明なる人の所知も盡き、
苗稼及び諸の華藥も盡き、
欲せし所の意に稱へし音樂も盡き、
喜樂の事盡き人天も盡き、
婆羅門種・[四九] 刹利盡き、[五〇]
惟だ諸の惡衆生等と共に、
妄語・兩舌・綺惡口と
儉短增長及び饑渴と
他に利を得るを見て嫉忌を生ずると、
毒害刀矟劍輪を增すと
蚊・虻・惡風及び烟塵と
地獄と畜生と餓鬼と
此れ善行相應の時に非ず。
白業の人の衆事は增し、
是れ阿修羅の盡きる時至れるなり。

城邑・巷陌は盡く茫然たり。
顔色端正にして勢力有り、
今時の中に於て定んで當に盡くべし。
羞耻し慚愧し解心も盡き
巧行と善と聖智も盡き、
果味等盡き、諸戒も盡き、
衆寶衣服飲食も盡き、
夜叉・乾闥修羅も盡き、
幷に諸の[五一]毘舍・[五二]首陀も盡き、
聖に非ざる諂曲・殺・盜・婬と
貪恚・[五三]胆佞・癡・邪見と
愛離怨會と捕獵と、
割截斬斫に諸の破壞と、
面目涙を流して憂悲して苦むと、
斯等は幷せて來りて觸惱せり。
是等の境界は大苦海なり。
念々に正見を退失せん。
是の如き衆の惡は皆興り盛なり。
唯無等乘のみ能く(之を)遮止せん」と。

爾の時、波羅陀阿修羅王は羅睺羅阿修羅王に白して偈を説いて問ふて言はく、

五四・四一五頁)又鉾𨨏に作る。二形同じ。説文に矛の長さ二丈とあり、兵車を建つるなりといへり。廣雅に云はく穳は謂はく鋋なり鋋とは小矛也といへり。

【四九】婆羅門。梵 Brāhmaṇa 僧門階級四姓の第一。
【五〇】刹利。梵 Kṣatriya 武士階級、四姓の第二。
【五一】毘舍。梵 Vaiśya 商人階級。四姓の第三。
【五二】首陀 梵 Śudra 奴隷階級。四姓の第四。
【五三】胆佞。一切經音義第十七卷に依れば、七餘反。謂はく胆は妬なり。下字は奴定反。諂娟也。字義自ら明なり。

王とは諸の眷屬及び所治せし處の男夫・婦女・童男・童女と與に、[四六]羅睺羅阿修羅王の所治せし城邑・聚落、宮殿に向ひて、彼の是の如き諸の惡・惱亂・蚊虻・蛇蝎・毒蠅等を見已りて、三阿修羅王は俱に羅睺羅阿修羅王の所に至りて前に於て住立せり。

毘摩質多阿修羅王は羅睺羅阿修羅王を請問して偈を說いて言はく

一切の修羅の諸の宮殿は、　猶し地獄の如く等しうして異ること無し。
熱風暴かに起りて此に來此して、　一切の狀は火の燒焚するに似たり。
あらゆる樹林の諸の果實は、　悉く皆墮落して地に在り。
あらゆる蓮華及び浴池と、　草苗と衆くの華とは悉く枯竭せり。
烟塵壒埲は我等の、　阿修羅城なる諸の宮殿に於て、
及び蚊・虻・蚤・惡蠅の　量り無き諸の惡毒蟲等有り。
今是の如き衆の惡聲を聞き　衆生は多く惱みて喜樂せず。
諸の阿修羅は此の苦を受け、　悉く饑渴して逼惱せられたり。
苦逼して歸依すべき所無し。　一切は驚き怖れて心焦枯せり。
生死の畏れ等は誰の威力なるか、　而も我が天龍を利益せず。
何なる方便を以てか、　是の如き種々の怖畏の事を休息せしめん。
是れ惡龍の此に來至して、　我等阿修羅を降伏せんとするに非ずや。と。

爾の時、羅睺羅阿修羅王は偈を說いて答へて言く、

阿修羅の輩、汝諦に聽け。　我等は昔日、安樂を具へり。
五欲の須ゐる所は皆意に稱ひ、　神通勇健にして大力有りき。
持ちし所の弓・刀・及び箭・矟、　[四七]羂索・[四八]矛矟・劍輪等、

梵 跋持 Fandhiḥ 卽ち婆稚阿修羅か。毘盧遮那は Vairocanaḥ として翻譯名義集の阿修羅の名目の下に別に出づ。然るに今兩者を合して Bandhi-Vairocana-asura-rāja とせり。婆稚阿修羅は法華などに出づる四阿修羅王の一にして本經にも後に婆稚阿修羅出づ。

【四六】羅睺羅阿修羅王。梵 Rāhula-asura-rāja. これ有名なる阿修羅王なり。梵語字典四八四頁に羅虎那阿修羅王とも音譯せり。本行集經第二十四に云はく羅睺羅は隋に語言といふ。慧苑音義上に云はく羅は此に攝といひ、睺は惱といふなり。謂く此の修羅は能く日月光明を隱攝して中に於て諸天の苦惱を主るなり。或は羅虎那と曰ひ、此に名普聞といふ。謂く日月普天に照臨するとき之を蔽ふ。故に天下其の名を聞くなり。倘多くの典據を載す。就て見るべし。

【四七】羂索。鳥獸を取る道具俗にわなといふ。佛敎にては、佛菩薩が衆生を攝取して救濟する象徵として多く之を喩ふ。不空羂索觀世音といへる名稱の如きもその一例。

【四八】矛矟。矛も矟もほこなり。一切經音義卷十七、大正

一心に勝れたる妙法を聽受すれば、　彼の淨心に於て大福を得ん。
福長壽を以て諸の怨を降さん。　世に於て常に威德の樂を受く、
若し此の福を以て解脫を求むれば、　諸の煩惱を斷じて羅漢を得ん。
及び諸緣を斷じて辟支と作るも、　亦能く成佛して諸の樂を具せん。
是の如くすれば當に得べきこと疑有ること無し、　是の故に速に諸緣の縛を捨てよ。
一切は當に淸淨心を起すべし。　速に佛の所に到りて供養を修せん。
此の賢劫の初より以來、　未だ是の如き大衆の集有らず。
後に於て久遠に[四一]彌勒の興ることあるも、　我等は時と壽とを許すことを得ざらん」と。

爾の時、彼の四阿修羅の城邑宮殿に於て是の如き事有り。(月藏)菩薩の力を以て莊嚴し加持するが故に、是の句義を聞きて、皆信心を生じ、各々共の城邑・宮殿に於て一處に雲集して、共に相謂つて言はく、「今當に此に於て何事か有らんと欲す」と。所以は何ん。我等は昔より來た未だ會て見ざる者を今之を見ることを得、昔より未だ聞かざる者を今之を、聞くことを得ればなり。人の知る者無き時に、魔波旬は已の宮より下りて、佛を禮せんと欲するが故に往いて華を散じたり。散ぜし所の華は四天下に於て皆華の雨と作れり。雨る時に當りて、四阿修羅の城邑宮殿に於ては一切の處に遍く、皆悉く變じて最極臭穢と作り、及び惡烟・塵灰土・[四二]塳㶿が處々に盈滿し、蚊虻・蛇蝎・諸の惡毒の蠅も亦復悉く滿ち、憂愁惱亂して愛樂すべからず。爾の時に當りて諸の阿修羅の城邑・宮殿は皆悉く黑闇たり。一切の阿修羅の男夫・婦女・童男童女は悉く最極憂愁惱亂を懷きて彼こに住することを樂はず。各々巷陌に於て迭に相雲集して已の王の所に至りて前に在りて住立せり。

阿修羅王は諸の衰害せるを見て極めて憂惱を增したり。[四三]毘摩質多羅阿修羅王は諸の眷屬及び所治せし所の一切の阿修羅の男夫・婦女・童男・童女と與に[四四]波羅陀阿修羅王と[四五]跋持毘盧遮那阿修羅

【四一】 彌勒。梵 Maitreya 彌勒菩薩のこと。その出世年時につきては三四の異說あり、普通に五十六億七千萬年を經て釋尊の次に出づる當來佛と信ぜらる。

【四二】 塳㶿。宋・元の二本は熢㶿に作り、明本は蓬㶿に作り、聖語藏本は蓬勃に作れり。然るに宮內省藏本は熢㶿に作る。蓋し意味は熢㶿の方可ならん。烽は火の氣、㶿は煙の起る貌にしてそれより蒸して熱い義なり。

【四三】 毘摩質多羅阿修羅王。梵 Vemacitra-asura-rāja. 毘摩質多・毘摩質咀利などの音譯あり。梵語辭典三八八頁には法華文句二之二を引いて毘摩質多は此に淨心といひ、亦種々疑といふ。海水を波けて聲を出すを毘摩質多と名く。即ち緣脂の父なり。法華玄贊第二に云はく吠摩質咀利此に綺畫といひ、明に其の身を文り、或は寶錦といひ、用ゐて其の服を冠とし毘摩質多羅といふは訛なり。此れを最大とし、天帝釋の婦公舍支の父なりといへり。倘多くの典據を出せり。就いて見よ。

【四四】 波羅陀阿修羅王。未だ辭書類に此の名を見ず。Pāla-tr-asura-rāja か？指教を俟つ。

【四五】 跋持盧遮那阿修羅王。

是の如く利養を貪り求むる者は　　既に道を得已りても還復失はん」と。

爾の時、魔王は偈を說くを聞き已りて、即ち自ら念言すらく、「沙門瞿曇は、我れの虛僞にして詐りて歸依を現ぜるを知りたまふ」と。羞愧して默然、退いて一面に坐して法を聽きて住せり。魔の諸の婇女の諸根、形貌・容狀・光色は皆悉く枯悴して變じて惡色・背僂・跛蹩・醜陋にして弊惡と成り、あらゆる男夫は都て復た歌舞し調戲して五音もて樂を作すこと能はず、皆悉く閉塞して聲を出すこと能はずして、却りて一面に坐して法を聽きて住せり。

月藏分第十四　諸阿修羅詣佛所品　第三

爾の時、月藏菩薩摩訶薩は諸の衆生を攝化せんと欲するが爲の故に、月幢月呪の句を說かれしの時、彼の四大阿修羅王の所治の處に於て、一切のあらゆる草木・華果・衆寶・瓔珞莊嚴の事・衣服・臥具・皆悉く變じて半月と成りて現ぜり。彼等の諸の事は迭に相[三八]棖觸して五音の聲を出し、あらゆる鼓具・[三九]齊鼓・鑔鼓・箜篌・箏笛を具足して樂を作し、彼等の音中亦復た、是の如き偈句を演出すらく

唯佛のみ化導したまひて以て安隱たり。　并に衆と佉羅山に住在したまふ。
息煩惱に於て衆生を拔き、　其の爲に說法して永く斷除せしめ給ふ。
凡夫は悉く生死の海に墮し、　煩惱は河を駛りて波浪を起し、
[四〇]三有に更に哀愍する者無し。　牟尼尊の如きは慈善の心あり。
多くの衆が一方所に聚り集れり。　天・人・鳩槃・龍・夜叉は、
悉く佉羅帝山の所に依りて、　諸の苦に於て畏れて解脫を求む。
我等は俱時に速かに彼こに詣られ、　正法を聽聞せんと欲せんが爲の故なり。
魔王は久しからずして或は此に來らん。　而して我等の爲に留難を作さん。

【三八】 棖觸。宋本は棖を棖音たらに作る。今宋版に從ふ。慧琳音卷第四十六にも出づ。慧琳音義第十七（月藏經又は玄應撰也）に說文は揨に作る杜也。音は紂庚反。字は𢹂作棖。丈庚反棖觸なりといへり。

【三九】 齊鼓鑔鼓の四字は聖語藏本に出づ。玄應の一切經音義に此の四字の解あり。唐代に流行せる月藏經は全く聖語藏本と一致す。今大正藏經は三本に無きを以て脚註にのみ出して本文に出さず。齊鼓、今淸樂中に此の鼓有り此の面安齊なる故に齊鼓といふとあり。鑔鼓。力占反。謂く瓦を以て䝉革を冒りて兩面となす。杖を用ゐて之を擊つものなり。經文に簾に作るといへり。鑔は匳なり。かゞみばこなどゝいふはこのことなり。

【四〇】 三有。欲、色、無色の三界をいふ。

唯だ正法及び涅槃のみ有り、　是の故に無等法に歸依したてまつる。
世に於て更に僧衆に如くは無し、　和合解脱の八丈夫は
能く一切の煩惱縛を離る　是の故に大德僧に歸依したてまつる。
閑居靜默、常に一食にして、　第一義心と恆に相應せり。
慈悲もて諸の衆生を愍念す。　我れも亦彼等に歸依したてまつる。
三寶種に於て熾然となり、　あらゆる佛の聲聞を護養したまふ。
我れ一切の諸の衆生に　名衣と上饌とにて供養を勸めん」と。

爾の時、會中の諸の來れる大衆、若しは天、若しは人・乾闥婆等は同聲にて讃じて言はく、「善い哉。善い哉」と。

爾の時、世尊は慧命[三六]憍陳如に告げて、偈を說いて言はく、

我れ已に汝聲聞衆に告ぐ、　あらゆる相應(によりて)解脱を求めよ。
常に所依の[三七]四聖種を樂はば　彼を以て菩提の道を滿ずることを得ん。
樹果繁りて速に自ら害するが如く、　竹蘆の實を結ぶことも亦是の如し。
騾の懷姙して自ら身を喪ふが如し。　無智(のもの)利を求むるも亦復た然り。
亦盛夏の暴雹の雨が　一切の諸の苗稼を傷害するが如し。
是の如く利養を貪り求むる者は、　必ず當に速に勝れたる菩提を失ふべし。
又諸の樹の華が開敷して　復た火の爲に焚燒せらるゝが如し。
是の如く利養を貪り求むる者は　亦當に菩提の道を退失すべし。
若し比丘有りて供養を得んに　利養を樂ひ求めて堅著する者は
世に於て更に此の如き惡無し。　故に解脱の道を得さらしむ。

【三六】憍陳如。梵 Kauṇḍinya 具に阿若憍陳如 Ājñāta-Kauṇḍinya のこと。五比丘の上首なり。
【三七】四聖種。此の所の意味する四聖種は或は聲聞・緣覺・菩薩・佛のことか、或は苦・集・滅・道の四聖諦の事ならん。

爾の時、魔王既に是の如き魔の神通境界力を作し已りて、彼の宮より出でゝ手を以て華を散ぜり。散ぜし所の華は四天下に於て悉く華蓋と作り、空に在りて住し、一切の處に於て悉く種々の寶、種々の華を雨らし、雲の如く下れり。爾の時に當つて、[三四]世尊は仍ほ住阿蘭若の第一義諦を説きたまへり。

佛、大衆に告げのたまはく、「汝等は一切の諸根を守り攝め、心を[三五]繋け念を専にして、馳散せしむる莫れ。此の魔波旬は多く諸衆を將ゐて歌舞調戲し、五音をもて樂を作し、衆妓を和合し又婦女眷屬大小と與に圍遶して來らん」と。

爾の時、魔王は諸の眷屬と與に尋ねて即ち來り、佉羅帝山の牟尼諸仙の所依の住處に到りぬ。佛の所に到り已りて、即ち佛上の虚空の中に於て、七寶蓋を化す。縱廣七由旬にして佛頂を覆ふ。復た、無價の眞珠瓔珞を以て、佛上に嚴り置き、復た、種々の衆くの寶華香・塗香・末香・天蓋・幢幡・寶蓋・金樓・眞珠・珞瓔及び五音の妓樂を以て、世尊を供養し、右遶三匝して偈を説いて言はく

我れ今、佛世尊に歸命したてまつる。　是れより終りまで惡心を起さず。
瞿曇の心定んで我を容恕したまはん。　我れ當に佛の正法を守護したてまつる。
世に於て更に世尊に如くものなし。　衆生を憐愍し利益する者たり。
自ら解脱を得て他をして得せしむ。　是の故に我れ最勝尊に歸したてまつる。
唯佛のみ一切衆を慈愍したまひ、　已に生死煩惱の山を越えたまふ。
常に慈みて諸の衆生を度せんことを樂みたまふ。　今速に汝世尊に歸依したてまつる。
能く有爲及び無爲を了したまひ、　二を離るゝこと蓮の水に著せざるが如し。
積德梵行の所依の身なれば　是の故に我れ今佛に歸依したてまつる。
世に寂定無病の法無し　清淨のみ常に厭れて煩惱を伏す。

402に玄應音義第一を引く。云はく頻婆羅は佛本行經を案ずるに云はく此の數十ヶに當れり。同第二十一に頻跋羅に作れりといへり。阿毘達磨などに出づる數目の名稱なり。

【三二】加持。梵 Adhiṣṭhāna 阿地瑟娓母曩は音譯。佛力を軟弱の衆生に加附して其の衆生を任持すること。所謂、加持なり。こゝは魔の所持する加持なり。

【三三】宋・元・明・高麗本は住に作る三本共に往に作れり。今從へり。

【三四】釋尊の阿蘭若第一義諦 Araṇyaka paramārtha. 阿蘭若は寂靜、住寂靜處と譯し十二頭陀功德の一なり。第一義諦は眞諦のこと。

【三五】高麗本は繋とあり宋・元・明三本は繫に作れり今之に從ふ。

さらしめ、是を以て彼の沙門瞿曇が世を厭患して速に涅槃に入らしめん」と。

是の如く魔王は數〻阿修羅衆を悕望せり。然れども諸の阿修羅は、佛神力の加はる所となりしが故に、茫然として魔の悕望を知らざりき。其の魔は卽時に、佛及び一切の阿修羅に悪意して便ち是の言を作さく、「瞿曇を觀るに、一人我が境界に於て已に解脫を得て、追迴すべからず。我れ欲界に於ては悉く自在を得たり。此の凡賤畜生阿修羅は我が教を受けず、我れ當に其が爲に大衰惱を作し、彼をして速に所治の宮殿を捨てしむべし。然る後、我れ當に神通力を以て、諸の眷屬を將ゐて往いて瞿曇に見ゆべし」と。

「又復た諸の大臣・勇將・左右の諸軍・男夫・婦女の與に營從圍遶せられ、第一最勝[30]五音を以て作樂し、調戲し、歌舞し、一切の衣服莊嚴の具、衆くの寶香華・幢幡・寶蓋・音聲を和合して速に嚴辦ならしめて往いて瞿曇に見えん。我れ今亦夫人婇女及以男女を將ゐて大衆に圍遶せられ、第一の最勝なる魔の境界・神通・遊戲・五音の和合を以て、往いて瞿曇に見えん。何を以ての故に、唯だ瞿曇を除き、諸餘の大衆・天・龍・乾闥婆・人及び阿修羅等世間の大衆をして悉く迷惑せしめむ。當に堅牢なる欲網を以て之を羅網し、生死の大海に於て速に度せしめざるべし。是の故に彼に詣らん。餘者は留り住して此の宮殿を守れ」と。時に魔波旬は卽ち九百六十萬の[31]頻婆羅の眷屬・男夫・婦女・童男・童女・大臣・左右を將ゐ、魔の境界なる神通[32]加持を以て、第一最勝なる五音の妓樂・歌儛・調戲を作し、一切のあらゆる人をして多く喜びて染著を生ぜしむる者は悉く之を具備せり。

時に魔波旬、彼の諸の宮に往いて告げて言はく、[33]「悉く出でゝ彼の所(佉羅帝山)に往詣せよ」と。復、合掌して偈頌を說いて曰はく

唯佛のみ諸の煩惱を盡除し、　唯佛のみ能く諸の世間を化したまふ。
唯佛のみ能く正法の燈を然したまひ、　三界の中にて最も我れの歸依たりと。

註四八項を見よ。

【二一】鳩槃茶。前卷脚註四九項を見よ。

【二二】提頭頼吒天王。前卷脚註四七項を見よ。

【二三】乾闥婆。前卷脚註三四項を見よ。

【二四】緊那羅軍衆。前卷脚註五四項を見よ。

【二五】毘樓博叉天王。前卷脚註五〇項を見よ。

【二六】那遮羅鉴大臣は釋尊に對し歸信せんことを大王に勸む。

【二七】人非人。人とも天とも、畜生とも名けられざる者をいふ。緊那羅の譯名に人非人とあり。又人は人間にして非人は天・龍・夜叉・摩睺羅伽を指せし場合もあり。時によりて意味を異にす。

【二八】諸法如幻不去不來不合不散不生不滅の理は佛教中道の教義なり。

【二九】四阿修羅王。羅睺羅阿修羅王・波羅陀阿修羅王・跋持毘盧遮那阿修羅王・毘摩質多羅阿修羅王のこと、後に出づ。

【三〇】五音。五聲・五調子ともいふ。宮・商・角・徵・羽のことなり。

【三一】頻婆羅。梵 Bimbara Mup. 249—18 根橋易土集 p.

邑宮殿を守護すべし」と。爾の時、魔王は卽ち是の言を作さく、「是の如し。是の如し。我れ[一四]他化自在天王及び諸の軍衆眷屬の大小と、彼の所に往詣せん。幷に[一五]化天・[一六]兜率陀天・[一七]須夜摩天・[一八]釋提桓因及び其の軍衆と共に彼の所に詣らん。復、[一九]毘沙門大王幷に諸の軍衆と[二〇]毘樓勒叉天王幷に[二一]鳩槃茶軍衆と[二二]提頭賴吒天王幷に[二三]乾闥婆[二四]緊那羅軍衆と[二五]毘樓博叉天王と及び諸の龍衆と與に彼の所に往詣せん』と。是の語を作せし時、復、魔王に輔作の大臣有り、[二六]珊遮那拏と名けしが、大王に白して言さく『今はあらゆる諸天の宮殿皆悉く空寂なり。欲界の諸天及び諸の天女一切の眷屬は悉く瞿曇大沙門の所に在りて法を聽いて住す。是の如く緊那羅・龍・鬼・夜叉・伽樓羅・鳩槃茶悉く彼の處に在りて、種々に沙門瞿曇を供養して其の法を聽受せり」と。

爾の時、魔王は自ら觀察し已りて、諸の欲界を見るに、一切の宮殿は皆悉く空寂にして、欲界の中のあらゆる諸の天・[二七]人非人等は皆悉く瞿曇の所に集在して坐して法を聽けども、惟だ阿修羅のみ有りて未だ彼こに到らざるのみ。而かも是の言を作さく『我れ今當に諸の阿修羅と倶に彼の所に詣るべし。其の會衆をして皆悉く惑亂して、正信を得ざらしめん。瞿曇をして彼の大衆に、[二八]諸法は幻の如く、不去不來にして不合不散不生不滅なるを敎へしめて、我が欲界をして皆悉く空寂ならしむること勿らしめん」と。復た是の言を作さく、「我れ今當に諸の阿修羅幷及軍衆と共に疾く彼の所に詣りて、諸の衆生を遮りて、速に苦海を越度して彼岸に到ることを得せしめざらん。沙門の力を以て速に死法に背き、我が境界をして勢力減少せしむるに(より)我れ今速に往いて、彼の諸の人非人等を遮護せん」と。時に魔波旬は卽ち魔の神通境界を以て、[二九]四阿修羅王及び其の軍衆一切眷屬を念じて、「速に來集して須彌山の頂に在らしめ、然る後、相將ゐて共に下り、彼の瞿曇沙門の所に詣り、詐りて美言を設け、謙下し讃歎して歸依を示作し、因緣を求覓めて當に方便を以て諸の大衆をして悉く怖畏を生ぜしめ、其の正信を斷ずべし。又彼等をして瞿曇の所に於て其の尊敬を生ぜしめ

【一四】 他化自在天。梵 Para-nirmita-vaśavartideva. 波羅維摩婆奢と音譯し、他化天・第六天ともいふ。六欲天の一。欲界の最高處なる大魔王の住處なり。他人の變現する樂事をかりて自由に己の快樂とする天人。

【一五】 化天。化樂天のこと。梵 Nirmāṇarati 又は Sunirmitaparati 六欲天の一。此の天人は自己の對境を變化して樂とするなり。

【一六】 兜率陀天。梵 Tuṣita-deva 六欲天の一。覩史多・兜率など〻音譯し、上足・妙足・喜足など〻譯す。內外二院ある中、內院には彌勒菩薩今常在して說法し閻浮提に下生成佛する時機を待つ。

【一七】 須夜摩天、梵 Suyāma-deva 欲界六天の第三、單に夜摩天ともいはる。時に隨つて快樂を受くるより時分天・善時天の名あり。

【一八】 釋提桓因。梵 Śakra-devānām Indra 釋迦提婆因陀羅・釋迦羅因陀羅など〻音譯し、能天主と譯す。須彌の頂上に居り忉利天(三十三天、Trāyastriṃśa)の主たる帝釋天のことなり。

【一九】 毘沙門天王。前卷脚註四六項を見よ。

【二〇】 毘樓勒叉天王。前卷脚

是の如く我等は數々惱亂せしかども、　瞿曇は常に我等より勝れり。
天・龍・阿修羅も　能く彼の人の一毛端を動かすことを見ず。と

爾の時、復た魔の大臣有り、〔一〇〕珊盧遮那と名く。而して偈を說いは言はく

我等は速に欲界を捨つべし。　但だ當に自ら己の宮殿のみを護るべし。
瞿曇は昔より來た未だ此に至らず。　今來れども之を拒みて前むことを聽す莫れ。と

爾の時、魔王甚だ大憂愁にして默然として答へざりき。復た大臣有り、〔一一〕起怖畏と名く。而して偈を說いて言はく

唯だ巧力のみ有りて怨を伏すべし。　當に諂僞を以て詐りて親みを僞すべし。
我等は衆を將ゐ、往いて彼こに詣りて　詭詐して彼の沙門を欺ぜん。と

復た大臣有り。〔一二〕毘闍陀行と名く。偈を說いて言はく、

昔は此の宮殿に衆、盈滿せしは、　沙門は侵奪して減少せり。
已に彼に歸する者の衆、甚だ多し。　我等も亦往いて歸依すべし。と

爾の時、魔王は其の所說を聞きて、卽ち彼の臣を瞋り、瞋り已りて默然たり。復た大臣有り。名づけて〔一三〕老智と曰ふ。而して偈を說いて言はく

瞿曇の力は諸の宮殿に加はりて、　此の種々の異れる音聲を出せり。
我等も若し疾く彼こに詣らずんば、　沙門は必ず速に此に來到せん。
此の處、人の能く遮護して、　力を以て彼の瞿曇仙を止むるものなし。
我等は寧ろ一切と共に　速に詣りて彼の大沙門に歸すべし。と

爾の時、彼の諸の宮殿の中に於て、居る所の大衆、男夫・婦女眷屬の大小、悉く一朋と作り、復此の言を作さく、『大王よ、今、諸の眷屬を將ゐて、速に彼の所に詣るべし。我等は今當に此の諸の城

〔一〇〕大臣珊盧遮那は釋尊の威力より脫れんとせり。

〔一一〕起怖畏大臣は釋尊を諂僞詭詐せんとはかれり。

〔一二〕毘闍陀行大臣は釋尊に歸信することを以て上策なりと答へたり。

〔一三〕老智大臣は釋尊に歸到せんことを大王に勸む。

諸の境界に於て渇愛を除かば　則ち能く速に勝れたる妙處に到らん。
此の心は自性清淨の相なり。　是を觀て菩提道を了知し、
若し己の境界にて自在なるを得ば。　則ち能く一切の衆を悲愍せん。
彼こに於て當に檀と戒と忍と　智慧功德とを得て自ら莊嚴すべし。
最無上の菩提の智を得て、　能く無量の諸の衆生を度すべしと。

此の偈を說きし時、魔の宮殿一切の衆生は驚怖して安からず、男夫・婦女・童男・童女は迭に共に相喚んで、魔王の所に詣りて、其の前に住立せり。

魔王は偈を以て彼の衆に告げて言はく

汝等、悉く此の魔宮の　是の如きの無量の極醜惡を見よ。。
諸聲息まず大苦を生ず、　定んで我等の魔の勢力を奪はん。
沙門瞿曇は是の聲を作して　魔力境界の事を滅さんと欲せり。
速に瞿曇の所に往詣して　咸く共に讃歎して歸依すべし。と。

爾の時、魔の子を鴦瞿羅歇と名く。卽ち偈頌を以て父に白して言さく

我れ今駕を嚴り鎧甲を著て、　諸の勇ましき健鬪の戰士を將ゐて
弓刀鉾矟及び刀輪と、　刀の面と鼓の面と諸の獸の面と、
魔軍と夜叉と龍と修羅と、　及び諸の眷屬とは虛空に滿てり。
速に惡心なる瞿曇の所に詣りて　碎滅して彼をして灰塵の如からしめむ。と。

爾の時、魔王は偈を說きて答へて言はく

我れ昔より來た彼の人に於て　曾て無量の惡留難を作せり。
汝も亦應に菩提樹を見るべし。　瞿曇は我れ及び軍衆に勝れり。

【八】魔の子鴦瞿羅歇の稱尊に對する反感。

【九】鉾。ほこ。ほこさき。矟もほこのことたり。

福報無常にして悉く空無なり、　當に疾く我見の過を捨離すべし。
速に無上菩提心を發して、　此の定を以て勝妙の福を受けん。
と。

爾の時、魔王波旬及び諸の官屬は、是を見聞し已りて、驚怖し戰慄して牀より墮ち、兩手もて耳を掩ひて是の言を作さく、『常に觀ずべし、沙門は此の幻惑を作して必ず我等諸魔の勢力を奪ひて、諸の色像をして悉く半月を成ぜしむ。復た是の如き種々の音聲を出す。沙門瞿曇[六]は大神力を現じ、盡く欲界を攝して以て己の有と爲し、速に鼓を擊ちて諸の大衆を集め皆此の處に到らしむ」と。是の語を作し已りて、其の宮中に於て卽便ち、鼓を擊ちぬ。彼の鼓を擊ちし時、其の鼓の中に於て、卽ち是の如きの音聲偈句を出せり。

諸法は空寂にして風のごとく和合せり、　所依の衆の色像を遠離せよ。
無用を作すことに於て衆生を誑し、　事相を詐り現ずること猶し幻の如し。
和合因緣の故に字と成り、　虛空に書くが如くんば字住せず。
陰界は空寂にして衆色を離れ、　無常義現じて自ら實ならず。
聲塵は耳根の門に入り、　無常義現じて暫くも停らず。
其の識は幻の如く、分別の若く、　無我を顯現して自在ならず、
眼根は迅速なるも故と空寂にして、　是れ苦の自性と義、相應せり。
鼻根香塵と舌味と、　身根及び一切の觸と、
心法竝びに無常と倶なり。　衆生を迷惑して覺する所無く、
是の如き六境は諸の苦を生じ、　能く涅槃の道を失壞せしむ。
是を以て凡夫は、五趣[七]に轉じ、　縛を離れて解脫を得ること能はず。

【六】瞿曇。梵Gautama或はGotama釋迦族を指せどもこゝにては釋尊なり。

【七】五趣。梵Pañcagatiḥ五惡趣、五道などに同じ、一、地獄二、餓鬼、三、畜生、四、人、五、天。

卷の第四十七

[一]月藏分第十四　魔王波旬詣佛所品　第二

爾の時、復た、魔王の宮中に於いて、あらゆる一切の諸の羅林樹、果實・華葉・衣・冠・瓔珞莊嚴の物、皆悉く變じて半月と成り二現ぜり。大光明を放ちて、魔王宮を照し、內外明徹、琴瑟[二]箜篌[三]の一切の樂器及び非樂器、寶莊嚴具及び餘の諸物は自然に是の如きの偈句を演出すらく

[四]世間無等の大導師は、　諸法中に於て最も自在なり。
今、佉羅帝迦山に住し、　衆の爲に佛法海を顯示したまへり。
一道の清淨法を開說したまへば、　聞く者は必ず勝れたる菩提を得ん。
波旬に𤸫戾[五]にして佛は如かず、　汝の魔界をして悉く空無ならしむ。
汝は本曾て一邪善を作りしも、　今是の如きの自在の報を得たり。
汝の今の法應當に退落すべし。　何ぞ速に去りて導師を見ざる。
一切の來りし所の諸の衆生は　曾て邪善を作せしこと千億數なれど、
福藏大衆皆來り集ひて、　最上無病法を聽受せり。
各々佛に向ひて心に敬み仰ぎ、　尊き導師を見たてまつりて供養を修せり。
其の淨信を以て煩惱を滅して、　更に重ねて欲界に生ぜず。
尊導師を專信し禮拜したてまつりて、　三界苦の煩惱縛を滅す。
億世に勝妙なる報を受けて、　速に三界の與に親友たり。
又三界に於て法王と作り、　眞實法を說きて衆生を度したまへり。
一切の諸法は水泡の如く、　有爲相、現すること猶し幻の如し。

【一】宋元明の三本は月藏分第十四の六字なし。
【二】琴瑟。二字ともにことなり。支那にては七絃より十三絃廿五絃五十琴まであり。傳によると黃帝素女をして瑟を鼓せしめしに哀みて自ら勝へず破りて廿五絃となせしといふ。
【三】箜篌。梵 Vīṇā 荻原博士の佛教辭典 p. 140, 218—18 を見よ。樂器の名。又百濟琴ともいふ、蓋しその始め百濟より傳來せし故なるべし。竪箜篌と臥箜篌の二種類あり。
【四】世間無等大導師。釋尊を指していへり。人天中釋尊に等しきものなく、釋尊は三界の大導師なればなり。
【五】𤸫戾。暴惡なる貌。あら〳〵しきこと。

應當に速に蘭若處に向ひ、　彼に於て當に是の如きの德を成ずべし。

と。

爾の時、世尊、此の經を說きたまひし時、諸會の大衆、是の甚深なる第一義禪を聞き、過去に於いて善く修習[一三八]すること有りし者、九萬二千人、無生法忍を得たり。七十億那由他百千の衆生は種々の三昧、諸の陀羅尼、及び無生忍を得たり。八萬一千人は阿耨多羅三藐三菩提の記を授かるを得たり。恒河沙等の如き衆生にて未だ無上菩提心を發さゞる者は悉く皆發心して、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。[一三九]

【一二九】第一義諦。梵Paramārtha 眞諦とも譯す。俗諦に對す。涅槃・眞如・實相などすべて究竟せる眞理に名く。此の道理は諸法の中にて第一なれば第一義といふ。審實にして謬らざる故に諦といふなり。

【一三〇】善巧方便。梵Upāyakauśalyam 善良に巧妙なる方法をいふ。

【一三一】慧眼。梵Prajñācakṣu 五眼の一。智慧がよく諸法皆空の眞理を照す故に名くるなり。

【一三二】法眼。梵Dharmacakṣu 分明に緣生の差別の法を觀察することなり。五眼の一。

【一三三】四禪。梵Catvāri dhyānāni. 新譯にては四靜慮天といふ。四種の禪定を修して生ずる所の色界の四天處なりとす。一、初禪天。二、二禪天、三、三禪天。四、四禪天これなり。

【一三四】四無色定。梵Caturārūpa-dhyāna. 又四空定ともいふ。無空界の四處これなり。一、空無邊處定Ākāśānantyāyatana-d. 二、識無邊處定Vijñānānantyāyatana-d. 三、無所有處定、Ākiñcanyāyatana-d. 四、非想非々想定 Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana-d. 詳しくは佛敎辭典を看よ。

【一三五】七法財。七聖財に同じ。本卷脚註九七を見よ。

【一三六】五欲。梵Pañca-Kāmaguṇa 色・聲・香・味・觸の五境は諸欲を引き起す對象なれば五欲といふ。

【一三七】五力。梵Pañca-balāni 信Śraddhā 進 Vīrya 念Smṛti 定 Samādhi 慧 Prajñā の五力は佛敎の實踐的方面に關する德目を述べたるものなり。

【一三八】修習。梵 Bhāvanā yogaḥ, bhāvanāyāḥ 修行實習に同じ。

【一三九】正倉院聖語藏寫本には「光明皇后願文」「天平勝寶七歲十月十七日正八位下守少內記林連廣野正大安寺沙門琳䟦義沙門敬明沙門玄藏沙門環忍沙門行脩證」の四十九字の奧書あり。以下卷四十七、四十九、五十、五十一、五十二、五十四は之と同樣なり。

諸の煩惱を棄てゝ善業を修すれば
當に慈悲を以て衆生を念じ、
常に能く諸の衆生を憐愍せば、
勤めて罪業を捨てゝ諸の禪を修せんに、
諸の方便を愛して常に禪を求むべし。
境界に動かず、味著せず、
一道淸淨にして移動せず、
境界中に於て念慮せず、
諸法、掉を離れて分別無く、
陰・界は幻の如く起作無し、
善く修して是の如きの法を了知せよ。
故に我れ今一切の衆に告ぐ。
忍三昧陀羅尼を求めよ。
若し聲聞乘を超越せんと欲せば、
又た疾く勝れたる佛地を得んと欲せば、
若し心を阿蘭若に攝住すれば、
是に於て能く一切の罪を捨つれば、
當に作佛して三有の最たるを得べし。
衆生の諸の惡趣を枯竭して、
當に惡見諍緣の事を捨つべし。

此を以て能く檀彼岸に到らん。
諸の分別を息めて自らを是とせず。
則ち尸羅波羅蜜を滿ぜん。
亦た當に諸の陰・界・入を捨てゝ
障を除きて精進の岸に到らん。
捨の因緣の爲に悲喜を修し、
此を以て忍辱の度を滿ずるを得ん。
疾(嫉)を離れて喜を得ることを樂はず、
不染不愁を是れ捨と爲す。
相續修行して斷絕せず、
此を以て般若の度を滿ずることを得ん。
若し諸の罪業を除かんと欲するもの有らば
當に知るべし是の如くして寂靜に住することを。
及び緣覺乘を超越せんと欲せば、
應當に速に阿蘭若に住すべし。
此を以て卽ち是れ諸佛を供するなり。
是れ則ち能く六度を滿ずるなり。
能く淸淨の正法輪を轉じ、
衆生三有の海を度脫せん。
當に最勝なる菩提心を發(おこ)すべし。

じ、前の脚註八四を見よ。
【一〇】宴坐。燕坐宴默Pratisaṃlayana(安二於內一の意なり)などゝも書く坐禪すること。
【一一】攀緣。心は決して獨り起らず、必ず所對の境ありて彼に攀ぢ緣りて起ること恰も老人の杖によりて起つ如きをいふなり。
【一二】羼提波羅蜜。梵Kṣānti-pāramitā. 六波羅蜜の一、譯して忍度といふ、新譯は到彼岸なり。忍辱の修行によつて生死の此の岸より涅槃の彼の岸に到達する道なれば忍度といはる。
【一三】毘梨耶波羅蜜。梵Vīryapāramitā. 六波羅蜜の一。精進又は勤と譯す。佛道修行の善法を勤め行じて自ら放逸ならざる德目なり。
【一四】無生樂忍。無生法忍略して無生忍に同じ。無生無滅の理に安住して動かざるをいふ。梵Anutpidadharmakṣānti。
【一五】陰。五陰pañca-skandha(蘊)の陰。
【一六】怨家。我に怨を結ぶ人をいふ。遺敎經に諸の煩惱賊常に伺ふて人を殺すこと怨家よりも甚だしといへり。
【一七】界。十八界の界なり。
【一八】擾濁。擾は亂也。濁はにごる、淸からざるなり。

若し七日に於いて蘭若に住すれば、　三昧福聚轉じて彼よりも多し。
若し人多歲に僧事を營み、　更に餘種の業を造作せざるに、
若し人七日、蘭若に住せば、　其の人の福聚は彼よりも多し。
衆の爲に說法して深義を解し、　多くの年歲に於て餘業無し。
若し能く七日、心、寂に住せば、　其の福德聚は數ふべからず。
若し人多くの佛塔を營造し、　伽藍田業を僧に給施するに、
若し能く七日、蘭若に在れば、　其の福、轉た多く彼に勝る。
閑靜無僞なるは佛の境界なり、　彼に於て能く淨菩提を得よ。
若し、人彼の住禪者を謗ずれば、　是を諸の如來を毀謗すると名く。
若し、人塔を破ること多く百千　及以、百千の寺を焚燒するに、
若し住禪者を毀謗すること有れば、　其の罪甚だ多きこと彼に過ぎたり。
若し住禪者に、　飲食・衣服・及び湯藥を供養するものあれば、
是の人無量の罪を消滅し、　亦た三惡道に墮せず。
是の故に我れ今普く汝に告げん。　佛道を成ぜんと欲すれば常に禪に在れ。
若し阿蘭若に住すること能はずんば、　應當に彼の人を供養すべし。
若し能く禪に住して不放逸ならば、　則ち能く速に六度を滿ぜん。
大明菩提の道を求めんと欲せば、　此の方便を以て疾く能く到らん。
菩提を求めて寂靜に住せんと欲せば、　當に一切の諸の緣と樂とを捨て、
及び煩惱を離れて諸の樂を捨つべし。　則ち能く速に檀彼岸に到らん。
若し境界と陰と界と入とを捨て、　及び貪・瞋・愚癡の過を捨て、

行・同時の四攝法(Catuh-samgrahav. stu)なり。

【一〇三】斷常二見。本卷脚註六五を見よ。

【一〇四】我見。梵 ātmā 薩迦耶達利瑟致。五蘊假和合の心身を指して常一の義なりと見るをいふ。身見ともいはる。

【一〇五】邊見。梵 Anta-drsti 一旦我身ありと我見を起したる後に、其の我は死後に斷絶する者と計度し、或は死後も常住不滅なりと計度するもの。唯識にては是れ必ず身見の後邊に起す妄見なれば邊見と名け、倶舍は斷或は常の一邊に偏る故に邊見と名くと二說あり。

【一〇六】無上大乘。教法の至極なるを歎稱するの稱にして勝れたるこの上なき大乘を指せり。

【一〇七】三昧。梵 Samādhi 定と譯す。心一境處に住して不動なるを定といふ。智度論五には善心一處に住して不動なるを三昧と名くといへり。

【一〇八】陀羅尼。梵 Dhāraṇī 又陀羅尼、陀鄰尼などと普譯す。持、總持などゝ譯す。善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名く。法・義・呪・忍・の四陀羅尼に分たる。

【一〇九】四梵住。四無量心に同

及び諸の行性相空を知らんと欲すれば、
若し速に二種の法なる、
及び速に有爲の過を知らんと欲せば、
獨り閑靜に住して放逸ならず、
精進を以て第一義を求むれば、
若し膿血の海を枯竭せんと欲し、
若し速に三有の海を竭くし、
若し衆生海を成熟せんと欲し、
若し生死の際を知ることを得んと欲すれば、
本生及び居處、
諸の方便を以て閑靜を樂み、
若し禪定海に遊戲せんと欲し、
若し渴愛の海を度せんと欲し、
若し正法海を飲むことを得んと欲し、
若し諸佛海を見んと欲し、
是の如き勝れたる功德を得んと欲し、
當に衆の惱を離れて蘭若に住すべし。
若し人百億の諸佛の所にて、
若し能く七日、蘭若に住せば、
若し人千億法を讀誦するに、

應當に阿蘭若に樂住すべし。
毘婆舍那・奢摩他を知らんと欲し、
要(かなら)ず當に菩提心に住すべし。
便ち能く疾く世諦を捨て、
能く速に諸の惡道を捨離すべし。
及び煩惱の海を枯竭せんと欲し、
常に聖種心と相應せんと欲し、
若し諸の大願海を滿さんと欲し、
頭燃を救ふが如く閑靜に處し。
久遠微細の從來する所を知らんと欲せば、
心を攝して彼の三昧を得よ。
若し神通海に覺悟せんと欲し、
若し天中最を得んと欲し、
若し莊嚴土を見んと欲し、
甚深なる諸の義海を問はんと欲し、
及び速に勝れたる菩提を得んと欲せば、
此を以て得道も亦難からず。
多くの歲數に於て常に供養するに、
根を攝して定を得て、福、彼よりも多し。
及び妙義を解すること佛說の如くなるに、

流を指す。
【九六】三有。三界の異名なり。有は存在にして三有は三界を云ふ。一、欲有。kāmabhava 二、色有。rūpabhava 三、無色有。arūpabhava なり。
【九七】七聖財。梵Sapta dhanāni 信財Śraddhādhanam 戒財Śīladhanam 慚財Hridhanam 愧財Apatrapyadhanam 聞財Śrutadhanam 捨財Tyāgadhanam 慧財Prajñādhanam 見道以後の聖者を七種に分ちしもの。寶積經第四十二に七聖財を述べて、彼の諸の衆生は此を護らざる故に極貧窮と名く。
【九八】阿頗那。梵Apāna. 數息觀のこと、これは出息の義。俱舍論二十二卷に阿波那とは謂く息の出るを持す。是れ內風を引き、身より出さしむる義なりといへり。
【九九】阿耨多羅三藐三菩提。梵Anuttara-samyaksambodhi 佛智の名。無上正遍智、無上正眞道は舊譯なり。眞實に遍く一切の眞理を知る無上智慧のこと。
【一〇〇】藕絲。蓮の糸。
【一〇一】六波羅蜜。梵Ṣaḍ-pāramitā 布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六度のことなり。
【一〇二】四事、四攝法・四攝事のことならん。布施・愛語・利

た當に與めに無上道の記を授くべし。天・龍・夜叉・揵闥婆等、阿蘭若の處に於て靜默修行して第一義を求むる者は、信樂し受持して衣服・臥具乃至湯藥を所須者に隨ひて供養し供給すべし』と。爾の時、世尊、重ねて此の義を明かさんと欲して、偈を說いて言はく、

此の世間に於て一日出づれば、　無量億の華悉く開敷せん。
如佛一人世間に出づれば、　衆生の悕ふ所の福華現ず。
若し速かに十の勝力、　及び度堅固と諍煩惱とを得んと欲し
復た速に最勝定を得、　靜默にして獨り阿蘭若に住せんと欲し、
人天の信敬受を得、　及び心の煩惱の渴を除かんと欲し、
心苦の重擔を斷じて、　聖道奢摩他に安心せんと欲し、
若し諸の惡難を排却し、　及び諸の功德を自ら莊嚴せんと欲し、
諸の苦海に於て自度せんと欲すれば、　應當に妙菩提に安心すべし。
若し彼の[二五]七法財を得んと欲し、　及び方便忍を得んと欲し
衆生の爲に妙法を說かんと欲すれば、　常に當に阿蘭若に樂住すべし。
六根は常に三昧と合して、　應當に阿蘭若に寂住し
少欲にして頭陀もて善く足ることを知る。　此の人能く賢聖道に入る。
若し能く速に[二六]五欲の樂を捨てゝ、　[二七]五力を得るが故に煩惱を滅す。
若し五道に於て衆生を度せんには、　自ら過惡を捨てゝ三昧に住せよ。
若し四無量を得、　及び無礙四辯才を得んと欲し、
四禪の彼岸處を得んと欲すれば、　是の人應に第一義を修すべし。
若し速に三有を知らんと欲し、　諸法の苦・無常を知らんと欲し、

面は頗梨南面は青琉璃なりと云ひ、大論には四寶の成ずる所を妙といひ、衆山に出過するを高といふ。或は妙光山とも名く。四色の寶光明を以て各世を異照するが故に妙光と名くるなり等と云へり。

【九二】鐵圍山。「梵Cakrav-da 鹹海を圍繞して一小世界を區劃する鐵山なり。鐵より成ればなり。倶舍論第十一等に詳なり。

【九三】阿頞那迦定。梵Āsph-naka 或は Āsph-naka samādhi とあり。無息禪と譯す。釋尊成道の時の入定の名なり。然も此の定は唯佛に限るといふ。本項目は荻原博士の指敎による。尚詳細は龍谷大學論叢第三〇二號月輪氏の「阿娑頗那伽三摩地に就いて」を見よ。

【九三】應供。梵Arhatの譯名如來十號の一。正遍知は正遍智又は正遍覺に同じ。梵 Samyaksambuddhah 三藐三佛陀のことなり。

【九四】四疾。生老病死の四苦か。

【九五】四流。流。梵Ogha. tti-rnah 一、見流―三界の見惑。二、―欲流 欲界の一切煩惱。三、―有流上二界の一切の煩惱。四、―無明流三界の無明

等に勸む。若しは現在世・未來世・末世に、我が法中に於て初夜後夜常に捨と與に相應して住す。正法眼を以て照明と作り、三寶を紹隆して斷ぜざらしむるが故に、衆生を成熟せんが爲の故に、是の如き第一義諦を勤修して、六波羅蜜を滿ぜんが爲に勤修して住す。

佛、一切の諸の天人衆・龍神・夜叉に告げたまはく、應當に養育して是の人に衣服・飲食・臥具・湯藥を供給し、其の須ゐる所に隨ひて盡く之を給與すべし。亦、當に守護して其の災横を除き、諸の凶衰殃惡疾病を離れて悉く除滅せしむべし。何を以ての故に、禪と相應する者は是れ我が眞子にして、佛の口より生じ、法より化生すればなり。若し施主・天・龍・夜叉あり。能く現世及び未來世に於て捨と相應す。第一義諦を以て六波羅蜜を滿ぜんが爲の故に。衆生の諸の煩惱道及び苦道を除かんが爲の故に、[122]法眼を久しく住せしめ、三寶種を紹ぎて斷ぜざら使むるが故に、汝等施主・天龍・夜叉、皆應に護養して幷びに衣服・飲食・臥具・病瘦・湯藥を與へ、其の須ゐる所に隨ひて盡く之を給與すべし。亦た應に勸請及以讚歎すべし。彼の施主・天・龍・夜叉、我が正法を持するを以て、我が法眼をして久しく住せしめ、三寶種を紹ぎて斷ぜざら使めんと欲せんが爲の故に。是の如き等の輩は是れ我が眞子なり。佛の口より生じ、法より化生するが故に、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷及び餘の淸信士、若しは善男子・善女人、第一義を以て乃至阿耨多羅三藐三菩提を求むる者及び養護者なり。我れ彼等を以て汝に寄付し、彌勒を首と爲し、及以賢劫の諸の菩薩等は當に四事を以て攝受し勸化して其の禁戒を授くべし。復た四無量心・[123]四禪・[124]四無色定・大方便力・大慈・大悲・乃至十八不共法に住せしめ、當に復た無上道の記を授くべし。」

爾の時、彌勒菩薩摩訶薩、以て上首と爲り、及與賢劫の諸の菩薩等、佛に白して言さく、『世尊よ。是の如し。是の如し。大德婆伽婆よ。我れ當に彼の諸の衆生を護念し、乃至其れの與めに阿耨多羅三藐三菩提の記を授く。若しは現在世及び未來世、乃至法住まで、是の諸の施主は大明者となり、亦

此の四者は何れも相手に親愛の心を生ぜしめて道を受けしむるをいふなり。

【八八】　四無礙解。梵 Catasraḥ Pratisaṃvidaḥ-śabda. 一、法無礙 Dharmapratisaṃvit 二、義無礙 Arthapratisaṃvit 十三、詞無礙 Nirktipratisaṃvit. 十四、辯無礙 Pratibhānapratisaṃvit. 十、この四者は諸佛菩薩の說法は自由自在にして身口意三業に修して何等停頓する所なきをいふ。

【八九】　空閑阿蘭若處。空閑は梵語 Āraṇya 阿蘭若の譯なれば意味は比丘の閑寂にして修行するに適當なる靜處を指していへり。阿蘭若處は十二頭陀の一。

【九〇】　須彌山。梵 Sumeru 修迷樓、蘇彌樓、須彌樓、彌樓などと音譯す。僧肇は維摩經に註して須彌山は天帝釋所居の金剛山なり。秦に妙高山といひ、大海の中にをる。水の上方の高さ三百三十六里なりといへり。慧琳音義卷第一（大正五四・三一四頁下段）に梵語に寶山は名づけて或は須彌山といふ。或は彌樓山といふ。皆是れ梵音聲轉正しからず。正しくは梵音を蘇迷嚧といふ。嚧字轉舌して唐に妙高山といへり。倶舍論には四寶の所成東面は白銀、北面は黃金、西

次に菩薩諸の衆生に於て法を以て之に施して二想を生ぜざるは是れ檀波羅蜜なり。諸の衆生に於て柔和愛語するは是れ尸波羅蜜なり。諸の衆生に於て諸の惡を起さゞるは是れ羼提波羅蜜なり。諸の衆生に於て愛語不退なるは是れ毘梨耶波羅蜜なり。諸の衆生に於て利益し憐愍するは是れ禪波羅蜜なり。諸の衆生に於て同じく其の法を行ずるは是れ般若波羅蜜なり。復た次に菩薩衆生を諸の善處に安置するは是れ檀波羅蜜なり。一切の法に於て依倚せざるは是れ尸波羅蜜なり。一切の法に於て一道を以て入るは是れ羼提波羅蜜なり。一切の法及び一切の難に於て擾濁想無きは是れ毘梨耶波羅蜜なり。一切の法に於て分別せざるは是れ禪波羅蜜なり。能く一字を以て一切法に入り、衆生の爲に說くは是れ般若波羅蜜なり。

善男子よ。是の如く菩薩摩訶薩は此の第一義なる甚深の法要を以て、能く六波羅蜜を滿ずるは世俗に非るなり。是の如し。是の如し。善男子よ、諸の菩薩摩訶薩等の第一義諦善巧方便は、皆此の法を以て自らの爲に、他の爲に勤修して六波羅蜜を滿ぜしめて、速に阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ずるなり。是の如く十方現在の諸餘の世界のあらゆる菩薩摩訶薩等の第一義諦善巧方便の一切は、皆悉く此の道法を以て速に阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ずるなり。當來の十方無量阿僧祇の諸佛世界の諸の菩薩摩訶薩等は、皆悉く是の如きの甚深なる第一義諦善巧方便を勤修し、六波羅蜜を修し、能く阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ずるは世俗に非るなり。彼の諸の菩薩摩訶薩は法眼を久しく住せしめ、三寶種を紹ぎて斷絕せざらしめんが爲に、勤求して學を修む。一切衆生の爲に大明炬を執りて照明と作し、其をして煩惱道苦道を止息せしむ。其の慧眼の與めに一切三有の流轉を废し、無上菩提の道に安置せしむ。彼等は聖法に於て默然として初夜・後夜に捨得相應す。善く能く三昧の正受を出生して、三解脫門と相應して住するなり。善男子よ。汝今七日阿顚那迦禪に於て入定するが故に、無量の諸の衆生を成熟するが故に、是の故に汝及び諸の善男女

【八一】苦聲。梵Duḥkha-śabda 身心を逼惱するをいふ。
【八二】無我聲。梵Anātka-śabda 非我なる聲。
【八三】空聲。梵Śūnya-śabda 理體の空寂なるをいふ。
【八四】慈。Maitrī悲。Karuṇā 喜。Muditā捨。Upekṣā は四無量心と稱せらる。佛の計り知るべからざる四德なり。
【八五】八聖道分聲。梵Āryāṣṭāṅga-mārga-nāmni-śabda. 正見Samyagdṛṣṭiḥ正思惟Samyaksaṃkalpaḥ 正語 Samyagvāk正業Samyakkarmāntaḥ 正命 Samyagājīvaḥ 正精進 Samyagvyāyāmaḥ 正念Samyaksmṛtiḥ 正定 Samyaksamādhiḥ. 四諦の理を觀じて後八法の正しく能く通じて涅槃に到達する道を修むべきこと、釋尊說法の中心をなす思想なり。
【八六】奢摩他毘婆舍那聲。梵Śamatha-Vipaśyanā-śabda 奢摩他は止、寂靜、能滅等の譯を有し。心を攝して緣に住し散亂を防ぐことにして、毘婆舍那は觀見、種々の觀察などの譯あるが如く事理を觀察することをいふ。
【八七】四攝聲。梵Catvāri Saṃgraha-Vastūni-śabda 布施Dānaṃ 愛語Priyavāditā 利行Arthacaryā 同事Samānārthatā

て、阿耨多羅三藐三菩提に向はしめ、亦能く無量の福聚を積習し、又能く六波羅蜜を滿足するをや。何を以ての故に、是の禪を修する者は若しは行じ、若しは坐して、諸の障法を除きて、心をして清淨ならしむればなり。一切の行に於て[一二一]攀緣の想を捨つるは是れ檀波羅蜜なり。攀緣の想を捨つること　に於て常に休息ならさるは是れ尸波羅蜜なり。諸の境界に於て瘡疣を生ぜさるは是れ[一二二]羼提波羅蜜なり。離を捨てざるは是れ[一二三]毘梨耶波羅蜜なり。諸事の中に於て心放縱ならさるは是れ禪波羅蜜なり。諸法體性(に於て)[一二四]無生樂忍なるは是れ般若波羅蜜なり。

復た次に若しは境界に於て擾濁を起さゞるは、是れ檀波羅蜜なり。若し境界に於て瘡疣有ること無きは、是れ尸波羅蜜なり。若し境界に於て染汚すること能はさるは是れ羼提波羅蜜なり。若し境界に於て動轉すること有ること無きは、是れ毘梨耶波羅蜜なり。若し境界に於て計念有ること無きは是れ禪波羅蜜なり。若し境界に於て一向清淨行なるは、是れ般若波羅蜜なり。

復た次に諸の[一二五]陰に於て捨するは是れ檀波羅蜜なり。諸の陰に於て計念せさるは是れ尸波羅蜜なり。諸の陰に於て無我想を求むるは是れ羼提波羅蜜なり。諸の陰に於て[一二六]怨家の想を起すは是れ毘梨耶波羅蜜なり。諸の陰に於て熾然ならしめさるは是れ禪波羅蜜なり。諸の陰に於て畢竟棄捨するは是れ般若波羅蜜なり。復た次に諸の[一二七]界に於て捨する は是れ檀波羅蜜なり。諸の界に於て[一二八]擾濁せさるは是れ尸波羅蜜なり。諸の界に於て因緣を捨するは是れ羼提波羅蜜なり。諸の界に於て數々棄捨するは是れ毘梨耶波羅蜜なり。諸の界に於て起發せさるは是れ禪波羅蜜なり。諸の界に於て幻の如く想ふは是れ般若波羅蜜なり。復た次に菩薩諸の衆生に於て慈心を起すは是れ檀波羅蜜なり。諸の衆生に於て心に憎愛なきは是れ尸波羅蜜なり。諸の衆生に於て悲想を起すは是れ羼提波羅蜜なり。諸の衆生に於て救濟の想を起すは是れ毘梨耶波羅蜜なり。諸の衆生に於て喜攝の想を以てするは是れ禪波羅蜜なり。諸の衆生に於て彼・此・吾・我等の想を作さゞるは是れ般若波羅蜜なり。復た

べての物質性のもの、殊妙精好なれば之を色界といふ。色は即ち物質性をいふ。

【七一】末香。抹香に同じ。沈檀を擣て粉末とせるもの、以て塔像に撒布す。

【七二】瓔珞。梵Keyūram Niṣka 寶玉をつらねて身又は宮殿の飾りとなすもの、枳由羅はその音譯なり。

【七三】三寶聲。佛寶、法寶、僧寶の三聲をいふ。

【七四】三律儀聲。別解脫律儀、靜慮律儀、無漏律儀の三聲をいふ。

【七五】三解脫聲。又三三昧とも三解脫門ともいふ。空、無相、無願の三解脫聲をいふ。解脫といふも三昧といふも、その能修の行、所觀の理に就きていへる名なり。

【七六】三明聲。宿命、天眼、漏盡の三聲をいふ。

【七七】三學聲。戒、定、慧の三學聲をいふ。

【七八】離三界欲聲。三界は欲界、色界、無色界を云ひ、その內煩惱を離るゝ聲をいふ。

【七九】三種の菩提聲。聲聞、緣覺、佛の三聲をいふ。

【八〇】無常聲。梵Anitya-śabda 世間一切の法は生滅流轉して刹那も住することなきを無常といふ。刹那無常と相續無常との二あり。

子よ。世俗を以て能く自身の煩惱大海を竭すこと能はずんば、何ぞ能く他の衆生の煩惱を竭さんや。善男子よ、譬へば一人の口に吹く所の風は世界の大地を損壞すること能はざるが如し。是の如く善男子よ。世俗を以て能く大慈大悲を成就することを得ず。善男子よ、譬へば[一〇〇]藕絲の須彌山王を秤動すること能はざるが如し。是の如く善男子よ。世俗を以て能く自ら阿耨多羅三藐三菩提の智を滿さず。何ぞ能く他をして第一義を得せしめん。是の如く善男子よ。能く阿耨多羅三藐三菩提の智を成就する者は世俗に非るなり。何となれば是の第一義はいはゆる一切の福事を修造すればなり。若しは修福者も亦常に數ゝ身心を熏修すべし。若し身を修めば則ち能く心を修し、能く心を修むる者は則ち能く慧を修む。若し能く身心を修むれば慧を修むるなり。是の如きの人は則ち能く速に[一〇一]六波羅蜜を滿ずるなり。能く[一〇二]四事を以て諸の衆生を攝し、阿耨多羅三藐三菩提を成熟し、等正覺を成ずるは、世俗を以てせざるなり。

世俗の中に於て復た衆生有り。[一〇三]斷常二見を計する者は第一義に非ず。復た衆生有り。世俗の中に於て[一〇四]我見[一〇五]邊見(のもの)も亦第一義に非ず。復た衆生有り。其の世俗に於て現世の樂及び後世の樂を求むるものも亦第一義に非るなり。而も我れ更に一法有るを見ず。能く業障乃至煩惱障を盡すこと一日一夜にして、無量億那由他百千の衆生をして、悉く佛法僧寶を敬信することを得て、[一〇六]無上大乘を成熟し安住せしむ。若しは禪士有り、復た戒を持つと雖も具足すること能はず、禪法周からずして未た[一〇七]三昧を得ず。是の人禪に於て若しは坐し、若しは行じ、初夜後夜に禪定と相應することを得て住すれば、則ち能く無量の業障を除斷して能く多億の那由他百千の衆生をして、悉く歸信を得、善提の種々の善根福德の聚を成熟せしむ。況んや持戒を具して眞法三昧の諸の[一〇八]陀羅尼忍を得、[一〇九]四梵住を得、[一一〇]安坐寂定して七日の中に於て、得る所の福德は不可思議にして喩と爲すべからず。何に況んや、能く衆生障・煩惱障等を除き、盡滅して餘り無く、乃至無量の衆生を成熟し

【六六】斷常二見。五惡見の中、第二の邊見の間に斷常二見の種類を分ち、吾等の今生今身は一期を限りて斷絶するものなりと見るは斷見、之に反して心身共に常住不滅と見るは常見なり。佛陀はこの極端なる二見の邊執を棄てゝ中正なる邊處中に立つを以て正見なりと說かれたるは實に釋尊說法の骨子なりきといふべし。

【六七】餓鬼、梵Preta 薜荔哆は音譯。常に飢渇苦を受くる一類の鬼類をいふ。六道・六趣の一。

【六八】毘舍闍。梵Piśāca 毘舍遮、畢舍遮はその音譯なり。東方持國天領の一類の鬼なり。

【六九】六種震動。大地の震動するに三種の六動あり。長阿二、涅槃二等に說かれてゐる六時に動ずることがその一。大品般若經一に說ける六方に動ずることがその二。大般若一に說ける六相に動ずることがその三なり。詳しくは辭典に就て看よ。

【七〇】欲界。梵Kāma-dhātu. 三界の一、婬欲と食欲の二欲の强き衆生の住する處。上は六欲天より中は人界の四大洲下は八大地獄に至るこれなり。色界。梵Rūpa-dhātu. 三界の一、身體といひ、國土といひ、す

惟だ佛のみ能く衆生に眼を與ひたまひ、　無明の闇に於て盲瞽を拔きたまへり。
我れ本、一三昧に端坐して、　阿顚那禪心に安住せり、
我れ佛の神變を現ずるを見ざりき。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。

と。

佛の言はく「善い哉。善い哉。善男子よ、汝は大精進に能く七日に於て、深禪定に入れり。是の如き妙定は是れ丈夫の住處なり。是れ如來の住處なり。無上の住處なり」と。「善男子よ。汝及び眷屬は七日、阿顚那迦禪に安住せり。是の義を以ての故に、今悉く、無量億那由他百千の諸天・龍王・夜叉・阿修羅・緊那羅・人・非人等は阿耨多羅三藐三菩提に於て、其の業障・衆生障・法障・禪障・煩惱障・覺分障を除き、悉く滅して餘り無し。彼の諸の衆生不忘菩提心三昧を得ること有る者は、無上道に於て退轉せざる者たり。復た衆生有り、一切佛法に於て大明忍を得、彼等衆生は此の善根を以て、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提に於て正覺を成ぜん。是の如く善男子よ。汝は七日を以て禪定に入るが故に、一時に能く衆生の大苦を滅して、大福德聚を成就するを得せしむ。善男子よ。若し衆生有りて惟だ讀誦に依りて、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲する者は、是の人多く世俗に意著す。世俗を以ての故に、尙己心の煩惱を調するを得ず、何ぞ能く他人の煩惱を調伏せんや。

　善男子、善女人よ。讀誦に樂著して菩提を求むる者は、便ち嫉妬有りて名利を求む。富貴高心自ら是れ輕慢にして他を毀る。自らを高うするを以ての故に、尙欲界の善根を得ること能はず。何に況んや、能く色・無色界の一切善根を得んをや。又、聲聞菩提を得ること能はず。何に況んや、能く辟支佛道及び無上菩提を得んをや。何を以つての故に。第一義諦阿耨多羅三藐三菩提は、聲聞辟支佛と與に共ぜざればなり。是の故に世俗を以て能く阿耨多羅三藐三菩提最勝善根大福德聚を得るに非ず。善男子よ。譬へば星火の甚深の大海を枯渇する能はざるが如し、是の如し。是の如し。善男

々の用に供せらる。

【六一】十善業道。不奪生命、不與取、欲邪行、虛誑語、麁惡語、兩舌語、無義語、貪欲、瞋恚、邪見の十善の行業は善處に生ずる道なればしかくいへり。

【六二】四念處、又は四念住に同じ。小乘の行者は五停心觀の奢摩他行を修して後、身・受・心・法の觀慧を起發する毘婆舍那を修することをいふ。

【六三】十八不共法、是れ佛に限る十八種の功德法なり。佛は二乘菩薩に共ぜざれば之を不共法 Aveṇikadharma といふ。故に十八不共佛法 Aṣṭādaśāveṇikabuddhadharmāḥ と名く。Mvp. IX. pp. 4—5 並に知度論二十五卷を參照せよ。

【六四】大慈大悲。この大方便力。一切種智乃至究竟無上涅槃のすべてはこれ佛陀世尊に關する德目屬性にして只佛陀世尊のみよく之を成就したまふ所とす。

【六五】五無間業。五種の大惡業なり。五逆罪の如き無間地獄に墮する果を受くるを以て此の得名あり。害父、害母、害阿羅漢、出佛身血、破和合僧の五逆罪なり。若し五逆に就て述ぶれば大小二乘の間に諸種の說あり辭典に就き見るべし。

禮拜供養して大集經を聽きたてまつらんが爲の故に、我が眷屬も亦復彼こに往けり。汝、今亦、彼の佛所に詣りて禮拜供養して月幢月呪を說くべし。是の因緣を以て我の來りしこと（衆の）後に在り」と。

是の時、月藏菩薩は偈を說いて言さく、

惟だ佛のみ獨り是れ衆生の父なり。　煩惱の火に於て救拔したまへり。
我れ今、過を最勝佛に謝す。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。
惟だ佛のみ人天にて大明と作り、　普ねく十方の諸の國土を照したまへり。
我れ今、過を佛法王に謝す。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。
惟だ佛のみ能く涅槃の道を示したまひ、　惡道に趣く者をして追ふて廻らしめたまへり。
過を牟尼の大商主に謝す。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。
惟だ佛のみ世間の大醫師なり。　失目者に於て法眼を與へたまへり。
過を最勝の大醫王に謝す。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。
惟だ佛のみ能く諸の船栰を示したまひ、　衆生をして〔九四〕四つの疾の河を度らしめたまへり。
過を人中の最勝者に謝す。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。
惟だ佛のみ慈雲もて法雨を降らしたまひ、　衆生の意の煩惱の垢を洗ひたまへり。
過を大聖勝法に尊謝す。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。
唯佛一人のみ、〔九五〕四流に於て　能く衆生〔九六〕三有の海を度したまへり。
過を世尊實語者に謝す。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。
惟だ佛のみ諸の正法藏を開きたまひ、　〔九七〕七聖財を以ての故に衆生を濟ひたまへり。
過を大勝法の施主に謝す。　我れ因緣を以て後れて來りしが故に。

羅などと音譯す。人非人、疑神、歌神と義譯す。樂神の名。八部衆の一。

【五六】迦樓羅。梵 Garuda 迦留羅、迦婁羅、揭路茶、迦嘍茶、誐嚕拏などと音譯す。鳥名。金翅鳥、妙翅鳥、頂瘿鳥、食吐悲苦聲などの義あり。八部衆の一。四天下の大樹にをり龍を取りて食物となす。

【五七】摩睺羅伽。梵 Mahoraga 摩呼洛伽、摩護囉誐、莫呼洛伽摩などゝ音譯す。八部衆の一。大蟒神なり。胎藏界第三院の一尊にして釋尊の眷屬なり。

【五八】婆羅門。梵 Brāhmaṇa 印度四姓の一。大梵天に奉事して淨行を修する一族。刹利梵 Kṣatriya 印度四姓の第二。王族を稱す。毘舍、梵 Vaiśa 或は Vesa 四姓の第三。商人等の階級。陀は首陀羅の略梵 Śūdra 四姓の第四、勞働者の奴隷の階級なり。

【五九】無漏。梵 Anāsrava. 漏は煩惱の別名。漏は漏泄の義、倶舍論第二十に諸の境界の中に流注相續して過を泄して絕たず故に名づけて漏となすといへり。

【六〇】獐鹿。くじかのこと。偶蹄類中麋鹿科に屬する獸。鹿よりも小さく角なし。毛は黑く、皮極めて柔かにして種

の是等の諸山と、大海樹林とは皆悉く現ぜず。唯だ佉羅帝山を除く、其の山は廣博にして十四天下の如し。中に於て人と非人との間に空處無く、上方も亦十四天下の如し。無量不可計にして邊際あること無し。虛空の中に於て大衆充滿して、佛を見たてまつらんが(爲の)故に、禮拜供養せんが爲の故に、衆生を成熟して大衆集りて聽法を爲すことを見るが(ための)故に、來りて集會せり。此の三千大千世界は、其のあらゆる宮殿・舍宅・林樹・藥草・莖葉・華果・衆雜・寶物に隨つて、是の如きの一切皆悉く半月に變成して彼こに現ぜり。一一の半月の中に、是の色光を出すこと千日月の如し。和合の光明は遍く三千大千の佛土を照せり。是の如く色相は廣大莊嚴なり。

是の時、十方無邊の佛土は一切皆現ぜり。彼の佛土に於て、菩薩・摩訶薩・釋天王・梵天王及び餘の天王・龍王・夜叉王・緊那羅王・一切の神王は佛の威神を承けて、此の佛及び大衆の集りを見ることを得、復、是の如き妙色光明を見る。見已りて皆悉く發意して來らんと欲し、佛の神力を承けて、一念の頃に於て卽ち佛所に至り、禮拜供養して至心に聽法せり。

爾の時、月藏菩薩摩訶薩・天寶末・天花・天香・天鬘・天衣を以て、佛の上に散じ、三遍、散じ已りて右遶三匝して、佛の前に住立し、合掌して白して言さく、「大德婆伽婆よ、我れに罪過有りて、此の大衆の集會に及ばざりき。十方のあらゆる菩薩摩訶薩、此に於て悉く集れり。我れに因緣有りて後れて此に來至せり。大德婆伽婆よ。我れ、本國の月勝世界に在り、諸の眷屬と七日の中、阿頗那迦定に入れり。定從り起ち已りて卽ち日月光如來に問はく、「大德婆伽婆よ。徒衆眷屬は今何所に去りしや」と。日月光佛は卽ち我に答へて言はく、「善男子よ、東方に此を去ること百千億佛世界を過ぎ已りて、次に世界あり。名づけて娑婆と曰ふ。彼の土に佛有す。釋迦牟尼如來 應供正遍知と號けたまへり。世に住して說法し、未だ涅槃に入りたまはざるなり。今、彼處に於て、大衆集會し、十方の諸佛の國土のあらゆる菩薩摩訶薩の一切は皆、彼の世界に集りて、釋迦牟尼佛を見たてまつり、

譯し、通常廣目天と呼ぶ。西天王の一。西方の守護神なり。以上の四天王は是れ帝釋天の外將なり。凡そ須彌山の半腹に由犍陀羅 Yugandhara といへる一山あり。その山に四頭ありて四王各々こゝに居り各々一天下を護る。依て護世四天王ともいひ、その所居を四王天と呼ぶ。卽ちこれ六欲天の第一、天處の最初なり。諸經論に說かるゝ所なり。

【五二】地神。梵 Dṛdhi 或は Dṛdha-pṛthivī 堅牢地神のことなり。資財珍寶を伏藏し、衆病を療し、怨敵を降伏すといふ。

【五三】阿修羅。梵 Asura 阿須羅、阿須倫、阿蘇羅などの音譯あり。無端、容貌醜陋の義。一說に無酒或は非天の義あり。此れは帝釋天と常に戰ふ神となす。六道の一、八部衆の一に數へらる。

【五四】羅刹。梵 Rākṣasa 羅刹娑、羅叉娑などと譯す。女を羅叉私 Rākṣasī といふ。惡鬼の總名にして可畏、暴惡などの義あり。慧琳音義廿五卷に羅刹は此れ惡鬼といひ、人の血肉を食ひ或は飛空し或は地行し捷疾きこと畏るべきなりといへり。

【五五】緊那羅。梵 Kiṃnara 緊捺羅、緊陀羅、甄陀羅、眞陀

界の欲を離るゝの聲・[七九]三種の菩提聲・[八〇]無常聲・[八一]苦聲・[八二]無我聲・[八三]空聲・不怖望聲・離喜聲・無生聲・如體性聲・實際聲・法界聲・如々聲・不去不來聲・無處不建立不退轉不行無窟宅無所依發精進聲・檀波羅蜜聲乃至般若波羅蜜聲・[八四]慈悲善捨四念處乃至[八五]八聖道分聲・[八六]奢摩他毘婆舍那聲・[八七]四攝聲・[八八]四無礙聲・攝受正法聲・因緣法聲・護正法聲なり。幻の如く、夢の如く、影の如く、響の如く、水中の月の如し。諸の衆生に隨ひて、應に得度すべき者は而も之を攝受し、流轉を厭離して[八九]空閑阿蘭若處に出で向はしめ他の爲に說く者は已に自ら之を行じて相違背せず。悉く皆法の如く堅固に安住して、一切の善根を求むる聲・十地の聲・無生忍聲・十八不共法・聲轉法輪聲・一切種智聲・生死の流轉（に於て）八聖道に住して流轉に隨はざらしむる聲・四魔を降伏して無餘涅槃に入らしむる聲となる。是の聲を聞き已らば、此の三千大千世界の衆生及び地獄の衆生等は、彼の一切の諸の衆生の類に於て、一々の衆生をして皆前身に善知識に親みし因緣力を以ての故に、其の差別に隨ひて種ゑし所の善根を、若しは檀、若しは尸、若しは修禪定、若しは聲聞及び緣覺乘に於て、發心起願せしめ、若しは無上大菩提の果に於て、弘誓の願を發さしむ。彼の衆生に於て本の所習に隨ひ、前の諸聲の如く、悉く其の耳に入り、其の善根に隨ひ、曾て修行造作せし所の業緣に（於て）皆能く此の宿命の事を憶念して、佛法僧寶を愛重し敬信して、速かに來りて歸依せしむ。彼の衆生の中、自ら業障有るは悉く除盡を得しめ、彼に於て命終すれば一時に天に生じ、及び人間に生じ、俱に佛所に至りて而も坐して聽法せしむ。是の如く、畜生餓鬼亦悉く來集するは皆是れ先業に善知識に親みし因緣力の故に善根を種ゑし故に、若しは檀、若しは尸乃至業障をして盡滅するを得しむ。其の中に亦即身來りて佛所に至りて聽法するものあり。亦彼に於て命終して天人に生じ來りて佛所に詣りて正法を聽受するものあり。是の如く人天悉く佛所に來る。惟だ魔王及び諸眷屬・四阿修羅王幷に其の眷屬を除く。

時に三千大千世界の地平かなること掌の如し。爾の時に當りて、[九〇]須彌山・[九一]鐵圍山・大鐵圍山・黑山

の一人北方の守護神なり。此の神の因緣物語は印度神話の中金毘羅 Kubera として暗黑の屬性たりしが次第に轉化して佛敎に入り護法神と施福神とを兼ねてゐる。夜叉は彼の眷屬とす。

【四八】提頭賴。梵 Dhṛtarāṣṭra 提頭賴吒或は提多羅吒とも音譯す。即ち通稱持國天といふ。四天王の一。須彌山の半、第四層の東方の守護神なれば東方天ともいふ。乾闥婆を眷屬とす。

【四九】毘樓勒。梵 Virūḍhaka 毘樓勒迦、毘留勒叉、毘盧擇迦、鼻溜茶迦、毘瑠璃などゝ音譯す。即ち通稱增長天と呼ぶ。四天王の中南方を守護する天名。鳩槃茶を眷屬とす。

【五〇】鳩槃茶。梵 Kumbhāṇḍa 弓槃茶、恭畔茶、拘槃茶、俱槃茶、拘辨茶などゝ音譯す、鬼の名にして人間の精氣を啖ふ鬼なりといふ。甕形鬼、冬瓜鬼などゝ義譯す。慧苑音義上に鳩槃茶此に陰囊といふ。亦形印といふ。その說明に此の類の陰囊の狀冬瓜のやうで行く時擧て肩上に置き、坐する時即ち之に據る。斯の弊狀によつて諸の類と特異すといふ。

【五一】毘樓博。梵 Virūpākṣa 毘流波叉、毘嚕博乞叉とも音

是の語を作し已りて、呪を說いて曰はく。

多地夜他一・栴達梨二・栴達㘄毘提三・栴達㘄磨咩四・栴達㘄婆々犀四・栴達㘄跋帝五・栴達㘄不㮈六・栴達囉婆吟七・栴達囉差帝㮈八・栴達　闍移九・栴達一〇・囉頞寄一一・栴達囉底㮈一二・栴達囉呟咩一三・栴突嘍一四・栴達囉婆囉吟一五・栴達囉勿達㮈一六・栴達㘄婆地移一七・栴達㘄婆咩一八・栴達　佉祇一九・栴達囉因達㮈二〇・栴達𪐐惡差・栴達囉梨鞞二一・栴達囉簸利鞞二二・栴達囉跋筳二三・栴達囉悉帝二四・栴達囉簸𥫱二五・栴達囉頞泥二六・栴達囉祇㮈二七・栴達囉博差二八・栴達囉悉泥吟二九・栴達囉盧咩三〇・栴達囉鳩閉三一・栴達囉婆閉三二・栴達囉受婆隷三三・栴達囉賓滯三四・栴達囉惡差三五・栴達囉藪帝三六・栴達囉伽泥三七・栴達囉什鞞三八・栴達囉悉鉢尸三九・栴達囉磨泥・栴達囉跋帝四〇・迷底唎耶跋帝四一・迦嘍拏跋帝四二・薩帝耶跋帝四三・多𥫱耶跋帝四四・差耶跋帝四五・扇多跋帝四六・底囉跋帝四七・栴達囉盧寄四八・藪婆呵四九

と。

「世尊よ。此の如き神呪は過去諸佛牟尼仙聖の建立し守護したまふ(ところ)なり。此の如き神呪を月幢月と名く。能く衆生をして悉く吉祥を得、三寶に歸信せしめ、一切の諸惡重罪を滅除し、乃至無上涅槃を逮得せしむ」と。

月藏菩薩、是の呪を說きし時、三千大千世界は[六九]六種に震動せり。[七〇]欲界・色界に依れる一切衆生は皆大戰悚し驚怖して安からず。時に諸の天は種々の寶・種々の花・種々の香・種々の[七一]末香・種々の衣服・種々の臥具・種々の[七二]瓔珞を雨せり。是の如き等の種々の物を雨せし時、是の如き諸の物互に相棖觸し、種々の妙法音聲を出せり。謂く[七三]三寶聲・[七四]三律儀聲・[七五]三解脫聲・[七六]三明聲・[七七]三學聲・[七八]三

丘、比丘尼、沙彌 Srāmaṇera 沙彌尼 Srāmaṇerikā。

【四一】 慳捨・持戒・精進・忍・禪・妙般若は六度を指す。

【四二】 大梵王。梵 Mahābrahmāṇaḥ 大梵天王の略。通常色界の十八天に通ずる名なれども特に初禪梵天の王を指す。而して娑婆世界の主なりといふ。

【四三】 娑婆世界。梵 Sahāloka 堪忍の義なり。依て忍土と譯す。法華文句第二に娑婆は此に忍と翻す。其の土の衆生十惡に安んじ出離を肯んぜず。人に從ふて土と名く。故に稱して忍と爲すと。悲華經に云はく云何んが娑婆と名くるや。是の諸の衆生三毒及諸の煩惱を忍受する故に忍土と名くと。亦雜會と名く九道共居の故にといへり。

【四四】 大魔王。梵 Mahāmārarājn 惡魔波旬の王のこと。

【四五】 欲自在王。大自在王のこと梵 Maheśvara 色界の頂に在りて三千界の主を指す。

【四六】 憍尸迦。梵 Kauśika 憍支迦ともいふ。帝釋の姓なり。雜阿含經四十卷に因緣を敍してゐるが帝釋天が人間たりし時に憍尸迦の族姓なればかくいへり。

【四七】 毘沙門。梵 Vaiśrāvaṇa 通稱多聞天といふ。四天王中

吉祥は正法の雨をして普く諸の衆生に潤ふしたまふ。

吉祥は諸の衆生(に於て)悉く三有を度したまふ。

吉祥は一切をして悉く大涅槃を證せしめたまふ。

「大德婆伽婆よ。我れ今、吉祥の章句大力神呪を說かんと欲す。是の如き神呪は過去の諸仙の宣說し建立し守護したまふ所にして、善く能く吉祥の事を增長し、能く一切の罪垢惡見を除きて、諸の善根に入り大悲を增長し、此の呪句を以て悉く能く一切衆生を資益し、乃至一切の[六〇]獐鹿鳥獸の聞くことを得る所の者は、是の如き等の心をして安隱を得、濁惡世。一切の諸障を離れ、衆生障・法障、是の如き等の障は皆悉く休息せしむ。一切の善根の觸るゝ所の法に隨つて心に入るを得せしむ。念慧堅固にして、名稱形色の人の喜樂する所に(於いて)勇健にして無畏なり。[六一]十善業道に於て、堅固に安住し、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜・[六二]四念處乃至[六三]十八不共法に(於て)堅固に安住し、[六四]大慈・大悲・大方便力・一切種智・乃至究竟無上涅槃に(於て)堅固安住せしむ。其の[六五]五無間業を造作し、正法を誹謗し、賢聖を毀呰すると、[六六]斷常二見とを除き、唯、是の如き諸の罪人等を除き、是の吉祥の句(によりて)、常に先聖の爲に建立せられ、加護せらる。此の如きの呪句は亦復、能く諸天をして信受せしめ、十善業道に入ることを得せしむ。亦檀波羅蜜乃至般若波羅蜜・四念處乃至十八不共法・大慈・大悲・大方便力乃至一切の種智・無上涅槃に入ることを得せしむ。復能く、彼の諸の魔眷屬をして、悉く歸信を得せしめ、諸の神・龍王・夜叉・羅刹・阿修羅・乾闥婆・緊那羅・伽樓羅・摩睺羅伽・[六七]餓鬼・毘舍闍・利利・婆羅門・毘舍・首陀をして十善業道・檀波羅蜜乃至般若波羅蜜・大慈大悲・大方便力・四念處・乃至十八不共法・一切智・一切種智・無上涅槃に入らしめむ。惟だ五逆と正法を誹謗すると賢聖を毀呰するとを除く。」

と。

鬼、捷疾鬼、輕捷、勇健などゝ譯す。能く人間を噉ふを以て名あり。

【三四】乾闥婆。梵 Gandharva 犍達婆、乾沓和、彥達縛等の音譯あり。香神、香陰、尋香等の義譯あり。八部衆の一にして樂神の名。緊那羅と共に帝釋天に奉持して伎樂を奏するを司るなり。

【三五】眷屬。梵 Parivārah 梵語雜名に跛備轉羅の音譯あり。

【三六】吉祥。梵 Śivaṃkaraḥ 西藏語 Çis-mdsad こゝでは感嘆詞とも見られ又佛陀の異名とも見らる。後者には Mvp. 1―57 參照。

【三七】大仙。梵 Mahārṣiḥ こゝでは佛陀の別名。西藏語 Draṅ-sroṅ chen-po. Mvp. 1―17

【三八】聲聞乘の聖者の四つの位階、即ち須陀洹果 Srotāpanna-phala 巴 Sotāpanna-phala. 斯陀含果 Sakṛdāgāmi-phala 巴 Sakadāgāmi-phala. 阿那含果 Anāgāmi-phala 巴 Anāgāmi-phala. 阿羅漢果 Arhat-phala 巴 Arahatta-phala.

【三九】世間無與等。世間に佛と匹敵するものなければかくいふ。

【四〇】四衆。比丘 Bhikṣu 比丘尼 Bhikṣuṇī 優婆塞 Upāsaka 優婆夷 Upāsikā。又は比

吉祥は顯門者と眞正無過法とに、
吉祥は諸の現未の三寶を供養したまふ者に、
吉祥は一切衆の滅除諸煩惱に、
吉祥は諸の衆生の同じく正法に住するものに、
吉祥は檀・尸羅・精進の彼岸に、
吉祥は禪那・度・忍辱・波羅蜜に、
吉祥は諸の一切の彼の智岸に到る者に、
吉祥は諸の病をして一切皆除愈に、
吉祥は皆一切の濁惡世を休息せしめんために、
吉祥は諸の衆生の願を悉く解脱せしめんために、
吉祥は一切をして悉く諸の　無漏を得せしめたまふ。
吉祥は大地に於て種子を所生したまへるものなり。
吉祥は諸の禾稼と藥草樹林の果とに
吉祥は彼の一切を時に依つて悉く成熟したまふ。
吉祥は勝地の精を一切處に充滿せしめたまふ。
吉祥は人精氣を一切に皆安住せしめたまふ。
吉祥は法精氣を一切の衆に充滿せしめたまふ。
吉祥は皆一切諸の罪惡を休息せしめたまふ。
吉祥は衆生をして勝菩提を得せしめたまふ。
吉祥は諸法に於て自在にして彼岸に到りたまふ。

bodhi 心性を覺察して菩提に趣かしむる法を稱す。七法あれば七覺と名け、菩提に到る寶なるが故に覺分寶と云ふ。

【二六】涅槃。梵 Nirvāṇa 多くの音譯義譯を有し、生死の原因をかね之を斷盡してその結果解脱を得ることをいふ。辭書に就て看るべし。

【二七】渇愛。梵 Tṛṣṇā 巴 Taṇhā 渇して水を愛すること衆生が五欲に執着するを譬へていふ。

【二八】佛。梵 Buddha 法。梵 Dharma 僧、梵 Saṅgha 所謂三寶のこと。

【二九】人師子。梵 Narasiṃha 佛を指す。百獸の王なる師子に譬へ、人中の王といへる意を寓していへるものなれば世尊の別稱なり。

【三〇】大目犍連。梵 Mahāmaudgalyāyana 舍利弗と並び稱せられ神通第一といはる。

【三一】天。梵提婆 Devaḥ, devatā 或は Sura. 光明、淸淨、自在、自然、最勝等の義を存し人間以上の勝れたる果報を受くる一群を稱す。又天趣などゝいひて六趣の一。須彌山の中にをる。

【三二】龍。梵那迦 Nāga 長身、無足、蛇屬の一なりといふ。八部衆の一。

【三三】夜叉。梵 Yakṣa 能噉

吉祥は[四一]檀捨、持戒及び精進を行じたまふ。
吉祥は忍辱、及以妙般若を修したまふ。
吉祥は[四二]大梵王[四三]娑婆世界主に
吉祥は[四四]大魔王[四五]諸欲自在王に
吉祥は[四六]憍尸迦と輔佐諸眷屬とに
吉祥は諸天衆、及び諸宮殿等に
吉祥は[四七]毘沙門と及び諸の夜叉衆とに
吉祥は[四八]提頭頼と眷屬乾闥婆とに
吉祥は[四九]毘樓勒と并に[五〇]鳩槃茶とに
吉祥は[五一]毘樓博と及び諸の龍軍衆とに
吉祥は日月天と星辰及び諸宿とに
吉祥は大自在、兒及び造界主とに
吉祥は風火神と、及以[五二]地神等とに
吉祥は諸の龍衆と、及以[五三]阿修羅とに
吉祥は諸の[五四]羅刹と及與[五五]緊那羅とに
吉祥は[五六]迦樓羅と[五七]摩睺羅伽等とに
吉祥は甘雨と行雨とを雨らす大神王に、
吉祥は護持國と、一切人中王とに、
吉祥は[五八]婆羅門・刹利・毘舍・陀に、
吉祥は所供養、最勝尊導師に、

闍那と言ふ皆訛なり。正しく踰繕那といひ、此に合也應也と云ふ。計して爾午度量に應合することと此の方譯邏に同じといふ。印度にては聖王一日の行程を一由旬といへり。新舊音譯の數多し『經典の諸所に散説せらる。尙辭典に就て見るべし。

【三二】七寶。梵 Saptaratna. 諸經論の所説不同なり。通例は次の如し。金 Suvarṇa 銀 Rūpya 琉璃 Vaidūrya 玻璃 Sphaṭika 硨磲 Musāragalva 赤珠 Rohita-mukta 瑪瑙 Aśmagarbha.（梵本阿彌陀經）。

【三三】檀尸。檀は檀那の略、梵 Dāna 布施、施與と譯し、尸は尸羅の略、梵 Śīla 清涼と譯し、戒と譯す。舊譯に性善とあり、六度の初二度に當る。

【三四】八功德水。稱讃淨土經に何等を八功德水と名くるやと問ひ、一には澄淨、二には清冷、三には甘美、四には輕輭、五には潤澤、六には安和、七には飲時には飢渴等の無量の過患を除き、八には飲已て定んで能く諸の根を長養して四大增益すとあり。普通、須彌山と七金山との間には八功德水を湛滿すといふ。

【三五】覺分寶。七覺分又は七覺支七菩提分のこと。梵 Sapta Bodhyaṅgāni, 巴 Satta bojj-

吉祥は魔衆を降して正法幢を建立したまふ。
吉祥の轉じたまふ所の者は最も是れ正法輪なり。
吉祥は異空を愍れみて諸の外道を降伏したまふ。
吉祥は法雨を降らして渇ける世間を充足したまふ。
吉祥は天人乾闥婆に明證と作りたまふ。
吉祥は滿世界に我が最上師たり。
吉祥は[三八]四果に安んじて應に世の供養を受けたまふべし。
吉祥は僞衆をして涅槃に安住せしめたまふ。
吉祥は久しく住したまふ時、法眼を建立せらる。
吉祥は久しく世に住したまへば[三九]世間與に等しきものなし。
吉祥の菩提果は、衆の大利を獲る所なり。
吉祥は衆生の爲に、無上法を宣説したまふ。
吉祥は法水を以て、諸の衆生を洗浴したまふ。
吉祥は善く能く是の諸の天人等を度したまふ。
吉祥は能く無垢眞妙の法を顯現したまふ。
吉祥は衆生のあらゆる諸の煩惱を除きたまふ。
吉祥は諸の僧衆(の中に於いて)、世間最第一なり。
吉祥は善く世に生じて、能く人天を益したまふ。
吉祥は[四〇]四衆をして、明淨にして善く光顯ならしめたまふ。
吉祥は四衆をして戒律儀を全護せしめたまふ。

四

Dṛam 分陀利、分陀利迦、分陀利華、奔茶利迦、分茶利迦の音譯あり。正しく全く開敷せる白色の蓮花なり。故に白蓮華と譯され、人中好華、希有華、妙好華、百葉華などゝも稱して最も高貴なるものとされ、音義などに詳なり。

【一七】阿提目多迦華。Atimuktakam 草の名。善思夷花、苣藤子、龍紙華などゝ譯さる。

【一八】瞻波迦華。梵 Campakah 樹の名。占婆、瞻婆、瞻匐、瞻博、旃波迦、瞻婆、瞻博迦、瞻婆などゝ音譯す。玄應音義第二一に譯して金色花といひ、大論に所謂、黃花樹なり。樹形高大にして花亦甚だ香しく、其の氣、風を逐ふて遠くまで熏ずといふ。

【一九】婆利師迦華。梵 Varṣikī 婆師迦、婆使迦、婆利師、婆利史迦羅、婆師波利などと音譯す。花の名。雨生夏生と譯す、慧苑音義下に、婆師迦は具に婆利史迦羅といふ。婆利史とは此に雨をいひ、迦羅とは此に時をいふ。西域は夏を呼んで雨といひ、其の花夏時に生ず、故にこの譯名ありと。

【二〇】半月。梵 Ekapakṣaḥ 半月形のこと。

【二一】由旬。梵 yojanam 玄應音義第二に由旬或は由延と言ひ或は俞旬といひ、或は踰

る。（かしこに）月藏童眞菩薩摩訶薩有り、諸の眷屬八十億那由他百千の菩薩摩訶薩を將ゐて、此（佉羅帝山）に來り向はんと欲す。我を見て禮拜供養せんと欲し、大衆と與に集説に隨喜せんとするが爲なり。又、諸の[三一]天・[三二]龍・[三三]夜叉・[三四]乾闥婆等に法眼を付囑せんと欲するが故なり。

時に應じて、月藏菩薩摩訶薩は其の[三五]眷屬八十億那由他の百千億菩薩摩訶薩と與に、彼の世界（月勝世界）より來りて佛所に至り、頭面に足を禮して、右遶すること三匝して佛前に住立し、皆悉く合掌して、一音に偈を説かく、

[三六]吉祥の無數劫に修したまへし所は衆生の爲なり。
吉祥の衆生を見たまふは生死の苦みに逼らるればなり。
吉祥の檀施を以てして[三七]大仙は饒益を作したまふ。
吉祥は能く施を行じて、人天を超越したまふ。
吉祥は淨戒を護りて衆生をして動ずること能はざらしめたまふ。
吉祥は怒者をして慈善心に住せしめたまふ。
吉祥は勇進を發して懈怠者を度脱せしめたまふ。
吉祥は惡道を離れて善趣に安置せしめたまふ。
吉祥は能く忍を修して、忿惡心を容恕したまふ。
吉祥は希有の事なれば是の故に悉く歸依す。
吉祥は諸の禪を修めたまへば諸天希有の思ひを生ぜり。
吉祥は悉く衆生の諸の苦海を枯渇せしめたまふ。
吉祥の熏修の智は惡道輪を追廻したまふ。
吉祥の上菩提は最も到り難き處に到らしめたまふ。

ゐて終に究竟の眞理に到達することとなり。こゝでは善い意味の方便なり。

【一一】習氣。梵 Vāsanā 慣習生得の氣分といふが如し。例せば香物を納れたる器物はその香を取除けども尙あとに氣分を殘すをいふ。故に勸方便をもて僅かに殘れる慣習の氣分までをも斷せんとするをいふ。

【一二】國譯一切經大集部三pp. 1—226 頁參照。

【一三】優波羅華。梵 Utpalam 優鉢羅、烏鉢羅、漚鉢羅、優鉢剌等多くの音譯あり。蓮の花。辭書に從へば學名 Nymphaea tetragona 和名ヒツジグサ卽ち睡蓮なりといふ。漢譯では靑蓮花、黛花、紅蓮花などゝいへり。

【一四】波頭摩華。梵 Padmam この他鉢特摩、鉢頭摩、鉢曇摩、の音譯あり。紅蓮華と譯す。

【一五】拘牟陀華。梵 Kumudam 固目答、拘勿頭、俱勿頭、句文羅、拘物陀、拘母陀、拘牟頭、拘留頭、拘某頭、拘牟那、屈摩羅、究牟陀、拘物頭、拘勿投など多くの音譯あり。玄應音義慧琳音義に出づ。譯、黃蓮花、晚香、蓮花の未だひらかざるところのもの

【一六】芬陀利華。梵 Puṇḍar-

ふところ有るを知りて、坐よりして起ち、偏袒有肩し、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、偈を説いて言はく、

惟だ佛のみ悉く諸の煩惱を除き、　盲冥の中に於て能く覺悟したまふ。
群生の爲の故に惡趣を閉ぢて、　諸の衆生をして善道に住せしめたまふ。
惟だ佛のみ諸億の魔を降伏せしめ、　諸の外道をして光顯を失はしめたまふ。
衆生を調伏して[二三]檀戸に住せしめ、　衆生の煩惱の海を枯渇せしめたまふ。
[二四]八功德水もて洗浴せしめ、　[二五]覺分寶を以て衆生を濟ひたまふ。
無量の億衆をして[二六]涅槃に入らしめ、　能く無上の法輪寶を轉ぜしめたまふ。
一切の所有諸の龍衆は、　瞋の爲に諸の惡を行ぜしめられ、
[二七]渇愛に逼られて慈有ること無し。　惟だ佛のみ能く益し歸信せしめたまふ。
四天下の龍は皆來り集り、　一心に[二八]佛・法・僧に歸し、
諸の業障及び煩惱を盡くして、　皆正法を護りて安住せしめたまへり。
此に於て復た妙華雲を現じたまへば、　中に半月ありて光り照曜し、
一切は此の半月の鬘に現ずれば、　今當に何なる佛事有らんかを欲へり。
此の諸の華を積むこと大山の如く、　諸の香華及び衆寶を雨したまへり。
大衆瑞を覩て心に疑ひあり、　當に何なる法雨を雨さんと欲したまふやと。
此の處は微妙最第一にして、　此の如きの大衆は皆依住せり。
諸の過ぎにし佛に於て供養を修し、　是の[二九]人師子は是の如くにして來りたまへり。

と。

爾の時、佛、[三〇]大目揵連に告げたまはく、西方に世界有り、月勝と名け。佛を日月光と號けたてまつ

舍と音譯す。限りなき數多き欲望の總名。すべて自我の私情より起り心身を惱亂せしむる精神現象。別名・異名極めて多し。法音義林 Fuso. II. p. 121 參照せよ。

【八】纏。梵 Paryavasthānam 縛。梵 Bandhanam 共に煩惱の異名。凡そ煩惱は人間の心身を纏縛して自由ならしめぬ故を以て此の名あり。三纏、三縛、八纏、十纏等の種類あり。

【九】解脫。梵 Apavargah Vikṣobham, Mokṣa, Mukti (巴Mutti), Vimukta (巴 Vimutta) Vimukti(巴. Vimutti) Vimoti(巴 Vimokha) 煩惱の束縛を離れて自由なる悟りの境界に入るをいふ。又涅槃の別稱とも見らる。卽ち一切の纏縛を離るるこれ解脫の境界なればなり。又禪定の別稱なり。三解脫、八解脫、不思議解脫などいひて禪定の德を表はす。

【一〇】勤。梵 Vyavasaya Vīrya 勤めて善法を行ふこと。音譯毘梨耶、精進のことなり。

方便。梵 Aupayikam, upāya 方は方法、便は便法、佛教にては時に智慧の般若に對しての言葉となり、或は眞實に對していふ言葉ともなる。俗にてだてといふ。手段方法を用

卷の第四十六

[三]月藏分第十四月幢神呪品　第一

高齊天竺三藏　[二]那連提耶舍譯す

是の如く我は聞けり。一時、佛、[四]佉羅帝山牟尼諸仙の所依住處に在したまへり。大比丘衆、[五]有學[六]無學六百萬人と與なりき。(皆)諸の[七]煩惱の堅牢なる[八]纒縛に於て悉く[九]解脫を得たり。唯[一〇]勤方便をもて[一一]習氣を斷ぜんことを求む。及び諸の菩薩摩訶薩衆あり、無量無邊にして算數べからず、稱計すべからず、悉く忍力を得て諸の龍衆を化せり。

[一二]日藏經を說き已りて、卽時に西方に大華雲を現じたまへり。所謂、[一三]優波羅華・[一四]波頭摩華・[一五]拘牟陀華・[一六]芬陀利華・[一七]阿提目多華・[一八]瞻波迦華・[一九]婆利師迦華、是の如き華雲悉く皆來現せり。其の華雲の中に[二〇]一半月を現じ、廣さ十[二一]由旬あり。半月の中に於て復た、眞金重閣の講堂を現じ、莊嚴微妙なり。其の堂の光明は百千萬億の日月光明に過ぎ、其の光り悉く佉羅帝山を照らせり。復た、種々の奇異なる華雲を現じたまふ。所謂、優波羅華乃至婆利師迦華なり。其の華光艷にして牟尼仙の所依住處の、[二二]七寶五柱の重閣講堂を照らして、甚だ奇しく微妙なり。日月を隱蔽して光り現ずること能はざりき。其の堂中に於て、復た半月を現じ、半月の中に於て千葉の青色の蓮華有り。其の華臺の上に復た世尊有して、端坐して說法したまふに、其の光普ねく、一切の大衆を照し、一一の頭上に皆半月の微妙天蓋を現じたまひ、復た種々の寶と、種々の華と種々の香とを雨したまへり。

爾の時、慧命、大目揵連は是の如き等の神通變化を見て、希有の心を生ぜり。又、大衆の心に疑

【一】此の卷より第五十六卷に至るまで宋・元・明の三本及宮內省圖書寮本は大方等大集月藏經に作れり、又。Hoernle の Manuscript. Remains of Buddhiit Literature found in E. Turkestan.pp. 104—109 London, 96 を參照せよ。

【二】那連提耶舍梵 Narendrayaśas. 南條目錄の附錄第二 No. 120 參照せよ。

【三】宋・元・明三本は月藏分第十四の六字なし。

【四】佉羅帝耶山・佉羅提山ともいひ、玄應音義第二一には之等は皆一なりと稱し、翻譯して驢林山といふ。慧琳音義第一八には十寶の一山なりといひ、亦是は七金山の一ともいふ。

【五】有學。梵 Śaikṣaḥ 無學の對。小乘四果の聖者の中で第三果までを有學といひ、未だ學修すべきものの殘れるを意味し、十八有學 Aṣṭādaśa Śaikṣaḥ などいふことありて諸經論の中に說かる。

【六】無學。梵 Aśaikṣaḥ 有學の對。前項有學の聖者が一步進んで更に第四果阿羅漢果を得たること。卽ち極果の意。此の位の者はこれ以上學ぶべきもの無きによつて無學の名あり。

【七】煩惱。梵 Kleśa 吉隸

付囑のために、閻浮提中の諸國名が列擧されてゐる。要するに本品は、諸の天龍阿修羅等をして、教團を守護せしむることを說かれたものだが、偶々五堅固說があるので、苟くも滅後に於ける教團の變遷を述べやうとするものは、毎に先づこの一節を引用することゝなつた。

星宿攝受品第十八（合部第五十六卷）

國土擁護のために、更に四方七宿合せて二十八宿、日、月、熒惑等の七曜、彌沙、毘利沙等の十二辰への付囑を說く。前品と共に諸國名を列擧して、各々その分屬が定められてゐる。

建立塔寺品第十九（合部第五十六卷）

梵釋四王等が、過去の二十五佛塔を擧げて例となし、今現在未來に幾所の塔寺あるかを問ふ。佛は笑ひ且つ光を放つて諸國を照せるに、四天下中に無量百千の諸佛が處々に現はれ、閻浮提のみでも二百五十千佛が、印度、西域、震旦の各國土に現はれた。乃ちその塔寺阿蘭若等の護持を付囑す。

法滅盡品第二十（合部第五十六卷）

月藏が月燈を顧み、正法護持に關して偈を說き、月燈は偈を以て更に佛に問ふ佛は偈を以て末法時の事を答ふ。この偈文中に具さに法滅澆季の世相が說かれてゐる。之を聞ける「大衆は皆默然」であつたが、唯だ彌勒等の賢劫の大士が、語を出して「應機而說法」を誓ふ。佛は重ねて偈を說いて法滅の世相を懸記し、次に陀羅尼を說き、來り合せるもの皆咸く大益を得た。終りに佛が彌勒等の賢劫諸菩薩に告げて、佛の果報分は之を三分して、一分は滅後の禪解說三昧堅固の聲聞に、又一分は破戒の聲聞、「剃頭着袈裟者」に頒與することを說き、最後に持經の十種功德、八種功德、十三種功德を列擧し、上來所說の「月藏法門」が結ばれてゐる。

月藏經本文の國譯とその脚註とは專ら成田昌信氏が擔當され、自分も一と通り閱了したが、昨歲末圖らずも同氏はその恩師の西逝に會はれたので、打合せの機會を失し、自分も亦雜務匆忙のため一一修訂の遑なく、從つて意に滿たざる節も多々あつたが、出版期日の關係上、如何ともすることが出來なかつたので、今聊か解題を詳說して、幾分でもその責を塞ぐことゝした。

昭和九年一月十日

矢吹慶輝しるす

てゐる一節がある。終りに諸鬼神衆が、各々因地の罪業を懺悔し、弘法蘭若の比丘衆と佛法とを護持せんことを發願してゐる。要するに本品は般若體空の教理と六度十善の實行とを說けるもの。

諸天王護持品第九　(合部第五十一卷)

四天下を以て一切の天龍鬼神に付囑し、過去世に於ける拘留孫等、三佛の如く異りなからしむべきを以てし、終りに飮食、衣服、臥具、醫藥を施すものは、五利を得ることを說き、要するに前品と同じく令法久住と利益衆生とを主說してゐる。此の中、兜率陀天、他化自在天以下、四天王、七宿、三曜、三天童女に依りて、東西南北の人界四洲の分屬を定め、各々その國土を護持することを敍べ、就中、南閻浮提は「人、勇健聰慧にして梵行相應」の國土なるを以て、佛の出世に遭ふことを得たりとなし、印度を中心として諸國名を列ね、之を毘沙門天等の四天王に配屬せしめてゐる。

諸魔得敬信品第十　(合部第五十一卷)

諸魔王が、偈を說いて佛を讃嘆し、百億の諸魔と共に、正法の流轉と國界の護持とを念願す。佛卽ち授記し已りて重ねて正法の久住を一切の天王に囑す。

提頭賴吒天王護持品第十一　(合部第五十二卷)

毘樓勒叉天王品第十二　同

毘樓博叉天王品第十三　同

毘沙門天王品第十四　同

以上四品では、四天王をして特に人界四洲を四分して分擔護持せしむることが說かれてゐる。(經說や諸傳と共に、于闐から支那、日本にかけて毘沙門天が特に尊信せられた事實にも關係がある)。この品中に四天王諸眷屬の一々の名字が具說されてゐる。

呪輪護持品第十五　(合部第五十三卷)

佛が四天王の爲に五呪を說く。初に總次に北、次に東、次に南、次に西。

忍辱品第十六之一、二(合部五十三、四卷)

阿修羅に對して離瞋行忍を說き、龍王に對して行忍の果報(十種の善果、五種の勝果)を說く。次に月藏は又大慈陀羅尼を述べ、天龍と阿修羅とが相互に懺謝した。佛重ねて三寶を付囑護持せしめ、兼ねて出家人を打罵する者は無量の罪を得ることを明かし、終りに佛は音聲に加被して、妙法十八空等を演出せしむ。

分布閻浮提品第十七(合部第五十五卷)

首めに佛は閻浮提を擧げて、天龍鬼神に分擔護持せしむることが說かれ、次に月藏のために彼の有名な五堅固の懸記(豫言)が說かれてゐる。卽ち滅後五百年づつ五期に分けて、初五百年解脫堅固、次五百年禪定堅固、次五百年讀誦多聞堅固、次五百年塔寺堅固、次五百年鬪諍堅固の順序に依つて、各時代に於ける、佛敎の變遷が述べられてゐる。同時に分布

するに至りし顚末を叙してゐる(第三品)。

本事品第四　（合部第四十八卷）

彌勒が、佛と阿修羅との往因を問ひ、佛は過去毘舍浮佛時以來の因緣本事を說く。即ち過去世に於いて九人の兄弟中、佛はその長兄にして、八弟を化せんが爲めの千年苦行の往因を叙べ、その八弟は羅睺羅等の四阿修羅王、魔波旬、彌勒、毘摩詰(維摩)、提婆達多だとされてゐる。

諦品第四　（合部第四十八卷）

第一義諦品の略稱。佛が月藏菩薩の請問によりて、阿蘭若に住し第一義諦を修する法を說く。第一義諦を修するものは、四聖種に依つて愛取を捨て、四大、五陰、根、境、識等を念ぜずして、能く衆生を成熟し、六度の行を滿足すること、恰かも一日の月より十五日の月の如しとしてゐる。次に同じく月藏の請問に因りて、諸三昧の名を擧げ、聲聞乘三昧、緣覺乘三昧、大乘三昧（慈、悲、喜、捨、念佛等）を說き、二乘を超越せる第一義諦三昧（第一義禪）の十二種功德を列擧してゐる。

令魔得信樂品第六

鬼神集會品第七　（合部第四十九卷）

帝釋天、梵天王及び護世四王等が、魔波旬を勸諫して、他を惡道に誘惑せる罪過を懺悔せしめ、且つ佛法を深信すべきを以てせるに對し、魔波旬は以後、心を回して、佛に對する憎惡の害心を除き、諸善法の妨害をなすことを息むべきことを誓ふ。そこで佛は忍辱行の功德を說く。同時に此處に來會せる八部諸神、四大天王等も亦正法を護持し衆生を利益すべきことを誓ふ。鬼神集會品中、長行に「白法漸滅黑法增長」の文あり、偈に「於白法盡時」の句がある。

諸惡鬼神得敬信品第八之一二　（合部第五十卷、第五十一卷）

護世の四大天王、諸鬼神衆が、皆佛に歸信し已りて、今梵釋諸王以下、胎卵濕化、地行水行空行一切餘す所なく、悉く佛所に「大集」したので、正辯梵天が、此の諸天鬼神をして各己れの分に隨つて、國土を護持し衆生を養育せしめられんことを佛に勸請した。佛は衆生平等、法平等等の十種平等を說き、世間清淨平等と第一義清淨平等とを詳說された。諸菩薩は此の十種平等を體得せるが故に、能く惡鬼神を制御し得るも、大慈悲心を以ての故に彼等の自由を許してゐる所以をも述べられてゐる。尙此の品中に羅刹王の懺悔の一節がある。

世間清淨平等の法平等中には、「衆生と法と佛との不離を說き、布施清淨平等中には、「一切衆生が互に「父母兄弟男女等に非る者有ること無し」等の文がある。又六度に就いて世間と出世間との清淨平等を說ける中に、本經の宗趣が表はれてゐる。此の中、禪清淨平等には、禪觀を細說し

logue Géographique des Yakṣa dans la Mahāmāyūrī (1915)に、その研究が發表されてゐる。經文に「一名諸國、多名諸國、同名諸國、及び不列名諸國」とあるが、勅勤は嚈噠が乾陀羅を亡ぼした時に立てられた王名の勅勤Tegin を取つたやうに、必ずしも國土名だけでなく、又人界以外の國名も雜つてゐるが、何れにしても印度や西域地方の史傳に依つて考證を要するものである。

又(七)に就いても、唐不空譯の宿曜經、唐一行撰の同儀軌、唐不空譯の七星如意輪秘要經、唐一行譯の七曜星辰別行法、唐金倶吒撰の七曜攘災決、宋法賢譯の宿命陀羅尼、同譯の宿命智陀羅尼一卷等の、星宿を說ける關係經典中では、月藏經は日藏經とゝもに、古譯に屬するものとして興味ある經典である。普通に大陰曆に基く印度の天文曆法又は占星の俗信と稱せらるゝも、宿曜經中、胡名、波斯名、天竺名を併擧せるが如く、少くとも印度以外の曆法を混じてゐるやうである。之に關聯して、又本經中に、波斯思想、摩尼教思想と似通つたものが潜んでゐるやうである。但しそれ等の詳細は別篇に讓ることにする。

一〇、各品の要旨

月幢神呪品第一　(合部第四十六卷)

月藏經の序分に當り、本經を說くに至りし敎起因緣に始まる。佛、佉羅帝山に在りて日藏經を說き已るや、即時に西方に大華雲並に一半月を現じ、月中の堂內千葉の靑蓮に端座して、種々「甚奇微妙」の神通變化を示現せるによりて、目犍連が斯の如き奇瑞の所由を問ふ。佛は西方月照世界、日月光如來所の月藏童眞菩薩が諸眷屬を將ゐて此處に來り、この大集會に隨喜せんとするための現瑞なることを答ふ。そこで月藏菩薩は諸吉祥章句大力神呪及び月幢月神呪と、その威力とを說く。次に本經の發起因緣並に本經各品に出づる諸天諸鬼神を列擧してゐる。佛は禪功德、六度行の具足を說き、中に先づ本經の骨子たる第一義諦甚深の法要が擧示されてゐる。

魔王波旬詣佛所品第二　(合部第四
諸阿修羅詣佛所品第三　十七卷)

この二品は、魔王波旬が佛所に詣りし所以、及び阿修羅の謝罪歸佛を說く。魔王はその眷屬と共に種々の詭策を弄したが、佛は第一義諦に住せるを以て何等の效果なく、反つて魔界の諸物が悉く半月の形に變ずる等の奇變に會つた。そこで魔は詐り來つて佛に歸依すると、佛は憍陳如のために利養の過失を說かれたので、魔は深く心に愧ぢて佛の說法を聽くに至つた(第二品)。次に魔王が阿修羅を共の黨與に誘はんとした奸計も、月幢月呪の威力によりて力及ばず、阿修羅は悉く佛所に到り、自然に信伏して回心歸依

には、月藏經文を以て、法華經の後五百歳の文を解し、上行菩薩結要付屬口傳には、月藏經五箇五百歳を以て、滅後の五期を判じ、解脱、禪定、讀誦多聞、多造塔寺、鬪諍の五とされた。

撰時鈔には、正像の弘經を大集の前四に屬し、法華經の後五を大集の第五に合して、地涌出現の正法とされてゐる。此の他、守護章等、日蓮上人遺文との對照に就きては祖書綱要删略三（第十二後五百歳釋消通章）等に讓る。

抑も餘宗無得道說は月藏經の白法隱沒が有力なる經證であつたし（法華初心成佛鈔）、第五の五百歳は鬪諍堅固の時代なりとして、一面には折伏によりて法華實敎の敵たる權敎に對する鬪諍を意味すとされたのも（如說修行抄）、他面には出世間の鬪諍のみならず世は澆季に入りて世間にも亦鬪諍ありとされたのも（撰時鈔）、實にこの月藏經說に依る所多つたものである。因つて以て日蓮宗と本經との關係を推知すべきである。

九、本經中の研究資料

月藏經は上述の通り、末法及び法滅の懸記があるので各方面から重要視されたが、そしてそれ等は淨土宗、眞宗、日蓮宗の各宗書において、既に今日まで、餘他の末法思想との比較研究が行はれた。又拙著「三階敎之研究第二部の一、「三階敎」の下にそれに關說してゐるから、總べてそれ等に讓ることゝして、こゝではその他の諸點中の一二に就いて述べる。姑らく上節、第五、「本經の內容」中に數へた。（七）（八）二項中、先づ（八）に就いて、本經の分布閻浮提品第十七、星宿攝受品第十八、建立塔寺品第十九に出て居る國名は、印度、西域（中央亞細亞）、支那に亙つてゐる。これは本經所說の內容に、地方的色彩あることを推測せしむるとともに、たとひ本經の全部ではないにしても、その成立の時代と地點とを示唆してゐるものである。

日藏分の護塔品にも、摩伽陀、摩偷羅、憍薩羅、迦毘羅婆須都、乾陀羅、罽賓等の普通の印度國名の外、西域地方の于闐や沙勒や支那即ち震旦の名まで出てゐるが、月藏經の建立塔寺品には實に五十九國の國名が載つて居り、星宿攝受品には角宿十二國、元宿に十國、氐宿に十三國、房宿に十一國、心宿に十國等、二十八宿を個別に數へると實に三百五十餘國に達して居る。于塡、龜茲（龜玆）、沙勒、鄯善、兜佉羅などの中央亞細亞の古國名のみならず、波斯の名もあり、吳地、震旦（振旦）などの名も載つてゐる。分布閻浮提品にも四十餘國の國名が列ねられてゐるが、これ等は僧伽婆羅、義淨、不空等諸譯の孔雀呪王經等に出てゐる諸國名と共に、甚だ興味あるものである。大孔雀經に就いては M. Sylvain Lévi の Catu-

符契を要すとなし、大集經五堅固說に依りて、「今は是れ第四の五百年なり、余既に定惠の分なし、唯だ修福懺悔を須ゆ」と云つてゐる。要するに淨土教家は他派と異る觀點から、此の月藏經に據つて、五堅固說或は其他を取つて、末法佛教としての根據とした。

× × ×

日本佛教史上、末法思想を根據として一宗を別開したのは、法然、親鸞、日蓮の三宗祖に共通の點だが、その最初は實に法然上人であつた。

抑も末法思想は餘他の數多の經典にも出てゐるが、月藏經はその代表の一經であつて、日本に於ける月藏經の流傳は、現に聖語藏本に本經の古願經があるやうに、勿論奈良朝以來であつたが、別してこれ等の三宗祖が皆その眞撰として引用された、傳教大師の末法燈明記には、この經文が引用されてゐる。同じく傳教大師撰、正像末文と併せて月藏經の五堅固說や、その法滅盡品が重要なる經證となつてゐる。斯うして法然上人は選擇本願念佛集の開卷第一章に、道綽の安樂集を引用して、月藏經文に依つて末法時に於ける聖道難證を標示された。併し立教開宗に關する著述中に、最も多く月藏經を引用されたのが、日本淨土教では先づ親鸞上人であつた。しばらく顯淨土眞實教行證文類、化土卷だけでも、月藏經（別出單行本）卷五の諸惡鬼得敬信品第八、卷六の諸天王護持品第九、卷七の諸魔得敬信品第十、卷八の忍辱品第十六、その他、分布閻浮提品第十七（五堅固說）、法滅盡品第二十からの引文があり、就中、月藏經中の「末法時中乃至未有一人得者」の文は、信行、道綽等と同じく、末法佛教宣言の重要語句であつた。兎に角、大集經の無戒滿洲、月藏經の七種無價寶說、日藏經の星宿品、護塔品などの引文とゝもに、月藏經は實に重要なる經證とされてゐる。詳しくは眞宗の宗籍に讓る。

八、本經と日蓮宗

日蓮宗では正像末三時を解するに、時主機從として時代の力を重視するとは、他宗が機主時從の時の觀察を主說すのと見方が異るものとしてゐる關係上、先づ時に就いても、在世の時（五時）、滅後の時（正像末）、末法五百年、宗祖の時代として、各々特色ある說明をしてゐるが、根本の法華經中に、後五百歲の語が五箇所（藥王品に二文、勸發品に三文）も出てゐるので、之を五五百歲とし、又五箇五百歲とするに就いて、每に月藏經の五堅固說を引用するを例としてゐる。勿論、月藏經は方等部の所屬だから、之を權門と見てはゐるが、月藏經說が屢々引說されてゐるのは事實である。その詳細は同宗の宗籍に讓るとして、姑らく日蓮上人の遺文だけからするも、先づ曾谷入道殿許御書

圖らず北周の破佛が行はれて、恰かも法滅の經説を反顯するやうになつた。そして信行の三階開宗は略ぼその四十八歳頃であつたと想定されるから、時代の現相と本經の經説との符合に驚き、隋代を以て末法と斷定したものと推測される。即ち本經は三階開宗に有力なる經證を提供することゝなつたものである。だから三階敎義中、最も重要なる主張たる約時三階(三階分時)、別法不行、第三階機等には毎に本經を引證するを例としてゐる。その詳細は拙著三階敎の研究に譲る(索引に大集月藏分幷に大集經の參照頁を列ねてゐる)。從つて三階敎中籍には

大集月藏分抄一卷(貞元錄に二十一紙、都目に二十二紙とせり)

(別名)大集月藏分經明像法中要行法人集錄略抄出

大集月藏分依義立名一卷(貞元錄に十九紙、都目に三十紙とせり)

(別名)大集月藏分明像法中要行法集錄略抄異義立名

と云ふやうな著述もあつた程である。姑らく永超錄(堀川帝寛治八年、西紀一〇九四年撰)に、大集經類の注釋書を擧げて、大集經に經疏十六卷、同經疏五卷(或云四卷 憬法師集の二部、十輪經に十部、菩薩藏經に一部の外、上記の月藏分依義立名一卷、同抄一卷の二部だけを列ねてゐるのは、寓目に値ひするものである。

七、本經と淨土敎

北魏の曇鸞(西紀四七六——五四七)には正像末の末法觀が無かつたが、道綽(西紀五六二—六四五)は安樂集上に、全佛敎を聖道淨土の二門に分けて、「聖道の一種は今時(末法)證し難し、一には大聖を去ること遙遠なるに由る。二には理深く解微なるに由る」として、「當今は末法、現に是れ五濁惡世なり。唯だ淨土の一門のみありて通入すべきの路」と云ひ、謂ゆる捨聖歸淨の經證として、大集月藏經文たる。

我が末法時中。億億の衆生、行を起し道を修するに、未だ一人として得る者あらず。

を以てしてゐる。道綽を承けた善導は、觀經疏の首めに、直ちに末法を揭出して、「今、釋迦佛末法の遺跡、彌陀本誓願、極樂の要門に逢ふ」と云ひ、善導の弟子の懷感は、群疑論三、像末念佛章に於いて、前述の三階宗徒が、大集經の五五百歳說に依りて、第三五百年後の學定に適せぬ時代に、念佛三昧は當根佛敎でないと主張したに對し、極力その根據無き謬說たるを反駁した。又三階師が月藏分第十卷に據りて、別法念佛は第三階機に適當せずとの主張に對しても、その甚だ謬れなきことを破斥してゐる。これ等悉く皆本經の所說に基く論議であつた。迦才の淨土論下にも、修道には必らず時と敎との

等しく、その價値の高下は機感の如何に依る。即ち優劣輕重は之を信受する人の如何に依るから、月藏經十一卷二十品中讀誦者によりて、種々なる方面から尊重せられたことであつたらう。例へば教義を味讀するものには第一義諦（第一義諦品第五）十平等（諸惡鬼神得敬信品第八）等を中心として、全卷に亙る空觀の教義、を尊んだらうし、實踐にいそしむものには、六度、十善、特に忍辱行（忍辱品第六）に深信の誠を致し、身證色讀を期したであらうし、又國土の護持といふ點からすると、印度西域地方では諸天諸神の「擁護養育」が說かれた箇處（諸天王護持品第九以下天王品等）が、特に重んぜられたと推測すべき理由もあるが、支那六朝以來廣く教團の關心を繫いだものは、實に五堅固說（分布閻浮提品第十七）及び法滅思想（法滅盡品第二十）であつた。この中、姑らく五堅固說だけでも、三論宗祖の嘉祥大師は、之に基いて道と多聞と三昧と塔寺と鬪諍と愚癡との六種堅固を說き、三階宗祖の信行禪師は、之に據つて第三五百年以後は別法無得道と主張し、淨土教の道綽禪師は、之を學慧と學定と多聞と塔寺と諍訟との五堅固と釋し、日本天台宗祖傳教大師は、初三の五百年を次での如く戒と定と慧とに配し、第四を造寺に、第五以後を末法とした。即ち五五百歲の解釋は人に依つて必ずしも一定してゐないが、本經が支那に於ける隋唐以後の佛教、延いては日本佛教に重要なる關係を有つてゐたことは掩ふべからざる事實であつた。法然、親鸞、日蓮の諸宗祖と本經との關係は次節以下に述べる。

六、本經と三階教

三階教籍の一つの特色は專ら經文を類集して、成るべく私說を挿入することを避けるに在つた。特にその宗祖信行の集錄では經說と人語とを峻別してゐる。そして三藏中でも律論の援引が極めて稀で、主として經文の類集であつた。從つて奈良朝以來本邦に流傳した三階佛法四卷や、燉煌石窟本の對根起行法一卷などには、總計三十八部の經文を類集してゐるが、姑らく三階佛法四卷だけで見ると、十輪經の百二十回、涅槃經の八十七回が第一二位を占めてゐるが、大集月藏經は七十一回で、その第三位を占めてゐる。先づ十輪、月藏の大集部類の經典が如何に三階教と密接な關係があつたかが想像される。三階教は普佛普法を極說した關係上、特定經典を採りて他派の謂ゆる正依傍依を判別することはしなかつたが、事實上、月藏經は第三階宗即ち末法佛教の首唱に方りて、その重要なる所依の典據であつた。

一體、那連提耶舍が天統二年（五六六）に本經を譯した時は、信行が丁度二十七歲の時で、前に述べた通り、本經の譯後、

五、本經の內容

教判論上、天台では大集一類の經典を悉く方等部に攝してゐるが、南三北七の教判中では、先づ虎丘山笈法師が、一代佛教を有相、無相、常住の三教に分けてゐるのに據ると、華嚴の後、十二年間の阿含卽ち見有得道の有相教に對し、大集經第一巻に成道十六年の所說としてゐるから、第二の無相教に配せらるべきである。宗愛の四教判や僧柔の五教判でも無相教に配せらるべきものと推定される。卽ち南地三師が化儀を主として時間的分類を試みたのに依ると、法華の同歸教や涅槃の常住教に比較して一段下部に配せられることゝなる。

だが化法を主とした北地七家の中で、香闍寺の凜師(至德元年西紀五八三年、七十七歳寂)は有人の說を承けて、光統の四宗(毘曇の因緣宗、成實の假名宗、大品三論の誑相宗、涅槃、華嚴の常宗)中から、法華を萬善同歸の眞宗となし、大集の染淨倶融法界圓普を圓宗として、合せて六宗とした(法華玄義、探玄記、五教章等參照)。大集經を以て法界圓普を說いた圓宗としたのは、古今の教判中での異例と謂ふ可きものであつた。

斯くして大集經も、見る人によつては、深淵なる教義が說かれてゐるものとしたやうだが、天台や華嚴の教學が一度、學佛の南針とせらるゝやうになつては、六十巻大集諸經一類の經典は、その教義內容からは、大乘諸經中で特に優越を認むるものがなくなつて來た。

月藏經も大集經の一部として、(一)空思想を中心として般若中觀と相應ずるものたること。(二)幾多の密教思想を交へて陀羅尼が反覆せられてゐること。(三)決數法相が詳說せられてゐること。(四)諸天諸鬼神を假りての正法護持を主說せること、(五)魔、阿修羅の歸佛を說き、護法善神を具說してゐる點などは、他の全部或は一部と共通してゐるものである。今その詳細は下、各品の要項中に讓るが、月藏經には、古來特に、(六)法滅の懸記(豫言)があるので有名である。それから又、(七)月藏分の星宿攝受品第十八(第五十六巻)には、星宿說が說かれてゐて、同じく大集經日藏分の星宿品第八(第四十一、四十二巻)や寶幢分の神足品(第二十巻)と相列んで、天文や占星に關する古說を傳へてゐる點。更に又この星宿攝受品や分布閻浮提品第十七、建立塔寺品第十九に、(八)印度以外、西域、支那の地名を擧げてゐる點は、日藏分護塔品第十三(第四十五巻)に諸聖人の住處として、印度、西域、震旦に亙る國名が列擧されてゐるのと共に、佛教經典としては甚だ稀なる例である。斯うして本經は種々なる點で特色を有てる經典である。

抑も何れの經典でも、病に對する藥と

十七(十六)經(分)に分かれてゐる。其中、流通分において、他の多くの經典の例に同じく、經末結題があつて、そこで各經の別名が擧げられてゐるものもある。

本經の異名を擧げると、略稱では「月藏分」或は「月藏經」と云はれ、「大集月藏分經」、「大集經月藏分」とも呼ばれ、「大方等大集月藏經」がその具題であつた。卷數も亦或は十卷或は十二卷或は十五卷となつてゐるが、それ等は分卷の相異に過ぎない。但しこの國譯は十一卷本に依つた。本經を錄した現存最古の經錄たる隋法經錄には「十卷二百一十四紙」とし、歷代三寶紀九には紙數の記載なく、唯だ一十二卷としてゐる。

「大集」といふ名義は、大集部諸經に說かれてゐる意義からすると、小集會に對する「大集會」、「大普集」、卽ち大會合の意味と、それからこの大集會の時に說かれた「大集妙典」、卽ち特別甚深の經典といふ意味と、もう一つ法數、法相を類集した「大寶聚」、卽ち法門集の意味とがあることは、松本博士の大集經論並に蓮澤氏の國譯一切經、大集部一の解題に出てゐる通りだが、本經でも「與大衆集說欲隨喜」(第一品)又は「法寶聚」(第十品)の意味で大集といはれてゐる。

月藏といふのは、本經の前に配置されてる日藏分(日密分)が、東方の無盡德世界から日行藏菩薩が此の土の大集會に來會して、有力なる對告衆となつたので、この日行藏の名を取つて經名としたやうに、この月藏經も、西方月勝世界の日月光佛から遣はされて、この大集會に來た、月藏童眞菩薩の名から取つたものである。

× × ×

出三藏記集五の新集抄經錄に、齊竟陵文宣王の抄出三十六部中、抄方等大集經十二卷があり、大集經が齊代に代表的經典の一として注意されたことを語つてゐる。隋法經錄二の衆經別生に、大集經からの三十九經の別生を數へてゐる。般舟三昧の類經や十輪經などのやうに、合部以外の大集部類中には却つて廣く流傳されたものもあるが、古いところで高僧傳などでは、大集經で特に秀いでた人としては極めて稀れのやうだが、しかし北魏の曇鸞が、この大集經に注釋を試みやうとして、著述半ばに病に罹り、短命では出來ないので神仙を學び、それから遂に淨土敎に轉向したといふことは有名な話である。從つて、當時相當に流行したものと思はれる。しかしそれは重に月藏經以外の大集部一般に就いてのことで、月藏經は後れて譯されたが、前に緖言にも述べた通り、譯出以來異常の注意を以て迎へられた。恐らく大集諸經中では、最も注意された經典の一つであつた。姑らく節を改めて述べることにする。

卷本(分卷の數には增減がある)を取るべきである。この中には勿論月藏經は收められてゐなかつた。ところが大集部に屬すべき單行經典は、これより前に既に安世高譯にも竺法護譯にも散在したやうに、月藏經は元とはその單行の一つであつた。現に宋、元、明三本では月藏經は三十卷本の外に別出されてゐる。しかし今國譯一切經では合部大集經六十卷の一部として、その第四十六卷から第五十六卷までを取つた。それは麗本がそうなつてゐるので、これを底本とした縮刷藏經でも大正藏經でも、合部六十卷の廣本となつてゐるからである。

抑も三十卷内外の曇無讖譯大集經に、他の諸經を合輯して六十卷としたのは、元と隋の招提寺沙門僧就から始まる。僧就は闍那崛多三藏から于闐(和闐Khotan)の東南、三千餘里を離れた遮拘國に、般若部や華嚴部などと共に、十萬偈の大集部があることを聞き、又此の國の東南二十餘里を距てた處にも、この大集經が他の諸大乘經と共に保存せられてゐることを傳へ、支那に大集經の完本がないのを毎に憾みとしてゐた。偶々高齊代に月藏經が譯され、又隋代までに、同じく那連提耶舍によつて日藏分や須彌藏分が譯されたので、開皇六年に前後譯出の諸本を合輯して、當時謂ゆる「新合六十卷」の廣本を出すやうになつたものである。

形式上では、月藏經の首文に日藏經の後に說くと云ひ、十輪經にも、月藏經の後に說くと云ふやうになつてゐるものもあるが、全體からすると、その内容上、大集部の各經が必然的に順序が決定されてゐるものではない。だから昔から確然と順序が定まつてゐないし、多くは獨立經典の類集である。そして六十卷内外としても尙ほ洩れてるものがあるので、開元錄では若し廣本とするなら、更に增加して八十卷とすべしとすら言つてゐる。しかしそれでも完備とは言はれない程、多卷である。そして麗本を底本とした藏經本では、月藏經の前半が第十四となつてゐて、後半が第十二となつてゐるのも、畢竟、異本混同の痕迹を殘したものである。それは合部の順序の異りからで、内容には差して變化はない。大集經の全般に亙つての異本、各分の順位、品數、分卷、其他の詳細に就いては、松本文三郎博士の大集經論(宗教研究第一卷第二卷)並に蓮澤成淳氏の國譯一切經大集部諸卷特に第一の解說を參照されたい。

要するに大集月藏經は元と單行であつたものが、月藏、日密、須彌藏等の譯出があつたので、隋の僧就に依つて合部大集經中に收められるやうになつたものである。

四、名義及び流傳

大集經は約一部六十卷の總稱で、復た

校計經は耶舍譯でなく安世高譯とすべきである。耶舍が譯した大集部經典中、日藏經以外は北齊朝で譯されたもので、北齊の時代は短かつたから、これに屬する譯者は唯だ二人だけで、僧では耶舍、居士では萬天懿各々一人であつた。そして後者は唯だ一部一卷だけの譯出であつたから、北齊の譯經は殆んどこの那連提耶舍のそれであつたと謂つて可い。卽ちこの月藏經は、短かつたが盛んだつた北齊佛敎の一記念物でもあつた。

北齊は文宣・孝昭・武成を經て高恆（無諡）まで、僅に二十八年で亡びたので、一時佛敎が隆盛であつたが、間もなく周武の破佛で有名な北周の武帝が、建德六年（西紀五七七）に北齊を伐ち、齊國でも亦破佛を實行し、佛敎經像を毀ち、僧尼三百餘萬を還俗せしめたと傳へられてゐる。そこで、齊朝の滅亡とともに、佛敎も亦大打擊を受けた。

耶舍はこの破佛の變亂に遇つて、「外には俗服を假り內には三衣を襲ね、地を東西に避けて、寧息に遑あらず」。容貌魁異の此の印度僧が、還俗の姿で各所に彷うたが、その間でも慈惠を怠らなかつた。偶々隋朝の四海統一とともに、大に佛敎を興隆したので、隋朝は玉璽を降してその譯經を請うた。開皇二年（西紀五八二）七月に弟子道密等と京に入り、大興善寺に住した。耶舍が北齊に入つた時が、四十歲（開元錄六）であつたとすると、その時は六十餘歲であつた。しかし開皇九年八月二十九日に寂した時は滿百歲（開元錄七）であつたとも傳へられてゐる（續高僧傳同傳）。兎に角、隋朝でも厚遇を受けて八部二十三卷を譯出した。今は傳はらないが、當時、彥琮が書いた傳記があつたと云ふことである。

大集月藏經は、末法法滅の思想と密接な關係を有つてゐるもので、耶舍が此經を譯出して後間もなく、周武の破佛が行はれたのは奇妙にも經說の一部の豫言が的中したやうにも思はれた。少くとも三階宗祖の信行が、此の經の所說を、末法法滅の實證としたのも、決して偶然ではなかつた。

耶舍は遊涉四十餘年、國五十餘、里十五萬と傳へられてゐる。

三、大集經中本經の位置

大集經に屬する諸經典中、一經づゝ離れ離れに單行したもの（別生）と、一群の類經を合集して一大叢書の形式を取つた合部のものとがある。この叢書の形式で現れた大集經が、歷代三寶紀の所傳では、旣に支讖や羅什の譯經中にもあつたことになつてゐるが、それは第一現存してゐないし、又歷代三寶紀が根據とした經錄も夙に佚はれてゐるのであるから、先づ的確なものとして、合部大集經の根本となつたものは、現存北凉曇無讖譯の三十

と傳へられてゐる。この最後の惡龍敎化の傳說は偶然にも本經經旨の一部とも平行してゐるものである。傳文に「耶舍每に宣譯の暇に於いて、時に神呪を陳ぶ、冥救顯助、功を立つる多し矣」とあるが、これなども月藏經の譯者に應しい傳歷であつた。那連提耶舍は十七歲で出家し、二十一歲で具足戒を受け、それから五夏(年)を經て諸方を遊歷し、嘗て十年も竹園寺に住んだ。後、備さに辛酸を嘗めて支那に入り、北齊文宣帝の天保七年(西紀五五六)に鄴都に達した。「其形貌壞奇にして、頂は內髻の如く、耳長くして聳え、目は正しく中に處る」と記されてゐるが、容貌は普通人と異つてゐた。齊朝では直に請うて飜譯三藏となして天平寺に居らしめ、宮殿內に在つた梵本千有餘甲をその住所に送つて飜譯に從事せしめた。傳文に「爲めに道場を建てゝ珍妙を供窮し、別に廚庫を立てゝ以て尊崇を表す」とあり、嘗て病に遇うて百日の間も床に就いた折は、天子皇后が躬らその起居を訪はれた程であつた。此の時、耶舍が痛く感激して、「我本と外客にして德行未だ隆んならず、乘輿今降るは法を重んずるが故のみ。內に其心を撫して愧懼交も集る」と嘆じたと記されてゐるが、當時如何に重んぜられたかが略ぼ推測される。同時に耶舍も亦昭玄統としてその獲る所の供祿を私せず、專ら供僧施貧の慈惠與樂に用ゐ、或は市中に義井を作り、或は親ら水を漉して人々に給水し、或は汲郡に三寺を建て、或は癘疾に罹つた男女を別房に休養する等、今の日の所謂、社會事業にも盡力した。

耶舍が北齊での飜譯は、天保八年(西紀五五七)から天統四年(西紀五六八)までの間で、七部五十一卷を譯出した中で、

大集月藏經

は、後主の天統二年(西紀五六六)に天平寺で譯されたものであつた(歷代三寶紀九、開元錄六に據る。但し歷代三寶紀三の年表には天統二年の譯出としてゐる)。續高僧傳では、所譯經論十五部八十餘卷としてゐるが、現存、那連提耶舍譯として傳へられてゐる經は、十六部となつてゐる。此の中

一、大乘大方等日藏經十卷　合部大集經第三十四卷より第四十五卷
二、大方等大集月藏經十卷　合部大集經第四十六卷より第五十六卷
三、大乘大集須彌藏經二卷　合部大集經第五十七卷及び五十八卷
四、明度五十校計經二卷　合部大集經第五十九卷及び第六十卷

の四部は悉く大集經典で、同じく耶舍譯菩薩見實經十六卷は、大寶積經の第六十一卷から第七十六卷に編收されてゐるから、那連提耶舍は大集部と寶積部との譯經に特に關係が深かつた。但し明度五十

大集月藏經解題

一、はしがき

凡そ宗教上の信仰の覺醒、教團の革新運動には、內外種々の原因を伴つてゐるが、彼の終末思想を含んだ豫言が動機となつてゐるものが少なくない。佛教では終末思想を表はす用語として、普通に末法・法滅・五濁・三災等を以てしてゐるが、本經は偶々この末法法滅の思想を顯說してゐるので、譯出以來、教界から異常の注意を以て迎へられた經典であつた。

抑も佛教經典は汗牛充棟も啻ならざる程の多數に上つてゐるが、實際上、弘く讀誦し講說し珍重されてる經典は餘り多くはない。そしてその流行經典は華嚴經でも法華經でも涅槃經でも無量壽經でも維摩經でも、何か他經よりも勝れたその經典特有の教義が說かれてゐるためである。例へば華嚴經は成道の佛によりて、悟つた儘の性起頓大の法門が說かれてゐるので、華嚴宗が是に由つて別教一乘を主張し、法華經は說法の佛によりて、其の極意たる會三歸一の旨趣が說かれてゐるので、天台宗が是に由つて純圓獨妙を主張した。涅槃經は入滅の佛の最後の教訓として、無量壽經は本願の佛の易行他力として、皆それぞれ一宗を開かしむるに至つたのに、本經は他の大集部諸經と同じく、中觀皆空以外に、これといふ著しい獨得の教義を有つた經典ではない。卽ち本經の教理內容からは一般にそんなに重要されてゐないにも關らず、支那でも日本でも、苟しくも末法思想に由つて佛教改革運動の起つた時、數々引用さるゝを例とするのが、實にこの大集月藏經であつた。恐らく此の經の成立した時處でも、そうした意義が加味されたものと推測される。先づ日本及び支那佛教史上、この月藏經を一宗別開の經證の一つに數へた首めは、本經譯出當時二十七歲であつた、後の三階宗祖信行からであつた。一體本經を飜譯したのは誰人か。

二、譯者とその時代

本經の譯者は、北齊の世に支那に來た那連提耶舍 Narendrayaśas で、那連提耶舍は北印度烏萇國 Udyāna（玄奘所傳の烏仗那國）、卽ち北印度健陀羅の北方、現今のスワートSwāt 河の流域地方の人で、其姓は釋迦佛に同じく、刹帝利種の釋迦氏であつたと傳へられてゐる。元來此の國には釋迦佛の本生に關する舊趾多く、彼の半偈のためにその身を棄て、或は鴿に代りて身を割いた遺跡なども此處にあつたと傳へられ、就中、惡龍教化の傳說で著名な阿波羅邏龍泉も此の國にあつた

◇ ◇

目次

31

大集部 四

矢吹慶輝
成田昌信
望月信亨
譯

國譯一切經

大東出版社藏版

(31)